

中国古典文化精华

李渔随笔



京华出版社

中国古典文化精华

李渔随笔

全·集

[清] 李 渔 / 著
尔 利 / 编译

京华出版社

2001.2

图书在版编目(CIP)数据

李渔随笔全集 / (清) 李渔著. - 北京: 京华出版社, 2000
(中国古典文化精华)

ISBN 7-80600-489-0

I . 李… II . 李… III . 随笔 - 中国 - 清代 - 文集
IV . Z424.9

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2000)第 07417 号

李渔随笔

责任编辑: 孙志文 责任校对: 李 阳
技术编辑: 李卫星 封面设计: KL 工作室

京华出版社出版发行
(100011 北京市安外青年湖西里甲 1 号)
北京昌平环球印刷厂印刷
新华书店总店北京发行所经销

*

850 × 1168 毫米 32 开 20 印张 485 千字
2000 年 5 月第 1 版 2001 年 2 月第 2 次印刷
印数 10001 - 15000 定价: 29.80 元

ISBN 7-80600-489-0/I-68

目 录

闲情偶寄	(1)
序.....	(1)
凡例七则.....	(3)

词 曲 部

结构第一	(7)
戒讽刺	(10)
立主脑	(12)
脱窠臼	(13)
密针线	(14)
减头绪	(15)
戒荒唐	(16)
审虚实	(17)
词采第二	(18)
贵显浅	(19)
重机趣	(20)
戒浮泛	(21)
忌填塞	(23)
音律第三	(24)

恪守词韵	(29)
凛遵曲谱	(29)
鱼模当分	(31)
廉监宜避	(32)
拗句难好	(32)
合韵易重	(34)
慎用上声	(35)
少填入韵	(36)
别解务头	(36)
宾白第四	(37)
声务铿锵	(38)
语求肖似	(39)
词别繁减	(40)
字分南北	(42)
文贵洁净	(42)
意取尖新	(43)
少用方言	(44)

时防漏孔	(45)
科诨第五	(45)
戒淫褻	(46)
忌俗恶	(46)
重关系	(47)
贵自然	(47)
格局第六	(48)
家门	(49)
冲场	(50)
出脚色	(51)
小收煞	(51)
大收煞	(51)
填词余论	(52)

字忌模糊	(75)
曲严分合	(75)
锣鼓忌杂	(76)
吹合宜低	(76)
教白第四	(77)
高低抑扬	(78)
缓急顿挫	(80)
脱套第五	(81)
衣冠恶习	(81)
声音恶习	(82)
语言恶习	(83)
科诨恶习	(84)

演 习 部

选剧第一	(54)
别古今	(55)
剂冷热	(56)
变调第二	(56)
缩长为短	(57)
变旧成新	(58)
附：《琵琶记·寻夫》改本	(61)
《明珠记·煎茶》改本	(66)
授曲第三	(72)
解明曲意	(73)
调熟字音	(73)

声 容 部

选姿第一	(85)
肌 肤	(86)
眉 眼	(87)
手 足	(88)
态 度	(90)
修容第二	(92)
盥 栉	(93)
薰 陶	(96)
点 染	(97)
治服第三	(99)
首 饰	(100)
衣 衫	(103)
鞋 袜	(107)
妇人鞋袜辨（余怀）	(108)

习技第四	(110)
文艺	(111)
丝竹	(114)
歌舞	(116)

居 室 部

房舍第一	(120)
向背	(122)
途径	(122)
高下	(122)
出檐深浅	(123)
置顶格	(123)
斃地	(124)
洒扫	(124)
藏垢纳污	(125)
窗栏第二	(126)
制体宜坚	(127)
取景在借	(128)
墙壁第三	(133)
界墙	(133)
女墙	(134)
厅壁	(134)
书房壁	(135)
联匾第四	(137)
蕉叶联	(138)
此君联	(139)
碑文额	(139)
手卷额	(140)

册页匾	(140)
虚白匾	(140)
石光匾	(141)
秋叶匾	(141)
山石第五	(141)
大山	(142)
小山	(143)
石壁	(144)
石洞	(144)
零星小石	(145)

器 玩 部

制度第一	(146)
几案	(147)
椅杌	(148)
暖椅式	(149)
床帐	(150)
橱柜	(153)
箱笼篋筥	(154)
古董	(156)
炉瓶	(157)
屏轴	(159)
茶具	(160)
酒具	(161)
碗碟	(162)
灯烛	(163)
笺筒	(165)
位置第二	(167)

忌排偶	(167)
贵活变	(168)

饮 饌 部

蔬食第一	(170)
笋	(171)
藟	(172)
莼	(172)
菜	(173)
瓜茄瓠芋山药	(174)
葱蒜韭	(174)
萝卜	(175)
芥辣汁	(175)
谷食第二	(175)
饭粥	(176)
汤	(177)
糕饼	(178)
面	(178)
粉	(179)
肉食第三	(179)
猪	(180)
羊	(181)
牛犬	(181)
鸡	(181)
鹅	(182)
鸭	(183)
野禽 野兽	(183)
鱼	(184)

虾	(185)
鳖	(185)
蟹	(186)
零星水族	(187)
不载果食茶酒说	(188)

种 植 部

木本第一	(190)
牡丹	(191)
梅	(192)
桃	(193)
李	(193)
杏	(194)
梨	(194)
海棠	(195)
玉兰	(196)
辛夷	(196)
山茶	(197)
紫薇	(197)
绣球	(198)
紫荆	(198)
梔子	(198)
杜鹃 樱桃	(199)
石榴	(199)
木槿	(199)
桂	(200)
合欢	(200)
木芙蓉	(201)

夹竹桃	(201)
瑞香	(202)
茉莉	(202)
藤本第二	(203)
蔷薇	(204)
木香	(204)
酴醾	(204)
月月红	(205)
姊妹花	(205)
玫瑰	(205)
素馨	(206)
凌霄	(206)
真珠兰	(206)
草本第三	(207)
芍药	(207)
兰	(208)
蕙	(209)
水仙	(209)
芙蓉	(210)
罌粟	(211)
葵	(211)
萱	(212)
鸡冠	(212)
玉簪	(212)
凤仙	(213)
金钱	(213)
蝴蝶花	(214)
菊	(214)
菜	(215)
众卉第四	(216)

芭蕉	(216)
翠云	(217)
虞美人	(217)
书带草	(217)
老少年	(218)
天竹	(218)
虎刺	(218)
苔	(219)
萍	(219)
竹木第五	(219)
竹	(220)
松柏	(221)
梧桐	(221)
槐榆	(222)
柳	(222)
黄杨	(223)
棕榈	(223)
枫柏	(224)
冬青	(224)

颐 养 部

行乐第一	(225)
贵人行乐之法	(226)
富人行乐之法	(227)
贫贱行乐之法	(228)
家庭行乐之法	(230)
道途行乐之法	(231)
春季行乐之法	(232)

夏季行乐之法	(232)	节劳苦初停之欲	(249)
秋季行乐之法	(233)	节新婚乍御之欲	(250)
冬季行乐之法	(234)	节隆冬盛暑之欲	(250)
随时即景就事行乐之法	(235)	却病第五	(251)
睡	(235)	病未至而防之	(251)
坐	(237)	病将至而止之	(252)
行	(238)	病已至而退之	(252)
立	(238)	疗病第六	(253)
饮	(239)	本性酷好之药	(254)
谈	(239)	其人急需之药	(255)
沐浴	(240)	一心钟爱之药	(256)
听琴观棋	(240)	一生未见之药	(257)
看花听鸟	(241)	平时契慕之药	(257)
蓄养禽鱼	(241)	素常乐为之药	(258)
浇灌竹木	(243)	生平痛恶之药	(258)
止忧第二	(243)	赋	(260)
止眼前可备之忧	(244)	龙灯赋	(260)
止身外不测之忧	(244)	茺羹赋并序	(260)
调饮啜第三	(245)	支颐赋	(261)
爱食者多食	(245)	归故乡赋	(262)
怕食者少食	(246)	鸡鸣赋	(263)
太饥勿饱	(246)	不登高赋	(264)
太饱勿饥	(246)	蟹赋	(265)
怒时哀时勿食	(247)	荔枝赋	(267)
倦时闷时勿食	(247)	杨梅赋	(269)
节色欲第四	(247)	福橘赋	(270)
节快乐过情之欲	(248)	燕京葡萄赋	(271)
节忧患伤情之欲	(249)	苹婆果赋	(272)
节饥饱方殷之欲	(249)		

真定梨赋 (273)

郭璞井赋 (274)

序 (276)

《智囊》序 (276)

《古今笑史》序 (277)

《求生录》序 (278)

朱梅溪先生小像题咏序
..... (279)

《名词选胜》序 (280)

《诗韵》序 (281)

《观音大士持验录》序
..... (282)

《今又园诗集》序 (283)

《覆瓿草》序 (284)

《琴楼合稿》序 (285)

制师尚书李邕园先生
靖逆凯歌序 (286)

送别驾许公汉昭

擢郡司马序 (288)

《香草亭传奇》序 (289)

《和鸣集》序 (290)

《笠翁别集》弁言 (291)

《一家言》释义 即自序
..... (292)

《千古奇闻》序 (293)

《古今史略》序 (293)

《资治新书》自题词 (294)

《香草吟传奇》序 (294)

词韵例言 (295)

《宋稗序》 (298)

《芥子园画传》序 (298)

《三国志演义》序 (300)

《三国演义》序 (301)

《耐歌词》自序 (303)

寿 序 (305)

两浙抚军陈司贞先生寿序
..... (305)

代寿凤关樞使谭慎伯序
..... (307)

寿张俊升臬宪序 代
..... (308)

寿吴兴别驾余公序 代
..... (310)

祝陈大中丞太夫人寿序
..... (312)

祭 文 (314)

季太翁万太夫人双祭文
..... (314)

祭福建靖难巡海道
陈大来先生文 (315)

祭福建靖难总督
范觀公先生文 (317)

记 (320)

严陵西湖记	(320)	张敬止网鱼图赞	(351)
黑山记	(321)	八十四翁张文吾像赞	(351)
东安赛神记	(322)	又题小册	(351)
登燕子矶观旧刻诗词记	(323)	刘了庵先生像赞	(352)
梦饮黄鹤楼记	(324)	汤圣昭使君小像赞	(352)
两宴吴兴郡斋记	(326)	抡仙、抡汝、抡毓	
闰月称觞记	(328)	三侄孙小像赞	(353)
佛日称觞记	(328)	罗上极像赞	(353)
汉寿亭侯玉印记	(330)	朱骏文像赞	(353)
传	(332)	沈亮臣像赞	(354)
秦淮健儿传	(332)	曹细君方氏像赞	(354)
义士李伦表传	(334)	杨子亦禅像赞	(355)
乔复生、王再来二姬合传	(337)	佟寿民方伯拥书图赞	(355)
朱静子传	(342)	郑乘方像赞	(356)
赞	(345)	家石庵棠棣芝兰并茂图赞	(356)
许青浮像赞	(345)	朱次公四时行乐图赞	(357)
范晴斋像赞	(345)	辨	(358)
梁冶湄明府西湖垂钓图赞	(346)	回煞辨	(358)
余霁岩使君像赞	(347)	乌鹊吉凶辨	(359)
吴念庵采芝像赞	(348)	露 布	(361)
王茂萼像赞	(350)	獬豸讨中山狼露布	(361)
张诗宜像赞	(350)		

说 (363)

名诸子说 (363)

疏 (364)

大士宫募田疏 (364)

汉阳府重建鼓楼

创立马头募缘引 (364)

券 (366)

卖山券 (366)

誓 词 (368)

曲部誓词 (368)

铭 (369)

乌有先生集铭 (369)

没字碑铭 (369)

诗简铭 (370)

引 (371)

梁夫人寿册引 (371)

助葬册引 (371)

哀词引 (372)

跋 (373)

《春及堂诗》跋 (373)

《寿世奇方》跋 (374)

文 (375)

瘞犬文 (375)

逐猫文 (376)

放鹿文 (377)

纪 略 (379)

朱子修龄倡义鸠资

赎难民妻女纪略 (379)

龙丘邑宰卢公异政纪略

..... (381)

附：卢公复任纪略 (383)

西湖盗鱼人自塞盗源纪略

..... (384)

解 (387)

耐病解 (387)

书 (389)

与王汤谷直指 (389)

与卫澹足直指	(390)	复朱建三	(405)
与张华平太史	(391)	复胡彦远	(405)
与龚芝麓大宗伯	(391)	東沧园主人	(405)
与陈学山少宰	(392)	与吴梅村太史	(406)
与纪伯紫	(394)	与密友	(406)
与赵声伯文学	(395)	复王阮亭司李	(407)
复沈泽民太亲翁	(396)	与方坦庵宫詹	(407)
寄谢贾胶侯大中丞	(396)	東丛木虚	(407)
寄谢刘耀薇大中丞	(397)	与赵介山	(408)
与太仓州守陈麓屏	(397)	复唐君宗	(408)
与魏贞庵相国	(398)	复高彦侣观察	(408)
复陈大司成	(398)	复王左车	(408)
与张仲选	(398)	粵游家报五函	(409)
与林安国三札	(399)	四字帖辞武林诸亲友之招	
与张其山	(400)	(411)
与某公	(400)	复尤展成先后五札	(412)
与倪涵谷孝廉 借澡盆		与余澹心五札	(413)
.....	(400)	与王鼎中	(415)
复曹顾庵太史	(401)	复沈贲园	(415)
与杜于皇	(401)	答杨鄂州枢部	(415)
与杜子濂公祖	(401)	复熊元献	(416)
答陈蕊仙	(402)	与郑房季	(416)
复俞贞庵	(402)	与徐东来	(416)
与梁石渠	(402)	与李仁熟	(417)
又	(402)	复程端伯司空	(417)
東同学	(403)	简汪我生	(417)
与沈亮臣	(403)	与陈瓠翁	(418)
复王左车	(403)	答同席诸子	(418)
与顾硕甫	(404)	東孙豫公	(418)
答友	(404)	订友同赴广陵	(419)
答周子	(405)	向邻翁索菊	(419)

与陆诞生	(419)
柬赵声伯	(420)
与王绥亭大司马	(420)
复陈学山少宰	(420)
复袁六完太常	(421)
与曹峨眉中翰	(421)
与金长真太守	(421)
与孙雪崖使君	(421)
与某郡伯	(422)
与施匪莪司城	(422)
复柯岸初掌科	(422)
又附片札	(424)
来书附录	(424)
又与岸初掌科	(424)
与李雨商荆州太守	(425)
与张秀升郡司马	(425)
与徐东来	(426)
与陈端伯侍郎	(426)
复徐东来	(426)
答顾赤方	(427)
与许于王直指	(427)
复徐静庵学宪	(427)
与方绍村侍御	(428)
与王允大驿宪	(428)
与丁飞涛仪部	(429)
与何省斋太史	(429)
与徐电发	(430)
与刘使君	(430)
复周东轩	(431)
与余澹心	(431)
与孙宇台	(431)

复朱其恭	(432)
与诸暨明府刘梦锡	(432)
与陈次升封翁	(433)
与韩子蘧	(433)
与梁冶湄明府	(434)
与于胜斯郡司马	(434)
又	(435)
与顾梁汾典籍	(435)
又	(435)
与孙宇台、毛稚黄二好友	(436)
复佟梅岑	(436)
上都门故人述旧状书	(437)
与陈陶庵、邹可达	(439)
与于胜斯公祖	(439)
与顾且庵侍御	(440)
与丁泰岩方伯	(440)
再寄丁泰岩方伯	(441)
与张壶阳观察	(442)
与徐治公二札	(442)
与古灯和尚	(443)

名 賀 (444)

《资治新书》征文小启	(444)
候吏科给谏启	(445)
贺太守纳双姬	(445)
贺友人早岁举子	(446)

五帝纪 (447)

论华封人三祝 (447)

商 纪 (448)

论尧让天下于许由，汤让天下
于卞随、务光 (448)

论尧之试舜、高宗之任傅说，同
一命相而有详略之不同
..... (449)

论微子先抱祭器归周
..... (450)

周 纪 (451)

论晋文公赏从亡者
而不及介子推 (451)

论卫懿公使鹤乘轩 (452)

论魏绛规晋侯以安乐思终
..... (453)

论吴季札让国 (454)

论子产宽猛之政 (456)

论程婴立孤而死 (456)

论伍员覆楚、申包胥复楚
..... (458)

论智宣子、赵简子之立后
..... (459)

论吴起杀妻求将 (460)

论商鞅徙木立信、诱执公子印

..... (461)

论蔺相如屈于廉颇 (461)

论王孙贾、赵括、
陈婴王陵四母之贤 (462)

秦 纪 (463)

论缩高及安陵君、信陵君之事
..... (463)

论《纲目》书张良博浪之击与
荆轲、聂政之事一褒一贬
..... (464)

西汉纪 (465)

论项王东乡坐王陵之母、置太
公于高俎之上 (465)

论汉高帝拜季布、斩丁公
..... (465)

论韩信赐漂母、官少年
..... (466)

论项羽不渡乌江 (468)

论汉定元功位次而
张良、陈平不与 (469)

论汉高之兴，《纲目》特笔有四
..... (469)

论汉高祖为义帝发丧、曹操挟
天子以令诸侯之同异
..... (470)

论韩信登坛之对、诸葛亮草庐

之谈、王朴平边之策	(471)
论韩信兵法	(472)
论班彪称高帝宽明	
仁恕、知人善任	(473)
论周勃左袒之间	(474)
论陈平不对决狱、钱谷之间	(475)
论袁盎却坐	(477)
论贾山至言	(478)
论文帝劳军细柳	(479)
论李广、程不识将兵	(481)
论汲黯不拜大将军	(481)
论武帝以汲黯为淮阳太守、宣帝以萧望之为平原太守	(483)
论东方朔谏内董偃置酒宣室	(483)
论周勃、霍光优劣	(485)
论李广数奇	(486)
论宣帝置廷尉平而	
郑昌劝定律令	(488)
论龚遂治渤海	(489)
论汲长孺矫制开仓粟、冯奉世矫制破莎车	(489)
论汉宣在位十二年始赏保护之功、孝文即位历三时始修代来之功	(491)
论张安世辞禄	(492)
论二疏请老	(492)

论二疏不以财累子孙	(493)
论京房考功课吏法	(494)
论汉诏刘秀典领五经所奏《七略》、九流之议	(495)

东 汉 纪

论汉图列二十八将	
何独以邓禹居首	(497)
论汉图二十八将于云台，马援以椒房之戚不与	(498)
论高帝入咸阳除秦苛法、光武入河北除莽苛政	(499)
论高帝已平天下犹未正尊位、光武未能削平海内遽正尊位之故	(500)
论贾、寇拟廉、蔺	(501)
论董宣执法，史氏列之酷吏	(501)
论马援遗书诫兄子	(502)
论丁鸿、刘恺、邓彪三人之让	(503)
论黄宪比颜子	(504)
论左雄限年之法	(505)
论汉立五经于太学门外	(506)
论管宁、华歆优劣	(507)
论茅容、孟敏优劣	(508)
论曹操自陈功伐及让还三县	

..... (509)
论刘备取刘璋得失 (511)

西 晋 纪 (512)

论晋武帝之得天下 (512)
论羊祜欲伐吴，山涛欲释吴

..... (513)

论苏颖滨谓羊祜巧于策吴、
拙于谋晋 (514)

论薛莹、吾彦论吴亡
..... (515)

论刘毅言中正之弊 (516)

论顾荣、卫玠优劣 (516)

论殷浩拟管、葛 (517)

戏为晋人让殷羡书 (519)

东 晋 纪 (520)

论祁奚举午、谢安举玄、
狄仁杰举光嗣 (520)

论温峤绝裾 (521)

论陶侃综理微密 (522)

论王导不救周顗之难
..... (523)

论桓玄伪旌隐士 (525)

南 北 朝 纪 (526)

论扬雄、陶潜出处 (526)

论檀道济量沙、孙臧
减灶之同异 (527)

论谢朓、何点、何胤孰优
..... (528)

论梁武帝好生 (529)

论夏禹泣罪、梁武泣囚
..... (530)

论高欢遗慕容绍宗于其子、
太宗委李世勣于高宗 (531)

论王通献太平十二策
..... (532)

唐 纪 (534)

论唐太宗周、秦修短之议
..... (534)

论唐太宗以弓矢、建屋喻治道
..... (535)

论魏徵才行之对 (536)

论唐太宗殿庭教射 (537)
论魏徵“十思”、“十渐”

..... (538)

论魏徵、王珪事太宗
..... (539)

论唐太宗图功臣于凌烟阁
..... (540)

论唐太宗自观实录 (541)

论唐太宗论将 (542)

论苏章之按事、张镇周之治百
姓，论者以为善处情法之间，而

东莱之论独异	(543)
论高宗之立武氏，褚遂良叩头 极谏，论者议其有未尽焉	(544)
论卢承庆考功	(545)
论汉武帝之悼汲黯、唐玄宗之 悼张九龄	(546)
论开元贤相	(546)
论唐因鹊巢狱树，赐牛、李为 国公	(547)
论唐兵三变、唐文三变	(548)
论唐之再失河朔不能复取	(549)
论郭子仪不却鱼朝恩之邀	(550)
论唐相杨绾而郭令公减乐、黎 幹省驲、崔宽毁第	(551)
论常袞、崔祐甫为相用人得失	(552)
论唐李璣告父之反	(553)
论陆贄请令台省长官各举属吏	(554)
论韩愈、欧阳修之论阳城	(555)
论杜黄裳请对刘辟专任高崇 文，勿置监军	(556)
论帝王劳逸得失	(557)
论李绹之策魏博	(557)
论李吉甫、李绹之论刑法	(558)

论柳宗元以柳易播	(559)
论裴度上蔡、郗用兵忧勤机略	(559)
论柳公绰不诛赃吏而诛舞文者	(560)
论司马公论处郭谊	(560)
论王式谈兵	(561)
论郑綮进退之际	(562)

五代纪

论郭崇韬之料梁	(563)
论康澄论事	(563)
论桑维翰辅晋	(564)
论晋以冯道守司徒	(565)
论刘知远先正位后兴师	(566)
论刘仁贍守节	(566)

宋 纪

论取天下上世以德， 中世以力，末世以谋	(568)
论宋太祖之得天下	(569)
论赵普之计太原	(570)
论赵普之谏太祖	(571)
论宋太祖之待李汉超	(572)
论陶邴登第，宋主命中书覆试	(572)

论曹彬、曹翰之后	
荣盛衰弱之不同	(573)
论王旦不谏天书	
.....	(573)

论魏野、林逋之品行	
.....	(574)

论王旦不与张师德知制诰	
.....	(575)

论宋理宗训廉谨刑二铭	
.....	(576)

元 纪	(577)
-----------	-------

论文天祥之全节	(577)
---------------	-------

论元世祖之待文天祥	
.....	(578)

窥词管见	(579)
------------	-------

千古奇闻	(591)
------------	-------

简狄启商	(591)
姜源兴稷	(591)
太妊胎教	(592)
辞不视朝	(592)
不乐子帝	(593)
辞释子瞻	(593)
手诏传王	(594)
染竹成斑	(594)

许殉不爽	(595)
委婉存节	(596)
引杖逐击	(597)
请免伐卫	(597)
趣子成名	(598)
得金命瘞	(599)
居贫抚教	(599)
管子臧否	(600)
躬课妾子	(600)
老不逾闕	(601)
赴火死义	(601)
痴姨待免	(602)
进食王孙	(602)
哭尸崩城	(603)
却金不顾	(603)
不愿改嫁	(604)
咎夫自杀	(605)
《璇玑图》诗	(606)
预识状头	(606)

资治新书	(608)
------------	-------

祥刑末议	(608)
论刑具凡四则	(608)
论监狱凡二则	(609)
慎狱刍言	(613)
论人命凡七则	(613)
论盗案凡五则	(621)
论奸情凡五则	(623)
论一切词讼	(625)

闲情偶寄

序

声色者，才人之寄旅；文章者，造物之工师。我思古人，如子胥吹箫，正平挝鼓，叔夜弹琴，季长弄笛，王维为“琵琶弟子”，和凝称“曲子相公”，以至京兆画眉，幼舆折齿，子建傅粉，相如挂冠，子京之半臂忍寒，熙载之衲衣乞食，此皆绝世才人，落魄无聊，有所托而逃焉。犹之行百里者，车殆马烦，寄宿旅舍已尔，其视宜春院里画鼓三千，梓泽园中金钗十二，雅俗之别，奚翅径庭哉！然是物也，虽自然之妙丽，借文章而始传。前人如《琴》、《笛》、《洞箫》诸赋，固已分刊节度，穷极幼眇；乃至《巫山》陈兰若之芳，《洛浦》写瑶碧之饰，东家之子比其赤白，上宫之女状其艳光，数行之内，若拂馨香，尺幅之中，如亲巧笑，岂非笔精墨妙，为选声之金管，练色之宝镜乎？抑有进焉，江淹有云：“蓝朱成彩，错杂之变无穷；宫商为音，靡曼之态不极。”蛾眉岂同貌而俱动于魄？芳草宁共气而皆悦于魂？故相其体裁，既家妍而户媚；考其程式，亦日异而月新。假使飞燕、太真生在今

时，则必不奏《归风》之歌，播《羽衣》之舞；文君、孙寿来于此地，则必不扫远山之黛，施堕马之妆。何也？数见不鲜也。客有歌于郢中者，《阳春白雪》，和者不过数人，非曲高而和寡也，和者日多，则歌者日卑。《阳春白雪》何异于《巴人下里》乎？西子捧心而颦，丑妇效之，见者却走。其妇未必丑也，使西子效颦，亦同嫫姆矣。由此观之，声色之道千变万化。造物者有时而穷，物不可以终穷也，故受之以才。天地炉锤，铸之不尽；吾心橐籥，动而愈出。三寸不律，能凿混沌之窍；五色赫蹄，可炼女娲之石。则斯人者，诚宫闱之刀尺而帷簿之班、输。天下文章，莫大乎是矣。读笠翁先生之书，吾惊焉。所著《闲情偶寄》若干卷，用狡狴伎俩，作游戏神通。入公子行以当场，现美人身而说法。泊乎平章土木，勾当烟花，哺啜之事亦复可观，展履之间皆得其任。虽才人三昧，笔补天工，而镂空绘影，索隐钓奇，窃恐犯造物之忌矣。乃笠翁不徒托诸空言，遂已演为本事。家居长干，山楼水阁，药栏花砌，辄引人著胜地。薄游吴市，集名优数辈，度其梨园法曲，红弦翠袖，烛影参差，望者疑为神仙中人。若是乎笠翁之才，造物不惟不忌，而且惜其劳、美其报焉。人生百年，为乐苦不足也，笠翁何以得此于天哉！仆本恨人，幸逢良宴，正如秦穆睹《钧天》之乐，赵武听孟姚之歌，非不醉心，仿佛梦中而已矣。

吴门同学弟尤侗拜撰

凡例七则

四期三戒

一期点缀太平

圣主当阳，力崇文教。庙堂既陈诗赋，草野合奏风谣，所谓上行而下效也。武士之戈矛，文人之笔墨，乃治乱均需之物。乱则以之削平反侧，治则以之点缀太平。方今海甸澄清，太平有象，正文人点缀之秋也，故于暇日抽毫，以代康衢鼓腹。所言八事，无一事不新，所著万言，无一言稍故者，以鼎新之盛世，应有一二未睹之事、未闻之言以扩耳目，犹之美厦告成，非残朱剩碧所能涂饰榱桷者也。草莽微臣，敢辞粉藻之力！

一期崇尚俭朴

创立新制，最忌导人以奢。奢则贫者难行，而使富贵之家日流于侈，是败坏风俗之书，非扶持名教之书也。是集惟《演习》、《声容》二种，为显者陶情之事，欲俭不能，然亦节去靡费之半。其余如《居室》、《器玩》、《饮饌》、《种植》、《颐养》诸部，皆寓节俭于制度之中，黜奢靡于绳墨之外，富有天下者可行，贫无卓

锥者亦可行。盖缘身处极贫之地，知物力之最艰，谬谓天下之贫皆同于我，我所不欲，勿施于人，故不觉其言之似吝也。然靡荡世风，或反因之有裨。

一期规正风俗

风俗之靡，日甚一日。究其日甚之故，则以喜新而尚异也。新异不诡于法，但须新之有道，异之有方。有道有方，总期不失情理之正。以索隐行怪之俗，而责其全返中庸，必不得之数也。不若以有道之新，易无道之新，以有方之异，变无方之异，庶彼乐于从事，而吾点缀太平之念为不虚矣。是集所载，皆极新极异之谈，然无一不轨于正道，其可告无罪于世者此耳。

一期警惕人心

风俗之靡，犹于人心之坏，正俗必先正心。然近日人情喜读闲书，畏听庄论。有心劝世者，正告则不足，旁引曲譬则有余。是集也，纯以劝惩为心，而又不标劝惩之目，名曰《闲情偶寄》者，虑人目为庄论而避之也。劝惩之语，下半居多，前数帙俱谈风雅。正论不载于始而丽于终者，冀人由雅及庄，渐入渐深，而不觉其可畏也。劝惩之意，绝不明言，或假草木昆虫之微，或借活命养生之大以寓之者，即所谓正告不足，旁引曲譬则有余也。实具婆心，非同客语，正人奇士当共谅之。

一戒剽窃陈言

不佞半世操觚，不攘他人一字。空疏自愧者有之，诞妄贻讥者有之，至于剿窠袭臼，嚼前人唾余，而谬谓舌花新发者，则不特自信其无，而海内名贤亦尽知其不屑有也。然从前杂刻，新则新矣，犹是一岁一生之草，非百年一伐之木。草之青也可爱，枯则可焚；木即不堪为栋为梁，然欲刈而薪之，则人有不忍于心者矣。故知是集也者，其初出则为乍生之草，即其既陈既腐，犹可比于不忍为薪之木，以其可斫可雕而适于用也。以较邺架名编则不足，以角奚囊旧著则有余。阅是编者，请由始迄终，验其是新是旧。如觅得一语为他书所现载，人口所既言者，则作者非他，即武库之穿窬，词场之大盗也。

一戒网罗旧集

数十年来，述作名家皆有著书捷径，以只字片言之少，可酿为连篇累牍之繁，如有连篇累牍之繁，即可变为汗牛充栋之富。何也？以其制作新言缀于简首，随集古今名论附而益之。如说天文，即纂天文所有诸往事及前人所作诸词赋以实之，地理亦然，人物、鸟兽、草木诸类尽然。作而兼之以述，有事半功倍之能，真良法也。鄙见则谓著则成著，述则成述，不应首鼠二端。宁捉襟肘以露贫，不借丧马以彰富。有则还吾故有，无则安其本无。不载旧本之一言，以补新书之偶缺；不借前人之只字，以证后事之不经。观者于诸项之中，幸勿事事求全，言言责备。此新耳目之书，非备考核之书也。

一戒支离补凑

有怪此书立法未备者，谓既有心作古，当使物物尽有成规，胡一类之中止言数事？予应之曰：医贵专门，忌其杂也，杂则有验有不验矣。史贵能缺，“夏五”、“郭公”之不增一字，不正其讹者，以示能缺；缺斯可信，备则开天下后世之疑矣。使如子言而求诸事皆备，一物不遗，则支离补凑之病见，人将疑其可疑，而并疑其可信。是故良法不行于世，皆求全一念误之也。予以一人而僭陈八事，由《词曲》、《演习》以及《种植》、《颐养》，虽曰多能鄙事，贱者之常，然犹自病其太杂，终不得比于专门之医，奈何欲举星相、医卜、堪舆、日者之事，而并责之一人乎？其人否否而退。八事之中，事事立法者止有六种，至《饮饌》、《种植》二部之所言者，不尽是法，多以评论间之，宁以支离二字立论，不敢以之立法者，恐误天下之人也。然自谓立论之长，犹胜于立法。请质之海内名公，果能免于支离之诮否？

湖上笠翁李渔识

词 曲 部

结构第一

填词一道，文人之末技也。然能抑而为此，犹觉愈于驰马试剑，纵酒呼卢。孔子有言：“不有博弈者乎？为之犹贤乎已。”博弈虽戏具，犹贤于“饱食终日，无所用心”；填词虽小道，不又贤于博弈乎？吾谓技无大小，贵在能精；才乏纤洪，利于善用。能精善用，虽寸长尺短，亦可成名。否则才夸八斗，胸号五车，为文仅称点鬼之谈，著书惟供覆瓿之用，虽多亦奚以为？填词一道，非特文人工此者足以成名，即前代帝王，亦有以本朝词曲擅长，遂能不泯其国事者。请历言之。高则诚、王实甫诸人，元之名士也，舍填词一无表见。使两人不撰《琵琶》、《西厢》，则沿至今日，谁复知其姓字？是则诚、实甫之传，《琵琶》、《西厢》传之也。汤若士，明之才人也，诗文尺牍，尽有可观，而其脍炙人口者，不在尺牍诗文，而在《还魂》一剧。使若士不草《还魂》，则当日之若士，已虽有而若无，况后代乎？是若士之传，《还魂》传之也。此人以填词而得名者也。历朝文字之盛，其名各有所归，“汉史”、“唐诗”、“宋文”、“元曲”，此世人口头语也。《汉书》、《史记》，千古不磨，尚矣。唐则诗人济济，宋有文士踰踰，宜其鼎足文坛，为三代后之三代也。元有天下，非特政刑礼乐一无可宗，即语言文学之末，图书翰墨之微，亦少概见。使非崇尚词曲，得《琵琶》、

《西厢》以及《元人百种》诸书传于后代，则当日之元，亦与五代、金、辽同其泯灭，焉能附三朝骥尾，而挂学士文人之齿颊哉？此帝王国事，以填词而得名者也。由是观之，填词非末技，乃与史传诗文同源而异派者也。近日雅慕此道，刻欲追踪元人、配飨若士者尽多，而究竟作者寥寥，未闻绝唱。其故维何？止因词曲一道，但有前书堪读，并无成法可宗。暗室无灯，有眼皆同瞽目，无怪乎觅途不得，问津无人，半途而废者居多，差毫厘而谬千里者，亦复不少也。尝怪天地之间有一种文字，即有一种文字之法脉准绳，载之于书者，不异耳提面命，独于填词制曲之事，非但略而未详，亦且置之不道。揣摩其故，殆有三焉：一则为此理甚难，非可言传，止堪意会。想入云霄之际，作者神魂飞越，如在梦中，不至终篇，不能返魂收魄。谈真则易，说梦为难，非不欲传，不能传也。若是，则诚异诚难，诚为不可道矣。吾谓此等至理，皆言最上一乘，非填词之学节节皆如是也，岂可为精者难言，而粗者亦置弗道乎？一则为填词之理变幻不常，言当如是，又有不当如是者。如填生旦之词，贵于庄雅，制净丑之曲，务带诙谐，此理之常也。乃忽遇风流放佚之生旦，反觉庄雅为非，作迂腐不情之净丑，转以诙谐为忌。诸如此类者，悉难胶柱。恐以一定之陈言，误泥古拘方之作者，是以宁为阙疑，不生蛇足。若是，则此种变幻之理，不独词曲为然，帖括诗文皆若是也。岂有执死法为文，而能见赏于人，相传于后者乎？一则为从来名士以诗赋见重者十之九，以词曲相传者犹不及什一，盖千百人一见者也。凡有能此者，悉皆剖腹藏珠，务求自秘，谓此法无人授我，我岂独肯传人。使家家制曲，户户填词，则无论《白雪》盈车，《阳春》遍世，淘金选玉者未必不使后来居上，而觉糠粃在前。且使周郎渐出，顾曲者多，攻出瑕疵，令前人无可藏拙，是自为后羿而教出无数逢蒙，环执干戈而害我也，不如仍仿前人，缄口不提之为是。吾揣摩不传之故，虽三者并列，窃恐此意居多。以我论之：文章者，天下

之公器，非我之所能私；是非者，千古之定评，岂人之所能倒？不若出我所有，公之于人，收天下后世之名贤，悉为同调。胜我者，我师之，仍不失为起予之高足；类我者，我友之，亦不愧为攻玉之他山。持此为心，遂不觉以生平底里，和盘托出，并前人已传之书，亦为取长弃短，别出瑕瑜，使人知所从违，而不为诵读所误。知我，罪我，怜我，杀我，悉听世人，不复能顾其后矣。但恐我所言者，自以为是而未必果是；人所趋者，我以为非而未必尽非。但矢一字之公，可谢千秋之罚。噫，元人可作，当必赏予。

填词首重音律，而予独先结构者，以音律有书可考，其理彰明较著。自《中原音韵》一出，则阴阳平仄画有腴区，如舟行水中，车推岸上，稍知率由者，虽欲故犯而不能矣。《啸余》、《九宫》二谱一出，则葫芦有样，粉本昭然。前人呼制曲为填词，填者，布也，犹棋枰之中画有定格，见一格，布一子，止有黑白之分，从无出入之弊，彼用韵而我叶之，彼不用韵而我纵横流荡之。至于引商刻羽，戛玉敲金，虽曰神而明之，匪可言喻，亦由勉强而臻自然，盖遵守成法之化境也。至于结构二字，则在引商刻羽之先，拈韵抽毫之始。如造物之赋形，当其精血初凝，胞胎未就，先为制定全形，使点血而具五官百骸之势。倘先无成局，而由顶及踵，逐段滋生，则人之一身，当有无数断续之痕，而血气为之中阻矣。工师之建宅亦然。基址初平，间架未立，先筹何处建厅，何方开户，栋需何木，梁用何材，必俟成局了然，始可挥斤运斧。倘造成一架而后再筹一架，则便于前者，不便于后，势必改而就之，未成先毁，犹之筑舍道旁，兼数宅之匠资，不足供一厅一堂之用矣。故作传奇者，不宜卒急拈毫，袖手于前，始能疾书于后。有奇事，方有奇文，未有命题不佳，而能出其锦心，扬为绣口者也。尝读时髦所撰，惜其惨淡经营，用心良苦，而不得被管弦、副优孟者，非审音协律之难，而结构全部规模之未善也。

词采似属可缓，而亦置音律之前者，以有才技之分也。文词

稍胜者，即号才人，音律极精者，终为艺士。师旷止能审乐，不能作乐；龟年但能度词，不能制词。使与作乐制词者同堂，吾知必居末席矣。事有极细而亦不可不严者，此类是也。

戒 讽 刺

武人之刀，文士之笔，皆杀人之具也。刀能杀人，人尽知之；笔能杀人，人则未尽知也。然笔能杀人，犹有或知之者；至笔之杀人较刀之杀人，其快其凶更加百倍，则未有能知之而明言以戒世者。予请深言其故。何以知之？知之于刑人之际。杀之与刖，同是一死，而轻重别焉者。以杀止一刀，为时不久，头落而事毕矣；刖必数十百刀，为时必经数刻，死而不死，痛而复痛，求为头落事毕而不可得者，只在久与暂之分耳。然则笔之杀人，其为痛也，岂止数刻而已哉！窃怪传奇一书，昔人以代木铎，因愚夫愚妇识字知书者少，劝使为善，诫使勿恶，其道无由，故设此种文词，借优人说法，与大众齐听。谓善者如此收场，不善者如此结果，使人知所趋避，是药人寿世之方，救苦弭灾之具也。后世刻薄之流，以此意倒行逆施，借此文报仇泄怨。心之所喜者，处以生旦之位，意之所怒者，变以净丑之形，且举千百年未闻之丑行，幻设而加于一人之身，使梨园习而传之，几为定案，虽有孝子慈孙，不能改也。噫，岂千古文章，止为杀人而设？一生诵读，徒备行凶造孽之需乎？苍颉造字而鬼夜哭，造物之心，未必非逆料至此也。凡作传奇者，先要涤去此种肺肠，务存忠厚之心，勿为残毒之事。以之报恩则可，以之报怨则不可；以之劝善惩恶则可，以之欺善作恶则不可。人谓《琵琶》一书，为讥王四而设。因其不孝于亲，故加以入赘豪门，致亲饿死之事。何以知之？因“琵琶”二字，有四“王”字冒于其上，则其寓意可知也。噫，此非君子之言，齐

东野人之语也。凡作传世之文者，必先有可以传世之心，而后鬼神效灵，予以生花之笔，撰为倒峡之词，使人人赞美，百世流芬。传非文字之传，一念之正气使传也。《五经》、《四书》、《左》《国》、《史》、《汉》诸书，与大地山河同其不朽，试问当年作者有一不肖之人、轻薄之子厕于其间乎？但观《琵琶》得传至今，则高则诚之为人，必有善行可予，是以天寿其名，使不与身俱没，岂残忍刻薄之徒哉！即使当日与王四有隙，故以不孝加之，然则彼与蔡邕未必有隙，何以有隙之人，止暗寓其姓，不明叱其名，而以未必有隙之人，反蒙李代桃僵之实乎？此显而易见之事，从无一辩之。创为是说者，其不学无术可知矣。予向梓传奇，尝埒誓词于首，其略云：加生旦以美名，原非市恩于有托；抹净丑以花面，亦属调笑于无心；凡以点缀词场，使不岑寂而已。但虑七情以内，无境不生，六合之中，何所不有。幻设一事，即有一事之偶同；乔命一名，即有一名之巧合。焉知不以无基之楼阁，认为有样之葫芦？是用沥血鸣神，剖心告世，倘有一毫所指，甘为三世之暗，即漏显诛，难遭阴罚。此种血忱，业已沁入梨枣，印政囊中久矣。而好事之家，犹有不尽相谅者，每观一剧，必问所指何人。噫，如其尽有所指，则誓词之设，已经二十余年，上帝有赫，实式临之，胡不降之以罚？兹以身后之事，且置勿论，论其现在者：年将六十，即旦夕就木，不为夭矣。向忧伯道之忧，今且五其男，二其女，孕而未诞、诞而待孕者，尚不一其人，虽尽属景升豚犬，然得此以慰桑榆，不忧穷民之无告矣。年虽迈而筋力未衰，涉水登山，少年场往往追予弗及；貌虽癯而精血未耗，寻花觅柳，儿女事犹然自觉情长。所患在贫，贫也，非病也；所少在贵，贵岂人人可幸致乎？是造物之悯予，亦云至矣。非悯其才，非悯其德，悯其方寸之无他也。生平所著之书，虽无裨于人心世道，若止论等身，几与曹交食粟之躯等其高下。使其间稍伏机心，略藏匕首，造物且诛之夺之不暇，肯容自作孽者老而不死，犹得

徉狂自肆于笔墨之林哉？吾于发端之始，即以讽刺戒人，且若器自鸣得意者，非敢故作夜郎，窃恐词人不究立言初意，谬信“琵琶王四”之说，因谬成真。谁无恩怨？谁乏牢骚？悉以填词泄愤，是此一书者，非阐明词学之书，乃教人行险播恶之书也。上帝讨无礼，予其首诛乎？现身说法，盖为此耳。

立 主 脑

古人作文一篇，定有一篇之主脑。主脑非他，即作者立言之本意也。传奇亦然。一本戏中，有无数人名，究竟俱属陪宾，原其初心，止为一人而设。即此一人之身，自始至终，离合悲欢，中具无限情由，无穷关目，究竟俱属衍文，原其初心，又止为一事而设。此一人一事，即作传奇之主脑也。然必此一人一事果然奇特，实在可传而后传之，则不愧传奇之目，而其人其事与作者姓名皆千古矣。如一部《琵琶》，止为蔡伯喈一人，而蔡伯喈一人又止为“重婚牛府”一事，其余枝节皆从此一事而生。二亲之遭凶，五娘之尽孝，拐儿之骗财匿书，张大公之疏财仗义，皆由于此。是“重婚牛府”四字，即作《琵琶记》之主脑也。一部《西厢》，止为张君瑞一人，而张君瑞一人，又止为“白马解围”一事，其余枝节皆从此一事而生。夫人之许婚，张生之望配，红娘之勇于作合，莺莺之敢于失身，与郑恒之力争原配而不得，皆由于此。是“白马解围”四字，即作《西厢记》之主脑也。余剧皆然，不能悉指。后人作传奇，但知为一人而作，不知为一事而作。尽此一人所行之事，逐节铺陈，有如散金碎玉，以作零出则可，谓之全本，则为断线之珠，无梁之屋。作者茫然无绪，观者寂然无声，无怪乎有识梨园，望之而却走也。此语未经提破，故犯者孔多，而今而后，吾知鲜矣。

脱 窠 臼

“人惟求旧，物惟求新。”新也者，天下事物之美称也。而文章一道，较之他物，尤加倍焉。戛戛乎陈言务去，求新之谓也。至于填词一道，较之诗赋古文，又加倍焉。非特前人所作，于今为旧，即出我一人之手，今之视昨，亦有间焉。昨已见而今未见也，知未见之为新，即知已见之为旧矣。古人呼剧本为“传奇”者，因其事甚奇特，未经人见而传之，是以得名，可见非奇不传。“新”即“奇”之别名也。若此等情节业已见之戏场，则千人共见，万人共见，绝无奇矣，焉用传之？是以填词之家，务解“传奇”二字。欲为此剧，先问古今院本中，曾有此等情节与否，如其未有，则急急传之，否则枉费辛勤，徒作效颦之妇。东施之貌未必丑于西施，止为效颦于人，遂蒙千古之诮。使当日逆料至此，即劝之捧心，知不屑矣。吾谓填词之难，莫难于洗涤窠臼，而填词之陋，亦莫陋于盗袭窠臼。吾观近日之新剧，非新剧也，皆老僧碎补之衲衣，医士合成之汤药，取众剧之所有，彼割一段，此割一段，合而成之，即是一种“传奇”。但有耳所未闻之姓名，从无目不经见之事实。语云：“千金之裘，非一狐之腋”，以此赞时人新剧，可谓定评。但不知前人所作，又从何处集来？岂《西厢》以前，别有跳墙之张珙？《琵琶》以上，另有剪发之赵五娘乎？若是，则何以原本不传，而传其抄本也？窠臼不脱，难语填词，凡我同心，急宜参酌。

密 针 线

编戏有如缝衣，其初则以完全者剪碎，其后又以剪碎者凑成。剪碎易，凑成难，凑成之工，全在针线紧密。一节偶疏，全篇之破绽出矣。每编一折，必须前顾数折，后顾数折。顾前者，欲其照映，顾后者，便于埋伏。照映埋伏，不止照映一人，埋伏一事，凡是此剧中有名之人、关涉之事，与前此后此所说之话，节节俱要想到，宁使想到而不用，勿使有用而忽之。吾观今日之传奇，事事皆逊元人，独于埋伏照映处，胜彼一筹。非今人之太工，以元人所长全不在此也。若以针线论，元曲之最疏者，莫过于《琵琶》。无论大关节背谬甚多，如子中状元三载，而家人不知；身赘相府，享尽荣华，不能自遣一仆，而附家报于路人；赵五娘千里寻夫，只身无伴，未审果能全节与否，其谁证之？诸如此类，皆背理妨伦之甚者。再取小节论之，如五娘之剪发，乃作者自为之，当日必无其事。以有疏财仗义之张大公在，受人之托，必能终人之事，未有坐视不顾，而致其剪发者也。然不剪发，不足以见五娘之孝。以我作《琵琶》，《剪发》一折亦必不能少，但须回护张大公，使之自留地步。吾读《剪发》之曲，并无一字照管大公，且若有心讥刺者。据五娘云：“前日婆婆没了，亏大公周济。如今公公又死，无钱资送，不好再去求他，只得剪发”云云。若是，则剪发一事乃自愿为之，非时势迫之使然也，奈何曲中云：“非奴若要孝名传，只为上山擒虎易，开口告人难。”此二语虽属恒言，人人可道，独不宜出五娘之口。彼自不肯告人，何以言其难也？观此二语，不似怗怨大公之词乎？然此犹属背后私言，或可免于照顾。迨其哭倒在地，大公见之，许送钱米相资，以备衣衾棺槨，则感之颂之，当有不啻口出者矣，奈何曲中又云：“只恐奴身死也，

兀自没人埋，谁还你恩债？”试问公死而埋者何人？姑死而埋者何人？对埋殓公姑之人而自言暴露，将置大公于何地乎？且大公之相资，尚义也，非图利也，“谁还恩债”一语，不几抹倒大公，将一片热肠付之冷水乎？此等词曲，幸而出自元人，若出我辈，则群口讪之，不识置身何地矣。予非敢于仇古，既为词曲立言，必使人知取法，若扭于世俗之见，谓事事当法元人，吾恐未得其瑜，先有其瑕。人或非之，即举元人借口，乌知圣人千虑，必有一失；圣人之事，犹有不可尽法者，况其他乎？《琵琶》之可法者原多，请举所长以盖短。如《中秋赏月》一折，同一月也，出于牛氏之口者，言言欢悦；出于伯喈之口者，字字凄凉。一座两情，两情一事，此其针线之最密者。瑕不掩瑜，何妨并举其略。然传奇一事也，其中义理分为三项：曲也，白也，穿插联络之关目也。元人所长者止居其一，曲是也，白与关目皆其所短。吾于元人，但守其词中绳墨而已矣。

减 头 绪

头绪繁多，传奇之大病也。《荆》、《刘》、《拜》、《杀》（《荆钗记》、《刘知远》、《拜月亭》、《杀狗记》）之得传于后，止为一线到底，并无旁见侧出之情。三尺童子观演此剧，皆能了了于心，便便于口，以其始终无二事，贯串只一人也。后来作者不讲根源，单筹枝节，谓多一人可增一人之事。事多则关目亦多，令观场者如入山阴道中，人人应接不暇。殊不知戏场脚色，止此数人，便换千百个姓名，也只此数人装扮，止在上场之勤不勤，不在姓名之换不换。与其忽张忽李，令人莫识从来，何如只扮数人，使之频上频下，易其事而不易其人，使观者各畅怀来，如逢故物之为愈乎？作传奇者，能以“头绪忌繁”四字，刻刻关心，则思路不分，

文情专一，其为词也，如孤桐劲竹，直上无枝，虽难保其必传，然已有《荆》、《刘》、《拜》、《杀》之势矣。

戒 荒 唐

昔人云：“画鬼魅易，画狗马难。”以鬼魅无形，画之不似，难于稽考。狗马为人所习见，一笔稍乖，是人得以指摘。可见事涉荒唐，即文人藏拙之具也。而近日传奇，独工于为此。噫，活人见鬼，其兆不祥，矧有吉事之家，动出魑魅魍魉为寿乎？移风易俗，当自此始。吾谓剧本非他，即三代以后之《韶》、《濩》也。殷俗尚鬼，犹不闻以怪诞不经之事被诸声乐，奏于庙堂，矧辟谬崇真之盛世乎？王道本乎人情，凡作传奇，只当求于耳目之前，不当索诸闻见之外。无论词曲，古今文字皆然。凡说人情物理者，千古相传；凡涉荒唐怪异者，当日即朽。《五经》、《四书》、《左》、《国》、《史》、《汉》，以及唐宋诸大家，何一不说人情？何一不关物理？及今家传户颂，有怪其平易而废之者乎？《齐谐》，志怪之书也，当日仅存其名，后世未见其实。此非平易可久、怪诞不传之明验欤？人谓家常日用之事，已被前人做尽，穷微极隐，纤芥无遗，非好奇也，求为平而不可得也。予曰：不然。世间奇事无多，常事为多，物理易尽，人情难尽。有一日之君臣父子，即有一日之忠孝节义。性之所发，愈出愈奇，尽有前人未作之事，留之以待后人，后人猛发之心，较之胜于先辈者，即就妇人女子言之，女德莫过于贞，妇愆无甚于妒。古来贞女守节之事，自剪发、断臂、刺面、毁身，以至刎颈而止矣。近日矢贞之妇，竟有刳肠剖腹，自涂肝脑于贵人之庭以鸣不屈者；又有不持利器，谈笑而终其身，若老衲高僧之坐化者。岂非五伦以内，自有变化不穷之事乎？古来妒妇制夫之条，自罚跪、戒眠、捧灯、戴水，以至扑

臀而止矣。近日妒悍之流，竟有锁门绝食，迁怒于人，使族党避祸难前，坐视其死而莫之救者；又有鞭扑不加，囹圄不设，宽仁大度，若有刑措之风，而其夫摄于不怒之威，自遣其妾而归化者。岂非闺闼以内，便有日新月异之事乎？此类繁多，不能枚举。此言前人未见之事，后人见之，可备填词制曲之用者也。即前人已见之事，尽有摹写未尽之情，描画不全之态。若能设身处地，伐隐攻微，彼泉下之人，自能效灵于我，授以生花之笔，假以蕴绣之肠，制为杂剧，使人但赏极新极艳之词，而竟忘其为极腐极陈之事者。此为最上一乘，予有志焉，而未之逮也。

审 虚 实

传奇所用之事，或古或今，有虚有实，随人拈取。古者，书籍所载，古人现成之事也；今者，耳目传闻，当时仅见之事也；实者，就事敷陈，不假造作，有根有据之谓也；虚者，空中楼阁，随意构成，无影无形之谓也。人谓古事多实，近事多虚。予曰：不然。传奇无实，大半皆寓言耳。欲劝人为孝，则举一孝子出名，但有一行可纪，则不必尽有其事。凡属孝亲所应有者，悉取而加之，亦犹纣之不善，不如是之甚也，一居下流，天下之恶皆归焉。其余表忠表节，与种种劝人为善之剧，率同于此。若谓古事皆实，则《西厢》、《琵琶》推为曲中之祖，莺莺果嫁君瑞乎？蔡邕之饿莩其亲，五娘之干蛊其夫，见于何书？果有实据乎？孟子云：“尽信书，不如无书。”盖指《武成》而言也。经史且然，矧杂剧乎？凡阅传奇而必考其事从何来、人居何地者，皆说梦之痴人，可以不答者也。然作者秉笔，又不宜尽作是观。若纪目前之事，无所考究，则非特事迹可以幻生，并其人之姓名亦可以凭空捏造，是谓虚则虚到底也。若用往事为题，以一古人出名，则满场脚色皆用古人，捏

一姓名不得；其所行之事，又必本于载籍，班班可考，创一事实不得。非用古人姓字为难，使与满场脚色同时共事之为难也；非查古人事实为难，使与本等情由贯串合一之为难也。予既谓传奇无实，大半寓言，何以又云姓名事实必须有本？要知古人填古事易，今人填古事难。古人填古事，犹之今人填今事，非其不虑人考，无可考也。传至于今，则其人其事，观者烂熟于胸中，欺之不得，罔之不能，所以必求可据，是谓实则实到底也。若用一二古人作主，因无陪客，幻设姓名以代之，则虚不似虚，实不成实，词家之丑态也，切忌犯之。

词采第二

曲与诗余，同是一种文字。古今刻本中，诗余能佳而曲不能尽佳者，诗余可选而曲不可选也。诗余最短，每篇不过数十字，作者虽多，入选者不多，弃短取长，是以但见其美。曲文最长，每折必须数曲，每部必须数十折，非八斗长才，不能始终如一。微疵偶见者有之，瑕瑜并陈者有之，尚有踊跃于前，懈弛于后，不得已而为狗尾貂续者亦有之。演者观者既存此曲，只得取其所长，恕其所短，首尾并录。无一部而删去数折，止存数折，一出而抹去数曲，止存数曲之理。此戏曲不能尽佳，有为数折可取而挈带全篇，一曲可取而挈带全折，使瓦缶与金石齐鸣者，职是故也。予谓既工此道，当如画士之传真，闺女之刺绣，一笔稍差，便虑神情不似，一针偶缺，即防花鸟变形。使全部传奇之曲，得似诗余选本如《花间》、《草堂》诸集，首首有可珍之句，句句有可宝之字，则不愧填词之名，无论必传，即传之千万年，亦非侥幸而得者矣。吾于古曲之中，取其全本不懈、多瑜鲜瑕者，惟《西厢》能之。《琵琶》则如汉高用兵，胜败不一，其得一胜而王者，命也，

非战之力也。《荆》、《刘》、《拜》、《杀》之传，则全赖音律。文章一道。置之不论可矣。

贵 显 浅

曲文之词采，与诗文之词采非但不同，且要判然相反。何也？诗文之词采，贵典雅而贱粗俗，宜蕴藉而忌分明。词曲不然，话则本之街谈巷议，事则取其直说明言。凡读传奇而有令人费解，或初阅不见其佳，深思而后得其意之所在者，便非绝妙好词，不问而知为今曲，非元曲也。元人非不读书，而所制之曲，绝无一毫书本气，以其有书而不用，非当用而无书也，后人之曲则满纸皆书矣。元人非不深心，而所填之词，皆觉过于浅近，以其深而出之以浅，非借浅以文其不深也，后人之词则心口皆深矣。无论其他，即汤若士《还魂》一剧，世以配飧元人，宜也。问其精华所在，则以《惊梦》、《寻梦》二折对。予谓二折虽佳，犹是今曲，非元曲也。《惊梦》首句云：“袅晴丝，吹来闲庭院，摇漾春如线。”以游丝一缕，逗起情丝，发端一语，即费如许深心，可谓惨淡经营矣。然听歌《牡丹亭》者，百人之中有一二人解出此意否？若谓制曲初心并不在此，不过因所见以起兴，则瞥见游丝，不妨直说，何须曲而又曲，由晴丝而说及春，由春与晴丝而悟其如线也？若云作此原有深心，则恐索解人不易得矣。索解人既不易得，又何必奏之歌筵，俾雅人俗子同闻而共见乎？其余“停半晌。整花钿，没揣菱花，偷人半面”及“良辰美景奈何天，赏心乐事谁家院”，“遍青山，啼红了杜鹃”等语。字字俱费经营，字字皆欠明爽。此等妙语，止可作文字观，不得作传奇观。至如末幅“似虫儿般蠢动，把风情撮”，与“恨不得肉儿般团成片也，逗的个日下胭脂雨上鲜”，《寻梦》曲云：“明放着白日青天，猛教人抓不到梦

魂前”，“是这答儿压黄金钏匾”，此等曲，则去元人不远矣。而予最赏心者，不专在《惊梦》、《寻梦》二折，谓其心花笔蕊，散见于前后各折之中。《诊祟》曲云：“看你春归何处归，春睡何曾睡，气丝儿，怎度的长天日。”“梦去知他实实谁，病来只送得个虚虚的你。做行云，先渴倒在巫阳会。”“又不得困人天气，中酒心期，魆魆的常如醉。”“承尊觑，何时何日，来看这女颜回？”《忆女》曲云：“地老天昏，没处把老娘安顿。”“你怎撇得下万里无儿白发亲。”“赏春香还是你旧罗裙。”《玩真》曲云：“如愁欲语，只少口气儿呵。”“叫的你喷嚏似天花唾。动凌波，盈盈欲下，不见影儿那。”此等曲，则纯乎元人，置之《百种》前后，几不能辨，以其意深词浅，全无一毫书本气也。若论填词家宜用之书，则无论经传子史以及诗赋古文，无一不当熟读，即道家佛氏、九流百工之书，下至孩童所习《千字文》、《百家姓》，无一不在所用之中。至于形之笔端，落于纸上，则宜洗濯殆尽。亦偶有用着成语之处，点出旧事之时，妙在信手拈来，无心巧合，竟似古人寻我，并非我觅古人。此等造诣，非可言传，只宜多购元曲，寝食其中，自能为其所化。而元曲之最佳者，不单在《西厢》、《琵琶》二剧，而在《元人百种》之中。《百种》亦不能尽佳，十有一二可列高、王之上，其不致家弦户诵，出与二剧争雄者，以其是杂剧而非全本，多北曲而少南音，又止可被诸管弦，不便奏之场上。今时所重，皆在彼而不在乎，即欲不为纨扇之捐，其可得乎？

重 机 趣

“机趣”二字，填词家必不可少。机者，传奇之精神，趣者，传奇之风致。少此二物，则如泥人土马，有生形而无生气。因作者逐句凑成，遂使观场者逐段记忆，稍不留心，则看到第二曲，不

记头一曲是何等情形，看到第二折，不知第三折要作何勾当。是心口徒劳，耳目俱涩，何必以此自苦，而复苦百千万亿之人哉？故填词之中，勿使有断续痕，勿使有道学气。所谓无断续痕者，非止一出接一出，一人顶一人，务使承上接下，血脉相连，即于情事截然绝不相关之处，亦有连环细笋伏于其中，看到后来方知其妙，如藕于未切之时，先长暗丝以待，丝于络成之后，才知作茧之精，此言机之不可少也。所谓无道学气者，非但风流跌宕之曲、花前月下之情，当以板腐为戒，即谈忠孝节义与说悲苦哀怨之情，亦当抑圣为狂，寓哭于笑，如王阳明之讲道学，则得词中三昧矣。阳明登坛讲学，反复辨说“良知”二字，一愚人讯之曰：“请问‘良知’这件东西，还是白的？还是黑的？”阳明日：“也不白，也不黑，只是一点带赤的，便是良知了。”照此法填词，则离合悲欢，嘻笑怒骂，无一语一字不带机趣而行矣。予又谓填词种子，要在性中带来，性中无此，做杀不佳。人问：性之有无，何从辨识？予曰：不难，观其说话行文，即知之矣。说话不迂腐，十句之中，定有一二句超脱，行文不板实，一篇之内，但有一二段空灵，此即可以填词之人也。不则另寻别计，不当以有用精神，费之无益之地。噫，“性中带来”一语，事事皆然，不独填词一节。凡作诗文书画、饮酒斗棋与百工技艺之事，无一不具夙根，无一不本天授。强而后能者，毕竟是半路出家，止可冒斋饭吃，不能成佛作祖也。

戒 浮 泛

词贵显浅之说，前已道之详矣。然一味显浅而不知分别，则将日流粗俗，求为文人之笔而不可得矣。元曲多犯此病，乃矫艰深隐晦之弊而过焉者也。极粗极俗之语，未尝不入填词，但宜从脚色起见。如在花面口中，则惟恐不粗不俗，一涉生旦之曲，便

宜斟酌其词。无论生为衣冠仕宦，旦为小姐夫人，出言吐词当有隽雅春容之度。即使生为仆从，旦作梅香，亦须择言而发，不与净丑同声。以生旦有生旦之体，净丑有净丑之腔故也。元人不察，多混用之。观《幽闺记》之陀满兴福，乃小生脚色，初屈后伸之人也。其《避兵》曲云：“遥观巡捕卒，都是棒和枪。”此花面口吻，非小生曲也。均是常谈俗语，有当用于此者，有当用于彼者。又有极粗极俗之语，止更一二字，或增减一二字，便成绝新绝雅之文者。神而明之，只在一熟。当存其说，以俟其人。

填词义理无穷，说何人，肖何人，议某事，切某事，文章头绪之最繁者，莫填词若矣。予谓总其大纲，则不出“情景”二字。景书所睹，情发欲言，情自中生，景由外得，二者难易之分，判如霄壤。以情乃一人之情，说张三要像张三，难通融于李四。景乃众人之景，写春夏尽是春夏，止分别于秋冬。善填词者，当为所难，勿趋其易。批点传奇者，每遇游山玩水、赏月观花等曲，见其止书所见，不及中情者，有十分佳处，只好算得五分，以风云月露之词，工者尽多，不从此剧始也。善咏物者，妙在即景生情。如前所云《琵琶·赏月》四曲，同一月也，牛氏有牛氏之月，伯喈有伯喈之月。所言者月，所寓者心。牛氏所说之月，可移一句于伯喈？伯喈所说之月，可挪一字于牛氏乎？夫妻二人之语，犹不可挪移混用，况他人乎？人谓此等妙曲，工者有几，强人以所不能，是塞填词之路也。予曰：不然。作文之事，贵于专一。专则生巧，散乃入愚；专则易于奏工，散者难于责效。百工居肆，欲其专也；众楚群咻，喻其散也。舍情言景，不过图其省力，殊不知眼前景物繁多，当从何处说起。咏花既愁遗鸟，赋月又想兼风。若使逐件铺张，则虑事多曲少；欲以数言包括，又防事短情长。展转推敲，已费心思几许，何如只就本人生发，自有欲为之事，自有待说之情，念不旁分，妙理自出。如发科发甲之人，窗下作文，每日止能一篇二篇，场中遂至七篇。窗下之一篇二篇未必尽好，而

场中之七篇，反能尽发所长，而夺千人之帜者，以其念不旁分，舍本题之外，并无别题可做，只得走此一条路也。吾欲填词家舍景言情，非责人以难，正欲其舍难就易耳。

忌 填 塞

填塞之病有三：多引古事，迭用人名，直书成句。其所以致病之由亦有三：借典核以明博雅，假脂粉以见风姿，取现成以免思索。而总此三病与致病之由之故，则在一语。一语维何？曰：从未经人道破。一经道破，则俗语云“说破不值半文钱”，再犯此病者鲜矣。古来填词之家，未尝不引古事，未尝不用人名，未尝不书现成之句，而所引所用与所书者，则有别焉：其事不取幽深，其人不搜隐僻，其句则采街谈巷议。即有时偶涉诗书，亦系耳根听熟之语，舌端调惯之文，虽出诗书，实与街谈巷议无别者。总而言之，传奇不比文章，文章做与读书人看，故不怪其深，戏文做与读书人与不读书人同看，又与不读书之妇人小儿同看，故贵浅不贵深。使文章之设，亦为与读书人、不读书人及妇人小儿同看，则古来圣贤所作之经传，亦只浅而不深，如今世之为小说矣。人曰：文人之作传奇与著书无别，假此以见其才也，浅则才于何见？予曰：能于浅处见才，方是文章高手。施耐庵之《水浒》，王实甫之《西厢》，世人尽作戏文小说看，金圣叹特标其名曰“五才子书”、“六才子书”者，其意何居？盖愤天下之小视其道，不知为古今来绝大文章，故作此等惊人语以标其目。噫，知言哉！

音律第三

作文之最乐者，莫如填词，其最苦者，亦莫如填词。填词之乐，详后《宾白》之第二幅，上天入地，作佛成仙，无一不随意到，较之南面百城，洵有过焉者矣。至说其苦，亦有千态万状，拟之悲伤疾痛、桎梏幽囚诸逆境，殆有甚焉者。请详言之。他种文字，随人长短，听我张弛，总无限定之资格。今置散体弗论，而论其分股、限字与调声叶律者。分股则帖括时文是已。先破后承，始开终结，内分八股，股股相对，绳墨不为不严矣；然其股法、句法，长短由人，未尝限之以数，虽严而不谓之严也。限字则四六排偶之文是已。语有一定之字，字有一定之声，对必同心，意难合掌，矩度不为不肃矣；然止限以数，未定以位，止限以声，未拘以格，上四下六可，上六下四亦未尝不可，仄平平仄可，平仄仄平亦未尝不可，虽肃而实未尝肃也。调声叶律，又兼分股限字之文，则诗中之近体是已。起句五言，则句句五言，起句七言，则句句七言，起句用某韵，则以下俱用某韵，起句第二字用平声，则下句第二字定用仄声，第三、第四又复颠倒用之，前人立法亦云苛且密矣。然起句五言，句句五言，起句七言，句句七言，便有成法可守，想入五言一路，则七言之句不来矣；起句用某韵，以下俱用某韵，起句第二字用平声，下句第二字定用仄声，则拈得平声之韵，上去入三声之韵，皆可置之不问矣；守定平仄、仄平二语，再无变更，自一首以至千百首皆出一辙，保无朝更夕改之令阻人适从矣，是其苛犹未甚，密犹未至也。至于填词一道，则句之长短，字之多寡，声之平上去入，韵之清浊阴阳，皆有一定不移之格。长者短一线不能，少者增一字不得，又复忽长忽短，时少时多，令人把握不定。当平者平，用一仄字不得；当阴者阴，换

一阳字不能。调得平仄成文，又虑阴阳反复；分得阴阳清楚，又与声韵乖张。令人搅断肺肠，烦苦欲绝。此等苛法，尽勾磨人。作者处此，但能布置得宜，安顿极妥，便是千幸万幸之事，尚能计其词品之低昂，文情之工拙乎？予襁褓识字，总角成篇，于诗书六艺之文，虽未精穷其义，然皆浅涉一过。总诸体百家而论之，觉文字之难，未有过于填词者，予童而习之，于今老矣，尚未窥见一斑。只以管窥蛙见之识，谬语同心；虚赤帜于词坛，以待将来。作者能于此种艰难文字显出奇能，字字在声音律法之中，言言无资格拘挛之苦，如莲花生在火上，仙叟弈于桔中，始为盘根错节之才，八面玲珑之笔，寿名千古，衮影何惭！而千古上下之题品文艺者，看到传奇一种，当易心换眼，别置典刑。要知此种文字作之可怜，出之不易，其楮墨笔砚非同己物，有如假自他人，耳目心思效用不能，到处为人掣肘，非若诗赋古文，容其得意疾书，不受神牵鬼制者。七分佳处，便可许作十分，若到十分，即可敌他种文字之二十分矣。予非左袒词家，实欲主持公道，如其不信，但请作者同拈一题，先作文一篇或诗一首，再作填词一曲，试其孰难孰易，谁拙谁工，即知予言之不谬矣。然难易自知，工拙必须人辨。

词曲中音律之坏，坏于《南西厢》。凡有作者，当以之为戒，不当取之为法。非止音律，文艺亦然。请详言之。填词除杂剧不论，止论全本，其文字之佳，音律之妙，未有过于《北西厢》者。自南本一出，遂变极佳者为极不佳，极妙者为极不妙。推其初意，亦有可原，不过因北本为词曲之豪，人人赞美，但可被之管弦，不便奏诸场上，但宜于弋阳、四平等俗优，不便强施于昆调，以系北曲而非南曲也。兹请先言其故。北曲一折，止隶一人，虽有数人在场，其曲止出一口，从无互歌迭咏之事。弋阳、四平等腔，字多音少，一泄而尽，又有一人启口，数人接腔者，名为一人，实出众口，故演《北西厢》甚易。昆调悠长，一字可抵数字，每唱

一曲，又必一人始之，一人终之，无可助一臂者，以长江大河之全曲，而专责一人，即有铜喉铁齿，其能胜此重任乎？此北本虽佳，吴音不能奏也。作《南西厢》者，意在补此缺陷，遂割裂其词，增添其白，易北为南，撰成此剧，亦可谓善用古人，喜传佳事者矣。然自予论之，此人之于作者，可谓功之首而罪之魁矣。所谓功之首者，非得此人，则俗优竞演，雅调无闻，作者苦心，虽传实没。所谓罪之魁者，千金狐腋，剪作鸿毛，一片精金，点成顽铁。若是者何？以其有用古之心而无其具也。今之观演此剧者，但知关目动人，词曲悦耳，亦曾细尝其味、深绎其词乎？使读书作古之人，取《西厢》南本一阅，句栞字比，未有不废卷掩鼻，而怪秽气熏人者也。若曰：词曲情文不浹，以其就北本增删，割彼凑此，自难贴合，虽有才力无所施也。然则宾白之文，皆由己作，并未依傍原本，何以有才不用，有力不施，而为俗口鄙恶之谈，以秽听者之耳乎？且曲文之中，尽有不就原本增删，或自填一折以补原本之缺略，自撰一曲以作诸曲之过文者，此则束缚无人，操纵由我，何以有才不用，有力不施，亦作勉强支吾之句，以混观者之目乎？使王实甫复生，看演此剧，非狂叫怒骂，索改本而付之祝融，即痛哭流涕，对原本而悲其不幸矣。嘻！续《西厢》者之才，去作《西厢》者，止争一间，观者群加非议，谓《惊梦》以后诸曲，有如狗尾续貂。以彼之才，较之作《南西厢》者，岂特奴婢之于郎主，直帝王之视乞丐！乃今之观者，彼施责备，而此独包容，已不可解；且令家家户户祝，居然配绘《琵琶》，非特实甫呼冤，且使则诚号屈矣！予生平最恶弋阳、四平剧，见则趋而避之，但闻其搬演《西厢》，则乐观恐后。何也？以其腔调虽恶，而曲文未改，仍是完全不破之《西厢》，非改头换面、折手跛足之《西厢》也。南本则聋瞽、喑哑、驮背、折腰诸恶状，无一不备于身矣。此但责其文词，未究音律。从来词曲之旨，首严宫调，次及声音，次及字格。九宫十三调，南曲之门户也。小出可以不拘，

其成套大曲⁴，则分门别户，各有依归，非但彼此不可通融，次第亦难紊乱。此剧只因改北成南，遂变尽词场格局：或因前曲与前曲字句相同，后曲与后曲体段不合，遂向别宫别调随取一曲以联络之，此宫调之不能尽合也；或彼曲与此曲牌名巧凑，其中但有一二句字数不符，如其可增可减，即增减就之，否则任其多寡，以解补凑不来之厄，此字格之不能尽符也；至于平仄阴阳与逐句所叶之韵，较此二者其难十倍，诛将不胜诛，此声音之不能尽叶也。词家所重在此三者，而三者之弊，未尝缺一，能使天下相传，久而不废，岂非咄咄怪事乎？更可异者，近日词人因其熟于梨园之口，习于观者之目，谓此曲第一当行，可以取法，用作曲谱；所填之词，凡有不合成律者，他人执而讯之，则曰：“我用《南西厢》某折作对子，如何得错！”噫，玷《西厢》名目者此人，坏词场矩度者此人，误天下后世之苍生者，亦此人也。此等情弊，予不急为拈出，则《南西厢》之流毒，当至何年何代而已乎！

向在都门，魏贞庵相国取崔郑合葬墓志铭示予，命予作《北西厢》翻本，以正从前之谬。予谢不敏，谓天下已传之书，无论是非可否，悉宜听之，不当奋其死力与较短长。较之而非，举世起而非我；即较之而是，举世亦起而非我。何也？贵远贱近，慕古薄今，天下之通情也。谁肯以千古不朽之名人，抑之使出时流下？彼文足以传世，业有明征；我力足以降人，尚无实据。以无据敌有征，其败可立见也。时龚芝麓先生亦在座，与贞庵相国均以予言为然。向有一人欲改《北西厢》，又有一人欲续《水浒传》，同商于予。予曰：“《西厢》非不可改，《水浒》非不可续，然无奈二书已传，万口交赞，其高踞词坛之座位，业如泰山之稳，磐石之固，欲遽叱之使起而让席于予，此万不可得之数也。无论所改之《西厢》、所续之《水浒》，未必可继后尘，即使高出前人数倍，吾知举世之人不约而同，皆以‘续貂蛇足’四字，为新作之定评矣。”二人唯唯而去。此予由衷之言，向以诚人，而今不以之

绳己，动数前人之过者，其意何居？曰：存其是也。放郑声者，非仇郑声，存雅乐也；辟异端者，非仇异端，存正道也；予之力斥《南西厢》，非仇《南西厢》，欲存《北西厢》之本来面目也。若谓前人尽不可议，前书尽不可毁，则杨朱、墨翟亦是前人，郑声未必无底本，有之亦是前书，何以古圣贤放之辟之，不遗余力哉？予又谓《北西厢》不可改，《南西厢》则不可不翻。何也？世人喜观此剧，非故嗜痂，因此剧之外别无善本，欲睹崔张旧事，舍此无由。地乏朱砂，赤土为佳，《南西厢》之得以浪传，职是故也。使得一人焉，起而痛反其失，别出新裁，创为南本，师实甫之意，而不必更袭其词，祖汉卿之心，而不独仅续其后，若与《北西厢》角胜争雄，则可谓难之又难，若止与《南西厢》赌长较短，则犹恐屑而不屑。予虽乏才，请当斯任，救饥有暇，当即拈毫。

《南西厢》翻本既不可无，予又因此及彼，而有志于《北琵琶》一剧。蔡中郎夫妇之传，既以《琵琶》得名，则“琵琶”二字乃一篇之主，而当年作者何以仅标其名，不见拈弄其实？使赵五娘描容之后，果然身背琵琶，往别张大公，弹出北曲哀声一大套，使观者听者涕泗横流，岂非《琵琶记》中一大畅事？而当年见不及此者，岂元人各有所长，工南词者不善制北曲耶？使王实甫作《琵琶》，吾知与千载后之李笠翁必有同心矣。予虽乏才，亦不敢不当斯任。向填一折付优人，补则诚原本之不逮，兹已附入四卷之末，尚思扩为全本，以备词人采择，如其可用，谱为弦索新声，若是，则《南西厢》、《北琵琶》二书可以并行。虽不敢望追踪前哲，并轡时贤，但能保与自手所填诸曲（如已经行世之前后八种，及已填未刻之内八种）合而较之，必有浅深疏密之分矣。然著此二书，必须杜门累月，窃恐饥来驱人，势不由我。安得雨珠雨粟之天，为数十口家人筹生计乎？伤哉！贫也。

恪守词韵

一出用一韵到底，半字不容出入，此为定格。旧曲韵杂出入无常者，因其法制未备，原无成格可守，不足怪也。既有《中原音韵》一书，则犹畛域画定，寸步不容越矣。常见文人制曲，一折之中，定有一二出韵之字，非曰明知故犯，以偶得好句不在韵中，而又不肯割爱，故勉强入之，以快一时之目者也。杭有才人沈孚中者，所制《绾春园》、《息宰河》二剧，不施浮采，纯用白描，大是元人后劲。予初阅时，不忍释卷，及考其声韵，则一无定轨，不惟偶犯数字，竟以寒山、桓欢二韵，合为一处用之，又有以支思、齐微、鱼模三韵并用者，甚至以真文、庚青、侵寻三韵，不论开口闭口，同作一韵用者。长于用才而短于择术，致使佳调不传，殊可痛惜！夫作诗填词同一理也。未有沈休文诗韵以前，大同小异之韵，或可叶入诗中。既有此书，即三百篇之风人复作，亦当俯就范围。李白诗仙，杜甫诗圣，其才岂出沈约下，未闻以才思纵横而跃出韵外，况其他乎？设有一诗于此，言言中的，字字惊人，而以一东二冬并叶，或三江七阳互施，吾知司选政者，必加槟黜，岂有以才高句美而破格收之者乎？词家绳墨，只在《谱》、《韵》二书，合谱合韵，方可言才，不则八斗难克升合，五车不敌片纸，虽多虽富，亦奚以为？

凜遵曲谱

曲谱者，填词之粉本，犹妇人刺绣之花样也，描一朵，刺一朵，画一叶，绣一叶，拙者不可稍减，巧者亦不能略增。然花样

无定式，尽可日新月异，曲谱则愈旧愈佳，稍稍趋新，则以毫厘之差而成千里之谬。稍事新奇百出，文章变化无穷，总不出谱内刊成之定格。是束缚文人而使有才不得自展者，曲谱是也；私厚词人而使有才得以独展者，亦曲谱是也。使曲无定谱，亦可日新月异，则凡属淹通文艺者，皆可填词，何元人、我辈之足重哉？“依样画葫芦”一语，竟似为填词而发。妙在依样之中，别出好歹，稍有一线之出入，则葫芦体样不圆，非近于方，则类乎扁矣。葫芦岂易画者哉！明朝三百年，善画葫芦者，止有汤临川一人，而犹有病其声韵偶乖，字句多寡之不合者。甚矣，画葫芦之难，而一定之成样不可擅改也。

曲谱无新，曲牌名有新。盖词人好奇嗜巧，而又不得展其伎俩，无可奈何，故以二曲三曲合为一曲，熔铸成名，如《金索挂梧桐》、《倾杯赏芙蓉》、《倚马待风云》之类是也。此皆老于词学、文人善歌者能之，不则上调不接下调，徒受歌者揶揄。然音调虽协，亦须文理贯通，始可串离使合。如《金络索》、《梧桐树》是两曲，串为一曲，而名曰《金索挂梧桐》，以金索挂树，是情理所有之事也。《倾杯序》、《玉芙蓉》是两曲，串为一曲，而名曰《倾杯赏芙蓉》，倾杯酒而赏芙蓉，虽系捏成，犹口头语也。《驻马听》、《一江风》、《驻云飞》是三曲，串为一曲，而名曰《倚马待风云》，倚马而待风云之会，此语即入诗文中，亦自成句。凡此皆系有伦有脊之言，虽巧而不厌其巧。竟有只顾串合，不询文义之通塞，事理之有无，生扭数字作曲名者，殊失顾名思义之体，反不若前人不列名目，只以“犯”字加之。如本曲《江儿水》而串入二别曲，则曰《二犯江儿水》；本曲《集贤宾》而串入三别曲，则曰《三犯集贤宾》。又有以“摊破”二字概之者，如本曲《簇御林》、本曲《地锦花》而串入别曲，则曰《摊破簇御林》、《摊破地锦花》之类，何等浑然，何等藏拙。更有以十数曲串为一曲而标以总名，如《六犯清音》、《七贤过关》、《九回肠》、《十二峰》之

类，更觉浑雅。予谓串旧作新，终是填词末着。只求文字好，音律正，即牌名旧杀，终觉新奇可喜。如以极新极美之名，而填以庸腐乖张之曲，谁其好之？善恶在实，不在名也。

鱼模当分

词曲韵书，止靠《中原音韵》一种，此系北韵，非南韵也。十年之前，武林陈次升先生欲补此缺陷，作《南词音韵》一书，工垂成而复辍，殊为可惜。予谓南韵深渺，卒难成书。填词之家即将《中原音韵》一书，就平上去三音之中，抽出入声字，另为一声，私置案头，亦可暂备南词之用。然此犹可缓。更有急于此者，则鱼模一韵，断宜分别为二。鱼之与模，相去甚远，不知周德清当日何故比而同之，岂仿沈休文诗韵之例，以元、繁、孙三韵，合为十三元之一韵，必欲于纯中示杂，以存“大音希声”之一线耶？无论一曲数音，听到歇脚处，觉其散漫无归，即我辈置之案头，自作文字读，亦觉字句聱牙，声韵逆耳。倘有词学专家，欲其文字与声音媲美者，当令鱼自鱼而模自模，两不相混，斯为极妥。即不能全出皆分，或每曲各为一韵，如前曲用鱼，则用鱼韵到底，后曲用模，则用模韵到底，犹之一诗一韵，后不同前，亦简便可行之法也。自愚见推之，作诗用韵，亦当仿此。另钞元字一韵，区别为三，拈得十三元者，首句用元，则用元韵到底，凡涉繁、孙二韵者勿用，拈得繁、孙者亦然。出韵则犯诗家之忌，未有以用韵太严而反来指摘者也。

廉 监 宜 避

侵寻、监咸、廉纤三韵，同属闭口之音，而侵寻一韵，较之监咸、廉纤，独觉稍异。每至收音处，侵寻闭口，而其音犹带清亮，至监咸、廉纤二韵，则微有不同。此二韵者，以作急板小曲则可，若填悠扬大套之词，则宜避之。《西厢》“不念《法华经》，不理《梁王忏》”一折用之者，以出惠明口中，声口恰相合耳。此二韵宜避者，不止单为声音，以其一韵之中，可用者不过数字，余皆险僻艰生，备而不用者也。若惠明曲中之“搯”字、“撻”字、“燂”字、“𩇛”字、“𩇛”字、“𩇛”字，惟惠明可用，亦惟才大如天之王实甫能用，以第二人作《西厢》，即不敢用此险韵矣。初学填词者不知，每于一折开手处，误用此韵，致累全篇无好句；又有作不终篇，弃去此韵而另作者，失计妨时。故用韵不可不择。

拗 句 难 好

音律之难，不难于铿锵顺口之文，而难于倔强聱牙之句。铿锵顺口者，如此字声韵不合，随取一字换之，纵横顺逆，皆可成文，何难一时数曲。至于倔强聱牙之句，即不拘音律，任意挥写，尚难见才，况有清浊阴阳，及明用韵，暗用韵，又断断不宜用韵之成格，死死限在其中乎？词名之最易填者，如《皂罗袍》、《醉扶归》、《解三酲》、《步步娇》、《园林好》、《江儿水》等曲。韵脚虽多，字句虽有长短，然读者顺口，作者自能随笔，即有一二句宜作拗体，亦如诗内之古风，无才者处此，亦能勉力见才。至如

《小桃红》、《下山虎》等曲，则有最难下笔之句矣。《幽闺记·小桃红》之中段云：“轻轻将袖儿掀，露春纤，盏儿拈，低娇面也。”每句只三字，末字叶韵，而每句之第二字，又断该用平，不可犯仄。此等处，似难而尚未尽难。其《下山虎》云：“大人家体面，委实多般，有眼何曾见！懒能向前，弄盏传杯，恁般腼腆。这里新人忒杀虔，待推怎地展？主婚人，不见怜，配合夫妻，事事非偶然。好恶姻缘总在天。”只须“懒能向前”、“待推怎地展”、“事非偶然”之三句，便能搅断词肠。“懒能向前”、“事非偶然”二句，每句四字，两平两仄，末字叶韵。“待推怎地展”一句五字，末字叶韵，五字之中，平居其一，仄居其四。此等拗句，如何措手？南曲中此类极多，其难有十倍于此者，若逐个牌名援引，则不胜其繁，而观者厌矣；不引一二处定其难易，人又未必尽晓；兹只随拈旧诗一句，颠倒声韵以喻之。如“云淡风轻近午天”，此等句法，自然容易见好，若变为“风轻云淡近午天”，则虽有好句，不夺目矣。况“风轻云淡近午天”七字之中，未必言言合律，或是阴阳相左，或是平仄尚乖，必须再易数字，始能合拍。或改为“风轻云淡午近天”，或又改为“风轻午近云淡天”，此等句法，揆之音律则或谐矣，若以文理绳之，尚得名为词曲乎？海内观者，肯曰此句为音律所限，自难求工，姑为体贴人情之善念而恕之乎？曰：不能也。既曰不能，则作者将删去此句而不作乎？抑自创一格而畅我所欲言乎？曰：亦不能也。然则攻此道者，亦甚难矣！变难成易，其道何居？曰：有一方便法门，词人或有行之者，未必尽有知之者。行之者偶然合拍，如路逢故人，出之不意，非我知其上路而往投之也。凡作倔强聱牙之句，不合自造新言，只当引用成语。成语在人口头，即稍更数字，略变声音，念来亦觉顺口。新造之句，一字聱牙，非止念不顺口，且令人不解其意。今亦随拈一二句试之。如“柴米油盐酱醋茶”，口头语也，试变为“油盐柴米酱醋茶”，或再变为“酱醋油盐柴米茶”，未有不明其义，不辨

其声者。“东边日出西边雨，道是无情却有情”，口头语也，试将上句变为“日出东边西边雨”，下句变为“道是有情却无情”，亦未有不明其义，不辨其声者。若使新造之言而作此等拗句，则几与海外方言无别，必经重译而后知之矣。即取前引《幽闺》之二句，定其工拙。“懒能向前”、“事非偶然”二句，皆拗体也。“懒能向前”一句，系作者新构，此句便觉生涩，读不顺口。“事非偶然”一句，系家常俗语，此句便觉自然，读之溜亮，岂非用成语易工，作新句难好之验乎？予作传奇数十种，所谓“三折肱为良医”，此折肱语也。因觅知音，尽倾肝膈。孔子云：“益者三友：友直，友谅，友多闻。”多闻，吾不敢居，谨自呼为直谅。

合韵易重

句末一字之当叶者，名为韵脚。一曲之中，有几韵脚，前后各别，不可犯重。此理谁不知之？谁其犯之？所不尽知而易犯者，惟有“合前”数句。兹请先言合前之故。同一牌名而为数曲者，止于首只列名其后，在南曲则曰“前腔”，在北曲则曰“么篇”，犹诗题之有其二、其三、其四也。末后数语，有前后各别者，有前后相同，不复另作，名为“合前”者。此虽词人躲懒法，然付之优人，实有二便：初学之时，少读数句新词，省费几番记忆，一便也；登场之际，前曲各人分唱，合前之曲必通场合唱，既省精神，又不寂寞，二便也。然合前之韵脚最易犯重。何也？大凡作首曲，则知查韵，用过之字不肯复用，迨做到第二、三曲，则止图省力，但做前词，不顾后语，置合前数句于度外，谓前曲已有，不必费心，而乌知此数句之韵脚在前曲则语语各别，凑入此曲，焉知不有偶合者乎？故作前腔之曲，而有合前之句者，必将末后数句之韵脚紧记在心，不可复用；作完之后，又必再查，始能不犯

此病。此就韵脚而言也。韵脚犯重，犹是小病，更有大于此者，则在词意与人不相合。何也？合前之曲既使同唱，则此数句之词意必有同情。如生旦净丑四人在场，生旦之意如是，净丑之意亦如是，即可谓之同情，即可使之同唱；若生旦如是，净丑未尽如是，则两情不一，已无同唱之理；况有生旦如是，净丑必不如是，则岂有相反之曲而同唱者乎？此等关窍，若不经人道破，则填词之家既顾阴阳平仄，又调角徵宫商，心绪万端，岂能复筹及此？予作是编，其于词学之精微，则万不得一，如此等粗浅之论，则可谓知无不言，言无不尽者矣。后来作者，当锡予一字，命曰“词奴”，以其为千古词人，尝效纪纲奔走之力也。

慎用上声

平上去入四声，惟上声一音最别。用之词曲，较他音独低，用之宾白，又较他音独高。填词者每用此声，最宜斟酌。此声利于幽静之词，不利于发扬之曲；即幽静之词，亦宜偶用、间用，切忌一句之中连用二三四字。盖曲到上声字，不求低而自低，不低则此字唱不出口。如十数字高而忽有一字之低，亦觉抑扬有致；若重复数字皆低，则不特无音，且无曲矣。至于发扬之曲，每到吃紧关头，即当用阴字，而易以阳字尚不发调，况为上声之极细者乎？予尝谓物有雌雄，字亦有雌雄。平去入三声以及阴字，乃字与声之雄飞者也；上声及阳字，乃字与声之雌伏者也。此理不明，难于制曲。初学填词者，每犯抑扬倒置之病，其故何居？正为上声之字入曲低，而入白反高耳。词人之能度曲者，世间颇少。其握管捻髭之际，大约口内吟哦，皆同说话，每逢此字，即作高声；且上声之字出口最亮，入耳极清，因其高而且清，清而且亮，自然得意疾书。孰知唱曲之道与此相反，念来高者，唱出反低，此

文人妙曲利于案头，而不利于场上之通病也。非笠翁为千古痴人，不分一毫人我，不留一点渣滓者，孰肯尽出家私底蕴，以博慷慨好义之虚名乎？

少填入韵

人声韵脚，宜于北而不宜于南。以韵脚一字之音，较他字更须明亮，北曲止有三声，有平上去而无入，用入声字作韵脚，与用他声无异也。南曲四声俱备，遇入声之字，定宜唱作入声，稍类三音，即同北调矣，以北音唱南曲可乎？予每以入韵作南词，随口念来，皆似北调，是以知之。若填北曲，则莫妙于此，一用入声，即是天然北调。然入声韵脚，最易见才，而又最难藏拙。工于入韵，即是词坛祭酒。以入韵之字，雅驯自然者少，粗俗倔强者多。填词老手，用惯此等字样，始能点铁成金。浅乎此者，运用不来，熔铸不出，非失之太生，则失之太鄙。但以《西厢》、《琵琶》二剧较其短长。作《西厢》者，工于北调，用入韵是其所长。如《闹会》曲中“二月春雷响殿角”，“早成就了幽期密约”，“内性儿聪明，冠世才学。扭捏着身子，百般做作。”“角”字，“约”字，“学”字，“作”字，何等雅驯！何等自然！《琵琶》工于南曲，用入韵是其所短。如《描容》曲中“两处堪悲，万愁怎摸？”愁是何物，而可摸乎？入声韵脚宜北不宜南之论，盖为初学者设，久于此道而得三昧者，则左之右之，无不宜之矣。

别解务头

填词者必讲“务头”，然务头二字，千古难明。《啸余谱》中

载《务头》一卷，前后胪列，岂止万言，究竟务头二字，未经说明，不知何物。止于卷尾开列诸旧曲，以为体样，言某曲中第几句是务头，其间阴阳不可混用，去上、上去等字，不可混施。若迹此求之，则除却此句之外，其平仄阴阳，皆可混用混施而不论矣。又云某句是务头，可施俊语于其上。若是，则一曲之中，止该用一俊语，其余字句皆可潦草涂鸦，而不必计其工拙矣。予谓立言之人，与当权秉轴者无异。政令之出，关乎从违，断断可从，而后使民从之，稍背于此者，即在当违之列。凿凿能信，始可发令，措词又须言之极明，论之极畅，使人一目了然。今单提某句为务头，谓阴阳平仄，断宜加严，俊语可施于上。此言未尝不是，其如举一废百，当从者寡，当违者众，是我欲加严，而天下之法律反从此而宽矣。况又嘍嘍其词，吞多吐少，何所取义而称为务头，绝无一字之诠释。然则“葫芦提”三字，何以服天下？吾恐狐疑者读之，愈重其狐疑，明了者观之，顿丧其明了，非立言之善策也。予谓务头二字，既然不得其解，只当以不解解之。曲中有务头，犹棋中有眼，有此则活，无此则死。进不可战，退不可守者，无眼之棋，死棋也；看不动情，唱不发调者，无务头之曲，死曲也。一曲有一曲之务头，一句有一句之务头。字不聱牙，音不泛调，一曲中得此一句，即使全曲皆灵，一句中得此一二字，即使全句皆健者，务头也。由此推之，则不特曲有务头，诗词歌赋以及举子业，无一不有务头矣。人亦照谱按格，发舒性灵，求为一代之传书而已矣，岂得为谜语欺人者所惑，而阻塞词源，使不得顺流而下乎？

· 宾白第四

自来作传奇者，止重填词，视宾白为末着，常有“白雪阳

春”其调，而“巴人下里”其言者，予窃怪之。原其所以轻此之故，殆有说焉。元以填词擅长，名人所作，北曲多而南曲少。北曲之介白者，每折不过数言，即抹去宾白而止阅填词，亦皆一气呵成，无有断续，似并此数言亦可略而不备者。由是观之，则初时止有填词，其介白之文，未必不系后来添设。在元人，则以当时所重不在此，是以轻之。后来之人，又谓元人尚在不重，我辈工此何为？遂不觉日轻一日，而竟置此道于不讲也。予则不然。尝谓曲之有白，就文字论之，则犹经文之于传注；就物理论之，则如栋梁之于榱桷；就人身论之，则如肢体之于血脉，非但不可相轻，且觉稍有不称，即因此贱彼，竟作无用观者。故知宾白一道，当与曲文等视，有最得意之曲文，即当有最得意之宾白，但使笔酣墨饱，其势自能相生。常有因得一句好白，而引起无限曲情，又有因填一首好词，而生出无穷话柄者。是文与文自相触发，我止乐观厥成，无所容其思议。此系作文恒情，不得幽渺其说，而作化境观也。

声务铿锵

宾白之学，首务铿锵。一句聱牙，俾听者耳中生棘；数言清亮，使观者倦处生神。世人但以音韵二字用之曲中，不知宾白之文，更宜调声协律。世人但知四六之句平间仄，仄间平，非可混施迭用，不知散体之文亦复如是。“平仄仄平平仄仄，仄平平仄仄平平”二语，乃千古作文之通诀，无一语一字可废声音者也。如上句末一字用平，则下句末一字定宜用仄，连用二平，则声带暗哑，不能耸听。下句末一字用仄，则接此一句之上句，其末一字定宜用平，连用二仄，则音类咆哮，不能悦耳。此言通篇之大较，非逐包逐字皆然也。能以作四六平仄之法，用于宾白之中，则字

字铿锵，人人乐听，有“金声掷地”之评矣。

声务铿锵之法，不出平仄、仄平二语是已。然有时连用数平，或连用数仄，明知声欠铿锵，而限于情事，欲改平为仄，改仄为平，而决无平声仄声之字可代者。此则千古词人未穷其秘，予以探骊觅珠之苦，入万丈深潭者，既久而后得之，以告同心。虽示无私，然未免可惜。字有四声，平上去入是也。平居其一，仄居其三，是上去入三声皆丽于仄。而不知上之为声，虽与去入无异，而实可介于平仄之间，以其别有一种声音，较之于平则略高，比之去入则又略低。古人造字审音，使居平仄之介，明明是一过文，由平至仄，从此始也。譬如四方声音，到处各别，吴有吴音，越有越语，相去不啻天渊，而一至接壤之处，则吴越这音相半，吴人听之觉其同，越人听之亦不觉其异。晋、楚、燕、秦以至黔、蜀，在在皆然，此即声音之过文，犹上声介于平去入之间也。作宾白者，欲求声韵铿锵，而限于情事，求一可代之字而不得者，即当用此法以济其穷。如两句三句皆平，或两句三句皆仄，求一可代之字而不得，即用一上声之字介乎其间，以之代平可，以之代去入亦可。如两句三句皆平，间一上声之字，则其声是仄，不必言矣。即两句三句皆去声入声，而间一上声之字，则其字明明是仄而却似平，令人听之不知其为连用数仄者。此理可解而不可解，此法可传而实不当传，一传之后，则遍地金声，求一瓦缶之鸣而不可得矣。

语求肖似

文字之最豪宕，最风雅，作之最健人脾胃者，莫过填词一种。若无此种，几于闷杀才人，困死豪杰。予生忧患之中，处落魄之境，自幼至长，自长至老，总无一刻舒眉，惟于制曲填词之顷，非

但郁藉以舒，愠为之解，且尝僭作两间最乐之人，觉富贵荣华，其受用不过如此，未有真境之为所欲为，能出幻境纵横之上者。我欲做官，则顷刻之间便臻荣贵；我欲致仕，则转盼之际又入山林；我欲作人间才子，即为杜甫、李白之后身；我欲娶绝代佳人，即作王嫱、西施之元配；我欲成仙作佛，则西天蓬岛即在砚池笔架之前；我欲尽孝输忠，则君治亲年，可跻尧、舜、彭篯之上。非若他种文字，欲作寓言，必须远引曲譬，蕴藉包含，十分牢骚，还须留住六七分，八斗才学，止可使出二三升，稍欠和平，略施纵送，即谓失风人之旨，犯佻达之嫌，求为家弦户诵者难矣。填词一家，则惟恐其蓄而不言，言之不尽。是则是矣，须知畅所欲言亦非易事。言者，心之声也，欲代此一人立言，先宜代此一人立心，若非梦往神游，何谓设身处地？无论立心端正者，我当设身处地，代生端正之想；即遇立心邪辟者，我亦当舍经从权，暂为邪辟之思。务使心曲隐微，随口唾出，说一人，肖一人，勿使雷同，弗使浮泛，若《水浒传》之叙事，吴道子之写生，斯称此道中之绝技。果能若此，即欲不传，其可得乎？

词别繁减

传奇中宾白之繁，实自予始。海内知我者与罪我者半。知我者曰：从来宾白作说话观，随口出之即是，笠翁宾白当文章做，字字俱费推敲。从来宾白只要纸上分明，不顾口中顺逆，常有观刻本极其透彻，奏之场上便觉糊涂者，岂一人之耳目，有聪明聋聩之分乎？因作者只顾挥毫，并未设身处地，既以口代优人，复以耳当听者，心口相维，询其好说不好说，中听不中听，此其所以判然之故也。笠翁手则握笔，口却登场，全以身代梨园，复以神魂四绕，考其关目，试其声音，好则直书，否则搁笔，此其所以

观听咸宜也。罪我者曰：填词既曰“填词”，即当以词为主；宾白既名“宾白”，明言白乃其宾，奈何反主作客，而犯树大于根之弊乎？笠翁曰：始作俑者，实实为予，责之诚是也。但其敢于若是，与其不得不若是者，则均有说焉。请先白其不得不若是者。前人宾白之少，非有一定当少之成格。盖彼只以填词自任，留余地以待优人，谓引商刻羽我为政，饰听美观彼为政，我以约略数言，示之以意，彼自能增益成文。如今世之演《琵琶》、《西厢》、《荆》、《刘》、《拜》、《杀》等曲，曲则仍之，其间宾白、科诨等事，有几处合于原本，以寥寥数言塞责者乎？且作新与演旧有别。《琵琶》、《西厢》、《荆》、《刘》、《拜》、《杀》等曲，家弦户诵已久，童叟男妇皆能备悉情由，即使一句宾白不道，止唱曲文，观者亦能默会，是其宾白繁减可不问也。至于新演一剧，其间情事，观者茫然；词曲一道，止能传声，不能传情，欲观者悉其颠末，洞其幽微，单靠宾白一着。予非不图省力，亦留余地以待优人。但优人之中，智愚不等，能保其增益成文者悉如作者之意，毫无赘疣蛇足于其间乎？与其留余地以待增，不若留余地以待减，减之不当，犹存作者深心之半，犹病不服药之得中医也。此予不得不若是之故也。至其敢于若是者，则谓千古文章，总无定格，有创始之人，即有守成不变之人，有守成不变之人，即有大仍其意，小变其形，自成一家而不顾天下非笑之人。古来文字之正变为奇，奇翻为正者，不知凡几，吾不具论，止以多寡增益之数论之。《左传》、《国语》，纪事之书也，每一事不过数行，每一语不过数字，初时未病其少；迨班固之作《汉书》，司马迁之为《史记》，亦纪事之书也，遂益数行为数十百行，数字为数十百字，岂有病其过多，而废《史记》、《汉书》于不读者乎？此言少之可变为多也。诗之为道，当日但有古风，古风之体，多则数十百句，少亦十数句，初时亦未病其多；迨近体一出，则约数十百句为八句，绝句一出，又敛八句为四句，岂有病其渐少，而选诗之家止载古风，删近体绝句于不录者乎？此

言多之可变为少也。总之，文字短长，视其人之笔性。笔性遒劲者，不能强之使长；笔性纵肆者，不能缩之使短。文患不能长，又患其可以不长而必欲使之长。如其能长而又使人不可删逸，则虽为宾白中之古风史汉，亦何患哉？予则乌能当此，但为糠粃之导，以俟后来居上之人。

予之宾白，虽有微长，然初作之时，竿头未进，常有当俭不俭，因留余幅以俟剪裁，遂不觉流为散漫者。自今观之，皆吴下阿蒙手笔也。如其天假以年，得于所传十种之外，别有新词，则能保为犬夜鸡晨，鸣乎其所当鸣，默乎其所不得不默者矣。

字分南北

北曲有北音之字，南曲有南音之字，如南音自呼为“我”，呼人为“你”，北音呼人为“您”，自呼为“俺”为“咱”之类是也。世人但知曲内宜分，乌知白随曲转，不应两截。此一折之曲为南，则此一折之白悉用南音之字；此一折之曲为北，则此一折之白悉用北音之字。时人传奇多有混用者，即能间施于净丑，不知加严于生旦；止能分用于男子，不知区别于妇人。以北字近于粗豪，易入刚劲之口，南音悉多娇媚，便施窈窕之人。殊不知声音驳杂，俗语呼为“两头蛮”，说话且然，况登场演剧乎？此论为全套南曲、全套北曲者言之，南北相间，如《新水令》、《步步娇》之类，则在所不拘。

文贵洁净

白不厌多之说，前论极详，而此复言洁净。洁净者，简省之

别名也。洁则忌多，减始能净，二说不无相悖乎？曰：不然。多而不觉其多者，多即是洁；少而尚病其多者，少亦近芜。予所谓多，谓不可删逸之多，非唱沙作米、强凫变鹤之多也。作宾白者，意则期多，字惟求少，爱虽难割，嗜亦宜专。每作一段，即自删一段，万不可删者始存，稍有可削者即去。此言逐出初填之际，全稿未脱之先，所谓慎之于始也。然我辈作文，常有人以为非，而自认作是者；又有初信为是，而后悔其非者。文章出自己手，无一非佳，诗赋论其初成，无语不妙，迨易日经时之后，取而观之，则妍媸好丑之间，非特人能辨别，我亦自解雌黄矣。此论虽说填词，实各种诗文之通病，古今才士之恒情也。凡作传奇，当于开笔之初，以至脱稿之后，隔日一删，逾月一改，始能淘沙得金，无瑕瑜互见之失矣。此说予能言之不能行之者，则人与我中分其咎。予终岁饥驱，杜门日少，每有所作，率多草草成篇，章名急就，非不欲删，非不欲改，无可删可改之时也。每成一剧，才落毫端，即为坊人攫去，下半犹未脱稿，上半业已灾梨，非止灾梨，彼伶工之捷足者，又复灾其肺肠，灾其唇舌，遂使一成不改，终为痼疾难医。予非不务洁净，天实使之，谓之何哉！

意取尖新

纤巧二字，行文之大忌也，处处皆然，而独不戒于传奇一种。传奇之为道也，愈纤愈密，愈巧愈精。词人忌在老实，老实二字，即纤巧之仇家敌国也。然纤巧二字，为文人鄙贱已久，言之似不中听，易以尖新二字，则似变瑕成瑜。其实尖新即是纤巧，犹之暮四朝三，未尝稍异。同一话也，以尖新出之，则令人眉扬目展，有如闻所未闻；以老实出之，则令人意懒心灰，有如听所不必听。白有尖新之文，文有尖新之句，句有尖新之字，则列之案头，不

观则已，观则欲罢不能；奏之场上，不听则已，听则求归不得。尤物足以移人，尖新二字，即文中之尤物也。

少用方言

填词中方言之多，莫过于《西厢》一种，其余今词古曲，在有之。非止词曲，即《四书》之中，《孟子》一书亦有方言，天下不知而予独知之，予读《孟子》五十余年不知，而今知之，请先毕其说。儿时读“自反而缩，虽褐宽博，吾不憊焉”，观朱注云：“褐，贱者之服；宽博，宽大之衣。”心甚惑之。因生南方，南方衣褐者寡，间有服者，强半富贵之家，名虽褐而实则絨也。因讯蒙师，谓褐乃贵人之衣，胡云贱者之服？既云贱矣，则当从约，短一尺，省一尺购办之资，少一寸，免一寸缝纫之力，胡不窄小其制而反宽大其形，是何以故？师默然不答，再询，则顾左右而言他。具此狐疑，数十年未解。及近游秦塞，见其土著之民，人人衣褐，无论丝罗罕覩，即见一二衣布者，亦类空谷足音。因地寒不毛，止以牧养自活，织牛羊之毛以为衣，又皆粗而不密，其形似毡，诚哉其为贱者之服，非若南方贵人之衣也！又见其宽则倍身，长复扫地。即而讯之，则曰：“此衣之外，不复有他，衫裳襦裤，总以一物代之，日则披之当服，夜则拥以为衾，非宽不能周遭其身，非长不能尽覆其足。《鲁论》‘必有寝衣，长一身有半’，即是类也。”予始幡然大悟曰：“太史公著书，必游名山大川，其斯之谓欤！”盖古来圣贤多生西北，所见皆然，故方言随口而出。朱文公南人也，彼乌知之？故但释字义，不求甚解，使千古疑团，至今未破，非予远游绝塞，亲覩其人，乌知斯言之不谬哉？由是观之，《四书》之文犹不可尽法，况《西厢》之为词曲乎？凡作传奇，不宜频用方言，令人不解。近日填词家，见花面登场，悉作

姑苏口吻，遂以此为成律，每作净丑之白，即用方言，不知此等声音，止能通于吴越，过此以往，则听者茫然。传奇天下之书，岂仅为吴越而设？至于他处方言，虽云入曲者少，亦视填词者所生之地。如汤若士生于江右，即当规避江右之方言，梨花主人吴石渠生于阳羨，即当规避阳羨之方言。盖生此一方，未免为一方所囿。有明是方言，而我不知其为方言，及入他境，对人言之而人不解，始知其为方言者。诸如此类，易地皆然。欲作传奇，不可不存桑弧蓬矢之志。

时防漏孔

一部传奇之宾白，自始至终，奚啻千言万语。多言多失，保无前是后非，有呼不应，自相矛盾之病乎？如《玉簪记》之陈妙常，道姑也，非尼僧也，其白云“姑娘在禅堂打坐”，其曲云“从今孽债染缁衣”，“禅堂”、“缁衣”皆尼僧字面，而用入道家，有是理乎？诸如此类者，不能枚举。总之，文字短少者易为检点，长大者难于照顾。吾于古今文字中，取其最长最大，而寻不出纤毫渗漏者，惟《水浒传》一书。设以他人为此，几同筌箒贮水，珠箔遮风，出者多而进者少，岂止三十六个漏孔而已哉！

科诨第五

插科打诨，填词之末技也，然欲雅俗同欢，智愚共赏，则当全在此处留神。文字佳，情节佳，而科诨不佳，非特俗人怕看，即雅人韵士，亦有瞌睡之时。作传奇者，全要善驱睡魔，睡魔一至，则后乎此者虽有《钧天》之乐，《霓裳羽衣》之舞，皆付之不见不

闻，如对泥人作揖，土佛谈经矣。予尝以此告优人，谓戏文好处，全在下半本。只消三两个瞌睡，便隔断一部神情，瞌睡醒时，上文下文已下接续，即使抖起精神再看，只好断章取义，作零出观。若是，则科诨非科诨，乃看戏之人参汤也。养精益神，使人不倦，全在于此，可作小道观乎？

戒 淫 褻

戏文中花面插科，动及淫邪之事，有房中道不出口之话，公然道之戏场者。无论雅人塞耳，正士低头，惟恐恶声之污听，且防男女同观，共闻褻语，未必不开窥窃之门，郑声宜放，正为此也。不知科诨之设，止为发笑，人间戏语尽多，何必专谈欲事？即谈欲事，亦有“善戏谑兮，不为虐兮”之法，何必以口代笔，画出一幅春意图，始为善谈欲事者哉？人问：善谈欲事，当用何法，请言一二以概之。予曰：如说口头俗语，人尽知之者，则说半句，留半句，或说一句，留一句，令人自思。则欲事不挂齿颊，而与说出相同，此一法也。如讲最褻之话虑人触耳者，则借他事喻之，言虽在此，意实在彼，人尽了然，则欲事未入耳中，实与听见无异，此又一法也。得此二法，则无处不可类推矣。

忌 俗 恶

科诨之妙，在于近俗，而所忌者，又在于太俗。不俗则类腐儒之谈，太俗即非文人之笔。吾于近剧中，取其俗而不俗者，《还魂》而外，则有《梨花五种》，皆文人最妙之笔也。《梨花五种》之长，不仅在此，才锋笔藻，可继《还魂》，其稍逊一筹者，则在气

与力之间耳。《还魂》气长，《粲花》稍促；《还魂》力足，《粲花》略亏。虽然，汤若士之《四梦》，求其气长力足者，惟《还魂》一种，其余三剧则与《粲花》比肩。使粲花主人及今犹在，奋其全力，另制一种新词，则词坛赤帜，岂仅为若士一人所攫哉？所恨予生也晚，不及与二老同时。他日追及泉台，定有一番倾倒，必不作妒而欲杀之状，向阎罗天子掉舌，排挤后来人也。

重 关 系

科诨二字，不止为花面而设，通场脚色皆不可少。生旦有生旦之科诨，外末有外末之科诨，净丑之科诨则其分内事也。然为净丑之科诨易，为生旦外末之科诨难。雅中带俗，又于俗中见雅；活处寓板，即于板处证活。此等虽难，犹是词客优为之事。所难者，要有关系。关系维何？曰：于嘻笑诙谐之处，包含绝大文章；使忠孝节义之心，得此愈显。如老莱子之舞斑衣，简雍之说淫具，东方朔之笑彭祖面长，此皆古人中之善于插科打诨者也。作传奇者，苟能取法于此，则科诨非科诨，乃引人入道之方便法门耳。

贵 自 然

科诨虽不可少，然非有意为之。如必欲于某折之中，插入某科诨一段，或预设某科诨一段，插入某折之中，则是觅妓追欢，寻人卖笑，其为笑也不真，其为乐也亦甚苦矣。妙在水到渠成，天机自露。“我本无心说笑话，谁知笑话逼人来”，斯为科诨之妙境耳。如前所云简雍说淫具，东方朔笑彭祖。即取二事论之。蜀先主时，天旱禁酒，有吏向一人家索出酿酒之具，论者欲置之法。雍

与先主游，见男女各行道上，雍谓先主曰：“彼欲行淫，请缚之。”先主曰：“何以知其行淫？”雍曰：“各有其具，与欲酿未酿者同，是以知之。”先主大笑，而释蓄酿具者。汉武帝时，有善相者，谓人中长一寸，寿当百岁。东方朔大笑，有司奏以不敬。帝责之，朔曰：“臣非笑陛下，乃笑彭祖耳。人中一寸则百岁，彭祖岁八百，其人中不几八寸乎？人中八寸，则面几长一丈矣，是以笑之。”此二事，可谓绝妙之诙谐，戏场有此，岂非绝妙之科诨？然当时必亲见男女同行，因而说及淫具；必亲听人中一寸寿当百岁之说，始及彭祖面长，是以可笑，是以能悟人主。如其未见未闻，突然引此为例，则怒之不暇，笑从何来？笑既不得，悟从何有？此即贵自然、不贵勉强之明证也。吾看演《南西厢》，见法聪口中所说科诨，迂奇诞妄，不知何处生来，真令人欲逃欲呕，而观者听者绝无厌倦之色，岂文章一道，俗则争取，雅则共弃乎？

格局第六

传奇格局，有一定而不可移者，有可仍可改，听人自为政者。开场用末，冲场用生；开场数语，包括通篇，冲场一出，蕴酿全部，此一定不可移者。开手宜静不宜喧，终场忌冷不忌热，生旦合为夫妇，外与老旦非充父母即作翁姑，此常格也。然遇情事变更，势难仍旧，不得不通融兑换而用之，诸如此类，皆其可仍可改，听人为政者也。近日传奇，一味趋新，无论可变者变，即断断当仍者，亦加改窜，以示新奇。予谓文字之新奇，在中藏，不在外貌，在精液，不在渣滓，犹之诗赋古文以及时艺，其中人才辈出，一人胜似一人，一作奇于一作，然止别其词华，未闻异其资格。有以古风之局而为近律者乎？有以时艺之体而作古文者乎？绳墨不改，斧斤自若，而工师之奇巧出焉。行文之道，亦若是焉。

家 门

开场数语，谓之“家门”。虽云为字不多，然非结构已完、胸有成竹者，不能措手。即使规模已定，犹虑做到其间，势有阻挠，不得顺流而下，未免小有更张，是以此折最难下笔。如机锋锐利，一往而前，所谓信手拈来，头头是道，则从此折做起，不则姑缺首篇，以俟终场补入。犹塑佛者不即开光，画龙者点睛有待，非故迟之，欲俟全像告成，其身向左则目宜左视，其身向右则目宜右观，俯仰低徊，皆从身转，非可预为计也。此是词家讨便宜法，开手即以告人，使后来作者未经捉笔，先省一番无益之劳，知笠翁为此道功臣，凡其所言，皆真切可行之事，非大言欺世者比也。

未说家门，先有一上场小曲，如《西江月》、《蝶恋花》之类，总无成格，听人拈取。此曲向来不切本题，止是劝人对酒忘忧、逢场作戏诸套语。予谓词曲中开场一折，即古文之冒头，时文之破题，务使开门见山，不当借帽覆顶。即将本传中立言大意，包括成文，与后所说家门一词相为表里。前是暗说，后是明说，暗说似破题，明说似承题，如此立格，始为有根有据之文。场中阅卷，看至第二三行而始觉其好者，即是可取可弃之文；开卷之初，能将试官眼睛一把拿住，不放转移，始为必售之技。吾愿才人举笔，尽作是观，不止填词而已也。

元词开场，止有冒头数语，谓之“正名”，又曰“楔子”，多则四句，少则二句，似为简捷。然不登场则已，既用副末上场，脚才点地，遂尔抽身，亦觉张皇失次。增出家门一段，甚为有理。然家门之前，另有一词，今之梨园皆略去前词，只就家门说起，止图省力，埋没作者一段深心。大凡说话作文，同是一理，入手之初，不宜太远，亦正不宜太近。文章所忌者，开口骂题，便说几

句闲文，才归正传，亦未尝不可，胡遽惜字如金，而作此鹵莽灭裂之状也？作者万勿因其不读而作省文。至于末后四句，非止全该，又宜别俗。元人楔子，太近老实，不足法也。

冲 场

开场第二折，谓之“冲场”。冲场者，人未上而我先上也，必用一悠长引子。引子唱完，继以诗词及四六排语，谓之“定场白”，言其未说之先，人不知所演何剧，耳目摇摇，得此数语，方知下落，始未定而今方定也。此折之一引一词，较之前折家门一曲，犹难措手。务以寥寥数言，道尽本人一腔心事，又且蕴酿全部精神，犹家门之括尽无遗也。同属包括之词，而分难易于其间者，以家门可以明说，而冲场引子及定场诗词全用暗射，无一字可以明言故也。非特一本戏文之节目全于此处埋根，而作此一本戏文之好歹，亦即于此时定价。何也？开手笔机飞舞，墨势淋漓，有自由自得之妙，则把握在手，破竹之势已成，不忧此后不成完璧，如此时此际文情艰涩，勉强支吾，则朝气昏昏，到晚终无晴色，不如不作之为愈也。然则开手锐利者宁有几人？不几阻抑后辈，而塞填词之路乎？曰：不然。有养机使动之法在：如入手艰涩，姑置勿填，以避烦苦之势；自寻乐境，养动生机，俟襟怀略展之后，仍复拈毫，有兴即填，否则又置，如是者数四，未有不忽撞天机者。若因好句不来，遂以俚词塞责，则走入荒芜一路，求辟草昧而致文明，不可得矣。

出 脚 色

本传中有名脚色，不宜出之太迟。如生为一家，旦为一家，生之父母随生而出，旦之父母随旦而出，以其为一部之主，余皆客也。虽不定在一出二出，然不得出四五折之后。太迟则先有他脚色上场，观者反认为主，及见后来人，势必反认为客矣。即净丑脚色之关乎全部者，亦不宜出之太迟。善观场者，止于前数出所见，记其人之姓名；十出以后，皆是枝外生枝，节中长节，如遇行路之人，非止不问姓字，并形体面目皆可不必认矣。

小 收 煞

上半部之末出，暂摄情形，略收锣鼓，名为“小收煞”。宜紧忌宽，宜热忌冷，宜作郑五歇后，令人揣摩下文，不知此事如何结果。如做把戏者，暗藏一物于盆盎衣袖之中，做定而令人射覆，此正做定之际，众人射覆之时也。戏法无真假，戏文无工拙，只是使人想不到、猜不着，便是好戏法、好戏文。猜破而后出之，则观者索然，作者赧然，不如藏拙之为妙矣。

大 收 煞

全本收场，名为“大收煞”。此折之难，在无包括之痕，而有团圆之趣。如一部之内，要紧脚色共有五人，其先东西南北各自分开，至此必须会合。此理谁不知之？但其会合之故，须要自然

而然，水到渠成，非由车庠。最忌无因而至，突如其来，与勉强生情，拉成一处，令观者识其有心如此，与恕其无可奈何者，皆非此道中绝技，因有包括之痕也。骨肉团聚，不过欢笑一场，以此收锣罢鼓，有何趣味？水穷山尽之处，偏宜突起波澜，或先惊而后喜，或始疑而终信，或喜极信极而反致惊疑，务使一折之中，七情俱备，始为到底不懈之笔，愈远愈大之才，所谓有团圆之趣者也。予训儿辈尝云：“场中作文，有倒骗主司入彀之法：开卷之初，当以奇句夺目，使之一见而惊，不敢弃去，此一法也；终篇之际，当以媚语摄魂，使之执卷留连，若难遽别，此一法也。”收场一出，即勾魂摄魄之具，使人看过数日，而犹觉声音在耳、情形在目者，全亏此出撒娇，作“临去秋波那一转”也。

填词余论

读金圣叹所评《西厢记》，能令千古才人心死。夫人作文传世，欲天下后代知之也，且欲天下后代称许而赞叹之也。殆其文成矣，其书传矣，天下后代既群然知之，复群然称许而赞叹之矣，作者之苦心，不几大慰乎哉？予曰：未甚慰也。誉人而不得其实，其去毁也几希。但云千古传奇当推《西厢》第一，而不明言其所以为第一之故，是西施之美，不特有目者赞之，盲人亦能赞之矣。自有《西厢》以迄于今，四百余载，推《西厢》为填词第一者，不知几千万人，而能历指其所以为第一之故者，独出一金圣叹。是作《西厢》者之心，四百余年未死，而今死矣。不特作《西厢》者心死，凡千古上下操觚立言者之心，无不死矣。人患不为王实甫耳，焉知数百年后，不复有金圣叹其人哉！

圣叹之评《西厢》，可谓晰毛辨发，穷幽极微，无复有遗议于其间矣。然以予论之，圣叹所评，乃文人把玩之《西厢》，非优人

搬弄之《西厢》也。文字之三昧，圣叹已得之；优人搬弄之三昧，圣叹犹有待焉。如其至今不死，自撰新词几部，由浅及深，自生而熟，则又当自火其书，而别出一番诠释。甚矣，此道之难言也。

圣叹之评《西厢》，其长在密，其短在拘，拘即密之已甚者也。无一句一字不逆溯其源，而求命意之所在，是则密矣，然亦知作者于此，有出于有心，有不必要出于有心者乎？心之所至，笔亦至焉，是人之所能为也；若夫笔之所至，心亦至焉，则人不能尽主之矣。且有心不欲然，而笔使之然，若有鬼物主持其间者，此等文字，尚可谓之有意乎哉？文章一道，实实通神，非欺人语。千古奇文，非人为之，神为之、鬼为之也，人则鬼神所附者耳。

演 习 部

选 剧 第 一

填词之设，专为登场；登场之道，盖亦难言之矣。词曲佳而搬演不得其人，歌童好而教率不得其法，皆是暴殄天物，此等罪过，与裂缯毁璧等也。方今贵戚通侯，恶谈杂技，单重声音，可谓雅人深致，崇尚得宜者矣。所可惜者：演剧之人美，而所演之剧难称尽美；崇雅之念真，而所崇之雅未必果真。尤可怪者：最有识见之客，亦作矮人观场，人言此本最佳，而辄随声附和，见单即点，不问情理之有无，以致牛鬼蛇神塞满氍毹之上。极长词赋之人，偏与文章为难，明知此剧最好，但恐偶违时好，呼名即避，不顾才士之屈伸，遂使锦篇绣帙，沉埋瓿瓮之间。汤若士之《牡丹亭》、《邯郸梦》得以盛传于世，吴石渠之《绿牡丹》、《画中人》得以偶登于场者，皆才人侥幸之事，非文至必传之常理也。若据时优本念，则愿秦皇复出，尽火文人已刻之书，止存优伶所撰诸抄本，以备家弦户诵而后已。伤哉，文字声音之厄，遂至此乎！吾谓《春秋》之法，责备贤者，当今瓦缶雷鸣，金石绝响，非歌者投胎之误，优师指路之迷，皆顾曲周郎之过也。使要津之上，得一二主持风雅之人，凡见此等无情之剧，或弃而不点，或演不终篇而斥之使罢，上有憎者，下必有甚焉者矣。观者求精，则演者不敢浪习，黄绢色丝之曲，外孙齏臼之词，不求而自至矣。吾论

演习之工而首重选剧者，诚恐剧本不佳，则主人之心血，歌者之精神，皆施于无用之地。使观者口虽赞叹，心实咨嗟，何如择术务精，使人心口皆羨之为得也。

别 古 今

选剧授歌童，当自古本始。古本既熟，然后间以新词，切勿先今而后古。何也？优师教曲，每加工于旧，而草草于新。以旧本人人皆习，稍有谬误，即形出短长；新本偶尔一见，即有破绽，观者听者未必尽晓，其拙尽有可藏。且古本相传至今，历过几许名师，传有衣钵，未当而必归于当，已精而益求其精，犹时文中“大学之道”、“学而时习之”诸篇，名作如林，非敢草草动笔者也。新剧则如巧搭新题，偶有微长，则动主司之目矣。故开手学戏，必宗古本。而古本又必从《琵琶》、《荆钗》、《幽闺》、《寻亲》等曲唱起，盖腔板之正，未有正于此者。此曲善唱，则以后所唱之曲，腔板皆不谬矣。旧曲既熟，必须间以新词。切勿听拘士腐儒之言，谓新剧不如旧剧，一概弃而不习。盖演古戏，如唱清曲，只可悦知音数人之耳，不能娱满座宾朋之目。听古乐而思卧，听新乐而忘倦。古乐不必《箫》、《韶》、《琵琶》、《幽闺》等曲，即今之古乐也。但选旧剧易，选新剧难。教歌习舞之家，主人必多冗事，且恐未必知音，势必委诸门客，询之优师。门客岂尽周郎，大半以优师之耳目为耳目。而优师之中，淹通文墨者少，每见才人所作，辄思避之，以凿枘不相入也。故延优师者，必择文理稍通之人，使阅新词，方能定其美恶。又必藉文人墨客参酌其间，两议金同，方可授之使习。此为主人多冗，不谙音乐者而言。若系风雅主盟，词坛领袖，则独断有余，何必知而故询。噫，欲使梨园风气丕变维新，必得一二缙绅长者主持公道，俾词之佳者必传，剧之陋者必

黜，则千古才人心死，现在名流，有不以沉香刻木而祀之者乎？

剂 冷 热

今人之所尚，时优之所习，皆在热闹二字；冷静之词，文雅之曲，皆其深恶而痛绝者也。然戏文太冷，词曲太雅，原足令人生倦，此作者自取厌弃，非人有心置之也。然尽有外貌似冷而中藏极热，文章极雅而情事近俗者，何难稍加润色，播入管弦？乃不问短长，一概以冷落弃之，则难服才人之心矣。予谓传奇无冷热，只怕不合人情。如其离合悲欢，皆为人情所必至，能使人哭，能使人笑，能使人怒发冲冠，能使人惊魂欲绝，即使鼓板不动，场上寂然，而观者叫绝之声，反能震天动地。是以人口代鼓乐，赞叹为战争，较之满场杀伐，钲鼓雷鸣而人心不动，反欲掩耳避喧者为何如？岂非冷中之热，胜于热中之冷；俗中之雅，逊于雅中之俗乎哉？

变 调 第 二

变调者，变古调为新调也。此事甚难，非其人不行，存此说以俟作者。才人所撰诗赋古文，与佳人所制锦绣花样，无不随时更变。变则新，不变则腐；变则活，不变则板。至于传奇一道，尤其是新人耳目之事，与玩花赏月同一致也。使今日看此花，明日复看此花，昨夜对此月，今夜复对此月，则不特我厌其旧，而花与月亦自愧其不新矣。故桃陈则李代，月满即哉生。花月无知，亦能自变其调，矧词曲出生人之口，独不能稍变其音，而百岁登场，乃为三万六千日雷同合掌之事乎？吾每观旧剧，一则以喜，一则

以惧。喜则喜其音节不乖，耳中免生芒刺；惧则惧其情事太熟，眼角如悬赘疣。学书学画者，贵在仿佛大都，而细微曲折之间，正不妨增减出入，若止为依样葫芦，则是以纸印纸，虽云一线不差，少天然生动之趣矣。因创二法，以告世之执郢斤者。

缩长为短

观场之事，宜晦不宜明。其说有二：优孟衣冠，原非实事，妙在隐隐跃跃之间。若于日间搬弄，则太觉分明，演者难施幻巧，十分音容，止作得五分观听，以耳目声音散而不聚故也。且人无论富贵贫贱，日间尽有当行之事，阅之未免妨工。抵暮登场，则主客心安，无妨时失事之虑，古人秉烛夜游，正为此也。然戏之好者必长，又不宜草草完事，势必阐扬志趣，摹拟神情，非达旦不能告阕。然求其可以达旦之人，十中不得一二，非迫于来朝之有事，即限于此际之欲眠，往往半部即行，使佳话截然而止。予尝谓好戏若逢贵客，必受腰斩之刑。虽属谑言，然实事也。与其长而不终，无宁短而有尾，故作传奇付优人，必先示以可长可短之法：取其情节可省之数折，另作暗号记之，遇清闲无事之人，则增入全演，否则拔而去之。此法是人皆知，在梨园亦乐于为此。但不知减省之中，又有增益之法，使所省数折，虽去若存，而无断文截角之患者，则在秉笔之人略加之意而已。法于所删之下折，另增数语，点出中间一段情节，如云昨日某人来说某话，我如何答应之类是也；或于所删之前一折，预为吸起，如云我明日当差某人去干某事之类是也。如此，则数语可当一折，观者虽未及看，实与看过无异，此一法也。予又谓多冗之客，并此最约者亦难终场，是删与不删等耳。尝见贵介命题，止索杂单，不用全本，皆为可行即行，不受戏文牵制计也。予谓全本太长，零出太短，酌乎二

者之间，当仿《元人百种》之意，而稍稍扩充之，另编十折一本，或十二折一本之新剧，以备应付忙人之用。或即将古书旧戏，用长房妙手，缩而成之。但能沙汰得宜，一可当百，则寸金丈铁，贵贱攸分，识者重其简贵，未必不弃长取短，另开一种风气，亦未可知也。此等传奇，可以一席两本，如佳客并坐，势不低昂，皆当在命题之列者，则一后一先，皆可为政，是一举两得之法也。有暇即当属草，请以下里巴人，为白雪阳春之倡。

变旧成新

演新剧如看时文，妙在闻所未闻，见所未见；演旧剧如看古董，妙在身生后世，眼对前朝。然而古董之可爱者，以其体质愈陈愈古，色相愈变愈奇。如铜器玉器之在当年，不过一刮磨光莹之物耳，迨其历年既久，刮磨者浑全无迹，光莹者斑驳成文，是以人人相宝，非宝其本质如常，宝其能新而善变也。使其不异当年，犹然是一刮磨光莹之物，则与今时旋造者无别，何事什佰其价而购之哉？旧剧之可珍，亦若是也。今之梨园，购得一新本，则因其新而愈新之，饰怪妆奇，不遗余力；演到旧剧，则千人一辙，万人一辙，不求稍异。观者如听蒙童背书，但赏其熟，求一换耳换目之字而不得，则是古董便为古董，却未尝易色生斑，依然是一刮磨光莹之物，我何不取旋造者观之，犹觉耳目一新，何必定为村学究，听蒙童背书之为乐哉？然则生斑易色，其理甚难，当用何法以处此？曰：有道焉。仍其体质，变其丰姿，如同一美人，而稍更衣饰，便足令人改观，不俟变形易貌，而始知别一神情也。体质维何？曲文与大段关目是已。丰姿维何？科诨与细微说白是已。曲文与大段关目不可改者，古人既费一片心血，自合常留天地之间，我与何仇，而必欲使之埋没？且时人是古非今，改之徒

来讪笑，仍其大体，既慰作者之心，且杜时人之口。科诨与细微说白不可不变者，凡人作事，贵于见景生情，世道迁移，人心非旧，当日有当日之情态，今日有今日之情态，传奇妙在入情，即使作者至今未死，亦当与世迁移，自啖其舌，必不为胶柱鼓瑟之谈，以拂听者之耳。况古人脱稿之初，便觉其新，一经传播，演过数番，即觉听熟之言难于复听，即在当年，亦未必不自厌其繁，而思陈言之务去也。我能易以新词，透入世情三昧，虽观旧剧，如阅新篇，岂非作者功臣？使得为鸡皮三少之女，前鱼不泣之男，地下有灵，方颂德歌功之不暇，而忍以矫制责之哉？但须点铁成金，勿令画虎类狗。又须择其可增者增，当改者改，万勿故作知音，强为解事，令观者当场喷饭，而群罪作俑之人，则湖上笠翁不任咎也。此言润泽枯槁，变易陈腐之事。予尝痛改《南西厢》，如《游殿》、《问斋》、《逾墙》、《惊梦》等科诨，及《玉簪·偷词》、《幽闺·旅婚》诸宾白，付伶工搬演，以试旧新，业经词人谬赏，不以点窜为非矣。尚有拾遗补缺之法，未语同人，兹请并终其说。旧本传奇，每多缺略不全之事，刺谬难解之情。非前人故为破绽，留话柄以貽后人，若唐诗所谓“欲得周郎顾，时时误拂弦”，乃一时照管不到，致生漏孔，所谓“至人千虑，必有一失”。此等空隙，全靠后人泥补，不得听其缺陷，而使千古无全文也。女娲氏炼石补天，天尚可补，况其他乎？但恐不得五色石耳。姑举二事以概之。赵五娘于归两月，即别蔡邕，是一桃夭新妇。算至公姑已死，别墓寻夫之日，不及数年，是犹然一冶容诲淫之少妇也。身背琵琶，独行千里，即能自保无他，能免当时物议乎？张大公重诺轻财，资其困乏，仁人也，义士也。试问衣食名节，二者孰重？衣食不继则周之，名节所关则听之，义士仁人，曾若是乎？此等缺陷，就词人论之，几与天倾西北，地陷东南无异矣，可少补天塞地之人乎？若欲于本传之外，劈空添出一人，送赵五娘入京，与之随身作伴，妥则妥矣，犹觉伤筋动骨，太涉更张。不想本传内

现有一人，尽可用之而不用，竟似张大公止图卸肩，不顾赵五娘之去后者。其人为谁？着送钱米助丧之小二是也。《剪发》白云：“你先回去，我少顷就着小二送来。”则是大公非无仆从之人，何以吝而不使？予为略增数语，补此缺略，附刻于后，以政同心。此一事也。《明珠记》之《煎茶》，所用为传消递息之人者，塞鸿是也。塞鸿一男子，何以得事嫔妃？使宫禁之内，可用男子煎茶，又得密谈私语，则此事可为，何事不可为乎？此等破绽，妇人小儿皆能指出，而作者绝不经心，观者亦听其疏漏；然明眼人遇之，未尝不哑然一笑，而作无是公看者也。若欲于本家之外，凿空构一妇人，与无双小姐从不谋面，而送进驿内煎茶，使之先通姓名，后说情事，便则便矣，犹觉生枝长节，难免赘瘤。不知眼前现有一妇，理合使之而不使，非特王仙客至愚，亦觉彼妇太忍。彼妇为谁？无双自幼跟随之婢，仙客现在作妾之人，名为采苹是也。无论仙客觅人将意，计当出此，即就采苹论之，岂有主人一别数年，无由把臂，今在咫尺，不图一见，普天之下有若是之忍人乎？予亦为正此迷谬，止换宾白，不易填词，与《琵琶》改本并刊于后，以政同心。又一事也。其余改本尚多，以篇帙浩繁，不能尽附。总之，凡予所改者，皆出万不得已，眼看不过，耳听不过，故为铲削不平，以归至当，非勉强出头，与前人为难者比也。凡属高明，自能谅其心曲。

插科打诨之语，若欲变旧为新，其难易较此奚止百倍。无论剧剧可增，出出可改，即欲隔日一新，逾月一换，亦诚易事。可惜当世贵人，家蓄名优数辈，不得一诙谐弄笔之人，为种词林萱草，使之刻刻忘忧。若天假笠翁以年，授以黄金一斗，使得自买歌童，自编词曲，口授而身导之，则戏场关目，日日更新，毡上诙谐，时时变相。此种技艺，非特自能夸之，天下人亦共信之。然谋生不给，遑问其他？只好作贫女缝衣，为他人助娇，看他人出阁而已矣。

附：《琵琶记·寻夫》改本

〔胡捣练〕〔旦上〕辞别去，到荒丘，只愁出路煞生受。画取真容聊藉手，逢人将此勉哀求。

鬼神之道，虽则难明；感应之理，未尝不信。奴家昨日，在山上筑坟，偶然力乏，假寐片时。忽然梦见当山土地，带领着无数阴兵，前来助力。又亲口嘱咐，着奴家改换衣装，往京寻取夫婿。及至醒来，那坟台果然筑就。可见真有神明，不是空空一梦。只得依了梦中之言，改换做道姑打扮。又编下一套凄凉北调，到途路之间，逢人弹唱，抄化些资粮糊口，也是一条生计。只是一件：我自做媳妇以来，终日与公姑厮守，如今虽死，还有个坟莹可拜；一旦撇他而去，真个是举目凄然。喜得奴家略晓丹青，只得借纸笔传神，权当个丁兰刻木，背在肩上行走，只当还与二亲相傍一般。遇着小祥忌日，也好展开祭奠，不枉做媳妇的一点孝心。有理！有理！颜料纸张，俱已备下，只是凭空摹拟，恐怕不肖神情，且待我想象起来。

〔三仙桥〕一从他每死后，要相逢，不能勾。除非梦里，暂时略聚首。如今该下笔了。〔欲画又止介〕苦要描，描不就。暗想象，教我未描先泪流。〔画介〕描不出他苦心头，描不出他饥症候。〔又想介〕描不出他望孩儿的睁睁两眸。〔又画介〕只画得他发飏飏，和那衣衫敝垢。画完了，待我细看一看。〔看介〕呀！像倒极像，只是画得太苦了些，全没些欢容笑口。呀！公婆，公婆，非是媳妇故意如此。休休，若画做好容颜，须不是赵五娘的姑舅。

待我悬挂起来，烧些纸钱，奠些酒饭，然后带出门去便了。〔挂介〕噯！我那公公婆婆呵！媳妇只为往京寻取丈夫，撇你不下，故此图画仪容，以便随身供养。你须是有灵有感，时刻在暗里扶

持。待媳妇早见你的孩儿，痛哭一场，说完了心事，然后赶到阴司，与你二人做伴便了。啊呀，我那公婆呵！〔哭介〕

〔前腔〕非是奴寻夫远游，只怕我公婆绝后。奴见夫便回，此行安敢久。路途中，奴怎走？望公婆，相保佑！拜完了，如今收拾起身。论起理来，该先别坟茔，然后去别张大公才是。只为要托他照管坟茔，须是先别了他，然后同至坟前，把公婆的骸骨，交付与他便了。〔锁门行介〕只怕奴去后，冷清清，有谁来祭扫？纵使遇春秋，一陌纸钱怎有？休休，你生是受冻馁的公婆，死做个绝祭祀的姑舅！

来此已是，大公在家么？〔丑上〕收拾草鞋行远路，安排包裹送娇娘。呀！五娘子来了。老员外有请！〔末上〕衰柳寒蝉不可闻，金风败叶正纷纷；长安古道休回首，西出阳关无故人。呀！五娘子，我正要过来送你，你却来了。〔旦〕因有远行，特来拜别。大公请端坐，受奴家几拜。〔末〕来到就是了，不劳拜罢。〔旦拜，末同拜介〕〔旦〕高厚恩难报，临歧泪满巾。〔末〕从今无别事，拭目待归人。〔末起，旦不起介〕〔末〕五娘子请起。呀！五娘子，你为何跪在地下不肯起来？〔旦〕奴家有两件大事奉求，要大公亲口许下，方敢起来。〔末〕孝妇所求，一定是纲常伦理之事，老夫一力担当，快些请起！〔旦起介〕〔末〕叫小二看椅子过来，与五娘子坐了讲话。〔旦〕告坐了。〔末〕五娘子，你方才说的，是那两件事？〔旦〕第一件，是怕奴家去后，公婆的坟茔没人照管，求大公不时看顾。每逢令节，代烧一陌纸钱。〔末〕这是我分内之事，自然照管，何须你嘱咐。第二件呢？〔旦〕第二件，因奴家是个少年女子，远出寻夫，没人作伴，路上怕有嫌疑，求公公大发婆心，把小二借与奴家作伴，到京之日，即便遣人送还。这一件事，关系奴家的名节，断求慨允。〔末〕五娘子，这件事情，比照管坟茔还大，莫说待你拜求，方才肯许，不是个仗义之人；就是听你讲到此处，方才思念起来，把小二送你，也就不成个张广才了。我

昨日思想，不但你只身行走，路上嫌疑；就是到了京中，与你丈夫相见，他问你在途路之中如何宿歇，你把甚么言语答应他？万一男子汉的心肠多疑少信，将你埋葬公婆的大事且不提起，反把形迹二字与你讲论起来，如何了得！这也还是小事。他三载不归，未必不在京中别有所娶。我想那房家小，看见前妻走到，还要无中生有，别寻说话，离间你的夫妻，何况是远远寻夫，没人作伴？若把几句恶言加你，岂不是有口难分？还有一说：你丈夫临行之日，把家中事情拜托于我，我若容你独自寻夫，有碍他终身名节，日后把甚么颜面见他？就是死到九泉，也难与你公婆相会。这个主意，我先定下多时了，已曾分付小二，着他伴你同行，不劳分付，放心前去便了。〔旦起拜介〕这等多谢公公！奴家告别了。〔末〕且慢些，再请坐下。我且问你：你既要寻夫，那路上的盘费，已曾备下了么？〔旦〕并不曾有。〔末〕既然没有，如何去得？〔旦指背上琵琶介〕这就是奴家的盘费。不瞒公公说，已曾编下一套凄凉北调，谱入丝弦，一路弹唱而行，讨些钱米度日。〔丑〕这等说来，竟是叫化了。这样生意，我做不惯。不要总承，快寻别个去罢！〔末〕我自为主意，不消多嘴！五娘子，你前日剪发葬亲，往街坊货卖，倒不曾问得你卖了几贯钱财，可勾用么？〔旦〕并无人买，全亏大公周济。〔末〕却又来！头发可以作髻，尚且卖不出钱财，何况是空空弹唱？万一没人与钱，你还是去的好？转来的好？流落在他乡，不来不去的好？那些长途资斧，我也曾与你备下，不劳费心。也罢，你既费精神，编成一套词曲，不可不使老朽闻之。你就唱来，待我与你发个利市。〔旦〕这等待奴家献丑。若有不到之处，求大公改正一二。〔末〕你且唱来。〔旦理弦弹唱，末不住掩泪，丑不住哭介〕

〔北越调斗鹌鹑〕静理冰弦，凝神息喘，待诉衷肠，将眉略展。怕的是听者愁听，闻声去远。虽不比杞梁妻，善哭天，也去那哭倒长城的孟姜不远。

〔紫花儿序〕俺不是好云游，闲离闺闼，也不是背人伦，强抱琵琶，都则为远寻夫，苦历山川。说甚么金莲窄小，道路迢迢，鞋穿，便做到骨葬沟渠首向天，保得过面无惭腆。好追随，地下姑嫜，得全名，死也无冤。

〔天净沙〕当初始配良缘，备饕餮，尚有余钱。只为儿夫去远，遇荒罹变，为妻庸，祸及椿萱。

〔金蕉叶〕他望赈济，心穿眼穿；俺遭抢夺，粮悬命悬。若不是遇高邻，分粮助饘，怎能勾慰亲心，将灰复燃？

〔小桃红〕可怜他游丝一缕命空牵，要续愁无线。俺也曾自贻糟糠备亲膳，要救余年，又谁料攀辕卧辙翻成功？因来灶边，窥奴私咽，一声儿哭倒便归泉。

〔调笑令〕可怜，葬无钱！亏的是一位恩人，竟做了两次天。他助丧非强由情愿。实指望吉回凶转，因灾致祥无他变，又谁知，后运同前！

〔秃厮儿〕俺虽是厚面皮，无羞不腆，怎忍得累高邻，鬻产输田？只得把香云剪下自卖钱，到街坊，哭声喧，谁怜？

〔圣药王〕俺待要图卸肩，赴九泉，怎忍得亲骸朽露饱飞鸢？欲待把命苟延，较后先，算来无幸可徼天，哭倒在街前。

〔麻郎儿〕感义士施恩不倦，二天外，又复加天。则为这好仗义的高邻忒煞贤，越显得受恩的浅深无辨。

〔么篇〕徒跣，把罗裙自捻，裹黄泥，去筑坟圈。感山灵，神通昼显，又指去路，劝人赴远。

〔络丝娘〕因此上，顾不的鞋弓袜浅，讲不起抛头露面。手拨琵琶，原非自遣，要诉出衷肠一片。

〔东原乐〕暂把丧衣覆，乔将道服穿。为缺资财致使得身容变。休怪俺孝妇啼痕学杜鹃，只为多愁怨，渍染得缣麻如茜。

〔拙鲁速〕可怜俺日不停，夜不眠，饥不餐，冷不燃。当日呵，辨不出桃花人面，分不开藕瓣金莲；到如今藕丝花片，落在谁边？

自对菱花，错认椿萱，止为忧煎。才信道家宽出少年。

〔尾〕千愁万绪提难遍，只好绾缘中一线。听不出眼泪的休解囊，但有酸鼻的仁人，请将钞袋儿展。

〔末〕做也做得好，弹也弹得好，唱也唱得好，可称三绝。
〔出银介〕这一封银子，就当润喉润笔之资，你请收下。〔旦谢介〕〔末〕小二过来。他方才弹唱的时节，我便为他声音凄楚，情节可怜，故此掉泪。你知道些甚么，也号号咷咷，哭个不了？
〔丑〕不知甚么原故，听到其间，就不知不觉哭将起来，连我也不明白。〔末〕这等我且问你：方才送他的银子，万一途中不勾，依旧要叫化起来，你还是情愿不情愿？〔丑〕情愿！情愿！〔末〕为甚么以前不情愿，如今忽然情愿起来？〔丑想介〕正是，为甚么原故，忽然改变起来？连我也不明白。〔末〕好，这叫做：孝心所感，铁人流泪；高僧说法，顽石点头。五娘子，你一片孝心，就从今日效验起了，此去定然遂意。我且问你：你公婆的坟茔，曾去拜别了么？〔旦〕还不曾去。要屈大公同行，好对着公婆当面拜托。
〔末〕一发见得到！就请同行。叫小二，与五娘子背了琵琶。
〔丑〕自然。莫说琵琶，就是要带马桶，我也情愿挑着走了。
〔末〕五娘子，我还有几句药石之言，要分付你，和你一面行走，一面讲罢。〔旦〕既有法言，便求赐教。〔行介〕

〔斗黑螭〕〔末〕伊夫婿，多应是贵官显爵。伊家去，须当审个好恶。只怕你这般乔打扮，他怎知觉？一贵一贫，怕他将错就错。〔合〕孤坟寂寞，路途滋味恶。两处堪悲，万愁怎摸！

〔末〕已到坟前了。蔡大哥！蔡大嫂！你这个孝顺媳妇，待你二人，可谓生事以礼，死葬以礼，祭之以礼，无一事不全的了！如今远出寻夫，特来拜别，将坟墓交托于我。从今以后，我就当你媳妇，逢时化纸，遇节烧钱，你不消虑得。只是保佑他一路平安，早与丈夫相会。他一生行孝的事情，只有你夫妻两口，与我张广才三人知道。你夫妻死了，只剩得我一个在此，万一不能勾见他，

这孝妇一片苦心，谁人替他表白？趁我张广才未死，速速保佑他回来。待我见他一面，把你媳妇的好处，细细对他讲一遍，我张广才这个老头儿，就死也瞑目了。唉，我那老友呵！〔旦〕我那公婆呵！〔同放声大哭、丑亦哭介〕〔末〕五娘子！

〔忆多娇〕我承委托当领诺。这孤坟，我自看守，决不爽约。但愿你途中身安乐。〔合〕举目萧索，满眼盈盈泪落。

〔旦〕公婆，你媳妇如今去了！大公，奴家去了！〔末〕五娘子，你途间保重，早去早回！小二，你好生伏侍五娘子，不要叫他费心。〔丑〕晓得！

〔旦〕为寻夫婿别孤坟，〔末〕只怕儿夫不认真。

〔合〕流泪眼观流泪眼，断肠人送断肠人。

〔旦掩泪同丑先下〕〔末目送，作哽咽不能出声介〕噯，我、我、我明日死了，那有这等一个孝顺媳妇！可怜！可怜！〔掩泪下〕

附：《明珠记·煎茶》改本

第一折

〔卜算子〕〔生冠带上〕未遇费长房，已缩相思地。咫尺有佳音，可惜人难寄。

下官王仙客，叨授富平县尹。又为长乐驿缺了驿官，上司命我带管三月。近日朝廷差几员内官，带领三十名宫女，去备皇陵打扫之用，今日申牌时分，已到驿中。我想宫女三十名，焉知无双小姐不在其内？要托人探个消息，百计不能。喜得里面要取人伏侍，我把塞鸿扮做煎茶童子，送进去承值，万一遇见小姐，也

好传个信儿。塞鸿那里？〔丑上〕蓝桥今夜好风光，天上群仙降下方。只恐云英难见面，裴航空自捣玄霜。塞鸿伺候。〔生〕今日送你进去煎茶，专为打探无双小姐的消息，你须要用心体访。〔丑〕小人理会得。〔生〕随着我来。〔行介〕你若见了小姐呵。

〔玉交枝〕道我因他憔悴，虽则是断机缘，心儿未灰，痴情还想成婚配。便今世，不共鸳帏，私心愿将来世期，倒不如将生换死求连理。〔合〕料伊行，冰心未移，料伊，行柔肠更痴。

说话之间，已到馆驿前了。〔丑〕管门的公公在么？〔净上〕走马近来辞帝阙，奉差前去扫皇陵。甚么人？到此何干？〔生〕带管驿事富平县尹，送煎茶人役伺候。〔净〕着他进来。〔丑进见介〕〔净看怒介〕这是个男子，你为甚么送他进来呢？〔生〕是个幼年童子。〔净〕看他这个模样，也不是个幼年童子了。好个不通道理的县官！就是上司官员，带着家眷从此经过，也没有取男子服事之理，何况是皇宫内院的嫔妃，肯容男子见面？叫孩子们，快打出去，着他换妇人进来。这样不通道理，还叫他做官！〔骂下〕〔生〕这怎么处？

〔前腔〕精神徒费。不收留，翻加峻威，道是男儿怎入裙钗队。叹宾鸿，有翼难飞！〔丑〕老爷，你偌大一位县官，怕差遣妇人不动？拨几个民间妇女进去就是了，愁他怎的！〔生〕塞鸿，你那里知道。民间妇人尽有，只是我做官的人，怎好把心事托他。幽情怎教民妇知，说来徒使旁人议。〔合前〕且自回衙，少时再作道理。正是：

不如意事常八九，可与人言无二三。

第 二 折

〔破阵子〕〔小旦上〕故主恩情难背，思之夜夜魂飞

奴家采苹，自从抛离故主，寄养侯门，王将军待若亲生，王解元纳为侧室，唱随之礼不缺，伉俪之情颇谐，只是思忆旧恩，放心不下。闻得朝廷拨出官女三十名，去备皇陵打扫，如今现在驿中。万一小姐也在数内，我和他咫尺之间，不能见面，令人何以为情。仔细想来，好凄惨人也！〔泪介〕

〔黄莺儿〕从小便相依。弃中途，履祸危，经年没个音书寄。到如今呵，又不是他东我西，山遥路迷。宫门一入深无底，止不过隔层帏。身儿不近，怎免泪珠垂。

〔生上〕枉作千般计，空回九转肠；烟缘生割断，最狠是穹苍。〔见介〕〔小旦〕相公回来了。你着塞鸿去探消息，端的何如？为甚么面带愁容，不言不语？〔生〕不要说起！那守门的太监，不收男子，只要妇人。妇人尽有，都是民间之女，怎好托他代传心事，岂不闷杀我也！

〔前腔〕无计可施为，眼巴巴看落晖。只今宵一过，便无机会。娘子，我便为此烦恼。你为何也带愁容？看你无端皱眉，无因泪垂，莫不是愁他夺取中宫位？那里知道这婚姻事呵！绝端倪。便图来世，那好事也难期。

〔小旦〕奴家不为别事，只因小姐在咫尺之间，不能见面，故主之情，难于割舍，所以在此伤心。〔生〕原来如此，这也是人之常情。〔小旦〕相公，你要传消息，既苦无人；我要见面谈心，又愁无计。我如今有个两全之法，和你商量。〔生〕甚么两全之法？快些讲来。〔小旦〕他要取妇人承值，何不把奴家送去？只说民间之妇。若还见了小姐，妇人与妇人讲话，没有甚么嫌疑，岂不比塞鸿更强十倍？〔生〕如此甚妙！只是把个官人娘子扮作民间之妇，未免屈了你些。〔小旦〕我原以待妾起家，何屈之有。〔生〕这等分付门上，唤一乘小轿进来，傍晚出去，黎明进来便了。

羨卿多智更多情，一计能收两泪零。

〔小旦〕鸡犬尚能怀故主，为人岂可负生成。

第 三 折

（此折改白不改曲。曲照原本，不更一字。）

〔长相思〕〔旦上〕念奴娇，归国遥，为忆王孙心转焦，楚江秋色饶。月儿高，烛影摇，为忆秦娥梦转迢。苦啊！汉宫春信消。

街鼓冬冬动戍楼，倚床无寐数更筹；可怜今夜中庭月，一样清光两地愁。奴家自到驿内，看看天色晚来。〔内打二鼓介〕呀，樵楼上面，已打二鼓了。独眠孤馆，展转凄其，待与姊妹们闲话消遣，怎奈他们心上无事，一个个都去睡了。教奴家独守残灯，怎生睡得去！

〔二郎神〕良宵杳，为愁多，睡来还觉。手揽寒衾风料峭。也罢，待我剔起残灯，到阶除下闲步一回，以消长夜。徘徊灯侧，下阶闲步无聊。只见惨淡中庭新月小。画屏间，余香犹袅。漏声高，正三更，驿庭人静寥寥。

那帘儿外面，就是煎茶之所，不免去就着茶炉，饮一杯苦茗则个。正是：有水难浇心火热，无风可解泪冰寒。〔暂下〕〔小旦持扇上〕已入重围里，还愁见面遥；故人相对处，打点泪痕抛。奴家自进驿来，办眼偷瞧，不见我家小姐。〔内作长叹介〕〔小旦〕呀，如今夜深人静，为何有沉吟叹息之声？不免揭起帘儿，觑他一眼。

〔前腔〕偷瞧，把朱帘轻揭，金铃声小。呀！那阶除之下，缓步行来的，好似我家小姐。欲待唤他，又恐不是。我且只当不知，坐在这里煎茶，看他出来，有何话说。〔旦上〕看，一缕茶烟香缭绕。呀！那个煎茶女子，好生面善。青衣执爨，分明旧识风标。悄语低声问分晓。那煎茶女子，快取茶来！〔小旦〕娘娘请坐，待我取来。〔送茶，各看，背惊介〕〔旦〕呀！分明是采苹的模样，他

为何来在这里？〔小旦〕竟是我家小姐！待他唤我，我才好认他。〔旦〕那女子走近前来！你莫非就是采苹么？〔小旦〕小姐在上，妾身就是。〔跪介〕〔旦抱哭介〕〔合〕天那！何幸得萍水相遭！〔旦〕你为何来在这里？〔小旦〕说起话长。今夜之来，是采苹一点孝心，费尽机谋，特地来寻故主。请问小姐，老夫人好么？〔旦〕还喜得康健。采苹，你晓得王官人的消息么？郎年少，自分离，孤身何处飘飘？

〔小旦〕他自分散之后，贼平到京。正要来图婚配，不想我家遭此横祸，他就落魄天涯。近得金吾将军题请得官，现做富平县尹，权知此驿。

〔啭林莺〕他宦中薄禄权倚靠，知他未遂云霄。〔旦〕这等说来，他也就在此处了。既然如此，你的近况何如？随着谁人？作何勾当？〔小旦〕采苹自别夫人小姐，蒙金吾将军收为义女，就嫁与王官人，目今现在一处。〔旦〕哦，你和他现在一处么？〔小旦〕是。〔旦作醋容介〕这等讲来，我倒不如你了！鹧鸪已占枝头早，孤鸾拘锁，何日得归巢？〔小旦〕小姐不要多心。奴家虽嫁王郎，议定权为侧室，虚却正夫人的座位，还待着小姐哩！〔旦〕这等才是。我且问你，擅郎安否？怕相思，瘦损潘安貌。〔小旦〕他虽受折磨，却还志气不衰，容颜如旧。志气好，千般折挫，风月未全消。

他一片苦情，恐怕小姐不知。现付明珠一颗，是小姐赠与他的，他时时藏在身旁，不敢遗失。〔付珠介〕

〔前腔〕〔旦〕双珠依旧成对好，我两人还是蓬飘。采苹，我今夜要约他一会，你可唤得进来么？〔小旦〕这个使不得。老公公在外监守，又有军士巡更，那里唤得进来！〔旦〕莫非是你……〔小旦〕是我怎么样？哦，采苹知道了，莫非疑我吃醋么？若有此心，天不覆，地不载！小姐，利害所关，他委实进来不得。〔旦泪介〕唉！眼前欲见无由到，驿庭咫尺，翻做楚天遥。〔小旦〕楚天

犹小，着不得一腔烦恼。小姐有何心事，只消对采苹说知，待采苹转对他说，也与见面一般。〔旦〕枉心焦，我芳情自解，怎说与伊曹！

待我修书一封，与你带去便了。〔小旦〕说得有理，快写起来，一霎时天就明了。〔旦写介〕

〔啄木公子〕舒残茧，展兔毫，蚊脚蝇头随意扫。只怕我有万恨千愁，假饶会面难消。我有满腔愁怨，写向鸾笺怎得了？总有丹青别样巧，毕竟衷肠事怎描？只落得泪痕交。

〔前腔〕书才写，灯再挑，锦袋重封花押巧。书写完了，采苹，你与我传示他，好自支持，休为我长皱眉梢。〔小旦〕小姐，你与他的姻缘，毕竟如何？可有出宫相会的日子？〔旦〕为说汉宫人未老，怨粉愁香憔悴倒；寂寞园陵岁月遥，云雨隔蓝桥。

明珠封在书中，叫他依旧收好。〔小旦〕天色已明，采苹出去了。小姐，你千万保重！若有便信，替我致意老夫人。〔各哭介〕〔小旦〕小姐保重，采苹去了。〔掩泪下〕〔旦〕呀，采苹，你竟去了！〔顿足哭介〕

〔哭相思尾〕从此两下分离音信杳，无由再见亲人了。

〔哭倒介〕〔末上〕自不整衣毛，何须夜夜号。咱家一路辛苦，正要睡觉，不知那个官人啾啾唧唧，一夜哭到天明，不免到里面去看来。呀！为何哭倒在地下？〔看介〕原来是刘官人。刘官人起来！〔摸介〕呀，不好了！浑身冰冷，只有心口还热。列位官人快来！〔四宫女上〕并无奇祸至，何事疾声呼？呀！这是刘家姐姐，为何倒在地下？〔末〕列位官人看好，待我去取姜汤上来。〔下〕〔宫女〕刘家姐姐，快些苏醒！〔末取姜汤上〕姜汤在此，快灌下去。〔灌醒介〕〔宫女〕刘家姐姐，你为甚么事情，哭得这般狼狈？

〔黄莺儿〕〔旦〕只为连日受劬劳，怯风霜，心胆摇，昨宵不睡挨到晓。〔末〕为甚么不睡呢？〔旦〕思家路遥，思亲寿高，因此蓦然愁绝昏沉倒。谢多娇，相将救取，免死向荒郊。

〔末〕好不小心！万一有些差池，都是咱家的干系哩！

〔前腔〕〔众〕人世水中泡。受皇恩，福怎消，何须苦忆家乡好。慈帏暂抛，相逢不遥，宽心莫把闲愁恼。〔内〕面汤热了，请列位官人梳妆上轿。〔合〕曙光高，马嘶人起，梳洗上星轺。

〔宫女〕姊妹人人笑语圆，娘行何事独忧煎？

〔旦〕只因命带凄惶煞，心上无愁也泪涟。

授曲第三

声音之道，幽渺难知。予作一生柳七，交无数周郎，虽未能如曲子相公身都通显，然论其生平制作，塞满人间，亦类此君之不可收拾。然究竟于声音之道未尝尽解，所能解者，不过词学之章句，音理之皮毛，比之观场矮人，略高寸许，人赞美而我先之，我憎丑而人和之，举世不察，遂群然许为知音。噫，音岂易知者哉？人问：既不知音，何以制曲？予曰：酿酒之家，不必尽知酒味，然秫多水少则醇醲，曲好麴精则香冽，此理则易谳也；此理既谳，则杜康不难为矣。造弓造矢之人，未必尽娴决拾，然曲而劲者利于矢，直而锐者宜于鹄，此道则易明也；既明此道，即世为弓人矢人可矢。虽然，山民善跋，水民善涉，术疏则巧者亦拙，业久则粗者亦精；填过数十种新词，悉付优人，听其歌演，近朱者赤，近墨者黑，况为朱墨所从出者乎？粗者自然拂耳，精者自能娱神，是其中菽麦亦稍辨矣。语云：“耕当问奴，织当访婢。”予虽不敏，亦曲中之老奴，歌中之黠婢也。请述所知，以备裁择。

解明曲意

唱曲宜有曲情，曲情者，曲中之情节也。解明情节，知其意之所在，则唱出口时，俨然此种神情，问者是问，答者是答，悲者黯然魂消而不致反有喜色，欢者怡然自得而不见稍有瘁容，且其声音齿颊之间，各种俱有分别，此所谓曲情是也。吾观今世学曲者，始则诵读，继则歌咏，歌咏既成而事毕矣。至于讲解二字，非特废而不行，亦且从无此例。有终日唱此曲，终年唱此曲，甚至一生唱此曲，而不知此曲所言何事，所指何人，口唱而心不唱，口中有曲而面上身上无曲，此所谓无情之曲，与蒙童背书，同一勉强而非自然者也。虽腔板极正，喉舌齿牙极清，终是第二、第三等词曲，非登峰造极之技也。欲唱好曲者，必先求明师讲明曲义。师或不解，不妨转询文人，得其义而后唱。唱时以精神贯串其中，务求酷肖。若是，则同一唱也，同一曲也，其转腔换字之间，别有一种声口，举目回头之际，另是一副神情，较之时优，自然迥别。变死音为活曲，化歌者为文人，只在能解二字，解之时义大矣哉！

调熟字音

调平仄，别阴阳，学歌之首务也。然世上歌童解此二事者，百不得一。不过口传心授，依样葫芦，求其师不甚谬，则习而不察，亦可以混过一生。独有必不可少之一事，较阴阳平仄为稍难，又不得因其难而忽视者，则为“出口”、“收音”二诀窍。世间有一字，即有一字之头，所谓出口者是也；有一字，即有一字之尾，所

谓收音者是也。尾后又有余音，收煞此字，方能了局。譬如吹箫、姓萧诸“箫”字，本音为箫，其出口之字头与收音之字尾，并不是“箫”。若出口作“箫”，收音作“箫”，其中间一段正音并不是“箫”，而反为别一字之音矣。且出口作“箫”，其音一泄而尽，曲之缓者，如何接得下板？故必有一字为之头，以备出口之用，有一字为之尾，以备收音之用，又有一字为余音，以备煞板之用。字头为何？“西”字是也。字尾为何？“天”字是也。尾后余音为何？“乌”字是也。字字皆然，不能枚纪。《弦索辨讹》等书载此颇详，阅之自得。要知此等字头、字尾及余音，乃天造地设，自然而然，非后人扭捏而成者也，但观切字之法，即知之矣。《篇海》、《字汇》等书，逐字载有注脚，以两字切成一字。其两字者，上一字即为字头，出口者也；下一字即为字尾，收音者也；但不及余音之一字耳。无此上下二字，切不出中间一字，其为天造地设可知。此理不明，如何唱曲？出口一错，即差谬到底，唱此字而讹为彼字，可使知音者听乎？故教曲必先审音。即使不能尽解，亦须讲明此义，使知字有头尾以及余音，则不敢轻易开口，每字必询，久之自能惯熟。“曲有误，周郎顾。”苟明此道，即遇最刻之周郎，亦不能拂情而左顾矣。

字头、字尾乃余音，皆为慢曲而设，一字一板或一字数板者，皆不可无。其快板曲，止有正音，不及头尾。

缓音长曲之字，若无头尾，非止不合韵，唱者亦大费精神，但看青衿赞礼之法，即知之矣。“拜”、“兴”二字皆属长音。“拜”字出口以至收音，必俟其人揖毕而跪，跪毕而拜，为时甚久。若止唱一“拜”字到底，则其音一泄而尽，不当歇而不得不歇，失俟相之体矣。得其窍者，以“不”、“爱”二字代之。“不”乃“拜”之头，“爱”乃“拜”之尾，中间恰好是一“拜”字。以一字而延数晷，则气力不足；分为三字，即有余矣。“兴”字亦然，以“希”、“因”二字代之。赞礼且然，况于唱曲？婉譬曲喻，以至于

此，总出一片苦心。审乐诸公，定须怜我。

字头、字尾及余音，皆须隐而不现，使听者闻之，但有其音，并无其字，始称善用头尾者；一有字迹，则沾泥带水，有不如无矣。

字忌模糊

学唱之人，勿论巧拙，只看有口无口；听曲之人，慢讲精粗，先问有字无字。字从口出，有字即有口。如出口不分明，有字若无字，是说话有口，唱曲无口，与哑人何异哉？哑人亦能唱曲，听其呼号之声即可见矣。常有唱完一曲，听者止闻其声，辨不出一字者，令人闷杀。此非唱曲之料，选材者任其咎，非本优之罪也。舌本生成，似难强造，然于开口学曲之初，先能净其齿颊，使出口之际，字字分明，然后使工腔板，此回天大力，无异点铁成金，然百中遇一，不能多也。

曲严分合

同场之曲，定宜同场，独唱之曲，还须独唱，词意分明，不可犯也。常有数人登场，每人一只之曲，而众口同声以出之者，在授曲之人，原有浅深二意：浅者虑其冷静，故以发越见长；深者示不参差，欲以翕如见好。尝见《琵琶·赏月》一折，自“长空万里”以至“几处寒衣织未成”。俱作合唱之曲，谛听其声，如出一口，无高低断续之痕者，虽曰良工心苦，然作者深心，于兹埋没。此折之妙，全在共对月光，各谈心事，曲既分唱，身段即可分做，是清淡之内原有波澜。若混作同场，则无所见其情，亦无可施其态矣。惟“峭寒生”二曲可以同唱，首四曲定该分唱，况

有“合前”数句振起神情，原不虑其太冷。他剧类此者甚多，举一可以概百。戏场之曲，虽属一人而可以同唱者，惟行路出师等剧，不问词理异同，皆可使众声合一。场面似闹，曲声亦宜闹，静之则相反矣。

锣鼓忌杂

戏场锣鼓，筋节所关，当敲不敲，不当敲而敲，与宜重而轻，宜轻反重者，均足令戏文减价。此中亦具至理，非老于优孟者不知。最忌在要紧关头，忽然打断。如说白未了之际，曲调初起之时，横敲乱打，盖却声音，使听白者少听数句，以致前后情事不连，审音者未闻起调，不知以后所唱何曲。打断曲文，罪犹可恕，抹杀宾白，情理难容。予观场每见此等，故为揭出。又有一出戏文将了，止余数句宾白未完，而此未完之数句，又系关键所在，乃戏房锣鼓早已催促收场，使说与不说同者，殊可痛恨。故疾徐轻重之间，不可不急讲也。场上之人将要说白，见锣鼓未歇，宜少停以待之，不则过难专委，曲白锣鼓，均分其咎矣。

吹合宜低

丝、竹、肉三音，向皆孤行独立，未有合用之者，合之自近年始。三籁齐鸣，天人合一，亦金声玉振之遗意也，未尝不佳；但须以肉为主，而丝竹副之，使不出自然者，亦渐近自然，始有主行客随之妙。迩来戏房吹合之声，皆高于场上之曲，反以丝竹为主，而曲声和之，是座客非为听歌而来，乃听鼓乐而至矣。从来名优教曲，总使声与乐齐，箫笛高一字，曲亦高一字，箫笛低一

字，曲亦低一字。然相同之中，即有高低轻重之别，以其教曲之初，即以箫笛代口，引之使唱，原系声随箫笛，非以箫笛随声，习久成性，一到场上，不知不觉而以曲随箫笛矣。正之当用何法？曰：家常理曲，不用吹合，止于场上用之，则有吹合亦唱，无吹合亦唱，不靠吹合为主。譬之小儿学行，终日倚墙靠壁，舍此不能举步，一旦去其墙壁，偏使独行，行过一次两次，则虽见墙壁而不靠矣。以予见论之，和箫和笛之时，当比曲低一字，曲声高于吹合，则丝竹之声亦变为肉，寻其附和之痕而不得矣。正音之法，有过此者乎？然此法不宜概行，当视唱曲之人之本领，如一班之中，有一二喉音最亮者，以此法行之，其余中人以下之材，俱照常格。倘不分高下，一例举行，则良法不终，而怪予立言之误矣。

吹合之声，场上可少，教曲学唱之时，必不可少，以其能代师口，而司熔铸变化之权也。何则？不用箫笛，止凭口授，则师唱一遍，徒亦唱一遍，师住口而徒亦住口，聪慧者数遍即熟，资质稍钝者，非数十百遍不能，以师徒之间无一转相授受之人也。自有此物，只须师教数遍，齿牙稍利，即用箫笛引之。随箫随笛之际，若曰无师，则轻重疾徐之间，原有法脉准绳，引人归于胜地；若曰有师，则师口并无一字，已将此曲交付其徒。先则人随箫笛，后则箫笛随人，是金蝉脱壳之法也。“庾公之斯，学射于尹公之他；尹公之他，学射于我。”箫笛二物，即曲中之尹公他也。但庾公之斯与子濯孺子，昔未见面，而今同在一堂耳。若是，则吹合之力讵可少哉？予恐此书一出，好事者过听予言，谬视箫笛为可弃，故复补论及此。

教白第四

教习歌舞之家，演习声容之辈，咸谓唱曲难，说白易。宾白

熟念即是，曲文念熟而后唱，唱必数十遍而始熟，是唱曲与说白之工，难易判如霄壤。时论皆然，予独怪其非是。唱曲难而易，说白易而难，知其难者始易，视为易者必难。盖词曲中之高低抑扬，缓急顿挫，皆有一定不移之格，谱载分明，师传严切，习之既惯，自然不出范围。至宾白中之高低抑扬，缓急顿挫，则无腔板可按、谱籍可查，止靠曲师口授；而曲师入门之初，亦系暗中摸索，彼既无传于人，何从转授于我？讹以传讹，此说白之理，日晦一日而人不知。人既不知，无怪乎念熟即以为~~是~~，而且以为易也。吾观梨园之中，善唱曲者，十中必有二三；工说白者，百中仅可一二。此一二人之工说白，若非本人自通文理，则其所传之师，乃一读书明理之人也。故曲师不可不择。教者通文识字，则学者之受益，东君之省力，非止一端。苟得其人，必破优伶之格以待之，不则鹤困鸡群，与侪众无异，孰肯抑而就之乎？然于此中索全人，颇不易得。不如仍苦立言者，再费几升心血，创为成格以示人。自制曲选词，以至登场演习，无一不作功臣，庶于为人彻之义，无少缺陷。虽然，成格即设，亦止可为通文达理者道，不识字者闻之，未有不喷饭胡卢，而怪迂人之多事者也。

高低抑扬

宾白虽系常谈，其中悉具至理，请以寻常讲话喻之。明理人讲话，一句可当十句，不明理人讲话，十句抵不过一句，以其不中肯綮也。宾白虽系编就之言，说之不得法，其不中肯綮等也。犹之倩人传语，教之使说，亦与念白相同，善传者以之成事，不善传者以之僨事，即此理也。此理甚难亦甚易，得其孔窍则易，不得孔窍则难。此等孔窍，天下人不知，予独知之。天下人即能知之，不能言之，而予复能言之，请揭出以示歌者。白有高低抑扬，

何者当高而扬？何者当低而抑？曰：若唱曲然。曲文之中，有正字，有衬字。每遇正字，必声高而气长，若遇衬字，则声低气短而疾忙带过，此分别主客之法也。说白之中，亦有正字，亦有衬字，其理同，则其法亦同。一段有一段之主客，一句有一句之主客，主高而扬，客低而抑，此至当不易之理，即最简极便之法也。凡人说话，其理亦然。譬如呼人取茶取酒。其声云：“取茶来！”“取酒来！”此二句既为茶酒而发，则“茶”“酒”二字为正字，其声必高而长，“取”字“来”字为衬字，其音必低而短。再取旧曲中宾白一段论之。《琵琶·分别》白云：“云情雨意，虽可抛两月之夫妻；雪鬓霜鬟，竟不念八旬之父母！功名之念一起，甘旨之心顿忘，是何道理？”首四句之中，前二句是客，宜略轻而稍快，后二句是主，宜略重而稍迟。“功名”、“甘旨”二句亦然，此句中之主客也。“虽可抛”、“竟不念”六个字，较之“两月夫妻”、“八旬父母”虽非衬字，却与衬字相同，其为轻快，又当稍别。至于“夫妻”“父母”之上二“之”字，又为衬中之衬，其为轻快，更宜倍之。是白皆然，此字中之主客也。常见不解事梨园，每于四六句中之“之”字，与上下正文同其轻重疾徐，是谓菽麦不辨，尚可谓之能说白乎？此等皆言宾白，盖场上所说之话也。至于上场诗，定场白，以及长篇大幅叙事之文，定宜高低相错，缓急得宜，切勿作一片高声，或一派细语，俗言“水平调”是也。上场诗四句之中，三句皆高而缓，一句宜低而快。低而快者，大率宜在第三句，至第四句之高而缓，较首二句更宜倍之。如《浣纱记》定场诗云：“少小英雄侠气闻，飘零仗剑学从军。何年事了拂衣去，归卧荆南梦泽云。”“少小”二句宜高而缓，不待言矣。“何年”一句必须轻轻带过，若与前二句相同，则煞尾一句不求低而自低矣。末句一低，则懈而无势，况其下接着通名道姓之语。如“下官姓范名蠡，字少伯”，“下官”二字例应稍低，若末句低而接者又低，则神气索然不振矣，故第三句之稍低而快，势有不得不然者。此

理此法，谁能穷究至此？然不如此，则是寻常应付之戏，非孤标特出之戏也。高低抑扬之法，尽乎此矣。

优师既明此理，则授徒之际，又有一简便可行之法，索性取而予之：但于点脚本时，将宜高宜长之字用朱笔圈之，凡类衬字者不圈。至于衬中之衬，与当急急赶下、断断不宜沾滞者，亦用朱笔抹以细纹，如流水状，使一一皆能识认。则于念剧之初，便有高低抑扬，不俟登场摹拟。如此教曲，有不妙绝天下，而使百千万亿之人赞美者，吾不信也。

缓急顿挫

缓急顿挫之法，较之高低抑扬，其理愈精，非数言可了。然了之必须数言，辩者愈繁，则听者愈惑，终身不能解矣。优师点脚本授歌童，不过一句一点，求其点不刺谬，一句还一句，不致断者联而联者断，亦云幸矣，尚能询及其他？即以脚本授文人，倩其画文断句，亦不过每句一点，无他法也。而不知场上说白，尽有当断处不断，反至不当断处而忽断；当联处不联，忽至不当联处而反联者。此之谓缓急顿挫。此中微渺，但可意会，不可言传；但能口授，不能以笔舌喻者。不能言而强之使言，只有一法：大约两句三句而止言一事者，当一气赶下，中间断句处勿太迟缓；或一句止言一事，而下句又言别事，或同一事而另分一意者，则当稍断，不可竟连下句。是亦简便可行之法也。此言其粗，非论其精；此言其略，未及其详。精详之理，则终不可言也。

当断当联之处，亦照前法，分别于脚本之中，当断处用朱笔一画，使至此稍顿，余俱连读，则无缓急相左之患矣。

妇人之态，不可明言，宾白中之缓急顿挫，亦不可明言，是二事一致。轻盈袅娜，妇人身上之态也；缓急顿挫，优人口中之

态也。予欲使优人之口，变为美人之身，故为讲究至此。欲为戏场尤物者，请从事予言，不则仍其故步。

脱套第五

戏场恶套，情事多端，不能枚纪。以极鄙极俗之关目，一人作之，千万人效之，以致一定不移，守为成格，殊可怪也。西子捧心，尚不可效，况效东施之颦乎？且戏场关目，全在出奇变相，令人不能悬拟。若人人如是，事事皆然，则彼未演出而我先知之，忧者不觉其可忧，苦者不觉其为苦，即能令人发笑，亦笑其雷同他剧，不出范围，非有新奇莫测之可喜也。扫除恶习，拔去眼钉，亦高人造福之一事耳。

衣冠恶习

记予幼时观场，凡遇秀才赶考及谒见当涂贵人，所衣之服，皆青素圆领，未有着蓝衫者，三十年来始见此服。近则蓝衫与青衫并用，即以之别君子小人。凡以正生、小生及外末脚色而为君子者，照旧衣青圆领，惟以净丑脚色而为小人者，则着蓝衫。此例始于何人，殊不可解。夫青衿，朝廷之名器也。以贤愚而论，则为圣人之徒者始得衣之；以贵贱而论，则备缙绅之选者始得衣之。名宦大贤尽于此出，何所见而为小人之服，必使净丑衣之？此戏场恶习所当首革者也。或仍照旧例，止用青衫而不设蓝衫。若照新例，则君子小人互用，万勿独归花面，而令士子蒙羞也。

近来歌舞之衣，可谓穷奢极侈。富贵娱情之物，不得不然，似难责以俭朴。但有不可解者：妇人之服，贵在轻柔，而近日舞衣，

其坚硬有如盔甲。云肩大而且厚，面夹两层之外，又以销金锦缎围之。其下体前后二幅，名曰“遮羞”者，必以硬布裱骨而为之，此战场所用之物，名为“纸甲”者是也，歌台舞榭之上，胡为乎来哉？易以轻软之衣，使得随身环绕，似不容已。至于衣上所绣之物，止宜两种，勿及其他。上体凤鸟，下体云霞，此为定制。盖“霓裳羽衣”四字，业有成宪，非若点缀他衣，可以浑施色相者也。予非能创新，但能复古。

方巾与有带飘巾，同为儒者之服。飘巾儒雅风流，方巾老成持重，以之分别老少，可称得宜。近日梨园，每遇穷愁患难之士，即戴方巾，不知何所取义？至纱帽巾之有飘带者，制原不佳，戴于粗豪公子之首，果觉相称。至于软翅纱帽，极美观瞻，曩时《张生逾墙》等剧往往用之，近皆除去，亦不得其解。

声音恶习

花面口中，声音宜杂。如作各处乡语，及一切可憎可厌之声，无非为发笑计耳，然亦必须有故而然。如所演之剧，人系吴人，则作吴音，人系越人，则作越音，此从人起见者也。如演剧之地在吴则作吴音，在越则作越音，此从地起见者也。可怪近日之梨园，无论在南在北，在西在东，亦无论剧中之人生于何地，长于何方，凡系花面脚色，即作吴音，岂吴人尽属花面乎？此与净丑着蓝衫，同一覆盆之事也。使范文正、韩襄毅诸公有灵，闻此声，观此剧，未有不抱恨九原，而思痛革其弊者也。今三吴缙绅之居要路者，欲易此俗，不过启吻之劳；从未有计及此者，度量优容，真不可及。且梨园尽属吴人，凡事皆能自顾，独此一着，不惟不自争气，偏欲故形其丑，岂非天下古今一绝大怪事乎？且三吴之音，止能通于三吴，出境言之，人多不解，求其发笑，而反使听者茫然，亦

失计甚矣。吾请为词场易之：花面声音，亦如生旦外末，悉作官音，止以话头惹笑，不必故作方言。即作方言，亦随地转。如在杭州，即学杭人之话，在徽州，即学徽人之话，使妇人小儿皆能识辨。识者多，则笑者众矣。

语言恶习

白中有“呀”字，惊骇之声也。如意中并无此事，而猝然遇之，一向未见其人，而偶尔逢之，则用此字开口，以示异也。近日梨园不明此义，凡见一人，凡遇一事，不论意中意外，久逢乍逢，即用此字开口，甚有差人请客而客至，亦以“呀”字为接见之声者，此等迷谬，尚可言乎？故为揭出，使知斟酌用之。

戏场惯用者，又有“且住”二字。此二字有两种用法。一则相反之事，用作过文，如正说此事，忽然想及彼事，彼事与此事势难并行，才想及而未曾出口，先以此二字截断前言，“且住”者，住此说以听彼说也。一则心上犹豫，假此以待沉吟，如此说自以为善，恐未尽善，务期必妥，当于是处寻非，故以此代心口相商，“且住”者，稍迟以待，不可竟行之意也。而今之梨园，不问是非好歹，开口说话，即用此二字作助语词，常有一段宾白之中，连说数十个“且住”者，此皆不详字义之故。一经点破，犯此病者鲜矣。

上场引子下场诗，此一出戏文之首尾。尾后不可增尾，犹头上不可加头也。可怪近时新例，下场诗念毕，仍不落台，定增几句谈话，以极紧凑之文，翻成极宽缓之局。此义何居，令人不解。曲有尾声及下场诗者，以曲音散漫，不得几句紧腔，如何截得板住？白文冗杂，不得几句约语，如何结得话成？若使结过之后，又复说起，何如不收竟下之为愈乎？且首尾一理，诗后既可添话，则

何不于引子之先，亦加几句说白，说完而后唱乎？此积习之最无理最可厌者，急宜改革，然又不可尽革。如两人三人在场，二人先下，一人说话未了，必宜稍停以尽其说，此谓“吊场”，原系古格。然须万不得已，少此数句，必添以后一出戏文，或少此数句，即埋没从前说话之意者，方可如此。（亦有下场不及更衣者，故借此为缓兵计。）是龙足，非蛇足也。然只可偶一为之，若出出皆然，则是是貂皆可续矣，何世间狗尾之多乎？

科 诨 恶 习

插科打诨处，陋习更多，革之将不胜革，且见过即忘，不能悉记，略举数则而已。如两人相殴，一胜一败，有人来劝，必使被殴者走脱，而误打劝解之人，《连环·掷戟》之董卓是也。主人偷香窃玉，馆童吃醋拈酸，谓寻新不如守旧，说毕必以臀相向，如《玉簪》之进安、《西厢》之琴童是也。戏中串戏，殊觉可厌，而优人惯增此种，其腔必效弋阳，《幽闺·旷野奇逢》之酒保是也。

声 容 部

选 姿 第 一

“食色，性也。”“不知子都之姣者，无目者也。”古之大贤择言而发，其所以不拂人情，而数为是论者，以性所原有，不能强之使无耳。人有美妻美妾而我好之，是谓拂人之性；好之不惟损德，且以杀身。我有美妻美妾而我好之，是还吾性中所有，圣人复起，亦得我心之同然，非失德也。孔子云：“素富贵，行乎富贵。”人处得为之地，不买一二姬妾自娱，是素富贵而行乎贫贱矣。王道本乎人情，焉用此矫清矫俭者为哉？但有狮吼在堂，则应借此藏拙，不则好之实所以恶之，怜之适足以杀之，不得以红颜薄命借口，而为代天行罚之忍人也。予一介寒生，终身落魄，非止国色难亲，天香未遇，即强颜陋质之妇，能见几人，而敢谬次音容，侈谈歌舞，貽笑于眠花藉柳之人哉！然而缘虽不偶，兴则颇佳，事虽未经，理实易谕，想当然之妙境，较身醉温柔乡者倍觉有情。如其不信，但以往事验之。楚襄王，人主也。六宫窈窕，充塞内庭，握雨携云，何事不有？而千古以下，不闻传其实事，止有阳台一梦，脍炙人口。阳台今落何处？神女家在何方？朝为行云，暮为行雨，毕竟是何情状？岂有踪迹可考，实事可缕陈乎？皆幻境也。幻境之妙，十倍于真，故千古传之。能以十倍于真之事，谱而为法，未有不入闲情三昧者。凡读是书之人，欲考所学之从来，则

请以楚国阳台之事对。

肌 肤

妇人妩媚多端，毕竟以色为主。《诗》不云乎“素以为绚兮？”素者，白也。妇人本质，惟白最难。常有眉目口齿般般入画，而缺陷独在肌肤者。岂造物生人之巧，反不同于染匠，未施漂练之力，而遽加文采之工乎？曰：非然。白难而色易也。曷言乎难？是物之生，皆视根本，根本何色，枝叶亦作何色。人之根本维何？精也，血也。精色带白，血则红而紫矣。多受父精而成胎者，其人之生也必白。父精母血交聚成胎，或血多而精少者，其人之生也必在黑白之间。若其血色浅红，结而为胎，虽在黑白之间，及其生也，蒙以美食，处以曲房，犹可日趋于淡，以脚地未尽缁也。有幼时不白，长而始白者，此类是也。至其血色深紫，结而成胎，则其根本已缁，全无脚地可漂，及其生也，即服以水晶云母，居以玉殿琼楼，亦难望其变深为浅，但能守旧不迁，不致愈老愈黑，亦云幸矣。有富贵之家，生而不白，至长至老亦若是者，此类是也。知此，则知选材之法，当如染匠之受衣。有以白衣使漂者受之，易为力也；有白衣稍垢而使漂者亦受之，虽难为力，其力犹可施也；若以既染深色之衣，使之剥去他色，漂而为白，则虽什佰其工价，必辞之不受。以人力虽巧，难拗天工，不能强既有者而使之无也。妇人之白者易相，黑者亦易相，惟在黑白之间者，相之不易。有三法焉：面黑于身者易白，身黑于面者难白；肌肤之黑而嫩者易白，黑而粗者难白；皮肉之黑而宽者易白，黑而紧且实者难白。面黑于身者，以面在外而身在内，在外则有风吹日晒，其渐白也为难；身在衣中，较面稍白，则其由深而浅，业有明征，使面亦同身，蔽之有物，其验亦若是矣，故易白。身黑于面者反此，故不

易白。肌肤之细而嫩者，如绫罗纱绢，其体光滑，故受色易，退色亦易，稍受风吹，略经日照，则深者浅而浓者淡矣。粗则如布如毡，其受色之难，十倍于绫罗纱绢，至欲退之，其工又不止十倍，肌肤之理亦若是也，故知嫩者易白，而粗者难白。皮肉之黑而宽者，犹绉缎之未经熨，靴与履之未经楦者，因其皱而未直，故浅者似深，淡者似浓，一经熨楦之后，则纹理陡变，非复曩时色相矣。肌肤之宽者，以其血肉未足，犹待长养，亦犹待楦之靴履，未经烫熨之绫罗纱绢，此际若此，则其血肉充满之后必不若此，故知宽者易白，紧而实者难白，相肌之法，备乎此矣。若是，则白者、嫩者、宽者为人争取，其黑而粗、紧而实者遂成弃物乎？曰：不然。薄命尽出红颜，厚福偏归陋质，此等非他，皆素封伉俪之材，诰命夫人之料也。

眉 眼

面为一身之主，目又为一面之主。相人必先相面，人尽知之，相面必先相目，人亦尽知，而未必尽穷其秘。吾谓相人之法，必先相心，心得而后观其形体。形体维何？眉发口齿，耳鼻手足之类是也。心在腹中，何由得见？曰：有目在，无忧也。察心之邪正，莫妙于观眸子，子舆氏笔之于书，业开风鉴之祖。予无事赘陈其说，但言情性之刚柔，心思之愚慧。四者非他，即异日司花执爨之分途，而狮吼堂与温柔乡接壤之地也。目细而长者，秉性必柔；目粗而大者，居心必悍；目善动而黑白分明者，必多聪慧，目常定而白多黑少，或白少黑多者，必近遇蒙。

然初相之时，善转者亦未能遽转，不定者亦有时而定。何以试之？曰：有法在，无忧也。其法维何？一旦以静待动，一曰以卑矚高。目随身转，未有动荡其身，而能胶柱其目者；使之乍往

乍来，多行数武，而我回环其目以视之，则秋波不转而自转，此一法也。妇人避羞，目必下视，我若居高临卑，彼下而又下，永无见目之时矣。必当处之高位，或立台坡之上，或居楼阁之前，而我故降其躯以矚之，则彼下无可下，势必环转其睛以避我。虽云善动者动，不善动者亦动，而勉强自然之中，即有贵贱妍媸之别，此又一法也。至于耳之大小，鼻之高卑，眉发之淡浓，唇齿之红白，无目者犹能按之以手，岂有识者不能鉴之以形？无俟哓哓，徒滋繁渎。

眉之秀与不秀，亦复关系情性，当与眼目同视。然眉眼二物，其势往往相因。眼细者眉必长，眉粗者眼必巨，此大较也，然亦有不尽相合者。如长短粗细之间，未能一一尽善，则当取长恕短，要当视其可施人力与否。张京兆工于画眉，则其夫人之双黛，必非浓淡得宜，无可润泽者。短者可长，则妙在用增；粗者可细，则妙在用减。但有必不可少之一字，而人多忽视之者，其名曰“曲”。必有天然之曲，而后人力可施其巧。“眉若远山”，“眉如新月”，皆言曲之至也。即不能酷肖远山，尽如新月，亦须稍带月形，略存山意，或弯其上而不弯其下，或细其外而不细其中，皆可自施人力。最忌平空一抹，有如太白经天；又忌两笔斜冲，俨然倒书八字。变远山为近瀑，反新月为长虹，虽有善画之张郎，亦将畏难而却走。非选姿者居心太刻，以其为温柔乡择人，非为娘子军择将也。

手 足

相女子者，有简便诀云：“上看头，下看脚。”似二语可概通身矣。予怪其最要一着，全未提起。两手十指，为一生巧拙之关，百岁荣枯所系，相女者首重在此，何以略而去之？且无论手嫩者

必聪，指尖者多慧，臂丰而腕厚者，必享珠围翠绕之荣；即以现在所需而论之，手以挥弦，使其指节累累，几类弯弓之决拾；手以品箫，如其臂形攘攘，几同伐竹之斧斤；抱枕携衾，观之兴索，捧卮进酒，受者眉攒，亦大失开门见山之初着矣。故相手一节，为观人要着，寻花问柳者不可不知，然此道亦难言之矣。选人选足，每多窄窄金莲；观手观人，绝少纤纤玉指。是最易者足，而最难者手，十百之中，不能一二觐也。须知立法不可不严，至于行法，则不容不恕。但于或嫩或柔或尖或细之中，取其一得，即可宽恕其他矣。至于选足一事，如但求窄小，则可一目了然。倘欲由粗以及精，尽美而思善，使脚小而不受脚小之累，兼收脚小之用，则又比手更难，皆不可求而可遇者也。其累维何？因脚小而难行，动必扶墙靠壁，此累之在己者也；因脚小而致秽，令人掩鼻攒眉，此累之在人者也。其用维何？瘦欲无形，越看越生怜惜，此用之在日者也；柔若无骨，愈亲愈耐抚摩，此用之在夜者也。昔有人谓予曰：“宜兴周相国，以千金购一丽人，名为‘抱小姐’，因其脚小之至，寸步难移，每行必须人抱，是以得名。”予曰：“果若是，则一泥塑美人而已矣，数钱可买，奚事千金？”造物生人以足，欲其行也。昔形容女子娉婷者，非曰：“步步生金莲”，即曰“行行如玉立”，皆谓其脚小能行，又复行而入画，是以可珍可宝，如其小而不行，则与刖足者何异？此小脚之累之不可有也。予遍游四方，见足之最小而无累，与最小而得用者，莫过于秦之兰州、晋之大同。兰州女子之足，大者三寸，小者犹不及焉，又能步履如飞，男子有时追之不及，然去其凌波小袜而抚摩之，犹觉刚柔相半；即有柔若无骨者，然偶见则易，频遇为难。至大同名妓，则强半皆若是也。与之同榻者，抚及金莲，令人不忍释手，觉倚翠偎红之乐，未有过于此者。向在都门，以此语人，人多不信。一日席间拥二妓，一晋一燕，皆无丽色，而足则甚小。予请不信者即而验之，果觉晋胜于燕，大有刚柔之别。座客无不翻然，而罚

不信者以金谷酒数。此言小脚之用之不可无也。噫，岂其娶妻必齐之姜？就地取材，但不失立言之大意而已矣。

验足之法无他，只在多行几步，观其难行易动，察其勉强自然，则思过半矣。直则易动，曲即难行；正则自然，歪即勉强。直而正者，非止美观便走，亦少秽气。大约秽气之生，皆强勉造作之所致也。

态 度

古云：“尤物足以移人。”尤物维何？媚态是已。世人不知，以为美色，乌知颜色虽美，是一物也，乌足移人？加之以态，则物而尤矣。如云美色即是尤物，即可移人，则今时绢做之美女，画上之娇娥，其颜色较之生人，岂止十倍，何以不见移人，而使之害相思成郁病耶？是知“媚态”二字，必不可少。媚态之在人身，犹火之有焰，灯之有光，珠贝金银之有宝色，是无形之物，非有形之物也。惟其是物而非物，无形似有形，是以名为“尤物”。尤物者，怪物也，不可解说之事也。凡女子，一见即令人思，思而不能自己，遂至舍命以图，与生为难者，皆怪物也，皆不可解说之事也。吾于“态”之一字，服天地生人之巧，鬼神体物之工。使以我作天地鬼神，形体吾能赋之，知识我能予之，至于是物而非物，无形似有形之态度，我实不能变之化之，使其自无而有，复自有而无也。态之为物，不特能使美者愈美，艳者愈艳，且能使老者少而媼者妍，无情之事变为有情，使人暗受笼络而不觉者。女子一有媚态，三四分姿色，便可抵过六七分。试以六七分姿色而无媚态之妇人，与三四分姿色而有媚态之妇人同立一处，则人止爱三四分而不爱六七分，是态度之于颜色，犹不止一倍当两倍也。试以二三分姿色而无媚态之妇人，与全无姿色而止有媚态之妇人

同立一处，或与人各交数言，则人止为媚态所惑，而不为美色所惑，是态度之于颜色，犹不止于以少敌多，且能以无而敌有也。今之女子，每有状貌姿容一无可取，而能令人思之不倦，甚至舍命相从者，皆“态”之一字之为祟也。是知选貌选姿，总不如选态一着之为要。态自天生，非可强造。强造之态，不能饰美，止能愈增其陋。同一颦也，出于西施则可爱，出于东施则可憎者，天生、强造之别也。相面、相肌、相眉、相眼之法，皆可言传，独相态一事，则予心能知之，口实不能言之。口之所能言者，物也，非尤物也。噫，能使人知，而能使人欲言不得，其为物也何如！其为事也何如！岂非天地之间一大怪物，而从古及今，一件解说不来之事乎？

诘予者曰：既为态度立言，又不指人以法，终觉首鼠，盍亦舍精言粗，略示相女者以意乎？予曰：不得已而为言，止有直书所见，聊为榜样而已。向在维扬，代一贵人相妾。靓妆而至者不一其人，始皆俯首而立，及命之抬头，一人不作羞容而竟抬；一人娇羞腼腆，强之数四而后抬；一人初不即抬，及强而后可，先以眼光一瞬，似于看人而实非看人，瞬毕复定而后抬，俟人看毕，复以眼光一瞬而后俯，此即“态”也。记曩时春游遇雨，避一亭中，见无数女子，妍媸不一，皆踉跄而至。中一缟衣贫妇，年三十许，人皆趋入亭中，彼独徘徊檐下，以中无隙地故也；人皆抖擻衣衫，虑其太湿，彼独听其自然，以檐下雨侵，抖之无益，徒现丑态故也。及雨将止而告行，彼独迟疑稍后，去不数武而雨复作，乃趋入亭。彼则先立亭中，以逆料必转，先踞胜地故也。然臆虽偶中，绝无骄人之色。见后入者反立檐下，衣衫之湿，数倍于前，而此妇代为振衣，姿态百出，竟若天集众丑，以形一人之媚者。自观者视之，其初之不动，似以郑重而养态；其后之故动，似以徜徉而生态。然彼岂能必天复雨，先储其才以俟用乎？其养也，出之无心，其生也，亦非有意，皆天机之自起自伏耳。当其

养态之时，先有一种娇羞无那之致现于身外，令人生爱生怜，不俟娉婷大露而后觉也。斯二者，皆妇人媚态之一斑，举之以见大较。噫，以年三十许之贫妇，止为姿态稍异，遂使二八佳人与曳珠顶翠者皆出其下，然则态之为用，岂浅鲜哉！

人问：圣贤神化之事，皆可造诣而成，岂妇人媚态独不可学而至于乎？予曰：学则可学，教则不能。人又问：既不能教，胡云可学？予曰：使无态之人与有态者同居，朝夕熏陶，或能为其所化；如蓬生麻中，不扶自直，鹰变成鸠，形为气感，是则可矣。若欲耳提而面命之，则一部《廿一史》，当从何处说起？还怕愈说愈增其木强，奈何！

修容第二

妇人惟仙姿国色，无俟修容；稍去天工者，即不能免于人力矣。然予所谓“修饰”二字，无论妍媸美恶，均不可少。俗云：“三分人材，七分妆饰。”此为中人以下者言之也。然则有七分人材者，可少三分妆饰乎？即有十分人材者，岂一分妆饰皆可不用乎？曰：不能也。若是，则修容之道不可不急讲矣。今世之讲修容者，非止穷工极巧，几能变鬼为神，我即欲勉竭心神，创为新说，其如人心至巧，我法难工，非但小巫见大巫，且如小巫之徒，往教大巫之师，其不遭喷饭而唾面者鲜矣。然一时风气所趋，往往失之过当。非始初立法之不佳，一人求胜于一人，一日务新于一日，趋而过之，致失其真之弊也。“楚王好细腰，宫中皆饿死；楚王好高髻，宫中皆一尺；楚王好大袖，宫中皆全帛。”细腰非不可爱，高髻大袖非不美观，然至饿死，则人而鬼矣。髻至一尺，袖至全帛，非但不美观，直与魑魅魍魉无别矣。此非好细腰、好高髻大袖者之过，乃自为饿死，自为一尺，自为全帛者之过也。亦

非自为饿死，自为一尺，自为全帛者之过，无一人痛惩其失，著为章程，谓止当如此，不可太过，不可不及，使有遵守者之过也。吾观今日之修容，大类楚宫之末俗，著为章程，非草野得为之事。但不经人提破，使知不可爱而可憎，听其日趋日甚，则在生而为魑魅魍魉者，已去死人不远，矧腰成一缕，有饿而必死之势哉！予为修容立说，实具此段婆心，凡为西子者，自当曲体人情，万毋遽发娇嗔，罪其唐突。

盥 栉

盥面之法，无他奇巧，止是濯垢务尽。面上亦无他垢，所谓垢者，油而已矣。油有二种，有自生之油，有沾上之油。自生之油，从毛孔沁出，肥人多而瘦人少，似汗非汗者是也。沾上之油，从下而上者少，从上而下者多，以发与膏沐势不相离，发面交接之地，势难保其不侵，况以手按发，按毕之后，自上而下亦难保其不相挨擦，挨擦所至之处，即生油发亮之处也。生油发亮，于面似无大损，殊不知一日之美恶系焉，面之太白不匀，即从此始。从来上粉着色之地，最怕有油，有即不能上色。倘于浴面初毕，未经搽粉之时，但有指大一痕为油手所污，追加粉搽面之后，则满面皆白而此处独黑，又且黑而有光，此受病之在先者也。既经搽粉之后，而为油手所污，其黑而光也亦然，以粉上加油，但见油而不见粉也，此受病之在后者也。此二者之为患，虽似大而实小，以受病之处止在一隅，不及满面，闺人尽有知之者。尚有全体受伤之患，从古佳人暗受其害而不知者，予请攻而出之。从来拭面之巾帕，多不止于拭面，擦臂抹胸，随其所至；有膩即有油，则巾帕之不洁也久矣。即有好洁之人，止以拭面，不及其他，然能保其上不及发，将至额角而遂止乎？一沾膏沐，即非无油少膩之

物矣。以此拭面，非拭面也，犹打磨细物之人，故以油布擦光，使其不沾他物也。他物不沾，粉独沾乎？凡有面不受妆，越匀越黑；同一粉也，一人搽之而白，一个搽之而不白者，职是故也。以拭面之巾有异同，非搽面之粉有善恶也。故善匀面者，必须先洁其巾。拭面之巾，止供拭面之用，又须用过即浣，勿使稍带油痕，此务本穷源之法也。

善栉不如善篦，篦者，栉之兄也。发内无尘，始得丝丝现相，不则一片如毡，求其界限而不得，是帽也，非髻也，是退光黑漆之器，非乌云蟠绕之头也。故善蓄姬妾者，当以百钱买梳，千钱购篦。篦精则发精，稍俭其值，则发损头痛，篦不数下而止矣。篦之极净，使使用梳。而梳之为物，则越旧越精。“人惟求旧，物惟求新。”古语虽然，非为论梳而设。求其旧而不得，则富者用牙，贫者用角。新木之梳，即搜根剔齿者，非油浸十日，不可用也。

古人呼髻为“蟠龙”。蟠龙者，髻之本体，非由妆饰而成。随手绾成，皆作蟠龙之势，可见古人之妆，全用自然，毫无造作。然龙乃善变之物，发无一定之形，使其相传至今，物而不化，则龙非蟠龙，乃死龙矣；发非佳人之发，乃死人之发矣。无怪今人善变，变之诚是也。但其变之之形，只顾趋新，不求合理；只求变相，不顾失真。凡以彼物肖此物，必取其当然者肖之，必取其应有者肖之，又必取其形色相类者肖之，未有凭空捏造，任意为之而不顾者。古人呼发为“乌云”，呼髻为“蟠龙”者，以二物生于天上，宜乎在顶。发之缭绕似云，发之蟠曲似龙，而云之色有乌云，龙之色有乌龙。是色也，相也，情也，理也，事事相合，是以得名，非凭捏造，任意为之而不顾者也。窃怪今之所谓“牡丹头”、“荷花头”、“钵盂头”，种种新式，非不穷新极异，令人改观，然于当然应有、形色相类之义，则一无取焉。人之一身，手可生花，江淹之彩笔是也；舌可生花，如来之广长是也；头则未见其生花，生之自今日始。此言不当然而然也。发上虽有簪花之义，未有以

头为花，而身为蒂者；钵盂乃盛饭之器，未有倒贮活人之首，而作覆盆之象者，此皆事所未闻，闻之自今日始。此言不应有而有也。群花之色，万紫千红，独不见其有黑。设立一妇人于此，有人呼之为“黑牡丹”、“黑莲花”、“黑钵盂”者，此妇必艷然而怒，怒而继之以骂矣。以不喜呼名之怪物，居然自肖其形，岂非绝不可解之事乎？吾谓美人所梳之髻，不妨日新月异，但须筹为理之所有。理之所有者，其象多端，然总莫妙于云龙二物。仍用其名而变更其实，则古制新裁，并行而不悖矣。勿谓止此二物，变来有限，须知普天下之物，取其千态万状，越变而越不穷者，无有过此二物者矣。龙虽善变，犹不过飞龙、游龙、伏龙、潜龙、戏珠龙、出海龙之数种。至于云之为物，顷刻数迁其位，须臾屡易其形，“千变万化”四字，犹为有定之称，其实云之变相，“千万”二字，犹不足以限量之也。若得聪明女子，日日仰观天象，既肖云而为髻，复肖髻而为云，即一日一更其式，犹不能尽其巧幻，毕其离奇，矧未必朝朝变相乎？若谓天高云远，视不分明，难于取法，则令画工绘出巧云数朵，以纸剪式，衬于发下，俟栉沐既成，而后去之，此简便易行之法也。云上尽可着色，或簪以时花，或饰以珠翠，幻作云端五彩，视之光怪陆离。但须位置得宜，使与云体相合，若其中应有此物者，勿露时花珠翠之本形，则尽善矣。肖龙之法：如欲作飞龙、游龙，则先以己发梳一光头于下，后以假髮制作龙形，盘旋缭绕，覆于其上。务使离发少许，勿使相粘相贴，始不失飞龙、游龙之义，相粘相贴则是潜龙、伏龙矣。悬空之法，不过用铁线一二条，衬于不见之处，其龙爪之向下者，以发作线，缝于光发之上，则不动矣。戏珠龙法，以髮作小龙二条，缀于两旁，尾向后而首向前，前缀大珠一颗，近于龙嘴，名为“二龙戏珠”。出海龙亦照前式，但以假髮作波浪纹，缀于龙身空隙之处，皆易为之。是数法者，皆以云龙二物分体为之，是云自云而龙自龙也。予又谓云龙二物势不宜分，“云从龙，风从虎”，《周易》业有成言，

是当合而用之。同用一髮，同作一假，何不幻作云龙二物，使龙勿露全身，云亦勿作全朵，忽而见龙，忽而见云，令人无可测识，是美人之头，尽有盘旋飞舞之势，朝为行云，暮为行雨，不凡两擅其绝，而为阳台神女之现身哉？噫，笠翁于此搜尽枯肠，为此髻者，不可不加尸祝。天年以后，倘得为神，则将往来绣阁之中，验其所制，果有裨于花容月貌否也。

薰 陶

名花美女，气味相同，有国色者，必有天香。天香结自胞胎，非由薰染，佳人身上实实有些一种，非饰美之词也。此种香气，亦有姿貌不甚姣艳，而能偶擅其奇者。总之，一有此种，即有夭折摧残之兆，红颜薄命未有捷于此者。有国色而有天香，与无国色而有天香，皆是千中遇一，其余则熏染之力不可少也。其力维何？富贵之家，则需花露。花露者，摘取花瓣入甑，酝酿而成者也。蔷薇最上，群花次之。然用不须多，每于盥浴之后，挹取数匙入掌，拭体拍面而匀之。此香此味，妙在似花非花，是露非露，有其芬芳，而无其气息，是以为佳，不似他种香气，或速或沉，是兰是桂，一嗅即知者也。其次则用香皂浴身，香茶沁口，皆是闺中应有之事。皂之为物，亦有一种神奇，人身偶染秽物，或偶沾秽气，用此一擦，则去尽无遗。由此推之，即以百和奇香拌入此中，未有不与垢秽并除，混入水中而不见者矣，乃独去秽而存香，似有攻邪不攻正之别。皂之佳者，一浴之后，香气经日不散，岂非天造地设，以供修容饰体之用者乎？香皂以江南六合县出者为第一，但价值稍昂，又恐远不能致，多则浴体，少则止以浴面，亦权宜丰俭之策也。至于香茶沁口，费亦不多，世人但知其贵，不知每日所需，不过指大一片，重止毫厘，裂成数块，每于饭后及临睡

时以少许润舌，则满吻皆香，多则味苦，而反成药气矣。凡此所言，皆人所共知，予特申明其说，以见美人之香不可使之或无耳。虽有一种，为值更廉，世人食而但甘其味，嗅而不辨其香者，请揭出言之：果中荔子，虽出人间，实与交梨、火枣无别，其色国色，其香天香，乃果中尤物也。予游闽粤，幸得饱啖而归，庶不虚生此口，但恨造物有私，不令四方皆出。陈不如鲜，夫人而知之矣。殊不知荔之陈者，香气未尝尽没，乃与橄榄同功，其好处却在回味时耳。佳人就寝，止啖一枚，则口脂之香，可以竟夕，多则甜而腻矣。须择道地者用之，枫亭是其选也。人问：沁口之香，为美人设乎？为伴美人者设乎？予曰：伴者居多。若论美人，则五官四体皆为人设，奚止口内之香。

点 染

“却嫌脂粉污颜色，淡扫蛾眉朝至尊。”此唐人妙句也。今世讳言脂粉，动称污人之物，有满面是粉而云粉不上面，遍唇皆脂而曰脂不沾唇者，皆信唐诗太过，而欲以虢国夫人自居者也。噫，脂粉焉能污人，人自污耳。人谓脂粉二物，原为中材而设，美色可以不需。予曰：不然。惟美色可施脂粉，其余似可不设。何也？二物颇带世情，大有趋炎附热之态，美者用之愈增其美，陋者加之更益其陋。使以绝代佳人而微施粉泽，略染腥红，有不增娇益媚者乎？使以媿颜陋妇而丹铅其面，粉藻其姿，有不惊人骇众者乎？询其所以然之故，则以白者可使再白，黑者难使遽白；黑上加以白，是欲故显其黑，而以白物相形之也。试以一墨一粉，先分二处，后合一处而观之，其分处之时，黑自黑而白自白，虽云各别其性，未甚相仇也；迨其合处，遂觉黑不自安，而白欲求去。相形相碍，难以一朝居者，以天下之物，相类者可使同居，即不

相类而相似者，亦可使之同居，至于非但不相类、不相似，而且相反之物，则断断勿使同居，同居必为难矣。此言粉之不可混施也。脂则不然，面白者可用，面黑者亦可用。但脂粉二物，其势相依，面上有粉而唇上涂脂，则其色灿然可爱，倘面无粉泽而止丹唇，非但红色不显，且能使面上之黑色变而为紫，以紫之为色，非系天生，乃红黑二色合而成之者也。黑一见红，若逢故物，不求合而自合，精光相射，不觉紫气东来，使乘老子青牛，竟有五色灿然之瑞矣。若是，则脂粉二物，竟与若辈无缘，终身可不用矣，何以世间女子人人不舍，刻刻相需，而人亦未尝以脂粉多施，摈而不纳者？曰：不然。予所论者，乃面色最黑之人，所谓不相类、不相似，而且相反者也。若介在黑白之间，则相类而相似矣，既相类而相似，有何不可同居？但须施之有法，使浓淡得宜，则二物争效其灵矣。从来傅粉之面，止耐远观，难于近视，以其不能匀也。画士着色，用胶始匀，无胶则研杀不合。人面非同纸绢，万无用胶之理，此其所以不匀也。有法焉：请以一次分为二次，自淡而浓，由薄而厚，则可保无是患矣。请以他事喻之。砖匠以石灰粉壁，必先上粗灰一次，后上细灰一次；先上不到之处，后上者补之；后上偶遗之处，又有先上者衬之，是以厚薄相均，泯然无迹。使以二次所上之灰，并为一次，则非但拙匠难匀，巧者亦不能遍及矣。粉壁且然，况粉面乎？今以一次所傅之粉，分为二次傅之，先傅一次，俟其稍干，然后再傅第二次，则浓者淡而淡者浓，虽出无心，自能巧合，远观近视，无不宜矣。此法不但能匀，且能变换肌肤，使黑者渐白。何也？染匠之于布帛，无不由浅而深，其在深浅之间者，则非浅非深，另有一色，即如文字之有过文也。如欲染紫，必先使白变红，再使红变为紫，红即白紫之过文，未有由白竟紫者也。如欲染青，必使白变为蓝，再使蓝变为青，蓝即白青之过文，未有由白竟青者也。如妇人面容稍黑，欲使竟变为白，其势实难。今以薄粉先匀一次，是其面上之色已

在黑白之间，非若曩时之纯黑矣；再上一次，是使淡白变为深白，非使纯黑变为全白也，难易之势，不大相径庭哉？由此推之，则二次可广为三，深黑可同于浅，人间世上，无不可用粉匀面之妇人矣。此理不待验而始明，凡读是编者，批阅至此，即知湖上笠翁原非蠢物，不止为风雅功臣，亦可谓红裙知己。初论面容黑白，未免立说过严。非过严也，使知受病实深，而后知德医人，果有起死回生之力也。舍此更有二说，皆浅乎此者，然亦不可不知：匀面必须匀项，否则前白后黑，有如戏场之鬼脸。匀面必记掠眉，否则霜花覆眼，几类春生之社婆。至于点唇之法，又与匀面相反，一点即成，始类樱桃之体；若陆续增添，二三其手，即有长短宽窄之痕，是为成串樱桃，非一粒也。

治服第三

古云：“三世长者知被服，五世长者知饮食。”俗云：“三代为宦，着衣吃饭。”古语今词，不谋而合，可见衣食二事之难也。饮食载于他卷，兹不具论，请言被服一事。寒贱之家，自羞褴褛，动以无钱置服为词，谓一朝发迹，男可翩翩裘马，妇则楚楚衣裳。孰知衣衫之附于人身，亦犹人身之附于其地。人与地习，久始相安，以极奢极美之服，而骤加俭朴之躯，则衣衫亦类生人，常有不服水土之患。宽者似窄，短者疑长，手欲出而袖使之藏，项宜伸而领为之曲，物不随人指使，遂如桎梏其身。“沐猴而冠”为人指笑者，非沐猴不可着冠，以其着之不惯，头与冠不相称也。此犹粗浅之论，未及精微。“衣以章身”，请晰其解。章者，著也，非文采彰明之谓也。身非形体之身，乃智愚贤不肖之实备于躬，犹“富润屋，德润身”之身也。同一衣也，富者服之章其富，贫者服之益章其贫；贵者服之章其贵，贱者服之益章其贱。有德有行之

贤者，与无品无才之不肖者，其为章身也亦然。设有一大富长者于此，衣百结之衣，履踵决之履，一种丰腴气象，自能跃出衣履之外，不问而知为长者。是敝服垢衣，亦能章人之富，况罗绮而文绣者乎？丐夫某佣窃得美服而被焉，往往因之得祸，以服能章贫，不必定为短褐，有时亦在长裾耳。“富润屋，德润身”之解，亦复如是。富人所处之屋，不必尽为画栋雕梁，即居茅舍数椽，而过其门、入其室者，常见华门圭窔之间，自有一种旺气，所谓“润”也。公卿将相之后，子孙式微，所居门第未尝稍改，而经其地者，觉有冷气侵入，此家门枯槁之过，润之无其人也。从来读《大学》者，未得其解，释以雕镂粉藻之义。果如其言，则富人舍其旧居，另觅新居而加以雕镂粉藻；则有德之人亦将弃其旧身，另易新身而后谓之心广体胖乎？甚矣，读书之难，而章句训诂之学非易事也。予尝以此论见之说部，今复叙入闲情、噫，此等诠释，岂好闲情、作小说者所能道哉？偶寄云尔。

首 饰

珠翠宝玉，妇人饰发之具也，然增娇益媚者以此，损娇掩媚者亦以此。所谓增娇益媚者，或是面容欠白，或是发色带黄，有此等奇珍异宝覆于其上，则光芒四射，能令肌发改观，与玉蕴于山而山灵，珠藏于泽而泽媚同一理也。若使肌白发黑之佳人满头翡翠，环鬓金珠，但见金而不见人，犹之花藏叶底，月在云中，是尽可出头露面之人，而故作藏头盖面之事。巨眼者见之，犹能略迹求真，谓其美丽当不止此，使去粉饰而全露天真，还不知如何妩媚；使遇皮相之流，止谈妆饰之离奇，不及姿容窈窕，是以人饰珠翠宝玉，非以珠翠宝玉饰人也。故女人一生，戴珠顶翠之事，止可一月，万勿多时。所谓一月者，自作新妇于归之日始，至满

月卸妆之日止。只此一月，亦是无可奈何。父母置办一场，翁姑婚娶一次，非此艳妆盛饰，不足以慰其心。过此以往，则当去桎梏而谢羈囚，终身不修苦行矣。一簪一珥，便可相伴一生。此二物者，则不可不求精善。富贵之家，无妨多设金玉犀贝之属，各存其制，屡变其形，或数日一更，或一日一更，皆未尝不可。贫贱之家，力不能办金玉者，宁用骨角，勿用铜锡。骨角者耐观，制之佳者，与犀贝无异，铜锡非止不雅，且能损发。簪珥之外，所当饰鬓者，莫妙于时花数朵，较之珠翠宝玉，非止雅俗判然，且亦生死迥别。《清平调》之首句云：“名花倾国两相欢。”欢者，喜也，相欢者，彼既喜我，我亦喜彼之谓也。国色乃人中之花，名花乃花中之人，二物可称同调，正当晨夕与共者也。汉武云：“若得阿娇，贮之金屋。”吾谓金屋可以不设，药栏花榭则断断应有，不可或无。富贵之家如得丽人，则当遍访名花，植于闾内，使之旦夕相亲，珠围翠绕之荣不足道也。晨起簪花，听其自择。喜红则红，爱紫则紫，随心插戴，自然合宜，所谓两相欢也。寒素之家，如得美妇，屋旁稍有隙地，亦当种树栽花，以备点缀云鬓之用。他事可俭，此事独不可俭。妇人青春有几，男子遇色为难。尽有公侯将相、富室大家，或苦缘分之慳，或病中宫之妒，欲亲美色而毕世不能。我何人斯，而擅有此乐，不得一二事娱悦其心，不得一二物妆点其貌，是为暴殄天物，犹倾精米洁饭于粪壤之中也。即使赤贫之家，卓锥无地，欲艺时花而不能者，亦当乞诸名园，购之担上。即使日费几文钱，不过少饮一杯酒，既悦妇人之心，复娱男子之目，便宜不亦多乎？更有俭于此者，近日吴门所制象生花，穷精极巧，与树头摘下者无异，纯用通草，每朵不过数文，可备月余之用。绒绢所制者，价常倍之，反不若此物之精雅，又能肖真。而时人所好，偏在彼而不在乎，岂物不论美恶，止论贵贱乎？噫，相士用人者，亦复如此，奚止于物。

吴门所制之花，花象生而叶不象生，户户皆然，殊不可解。若

去其假叶而以真者缀之，则因叶真而花益真矣。亦是一法。

时花之色，白为上，黄次之，淡红次之，最忌大红，尤忌木红。玫瑰，花之最香者也，而色太艳，止宜压在髻下，暗受其香，勿使花形全露，全露则类村妆，以村妇非红不爱也。

花中之茉莉，舍插鬓之外，一无所用。可见天之生此，原为助妆而设，妆可少乎？珠兰亦然。珠兰之妙，十倍茉莉，但不能处处皆有，是一恨事。

予前论髻，欲人革去“牡丹头”、“荷花头”、“钵盂头”等怪形，而以假髮作云龙等式。客有过之者，谓：吾侪立法，当使天下去赝存真，奈何教人为伪？予曰：生今之世，行古之道，立言则善，谁其从之？不若因势利导，使之渐近自然。妇人之首，不能无饰，自昔为然矣，与其饰以珠翠宝玉，不若饰之以髮。髮虽云假，原是妇人头上之物，以此为饰，可谓还其固有，又无穷奢侈靡之滥费，与崇尚时花，鄙黜珠玉，同一理也。予岂不能为高世之论哉？虑其无裨人情耳。

簪之为色，宜浅不宜深，欲形其发之黑也。玉为上，犀之近黄者、蜜蜡之近白者次之，金银又次之，玛瑙琥珀皆所不取。簪头取象于物，如龙头、凤头、如意头、兰花头之类是也。但宜结实自然，不宜玲珑雕斫；宜与发相依附，不得昂首而作跳跃之形。盖簪头所以压发，服贴为佳，悬空则谬矣。

饰耳之环，愈小愈佳，或珠一粒，或金银一点，此家常佩戴之物，俗名“丁香”，肖其形也。若配盛妆艳服，不得不略大其形，但勿过丁香之一倍二倍。既当约小其形，复宜精雅其制，切忌为古时络索之样，时非元夕，何须耳上悬灯？若再饰以珠翠，则为福建之珠灯，丹阳之料丝灯矣。其为灯也犹可厌，况为耳上之环乎？

衣 衫

妇人之衣，不贵精而贵洁，不贵丽而贵雅，不贵与家相称，而贵与貌相宜。绮罗文绣之服，被垢蒙尘，反不若布服之鲜美，所谓贵洁不贵精也。红紫深艳之色，违时失尚，反不若浅淡之合宜，所谓贵雅不贵丽也。贵人之妇，宜披文采，寒俭之家，当衣缟素，所谓与人相称也。然人有生成之面，面有相配之衣，衣有相配之色，皆一定而不可移者。今试取鲜衣一袭，令少妇数人先后服之，定有一二中看，一二不中看者，以其面色与衣色有相称、不相称之别，非衣有公私向背于其间也。使贵人之妇之面色，不宜文采而宜缟素，必欲去缟素而就文采，不几与面为仇乎？故曰不贵与家相称，而贵与面相宜。大约面色之最白最嫩，与体态之最轻盈者，斯无往而不宜。色之浅者显其淡，色之深者愈显其淡；衣之精者形其娇，衣之粗者愈形其娇。此等即非国色，亦去夷光、王嫱不远矣，然当世有几人哉？稍近中材者，即当相体裁衣，不得混施色相矣。相体裁衣之法，变化多端，不应胶柱而论，然不得已而强言其略，则在务从其近而已。面颜近白者，衣色可深可浅；其近黑者，则不宜浅而独宜深，浅则愈彰其黑矣。肌肤近腻者，衣服可精可粗；其近糙者，则不宜精而独宜粗，精则愈形其糙矣。然而贫贱之家，求为精与深而不能，富贵之家欲为粗与浅而不可，则奈何？曰：不难。布苧有精粗深浅之别，绮罗文采亦有精粗深浅之别，非谓布苧必粗而罗绮必精，锦绣必深而缟素必浅也。绡与缎之体质不光、花纹突起者，即是精中之粗，深中之浅；布与苧之纱线紧密、漂染精工者，即是粗中之精，浅中之深。凡予所言，皆贵贱咸宜之事，既不详绣户而略衡门，亦不私贫家而遗富室。盖美女未尝择地而生，佳人不能选夫而嫁，务使得是编者，人人有

裨，则怜香惜玉之念，有同雨露之均施矣。

邇来衣服之好尚，其大胜古昔，可为一定不移之法者，又有大背情理，可为人心世道之忧者，请并言之。其大胜古昔，可为一定不移之法者，大家富室，衣色皆尚青是已。（青非青也，玄也。因避讳，故易之。）记予儿时所见，女子之少者，尚银红桃红，稍长者尚月白，未几而银红桃红皆变大红，月白变蓝，再变则大红变紫，蓝变石青。迨鼎革以后，则石青与紫皆罕见，无论少长男妇，皆衣青矣，可谓“齐变至鲁，鲁变至道”，变之至善而无可复加者矣。其递变至此也，并非有意而然，不过人情好胜，一家浓似一家，一日深于一日，不知不觉，遂趋到尽头处耳。然青之为色，其妙多端，不能悉数。但就妇人所宜者而论，面白者衣之，其面愈白，面黑者衣之，其面亦不觉其黑，此其宜于貌者也。年少者衣之，其年愈少，年老者衣之，其年亦不觉甚老，此其宜于岁者也。贫贱者衣之，是为贫贱之本等，富贵者衣之，又觉脱去繁华之习，但存雅素之风，亦未尝失其富贵之本来，此其宜于分者也。他色之衣，极不耐污，略沾茶酒之色，稍侵油腻之痕，非染不能复着，染之即成旧衣。此色不然，惟其极浓也，凡淡乎此者，皆受其侵而不觉；惟其极深也，凡浅乎此者，皆纳其污而不辞，此又其宜于体而适于用者也。贫家止此一衣，无他美服相衬，亦未尝尽现底里，以覆其外者色原不艳，即使中衣敝垢，未甚相形也；如用他色于外，则一缕欠精，即彰其丑矣。富贵之家，凡有锦衣绣裳，皆可服之于内，风飘袂起，五色灿然，使一衣胜似一衣，非止不掩中藏，且莫能穷其底蕴。诗云“衣锦尚絅”，恶其文之著也。此独不然，止因外色最深，使里衣之文越著，有复古之美名，无泥古之实害。二八佳人，如欲华美其制，则青上洒线，青上堆花，较之他色更显。反复求之，衣色之妙，未有过于此者。后来即有所变，亦皆举一废百，不能事事咸宜，此予所谓大胜古昔，可为一定不移之法者也。至于大背情理，可为人心世道之忧者，则零

拼碎补之服，俗名呼为“水田衣”者是已。衣之有缝，古人非好为之，不得已也。人有肥瘠长短之不同，不能象体而织，是必制为全帛，剪碎而后成之，即此一条两条之缝，亦是人身赘瘤，万万不能去之，故强存其迹。赞神仙之美者，必曰“天衣无缝”，明言人间世上，多此一物故也。而今且以一条两条、广为数十百条，非止不似天衣，且不使类人间世上，然而愈趋愈下，将肖何物而后已乎？推原其始，亦非有意为之，盖由缝衣之奸匠，明为裁剪，暗作穿窬，逐段窃取而藏之，无由出脱，创为此制，以售其奸。不料人情厌常喜怪，不惟不攻其弊，且群然则而效之。毁成片者为零星小块，全帛何罪，使受寸磔之刑？缝碎裂者为百衲僧衣，女子何辜，忽现出家之相？风俗好尚之迁移，常有关于气数，此制不昉于今，而昉崇祯末年。予见而诤之，尝谓人曰：“衣衫无故易形，殆有若或使之者，六合以内，得无有土崩瓦解之事乎？未几而闯氛四起，割裂中原，人谓予言不幸而中。方今圣人御世，万国来归，车书一统之朝，此等制度，自应潜革。倘遇同心，谓刍蕘之言，不甚訾謬，交相劝谕，勿效前轍，则予为是言也，亦犹鸡鸣犬吠之声，不为无补于盛治耳。”

云肩以护衣领。不使沾油，制之最善者也。但须与衣同色，近观则有，远视若无，斯为得体。即使难于一色，亦须不甚相悬。若衣色极深，而云肩极浅，或衣色极浅，而云肩极深，则是身首判然，虽曰相连，实同异处，此最不相宜之事也。予又谓云肩之色，不惟与衣相同，更须里外合一，如外色是青，则夹里之色亦当用青，外色是蓝，则夹里之色亦当用蓝。何也？此物在肩，不能时时服贴，稍遇风飘，则夹里向外，有如颶吹残叶，风卷败荷，美人之身不能不现历乱萧条之象矣。若使里外一色，则任其整齐颠倒，总无是患。然家常则已，出外见人，必须暗定以线，勿使与服相离，盖动而色纯，总不如不动之为愈也。

妇人之妆，随家丰俭，独有价廉功倍之二物，必不可无。一

曰半臂，俗呼“背褡”者是也；一曰束腰之带，俗呼“鸾绦”者是也。妇人之体，宜窄不宜宽，一着背褡，则宽者窄，而窄者愈显其窄矣。妇人之腰，宜细不宜粗，一束以带，则粗者细，而细者倍觉其细矣。背褡宜着于外，人皆知之；鸾绦宜束于内，人多未谙。带藏衣内，则虽有若无，似腰肢本细，非有物缩之使细也。

裙制之精粗，惟视折纹之多寡。折多则行走自如，无缠身碍足之患，折少则往来局促，有拘挛桎梏之形；折多则湘纹易动，无风亦似飘飘，折少则胶柱难移，有态亦同木强。故衣服之料，他或可省，裙幅必不可省。古云：“裙拖八幅湘江水。”幅既有八，则折纹之不少可知。予谓八幅之裙，宜于家常；人前美观，尚须十幅。盖裙幅之增，所费无几，况增其幅，必减其丝。惟细縠轻绡可以八幅十幅，厚重则为滞物，与幅减而折少者同矣。即使稍增其值，亦与他费不同。妇人之异于男子，全在下体。男子生而愿为之有室，其所以为室者，只在几希之间耳。掩藏秘器，爱护家珍，全在罗裙几幅，可不丰其料而美其制，以贻采葑采菲者诮乎？近日吴门所尚“百衲裙”，可谓尽美。予谓此裙宜配盛服，又不宜于家常，惜物力也。较旧制稍增，较新制略减，人前十幅，家居八幅，则得丰俭之宜矣。吴门新式，又有所谓“月华裙”者，一衲之中，五色俱备，犹皎月之现光华也，予独怪而不取。人工物料，十倍常裙，暴殄天物，不待言矣，而又不甚美观。盖下体之服，宜淡不宜浓，宜纯不宜杂。予尝读旧诗，见“飘飏血色裙拖地”、“红裙妒杀石榴花”等句，颇笑前人之笨。若果如是，则亦艳妆村妇而已矣，乌足动雅人韵士之心哉？惟近制“弹墨裙”，颇饶别致，然犹未获我心，嗣当别出新裁，以正同调。思而未制，不敢轻以误人也。

鞋 袜

男子所着之履，俗名为鞋，女子亦名为鞋。男子饰足之衣，俗名为袜，女子独易其名曰“褶”，其实褶即袜也。古云“凌波小袜”，其名最雅，不识后人何故易之？袜色尚白，尚浅红；鞋色尚深红，今复尚青，可谓制之尽善者矣。鞋用高底，使小者愈小，瘦者越瘦，可谓制之尽美又尽善者矣。然足之大者，往往以此藏拙，埋没作者一段初心，是止供丑妇效颦，非为佳人助力。近有矫其弊者，窄小金莲，皆用平底，使与伪造者有别。殊不知此制一设，则人人向高底乞灵，高底之为物也，遂成百世不祧之祀，有之则大者亦小，无之则小者亦大。尝有三寸无底之足，与四五寸有底之鞋同立一处，反觉四五寸之小，而三寸之大者；以有底则指尖向下，而秃者疑尖，无底则玉笋朝天，而尖者似秃故也。吾谓高底不宜尽去，只在减损其料而已。足之大者，利于厚而不利于薄，薄则本体现矣；利于大而不利于小，小则痛而不能行矣。我以极薄极小者形之，则似鹤立鸡群，不求异而自异。世岂有高底如钱，不扭捏而能行之大脚乎？

古人取义命名，纤毫不爽，如前所云，以“蟠龙”名髻，“乌云”为发之类是也。独于妇人之足，取义命名，皆与实事相反。何也？足者，形之最小者也；莲者，花之最大者也；而名妇人之足者，必曰“金莲”名最小之足者，则曰“三寸金莲”。使妇人之足，果如莲瓣之为形，则其阔而大也，尚可言乎？极小极窄之莲瓣，岂止三寸而已乎？此“金莲”之义之不可解也。从来名妇人之鞋者，必曰“凤头”。世人顾名思义，遂以金银制凤，缀于鞋尖以实之。试思凤之为物，止能小于大鹏；方之众鸟，不几洋洋乎大观也哉？以之名鞋，虽曰赞美之词，实类讥讽之迹。如曰“凤头”二字，但

肖其形，凤之头锐而身大，是以得名；然则众鸟之头，尽有锐于凤者，何故不以命名，而独有取于凤？且凤较他鸟，其首独昂，妇人趾尖，妙在低而能伏，使如凤凰之昂首，其形尚可观乎？此“凤头”之义之不可解者也。若是，则古人之命名取义，果何所见而云然？岂终不可解乎？曰：有说焉。妇人裹足之制，非由前古，盖后来添设之事也。其命名之初，妇人之足亦犹男子之足，使其果如莲瓣之稍尖，凤头之稍锐，亦可谓古之小脚。无其制而能约小其形，较之今人，殆有过焉者矣。吾谓“凤头”、“金莲”等字相传已久，其名未可遽易，然止可呼其名，万勿肖其实；如肖其实，则极不美观，而为前人所误矣。不宁惟是，凤为羽虫之长，与龙比肩，乃帝王饰衣饰器之物也，以之饰足，无乃大褻名器乎？尝见妇人绣袜，每作龙凤之形，皆昧理僭分之大者，不可不为拈破。近日女子鞋头，不缀凤而缀珠，可称善变。珠出水底，宜在凌波袜下，且似粟之珠，价不甚昂，缀一粒于鞋尖，满足俱呈宝色。使登歌舞之氍毹，则为走盘之珠；使作阳台之云雨，则为掌上之珠。然作始者见不及此，亦犹衣色之变青，不知其然而然，所谓暗合道妙者也。予友余子澹心，向著《鞋袜辨》一篇，考缠足之从来，核妇履之原制，精而且确，足与此说相发明，附载于后。

妇人鞋袜辨（余 怀）

古妇人之足，与男子无异。《周礼》有屨人，掌王及后之服屨，为赤舄、黑舄、赤纕、黄纕、青勾素履、葛履，辨外内命夫命妇之功屨、命屨、散屨。可见男女之履，同一形制，非如后世女子之弓弯细纤，以小为贵也。考之缠足，起于南唐李后主。后主有宫嫔窅娘，纤丽善舞，乃命作金莲，高六尺，饰以珍宝，绸带缨络，中作品色瑞莲，令窅娘以帛缠足，屈上作新月状，着素袜，行

舞莲中，回旋有凌云之态。由是人多效之，此缠足所自始也。唐以前未开此风，故词客诗人，歌咏美人好女，容态之殊丽，颜色之天姣，以至面妆首饰、衣褶裙裾之华靡，鬓发、眉眼，唇齿、腰肢、手腕之婀娜秀洁，无不津津乎其言之，而无一语及足之纤小者。即如古乐府之《双行缠》云：“新罗绣白胫，足趺如春妍。”曹子建云：“践远游之文履”，李太白诗云：“一双金齿屐，两足白如霜。”韩致光诗云：“六寸肤圆光致致”，杜牧之诗云：“钿尺裁量减四分”，汉《杂事秘辛》云：“足长八寸，胫跗丰妍。”夫六寸八寸，素白丰妍，可见唐以前妇人之足，无屈上作新月状者也。即东昏潘妃，作金莲花帖地，令妃行其上，曰“此步步生金莲花”，非谓足为金莲也。崔豹《古今注》：“东晋有凤头重台之履”，不专言妇人也。宋元丰以前，缠足者尚少，自元至今，将四百年，矫揉造作亦泰甚矣。古妇人皆着袜。杨太真死之日，马嵬媼得锦襦袜一只，过客一玩百钱。李太白诗云：“溪上足如霜，不着鸦头袜。”袜一名“膝裤”。宋高宗闻秦桧死，喜曰：“今后免膝裤中插匕首矣。”则袜也，膝裤也，乃男女之通称，原无分别。但古有底，今无底耳。古有底之袜，不必着鞋，皆可行地；今无底之袜，非着鞋，则寸步不能行矣。张平子云：“罗袜凌蹑足容与”。曹子建云：“凌波微步，罗袜生尘。”李后主词云：“划袜下香阶，手提金缕鞋。”古今鞋袜之制，其不同如此。至于高底之制，前古未闻，于今独绝。吴下妇人，有以异香为底，围以精绦者；有凿花玲珑，囊以香麝，行步霏霏，印香在地者。此则服妖，宋元以来，诗人所未及，故表而出之，以告世之赋“香奁”、咏“玉台”者。

袜色与鞋色相反，袜宜极浅，鞋宜极深，欲其相形而始露也。今之女子，袜皆尚白，鞋用深红深青，可谓尽制。然家家若是，亦忌雷同。予欲更翻置色，深其袜而浅其鞋，则脚之小者更露。盖鞋之为色，不当与地色相同。地色者，泥土砖石之色是也。泥土

砖石其为色也多深，浅者立于其上，则界限分明，不为地色所掩。如地青而鞋亦青，地绿而鞋亦绿，则无所见其短长矣。脚之大者则应反此，宜视地色以为色，则藏拙之法，不独使高底居功矣。鄙见若此，请以质之金屋主人，转询阿娇，定其是否。

习技第四

“女子无才便是德。”言虽近理，却非无故而云然。因聪明女子失节者多，不若无才之为贵。盖前人愤激之词，与男子因官得祸，遂以读书作宦为畏途，遗言戒子孙，使之勿读书、勿作宦者等也。此皆见嗜废食之说，究竟书可竟弃，仕可尽废乎？吾谓才德二字，原不相妨。有才之女，未必人人败行；贪淫之妇，何尝历历知书？但须为之夫者，既有怜才之心，兼有驭才之术耳。至于姬妾婢媵，又与正室不同。娶妻如买田庄，非五谷不殖，非桑麻不树，稍涉游观之物，即拔而去之，以其为衣食所出，地力有限，不能旁及其他也。买姬妾如治园圃，结子之花亦种，不结子之花亦种；成荫之树亦栽，不成荫之树亦栽，以其原为娱情而设，所重在耳目，则口腹有时而轻，不能顾名兼顾实也。使姬妾满堂，皆是蠢然一物，我欲言而彼默，我思静而彼喧，所答非所问，所应非所求，是何异于入狐狸之穴，舍宣淫而外，一无事事者乎？故习技之道，不可不与修容、治服并讲也。技艺以翰墨为上，丝竹次之，歌舞又次之，女工则其分内事，不必道也。然尽有专攻男技，不屑女红，鄙织纴为贱役，视针线如仇讐，甚至三寸弓鞋不屑自制，亦倩老姬贫女为捉刀人者，亦何借巧藏拙，而失造物生人之初意哉！予谓妇人职业，毕竟以缝纫为主，缝纫既熟，徐及其他。予谈习技而不及女工者，以描鸾刺凤之事，闺阁中人人皆晓，无俟予为越俎之谈。其不及女工，而仍郑重其事，不敢竟遗

者，虑开后世逐末之门，置纺绩蚕缲于不讲也。虽说闲情，无伤大道，是为立言之初意尔。

文 艺

学技必先学文。非曰先难后易，正欲先易而后难也。天下万事万物，尽有开门之锁钥。锁钥维何？文理二字是也。寻常锁钥，一钥止开一锁，一锁止管一门；而文理二字之为锁钥，其所管者不止千门万户。盖合天上地下，万国九州，其大至于无外，其小至于无内，一切当行当学之事，无不握其枢纽，而司其出入者也。此论之发，不独为妇人女子，通天下之士农工贾，三教九流，百工技艺，皆当作如是观。以许大世界，摄入文理二字之中，可谓约矣，不知二字之中，又分宾主。凡学文者，非为学文，但欲明此理也。此理既明，则文字又属敲门之砖，可以废而不用矣。天下技艺无穷，其源头止出一理。明理之人学技，与不明理之人学技，其难易判若天渊。然不读书不识字，何由明理？故学技必先学文。然女子所学之文，无事求全责备，识得一字，有一字之用，多多益善，少亦未尝不善；事事能精，一事自可愈精。予尝谓土木匠工，但有能识字记帐者，其所造之房屋器皿，定与拙匠不同，且有事半功倍之益。人初不信，后择数人验之，果如予言。粗技若此，精者可知。甚矣，字之不可不识，理之不可不明也。

妇人读书习字，所难只在入门。入门之后，其聪明必过于男子，以男子念纷，而妇人心一故也。导之入门，贵在情窦未开之际，开则志念稍分，不似从前之专一。然买姬置妾，多在三五、二八之年，娶而不御，使作蒙童求我者，宁有几人？如必俟情窦未开，是终身无可授之人矣。惟在循循善诱，勿阻其机，“扑作教刑”一语，非为女徒而设也。先令识字，字识而后教之以书。识

字不贵多，每日仅可数字，取其笔画最少，眼前易见者训之。由易而难，由少而多，日积月累，则一年半载以后，不令读书而自解寻章觅句矣。乘其爱看之时，急觅传奇之有情节、小说之无破绽者，听其翻阅，则书非书也，不怒不威而引人登堂入室之明师也。其故维何？以传奇、小说所载之言，尽是常谈俗语，妇人阅之，若逢故物。譬如一句之中，共有十字，此女已识者七，未识者三，顺口念去，自然不差。是因已识之七字，可悟未识之三字，则此三字也者，非我教之，传奇、小说教之也。由此而机锋相触，自能曲喻旁通。再得男子善为开导，使之由浅而深，则共枕论文，较之登坛讲艺，其为时雨之化，难易奚止十倍哉？十人之中，拔其一二最聪慧者，日与谈诗，使之渐通声律，但有说话铿锵，无重复聱牙之字者，即作诗能文之料也。苏夫人说“春夜月胜于秋夜月，秋夜月令人惨凄，春夜月令人和悦。”此非作诗，随口所说之话也。东坡因其出口合律，许以能诗，传为佳话。此即说话铿锵，无重复聱牙，可以作诗之明验也。其余女子，未必人人若是，但能书义稍通，则任学诸般技艺，皆是锁钥到手，不忧阻隔之人矣。

妇人读书习字，无论学成之后受益无穷，即其初学之时，先有裨于观者：只须案摊书本，手捏柔毫，坐于绿窗翠箔之下，便是一幅画图。班姬续史之容，谢庭咏雪之态，不过如是，何必睹其题咏，较其工拙，而后有闺秀同房之乐哉？噫，此等画图，人间不少，无奈身处其地，皆作寻常事物观，殊可惜耳。

欲令女子学诗，必先使之多读，多读而能口不离诗，以之作话，则其诗意诗情，自能随机触露，而为天籁自鸣矣。至其聪明之所发，思路之由开，则全在所读之诗之工拙，选诗与读者，务在善迎其机。然则选者维何？曰：在“平易尖颖”四字。平易者，使之易明且易学；尖颖者，妇人之聪明，大约在纤巧一路，读尖颖之诗，如逢故我，则喜而愿学，所谓迎其机也。所选之诗，莫

妙于晚唐及宋人，初中盛三唐，皆所不取；至汉魏晋之诗，皆秘勿与见，见即阻塞机锋，终身不敢学矣。此予边见，高明者阅之，势必哑然一笑。然予才浅识隘，仅足为女子之师，至高峻词坛，则生平未到，无怪乎立论之卑也。

女子之善歌者，若通文义，皆可教作诗余。盖长短句法，日日见于词曲之中，入者既多，出者自易，较作诗之功为尤捷也。曲体最长，每一套必须数曲，非力赡者不能。诗余而易竟，如《长相思》、《浣溪纱》、《如梦令》、《蝶恋花》之类，每首不过一二十字，作之可逗灵机。但观诗余选本，多闺秀女郎之作，为其词理易明，口吻易肖故也。然诗余既熟，即可由短而长，扩为词曲，其势亦易。果能如是，听其自制自歌，则是名士佳人合而为一，千古来韵事韵人，未有出于此者。吾恐上界神仙，自鄙其乐，咸欲谪向人寰而就之矣，此论前人未道，实实创自笠翁，有由此而得妙境者，切勿忘其所本。

以闺秀自命者，书、画、琴、棋四艺，均不可少。然学之须分缓急，必不可已者先之，其余资性能兼，不妨次第并举，不则一技擅长，才女之名著矣。琴列丝竹，别有分门，书则前说已备。善教由人，善习由己，其工拙浅深，不可强也。画乃闺中末技，学不学听之。至手谈一节，则断不容已，教之使学，其利于人已者，非止一端。妇人无事，必生他想，得此遣日，则妄念不生，一也；女子群居，争端易酿，以手代舌，是喧者寂之，二也；男女对坐，静必思淫，鼓瑟鼓琴之暇，焚香啜茗之余，不设一番功课，则静极思动，其两不相下之势，不在几案之前，即居床第之上矣。一涉手谈，则诸想皆落度外，缓兵降火之法，莫善于此。但与妇人对垒，无事角胜争雄，宁饶数子而输彼一筹，则有喜无嗔，笑容可掬；若有心使败，非止当下难堪，且阻后来弈兴矣。

纤指拈棋，踌躇不下，静观此态，尽勾消魂。必欲胜之，恐天地间无此忍人也。

双陆投壶诸技，皆在可缓。骨牌赌胜，亦可消闲，且易知易学，似不可已。

丝 竹

丝竹之音，推琴为首。古乐相传至今，其已变而未尽变者，独此一种，余皆末世之音也。妇人学此，可以变化性情，欲置温柔乡，不可无此陶冶之具。然此种声音，学之最难，听之亦最不易。凡令姬妾学此者，当先自问其能弹与否。主人知音，始可令琴瑟在御，不则弹者铿然，听者茫然，强束官骸以俟其阕，是非悦耳之音，乃苦人之具也，习之何为？凡人买姬置妾，总为自娱。己所悦者，导之使习；己所不悦，戒令勿为，是真能自娱者也。尝见富贵之人，听惯弋阳、四平等腔，极嫌昆调之冷，然因世人雅重昆调，强令歌童习之，每听一曲，攒眉许久，座客亦代为苦难，此皆不善自娱者也。予谓人之性情，各有所嗜，亦各有所厌，即使嗜之不当，厌之不宜，亦不妨自攻其谬。自攻其谬，则不谬矣。予生平有三癖，皆世人共好而我独不好者：一为果中之橄榄，一为饌中之海参，一为衣中之茧紬。此三物者，人以食我，我亦食之；人以衣我，我亦衣之；然未尝自沽而食，自购而衣，因不知其精美之所在也。谚云：“村人吃橄榄，不知回味。”予真海内之村人也。因论习琴，而谬谈至此，诚为饶舌。

人问：主人善琴，始可令姬妾学琴，然则教歌舞者，亦必主人善歌善舞而后教乎？须眉丈夫之工此者，有几人乎？曰：不然。歌舞难精而易晓，闻其声音之婉转，睹见体态之轻盈，不必知音，始能领略，座中席上，主客皆然，所谓雅俗共赏者是也。琴音易响而难明，非身习者不知，惟善弹者能听。伯牙不遇子期，相如不得文君，终日挥弦，总成虚鼓。吾观今世之为琴，善弹者多，能

听者少；延名师、教美妾者尽多，果能以此行乐，不愧文君、相如之名者绝少。务实不务名，此予立言之意也。若使主人善操，则当舍诸技而专务丝桐。“妻子好合，如鼓瑟琴。”“窈窕淑女，琴瑟友之。”琴瑟非他，胶漆男女，而使之合一；联络情意，而使之不分者也。花前月下，美景良辰，值水阁之生凉，遇绣窗之无事，或夫唱而妻和，或女操而男听，或两声齐发，韵不参差，无论身当其境者俨若神仙，即画成一幅合操图，亦足令观者消魂，而知音男妇之生妒也。

丝音自蕉桐而外，女子宜学者，又有琵琶、弦索、提琴之三种。琵琶极妙，惜今时不尚，善弹者少，然弦索之音，实足以代之。弦索之形较琵琶为瘦小，与女郎之纤体最宜。近日教习家，其于声音之道，能不大谬于宫商者，首推弦索，时曲次之，戏曲又次之。予向有场内无文，场上无曲之说，非过论也。止为初学时，便以取舍得失为心，虑其调高和寡，止求为“下里巴人”，不愿作“阳春白雪”，故造到五七分即止耳。提琴较之弦索，形愈小而声愈清，度清曲者必不可少。提琴之音，即绝少美人之音也，春容柔媚，婉转断续，无一不肖。即使清曲不度，止令善歌二人，一吹洞箫，一拽提琴，暗谱悠扬之曲，使隔花间柳者听之，俨然一绝代佳人，不觉动怜香惜玉之思也。

丝音之最易学者，莫过于提琴，事半功倍，悦耳娱神。吾不能不德创始之人，令若辈尸而祝之也。

竹音之宜于闺阁者，惟洞箫一种。笛可暂而不可常。到笙、管二物，则与诸乐并陈，不得已而偶然一弄，非绣窗所应有也。盖妇人奏技，与男子不同，男子所重在声，妇人所重在容。吹笙搯管之时，声则可听，而容不耐看，以其气塞而腮胀也，花容月貌为之改观，是以不应使习。妇人吹箫，非止容颜不改，且能愈增娇媚。何也？按风作调，玉笋为之愈尖；簇口为声，朱唇因而越小。画美人者，常作吹箫图，以其易于见好也。或箫或笛，如使

二女并吹，其为声也倍清，其为态也更显，焚香啜茗而领略之，皆能使身不在人间世也。

吹箫品笛之人，臂上不可无钏。钏又勿使太宽，宽则藏于袖中，不得见矣。

歌 舞

《演习部》中已载者，一语不赘。彼系泛论优伶，此则单言女乐。然教习声乐者，不论男女，二册皆当细阅。

昔人教女子以歌舞，非教歌舞，习声容也。欲其声音婉转，则必使之学歌；学歌既成，则随口发声，皆有燕语莺啼之致，不必歌而歌在其中矣。欲其体态轻盈，则必使之学舞；学舞既熟，则回身举步，悉带柳翻花笑之容，不必舞而舞在其中矣。古人立法，常有事在此而意在彼者。如良弓之子先学为箕，良冶之子先学为裘。妇人之学歌舞，即弓冶之学箕裘也。后人不知，尽以声容二字属之歌舞，是歌外不复有声，而征容必须试舞，凡为女子者，即有飞燕之轻盈，夷光之妩媚，舍作乐无所见长。然则一日之中，其为清歌妙舞者有几时哉？若使声容二字，单为歌舞而设，则其教习声容，犹在可疏可密之间。若知歌舞二事，原为声容而设，则其讲究歌舞，有不可苟且塞责者矣。但观歌舞不精，则其贴近主人之身，而为霏雨尤云之事者，其无娇音媚态可知也。

“丝不如竹，竹不如肉。”此声乐中三昧语，谓其渐近自然也。予又谓男音之为肉，造到极精处，止可与丝竹比肩，犹是肉中之丝，肉中之竹也。何以知之？但观人赞男音之美者，非曰“其细如丝”，则曰“其清如竹”，是可概见。至若妇人之音，则纯乎其为肉矣。语云：“词出佳人口。”予曰：不必佳人，凡女子之善歌者，无论妍媸美恶，其声音皆迥别男人。貌不扬而声扬者有之，未

有面目可观而声音不足听者也。但须教之有方，导之有术，因材而施，无拂其天然之性而已矣。歌舞二字，不止谓登场演剧，然登场演剧一事，为今世所极尚，请先言其同好者。

一曰取材。取材维何？优人所谓“配脚色”是已。喉音清越而气长者，正生、小生之料也；喉音娇婉而气足者，正旦、贴旦之料也，稍次则充老旦；喉音清亮而稍带质朴音，外末之料也；喉音悲壮而略近噍杀者，大净之料也。至于丑与副净，则不论喉音，只取性情之活泼，口齿之便捷而已。然此等脚色，似易实难。男优之不易得者二旦，女优之不易得者净丑。不善配脚色者，每以下选充之，殊不知妇人体态不难于庄重妖娆，而难于魁奇洒脱，苟得其人，即使面貌娉婷，喉音清婉，可居生旦之位者，亦当屈抑而为之。盖女优之净丑，不比男优仅有花面之名，而无抹粉涂胭之实，虽涉诙谐谑浪，犹之名士风流。若使梅香之面貌胜于小姐，奴仆之词曲过于官人，则观者听者倍加怜惜，必不以其所处之位卑，而遂卑其才与貌也。

二曰正音。正音维何？察其所生之地，禁为乡土之言，使归《中原音韵》之正者是已。乡音一转而即合昆调者，惟姑苏一郡。一郡之中，又止取长、吴二邑，余皆稍逊，以其与他郡接壤，即带他郡之音故也。即如梁溪境内之民，去吴门不过数十里，使之学歌，有终身不能改变之字，如呼酒钟为“酒宗”之类是也。近地且然，况愈远而愈别者乎？然不知远者易改，近者难改；词语判然、声音迥别者易改，词语声音大同小异者难改。譬如楚人往粤，越人来吴，两地声音判如霄壤，或此呼而彼不应，或彼说而此不言，势必大费精神，改唇易舌，求为同声相应而后已。止因自任为难，故转觉其易也。至入附近之地，彼所言者，我亦能言，不过出口收音之稍别，改与不改，无甚关系，往往因仍苟且，以度一生。止因自视为易，故转觉其难也。正音之道，无论异同远近，总当视易为难。选女乐者，必自吴门是已。然尤物之生，未

尝择地，燕姬赵女、越妇秦娥见于载籍者，不一而足。“惟楚有材，惟晋用之。”此言晋人善用，非曰惟楚能生材也。予游遍域中，觉四方声音，凡在二八上下之年者，无不可改，惟八闽、江右二省，新安、武林二郡，较他处为稍难耳。正音有法，当择其一韵之中，字字皆别，而所别之韵，又字字相同者，取其吃紧一二字，出全副精神以正之。正得一二字转，则破竹之势已成，凡属此一韵中相同之字，皆不正而自转矣。请言一二以概之。九州以内，择其乡音最劲、舌本最强者而言，则莫过于秦晋二地。不知秦晋之音，皆有一定不移之成格。秦音无东钟，晋音无真文；秦音呼东钟为真文，晋音呼真文为东钟。此予身入其地，习处其人，细细体认而得之者。秦人呼中庸之中为“肫”，通达之通为“吞”，东南西北之东为“敦”，青红紫绿之红为“魂”，凡属东钟一韵者，字字皆然，无一合于本韵，无一不涉真文。岂非秦音无东钟，秦音呼东钟为真文之实据乎？我能取此韵中一二字，朝训夕诂，导之改易，一字能变，则字字皆变矣。晋音较秦音稍杂，不能处处相同，然凡属真文一韵之字，其音皆仿佛东钟，如呼子孙之孙为“松”，昆腔之昆为“空”之类是也。即有不尽然者，亦在依稀仿佛之间。正之亦如前法，则用力少而成功多。是使无东钟而有东钟，无真文而有真文，两韵之音，各归其本位矣。秦晋且然，况其他乎？大约北音多平而少入，多阴而少阳。吴音之便于学歌者，止以阴阳平仄不甚谬耳。然学歌之家，尽有度曲一生，不知阴阳平仄为何物者，是与蠹鱼日在书中，未尝识字等也。予谓教人学歌，当从此始。平仄阴阳既谙，使之学曲，可省大半工夫。正音改字之论，不止为学歌而设，凡有生于一方，而不屑为一方之士者，皆当用此法以掉其舌。至于身在青云，有率吏临民之责者，更宜洗涤方音，讲求韵学，务使开口出言，人人可晓。常有官说话而吏不知，民辩冤而官不解，以致误施鞭扑，倒用劝惩者。声音之能误人，岂浅鲜哉！

正音改字，切忌务多。聪明者每日不过十余字，资质钝者渐减。每正一字，必令于寻常说话之中，尽皆变易，不定在读曲念白时。若止在曲中正字，他处听其自然，则但于眼下依从，非久复成故物，盖借词曲以变声音，非假声音以善词曲也。

三曰习态。态自天生，非关学力，前论声容，已备悉其事矣。而此复言习态，抑何自相矛盾乎？曰：不然。彼说闺中，此言场上。闺中之态，全出自然。场上之态，不得不由勉强，虽由勉强，却又类乎自然，此演习之功之不可少也。生有生态，旦有旦态，外末有外末之态，净丑有净丑之态，此理人人皆晓；又与男优相同，可置弗论，但论女优之态而已。男优妆旦，势必加以扭捏，不扭捏不足以肖妇人；女优妆旦，妙在自然，切忌造作，一经造作，又类男优矣。人谓妇人扮妇人，焉有造作之理，此语属赘。不知妇人登场，定有一种矜持之态；自视为矜持，人视则为造作矣。须令于演剧之际，只作家内想，勿作场上观，始能免于矜持造作之病。此言旦脚之态也。然女态之难，不难于旦，而难于生；不难于生，而难于外末净丑；又不难于外末净丑之坐卧欢娱，而难于外末净丑之行走哭泣。总因脚小而不能跨大步，面娇而不肯收瘁容故也。然妆龙像龙，妆虎像虎，妆此一物，而使人笑其不似，是求荣得辱，反不若设身处地，酷肖神情，使人赞美之为愈矣。至于美妇扮生，较女妆更为绰约。潘安、卫玠，不能复见其生时，借此辈权为小像，论场现上生姿，曲中耀目，即于花前月下偶作此形，与之坐谈对弈，啜茗焚香，虽歌舞之余文，实温柔乡之异趣也。

居室部

房舍第一

人之不能无屋，犹体之不能无衣。衣贵夏凉冬燠，房舍亦然。堂高数仞，棖题数尺，壮则壮矣，然宜于夏而不宜于冬。登贵人之堂，令人不寒而栗，虽势使之然，亦寥廓有以致之；我有重裘，而彼难挟纊故也。及肩之墙，容膝之屋，俭则俭矣，然适于主而不适于宾。造寒士之庐，使人无忧而叹，虽气感之乎，亦境地有以迫之；此耐萧疏，而彼憎岑寂故也。吾愿显者之居，勿太高广。夫房舍与人，欲其相称。画山水者有诀云：“丈山尺树，寸马豆人。”使一丈之山，缀以二尺三尺之树；一寸之马，跨以似米似粟之人，称乎？不称乎？使显者之躯，能如汤文之九尺十尺，则高数仞为宜，不则堂愈高而人愈觉其矮，地愈宽而体愈形其瘠，何如略小其堂，而宽大其身之为得乎？处士之庐，难免卑隘，然卑者不能耸之使高，隘者不能扩之使广，而污秽者、充塞者则能去之使净，净则卑者高而隘者广矣。吾贫贱一生，播迁流离，不一其处，虽赁而食，赁而居，总未尝稍污其座。性嗜花竹，而购之无资，则必令妻孥忍饥数日，或耐寒一冬，省口体之奉，以娱耳目。人则笑之，而我怡然自得也。性又不喜雷同，好为矫异，常谓人之葺居治宅，与读书作文同一致也。譬如治举业者，高则自出手眼，创为新异之篇；其极卑者，亦将读熟之文移头换尾，损益字句而后

出之，从未有抄写全篇，而自名善用者也。乃至兴造一事，则必肖人之堂以为堂，窥人之户以立户，稍有不合，不以为得，而反以为耻。常见通侯贵戚，掷盈千累万之资以治园圃，必先谕大匠曰：亭则法某人之制，榭则遵谁氏之规，勿使稍异。而操运斤之权者，至大厦告成，必骄语居功，谓其立户开窗，安廊置阁，事事皆仿名园，纤毫不谬。噫，陋矣！以构造园亭之胜事，上之不能自出手眼，如标新创异之文人；下之至不能换尾移头，学套腐为新之庸笔，尚嚣嚣以鸣得意，何其自处之卑哉！予尝谓人曰：生平有两绝技，自不能用，而人亦不能用之，殊可惜也。人问：绝技维何？予曰：一则辨审音乐，一则置造园亭。性嗜填词，每多撰著，海内共见之矣。设处得为之地，自选优伶，使歌自撰之词曲，口授而躬试之，无论新裁之曲，可使迥异时腔，即旧日传奇，一概删其腐习而益以新格，为往时作者别开生面，此一技也。一则创造园亭。因地制宜，不拘成见，一榭一楠，必令出自己裁，使经其地、入其室者，如读湖上笠翁之书，虽乏高才，颇饶别致，岂非圣明之世，文物之邦，一点缀太平之具哉？噫，吾老矣，不足用也。请以崖略付之简篇，供嗜痴者采择。收其一得，如对笠翁，则斯编实为神交之助尔。

土木之事，最忌奢靡。匪特庶民之家当崇俭朴，即王公大人亦当以此为尚。盖居室之制，贵精不贵丽，贵新奇大雅，不贵纤巧烂漫。凡人止好富丽者，非好富丽，因其不能创异标新，舍富丽无所见长，只得以此塞责。譬如人有新衣二件，试令两人服之，一则雅素而新奇，一则辉煌而平易，观者之目，注在平易乎？在新奇乎？锦绣绮罗，谁不知贵，亦谁不见之？缟衣素裳，其制略新，则为众目所射，以其未尝睹也。凡予所言，皆属价廉工省之事，即有所费，亦不及雕镂粉藻之百一。且古语云：“耕当问奴，织当访婢。”予贫士也，仅识寒酸之事。欲示富贵，而以绮丽胜人，则有从前之旧制在。

新制人所未见，即缕缕言之，亦难尽晓，势必绘图作样。然有图所能绘，有不能绘者。不能绘者十之九，能绘者不过十之一。因其有而会其无，是在解人善悟耳。

向 背

屋以面南为正向。然不可必得，则面北者宜虚其后，以受南薰；面东者虚右，面西者虚左，亦犹是也。如东、西、北皆无余地，则开窗借天以补之。牖之大者，可抵小门二扇；穴之高者，可敌低窗二扇，不可不知也。

途 径

径莫便于捷，而又莫妙于迂。凡有故作迂途，以取别致者，必另开耳门一扇，以便家人之奔走，急则开之，缓则闭之，斯雅俗俱利，而理致兼收矣。

高 下

房舍忌似平原，须有高下之势，不独园圃为然，居宅亦应如是。前卑后高，理之常也。然地不如是，而强欲如是，亦病其拘。总有因地制宜之法：高者造屋，卑者建楼，一法也；卑处叠石为山，高处浚水为池，二法也。又有因其高而愈高之，竖阁磊峰于峻坡之上；因其卑而愈卑之，穿塘凿井于下湿之区。总无一定之法，神而明之，存乎其人，此非可以遥授方略者矣。

出檐深浅

居宅无论精粗，总以能避风雨为贵。常有画栋雕梁，琼楼玉栏，而止可娱晴，不堪坐雨者，非失之太敞，则病于过峻。故柱不宜长，长为招雨之媒；窗不宜多，多为匿风之藪；务使虚实相半，长短得宜。又有贫士之家，房舍宽而余地少，欲作深檐以障风雨，则苦于暗；欲置长牖以受光明，则虑在阴。剂其两难，则有添置活檐一法。何为活檐？法于瓦檐之下，另设板棚一扇，置转轴于两头，可撑可下。晴则反撑，使正面向下，以当檐外顶格；雨则正撑，使正面向上，以承檐溜。是我能用天，而天不能窘我矣。

置顶格

精室不见椽瓦，或以板覆，或用纸糊，以掩屋上之丑态，名为“顶格”，天下皆然。予独怪其法制未善。何也？常因屋高檐矮，意欲取平，遂抑高者就下，顶格一概齐檐，使高敞有用之区，委之不见不闻，以为鼠窟，良可慨也。亦有不忍弃此，竟以顶板贴椽，仍作屋形，高其中而卑其前后者，又不美观，而病其呆笨。予为新制，以顶格为斗笠之形，可方可圆，四面皆下，而独高其中。且无多费，仍是平格之板料，但令工匠画定尺寸，旋而去之。如作圆形，则中间旋下一段是弃物矣。即用弃物作顶，升之于上，止增周围一段竖板，长仅尺许，少者一层，多则二层，随人所好，方者亦然。造成之后，若糊以纸，又可于竖板之上，裱贴字画，圆者类手卷，方者类册叶，简而文，新而妥，以质高明，必当取其

有裨。○方者可用竖板作门，时开时闭，则当壁橱四张，纳无限器物于中，而不之觉也。

甃 地

古人茅茨土阶，虽崇俭朴，亦以法制未尽备也。惟幕天者可以席地，梁栋既设，即有阶除，与戴冠者不可跣足，同一理也。且土不覆砖，尝苦其湿，又易生尘。有用板作地者，又病其步履有声，喧而不寂。以三和土甃地，筑之极坚，使完好如石，最为丰俭得宜。而又有不便于人者：若和灰和土不用盐卤，则燥而易裂；用之发潮，又不利于天阴。且砖可挪移，而甃成之土不可挪移，日后改迁，遂成弃物，是又不宜用也。不若仍用砖铺，止在磨与不磨之间，别其丰俭，有力者磨之使光，无力者听其自糙。予谓极糙之砖，犹愈于极光之土。但能自运机杼，使小者间大，方者合圆，别成文理，或作冰裂，或肖龟纹，收牛溲马渤入药笼，用之得宜，其价值反在参苓之上。此种调度，言之易而行之甚难，仅存其说而已。

洒 扫

精美之房，宜勤洒扫。然洒扫中亦具大段学问，非僮仆所能知也。欲去浮尘，先用水洒，此古人传示之法，今世行之者，十中不得一二。盖因童子性懒，虑有汲水之烦，止扫不洒，是以两事并为一事，惜其力也。久之习为固然，非特童子忘之，并主人亦不知扫地之先，更有一事矣。彼但知两者并一是省事法，殊不知因其懒也，遂以一事化为数十事。服役者既以为苦，而指使者

亦觉其繁，然总不知此数十事者，皆从一事苟简而生之者也。精舍之内，自明窗净几而外，尚有图书翰墨、古董器玩之种种，无一不忌浮尘。不洒而扫，是以红尘掺物，物物皆受其蒙，并栋梁之上、榱桷之间亦生障翳，势必逐件擦磨，始现本来面目，手不停挥者，半日才能竣事，不亦劳乎？若能先洒后扫，则扫过之后，只须麈尾一拂，一日清晨之事毕矣。何指使服役之纷纷哉？此洒水之不容已也。然勤扫不如勤洒，人则知之；多洒不如轻扫，人则未知之也。饶其善洒，不能处处皆遍，究竟干地居多，股役者不知，以其既经洒湿，则任意挥扫无妨。扬尘舞蹈之际，障翳之生也更多，故运帚切记勿重；匪特勿重，每于歇手之际，必使帚尾着地，勿令悬空，如扫一帚起一帚，则与挥扇无异，是扬灰使起，非抑尘使伏也。此是一法。又有闭门扫地之诀，不可不知。如人先扫房舍，后及阶除，则将房舍之门紧闭，俟扫完阶除后，略停片刻，然后开门，始无灰尘入户之患，臧获不知，以为房舍扫完，其事毕矣，此后渐及门外，与内绝不相蒙，岂知有顾此失彼之患哉！顺风扬灰，一帚可当十帚，较之未扫更甚。此皆世人所忽，故拈出告之，然未免饶舌。

洒扫二事，势必相因，缺一不可，然亦有时以孤行为妙，是又不可不知。先洒后扫，言其常也，若旦旦如是，则土胶于水，积而不去，日厚一日，砖板受其虚名，而有土阶之实矣。故洒过数日，必留一日勿洒，止令童子轻轻用帚，不致扬尘，是数日所积者一朝去之，则水土交相为用，而不交相为害矣。

藏垢纳污

欲营精洁之房，先设藏垢纳污之地。何也？爱精喜洁之士，一物不整齐，即如目中生刺，势必去之而后已。然一人之身，百工

之所为备，能保物物皆精乎？且如文人之手，刻不停批；绣女之躬，时难罢刺。唾绒满地，金屋为之不光；残稿盈庭，精舍因而欠好。是极韵之物，尚能使人不韵，况其他乎？故必于精舍左右，另设小屋一间，有如复道，俗名“套房”是也。凡有败笺弃纸、垢砚秃毫之类，卒急不能料理者，姑置其间，以俟暇时检点，妇人之闺阁亦然，残脂剩粉无日无之，净之将不胜其净也。此房无论大小，但期必备。如贫家不能办此，则以箱笼代之，案旁榻后皆可置。先有容拙之地，而后能施其巧，此藏垢之不容已也。至于纳污之区，更不可少。凡人有饮即有溺，有食即有便。如厕之时尚少，可不溷厕之外，不必另筹去路。至于溺之为数，一日不知凡几，若不择地而遗，则净土皆成粪壤，如或避洁就污，则往来仆仆，是率天下而路也。此为寻常好洁者言之。若夫文人运腕，每至得意疾书之际，机锋一转，则断不可续。然而寝食可废，便溺不可废也。“官急不如私急”，俗不云乎？常有得句将书而阻于溺，及溺后觅之杳不可得者，予往往验之，故营此最急。当于书室之旁，穴墙为孔，嵌以小竹，使遗在内而流于外，秽气罔闻，有若未尝溺者，无论阴晴寒暑，可以不出户庭。此予自为计者，而亦举以示人，其无隐讳可知也。

窗 栏 第 二

吾观今世之人，能变古法为今制者，其惟窗栏二事乎！窗栏之制，日新月异，皆从成法中变出。“腐草为萤”，实具至理，如此则造物生人，不枉付心胸一片。但造房建宅与置立窗轩，同是一理，明于此而暗于彼，何其有聪明而不善扩乎？予往往自制窗栏之格，口授工匠使为之，以为极新极异矣，而偶至一处，见其已设者，先得我心之同然，因自笑为辽东白豕。独房舍之制不然，

求为同心甚少。门窗二物，新制既多，予不复赘，恐其又蹈白豕辙也。惟约略言之，以补时人之偶缺。

制体宜坚

窗棂以明透为先，栏杆以玲珑为主，然此皆属第二义；具首重者，止在一字之坚，坚而后论工拙，尝有穷工极巧以求尽善，乃不逾时而失头堕趾，反类画虎未成者，计其新而不计其旧也。总其大纲，则有二语：宜简不宜繁，宜自然不宜雕斫。凡事物之理，简斯可继，繁则难久，顺其性者必坚，戕其体者易坏。木之为器，凡合筭使就者，皆顺其性以为之者也；雕刻使成者，皆戕其体而为之者也；一涉雕镂，则腐朽可立待矣。故窗棂栏杆之制，务使头头有筭，眼眼着撒。然头眼过密，筭撒太多，又与雕镂无异，仍是戕其体也，故又宜简不宜繁。根数愈少愈佳，少则可坚；眼数愈密愈贵，密则纸不易碎。然既少矣，又安能密？曰：此在制度之善，非可以笔舌争也。窗栏之体，不出纵横、欹斜、屈曲三项，请以萧斋制就者，各图一则以例之。

纵 横 格

是格也，根数不多，而眼亦未尝不密，是所谓头头有筭，眼眼着撒者，雅莫雅于此，坚亦莫坚于此矣。是从陈腐中变出。由此推之，则旧式可化为新者，不知凡几。但取其简者、坚者、自然者变之，事事以雕镂为戒，则人工渐去，而天巧自呈矣。

此格甚佳，为人意想所不到，因其平而有筭者，可以着实，尖而无筭者，没处生根故也。然赖有躲闪法，能令外似悬空，内偏着实，止须善藏其拙耳。当于尖木之后，另设坚固薄板一条，托

于其后，上下投笋，而以尖木钉于其上，前看则无，后观则有。其能幻有为无者，全在油漆时善于着色。如栏杆之本体用朱，则所托之板另用他色。他色亦不得泛用，当以屋内墙壁之色为色。如墙系白粉，此板亦作粉色；壁系青砖，此板亦肖砖色。自外观之，止见朱色之纹，而与墙壁相同者，混然一色，无所辨矣。至栏杆之内向者，又必另为一色，勿与外同，或青或蓝，无所不可，而薄板向内之色，则当与之相合。自内观之，又别成一种文理，较外尤可观也。

此格最坚，而又省费，名“桃花浪”，又名“浪里梅”。曲木另造，花另造，俟曲木入柱投笋后，始以花塞空处，上下着钉，借此联络，虽有大力者挠之，不能动矣。花之内、外，宜作两种，一作桃，一作梅，所云“桃花浪”、“浪里梅”是也。浪色亦忌雷同，或蓝或绿，否则同是一色，而以深浅别之，使人一转足之间，景色判然。是以一物幻为二物，又未尝于本等材料之外，另费一钱。凡予所以，强半皆若是也。

取 景 在 借

开窗莫妙于借景，而借景之法，予能得其三昧。向犹私之，乃今嗜痂者众，将来必多依样葫芦，不若公之海内，使物物尽效其灵，人人均有其乐。但期于得意酣歌之顷，高叫笠翁数声，使梦魂得以相傍，是人乐而我亦与焉，为愿足矣。向居西子湖滨，欲购湖舫一只，事事犹人，不求稍异，止以窗格异之。人询其法，予曰：四面皆实，独虚其中，而为“便面”之形。实者用板，蒙以灰布，勿露一隙之光；虚者用木作框，上下皆曲而直其两旁，所谓便面是也。纯露空明，勿使有纤毫障翳。是船之左右，止有二便面，便面之外，无他物矣。坐于其中，则两岸之湖光山色、寺

观浮屠、云烟竹树，以及往来之樵人牧竖、醉翁游女，连人带马尽入便面之中，作我天然图画。且又时时变幻，不为一定之形。非特舟行之际，摇一橹，变一像，撑一篙，换一景，即系缆时，风摇水动，亦刻刻异形。是一日之内，现出百千万幅佳山佳水，总以便面收之。而便面之制，又绝无多费，不过曲木两条、直木两条而已。世有掷尽金钱，求为新异者，其能新异若此乎？此窗不但娱己，兼可娱人。不特以舟外无穷之景色摄入舟中，兼可以舟中所有之人物，并一切几席杯盘射出窗外，以备来往游人之玩赏。何也？以内视外，固是一幅便面山水；而以外视内，亦是一幅扇头人物。譬如拉妓邀僧，呼朋聚友，与之弹棋观画，分韵拈毫，或饮或歌，任眠任起，自外观之，无一不同绘事。同一物也，同一事也，此窗未设以前，仅作事物观；一有此窗，则不烦指点，人人俱作画图观矣。夫扇面非异物也，肖扇面为窗，又非难事也。世人取像乎物，而为门为窗者，不知凡几，独留此眼前共见之物，弃而弗取，以待笠翁，詎非咄咄怪事乎？所恨有心无力，不能办此一舟，竟成欠事。兹且移居白门，为西子湖之薄幸人矣。此愿茫茫，其何能遂？不得已而小用其机，置此窗于楼头，以窥钟山气色，然非创始之心，仅存其制而已。予又尝作观山虚牖，名“尺幅窗”，又名“无心画”，姑妄言之。滔白轩中，后有小山一座，高不逾丈，宽止及寻，而其中则有丹崖碧水，茂林修竹，鸣禽响瀑，茅屋板桥，凡山居所有之物，无一不备。盖因善塑者肖予一像，神气宛然，又因予号笠翁，顾名思义，而为把钓之形。予思既执纶竿，必当坐之矶上，有石不可无水，有水不可无山，有山有水，不可无笠翁息钓归休之地，遂营此窟以居之。是此山原为像设，初无意于为窗也。后见其物小而蕴大，有“须弥芥子”之义，终日坐观，不忍阖牖，乃瞿然曰：“是山也，而可以作画；是画也，而可以为窗；不过损予一日杖头钱，为装潢之具耳。”遂命童子裁纸数幅，以为画之头尾，及左右镶边。头尾贴于窗之上下，镶边贴

于两旁，俨然堂画一幅，而但虚其中。非虚其中，欲以屋后之山代之也。坐而观之，则窗非窗也，画也；山非屋后之山，即画上的山也。不觉狂笑失声，妻孥群至，又复笑予所笑，而“无心画”、“尺幅窗”之制，从此始矣。予又尝取枯木数茎，置作天然之牖，名曰“梅窗”。生平制作之佳，当以此为第一。己酉之夏，骤涨滔天，久而不涸，斋头淹死榴、橙各一株，伐而为薪，因其坚也。刀斧难入，卧于阶除者累日。予见其枝柯盘曲，有似古梅，而老干又具盘错之势，似可取而为器者，因筹所以用之。是时栖云谷中幽而不明，正思辟牖，乃幡然曰：“道在是矣！”遂语工师，取老干之近直者，顺其本来，不加斧凿，为窗之上下两旁，是窗之外廓具矣。再取枝柯之一面盘曲、一面稍平者，分作梅树两株，一从上生而倒垂，一从下生而仰接，其稍平之一面则略施斧斤，去其皮节而向外，以便糊纸；其盘曲之一面，则匪特尽全其天，不稍戕斫，并疏枝细梗而留之。既成之后，剪彩作花，分红梅、绿萼二种，缀于疏枝细梗之上，俨然活梅之初着花者。同人见之，无不叫绝。予之心思，讫于此矣。后有所作，当亦不过是矣。

便面不得于舟，而用于房舍，是屈事矣。然有移天换日之法在，亦可变昨为今，化板成活，俾耳目之前，刻刻似有生机飞舞，是亦未尝不妙，止费我一番筹度耳。予性最癖，不喜盆内之花，笼中之鸟，缸内之鱼，乃案上有座之石，以其局促不舒，令人作囚鸾紫凤之想。故盆花自幽兰、水仙而外，未尝寓目。鸟中之画眉，性酷嗜之，然必另出己意而为笼，不同旧制，务使不见拘囚之迹而后已。自设便面以后，则生平所弃之物，尽在所取。从来作便面者，凡山水人物、竹石花鸟以及昆虫，无一不在所绘之内，故设此窗于屋内，必先于墙外置板，以备承物之用。一切盆花笼鸟、蟠松怪石，皆可更换置之。如盆兰吐花，移之窗外，即是一幅便面幽兰；盎菊舒英，纳之牖中，即是一幅扇头佳菊。或数日一更，或一日一更；即一日数更，亦未尝不可。但须遮蔽下段，勿露盆

盎之形。而遮蔽之物，则莫妙于零星碎石，是此窗家家可用，人人可办，诂非耳目之前第一乐事？得意酣歌之顷，可忘作始之李笠翁乎？

湖 舫 式（一）

此湖舫式也。不独西湖，凡居名胜之地，皆可用之。但便面止可观山临水，不能障雨蔽风，是又宜筹退步，以补前说之不逮。退步云何？外设推板，可开可阖，此易为之事也。但纯用推板，则幽而不明；纯用明窗，又与扇面之制不合，须以板内嵌窗之法处之。其法维何？曰：即仿梅窗之制，以制窗棂。亦备其式于右。

四围用板者，既取其坚，又省制棂装花人工之半也。中作花树者，不失扇头图画之本色也。用直棂间于其中者，无此则花树无所倚靠，即勉强为之，亦浮脆而难久也。棂不取直，而作欹斜之势，又使上宽下窄者，欲肖扇面之折纹；且小者可以独扇，大则必分双扇，其中间合缝处，糊纱糊纸，无直木以界之，则纱与纸无所依附故也。若是，则棂与花树纵横相杂，不几泾渭难分，而求工反拙乎？曰：不然。有两法盖藏，勿虑也。花树粗细不一，其势莫妙于参差，棂则极匀，而又贵乎极细，须以极坚之木为之，一法也；油漆并着色之时，棂用白粉，与糊窗之纱纸同色，而花树则绘五彩，俨然活树生花，又一法也。若是泾渭自分，而使面与花，判然有别矣。梅花止备一种，此外或花或鸟，但取简便者为之，勿拘一格。惟山水人物，必不可用。○板与花棂俱另制，制就花棂，而后以板镶之。即花与棂，亦难合造，须使花自花而棂自棂，先分后合。其连接处，各损少许以就之，或以钉钉，或以胶粘，务期可久。

诸式止备其概，余可类推。然此皆为窗外无景，求天然者不得，故以人力补之；若远近风物尽有可观，则焉用此碌碌为哉？昔

人云：“会心处正不在远。”若能实具一段闲情、一双慧眼，则过目之物尽是画图，入耳之声无非诗料。譬如我坐窗内，人行窗外，无论见少年女子是一幅美人图，即见老嫗白叟扶杖而来，亦是名人画幅中必不可无之物；见婴儿群戏是一幅百子图，即见牛羊并牧、鸡犬交哗，亦是词客文情内未尝偶缺之资。“牛渡马渤，尽入药笼。”予所制便面窗，即雅人韵士之药笼也。

此窗若另制纱窗一扇，绘以灯色花鸟，至夜篝灯于内，自外视之，又是一盏扇面灯。即日间自内视之，光彩相照，亦与观灯无异也。

凡置此窗之屋，进步宜深，使座客观山之地去窗稍远，则窗之外廓为画，画之内廓为山，山与画连，无分彼此，见者不问而知为天然之画矣。浅促之屋，坐在窗边，势必倚窗为栏，身之大半出于窗外，但见山而不见画，则作者深心有时埋没，非尽善之制也。

尺幅窗图式，最难摹写。写来非似真画，即似真山，非画上山与山中之画也。前式虽工，虑观者终难了悟，兹再绘一纸，以作副墨。且此窗虽多开少闭，然亦间有闭时；闭时用他榻他棂，则与画意不合，丑态出矣。必须照式大小，作木榻一扇，以名画一幅裱之，嵌入窗中，又是一幅真画，并非“无心画”，与“尺幅窗”矣。但观此式，自能了然。

裱榻如裱回屏，托以麻布及厚纸，薄则明而有光，不成画矣。

制此之法，总论已备之矣，其略而不详者，止有取老干作外廓一事。外廓者，窗之四面，即上下两旁是也。若以整木为之，则向内者古朴可爱，而向外一面屈曲不平，以之着墙，势难贴伏。必取整木一段，分中锯开，以有锯路者着墙，天然未斫者向内，则天巧人工，俱有所用之矣。

墙壁第三

“峻宇雕墙”，“家徒壁立”，昔人贫富，皆于墙壁间辨之。故富人润屋，贫士结庐，皆自墙壁始。墙壁者，内外攸分而人我相半者也。俗云：“一家筑墙，两家好看。”居室器物之有公道者，惟墙壁一种，其余一切皆为我之学也。然国之宜固者城池，城池固而国始固；家之宜坚者墙壁，墙壁坚而家始坚。其实为人即是为己，人能以治墙壁之一念治其身心，则无往而不利矣。人笑予止务闲情，不喜谈禅讲学，故偶为是说以解嘲，未审有当于理学名贤及善知识否也。

界 墙

界墙者，人我公私之畛域，家之外廓是也。莫妙于乱石垒成，不限大小方圆之定格，垒之者人工，而石则造物生成之本质也。其次则为石子。石子亦系生成，而次于乱石者，以其有圆无方，似执一见，虽属天工，而近于人力故耳。然论二物之坚固，亦复有差；若云美观入画，则彼此兼擅其长矣。此惟傍山邻水之处得以有之，陆地平原，知其美而不能致也。予见一老僧建寺，就石工斧凿之余，收取零星碎石几及千担，垒成一壁，高广皆过十仞，嶙峋嵒绝，光怪陆离，大有峭壁悬崖之致。此僧诚韵人也。迄今三十余年，此壁犹时时入梦，其系人思念可知。砖砌之墙，乃八方公器，其理其法，是人皆知，可以置而弗道。至于泥墙土壁，贫富皆宜。极有萧疏雅淡之致，惟怪其跟脚过肥，收顶太窄，有似尖山，又且或进或出，不能如砖墙一截而齐，此皆主人监督之不

善也。若以砌砖墙挂线之法，先定高低出入之痕，以他物建标于外，然后以筑板因之，则有旃墙粉堵之风，而无败壁颓垣之象矣。

女 墙

《古今注》云：“女墙者，城上小墙。一名睥睨，言于城上窥人也。”予以私意释之，此名甚美，似不必定指城垣，凡户以内之及肩小墙，皆可以此名之。盖女者，妇人未嫁之称，不过言其纤小，若定指城上小墙，则登城御敌，岂妇人女子之事哉？至于墙上嵌花或露孔，使内外得以相视，如近时园圃所筑者，益可名为女墙，盖仿睥睨之制而成者也。其法穷奇极巧，如《园冶》所载诸式，殆无遗义矣。但须择其至稳极固者为之，不则一砖偶动，则全壁皆倾，往来负荷者，保无一时误触之患乎？坏墙不足惜，伤人实可虑也。予谓自顶及脚皆砌花纹，不惟极险，亦且大费人工。其所以洞彻内外者，不过使代琉璃屏，欲人窥见室家之好耳。止于人眼所瞩之处，空二三尺，使作奇巧花纹，其高乎此及卑乎此者，仍照常实砌，则为费不多，而又永无误触致崩之患。此丰俭得宜，有利无害之法也。

厅 壁

厅壁不宜太素，亦忌太华。名人尺幅自不可少，但须浓淡得宜，错综有致。予谓裱轴不如实贴。轴虑风起动摇，损伤名迹，实贴则无是患，且觉大小咸宜也。实贴又不如实画，“何年顾虎头，满壁画沧州。”自是高人韵事。予斋头偶仿此制，而又变幻其形，良朋至止，无不耳目一新，低回留之不能去者。因予性嗜禽鸟，而

又最恶樊笼，二事难全，终年搜索枯肠，一悟遂成良法。乃于厅旁四壁，倩四名手，尽写着色花树，而绕以云烟，即以所爱禽鸟，蓄于虬枝老干之上。画止空迹，鸟有实形，如何可蓄：曰：不难，蓄之须自鹦鹉始。从来蓄鹦鹉者必用铜架，即以铜架去其三面，止存立脚之一条，并饮水啄粟之二管。先于所画松枝之上，穴一小小壁孔，后以架鹦鹉者插入其中，务使极固，庶往来跳跃，不致动摇。松为着色之松，鸟亦有色之鸟，互相映发，有如一笔写成。良朋至止，仰观壁画，忽见枝头鸟动，叶底翎张，无不色变神飞，诧为仙笔；乃惊疑未定，又复载飞载鸣，似欲翱翔而下矣。谛观熟视，方知个里情形，有不低掌叫绝，而称巧夺天工者乎？若四壁尽蓄鹦鹉，又忌雷同，势必间以他鸟。鸟之善鸣者，推画眉第一。然鹦鹉之笼可去，画眉之笼不可去也，将奈之何？予又有一法：取树枝之拳曲似龙者，截取一段，密者听其自如，疏者网以铁线，不使太疏，亦不使太密，总以不致飞脱为主。蓄画眉于中，插之亦如前法。此声方歇，彼喙复开；翠羽初收，丹睛复转。因禽鸟之善鸣善啄，觉花树之亦动亦摇；流水不鸣而似鸣，高山是寂而非寂。座客别去者，皆作殷浩书空，谓咄咄怪事，无有过此者矣。

书 房 壁

书房之壁，最宜潇洒。欲其潇洒，切忌油漆。油漆二物，俗物也，前人不得已而用之，非好为是沾沾者。门户窗棂之必须油漆，蔽风雨也；厅柱榱桷之必须油漆，防点污也。若夫书室之内，人迹罕至，阴雨弗浸，无此二患而亦蹈此辙，是无刻不在桐腥漆气之中，何不并漆其身而为厉乎？石灰垩壁，磨使极光，上着也；其次则用纸糊。纸糊可使屋柱窗棂共为一色，即壁用灰垩，柱上

亦须纸糊，纸色与灰，相去不远耳。壁间书画自不可少，然粘贴太繁，不留余地，亦是文人俗态。天下万物，以少为贵。步幃非不佳，所贵在偶尔一见，若王恺之四十里，石崇之五十里，则是一日中哄市，锦绣罗列之肆廛而已矣。看到繁缚处，有不生厌倦者哉？昔僧玄览往荆州陟岵寺，张璪画古松于斋壁，符载赞之，卫象诗之，亦一时三绝，览悉加巫焉。人问其故，览曰：“无事疥吾壁也。”诚高僧之言，然未免太甚。若近时斋壁，长笺短幅尽贴无遗，似冲繁道上之旅肆，往来过客无不留题，所少者只有一笔。一笔维何？“某年月日某人同某在此一乐”是也。此真疥壁，吾请以玄览之药药之。

糊壁用纸，到处皆然，不过满房一色白而已矣。予怪其物而不化，窃欲新之。新之不已，又以薄蹄变为陶冶，幽斋化为窑器，虽居室内，如在壶中，又一新人观听之事也。先以酱色纸一层，糊壁作底，后用豆绿云母生笺，随手裂作零星小块，或方或扁，或短或长，或三角或四五角，但勿使圆，随手贴于酱色纸上，每缝一条，必露出酱色纸一线，务令大小错杂，斜正参差，则贴成之后，满房皆冰裂碎纹，有如哥窑美器。其块之大者，亦可题诗作画，置于零星小块之间，有如铭钟勒卣，盘上作铭，无一不成韵事。问予所费几何，不过于寻常纸价之外，多一二剪合之工而已。同一费钱，而有庸腐新奇之别，止在稍用其心。“心之官则思。”如其不思，则焉用此心为哉？

糊纸之壁，切忌用板。板干则裂，板裂而纸碎矣。用木条纵横作橐，如围屏之骨子然。前人制物备用，皆经屡试而后得之，屏不用板而用木橐，即是故也。即如糊刷用棕，不用他物，其法亦经屡试，舍此而另换一物，则纸与糊两不相能，非厚薄之不均，即刚柔之太过，是天生此物以备此用，非人不能取而予之。人知巧莫巧于古人，孰知古人于此亦大费辛勤，皆学而知之，非生而知之者也。

壁间留隙地，可以代櫺。此仿伏生藏书于壁之义，大有古风，但所用有不合于古者。此地可置他物，独不可藏书，以砖土性湿，容易发潮，潮则生蠹，且防朽烂故也。然则古人藏书于壁，殆虚语乎？曰：不然。东南西北，地气不同，此法止宜于西北，不宜于东南。西北地高而风烈，有穴地数丈而始得泉者，湿从水出，水既不得，湿从何来？即使有极潮之地，而加以极烈之风，未有不返湿为燥者。故壁间藏书，惟燕赵秦晋则可，此外皆应避之。即藏他物，亦宜时开时阖，使受风吹；久闭不开，亦有霉湿生虫之患。莫妙于空洞其中，止设托板，不立门扇，仿佛书架之形，有其用而不侵吾地，且有磐石之固，莫能摇动。此妙制善算，居家必不可无者。予又有壁内藏灯之法，可以养目，可以省膏，可以一物而备两室之用，取以公世，亦贫士利人之一端也。我辈长夜读书，灯光射目，最耗元神。有用瓦灯贮火，留一隙之光，仅照书本，余皆闭藏于内而不用者。予怪以有用之光置无用之地，犹之暴殄天物，因效匡衡凿壁之义，于墙上穴一小孔，置灯彼屋而光射此房，彼行彼事，我读我书，是一灯也，而备全家之用，又使目力不竭于焚膏，较之瓦灯，其利奚止十倍？以赠贫士，可当分财。使予得拥厚资，其不吝亦如是也。

联匾第四

堂联斋匾，非有成规。不过前人赠人以言，多则书于卷轴，少则挥诸扇头；若止一二字、三四字，以及偶语一联，因其太少也，便面难书，方策不满，不得已而大书于木。彼受之者，因其坚巨难藏，不便纳之笥中，欲举以示人，又不便出诸怀袖，亦不得已而悬之中堂，使人共见。此当日作始者偶然为之，非有成格定制，画一而不可移也。詎料一人为之，千人万人效之，自昔徂今，莫

知稍变。夫礼乐制自圣人，后世莫敢窜易，而殷因夏礼，周因殷礼，尚有损益于其间，矧器玩竹木之微乎？予亦不必大肆更张，但效前人之损益可耳。錙习繁多，不能尽革，姑取斋头已设者，略陈数则，以例其余。非欲举世则而效之，但望同调者各出新裁，其聪明什佰于我。投砖引玉，正不知导出几许神奇耳。

有诘予者曰：观子联匾之制，佳则佳矣，其如挂一漏万何？由子所为者而类推之，则《博古图》中，如樽罍、琴瑟、几仗、盘盂之属，无一不可肖像而为之，胡仅以寥寥数则为也？予曰：不然。凡予所为者，不徒取异标新，要皆有所取义。凡人操觚握管，必先择地而后书之，如古人种蕉代纸，刻竹留题，册上挥毫，卷头染翰，剪桐作诏，选石题诗，是之数者，皆书家固有之物，不过取而予之，非有蛇足于其间也。若不计可否而混用之，则将来牛鬼蛇神无一不备，予其作俑之人乎！○图中所载诸名笔，系绘图者勉强肖之，非出其人之手。缩巨为细，自失原神，观者但会其意可也。

蕉 叶 联

蕉叶题诗，韵事也；状蕉叶为联，其事更韵。但可置于平坦贴服之处，壁间门上皆可用之，以之悬柱则不宜，阔大难掩故也。其法先画蕉叶一张于纸上，授木工以板为之，一样二扇，一正一反，即不雷同。后付漆工，令其满灰密布，以防碎裂。漆成后，始书联句，并画筋纹。蕉色宜绿，筋色宜黑，字则宜填石黄，始觉陆离可爱，他色皆不称也。用石黄乳金更妙，全用金字则太俗矣。此匾悬之粉壁，其色更显，可称“雪里芭蕉”。

此 君 联

“宁可食无肉，不可居无竹。”竹可须臾离乎？竹之可为器也，自楼阁几榻之大，以至筥奩杯箸之微，无一不经采取，独至为联为匾诸韵事弃而弗录，岂此君之幸乎？用之请自予始。截竹一筒，剖而为二，外去其青，内铲其节，磨之极光，务使如镜，然后书以联句，令名手镌之，掺以石青或石绿，即墨字亦可。以云乎雅，则未有雅于此者；以云乎俭，亦未有俭于此者。不宁惟是，从来柱上加联，非板不可，柱圆板方，柱窄板阔，彼此抵牾，势难贴服，何如以圆合圆，纤毫不谬，有天机凑泊之妙乎？此联不用铜钩挂柱，用则多此一物，是为赘瘤。止用铜钉上下二枚，穿眼实钉，勿使动移。其穿眼处，反择有字处穿之，钉钉后，仍用掺字之色补于钉上，混然一色，不见钉形尤妙。钉蕉叶联亦然。

碑 文 额

三字额，平书者多，间有直书者，匀作两行。匾用方式，亦偶见之。然皆白地黑字，或青绿字。兹效石刻为之，嵌于粉壁之上，谓之匾额可，谓之碑文亦可。名虽石，不果用石，用石费多而色不显，不若以木为之。其色亦不仿墨刻之色，墨刻色暗，而远视不甚分明。地用黑漆，字填白粉，若是则值既廉，又使观者耀目。此额惟墙上开门者宜用之，又须风雨不到之处。客之至者，未启双扉，先立漆书壁经之下，不待褰帷入室，已知为文士之庐矣。

手 卷 額

額身用板，地用白粉，字用石青石绿，或用炭灰代墨，无一不可。与寻常匾式无异，止增圆木二条，缀于额之两旁，若轴心然。左画锦纹，以像装潢之色；右则不宜太工，但像托画之纸色而已。天然图卷，绝无穿凿之痕，制度之善，庸有过于此者乎？眼前景，手头物，千古无人计及，殊可怪也。

册 页 匾

用方板四块，尺寸相同，其后以木绐之。断而使续，势取乎曲，然勿太曲。边画锦纹，亦像装潢之色。止用笔画，勿用刀镌，镌者粗略，反不似笔墨精工；且和油入漆，着色为难，不若画色之可深可浅，随取随得也。字则必用削斲。各有所宜，混施不可。

虚 白 匾

“虚室生白”，古语也。且无事不妙于虚，实则板矣。用薄板之坚者，贴字于上，镂而空之，若制糖食果馅之木印。务使二面相通，纤毫无障。其无字处，坚以灰布，漆以退光。俟既成后，贴洁白绵纸一层于字后。木则黑而无泽，字则白而有光，既取玲珑，又类墨刻，有匾之名，去其迹矣。但此匾不宜混用，择房舍之内暗外明者置之。若屋后有光，则先穴通其屋，以之向外，不则置于入门之处，使正面向内。从来屋高门矮，必增横板一块于门之上，以此代板，谁曰不佳？

石 光 匾

即“虚白”一种，同实而异名。用于磊石成山之地，择山石偶断外，以此续之。亦用薄板一块，镂字既成，用漆涂染，与山同色，勿使稍异。其字旁凡有隙地，即以小石补之，粘以生漆，勿使见板。至板之四围，亦用石补，与山石合成一片，无使有褻渍之痕，竟似石上留题，为后人凿穿以存其迹者。字后若无障碍，则使通天，不则亦贴绵纸，取光明而塞障碍。

秋 叶 匾

御沟题红，千古佳事；取以制匾，亦觉有情。但制红叶与制绿蕉有异；蕉叶可大，红叶宜小；匾取其横，联妙在直。是亦不可不知也。

山 石 第 五

幽斋磊石，原非得已。不能致身岩下，与木石居，故以一卷代山，一勺代水，所谓无聊之极思也。然能变城市为山林，招飞来峰使居平地，自是神仙妙术，假手于人以示奇者也，不得以小技目之。且磊石成山，另是一种学问，别是一番智巧。尽有丘壑填胸、烟云绕笔之韵士，命之画水题山，顷刻千岩万壑，及倩磊斋头片石，其技立穷，似向盲人问道者。故从来叠山名手，俱非能诗善绘之人。见其随举一石，颠倒置之，无不苍古成文，纡回入画，此正造物之巧于示奇也。譬之扶乩召仙，所题之诗与所判之字，随手便成法帖，落笔尽是佳词，询之召仙术士，尚有不明

其义者。若出自工书善咏之手，焉知不自人心捏造？妙在不善咏者使咏，不工书者命书，然后知运动机关，全由神力。其叠山磊石，不用文人韵士，而偏令此辈擅长者，其理亦若是也。然造物鬼神之技，亦有工拙雅俗之分，以主人之去取为去取。主人雅而喜工，则工且雅者至矣；主人俗而容拙，则拙而俗者来矣。有费累万金钱，而使山不成山、石不成石者，亦是造物鬼神作祟，为之摹神写像，以肖其为人也。一花一石，位置得宜，主人神情已见乎此矣，奚俟察言观貌，而后识别其人哉？

大 山

山之小者易工，大者难好。予遨游一生，遍览名园，从未见有盈亩累丈之山，能无补缀穿凿之痕，遥望与真山无异者。犹之文章一道，结构全体难，敷陈零段易。唐宋八大家之文，全以气魄胜人，不必句栴字箠，一望而知为名作。以其先有成局，而后修饰词华，故粗览细观同一致也。若夫间架未立，才自笔生，由前幅而生中幅，由中幅而生后幅，是谓以文作文，亦是水到渠成之妙境；然但可近视，不耐远观，远观则褻褻缝纫之痕出矣。书画之理亦然。名流墨迹，悬在中堂，隔寻丈而观之，不知何者为山，何者为水，何处是亭台树木，即字之笔画杳不能辨，而只览全幅规模，便足令人称许。何也？气魄胜人，而全体章法之不谬也。至于累石成山之法，大半皆无成局，犹之以文作文，逐段滋生者耳。名手亦然，矧庸匠乎？然则欲累巨石者，将如何而可？必俟唐宋诸大家复出，以八斗才人，变为五丁力士，而后可使运斤乎？抑分一座大山为数十座小山，穷年俯视，以藏其拙乎？曰：不难。用以土代石之法，既减人工，又省物力，且有天然委曲之妙。混假山于真山之中，使人不能辨者，其法莫妙于此。累高广之山，

全用碎石，则如百衲僧衣，求一无缝处而不得，此其所以不耐观也。以土间之，则可泯然无迹，且便于种树。树根盘固，与石比坚，且树大叶繁，混然一色，不辨其为谁石谁土。立于真山左右，有能辨为积累而成者乎？此法不论石多石少，亦不必定求土石相半，土多则是土山带石，石多则是石山带土。土石二物原不相离，石山离土，则草木不生，是童山矣。

小 山

小山亦不可无土，但以石作主，而土附之。土之不可胜石者，以石可壁立，而土则易崩，必仗石为藩篱故也。外石内土，此从来不易之法。

言山石之美者，俱在透、漏、瘦三字。此通于彼，彼通于此，若有道路可行，所谓透也；石上有眼，四面玲珑，所谓漏也；壁立当空，孤峙无倚，所谓瘦也。然透、瘦二字在在宜然，漏则不应太甚。若处处有眼，则似窑内烧成之瓦器，有尺寸限在其中，一隙不容偶闭者矣。塞极而通，偶然一见，始与石性相符。

瘦小之山，全要顶宽麓窄，根脚一大，虽有美状，不足观矣。

石眼忌圆，即有生成之圆者，亦粘碎石于旁，使有棱角，以避混全之体。

石纹石色取其相同，如粗纹与粗纹当并一处。细纹与细纹宜在一方，紫碧青红，各以类聚是也。然分别太甚，至其相悬接壤处，反觉异同，不若随取随得，变化从心之为便。至于石性，则不可不依；拂其性而用之，非止不耐观，且难持久。石性维何？斜正纵横之理路是也。

石 壁

假山之好，人有同心；独不知为峭壁，是可谓叶公之好龙矣。山之为地，非宽不可；壁则挺然直上，有如劲竹孤桐，斋头但有隙地，皆可为之。且山形曲折，取势为难，手笔稍庸，便貽大方之诮。壁则无他奇巧，其势有若累墙，但稍稍紆回出入之，其体嶙峋，仰观如削，便与穷崖绝壑无异。且山之与壁，其势相因，又可并行而不悖者。凡累石之家，正面为山，背面皆可作壁。匪特前斜后直，物理皆然，如椅榻舟车之类；即山之本性亦复如是，逶迤其前者，未有不崭绝其后，故峭壁之设，诚不可已。但壁后忌作平原，令人一览而尽。须有一物焉蔽之，使座客仰观不能穷其颠末，斯有万丈悬岩之势，而绝壁之名为不虚矣。蔽之者维何？曰：非亭即屋。或面壁而居，或负墙而立，但使目与檐齐，不见石丈人之脱巾露顶，则尽致矣。

石壁不定在山后，或左或右，无一不可，但取其地势相宜。或原有亭屋，而以此壁代照墙，亦甚便也。

石 洞

假山无论大小，其中皆可作洞。洞亦不必求宽，宽则藉以坐人。如其太小，不能容膝，则以他屋联之，屋中亦置小石数块，与此洞若断若连，是使屋与洞混而为一，虽居屋中，与坐洞中无异矣。洞中宜空少许，贮水其中而故作漏隙，使涓滴之声从上而下，旦夕皆然。置身其中者，有不六月寒生，而谓真居幽谷者，吾不信也。

零星小石

贫士之家，有好石之心而无其力者，不必定作假山。一卷特立，安置有情，时时坐卧其旁，即可慰泉石膏肓之癖。若谓如拳之石亦须钱买，则此物亦能效用于人，岂徒为观瞻而设？使其平而可坐，则与椅榻同功；使其斜而可倚，则与栏杆并力；使其肩背稍平，可置香炉茗具，则又可代几案。花前月下，有此待人，又不妨于露处，则省他物运动之劳，使得久而不坏，名虽石也，而实则器矣。且捣衣之砧，同一石也，需之不惜其费；石虽无用，独不可作捣衣之砧乎？王子猷劝人种竹，予复劝人立石；有此君不可无此丈。同一不急之务，而好为是谆谆者，以人之一生，他病可有，俗不可有；得此二物，便可当医，与施药饵济人，同一婆心之自发也。

器 玩 部

制 度 第 一

人无贵贱，家无贫富，饮食器皿，皆所必需。“一人之身，百工之所为备。”子舆氏尝言之矣。至于玩好之物，惟富贵者需之，贫贱之家，其制可以不问。然而粗用之物，制度果精，入于王侯之家，亦可同乎玩好；宝玉之器，磨砢不善，传于子孙之手，货之不值一钱。知精粗一理，即知富贵贫贱同一致也。予生也贱，又罹奇穷，珍物宝玩虽云未尝入手，然经寓目者颇多。每登荣昃之堂，见其辉煌错落者星布棋列，此心未尝不动，亦未尝随见随动，因其材美，而取材以制用者未尽善也。至入寒俭之家，睹彼以柴为扉，以瓮作牖，大有黄虞三代之风，而又怪其纯用自然，不加区画。如瓮可为牖也，取瓮之碎裂者联之，使大小相错，则同一瓮也，而有哥窑冰裂之纹矣。柴可为扉也，取柴之入画者为之，使疏密中窳，则同一扉也，而有农户儒门之别矣。人谓变俗为雅，犹之点铁成金，惟具山林经济者能此，乌可责之一切？予曰：垒雪成狮，伐竹为马，三尺童子皆优为之，岂童子亦抱经济乎？有耳目即有聪明，有心思即有智巧，但苦自画为愚，未尝竭思穷虑以试之耳。

几 案

予初观《燕几图》，服其人之聪明什佰于我，因自置无力，遍求置此者，讯其果能适用与否，卒之未得其人。夫我竭此大段心思，不可不谓经营惨淡，而人莫之则效者，其故何居？以其太涉繁琐，而且无此极大之屋，尽列其间，以观全势故也。凡人制物，务使人人可备，家家可用，始为布帛菽粟之才，不则售冕旒而沽玉食，难乎其为购者矣。故予所言，务舍高远而求卑近。几案之设，予以庀材无资，尚未经营及此。但思欲置几案，其中有三小物必不可少。一曰抽替。此世所原有者也，然多忽略其事，而有设有不设。不知此一物也，有之斯逸，无此则劳，且可藉为容懒藏拙之地。文人所需，如简牍刀锥、丹铅胶糊之属，无一可少，虽曰司之有人，藏之别有其处，究竟不能随取随得，役之如左右手也。予性卞急，往往呼童不至，即自任其劳。书室之地，无论远迂捷，总以举足为烦，若抽替一设，则凡卒急所需之物尽纳其中，非特取之如寄，且若有神物俟乎其中，以听主人之命者。至于废稿残牍，有如落叶飞尘，随扫随有，除之不尽，颇为明窗净几之累，亦可暂时藏纳，以俟祝融，所谓容懒藏拙之地是也。知此则不独书案为然，即抚琴观画、供佛延宾之座，俱应有此。一事有一事之需，一物备一物之用。《诗》云：“童子佩麟”，《鲁论》云：“去丧无所不佩。”人身且然，况为器乎？一曰隔板，此予所独置也。冬月围炉，不能不设几席，火气上炎，每致桌面台心为之碎裂，不可不预为计也。当于未寒之先，另设活板一块，可用可去，衬于桌面之下，或以绳悬，或以钩挂，或于造桌之时，先作机榫以待之，使之待受火气，焦则另换，为费不多。此珍惜器具之婆心，虑其暴殄天物，以惜福也。一曰桌撒。此物不用钱买，但于

匠作挥斤之际，主人费启口之劳，僮仆用举手之力，即可取之无穷，用之不竭。从来几案与地不能两平，挪移之时必相高低长短，而为桌撒，非特寻砖觅瓦时费辛勤，而且相称为难，非损高以就低，即截长而补短，此虽极微极琐之事，然亦同于临渴凿井，天下古今之通病也，请为世人药之。凡人兴造之际，竹头木屑，何地无之？但取其长不逾寸，宽不过指，而一头极薄、一头稍厚者，拾而存之，多多益善，以备挪台撒脚之用。如台脚所虚者少，则止入薄者，而留其有余者于脚外，不则尽数入之。是止一寸之木，而备高低长短数则之用，又未尝费我一钱，岂非极便于人之事乎？但须加以油漆，勿露竹头木屑之本形。何也？一则使之与桌同色，虽有若无；一则恐童子扫地之时，不能记忆，仍谬认为竹头木屑而去之，势必朝朝更换，将亦不胜其烦；加以油漆，则知为有用之器而存之矣。只此极细一着，而有两意存焉，况大者乎？劳一人以逸天下，予非无功于世者也。

椅 机

器之坐者有三：曰椅，曰机，曰凳。三者之制，以时论之，今胜于古，以地论之，北不如南；维扬之木器，姑苏之竹器，可谓甲于古今，冠乎天下矣，予何能赘一词哉！但有二法未备，予特创而补之，一曰暖椅，一曰凉机。予冬月著书，身则畏寒，砚则苦冻，欲多设盆炭，使满室俱温，非止所费不貲，且几案易于生尘，不终日而成灰烬世界。若止设大小二炉以温手足，则厚于四肢而薄于诸体，是一身而自分冬夏，并耳目心思，亦可自号孤臣孽子矣。计万全而筹尽适，此暖椅之制所由来也。一物而充数物之用，所利于人者，不止御寒而已也。盛暑之月，流胶铄金，以手按之，无物不同汤火，况木能生此者乎？凉机亦同他机，但机

面必空其中，有如方匣，四围及底，俱以油灰嵌之，上覆方瓦一片。此瓦须向窑内定烧，江西福建为最，宜兴次之，各就地之远近，约同志数人，敛出其资，倩人携带，为费亦无多也。先汲凉水贮杌内，以瓦盖之，务使下面着水，其冷如冰，热复换水，水止数瓢，为力亦无多也。其不为椅而为杌者，夏月少近一物，少受一物之暑气，四面无障，取其透风；为椅则上段之料势必用木，两胁及背又有物以障之，是止顾一臀而周身皆不问矣。此制易晓，图说皆可不备。

暖 椅 式

如太师椅而稍宽，彼止取容臀，而此则周身全纳故也。如睡翁椅而稍直，彼止利于睡，而此则坐卧咸宜，坐多而卧少也。前后置门，两旁实镶以板，臀下足下俱用栅。用栅者，透火气也；用板者，使暖气纤毫不泄也；前后置门者，前进入而后进火也，然欲省事，则后门可以不设，进入之处亦可以进火。此椅之妙，全在安抽替于脚栅之下。只此一物，御尽奇寒，使五官四肢均受其利而弗觉。另置扶手匣一具，其前后尺寸，倍于轿内所用者。入门坐定，置此匣于前，以代几案。倍于轿内所用者，欲置笔砚及书本故也。抽替以板为之，底嵌薄砖，四围镶铜。所贮之灰，务求极细，如炉内烧香所用者。置炭其中，上以灰覆，则火气不烈而满座皆温，是隆冬时别一世界。况又为费极廉，自朝抵暮，止用小炭四块，晓用二块至午，午换二块至晚。此四炭者，秤之不满四两，而一日之内，可享室暖无冬之福，此其利于身者也。若至利于身而无益于事，仍是宴安之具，此则不然。扶手用板，镂去掌大一片，以极薄端砚补之，胶以生漆，不问而知火气上蒸，砚石常暖，永无呵冻之劳，此又利于事者也。不宁惟是，炭上加灰，灰上置香，坐斯椅也，扑鼻而来者，只觉芬芳竟日，是椅也，而

又可以代炉。炉之为香也散，此之为香也聚，由是观之，不止代炉，而且差胜于炉矣。有人斯有体，有体斯有衣，焚此香也，自下而升者能使氤氲透骨，是椅也而又可代薰笼。薰笼之受衣也，止能数件；此物之受衣也，遂及通身。迹是论之，非止代一薰笼，且代数薰笼矣。倦而思眠，倚枕可以暂息，是一有座之床。饥而就食，凭几可以加餐，是一无足之案。游山访友，何烦另觅肩舆，只须加以柱杠，覆以衣顶，则冲寒冒雪，体有余温，子猷之舟可弃也，浩然之驴可废也，又是一可坐可眠之轿。日将暮矣，尽纳枕簟于其中，不须臾而被窝尽热；晓欲起也，先置衣履于其内，未转睫而襦袴皆温。是身也，事也，床也，案也，轿也，炉也，薰笼也，定省晨昏之孝子也，送暖偎寒之贤妇也，总以一物焉代之。苍颉造字而天雨粟，鬼夜哭，以造化灵秘之气泄尽而无遗也。此制一出，得无重犯斯忌，而重杞人之忧乎？

床 帐

人生百年，所历之时，日居其半，夜居其半。日间所处之地，或堂或庑，或舟或车，总无一定之在，而夜间所处，则止有一床，是床也者，乃我半生相共之物，较之结发糟糠，犹分先后者也。人之待物，其最厚者，当莫过此。然怪当世之人，其于求田问舍，则性命以之，而寝处晏息之地，莫不务从苟简，以其只有己见，而无人见故也。若是，则妻妾婢媵是人中之榻也，亦因己见而人不见，悉听其为无盐嫫母，蓬头垢面而莫之讯乎？予则不然。每迁一地，必先营卧榻而后及其他，以妻妾为人中之榻，而床第乃榻中之人也。欲新其制，苦乏匠资；但于修饰床帐之具，经营寝处之方，则未尝不竭尽绵力，犹之贫士得妻，不能变村妆为国色，但令勤加盥栉，多施膏沐而已。其法维何？一曰床令生花，二曰帐

使有骨，三曰帐宜加锁，四曰床要着裙。曷云“床令生花药”？夫瓶花盆卉，文人案头所时有也，日则相亲，夜则相背，虽有天香扑鼻，国色昵人，一至昏黄就寝之时，即欲不为纨扇之捐，不可得矣。殊不知白昼闻香，不若黄昏嗅味。白昼闻香，其香仅在口鼻；黄昏嗅味，其味直入梦魂。法于床帐之内先设托板，以为坐花之具；而托板又勿露板形，妙在鼻受花香，俨若身眠树下，不知其为妆造也者。先为小柱二根，暗钉床后，而以帐悬其外。托板不可太大，长止尺许，宽可数寸，其下又用小木数段，制为三角架子，用极细之钉，隔帐钉于柱上，而后以板架之，务使极固。架定之后，用彩色纱罗制成一物，或像怪石一卷，或作彩云数朵，护于板外以掩其形。中间高出数寸，三面使与帐平，而以线缝其上，竟似帐上绣出之物，似吴门堆花之式是也。若欲全体相称，则或画或绣，满帐俱作梅花，而以托板为虬枝老干，或作悬崖突出之石，无一不可。帐中有此，凡得名花异卉可作清供者，日则与之同堂，夜则携之共寝。即使群芳偶缺，万卉将穷，又有炉内龙涎、盘中佛手与木瓜、香楠等物可以相继。若是，则身非身也，蝶也，飞眠宿食尽在花间；人非人也，仙也，行起坐卧无非乐境。予尝于梦酣睡足、将觉未觉之时，忽嗅蜡梅之香，咽喉齿颊尽带幽芬，似从脏腑中出，不觉身轻欲举，谓此身必不复在人间世矣。既醒，语妻孥曰：“我辈何人，遽有此乐，得无折尽平生之福乎？”妻孥曰：“久贱常贫，未必不由于此。”此实事，非欺人语也。曷云“帐使有骨”？床居外，帐居内，常也。亦有反此旧制，而使帐出床外者，善则善矣，其如夏月驱蚊，匿于床栏曲折之处，有若负嵎，欲求美观，而以膏血殉之，非长策也，不若仍从旧制。其不从旧制，而使帐出床外者，以床有端正之体，帐无方直之形，百计撑持，终难服帖，总以四角之近柱者软而无骨，不能肖柱以为形，有犄角牴牾之势也，故须别为赋形，而使之有骨。用不粗不细之竹，制为一顶及四柱，俟帐已挂定而后撑之，是床内有床，旧

制之便与新制之精，二者兼而有之矣。床顶及柱，令置轿者为之一，其价颇廉，仅费中人一饭之资耳。曷云“帐宜加锁”？设帐之故有二：蔽风、隔蚊是也。蔽风之利十之三，隔蚊之功十之七，然隔蚊以此，闭蚊于中而使之不得出者亦以此。蚊之为物也，体极柔而性极勇，形极微而机极诈。薄暮而驱，彼宁受奔驰之苦，扞伐之危，宁死而弗去者十之八九。及其去也，又必择地而攻，乘虚以入。昆虫庶类之善用兵法者，莫过于蚊。其择地也，每弃后而攻前；其乘虚也，必舍垣而窥户。帐前两幅之交接处，皆其据险扼要，伏兵伺我之区也。或于风动帐开之际，或于取器入溺之时，一隙可乘，遂鼓噪而入。法于门户交关之地，上、中、下共设三纽，若妇人之衣扣然。至取溺器时，先以一手绾帐，勿使大开，以一手提之使入，其出亦然。若是，则坚壁固垒，彼虽有奇勇异诈，亦无所施其能矣。至于驱除之法，当使人在帐中，空洞其外，始能出而无阻。世人逐蚊，皆立帐檐之下，使所开之处蔽其大半，是欲其出而闭之门也。犯此弊者十人而九，何其习而不察，亦至此乎？曷云“床要着裙”？爱精美者，一物不使稍污。常有绮罗作帐，精其始而不能善其终，美其上而不得不污其下者，以贴枕着头之处，在妇人则有膏沐之痕，在男子亦多脑汗之迹，日积月累，无瑕者玷而可爱者憎矣。故着裙之法不可少。此法与增添顶柱之法相为表里。欲令着裙，先必使之生骨，无力不能胜衣也。即于四竹柱之下，各穴一孔，以三横竹内之，去簾尺许，与枕相平，而后以布作裙，穿于其上，则裙污而帐不污，裙可勤涤，而帐难频洗故也。至于枕簾被褥之设，不过取其夏凉冬暖，请以二语概之，曰：求凉之法，浇水不如透风；致暖之方，增绌不如加布。是予贫士所知者。至于羊羔美酒，亦足御寒，广厦重冰，尽堪避暑，理则固然，未尝亲试“知之为知之，不知为不知”，此圣贤无欺之学，不敢以细事而忽之也。

櫥 柜

造櫥立柜，无他智巧，总以多容善纳为贵。尝有制体极大而所容甚少，反不若渺小其形而宽大其腹，有事半功倍之势者。制有善不善也。善制无他，止在多设搁板。櫥之大者，不过两层、三层，至四层而止矣。若一层止备一层之用，则物之高者大者容此数件，而低者小者亦止容此数件矣。实其下而虚其上，岂非以上段有用之隙，置之无用之地哉？当于每层之两旁，别钉细木二条，以备架板之用。板勿太宽，或及进身之半，或三分之一，用则活置其上，不则撤而去之。如此层所贮之物，其形低小，则上半截皆为余地，即以此板架之，是一层变为二层。总而计之，则一櫥变为两櫥，两柜合成一柜矣，所裨不亦多乎？或所贮之物，其形高大，则去而容之，未尝为板所困也。此是一法。至于抽替之设，非但必不可少，且自多多益善。而一替之内，又必分为大小数格，以便分门别类，随所有而藏之，譬如生药铺中，有所谓“百眼櫥”者。此非取法于物，乃朝廷设官之遗制，所谓五府六部群僚百执事，各有所居之地与所掌之簿书钱谷是也。医者若无此櫥，药石之名盈千累百，用一物寻一物，则卢医、扁鹊无暇疗病，止能为刻舟求剑之人矣。此櫥不但宜于医者，凡大家富室，皆当则而效之，至学士文人，更宜取法。能以一层分作数层，一格画为数格，是省取物之劳，以备作文著书之用。则思之思之，鬼神通之；心无他役，而鬼神得效其灵矣。

箱 笼 篋 筥

随身贮物之器，大者名曰箱笼，小者称为篋筥。制之之料，不出革、木、竹三种；为之关键者，又不出铜、铁二项，前人所制亦云备矣。后之作者，未尝不竭尽心思，务为奇巧，总不出前人之范围；稍出范围即不适用，仅供把玩而已。予于诸物之体，未尝稍更，独怪其枢太庸，物而不化，尝为小变其制，亦足改观。法无他长，惟使有之若无，不见枢钮之迹而已。止备二式者，腹稿虽多，未经尝试，不敢以待验之方误人也。予游东粤，见市廛所列之器，半属花梨、紫檀，制法之佳，可谓穷工极巧，止怪其镶铜裹锡，清浊不伦。无论四面包镶，锋棱埋没，即于加锁置键之地，务设铜枢，虽云制法不同，究竟多此一物。譬如一箱也，磨砢极光，照之如镜，镜中可使着屑乎？一筥也，攻治极精，抚之如玉，玉上可使生瑕乎？有人赠我一器，名“七星箱”，以中分七格，每格一替，有如星列故也。外系插盖，从上而下者。喜其不钉铜枢，尚未生瑕着屑，因筹所以关闭之，遂付工人，命于中心置一暗闩，以铜为之，藏于骨中而不觉，自后而前，抵于箱盖。盖上凿一小孔，勿透于外，止受暗闩少许，使抽之不动而已。乃以寸金小锁，锁于箱后。置之案上，有如浑金粹玉，全体昭然，不为一物所掩。觅关键而不得，似于无锁；窥中藏而不能，始求用钥。此其一也。后游三山，见所制器皿无非雕漆，工则细巧绝伦，色则陆离可爱，亦病其设关置键之地难免赘瘤，以语工师，令其稍加变易。工师曰：“吾地般、倕颇多，如其可变，不自今日始矣。欲泯其迹，必使无关键而后可。”予曰：“其然，岂其然乎？”因置暖椅告成，欲增一匣置于其上，以代几案，遂使为之。上下四旁，皆听工人自为雕漆，俟其成后，就所雕景物而区画之。前面有替

可抽者，所雕系“博古图”，樽罍钟磬之属是也；后面无替而平者，系折枝花卉，兰菊竹石是也。皆备五彩，视之光怪陆离。但抽替太阔，开闭时多不合缝，非左进右出，即右进左出。予顾而筹之，谓必一法可当二用，既泯关键之迹，又免出入之疵，使适用美观均收其利而后可。乃命工人亦制铜闩一条，贯于抽替之正中，而以薄板掩之，此板即作分中之界限。夫一替分为二格，乃物理之常，而乌知有一物焉贯于其中，为前后通身之把握哉？得此一物贯于其中，则抽替之出入皆直如矢，永无左出右入、右出左入之患矣。前面所雕“博古图”，中系三足之鼎，列于两旁者一瓶一炉。予鼓掌大笑曰：“‘执柯伐柯，其则不远。’即以其人之道，反治其身足矣！”遂付铜工，令依三物之成式，各制其一，钉于本等物色之上。鼎与炉瓶皆铜器也，尚欲肖其形与色而为之，况真者哉？不问而知其酷似矣。鼎之中心穴一小孔，置二小钮于旁，使抽替闭足之时，铜闩自内而出，与钮相平。闩与钮上俱有眼，加以寸金小锁，似鼎上原有之物，虽增而实未尝增也。锁则锁矣，抽开之时，手执何物？不几便于入而穷于出乎？曰：不然。瓶炉之上原当有耳，加以铜圈二枚，执此为柄，抽之不烦余力矣。此区画正面之法也。铜闩既从内出，必在后面生根，未有不透出本匣之背者，是铜皮一块与联络补缀之痕，俱不能泯矣。乌知又有一法，为天授而非人力者哉！所雕诸卉，菊在其中，菊色多黄，与铜相若，即以铜皮数层，剪千叶菊花一朵，以暗闩之透出者穿入其中，胶之甚固，若是则根深蒂固，谁得而动摇之？予于此一物也，纯用天工，未施人巧，若有鬼物伺乎其中，乞灵于我，为开生面者。制之既成，工师告予曰：“八闽之为雕漆，数百年于兹矣，四方之来购此者，亦百千万亿其人矣。从未见创法立规有如今日之奇巧者，请衍此法，以广其传。”予曰：“姑迟之，俟新书告成，流布未晚。”窃恐世人先睹其物而后见其书，不知创自何人，反谓剿袭成功以为己有，诎非不白之冤哉？工师为谁？魏姓，字兰如；王

姓，字孟明。闽省雕漆之佳，当推二人第一。自不操斤，但善于指使，轻财尚友，雅人也。

古 董

是编于古董一项，缺而不备，盖有说焉。崇高古器之风，自汉魏晋唐以来，至今日而极矣。百金贸一卮，数百金购一鼎，犹有病其价廉工俭而不足用者。常有一渺小之物，而费盈千累万之金钱，或弃整陌连阡之美产，皆不惜也。夫今人之重古物，非重其物，重其年久不坏；见古人所制与古人所用者，如对古人之足乐也。若是，则人与物之相去，又有间矣。设使制用此物之古人至今犹在，肯以盈千累万之金钱与整陌连阡之美产，易之而归，与之坐谈往事乎？吾知其必不为也。予尝谓人曰：物之最古者莫过于书，以其合古人之心思面貌而传者也。其书出自三代，读之如见三代之人；其书本乎黄虞，对之如生黄虞之世；舍此则皆物矣。物不能代古人言，况能揭出心思而现其面貌乎？古物原有可嗜，但宜崇尚于富贵之家，以其金银太多，藏之无具，不得不为长房缩地之法，敛丈为尺，敛尺为寸，如“藏银不如藏金，藏金不如藏珠”之说，愈轻愈小，而愈便收藏故也。矧金银太多，则慢藏诲盗，贸为古董，非特穿窬不取，即误攫入手，犹将掷而去之。迹是而观，则古董、金银为价之低昂，宜其倍蓰而无算也。乃近世贫贱之家，往往效顰于富贵，见富贵者偶尚绮罗，则耻布帛为贱，必觅绮罗以肖之；见富贵者单崇珠翠，则鄙金玉为常，而假珠翠以代之。事事皆然，习以成性，故因其崇旧而黜新，亦不觉生今而复古。有八口晨炊不继，犹舍旦夕而问商周；一身活计茫然，宁遣妻孥而不卖古董者。人心矫异，詎非世道之忧乎？予辑是编，事事皆崇俭朴，不敢侈谈珍玩，以为末俗扬波。且予嫠

人也，所置物价，自百文以及千文而止，购新犹患无力，况买旧乎？《诗》云：“惟其有之，是以似之。”生平不识古董，亦借口维风，以藏其拙。

炉 瓶

炉瓶之制，其法备于古人，后世无容蛇足，但护持衬贴之具，不妨意为增减。如香炉既设，则锹箸随之，锹以拨灰，箸以举火，二物均不可少。箸之长短，视炉之高卑，欲其相称，此理易明，人尽知之；若锹之方圆，须视炉之曲直，使勿相左，此理亦易明，而为世人所忽。入炭之后，炉灰高下不齐，故用锹作准以平之，锹方则灰方，锹圆则灰圆，若使近边之地炉直而锹曲，或炉曲而锹直，则两不相能，止平其中而不能平其外矣，须用相体裁衣之法，配而用之。然以铜锹压灰，究难齐截，且非一锹二锹可了。此非僮仆之事，皆必主人自为之者。予性最懒，故每事必筹躲懒之法，尝制一木印印灰，一印可代数十锹之用。初不过为省繁惜劳计耳，讵料制成之后，非止省力，且极美观，同志相传，遂以为一定不移之法。譬如炉体属圆，则仿其尺寸，镛一圆板为印，与炉相若，不爽纤毫，上置一柄，以便手持。但宜稍虚其中，以作内昂外低之势，若食物之馒首然。方者亦如是法。加炭之后，先以箸平其灰，后用此板一压，则居中与四面皆平，非止同于刀削，且能与镜比光，共油争滑，是自有香灰以来，未尝现此娇面者也。既光且滑，可谓极精，予顾而思之，犹曰尽美矣，未尽善也，乃命梓人镂之。凡于着灰一面，或作老梅数茎，或为菊花一朵，或刻五言一绝，或雕八卦全形，只须举手一按，现出无数离奇，使人巧天工，两擅其绝，是自有香炉以来，未尝开此生面者也。湖上笠翁实有裨于风雅，非僭词也。请名此物为“笠翁香印”。方之眉公

诸制，物以人名者，孰高孰下，谁实谁虚，海内自有定评，非予所敢饶舌。用此物者，最宜神速，随按随起，勿迟瞬息，稍一逗留，则气闭火息矣。雕成之后，必加油漆，始不沾灰。焚香必需之物，香铏香箸之外，复有贮香之盒，与插铏箸之瓶之数物者，皆香与炉之股肱手足，不可或无者也。然此外更有一物，势在必需，人或知之而多不设，当为补入清供。夫以箸拨灰，不能免于狼藉，炉肩鼎耳之上，往往蒙尘，必得一物扫除之。此物不须特制，竟用蓬头小笔一枝，但精其管，使与濡墨者有别，与铏箸二物同插一瓶，以便次第取用，名曰“香帚”。至于炉有底盖，旧制皆然，其所以用此者，亦非无故。盖以覆灰，使风起不致飞扬；底即座也，用以隔手，使移动之时，执此为柄，以防手汗沾炉，使之有迹，皆有为而设者也。然用底时多，用盖时少。何也？香炉闭之一室，刻刻焚香，无时可闭；无风则灰不自扬，即使有风，亦有窗帘所隔，未有闭熄有用之火，而防未必果至之风者也。是炉盖实为赘瘤，尽可不设。而予则又有说焉；炉盖有时而需，但前人制法未善，遂觉有用为无用耳。盖以御风，固也。独不思炉不贮火，则非特盖可不用，并炉亦可不设；如其必欲置火，则盖之火熄，用盖何为？予尝于花晨月夕及暑夜纳凉，或登最高之台，或居极敞之地，往往携炉自随，风起灰扬，御之无策，始觉前人呆笨，制物而不善区画之，遂使貽患及今也。同是一盖，何不于顶上穴一大孔，使之通气，无风置之高阁，一见风起，则取而覆之，风不得入，灰不致扬，而香气自下而升，未尝少阻，其制不亦善乎？止将原有之物，加以举手之劳，即可变无益为有裨。昔人点铁成金，所点者不必是铁，所成者亦未必皆金，但能使不值钱者变而值钱，即是神仙妙术矣。此炉制也。瓶以磁者为佳，养花之水清而难浊，且无铜腥气也。然铜者有时而贵，以冬月生冰，磁者易裂，偶尔失防，遂成弃物，故当以铜者代之。然磁瓶置胆，即可保无是患。胆用锡，切忌用铜，铜一沾水即发铜青，有铜青而

再贮以水，较之未有铜青时，其腥十倍，故宜用锡。且锡柔易制，铜劲难为，价亦稍有低昂，其便不一而足也。磁瓶用胆，人皆知之，胆中着撒，人则未之行也。插花于瓶，必令中窾，其枝梗之有画意者随手插入，自然合宜，不则挪移布置之力不可少矣。有一种倔强花枝，不肯听人指使，我欲置左，彼偏向右，我欲使仰，彼偏好垂，须用一物制之。所谓撒也，以坚木为之，大小其形，勿拘一格，其中则或扁或方，或为三角，但须圆形其外，以便合瓶。此物多备数十，以俟相机取用。总之不费一钱，与桌撒一同拾取，弃于彼者，复收于此。斯编一出，世间宁复有弃物乎？

屏 轴

十年之前，凡作围屏及书画卷轴者，止有巾条、斗方及横批三式。近年幻为合锦，使大小长短以至零星小幅，皆可配合用之，亦可谓善变者矣。然此制一出，天下争趋，所见皆然，转盼又觉陈腐，反不若巾条、斗方诸式，以多时不见为新矣，故体制更宜稍变。变用何法？曰：莫妙于冰裂碎纹，如前云所载糊房之式，最与屏轴相宜，施之墙壁犹觉精材粗用，未免褻视牛刀耳。法于未书未画之先，画冰裂碎纹于全幅纸上，照纹裂开，各自成幅，征诗索画既毕，然后合而成之。须于画成未裂之先，暗书小号于纸背，使知某属第一，某居第二，某横某直，某角与某角相连，其后照号配成，始无攒凑不来之患。其相间之零星细块必不可少，若憎其琐屑而不画，则有宽无窄，不成其为冰裂纹矣。但最小者，勿用书画，止以素描间之，若尽有书画，则纹理模糊不清，反为全幅之累。此为先画纸绢，后征诗画者而言，盖立法之初，不得不为其简且易者。迨裱之既熟，随取现成书画，皆可裂作冰纹，亦犹裱合锦之法，不过变四方平正之角，为曲直纵横之角耳。此裱

匠之事，我授意而使彼为之者耳。更有书画合一之法，则其权在我，授意于作书作画之人，裱匠则行其无事者也。“诗中有画，画中有诗”，此古来成语；作画者取诗意命题，题诗者就画意作诗，此亦从来成格。然究竟诗自诗而画自画，未见有混而一之者也。混而一之，请自今始。法于画大幅山水时，每于笔墨可停之际，即留余地以待诗，如峭壁悬崖之下，长松古木之旁，亭阁之中，墙垣之隙，皆可留题作字者也。凡遇名流，即索新句，视其地之宽窄，以为字之大小，或为鹅帖行书，或作蝇头小楷。即以题画之诗，饰其所题之画，谓当日之原迹可，谓后来之题咏亦可，是“诗中有画，画中有诗”二语，昔作虚文，今成实事，亦游戏笔墨之小神通也。请质高明，定其可否。

茶 具

茗注莫妙于砂壶，砂壶之精者，又莫过于阳羨，是人而知之矣。然宝之过情，使与金银比值，无乃仲尼不为之已甚乎？置物但取其适用，何必幽渺其说，必至理穷义尽而后止哉！凡制茗壶，其嘴务直，购者亦然，一曲便可忧，再曲则称弃物矣。盖贮茶之物与贮酒不同，酒无渣滓，一斟即出，其嘴之曲直可以不论；茶则有体之物也，星星之叶，入水即成大片，斟泻之时，纤毫入嘴，则塞而不流。吸茗快事，斟之不出，大觉闷人。直则保无是患矣，即有时闭塞，亦可疏通，不似武夷九曲之难力导也。

贮茗之瓶，止宜用锡。无论磁铜等器，性不相能，即以金银作供，宝之适以祟之耳。但以锡作瓶者，取其气味不泄；而制之不善，其无用更甚于磁瓶。询其所以然之故，则有二焉。一则以制成未试，漏孔繁多。凡锡工制酒壶茶注等物，于其既成，必以水试，稍有渗漏，即加补苴，以其为贮茶贮酒而设，漏即无所用

之矣；一到收藏干物之器，即忽视之，犹木工造盆造桶则防漏，置斗置斛则不防漏，其情一也。乌知锡瓶有眼，其发潮泄气反倍于磁瓶，故制成之后，必加亲试，大者贮之以水，小者吹之以气，有纤毫漏隙，立督补成。试之又必须二次，一在将成未镢之时，一在已成既镢之后。何也？常有初时不漏，迨镢去锡时，打磨光滑之后，忽然露出细孔，此非屡验谛视者不知。此为浅人道也。一则以封盖不固，气味难藏，凡收藏香美之物，其加严处全在封口，封口不密，与露处同。吾笑世上茶瓶之盖必用双层，此制始于何人？可谓七窍俱蒙者矣。单层之盖，可于盖内塞纸，使刚柔互效其力，一用夹层，则止靠刚者为力，无所用其柔矣。塞满细缝，使之一线无遗，岂刚而不善屈曲者所能为乎？即靠外面糊纸，而受纸之处又在崎岖凹凸之场，势必剪碎纸条，作蓑衣样式，始能贴服。试问以蓑衣覆物，能使内外不通风乎？故锡瓶之盖，止宜厚不宜双。藏茗之家，凡收藏不即开者，于瓶口向上处，先用绵纸二三层，实褙封固，俟其既干，然后覆之以盖，则刚柔并用，永无泄气之时矣。其时开时闭者，则于盖内塞纸一二层，使香气闭而不泄。此贮茗之善策也。若盖用夹层，则向外者宜作两截，用纸束腰，其法稍便。然封外不如封内，究竟以前说为长。

酒 具

酒具用金银，犹妆奁之用珠翠，皆不得已而为之，非宴集时所应有也。富贵之家，犀则不妨常设，以其在珍宝之列，而无炫耀之形，犹仕宦之不饰观瞻者。象与犀同类，则有光芒太露之嫌矣。且美酒入犀杯，另是一种香气。唐句云：“玉碗盛来琥珀光。”玉能显色，犀能助香，二物之于酒，皆功臣也。至尚雅素之风，则磁杯当首重已。旧磁可爱，人尽知之，无如价值之昂，日甚一日，

尽为大力者所有，吾侪贫士，欲见为难。然即有此物，但可作古董收藏，难充饮器。何也？酒后擎杯，不能保无坠落，十损其一，则如雁行中断，不复成群。备而不用，与不备同。贫家得以自慰者，幸有此耳。然近日冶人，工巧百出，所制新磁，不出成、宣二窑下，至于体式之精异，又复过之。其不得与旧窑争值者，多寡之分耳。吾怪近时陶冶，何不自爱其力，使日作一杯，月制一盞，世人需之不得，必待善价而沽，其利与多制滥售等也，何计不出此？曰：不然。我高其技，人贱其能，徒让垄断于捷足之人耳。

碗 碟

碗莫精于建窑，而苦于太厚。江右所制者，虽窃建窑之名，而美观实出其上，可谓青出于蓝者矣。其次则论花纹，然花纹太繁，亦近鄙俗，取其笔法生动，颜色鲜艳而已。碗碟中最忌用者，是有字一种，如写《前赤壁赋》、《后赤壁赋》之类。此陶人造孽之事，购而用之者，获罪于天地神明不浅。请述其故。“惜字一千，延寿一纪。”此文昌垂训之词。虽云未必果验，然字画出于圣贤，苍颉造字而鬼夜哭，其关乎气数，为天地神明所宝惜可知也。用有字之器，不为损福，但用之不久而损坏，势必倾委作践，有不与造孽陶人中分其咎者乎？陶人但司其成，未见其败，似彼罪犹可原耳。字纸委地，遇惜福之人，则收付祝融，因其可焚而焚之也。至于有字之废碗，坚不可焚，一似入火不烬入水不濡之神物。因其坏而不坏，遂至倾而又倾，道旁见者，虽有惜福之念，亦无所施，有时抛入街衢，遭千万人之践踏，有时倾入溷厕，受千百载之欺凌，文字之罹祸，未有甚于此者。吾愿天下之人，尽以惜福为念，凡见有字之碗，即生造孽之虑。买者相戒不取，则卖者

计穷；卖者计穷，则陶人视为畏途而弗造矣。文字之祸，其日消乎？此犹救弊之末着。倘有惜福缙绅，当路于江右者，出严檄一纸，遍谕陶人，使不得于碗上作字，无论赤壁等赋不许书磁，即成化、宣德年造，及某斋某居等字，尽皆削去。试问有此数字，果得与成窑、宣窑比值乎？无此数字，较之常值增减半文乎？有此无此，其利相同，多此数笔，徒造千百年无穷之孽耳。制抚藩臬，以及守令诸公，尽是斯文宗主，宦豫章者，急行是令，此千百年未造之福。留之以待一人。时哉时哉，乘之勿失！

灯 烛

灯烛辉煌，宾筵之首事也。然每见衣冠盛集，列山珍海错，倾玉醴琼浆，几部鼓吹，频歌叠奏，事事皆称绝畅，而独于歌台色相，稍近模糊。令人快耳快心，而不能大快其目者，非主人吝惜兰膏，不肯多设，只以灯煤作祟，非剔之不得其法，即司之不得其人耳。吾为六字诀以授人，曰：“多点不如勤剪。”勤剪之五，明于不剪之十。原其不剪之故，或以观场念切，主仆相同，均注目于梨园，置晦明于不同；或以奔走太劳，职无专委，因顾彼以失此，致有炬而无光，所谓司之不得其人也。欲正其弊，不过专责一人，择其谨朴老成、不耽游戏者，则二患庶几可免。然司之得人，剔之不得其法，终为难事。大约场上之灯，高悬者多，卑立者少。剔卑灯易，剔高灯难。非以人就灯而升之使高，即以灯就人而降之使卑，剔一次必须升降一次，是人与灯皆不胜其劳，而座客观之亦觉代为烦苦，常有畏难不剪而听其昏黑者。予创二法以节其劳，一则已试而可自信者，一则未敢遽信而待试于人者。已试维何？长三四尺之烛剪是已。以铁为之，务为极细，粗则重而难举；然举之有法，说在后幅。有此长剪，则人不必升，灯亦不

必降，举手即是，与剔卑灯无异矣。未试维何？暗提线索，用傀儡登场之法是已。法于梁上暗作长缝一条，通于屋后，纳挂灯之绳索于中，而以小小轮盘仰承其下，然后悬灯。灯之内柱外幕，分而为二，外幕系定于梁间，不使上下，内柱之索上跨轮盘。欲剪灯煤。则放内柱之索，使之卑以就人，剪毕复上，自投外幕之中，是外幕高悬不移，俨然以静待动，同一灯也，而有劳逸之分，劳所当劳，逸所当逸，较之内外俱下，而且有碍手碍脚之繁者，先踞一筹之胜矣。其不明抽以索，而必暗投梁缝之中，且贯通于屋后者，其故何居？欲埋伏抽索之人于屋后，使不露形，但见轮盘一转，其灯自下，剪毕复上，总无抽拽之形，若有神物厕于梁间者。予创为是法，非有心炫巧，不过善藏其拙。盖场上多立一人，多生一人之障蔽。使以一人剪灯，一人抽索，了此及彼，数数往来，则座客止见人行，无复洗耳听歌之暇矣。故藏人屋后，撤去一半藩篱，耳目之前，何等清静。藏人屋后者，亦不必定在墙垣之外，厅堂必有退步，屏障以后，即其处也。或隔绛纱，或悬翠箔，但使内见外，而外不见内，则人工不露而天巧可施矣。每灯一盏，用索一条，以蜡磨光，欲其不涩。梁间一缝，可容数索，但须预编字号，系以小牌，使抽者便于识认。剪灯者将及某号，即预放某索以待之，此号方升，彼号即降，观其术者，如入山阴道中，明知是人非鬼，亦须诧异惊神，鼓掌而观，又是一番乐事。惜予囊慳无力，未及指使匠工，悬美法以待人，即谓自留余地亦可。

梁上凿缝，势有不能，为悬灯细事而损伤巨料，无此理也。如置此法于造屋之先，则于梁成之后，另镶薄板二条，空洞其中而蒙蔽其下，然后升梁于柱，以俟灯索，此一法也。已成之屋，亦如此法，但先置绳索于中，而后周遭以板。此法之设，不止定为观场，即于元夕张灯，寻常宴客，皆可用之，但比长剪之法为稍费耳。

制长剪之法，视屋之高卑以为长短，短者三尺，长者四五尺，

直其身而曲其上，如鸟喙然，总以细巧坚劲为主。然用之有法，得其法则可行，不得其法则虽设而不适于用，犹弃物也。盖以铁为剪，又长数尺，是其体不能不重，只手高擎，势必摇动于上，剪动则灯亦动；灯剪俱动，则他东我西，虽欲剪之，不可得矣。法以右手持剪，左手托之，所托之处，高右手尺许。剪体虽重，不过一二斤，只手孤擎则不足，双手效力则有余；擎而剪之者一手，按之使不动摇者又有一手，其势虽高，何足虑乎？“孤掌难鸣，众擎易举。”天下事，类如是也。

长剪虽佳，予终恶其体重，倘能以坚木为身，止于近灯煤处用铁，则尽美而又尽善矣。思而未制，存其说以俟解人。

长剪难于概用，惟有烛无衣，与四围有衣而空洞其下者可以用之。若明角灯、珠灯，皆无隙可入，虽有长剪，何所用之？至于梁间放索，则是灯皆可。二事亦可并行，行之之法，又与前说相反；灯柱居中不动，而提起外幕以俟剪，剪毕复下。又合居重驭轻之法，听人所好而为之。

笺 筒

笺筒之制，由古及今，不知几千万变。自人物器玩，以迨花鸟昆虫，无一不肖其形，无日不新其式；人心之巧，技艺之工，至此极矣。予谓巧则诚巧，工则至工，但其构思落笔之初，未免驰高骛远，舍最近者不思，而遍索于九天之上、八极之内，遂使光灿陆离者总成赘物，与书牋之本事无干。予所谓至近者非他，即其手中所制之笺筒是也。既名笺筒，则笺筒二字中便有无穷本义。鱼书雁帛而外，不有竹刺之式可为乎？书本之形可肖乎？卷册便面，锦屏绣轴之上，非染翰挥毫之地乎？石壁可以留题，蕉叶曾经代纸，岂竟未之前闻，而为予之臆说乎？至于苏蕙娘所织之锦，

又后人思之慕之，欲书一字于其上而不可复得者也。我能肖诸物之形似为笺，则笺上所列，皆题诗作字之料也。还其固有，绝其本无，悉是眼前韵事，何用他求？已命奚奴逐款制就，售之坊间，得钱付梓人，仍备剞劂之用，是此后生生不已，其新人见闻，快人挥洒之事，正未有艾。即呼予为薛涛幻身，予亦未尝不受。盖须眉男子之不传，有愧于知名女子者正不少也。已经制就者，有韵事笺八种，织锦笺十种。韵事者何？题石、题轴、便面、书卷、剖竹、雪蕉、卷子、册子是也。锦纹十种，则尽仿回文织锦之义，满幅皆锦，止留縠纹缺处代人作书，书成之后，与织就之回文无异。十种锦纹各别，作书之地亦不雷同。惨淡经营，事难缕述，海内名贤欲得者，倩人向金陵购之。是集内种种新式，未能悉走寰中，借此一端，以陈大概。售笺之地即售书之地，凡予生平著作，皆萃于此。有嗜痂之癖者，贸此以去，如偕笠翁而归。千里神交，全赖乎此。只今知己遍天下，岂尽谋面之人哉？金陵承恩寺中有“芥子园名笺”五字署名者，即其处也。

是集中所载诸新式，听人效而行之；惟笺帖之体裁，则令奚奴自制自售，以代笔耕，不许他人翻梓。已经传札布告，诫之于初矣。倘仍有垄断之豪，或照式刊行，或增减一二，或稍变其形，即以他人之功冒为己有，食其利而抹煞其名者，此即中山狼之流亚也。当随所在之官司而控告焉，伏望主持公道。至于倚富恃强，翻刻湖上笠翁之书者，六合以内，不知凡几。我耕彼食，情何以堪？誓当决一死战，布告当事，即以是集为先声。总之天地生人，各赋以心，即宜各生其智，我未尝塞彼心胸，使之勿生智巧，彼焉能夺吾生计，使不得自食其力哉！

位置第二

器玩未得，则讲购求；及其既得，则讲位置。位置器玩与位置人才同一理也。设官授职者，期于人地相宜；安器置物者，务在纵横得当。设以刻刻需用者，而置之高阁，时时防坏者，而列于案头，是犹理繁治剧之材，处清静无为之地，黼黻皇猷之品，作驱驰孔道之官。有才不善用，与空国无人等也。他如方圆曲直，齐整参差，皆有就地立局之方，因时制宜之法。能于此等处展其才略，使人入其户、登其堂，见物物皆非苟设，事事具有深情，非特泉石勋猷，于此足征全豹，即论庙堂经济，亦可微见一斑。未闻有颠倒其家，而能整齐其国者也。

忌排偶

“胪列古玩，切忌排偶。”此陈说也。予生平耻拾唾余，何必更蹈其辙。但排偶之中，亦有分别。有似排非排，非偶是偶；又有排偶其名，而不排偶其实者。皆当疏明其说，以备讲求。如天生一日，复生一月，似乎排矣，然二曜出不同时，且有极明微明之别，是同中有异，不得竟以排比目之矣。所忌乎排偶者，谓其有意使然，如左置一物，右无一物以配之，必求一色相俱同者与之相并，是则非偶而是偶，所当急忌者矣。若夫天生一对，地生一双，如雌雄二剑，鸳鸯二壶，本来原在一处者，而我必欲分之，以避排偶之迹，则亦矫揉执滞，大失物理人情之正矣。即避排偶之迹，亦不必强使分开，或比肩其形，或连环其势，使二物合成一物，即排偶其名，而不排偶其实矣。大约摆列之法，忌作八字

形，二物并列，不分前后、不爽分寸者是也；忌作四方形，每角一物，势如小菜碟者是也；忌作梅花体，中置一大物，周遭以小物是也；余可类推。当行之法，则与时变化，就地权宜，视形体为纵横曲直，非可预设规模者也。如必欲强拈一二，若三物相俱，宜作品字格，或一前二后，或一后二前，或左一右二，或右一左二，皆谓错综；若以三者并列，则犯排矣。四物相共，宜作心字及火字格，择一或高或长者为主，余前后左右列之，但宜疏密断连，不得均匀配合，是谓参差；若左右各二，不使单行，则犯偶矣。此其大略也，若夫润泽之，则在雅人君子。

贵 活 变

幽斋陈设，妙在日新月异。若使古董生根，终年匏系一处，则因物多腐象，遂使人少生机，非善用古玩者也。居家所需之物，惟房舍不可动移，此外皆当活变。何也？眼界关乎心境，人欲活泼其心，先宜活泼其眼。即房舍不可动移，亦有起死回生之法。譬如造屋数进，取其高卑广隘之尺寸不甚相悬者，授意匠工，凡作窗棂门扇，皆同其宽窄而异其体裁，以便交相更替。同一房也，以彼处门窗挪入此处，便觉耳目一新，有如房舍皆迁者；再入彼屋，又换一番境界，是不特迁其一，且迁其二矣。房舍犹然，况器物乎？或卑者使高，或远者使近，或一物别之既久，而使一旦相亲，或数物混处多时，而使忽然隔绝，是无情之物变为有情，若有悲欢离合于其间者。但须左之右之，无不宜之，则造物在手，而臻化境矣。人谓朝东夕西，往来仆仆，何许子之不惮烦乎？予曰：陶士行之运甕，视此犹烦，未有笑其多事者；况古玩之可亲，犹胜于甕，乐此者不觉其疲，但不可为饱食终日无所用心者道。

古玩中香炉一物，其体极静，其用又妙在极动，是当一日数

迁其位，片刻不容胶柱者也。人问其故，予以风帆喻之。舟行所挂之帆，视风之斜正为斜正，风从左而帆向右，则舟不进而且退矣。位置香炉之法亦然。当由风力起见，如一室之中有南北二牖，风从南来，则宜位置于正南，风从北入，则宜位置于正北；若风从东南或从西北，则又当位置稍偏，总以不离乎风者近是。若反风所向，则风去香随，而我不沾其味矣。又须启风来路，塞风去路，如风从南来而洞开北牖，风从北至而大辟南轩，皆以风为过客，而香亦传舍视我矣。须知器玩之中，物物皆可使静，独香炉一物，势有不能。“爱之能勿劳乎？”待人之法也，吾于香炉亦云。

饮 饌 部

蔬 食 第 一

吾观人之一身，眼耳鼻舌，手足躯骸，件件都不可少。其尽可不设而必欲赋之，遂为万古生人之累者，独是口腹二物。口腹具而生计繁矣。生计繁而诈伪奸险之事出矣，诈伪奸险之事出，而五刑不得不设。君不能施其爱育，亲不能遂其恩私，造物好生，而亦不能不逆行其志者，皆当日赋形不善，多此二物之累也。草木无口腹，未尝不生；山石土壤无饮食，未闻不长养。何事独异其形，而赋以口腹？即生口腹，亦当使如鱼虾之饮水，蜩蟪之吸露，尽可滋生气力，而为潜跃飞鸣。若是，则可与世无求，而生人之患熄矣。乃既生以口腹，又复多其嗜欲，使如溪壑之不可厌；多其嗜欲，又复洞其底里，使如江海之不可填。以致人之一生，竭五官百骸之力，供一物之所耗而不足哉！吾反复推详，不能不于造物是咎，亦知造物于此，未尝不自悔其非，但以制定难移，只得终遂其过。甚矣，作法慎初，不可草草定制。吾辑是编而谬及饮饌，亦是可已不已之事。其止崇俭嗇，不导奢靡者，因不得已而为造物饰非，亦当虑始计终，而为庶物弭患。如逞一己之聪明，导千万人之嗜欲，则匪特禽兽昆虫无噍类，吾虑风气所开，日甚一日，焉知不有易牙复出，烹子求荣，杀婴儿以媚权奸，如亡隋故事者哉！一误岂堪再误，吾不敢不以赋形造物视作覆车。

声音之道，丝不如竹，竹不如肉，为其渐近自然。吾谓饮食之道，脍不如肉，肉不如蔬，亦以其渐近自然也。草衣木食，上古之风，人能疏远肥膩，食蔬蕨而甘之，腹中菜园，不使羊来踏破，是犹作羲皇之民，鼓唐虞之腹，与崇尚古玩同一致也。所怪于世者，弃美名不居，而故异端其说，谓佛法如是，是则谬矣。吾辑《饮饌》一卷，后肉食而首蔬菜，一以崇俭，一以复古；至重宰割而惜生命，又其念兹在兹，而不忍或忘者矣。

笋

论蔬食之美者，曰清，曰洁，曰芳馥，曰松脆而已矣。不知其至美所在，能居肉食之上者，只在一字之鲜。《记》曰：“甘受和，白受采。”鲜即甘之所从出也。此种供奉，惟山僧野老躬治园圃者，得以有之，城市之人向卖菜佣求活者，不得与焉。然他种蔬食，不论城市山林，凡宅旁有圃者，旋摘旋烹，亦能时有其乐。至于笋之一物，则断断宜在山林，城市所产者，任尔芳鲜，终是笋之剩义。此蔬食中第一品也，肥羊嫩县长豕，何足比肩。但将笋肉齐烹，合盛一簋，人止食笋而遗肉，则肉为鱼而笋为熊掌可知矣。购于市者且然，况山中之旋掘者乎？食笋之法多端，不能悉纪，请以两言概之，曰：“素宜白水，荤用肥猪。”茹斋者食笋，若以他物伴之，香油和之，则陈味夺鲜，而笋之真趣没矣。白煮俟熟，略加酱油，从来至美之物，皆利于孤行，此类是也。以之伴荤，则牛羊鸡鸭等物皆非所宜，独宜于豕，又独宜于肥。肥非欲其膩也，肉之肥者能甘，甘味入笋，则不见其甘，但觉其鲜之至也。烹之既熟，肥肉尽当去之，即汁亦不宜多存，存其半而益以清汤。调和之物，惟醋与酒。此制荤笋之大凡也。笋之为物，不止孤行并用各见其美，凡食物中无论荤素，皆当用作调和。菜中

之笋与药中之甘草，同是必需之物，有此则诸味皆鲜，但不当用其渣滓，而用其精液。庖人之善治具者，凡有焯笋之汤，悉留不去，每作一饌，必以和之，食者但知他物之鲜，而不知有所以鲜之者在也。《本草》中所载诸食物，益人者不尽可口，可口者未必益人，求能两擅其长者，莫过于此。东坡云：“宁可食无肉，不可居无竹。无肉令人瘦，无竹令人俗。”不知能医俗者，亦能医瘦，但有已成竹未成竹之分耳。

蕈

求至鲜至美之物于笋之外，其惟蕈乎！蕈之为物也，无根无蒂，忽然而生，盖山川草木之气，结而成形者也，然有形而无体。凡物有体者必有渣滓，既无渣滓，是无体也。无体之物，犹未离乎气也。食此物者，犹吸山川草木之气，未有无益于人者也。其有毒而能杀人者，《本草》云以蛇虫行之故。予曰：不然。蕈大几何，蛇虫能行其上？况又极弱极脆而不能载乎？盖地之下有蛇虫，蕈生其上，适为毒气所钟，故能害人。毒气所钟者能害人，则为清虚之气所钟者，其能益人可知矣。世人辨之原有法，苟非有毒，食之最宜。此物素食固佳，伴以少许荤食尤佳，盖蕈之清香有限，而汁之鲜味无穷。

莼

陆之蕈，水之莼，皆清虚妙物也。予尝以二物作羹，和以蟹之黄，鱼之肋，名曰“四美羹”。座客食而甘之，曰：“今而后，无下箸处矣！”

菜

世人制菜之法，可称百怪千奇，自新鲜以至于腌糟酱腊，无一不曲尽奇能，务求至美，独于起根发轫之事缺焉不讲，予甚惑之。其事维何？有八字诀云：“摘之务鲜，洗之务净。”务鲜之论，已悉前篇。蔬食之最净者，曰笋，曰蕈，曰豆芽；其最秽者，则莫如家种之菜。灌肥之际，必连根带叶而浇之；随浇随摘，随摘随食，其间清浊，多有不可问者。洗菜之人，不过浸入水中，左右数漉，其事毕矣。孰知污秽之湿者可去，干者难去，日积月累之粪，岂顷刻数漉之所能尽哉？故洗菜务得其法，并须务得其人。以懒人、性急之人洗菜，犹之乎弗洗也。洗菜之法，入水宜久，久则干者浸透而易去；洗叶用刷，刷则高低曲折处皆可到，始能涤尽无遗。若是，则菜之本质净矣。本质净而后加作料，可尽人工，不然，是先以污秽作调和，虽有百和之香，能敌一星之臭乎？噫，富室大家食指繁盛者，欲保其不食污秽，难矣哉！

菜类甚多，其杰出者则数黄芽。此菜萃于京师，而产于安肃，谓之“安肃菜”，此第一品也。每株大者可数斤，食之可忘肉味。不得已而思其次，其惟曰下之水芹乎！予自移居白门，每食菜、食葡萄，辄思都门；食笋、食鸡豆，辄思武陵。物之美者，犹令人每食不忘，况为适馆授餐之人乎？

菜有色相最奇，而为《本草》、《食物志》诸书之所不载者，则西秦所产之头发菜是也。予为秦客，传食于塞上诸侯。一日脂车将发，见炕上有物，俨然乱发一卷，谬谓婢子栉发所遗，将欲委之而去。婢子曰：“不然，群公所饷之物也。”询之土人，知为头发菜。浸以滚水，拌以姜醋，其可口倍于藕丝、鹿角等菜。携归饷客，无不奇之，谓珍错中所未见。此物产于河西，为值甚贱，凡

适秦者皆争购异物，因其贱也而忽之，故此物不至通都，见者绝少。由是观之，四方贱物之中，其可贵者不知凡几，焉得人人物色之？发菜之得至江南，亦千载一时之至幸也。

瓜茄瓠芋山药

瓜、茄、瓠、芋诸物，菜之结而为实者也。实则不止当菜，兼作饭矣。增一簋菜，可省数合粮者，诸物是也。一事两用，何俭如之？贫家购此，同于粢粟。但食之各有其法：煮冬瓜、丝瓜忌太生，煮王瓜、甜瓜忌太熟；煮茄、瓠利用酱醋，而不宜于盐；煮芋不可无物拌之，盖芋之本身无味，借他物以成其味者也；山药则孤行并用，无所不宜，并油盐酱醋不设，亦能自呈其美，乃蔬食中之通材也。

葱 蒜 韭

葱、蒜、韭三物，菜味之至重者也。菜能芬人齿颊者，香椿头是也；菜能秽人齿颊及肠胃者，葱、蒜、韭是也。椿头明知其香，而食者颇少，葱、蒜、韭尽识其臭，而嗜之者众，其故何欤？以椿头之味虽香而淡，不若葱、蒜、韭之气甚而浓。浓则为时所争尚，甘受其秽而不辞；淡则为世所共遗，自荐其香而弗受。吾于饮食一道，悟善身处世之难。一生绝三物不食，亦未尝多食香椿，殆所谓“夷、惠之间”者乎？

予待三物有差。蒜则永禁弗食；葱虽弗食，然亦听作调和；韭则禁其终而不禁其始，芽之初发，非特不臭，且具清香，是其孩提之心之未变也。

萝卜

生萝卜切丝作小菜，拌以醋及他物，用之下粥最宜。但恨其食后打暖，暖必秘气。予尝受此厄于人，知人之厌我，亦若是也，故亦欲绝而弗食。然见此物大异葱蒜，生则臭，熟则不臭，是与初见似小人，而卒为君子者等也。虽有微过，亦当恕之，仍食勿禁。

芥辣汁

菜有具姜桂之性者乎？曰：有，辣芥是也，制辣汁之芥子，陈者绝佳，所谓愈老愈辣是也。以此拌物，无物不佳。食之者如遇正人，如闻谏论，困者为之起倦，闷者以之豁襟，食中之爽味也。予每食必备，窃比于夫子之不撤姜也。

谷食第二

食之养人，全赖五谷。使天止生五谷而不产他物，则人身之肥而寿也，较此必有过焉，保无疾病相煎，寿夭不齐之患矣。试观鸟之啄粟，鱼之饮水，皆止靠一物为生，未闻于一物之外，又有为之肴饌酒浆、诸饮杂食者也。乃禽鱼之死，皆死于人，未闻有疾病而死，及天年自尽而死者，是止食一物，乃长生久视之道也。人则不幸而为精腴所误，多食一物，多受一物之损伤，少静一时，少安一时之淡泊。其疾病之生，死亡之速，皆饮食太繁，嗜

欲过度之所致也。此非人之自误，天误之耳。天地生物之初，亦不料其如是，原欲利人口腹，孰意利之反以害之哉！然则人欲自爱其生者，即不能止食一物，亦当稍存其意，而以一物为君。使酒肉虽多，不胜食气，即使为害，当亦不甚烈耳。

饭 粥

粥饭二物，为家常日用之需，其中机要，无人不晓，焉用越俎者强为致词？然有吃紧二语，巧妇知之而不能言者，不妨代为喝破，使姑传之媳，母传之女，以两言代千百言，亦简便利人之事也。先就粗者言之。饭之大病，在内生外熟，非烂即焦；粥之大病，在上清下淀，如糊如膏。此火候不均之故，惟最拙最笨者有之，稍能炊爨者，必无是事。然亦有刚柔合道，燥湿得宜，而令人咀之嚼之，有粥饭之美形，无饮食之至味者。其病何在？曰：挹水无度，增减不常之为害也。其吃紧二语，则曰：“粥水忌增，饭水忌减。”米用几何，则水用几何，宜有一定之度数。如医人用药，水一钟或钟半，煎至七分或八分，皆有定数。若以意为增减，则非药味不出，即药性不存，而服之无效矣。不善执爨者，用水不均，煮粥常患其少，煮饭常苦其多。多则逼而去之，少则增而入之，不知米之精液全在于水，逼去饭汤者，非去饭汤，去饭之精液也。精液去则饭为渣滓，食之尚有味乎？粥之即熟，水米成交，犹米之酿而为酒矣。虑其太厚而入之以水，非入水于粥，犹入水于酒也。水入而酒成糟粕，其味尚可咀乎？故善主中馈者，挹水时必须限以数，使其勺不能增，滴无可减，再加以火候调匀，则其为粥为饭，不求异而异乎人矣。

宴客者有时用饭，必较家常所食者稍精。精用何法？曰：使之有香而已矣。予尝授意小妇，预设花露一盞，俟饭之初熟而浇

之，浇过稍闭，拌匀而后入碗。食者归功于谷米，诤为异种而讯之，不知其为寻常五谷也。此法秘之已久，今始告人。行此法者，不必满釜浇遍，遍则费露甚多，而此法不行于世矣。止以一盞浇一隅，足供佳客所需而止。露以蔷薇、香橼、桂花三种为上，勿用玫瑰，以玫瑰之香，食者易辨，知非谷性所有。蔷薇、香橼、桂花三种，与谷性之香者相若，使人难辨，故用之。

汤

汤即羹之别名也。羹之为名，雅而近古；不曰羹而曰汤者，虑人古雅其名，而即郑重其实，似专为宴客而设者。然不知羹之为物，与饭相俱者也。有饭即应有羹，无羹则饭不能下，设羹以下饭，乃图省俭之法，非尚奢靡之法也。古人饮酒，即有下酒之物；食饭，即有下饭之物。世俗改下饭为“厦饭”，谬矣。前人以读史为下酒物，岂下酒之“下”，亦从“厦”乎？“下饭”二字，人谓指肴饌而言，予曰：不然。肴饌乃滞饭之具，非下饭之具也。食饭之人见美饌在前，匕箸迟疑而不下，非滞饭之具而何？饭犹舟也，羹犹水也；舟之在滩，非水不下，与饭之在喉，非汤不下，其势一也。且养生之法，食贵能消；饭得羹而即消，其理易见。故善养生者，吃饭不可无羹；善作家者，吃饭亦不可无羹。宴客而为省饌计者，不可无羹；即宴客而欲其果腹始去，一饌不留者，亦不可无羹。何也？羹能下饭，亦能下饌故也。近来吴越张筵，每饌必注以汤，大得此法。吾谓家常自膳，亦莫妙于此。宁可食无饌，不可饭无汤。有汤下饭，即小菜不设，亦可使哺啜如流；无汤下饭，即美味盈前，亦有时食不下咽。予以一赤贫之士，而养半百口之家，有饥时而无谨日者，遵是道也。

糕 饼

谷食之有糕饼，犹肉食之有脯脰。《鲁论》云：“食不厌精，脍不厌细。”制糕饼者于此二句，当兼而有之。食之精者，米麦是也；脍之细者，粉面是也。精细兼长，始可论及工拙。求工之法，坊刻所载甚详，予使拾而言之，以作制饼制糕之印板，则观者必大笑曰：笠翁不拾唾余，今于饮食之中，现增一副依样葫芦矣！冯妇下车，请戒其始。只用二语括之，曰：“糕贵乎松，饼利于薄。”

面

南人饭米，北人饭面，常也。《本草》云：“米能养脾，麦能补心。”各有所裨于人者也。然使竟日穷年止食一物，亦何其胶柱口腹，而不肯兼爱心脾乎？予南人而北相，性之刚直似之，食之强横亦似之。一日三餐，二米一面，是酌南北之中，而善处心脾之道也。但其食面之法，小异于北，而且大异于南。北人食面多作饼，予喜条分而缕晰之，南人之所谓“切面”是也。南人食切面，其油盐酱醋等作料，皆下于面汤之中，汤有味而面无味，是人之所重者不在面而在汤，与未尝食面等也。予则不然，以调和诸物，尽归于面，面具五味而汤独清，如此方是食面，非饮汤也。所制面有二种，一曰“五香面”，一曰“八珍面”。五香膳已，八珍饷客，略分丰俭于其间。五香者何？酱也，醋也，椒末也，芝麻屑也，焯笋或煮蕹煮虾之鲜汁也。先以椒末、芝麻屑二物拌入面中，后以酱醋及鲜汁三物和为一处，即充拌面之水，勿再用水。拌宜极匀，擀宜极薄，切宜极细，然后以滚水下之，则精粹之物

尽在面中，尽勾咀嚼，不似寻常吃面者，面则直吞下肚，而止咀嚼其汤也。八珍者何？鸡、鱼、虾三物之肉，晒使极干，与鲜笋、香草、芝麻、花椒四物，共成极细之末，和入面中，与鲜汁共为八种。酱醋亦用，而不列数内者，以家常日用之物，不得名之以珍也。鸡鱼之肉，务取极精，稍带肥腻者弗用，以面性见油即散，擀不成片，切不成丝故也。但观制饼饵者，欲其松而不实，即拌以油，则面之为性可知已。鲜汁不用煮肉之汤，而用笋、蕈、虾汁者，亦以忌油故耳。所用之肉，鸡、鱼、虾三者之中，惟虾最便，屑米为面，势如反掌，多存其末，以备不时之需；即膳己之五香，亦未尝不可六也。拌面之汁，加鸡蛋青一二盏更宜，此物不列于前而附于后者，以世人知用者多，列之又同剿袭耳。

粉

粉之名目甚多，其常有而适于用者，则惟藕、葛、蕨、绿豆四种。藕、葛二物，不用下锅，调以滚水，即能变生成熟。昔人云：“有仓卒客，无仓卒主人。”欲为仓卒主人，则请多储二物。且卒急救饥，亦莫善于此。驾舟车行远路者，此是饕餮中首善之物。粉食之耐咀嚼者，蕨为上，绿豆次之。欲绿豆粉之耐嚼，当稍以蕨粉和之。凡物入口而不能即下，不即下而又使人咀之有味，嚼之无声者，斯为妙品。吾遍索饮食中，惟得此二物。绿豆粉为汤，蕨粉为下汤之饭，可称二耐，齿牙遇此，殆亦所谓劳而不怨者哉！

肉食第三

“肉食者鄙”，非鄙其食肉，鄙其不善谋也。食肉之人之不善

谋者，以肥膩之精液，结而为脂，蔽障胸臆，犹之茅塞其心，使之不复有窍也。此非予之臆说，夫有所验之矣。诸兽食草木杂物，皆狡獪而有智。虎独食人，不得人则食诸兽之肉，是匪肉不食者，虎也；虎者，兽之至愚者也。何以知之？考诸群书则信矣。“虎不食小儿”，非不食也，以其痴不惧虎，谬谓勇士而避之也。“虎不食醉人”，非不食也，因其醉势猖獗，目为劲敌而防之也。“虎不行曲路，人遇之者，引至曲路即得脱”。其不行曲路者，非若澹台灭明之行不由径，以颈直不能回顾也。使知曲路必脱，先于周行食之矣。《虎苑》云：“虎之能搏狗者，牙爪也。使失其牙爪，则反伏于狗矣。”迹是观之，其能降人降物而藉之为粮者，则专恃威猛，威猛之外，一无他能，世所谓“有勇无谋”者，虎是也。予究其所以然之故，则以舍肉之外，不食他物，脂膩填胸，不能生智故也。然则“肉食者鄙，未能远谋。”其说不既有征乎？吾今虽为肉食作俑，然望天下之之，多食不如少食。无虎之威猛而益其愚，与有虎之威猛而自昏其智，均非养生善后之道也。

猪

食以人传者，“东坡肉”是也。卒急听之，似非豕之肉，而为东坡之肉矣。噫，东坡何罪，而割其肉，以实千古馋人之腹哉？甚矣，名士不可为，而名士游戏之小术，尤不可不慎也，至数百载而下，糕、布等物，又以小眉公得名。取“眉公糕”、“眉公布”之名，以较“东坡肉”三字，似觉彼善于此矣。而其最不幸者，则有溷厕中之一物，俗人呼为“眉公马桶”。噫，马桶何物，而可冠以雅人高士之名乎？予非不知肉味，而于豕之一物，不敢浪措一词者，虑为东坡之续也。即溷厕中之一物，予未尝不新其制，但蓄之家，而不敢取以示人，尤不敢笔之于书者，亦虑为眉公之续

也。

羊

物之折耗最重者，羊肉是也。谚有之曰：“羊几贯，帐难算，生折对半熟对半，百斤止剩念余斤，缩到后来只一段。”大率羊肉百斤，宰而割之，止得五十斤，迨烹而熟之，又止得二十五斤，此一定不易之数也。但生羊易消，人则知之；熟羊易长，人则未知也。羊肉之为物，最能饱人，初食不饱，食后渐觉其饱，此易长之验也。凡行远路及出门作事，卒急不能得食者，啖此最宜。秦之西鄙，产羊极繁，土人日食止一餐，其能不枵腹者，羊之力也。《本草》载羊肉，比人参、黄芪。参芪补气，羊肉补形。予谓补人者羊，害人者亦羊。凡食羊肉者，当留腹中余地，以俟其长。倘初食不节而果其腹，饭后必有胀而欲裂之形，伤脾坏腹，皆由于此，葆生者不可不知。

牛 犬

猪、羊之后，当及牛、犬。以二物有功于世，方劝人戒之人不暇，尚忍为制酷刑乎？略此二物，遂及家禽，是亦以羊易牛之遗意也。

鸡

鸡亦有功之物，而不讳其死者，以功较牛、犬为稍杀。天之

晓也，报亦明，不报亦明，不似畎亩、盗贼，非牛不耕，非犬之吠则不觉也。然较鹅鸭二物，则淮阴羞伍絳、灌矣。烹饪之刑，似宜稍宽于鹅鸭。卵之有雄者弗食，重不至斤外者弗食，即不能寿之，亦不当过夭之耳。

鹅

鹄鹄之肉无他长，取其肥且甘而已矣。肥始能甘，不肥则同于嚼蜡。鹅以固始为最，讯其土人，则曰：“豢之之物，亦同于人。食人之食，斯其肉之肥腻亦同于人也。”犹之豕肉以金华为最，豨人豢豕，非饭即粥，故其为肉也甜而腻。然则固始之鹅，金华之豕，均非鹅豕之美，食美之也。食能美物，奚俟人言：归而求之，有余师矣。但授家人以法，彼虽饲以美食，终觉饥饱不时，不似固始、金华之有节，故其为肉也，犹有一间之殊。盖终以禽兽畜之，未尝稍同于人耳。“继子得食，肥而不泽。”其斯之谓欤？

有告予食鹅之法者，曰：昔有一人，善制鹅掌。每豢肥鹅将杀，先熬沸油一盂，投以鹅足，鹅痛欲绝，则纵之池中，任其跳跃。已而复擒复纵，炮淪如初。若是者数四，则其为掌也，丰美甘甜，厚可径寸，是食中异品也。予曰：惨哉斯言！予不愿听之矣。物不幸而为人所畜，食人之食，死人之事。偿之以死亦足矣，奈何未死之先，又加若是之惨刑乎？二掌虽美，入口即消，其受痛楚之时，则有百倍于此者。以生物多时之痛楚，易我片刻之甘甜，忍人不为，况稍具婆心者乎？地狱之设，正为此人，其死后炮烙之刑，必有过于此者。

鸭

禽属之善养生者，雄鸭是也。何以知之，知之于人之好尚。诸禽尚雌，而鸭独尚雄；诸禽贵幼，而鸭独贵长。故养生家有言：“烂蒸老雄鸭，功效比参芪。”使物不善养生，则精气必为雌者所夺，诸禽尚雌者，以为精气之所聚也。使物不善养生，则情窍一开，日长而日瘠矣，诸禽贵幼者，以其泄少而存多也。雄鸭能愈长愈肥，皮肉至老不变，且食之与参芪比功，则雄鸭之善于养生，不待考核而知之矣。然必俟考核，则前此未之闻也。

野禽 野兽

野味之逊于家味者，以其不能尽肥；家味之逊于野味者，以其不能有香也。家味之肥，肥于不自觅食而安享其成；野味之香，香于草木为家而行止自若。是知丰衣美食，逸处安居，肥人之事也；流水高山，奇花异木，香人之物也。肥则必供刀俎，靡有孑遗；香亦为人朵颐，然或有时而免。二者不欲其兼，舍肥从香而已矣。

野禽可以时食，野兽则偶一尝之。野禽如雉、雁、鸠、鸽、黄雀、鹌鹑之属，虽生于野，若畜于家，为可取之如寄也。野兽之可得者惟兔、獐、鹿、熊、虎诸兽，岁不数得，是野味之中又分难易。难得者何？以其久住深山，不入人境，槛阱之入，是人往觅兽，非兽来挑人也。禽则不然，知人欲弋而往投之，以觅食也，食得而祸随之矣。是兽之死也，死于人；禽之毙也，毙于己。食野味者，当作如是观。惜禽而更当惜兽，以其取死之道为可原也。

鱼

鱼藏水底，各自为天，自谓与世无求，可保戈矛之不及矣。乌知网罟之奏功，较弓矢置罟为更捷。无事竭泽而渔，自有吞舟不漏之法。然鱼与禽兽之生死，同是一命，觉鱼之供人刀俎，似较他物为稍宜。何也？水族难竭而易繁。胎生卵生之物，少则一母数子，多亦数十子而止矣。鱼之为种也似粟，千斯仓而万斯箱，皆于一腹焉寄之。苟无沙汰之人，则此千斯仓而万斯箱者生生不已，又变而为恒河沙数。至恒河沙数之一变再变，以至千百变，竟无一物可以喻之，不几充塞江河而为陆地，舟楫之往来能无恙乎？故渔人之取鱼虾，与樵人之伐草木，皆取所当取，伐所不得不伐者也。我辈食鱼虾之罪，较食他物为稍轻。兹为约法数章，虽难比乎祥刑，亦稍差于酷吏。

食鱼者首重在鲜，次则及肥，肥而且鲜，鱼之能事毕矣。然二美虽兼，又有所重在一者。如鲟、如鲙、如鲫、如鲤，皆以鲜胜者也，鲜宜清煮作汤；如鳊、如白、如鲋、如鲢，皆以肥胜者也，肥宜厚烹作脍。烹煮之法，全在火候得宜。先期而食者肉生，生则不松；过期而食者肉死，死则无味。迟客之家，他馔或可先设以待，鱼则必须活养，候客至旋烹。鱼之至味在鲜，而鲜之至味又只在初熟离釜之片刻，若先烹以待，是使鱼之至美，发泄于空虚无人之境；待客至而再经火气，犹冷饭之复炊，残酒之再热，有其形而无其质矣。煮鱼之水忌多，仅足伴鱼而止，水多一口，则鱼淡一分。司厨婢子，所利在汤，常有增而复增，以致鲜味减而又减者，志在厚客，不能不薄待庖人耳。更有制鱼良法，能使鲜肥进出，不失天真，迟速咸宜，不虞火候者，则莫妙于蒸。置之镬内，入陈酒、酱油各数盞，覆以瓜姜及蕈笋诸鲜物，紧火蒸之

极熟。此则随时早暮，供客咸宜，以鲜味尽在鱼中，并无一物能侵，亦无一气可泄，真上着也。

虾

笋为蔬食之必需，虾为荤食之必需，皆犹甘草之于药也。善治荤食者，以焯虾之汤，和入诸品，则物物皆鲜，亦犹笋汤之利于群蔬。笋可孤行，亦可并用；虾则不能自主，必借他物为君。若以煮熟之虾单盛一簋，非特华筵必无是事，亦且令食者索然。惟醉者糟者，可供匕箸。是虾也者，因人成事之物，然又必不可无之物也。“治国若烹小鲜”，此小鲜之有裨于国者。

鳖

“新粟米炊鱼子饭，嫩芦笋煮鳖裙羹。”林居之人述此以鸣得意，其味之鲜美可知矣。予性于水族无一不嗜，独与鳖不相能，食多则觉口燥，殊不可解。一日，邻人网得巨鳖，召众食之，死者接踵，染指其汁者，亦病数月始痊。予以不喜食此，得免于召，遂得免于死。岂性之所在，即命之所在耶？予一生侥幸之事难更仆数。乙未居武林，邻家失火，三面皆焚，而予居无恙。己卯之夏，遇大盗于虎爪山，贿以重资者得免，不则立毙。予囊无一钱，自分必死，延颈受诛，而盗不杀。至于甲申、乙酉之变，予虽避兵山中，然亦有时入郭，其至幸者，才徙家而家焚，甫出城而城陷，其出生于死，皆在斯须倏忽之间。噫，予何修而得此于天哉！报施无地，有强为善而已矣。

蟹

予于饮食之美，无一物不能言之，且无一物不穷其想象，竭其幽渺而言之；独于蟹螯一物，心能嗜之，口能甘之，无论终身一日皆不能忘之，至其可嗜可甘与不可忘之故，则绝口不能形容之。此一事一物也者，在我则为饮食中之痴情，在彼则为天地间之怪物矣。予嗜此一生。每岁于蟹之未出时，即储钱以待，因家人笑予以蟹为命，即自呼其钱为“买命钱”。自初出之日始，至告竣之日止，未尝虚负一夕，缺陷一时。同人知予癖蟹，召者饔者皆于此日，予因呼九月、十月为“蟹秋”。虚其易尽而难继，又命家人涤瓮酿酒，以备糟之醉之用。糟名“蟹糟”，酒名“蟹酿”，瓮名“蟹瓮”。向有一婢，勤于事蟹，即易其名为“蟹奴”，今亡之矣。蟹乎！蟹乎！汝于吾之一生，殆相终始者乎！所不能为汝生色者，未尝于有螃蟹无监州处作郡，出俸钱以供大嚼，仅以慳囊易汝。即使日购百筐，除供客外，与五十口家人分食，然则入予腹者有几何哉？蟹乎！蟹乎！吾终有愧于汝矣。

蟹之为物至美，而其味坏于食之之人。以之为羹者，鲜则鲜矣，而蟹之美质何在？以之为脍者，膩则膩矣，而蟹之真味不存。更可厌者，断为两截，和以油、盐、豆粉而煎之，使蟹之色、蟹之香与蟹之真味全失。此皆似嫉蟹之多味，忌蟹之美观，而多方蹂躏，使之泄气而变形者也。世间好物，利在孤行。蟹之鲜而肥，甘而膩，白似玉而黄似金，已造色香味三者之至极，更无一物可以上之。和以他味者，犹之以燭火助日，掬水益河，冀其有裨也，不亦难乎？凡食蟹者，只合全其故体，蒸而熟之，贮以冰盘，列之几上，听客自取自食。剖一筐，食一筐，断一螯，食一螯，则气与味纤毫不漏。出于蟹之躯壳者，即入于人之口腹，饮食之三

味，再有深入于此者哉？凡治他具，皆可人任其劳，我享其逸，独蟹与瓜子、菱角三种，必须自任其劳。旋剥旋食则有味，人剥而我食之，不特味同嚼蜡，且似不成其为蟹与瓜子、菱角，而别是一物者。此与好香必须自焚，好茶必须自斟，僮仆虽多，不能任其力者，同出一理。讲饮食清供之道者，皆不可不知也。

宴上客者势难全体，不得已而羹之，亦不当和以他物，惟以煮鸡鹅之汁为汤，去其油腻可也。

瓮中取醉蟹，最忌用灯，灯光一照，则满瓮俱沙，此人人知忌者也。有法处之，则可任照不忌。初醉之时，不论昼夜，俱点油灯一盏，照之入瓮，则与灯光相习，不相忌而相能，任凭照取，永无变沙之患矣。（此法都门有用之者。）

零星水族

予担簦二十年，履迹几遍天下。四海历其三，三江五湖则俱未尝遗一，惟九河未能环绕，以其迂僻者多，不尽在舟车可抵之境也。历水既多，则水族之经食者，自必不少，因知天下万物之繁，未有繁于水族者，载籍所列诸鱼名，不过十之六七耳。常有奇形异状，味亦不群，渔人竟日取之，土人终年食之，咨询其名，皆不知为何物者。无论其他，即吴门、京口诸地所产水族之中，有一种似鱼非鱼，状类河鲀而极小者，俗名“斑子鱼”，味之甘美，几同乳酪，又柔滑无骨，真至味也，而《本草》、《食物》诸书，皆所不载。近地且然，况寥廓而迂僻者乎？海错之至美，人所艳羨而不得食者，为闽之“西施舌”、“江瑶柱”二种。“西施舌”予既食之，独“江瑶柱”未获一尝，为入闽恨事。所谓“西施舌”者，状其形也。白而洁，光而滑，入口啣之，俨然美妇之舌，但少朱唇皓齿牵制其根，使之不留而即下耳。此所谓状其形也。若论鲜

味，则海错中尽有过之者，未甚奇特，朵颐此味之人，但索美舌而啞之，即当屠门大嚼矣。其不甚著名而有异味者，则北海之鲜魮，味并鲔鱼，其腹中有肋，甘美绝伦。世人以在鲟鳇腹中者为“西施乳”，若与此肋较短长，恐又有东家西家之别耳。

河鲀为江南最尚之物，予亦食而甘之。但询其烹饪之法，则所需之作料甚繁，合而计之，不下十余种，且又不可缺一，缺一则腥而寡味。然则河鲀无奇，乃假众美成奇者也。有如许调和之料施之他物，何一不可擅长，奚必假杀人之物以示异乎？食之可，不食亦可。若江南之鲚，则为春馔中妙物。食鲔鱼及鲟鳇有厌时，鲚则愈嚼愈甘，至果腹而犹不能释手者也。

不载果食茶酒说

果者酒之仇，茶者酒之敌，嗜酒之人必不嗜茶与果，此定数也。凡有新客入座，平时未经共饮，不知其酒量浅深者，但以果饼及糖食验之。取到即食，食而似有踊跃之情者，此即茗客，非酒客也；取而不食，及食不数四而即有倦色者，此必巨量之客，以酒为生者也。以此法验嘉宾，百不失一。予系茗客而非酒人，性似猿猴，以果代食，天下皆知之矣。讯以酒味则茫然，与谈食果饮茶之事，则觉井井有条，滋滋多味。兹既备述饮馔之事，则当于二者加详，胡以缺而不备？曰：惧其略也。性既嗜此，则必大书特书，而且为专罄竹之书，若以寥寥数纸终其崖略，则恐笔欲停而心未许，不觉其言之汗漫而难收也。且果可略而茶不可略，茗战之兵法，富于《三略》、《六韬》，岂《孙子》十三篇所能尽其灵秘者哉？是用专辑一编，名为《茶果志》，孤行可，尾于是集之后亦可。至于曲蘖一事，予既自谓茫然，如复强为置喙，则假口他人乎？抑强不知为知，以欺天下乎？假口则仍犯剿袭之戒；将欲

欺人，则茗客可欺，酒人不可欺也。倘执其所短而兴问罪之师，吾能以茗战战之乎？不若绝口不谈之为愈耳。

种 植 部*

木 本 第 一

草木之种类极杂，而别其大较有三，木本、藤本、草本是也。木本坚而难痿，其岁较长者，根深故也。藤本之为根略浅，故弱而待扶，其岁犹以年纪。草本之根愈浅，故经霜辄坏，为寿止能及岁。是根也者，万物短长之数也，欲丰其得，先固其根，吾于老农老圃之事，而得养生处世之方焉。人能虑后计长，事事求为木本，则见雨露不喜，而睹霜雪不惊；其为身也，挺然独立，至于斧斤之来，则天数也，岂灵椿古柏之所能避哉？如其植德不力，而务为苟延，则是藤本其身，止可因人成事，人立而我立，人仆而我亦仆矣。至于木槿其生，不为明日计者，彼且不知根为何物，遑计入土之浅深，藏蓂之厚薄哉？是即草木之流亚也。噫，世岂乏草木之行，而反木其天年，藤其后裔者哉？此造物偶然之失，非天地处人待物之常也。

* 已载群书者片言不赘，非补未逮之论，即传自验之方。欲睹陈言，请翻诸集。——作者注

牡丹

牡丹得王于群花，予初不服是论，谓其色其香，去芍药有几？择其绝胜者与角雌雄，正未知鹿死谁手。及睹《事物纪原》，谓武后冬月游后苑，花俱开而牡丹独迟，遂贬洛阳，因大悟曰：“强项若此，得贬固宜，然不加九五之尊，奚洗八千之辱乎？（韩诗“夕贬潮阳路八千”。）物生有候，葭动以时，苟非其时，虽十尧不能冬生一穗；后系人主，可强鸡人使昼鸣乎？如其有识，当尽贬诸卉而独崇牡丹。花王之封，允宜肇于此日，惜其所见不逮，而且倒行逆施。诚哉！其为武后也。予自秦之巩昌，载牡丹十数本而归，同人嘲予以诗，有“群芳应怪人情热，千里趋迎富贵花”之句。予曰：“彼以守拙得贬，予载之归，是趋冷非趋热也。”兹得此论，更发明矣。艺植之法，载于名人谱帙者，纤发无遗，予倘及之，又是拾人牙后矣。但有吃紧一着，花谱偶载而未之悉者，请畅言之。是花皆有正面，有反面，有侧面。正面宜向阳，此种花通义也。然他种犹能委曲，独牡丹不肯通融，处以南面即生，俾之他向则死，此其肮脏不回之本性，人主不能屈之，谁能屈之？予尝执此语同人，有迂其说者。予曰：“匪特土民之家，即以帝王之尊，欲植此花，亦不能不循此例。”同人诘予曰：“有所本乎？”予曰：“有本。吾家太白诗云：‘名花倾国两相欢。常得君王带笑看。解释春风无限恨，沉香亭北倚栏杆。’倚栏杆者向北，则花非南面而何？”同人笑而是之。斯言得无定论？

梅

花之最先者梅，果之最先者櫻桃。若以次序定尊卑，则梅当王于花，櫻桃王于果，犹瓜之最先者曰王瓜，于义理未尝不合，奈何别置品题，使后来居上。首出者不得为圣人，则辟草昧致文明者，谁之力欤？虽然，以梅冠群芳，料與情必协；但以櫻桃冠群果，吾恐主持公道者，又不免为荔枝号屈矣。姑仍旧贯，以免抵牾。种梅之法，亦备群书，无庸置吻，但言领略之法而已。花时苦寒，既有妻梅之心，当筹寝处之法。否则衾枕不备，露宿为难，乘兴而来者，无不尽兴而返，即求为驴背浩然，不数得也。观梅之具有二：山游者必带帐房，实三面而虚其前，制同汤网，其中多设炉炭，既可致温，复备暖酒之用。此一法也。园居者设纸屏数扇，覆以平顶，四面设窗，尽可开闭，随花所在，撑而就之。此屏不止观梅，是花皆然，可备终岁之用。立一小匾，名曰“就花居”。花间竖一旗帜，不论何花，概以总名曰“缩地花”。此一法也。若家居所植者，近在身畔，远亦不出眼前，是花能就人，无俟人为蜂蝶矣。然而爱梅之人，缺陷有二：凡到梅开之时，人之好恶不齐，天之功过亦不等，风送香来，香来而寒亦至，令人开户不得，闭户不得，是可爱者风，而可憎者亦风也。雪助花妍，雪冻而花亦冻，令人去之不可，留之不可，是有功者雪，有过者亦雪也。其有功无过，可爱而不可憎者惟日，既可养花，又堪曝背，是诚天之循吏也。使止有日而无风雪，则无时无日不在花间，布帐纸屏皆可不设，岂非梅花之至幸，而生人之极乐也哉！然而为之天者，则甚难矣。

蜡梅者，梅之别种，殆亦共姓而通谱者欤？然而有此令德，亦乐与联宗。吾又谓别有一花，当为蜡梅之异姓兄弟，玫瑰是也。气

味相孚，皆造浓艳之极致，殆不留余地待人者矣。人谓过犹不及，当务适中，然资性所在，一往而深，求为适中，不可得也。

桃

凡言草木之花，矢口即称桃李，是桃李二物，领袖群芳者也。其所以领袖群芳者，以色之大都不出红白二种，桃色为红之极纯，李色为白之至洁，“桃花能红李能白”一语，足尽二物之能事。然今人所重之桃，非古人所爱之桃；今人所重者为口腹计，未尝究及观览。大率桃之为物，可目者未尝可口，不能执两端事人。凡欲桃实之佳者，必以他树接之，不知桃实之佳，佳于接，桃色之坏，亦坏于接。桃之未经接者，其色极娇，酷似美人之面，所谓“桃腮”、“桃靥”者，皆指天然未接之桃，非今时所谓碧桃、绛桃、金桃、银桃之类也。即今诗人所咏，画图所绘者，亦是此种。此种不得于名园，不得于胜地，惟乡村篱落之间，牧童樵叟所居之地，能富有之。欲看桃花者，必策蹇郊行，听其所至，如武陵人之偶入桃源，始能复有其乐。如仅载酒园亭，携姬院落，为当春行乐计者，谓赏他卉则可，谓看桃花而能得其真趣，吾不信也。噫，色之极媚者莫过于桃，而寿之极短者亦莫过于桃，“红颜薄命”之说，单为此种。凡见妇人面与相似而色泽不分者，即当以花魂视之，谓别形体不久也。然勿明言，至生涕泣。

李

李是吾家果，花亦吾家花，当以私爱嬖之，然不敢也。唐有天下，此树未闻得封。天子未尝私庇，况庶人乎？以公道论之可

已。与桃齐名，同作花中领袖，然而桃色可变，李色不可变也。“邦有道，不变塞焉，强哉矫！邦无道，至死不变，强哉矫！”自有此花以来，未闻稍易其色，始终一操，涅而不淄，是诚吾家物也。至有稍变其色，冒为一宗，而此类不收，仍加一字以示别者，则郁李是也。李树较桃为耐久，逾三十年始老，枝虽枯而子仍不细，以得于天者独厚，又能甘淡守素，未尝以色媚人也。若仙李之盘根，则又与灵椿比寿。我欲绳武而不能，以著述永年而已矣。

杏

种杏不实者，以处子常系之裙系树上，便结子累累。予初不信，而试之果然。是树性喜淫者，莫过于杏，予尝名为“风流树”。噫，树木何取于人，人何亲于树木，而契爱若此，动乎情也？情能动物，况于人乎！必宜于处子之裙者，以情贵乎专；已字人者，情有所分而不聚也。予谓此法既验于杏，亦可推而广之。凡树木之不实者，皆当系以美女之裳；即男子之不能诞育者，亦当衣以佳人之裤。盖世间慕女色而爱处子，可以情感而使之动者，岂止一杏而已哉！

梨

予播迁四方，所止之地，惟荔枝、龙眼、佛手诸卉，为吴越诸邦不产者，未经种植，其余一切花果竹木，无一不经葺理；独梨花一本，为眼前易得之物，独不能身有其树为植梨主人，可与少陵不咏海棠，同作一等欠事。然性爱此花，甚于爱食其果。果之种类不一，中食者少，而花之耐看，则无一不然。雪为天上之

雪，此是人间之雪；雪之所少者香，此能兼擅其美。唐人诗云：“梅虽逊雪三分白，雪却输梅一段香。”此言天上之雪。料其输赢不决，请以人间之雪，为天上解围。

海 棠

“海棠有色而无香”，此《春秋》责备贤者之法。否则无香者众，胡尽恕之，而独于海棠是咎？然吾又谓海棠不尽无香，香在隐跃之间，又不幸而为色掩。如人生有二技，一技稍粗，则为精者所隐；一术太长，则六艺皆通，悉为人所不道。王羲之善书，吴道子善画，此二人者，岂仅工书善画者哉？苏长公不善棋酒，岂遂一子不拈，一卮不设者哉？诗文过高，棋酒不足称耳。吾欲证前人有香无香之说，执海棠之初放者嗅之，另有一种清芬，利于缓咀，而不宜于猛嗅。使尽无香，则蜂蝶过门不入矣，何以郑谷《咏海棠》诗云：“朝醉暮吟看不足，羡他蝴蝶宿深枝”？有香无香，当以蝶之去留为证。且香之与臭，敌国也。《花谱》云：“海棠无香而畏臭，不宜灌粪。”去此者必即彼，若是，则海棠无香之说，亦可备证于前，而稍白于后矣。噫，“大音希声”，“大羹不和”，奚必如兰如麝，扑鼻薰人，而后谓之有香气乎？

王禹偁《诗话》云：“杜子美避地蜀中，未尝有一诗及海棠，以其生母名海棠也。”生母名海棠，予空疏未得其考，然恐子美即善吟，亦不能物物咏到。一诗偶遗，即使后人议及父母。甚矣，才子之难为也。鼎革以前，吾乡杜姓者，其家海棠绝胜，予岁岁纵览，未尝或遗。尝赠以诗云：“此花不比别花来，题破东君着意培。不怪少陵无赠句，多情偏向杜家开。”似可为少陵解嘲。

秋海棠一种，较春花更媚。春花肖美人，秋花更肖美人；春花肖美人之已嫁者，秋花肖美人之待年者；春花肖美人之绰约可

爱者，秋花肖美人之纤弱可怜者。处子之可怜，少妇之可爱，二者不可得兼，必将娶怜而割爱矣。相传秋海棠初无是花，因女子怀人不至，涕泣洒地，遂生此花，可为“断肠花”。噫，同一泪也，洒之林中，即成斑竹，洒之地上，即生海棠，泪之为物神矣哉！

春海棠颜色极佳，凡有园亭者不可不备，然贫士之家不能必有，当以秋海棠补之。此花便于贫士者有二：移根即是，不须钱买，一也；为地不多，墙间壁上，皆可植之。性复喜阴，秋海棠所取之地，皆群花所弃之地也。

玉 兰

世无玉树，请以此花当之。花之白者尽多，皆有叶色相乱，此则不叶而花，与梅同致。千千万蕊，尽放一时，殊盛事也。但绝盛之事，有时变为恨事。众花之开，无不忌雨，而此花尤甚。一树好花，止须一宿微雨，尽皆变色，又觉腐烂可憎，较之无花，更为乏趣。群花开谢以时，谢者既谢，开者犹开，此则一败俱败，半瓣不留。语云：“弄花一年，看花十日。”为玉兰主人者，常有延伫经年，不得一朝盼望者，诎非香国中绝大恨事？故值此花一开，便宜急急玩赏，玩得一日是一日，赏得一时是一时。若初开不玩而俟全开，全开不玩而俟盛开，则恐好事未行，而杀风景者至矣。噫，天何仇于玉兰，而往往三岁之中，定有一二岁与之为难哉！

辛 夷

辛夷，木笔，望春花，一卉而数异其名，又无甚新奇可取，“名有余而实不足”者，此类是也。园亭极广，无一不备者方可植

之，不则当为此花藏拙。

山 茶

花之最不耐开，一开辄尽者，桂与玉兰是也；花之最能持久，愈开愈盛者，山茶、石榴是也。然石榴之久，犹不及山茶；榴叶经霜即脱，山茶戴雪而荣。则是此花也者，具松柏之骨，挟桃李之姿，历春夏秋冬如一日，殆草木而神仙者乎？又况种类极多，由浅红以至深红，无一不备。其浅也，如粉如脂，如美人之腮，如酒客之面；其深也，如砾如火，如猩猩之血，如鹤顶之珠。可谓极浅深浓淡之致，而无一毫遗憾者矣。得此花一二本，可抵群花数十本。惜乎予园仅同芥子，诸卉种就，不能再纳须弥，仅取盆中小树，植于怪石之旁。噫，善善而不能用，恶恶而不能去，予其郭公也夫！

紫 薇

人谓禽兽有知，草木无知。予曰：不然。禽兽草木尽是有知之物，但禽兽之知，稍异于人，草木之知，又稍异于禽兽，渐蠢则渐愚耳。何以知之？知之于紫薇树之怕痒。知痒则知痛，知痛痒则知荣辱利害，是去禽兽不远，犹禽兽之去人不远也。人谓树之怕痒者，只有紫薇一种，余则不然。予曰：草木同性，但观此树怕痒，即知无草无木不知痛痒，但紫薇能动，他树不能动耳。人又问：既然不动，何以知其识痛痒？予曰：就人喻之，怕痒之人，搔之即动，亦有不怕痒之人，听人搔扒而不动者，岂人亦不知痛痒乎？由是观之，草木之受诛锄，犹禽兽之被宰杀，其苦其痛，俱

有不忍言者。人能以待紫薇者待一切草木，待一切草木者待禽兽与人，则斩伐不敢妄施，而有疾痛相关之义矣。

绣 球

天工之巧，至开绣球一花而止矣。他种之巧，纯用天工，此则诈施人力，似肖尘世所为而为者。剪春罗、剪秋罗诸花亦然。天工于此，似非无意，盖曰：“汝所能者，我亦能之；我所能者，汝实不能为也。”若是，则当再生一二蹴球之人，立于树上，则天工之斗巧者全矣。其不屑为此者，岂以物可肖，而人不足肖乎？

紫 荆

紫荆一种，花之可已者也。但春季所开，多红少紫，欲备其色，故间植之。然少枝无叶，贴树生花，虽若紫衣少年，亭亭独立，但觉窄袍紧袂，衣瘦身肥，立于翩翩舞袖之中，不免代为踉蹌。

梔 子

梔子花无甚奇特，予取其仿佛玉兰。玉兰忌雨，而此不忌；玉兰齐放齐凋，而此则开以次第。惜其树小而不能出檐，如能出檐，即以之权当玉兰，而补三春恨事，谁曰不可？

杜鹃 樱桃

杜鹃、樱桃二种，花之可有可无者也。所重于樱桃者，在实不在花；所重于杜鹃者，在西蜀之异种，不在四方之恒种。如名花俱备，则二种开时，尽有快心而夺目者，欲览余芳，亦愁少暇。

石 榴

芥子园之地不及三亩，而屋居其一，石居其一，乃榴之大者，复有四五株。是点缀吾居，使不落寞者，榴也；盘踞吾地，使不得尽栽他卉者，亦榴也。榴之功罪，不几半乎？然赖主人善用，榴虽多，不为赘也。榴性喜压，就其根之宜石者，从而山之，是榴之根即山之麓也；榴性喜日，就其阴之可庇者，从而屋之，是榴之地即屋之天也；榴之性又复喜高而直上，就其枝柯之可傍，而又借为天际真人者，从而楼之，是榴之花即吾倚栏守户之人也。此芥子园主人区处石榴之法，请以公之树木者。

木 槿

木槿朝开而暮落，其为生也良苦。与其易落，何如弗开？造物生此，亦可谓不憚烦矣。有人曰：不然。木槿者，花之现身说法以儆愚蒙者也。花之一日，犹人之百年。人视人之百年，则自觉其久，视花之一日，则谓极少而极暂矣。不知人之视人，犹花之视花，人以百年为久，花岂不以一日为久乎？无一日不落之花，

则无百年不死之人可知矣。此人之似花者也。乃花开花落之期虽少而暂，犹有一定不移之数，朝开暮落者，必不幻而为朝开午落，午开暮落；乃人之生死，则无一定不移之数，有不及百年而死者，有不及百年之半与百年之二三而死者；则是花之落也必焉，人之死也忽焉。使人亦如木槿之为生，至暮必落，则生前死后之事，皆可自为政矣，无如其不能也。此人之不能似花者也。人能作如是观，则木槿一花，当与萱草并树。睹萱草则能忘忧，睹木槿则能知戒。

桂

秋花之香者，莫能如桂。树乃月中之树，香亦天上之香也。但其缺陷处，则在满树齐开，不留余地。予有《惜桂》诗云：“万斛黄金碾作灰，西风一阵总吹来。早知三日都狼藉，何不留将次第开？”盛极必衰，乃盈虚一定之理，凡有富贵荣华一蹴而至者，皆玉兰之为春光，丹桂之为秋色。

合 欢

“合欢蠲忿”，“萱草忘忧”，皆益人情性之物，无地不宜种之。然睹萱草而忘忧，吾闻其语矣。未见其人也。对合欢而蠲忿，则不必讯之他人，凡见此花者，无不解愠成欢，破涕为笑。是萱草可以不树，而合欢则不可不栽。栽之之法，《花谱》不详，非不详也，以作谱之人，非真能合欢之人也。渔人谈稼事，农父著樵经，有约略其词而已。凡植此树，不宜出之庭外，深闺曲房是其所也。此树朝开暮合，每至昏黄，枝叶互相交结，是名“合欢”。植之闺

房者，合欢之花宜置合欢之地，如椿萱宜在承欢之所，荆棣宜在友于之场，欲其称也。此树栽于内室，则人开而树亦开，树合而人亦合。人既为之增愉，树亦因而加茂，所谓人地相宜者也。使居寂寞之境，不亦虚负此花哉？灌勿太肥，常以男女同浴之水，隔一宿而浇其根，则花之芳妍，较常加倍。此予既验之法，以无心偶试而得之。如其不信，请同觅二本，一植庭外，一植闺中，一浇肥水，一浇浴汤，验其孰盛孰衰，即知予言谬不谬矣。

木 芙 蓉

水芙蓉之于夏，木芙蓉之于秋，可谓二季功臣矣。然水芙蓉必须池沼，“所谓伊人，在水一方”者，不可数得。茂叔之好，徒有其心而已。木则随地可植。况二花之艳，相距不远。虽居岸上，如在水中，谓之秋莲可，谓之夏莲亦可，即自认为三春之花，东皇未去也亦可。凡有篱落之家，此种必不可少。如或傍水而居，隔岸不见此花者，非至俗之人，即薄福不能消受之人也。

夹 竹 桃

夹竹桃一种，花则可取，而命名不善。以竹乃有道之士，桃则佳丽之人，道不同不相为谋，合而一之，殊觉矛盾。请易其名为“生花竹”，去一桃字，便觉相安。且松、竹、梅素称三友，松有花，梅有花，惟竹无花，可称缺典。得此补之，岂不天然凑合？亦女祸氏之五色石也。

瑞 香

茂叔以莲为花之君子，予为增一敌国，曰：瑞香乃花之小人。何也？《谱》载此花“一名麝囊，能损花，宜另植”。予初不信，取而嗅之，果带麝味，麝则未有不损群花者也。同列众芳之中，即有朋侪之义，不能相资相益，而反崇之，非小人而何？幸造物处之得宜，予以不能为患之势。其开也，必于冬春之交，是时群花摇落，诸卉未荣，及见此花者，仅有梅花、水仙二种，又在成功将退之候，当其锋也未久，故罹其毒也亦不深，此造物之善用小人也。使易冬春之交而为春夏之交，则花王亦几被篡，矧下此者乎？唐宋诸名流，无不怜香嗜色，赞以诗词者，皆以早春无花，得此可搔目痒，又但见其佳，而未逢其虐耳。予僭为香国平章，焉得不秉公持正？宁使一小人怒而欲杀，不敢不为众君子密提防也。

茉莉

茉莉一花，单为助妆而设，其天生以媚妇人者乎？是花皆晓开，此独暮开。暮开者，使人不得把玩，秘之以待晓妆也。是花蒂上皆无孔，此独有孔。有孔者，非此不能受簪，天生以为立脚之地也。若是，则妇人之妆，乃天造地设之事耳。植他树皆为男子，种此花独为妇人。既为妇人，则当眷属视之矣。妻梅者，止一林逋，妻茉莉者，当遍天下而是也。

欲艺此花，必求木本。藤本一样着花，但苦经年即死，视其死而莫之救，亦仁人君子所不乐为也。木本最难过冬，予尝历验收藏之法。此花痿于寒者什一，毙于干者什九，人皆畏冻而滴水

不浇，是以枯死。此见噎废食之法，有避呕逆而经时绝粒，其人尚存者乎？稍暖微浇，大寒即止，此不易之法。但收藏必于暖处，蔑罩必不可无，浇不用水而用冷茶，如斯而已。予艺此花三十年，皆为燥误，如今识花，以告世人，亦其否极泰来之会也。

藤本第二

藤本之花，必须扶植。扶植之具，莫妙于从前成法之用竹屏。或方其眼，或斜其榻，因作葳蕤柱石，遂成锦绣墙垣，使内外之人，隔花阻叶，碍紫间红，可望而不可亲，此善制也。无奈近日茶坊酒肆，无一不然，有花即以植花，无花则以代壁。此习始于维扬，今日渐及他处矣。市井若此，高人韵士之居，断断不应若此。避市井者，非避市井，避其劳劳攘攘之情，锱铢必较之陋习也。见市井所有之物，如在市井之中，居处习见，能移性情，此其所以当避也。即如前人之取别号，每用川、泉、湖、宇等字，其初未尝不新，未尝不雅，迨后商贾者流，家效而户则之，以致市肆标榜之上，所书姓名非川即泉，非湖即宇，是以避俗之人，不得不去之若浼。迨来缙绅先生悉用斋、庵二字，极宜；但恐用者过多，则而效之者，又入从前标榜，是今日之斋、庵，未必不是前日之川、泉、湖、宇。虽曰名以人重，人不以名重，然亦实之宾也。已噪寰中者仍之继起，诸公似应稍变。人问植花既不用屏，岂遂听其滋蔓于地乎？曰：不然。屏仍其故，制略新之。虽不能保后日之市廛，不又变为今日之园圃，然新得一日是一日，异得一时是一时，但愿贸易之人，并性情风俗而变之。变亦不求尽变，市井之念不可无，垄断之心不可有。觅应得之利，谋有道之生，即是人间大隐。若是，则高人韵士，皆乐得与之游矣，复何劳扰锱铢之足避哉？花屏之制有三，列于《藤本》之末。

薔 薇

結屏之花，薔薇居首。其可愛者，則在富于種而不一其色。大約屏間之花，貴在五彩繽紛，若上下四旁皆一其色，則是佳人忌作之綉，庸工不繪之圖，列于亭齋，有何意致？他種屏花，若木香、酴醾、月月紅諸本，族類有限，為色不多，欲其相間，勢必旁求他種。薔薇之苗裔極繁，其色有赤，有紅，有黃，有紫，甚至有黑；即紅之一色，又判數等，有大紅、深紅、淺紅、肉紅，粉紅之異。屏之寬者，盡其種類所有而植之，使條梗蔓延相錯，花時斗麗，可傲步障于石崇。然征名考實，則皆薔薇也。是屏花之富者，莫过于薔薇。他種衣色虽妍，終不免于捉襟露肘。

木 香

木香花密而香濃，此其稍勝薔薇者也。然結屏單靠此種，未免冷落，勢必依傍薔薇。薔薇宜架，木香宜棚者，以薔薇條干之所及，不及木香之遠也。木香作屋，薔薇作垣，二者各盡其長，主人亦均收其利矣。

酴 醾

酴醾之品，亞于薔薇、木香，然亦屏間必須之物，以其花候稍遲，可續二種之不繼也。“开到酴醾花事了”，每憶此句，情興為之索然。

月 月 红

俗云：“人无千日好，花难四季红。”四季能红者，现有此花，是欲矫俗言之失也。花能矫俗言之失，何人情反听其验乎？缀屏之花，此为第一。所苦者树不能高，故此花一名“瘦客”。然予复有用短之法，乃为市井之人强迫而成者也。法在屏制之第三幅。此花有红、白及淡红三本，结屏必须同植。

此花又名“长春”，又名“斗雪”，又名“胜春”，又名“月季”。予于种种之外，复增一名，曰“断续花”。花之断而能续，续而复能断者，只有此种。因其所开不繁，留为可继，故能绵邈若此；其余一切之不能续者，非不能续，正以其不能断耳。

姊 妹 花

花之命名，莫善于此。一蓓七花者曰“七姊妹”，一蓓十花者曰“十姊妹”。观其浅深红白，确有兄长娣幼之分，殆杨家姊妹现身乎？余极喜此花，二种并植，汇其名为“十七姊妹”。但怪其蔓延太甚，溢出屏外，虽日刈月除，其势犹不可遏。岂党与过多，酿成不戢之势欤？此无他，皆同心不妒之过也，妒则必无是患矣。故善御女戎者，妙在使之能妒。

玫 瑰

花之有利于人，而无一不为我用者，菱荷是也；花之有利于

人，而我无一不为所奉者，玫瑰是也。芰荷利人之说，见于本传。玫瑰之利，同于芰荷，而令人可亲可溺，不忍暂离，则又过之。群花止能娱目，此则口眼鼻舌以至肌体毛发，无一不在所奉之中。可囊可食，可嗅可观，可插可戴，是能忠臣其身，而又能媚子其术者也。花之能事，毕于此矣。

素馨

素馨一种，花之最弱者也，无一枝一茎不需扶植，予尝谓之“可怜花”。

凌霄

藤花之可敬者，莫若凌霄。然望之如天际真人，卒急不能招致，是可敬亦可恨也。欲得此花，必先蓄奇石古木以待，不则无所依附而不生，生亦不大。予年有几，能为奇石古木之先辈而蓄之乎？欲有此花，非入深山不可。行当即之，以舒此恨。

真珠兰

此花与叶，并不似兰，而以兰名者，肖其香也。即香味亦稍别，独有一节似之；兰花之香，与之习处者不觉，骤遇始闻之，疏而复亲始闻之，是花亦然。此其所以名兰也。闽、粤有木兰，树大如桂，花亦似之，名不附桂而附兰者，亦以其香隐而不露，耐久闻而不耐急嗅故耳。凡人骤见而即觉其可亲者，乃人中之玫瑰，

非友中之芝兰也。

草本第三

草本之花，经霜必死；其能死而不死，交春复发者，根在故也。常闻有花不待时，先期使开之法，或用沸水浇根，或以硫磺代土，开则开矣，花一败而树随之，根亡故也。然则人之荣枯显晦，成败利钝，皆不足据，但询其根之无恙否耳。根在，则虽处厄运，犹如霜后之花，其复发也，可坐而待也，如其根之或亡，则虽处荣枯显耀之境，犹之奇葩烂目，总非自开之花，其复发也，恐不能坐而待矣。予谈草木，辄以人喻。岂好为是哓哓者哉？世间万物，皆为人设。观感一理，备人观者，即备人感。天之生此，岂仅供耳目之玩、情性之适而已哉？

芍药

芍药与牡丹媲美，前人署牡丹以“花王”，署芍药以“花相”，冤哉！予以公道论之。天无二日，民无二王，牡丹正位于香国，芍药自难并驱。虽别尊卑，亦当在五等诸侯之列，岂王之下，相之上，遂无一位一座，可备酬功之用者哉？历翻种植之书，非云“花似牡丹而狭”，则曰“子似牡丹而小”。由是观之，前人评品之法，或由皮相而得之。噫，人之贵贱美恶，可以长短肥瘦论乎？每于花时奠酒，必作温言慰之曰：“汝非相材也，前人无识，谬署此名，花神有灵，付之勿较，呼牛呼马，听之而已。”予于秦之巩昌，携牡丹、芍药各数十种而归，牡丹活者颇少，幸此花无恙，不虚负戴之劳。岂人为知己死者，花反为知己生乎？

兰

“兰生幽谷，无人自芳”，是已。然使幽谷无人，兰之芳也，谁得而知之？谁得而传之？其为兰也，亦与萧艾同腐而已矣。“如入芝兰之室，久而不闻其香”，是已。然既不闻其香，与无兰之室何异？虽有若无，非兰之所以自处，亦非人之所以处兰也。吾谓芝兰之性，毕竟喜人相俱，毕竟以人闻香气为乐。文人之言，只顾赞扬其美，而不顾其性之所安，强半皆若是也。然相俱贵乎有情，有情务在得法；有情而得法，则坐芝兰之室，久而愈闻其香。兰生幽谷与处曲房，其幸不幸相去远矣。兰之初着花时，自应易其座位，外者内之，远者近之，卑者尊之；非前倨而后恭，人之重兰非重兰也，重其花也，叶则花之舆从而已矣。居处一定，则当美其供设，书画炉瓶，种种器玩，皆宜森列其旁。但勿焚香，香薰即谢，匪妒也，此花性类神仙，怕亲烟火，非忌香也，忌烟火耳。若是，则位置提防之道得矣。然皆情也，非法也，法则专为闻香。“如入芝兰之室，久而不闻其香”者，以其知入而不知出也，出而再入，则后来之香，倍乎前矣。故有兰之室不应久坐，另设无兰者一间，以作退步，时退时进，进多退少，则刻刻有香，虽坐无兰之室，若依倩女之魂。是法也，而情在其中矣。如止有此室，则以门外作退步，或往行他事，事毕而入，以无意得之者，其香更甚。此予消受兰香之诀，秘之终身，而泄于一旦，殊可惜也。

此法不止消受兰香，凡属有花房舍，皆应若是。即焚香之室亦然，久坐其间，与未尝焚香者等也。门上布帘，必不可少，护持香气，全赖乎此。若止靠门扇开闭，则门开尽泄，无复一线之留矣。

蕙

蕙之与兰，犹芍药之与牡丹，相去皆止一间耳。而世之贵兰者必贱蕙，皆执成见、泥成心也。人谓蕙之花不如兰，其香亦逊。吾谓蕙诚逊兰，但其所以逊兰者，不在花与香而在叶，犹芍药之逊牡丹者，亦不在花与香而在梗。牡丹系木本之花，其开也，高悬枝梗之上，得其势，则能壮其威仪，是花王之尊，尊于势也。芍药出于草本，仅有叶而无枝，不得一物相扶，则委而仆于地矣，官无與从，能自壮其威乎？蕙兰之不相敌也反是。芍药之叶苦其短，蕙之叶偏苦其长；芍药之叶病其太瘦，蕙之叶翻病其太肥。当强者弱，而当弱者强，此其所以不相称，而大逊于兰也。兰蕙之开，时分先后。兰终蕙继，犹芍药之嗣牡丹，皆所谓史终弟及，欲废不能者也。善用蕙者，全在留花去叶，痛加剪除，择其稍狭而近弱者，十存二三；又皆截之使短，去两角而尖之，使与兰叶相若，则是变蕙成兰，而与“强干弱枝”之道合矣。

水仙

水仙一花，予之命也。予有四命，各司一时：春以水仙、兰花为命，夏以莲为命，秋以秋海棠为命，冬以蜡梅为命。无此四花，是无命也；一季缺一花，是夺予一季之命也。水仙以秣陵为最，予之家于秣陵，非家秣陵，家于水仙之乡也。记丙午之春，先以度岁无资，衣囊质尽，迨水仙开时，则为强弩之末，索一钱不得矣。欲购无资，家人曰：“请已之。一年不看此花，亦非怪事。”予曰：“汝欲夺吾命乎？宁短一岁之寿，勿减一岁之花。且予自他

乡冒雪而归，就水仙也，不看水仙，是何异于不返金陵，仍在他乡卒岁乎？”家人不能止，听予质簪珥购之。予之钟爱此花，非痴癖也。其色其香，其茎其叶，无一不异群葩，而予更取其善媚。妇人中之面似桃，腰似柳，丰如牡丹、芍药，而瘦比秋菊、海棠者，在在有之；若如水仙之淡而多姿，不动不摇，而能作态者，吾实未之见也。以“水仙”二字呼之，可谓摹写殆尽。使吾得见命名者，必颓然下拜。

不特金陵水仙为天下第一，其植此花而售于人者，亦能司造物之权，欲其早则早，命之迟则迟，购者欲于某日开，则某日必开，未尝先后一日。及此花将谢，又以迟者继之，盖以下种之先后为先后也。至买就之时，给盆与石而使之种，又能随手布置，即成画图，皆风雅文人所不及也。岂此等末技，亦由天授，非人力邪？

芙蕖

芙蕖与草本诸花，似觉稍异；然有根无树，一岁一生，其性同也。《谱》云：“产于水者曰草芙蓉，产于陆者曰旱莲。”则谓非草本不得矣。予夏季倚此为命者，非故效颦于茂叔，而袭成说于前人也。以芙蕖之可人，其事不一而足，请备述之。群葩当令时，只在花开之数日，前此后此，皆属过而不问之秋矣，芙蕖则不然。自荷钱出水之日，便为点缀绿波，及其劲叶既生，则又日高一日，日上日妍，有风既作飘飘之态，无风亦呈袅娜之姿，是我于花之未开，先享无穷逸致矣。迨至菡萏成花，娇姿欲滴，后先相继，自夏徂秋，此时在花为分内之事，在人为应得之资者也。及花之既谢，亦可告无罪于主人矣，乃复蒂下生蓬，蓬中结实，亭亭独立，犹似未开之花，与翠叶并擎，不至白露为霜，而能事不已。此皆

言其可目者也。可鼻则有荷叶之清香，荷花之异馥，避暑而暑为之退，纳凉而凉逐之生。至其可人之口者，则莲实与藕，皆并列盘餐，而互芬齿颊者也。只有霜中败叶，零落难堪，似成弃物矣。乃摘而藏之，又备经年裹物之用。是芙蕖也者，无一时一刻，不适耳目之观；无一物一丝，不备家常之用者也。有五谷之实，而不有其名；兼百花之长，而各去其短。种植之利，有大于此者乎？予四命之中，此命为最。无如酷好一生，竟不得半亩方塘，为安身立命之地；仅凿斗大一池，植数茎以塞责，又时病其漏，望天乞水以救之。殆所谓不善养生，而草菅其命者哉。

罌粟

花之善变者，莫如罌粟，次则数葵，余皆守故不迁者矣。艺此花如蓄豹，观其变也。牡丹谢而芍药继之，芍药谢而罌粟继之，皆繁之极、盛之至者也。欲续三葩，难乎其为继矣。

葵

花之易栽易盛，而又能变化不穷者，止有一葵。是事半于罌粟，而数倍其功者也。但叶之肥大可憎，更甚于蕙。俗云：“牡丹虽好，绿叶扶持。”人谓树之难好者在花，而不知难者反易。古今来不乏明君，所不可必得者，忠良之佐耳。

萱

萱花一无可取，植此同于种菜，为口腹计则可耳。至云对此可以忘忧，佩此可以宜男，则千万人试之，无一验者。书之不可尽信，类如此矣。

鸡冠

予有《收鸡冠花子》一绝云：“指甲搔花碎紫雯，虽非异卉也芳芬。时防撒却还珍惜，一粒明年一朵云。”此非溢美之词，道其实也。花之肖形者尽多，如绣球、玉簪、金钱、蝴蝶、剪春罗之属，皆能酷似，然皆尘世中物也；能肖天上之形者，独有鸡冠花一种。氤氲其象而璲璲其文，就上观之，俨然庆云一朵。乃当日命名者，舍天上极美之物，而搜索人间。鸡冠虽肖，然而贱视花容矣，请易其字，曰“一朵云”。此花有红、紫、黄、白四色，红者为红云，紫者为紫云，黄者为黄云，白者为白云。又有一种五色者，即名为“五色云”。以上数者，较之“鸡冠”，谁荣谁辱？花如有知，必将德我。

玉簪

花之极贱而可贵者，玉簪是也。插入妇人髻中，孰真孰假，几不能辨，乃闺阁中必需之物。然留之弗摘，点缀篱间，亦似美人之遗。呼作“江皋玉佩”，谁曰不可？

凤 仙

凤仙，极贱之花，止宜点缀篱落，若云备染指甲之用，则大谬矣。纤纤玉指，妙在无瑕，一染猩红，便称俗物。况所染之红，又不能尽在指甲，势必连肌带肉而丹之。迨肌肉退清之后，指甲又不能全红，渐长渐退，而成欲谢之花矣。始作俑者，其俗物乎？

金 钱

金钱、金盏、剪春罗、剪秋罗诸种，皆化工所作之小巧文字。因牡丹、芍药一开，造物之精华已竭，欲续不能，欲断不可，故作轻描淡写之文，以延其脉。吾观于此，而识造物纵横之才力亦有穷时，不能似源泉混混，愈涌而愈出也。合一岁所开之花，可作天工一部全稿。梅花、水仙，试笔之文也，其气虽雄，其机尚涩，故花不甚大，而色亦不甚浓。开至桃、李、棠、杏等花，则文心怒发，兴致淋漓，似有不可阻遏之势矣；然其花之大犹未甚，浓犹未至者，以其思路纷驰而不聚，笔机过纵而难收，其势之不可阻遏者，横肆也，非纯熟也。迨牡丹、芍药一开，则文心笔致俱臻化境，收横肆而归纯熟，舒蓄积而罄光华，造物于此，可谓使才务尽，不留丝发之余矣。然自识者观之，不待终篇而知其难继。何也？世岂有开至树不能载、叶不能覆之花，而尚有一物焉高出其上、大出其外者乎？有开至众彩俱齐、一色不漏之花，而尚有一物焉红过于朱、白过于雪者乎？斯时也，使我为造物，则必善刀而藏矣。乃天则未肯告乏也，夏欲试其技，则从而荷之；秋欲试其技，则从而菊之；冬则计穷力竭，尽可不花，而犹作蜡梅

一种以塞责之。数卉者，可不谓之芳妍尽致，足殿群芳者乎？然较之春末夏初，则皆强弩之末矣。至于金钱、金盏、剪春罗、剪秋罗、滴滴金、石竹诸花，则明知精力不继，篇幅寥寥，作此以塞纸尾，犹人诗文既尽，附以零星杂著者是也。由是观之，造物者极欲骋才，不肯自惜其力之人也；造物之才，不可竭而可竭，可竭而终不可竟竭者也。究竟一部全文，终病其后来稍弱。其不能弱始劲终者，气使之然，作者欲留余地而不得也。吾谓才人著书，不应取法于造物，当秋冬其始，而春夏其终，则是能以蔗境行文，而免于江淹才尽之消矣。

蝴 蝶 花

此花巧甚。蝴蝶，花间物也，此即以蝴蝶为花。是一是二，不知周之梦为蝴蝶欤？蝴蝶之梦为周欤？非蝶非花，恰合庄周梦境。

菊

菊花者，秋季之牡丹、芍药也。种类之繁衍同，花色之全备同，而性能持久复过之。从来种植之书，是花皆略，而叙牡丹、芍药与菊者独详。人皆谓三种奇葩，可以齐观等视，而予独判为两截，谓有天工人力之分。何也？牡丹、芍药之美，全仗天工，非由人力。植此二花者，不过冬溉以肥，夏浇以湿，如是焉止矣。其开也，烂漫芬芳，未尝以人力不勤，略减其姿而稍俭其色。菊花之美，则全仗人力，微假天工。艺菊之家，当其未入土也，则有治地酿土之劳，既入土也，则有插标记种之事。是萌芽未发之先，已费人力几许矣。迨分秧植定之后，劳瘁万端，复从此始。防燥

也，虑湿也，摘头也，掐叶也，芟蕊也，接枝也，捕虫掘蚓以防害也，此皆花事未成之日，竭尽人力以俟天工者也。即花之既开，亦有防雨避霜之患，缚枝系蕊之勤，置盏引水之烦，染色变容之苦，又皆以人力之有余，补天工之不足者也。为此一花，自春徂秋，自朝迄暮，总无一刻之暇。必如是，其为花也，始能丰丽而美观，否则同于婆娑野菊，仅堪点缀疏篱而已。若是，则菊花之美，非天美之，人美之也。人美之而归功于天，使与不费辛勤之牡丹、芍药齐观等视，不几恩怨不分，而公私少辨乎？吾知敛翠凝红而为沙中偶语者，必花神也。

自有菊以来，高人逸士无不尽吻揄扬，而予独反其说者，非与渊明作敌国。艺菊之人终岁勤动，而不以胜天之力予之，是但知花好，而昧所从来。饮水忘源，并置汲者于不问，其心安乎？从前题咏诸公，皆若是也。予创是说，为秋花报本，乃深于爱菊，非薄之也。

予尝观老圃之种菊，而慨然于修士之立身与儒者之治业。使能以种菊之无逸者砺其身心，则焉往而不为圣贤？使能以种菊之有恒者攻吾举业，则何虑其不掇青紫？乃士人爱身爱名之心，终不能如老圃之爱菊，奈何！

菜

菜为至贱之物，又非众花之等伦，乃《草本》、《藤本》中反有缺遗，而独取此花殿后，无乃贱群芳而轻花事乎？曰：不然。菜果至贱之物，花亦卑卑不数之花，无如积至贱至卑者而至盈千累万，则贱者贵而卑者尊矣。“民为贵，社稷次之，君为轻”者，非民之果贵，民之至多至盛为可贵也。园圃种植之花，自数朵以至数十百朵而止矣，有至盈阡溢亩，令人一望无际者哉？曰：无之。

无则当推菜花为盛矣。一气初盈，万花齐发，青畴白壤，悉变黄金，不诚洋洋乎大观也哉！当是时也，呼朋拉友，散步芳塍，香风导酒客寻帘，锦蝶与游人争路，郊畦之乐，什佰园亭，惟菜花之开，是其候也。

众卉第四

草木之类，各有所长，有以花胜者，有以叶胜者。花胜则叶无足取，且若赘疣，如葵花、蕙草之属是也。叶胜则可以无花，非无花也，叶即花也，天以花之丰神色泽归并于叶而生之者也。不然，绿者叶之本色，如其叶之，则亦绿之而已矣，胡以为红，为紫，为黄，为碧，如老少年、美人蕉、天竹、翠云草诸种，备五色之陆离，以娱观者之目乎？即其青之绿之，亦不同于有花之叶，另具一种芳姿。是知树木之美，不定在花，犹之丈夫之美者，不专主于有才，而妇人之丑者，亦不尽在无色也。观群花令人修容，观诸卉则所饰者不仅在貌。

芭蕉

幽斋但有隙地，即宜种蕉。蕉能韵人而免于俗，与竹同功，王子猷偏厚此君，未免挂一漏一。蕉之易栽，十倍于竹，一二月即可成荫。坐其下者，男女皆入画图，且能使台榭轩窗尽染碧色，“绿天”之号，洵不诬也。竹可镌诗，蕉可作字，皆文士近身之简牘。乃竹上止可一书，不能削去再刻；蕉叶则随书随换，可以日变数题，尚有时不烦自洗，雨师代拭者，此天授名笺，不当供怀素一人之用。予有题蕉绝句云：“万花题遍示无私，费尽春来笔墨

资。独喜芭蕉容我俭，自舒晴叶待题诗。”此芭蕉实录也。

翠 云

草色之最倩者，至翠云而止。非特草木为然，尽世间苍翠之色，总无一物可以喻之，惟天上彩云，偶一幻此。是知善着色者惟有化工，即与倾国佳人眉上之色并较浅深，觉彼犹是画工之笔，非化工之笔也。

虞 美 人

虞美人花叶并娇，且动而善舞，故又名“舞草”。《谱》云：“人或抵掌歌《虞美人》曲，即叶动如舞。”予曰：舞则有之，必歌《虞美人》曲，恐未必尽然。盖歌舞并行之事，一姬试舞，众姬必歌以助之，闻歌即舞，势使然也。若谓必歌《虞美人》曲，则此曲能歌者几？歌稀则和寡，此草亦得借口藏其拙矣。

书 带 草

书带草其名极佳，苦不得见。《谱》载出淄川城北郑康成读书处，名“康成书带草”。噫，康成雅人，岂作王戎钻核故事，不使种传别地耶？康成婢子知书，使天下婢子皆不知书，则此草不可移，否则处处堪栽也。

老 少 年

此草一名“雁来红”，一名“秋色”，一名“老少年”，皆欠妥切。雁来红者，尚有蓼花一种，经秋弄色者又不一而足，皆属泛称；惟“老少年”三字相宜，而又病其俗。予尝易其名曰“还童草”，似觉差胜。此草中仙品也，秋阶得此，群花可废。此草植之者繁，观之者众，然但知其一，未知其二，予尝细玩而得之。盖此草不特于一岁之中，经秋更媚，即一日之中，亦到晚更媚，总之后胜于前，是其性也。此意向矜独得，及阅徐竹隐诗，有“叶从秋后变，色向晚来红”一联，不知确有所见如予，知其晚来更媚乎？抑下句仍同上句，其晚亦指秋乎？难起九原而问之，即谓先予一着可也。

天 竹

竹无花而以夹竹桃代之，竹不实而以天竹补之，皆是可以不必然而强为蛇足之事。然蛇足之形自天生之，人亦不尽任咎也。

虎 刺

“长盆栽虎刺，宣石作峰峦。”布置得宜，是一幅案头山水。此虎丘卖花人长技也，不可谓非化工手笔。然购者于此，必熟视其为原盆与否。是卉皆可新移，独虎刺必须久植，新移旋踵者百无一活，不可不知。

苔

苔者，至贱易生之物，然亦有时作难：遇阶砌新筑，冀其速生者，彼必故意迟之，以示难得。予有《养苔》诗云：“汲水培苔浅却池，邻翁尽日笑人痴。未成斑藓浑难待，绕砌频呼绿拗儿。”然一生之后，又令人无可奈何矣。

萍

杨入水为萍，是花中第一怪事。花已谢而辞树，其命绝矣，乃又变为一物，其生方始，殆一物而两现其身者乎？人以杨花喻命薄之人，不知其命之厚也，较天下万物为独甚。吾安能身作杨花，而居水陆二地之胜乎？

水上生萍，极多雅趣；但怪其弥漫太甚，充塞池沼，使水居有如陆地，亦恨事也。有功者不能无过，天下事其尽然哉？

竹木第五

竹木者何？树之不花者也。非尽不花，其见用于世者，在此不在彼，虽花而犹之弗花也。花者，媚人之物，媚人者损己，故善花之树多不永年，不若椅桐梓漆之朴而能久。然则树即树耳，焉如花为？善花者曰：“彼能无求于世则可耳，我则不然。雨露所同也，灌溉所独也；土壤所同也，肥泽所独也。子不见尧之水、汤之旱乎？如其雨露或竭，而土不能滋，则奈何？盍舍汝所行而就

我？”不花者曰：“是则不能，甘为竹木而已矣。”

竹

俗云：“早间种树，晚上乘凉。”喻词也。予于树木中求一物以实之，其惟竹乎！种树欲其成荫，非十年不可，最易活者莫如杨柳，求其荫可蔽日，亦须数年。惟竹不然，移入庭中，即成高树，能令俗人之舍，不转盼而成高士之庐。神哉此君，真医国手也！种竹之方，旧传有诀云：“种竹无时，雨过便移，多留宿土，记取南枝。”予悉试之，乃不可尽信之书也。三者之内，惟一可遵，“多留宿土”是也。移树最忌伤根，土多则根之盘曲如故，是移地而未尝移土，犹迁人者并其卧榻而迁之，其人醒后尚不自知其迁也。若俟雨过方移，则沾泥带水，有几许未便。泥湿则松，水沾则濡，我欲留土，其如土湿而苏，随锄随散之，不可留何？且雨过必晴，新移之竹，晒则叶卷，一卷即非活兆矣。予易其词曰：“未雨先移。”天甫阴而雨犹未下，乘此急移，则宿土未湿，又复带潮，有如胶似漆之势，我欲多留，而土能随我，先据一筹之胜矣。且栽移甫定而雨至，是雨为我下，坐而受之，枝叶根本，无一不沾滋润之利。最忌者日，而日不至；最喜者雨，而雨即来；去所忌而投以喜，未有不欣欣向荣者。此法不止种竹，是花是木皆然。至于“记取南枝”一语，尤难遵奉。移竹移花，不易其向，向南者仍使向南，自是草木之幸。然移草木就人，当随人便，不能尽随草木之便。无论是花是竹，皆有正面，有反面，正面向人，反面向空隙，理也。使记南枝而与人相左，犹娶新妇进门，而听其终年背立，有是理乎？故此语只当不说，切勿泥之。总之，移花种竹只有四字当记：“宜阴忌日”是也。琐琐繁言，徒滋疑扰。

松 柏

“苍松古柏”，美其老也。一切花竹，皆贵少年，独松、柏与梅三物，则贵老而贱幼。欲受三老之益者，必买旧宅而居。若俟手栽，为儿孙计则可，身则不能观其成也。求其可移而能就我者，纵使极大，亦是五更，非三老矣。予尝戏谓诸后生曰：“欲作画图中人，非老不可。三五少年，皆贱物也。”后生询其故。予曰：“不见画山水者，每及人物，必作扶筇曳杖之形，即坐而观山临水，亦是老人矍铄之状。从来未有俊美少年厕于其间者。少年亦有，非携琴捧画之流，即挈盒持樽之辈，皆奴隶于画中者也。”后生辈欲反证予言，卒无其据。引此以喻松柏，可谓合伦。如一座园亭，所有者皆时花弱卉，无十数本老成树木主宰其间，是终日与儿女子习处，无从师会友时矣。名流作画，肯若是乎？噫，予持此说一生，终不得与老成为伍，乃今年已入画，犹日坐儿女丛中。殆以花木为我，而我为松柏者乎？

梧 桐

梧桐一树，是草木中一部编年史也，举世习焉不察，予特表而出之。花木种自何年？为寿几何岁？询之主人，主人不知，询之花木，花木不答。谓之“忘年交”则可，予以“知时达务”，则不可也。梧桐不然，有节可纪，生一年，纪一年。树有树之年，人即纪人之年，树小而人与之小，树大而人随之大，观树即所以观身。《易》曰：“观我生进退。”欲观我生，此其资也。予垂髫种此，即于树上刻诗以纪年，每岁一节，即刻一诗，惜为兵燹所坏，不

克有终。犹记十五岁刻桐诗云：“小时种梧桐，桐叶小于艾。簪头刻小诗，字瘦皮不坏。刹那三五年，桐大字亦大。桐字已如许，人大复何怪。还将感叹词，刻向前诗外。新字日相催，旧字不相待。顾此新旧痕，而为悠忽戒。”此予婴年著作，因说梧桐，偶尔记及，不则竟忘之矣。即此一事，便受梧桐之益。然则编年之说，岂欺人语乎？

槐 榆

树之能为阴者，非槐即榆。《诗》云：“于我乎，夏屋渠渠”。此二树者，可以呼为“夏屋”，植于宅旁，与肯堂肯构无别。人谓夏者，大也，非时之所谓夏也。予曰：古人以厦为大者，非无取义。夏日之屋，非大不凉，与三时有别，故名厦为屋。训夏以大，予特未之详耳。

柳

柳贵乎垂，不垂则可无柳。柳条贵长，不长则无袅娜之致。徒垂无益也。此树为纳蝉之所，诸鸟亦集。长夏不寂寞，得时闻鼓吹者，是树皆有功，而高柳为最。总之，种树非止娱目，兼为悦耳。目有时而不娱，以在卧榻之上也；耳则无时不悦。鸟声之最可爱者，不在人之坐时，而偏在睡时。鸟音宜晓听，人皆知之；而其独宜于晓之故，人则未之察也。鸟之防弋，无时不然。卯辰以后，是人皆起，人起而鸟不自安矣。虑患之念一生，虽欲鸣而不得，鸣亦必无好音，此其不宜于昼也。晓则是人未起，即有起者，数亦寥寥，鸟无防患之心，自能毕其能事，且扞舌一夜，技痒于

心，至此皆思调弄，所谓“不鸣则已，一鸣惊人”者是也，此其独宜于晓也。庄子非鱼，能知鱼之乐；笠翁非鸟，能识鸟之情。凡属鸣禽，皆当呼予为知己。种树之乐多端，而其不便于雅人者亦有一节：枝叶繁冗，不漏月光。隔婵娟而不使见者，此其无心之过，不足责也。然匪树木无心，人无心耳。使于种植之初，预防及此，留一线之余天，以待月轮出没，则昼夜均受其利矣。

黄 杨

黄杨每岁长一寸，不溢分毫，至闰年反缩一寸，是天限之木也。植此宜生怜悯之心。予新授一名曰“知命树”。天不使高，强争无益，故守困厄为当然。冬不改柯，夏不易叶，其素行原如是也。使以他木处此，即不能高，亦将横生而至大矣；再不然，则以才不得展而至瘁，弗复自永其年矣。困于天而能自全其天，非知命君子能若是哉？最可悯者，岁长一寸是已；至闰年反缩一寸，其义何居？岁闰而我不闰，人闰而已不闰，已见天地之私；乃非止不闰，又复从而刻之，是天地之待黄杨，可谓不仁之至，不义之甚者矣。乃黄杨不憾天地，枝叶较他木加荣，反似德之者，是知命之中又知命焉。莲为花之君子，此树当为木之君子。莲为花之君子，茂叔知之；黄杨为木之君子，非稍能格物之笠翁，孰知之哉？

棕 桐

树直上而无枝者，棕榈是也。予不奇其无枝，奇其无枝而能有叶。植于众芳之中，而下不侵其地、上不蔽其天者，此木是也。

较之芭蕉，大有克己妨人之别。

枫 柏

草之以叶为花者，翠云、老少年是也；木之以叶为花者，枫与柏是也。枫之丹，柏之赤，皆为秋色之最浓。而其所以得此者，则非雨露之功，霜之力也。霜于草木，亦有有功之时，其不肯数数见者，虑人之狎之也。枯众木独荣二木，欲示德威之一斑耳。

冬 青

冬青一树，有松柏之实而不居其名，有梅竹之风而不矜其节，殆“身隐焉文”之流亚欤？然谈傲霜砺雪之姿者，从未闻一人齿及。是之推不言禄，而禄亦不及。予窃忿之，当易其名为“不求人知树”。

颐 养 部

行 乐 第 一

伤哉！造物生人一场，为时不满百岁。彼夭折之辈无论矣。姑就永年者道之，即使三万六千日尽是追欢取乐时，亦非无限光阴，终有报罢之日。况此百年以内，有无数忧愁困苦、疾病颠连、名缰利锁、惊风骇浪，阻人燕游，使徒有百岁之虚名，并无一岁二岁享生人应有之福之实际乎！又况此百年以内，日日死亡相告，谓先我而生者死矣，后我而生者亦死矣，与我同庚比算、互称弟兄者又死矣。噫，死是何物，而可知凶不讳，日令不能无死者惊见于目，而恒闻于耳乎！是千古不仁，未有甚于造物者矣。虽然，殆有说焉。不仁者，仁之至也。知我不能无死，而日以死亡相告，是恐我也。恐我者，欲使及时为乐，当视此辈为前车也。康对山构一园亭，其地在北邙山麓，所见无非丘陇。客讯之曰：“日对此景，令人何以为乐？”对山曰：“日对此景，乃令人不敢不乐。”达哉斯言！予尝以铭座右。兹论养生之法，而以行乐先之；劝人行乐，而以死亡怵之，即祖是意。欲体天地至仁之心，不能不蹈造物不仁之迹。

养生家授受之方，外藉药石，内凭导引，其借口颐生而流为放辟邪侈者，则曰“比家”。三者无论邪正，皆术士之言也。予系儒生，并非术士。术士所言者术，儒家所凭者理。《鲁论·乡党》

一篇，半属养生之法。予虽不敏，窃附于圣人之徒，不敢为诞妄不经之言以误世。有怪此卷以颐养命名，而觅一丹方不得者，予以空疏谢之。又有怪予著《饮饌》一篇，而未及烹饪之法，不知酱用几何，醋用几何，醃椒香辣用几何者。予曰：果若是，是一庖人而已矣，乌足重哉！人曰：若是，则《食物志》、《尊生笺》、《卫生录》等书，何以备列此等？予曰：是诚庖人之书也。士各明志，人有弗为。

贵人行乐之法

人间至乐之境，惟帝王得以有之；下此则公卿将相，以及群辅百僚，皆可以行乐之人也。然有万几在念，百务萦心，一日之内，除视朝听政、放衙理事、治人事神、反躬修己之外，其为行乐之时有几？曰：不然。乐不在外而在心。心以为乐，则是境皆乐，心以为苦，则无境不苦。身为帝王，则当以帝王之境为乐境；身为公卿，则当以公卿之境为乐境。凡我分所当行，推诿不去者，即当摈弃一切悉视为苦，而专以此事为乐。谓我为帝王，日有万几之冗，其心则诚劳矣，然世之艳慕帝王者，求为片刻而不能，我之至劳，人之所谓至逸也。为公卿将相、群辅百僚者，居心亦复如是，则不必于视朝听政、放衙理事、治人事神、反躬修己之外，别寻乐境，即此得为之地，便是行乐之场。一举笔而安天下，一矢口而遂群生，以天下群生之乐为乐，何快如之？若于此外稍得清闲，再享一切应有之福，则人皇可比玉皇，俗吏竟成仙吏，何蓬莱三岛之足羨哉？此术非他，盖用吾家老子“退一步”法。以不如己者视己，则日见可乐；以胜于己者视己，则时觉可忧。从来人君之善行乐者，莫过于汉之文、景；其不善行乐者，莫过于武帝。以文、景于帝王应行之外，不多一事，故觉其逸；武帝则

好大喜功，且薄帝王而慕神仙，是以徒见其劳。人臣之善行乐者，莫过于唐之郭子仪；而不善行乐者，则莫如李广。子仪既拜汾阳王，志愿已足，不复他求，故能极欲穷奢，备享人臣之福；李广则耻不如人，必欲封侯而后已，是以独当单于，卒致失道后期而自刭。故善行乐者，必先知足。二疏云：“知足不辱，知止不殆。”不辱不殆，至乐在其中矣。

富人行乐之法

劝贵人行乐易，劝富人行乐难。何也？财为行乐之资，然势不宜多，多则反为累人之具。华封人祝帝尧富寿多男，尧曰：“富则多事。”华封人曰：“富而使人分之，何事之有？”由是观之，财多不分，即以唐尧之圣、帝王之尊，犹不能免多事之累，况德非圣人而位非帝王者乎？陶朱公屡致千金，屡散千金，其致而必散，散而复致者，亦学帝尧之防多事也。兹欲劝富人行乐，必先劝之分财；劝富人分财，其势同于拔山超海，此必不得之数也。财多则思运，不运则生息不繁。然不运则已，一运则经营惨淡，坐起不宁，其累有不可胜言者。财多必善防，不防则为盗贼所有，而且以身殉之。然不防则已，一防则惊魂四绕，风鹤皆兵，其恐惧殍殍之状，有不堪目睹者。且财多必招忌。语云：“温饱之家，众怨所归。”以一身而为众射之的，方且忧伤虑死之不暇，尚可与言行乐乎哉？甚矣，财不可多，多之为累，亦至此也。然则富人行乐，其终不可冀乎？曰：不然。多分则难，少敛则易。处比户可封之世，难于售恩；当民穷财尽之秋，易于见德。少课锱铢之利，穷民即起颂扬；略蠲升斗之租，贫佃即生歌舞。本偿而子息未偿，因其贫也而贯之，一券才焚，即噪冯驩之令誉；赋足而国用不足，因其匮也而助之，急公偶试，即来卜式之美名。果如是，则大异

于今日之富民，而又无损于本来之故我。觊觎者息而仇怨者稀，是则可行乐矣。其为乐也，亦同贵人，可不必于持筹握算之外，别寻乐境，即此宽租减息、仗义急公之日，听贫民之欢欣赞颂，即当两部鼓吹；受官司之奖励称扬，便是百年华袞。荣莫荣于此，乐亦莫乐于此矣。至于悦色娱声、眠花藉柳、构堂建厦、啸月嘲风诸乐事，他人欲得，所患无资，业有其资，何求弗遂？是同一富也，昔为最难行乐之人，今为最易行乐之人。即使帝尧不死，陶朱现在，彼丈夫也，我丈夫也，吾何畏彼哉？去其一念之刻而已矣。

贫贱行乐之法

穷人行乐之方，无他秘巧，亦止有退一步法。我以为贫，更有贫于我者；我以为贱，更有贱于我者；我以妻子为累，尚有鰥寡孤独之民，求为妻子之累而不能者；我以胼胝为劳，尚有身系狱廷，荒芜田地，求安耕凿之生而不可得者。以此居心，则苦海尽成乐地。如或向前一算，以胜己者相衡，则片刻难安，种种桎梏幽囚之境出矣。一显者旅宿邮亭，时方溽暑，帐内多蚊，驱之不出，因忆家居时堂宽似宇，簟冷如冰，又有群姬握扇而挥，不复知其为夏，何遽困厄至此！因怀至乐，愈觉心烦，遂致终夕不寐。一亭长露宿阶下，为众蚊所啮，几至露筋，不得已而奔走庭中，俾四体动而弗停，则啮人者无由厠足；乃形则往来仆仆，口则赞叹嚣嚣，一似苦中有乐者。显者不解，呼而讯之，谓：“汝之受困，什佰于我，我以为苦，而汝以为乐，其故维何？”亭长曰：“偶忆某年，为仇家所陷，身系狱中。维时亦当暑月，狱卒防予私逸，每夜拘挛手足，使不得动摇，时蚊蚋之繁，倍于今夕，听其自啮，欲稍稍规避而不能，以视今夕之奔走不息，四体得以自如

者，奚啻仙凡人鬼之别乎！以昔较今，是以但见其乐，不知其苦。”显者听之，不觉爽然自失。此即穷人行乐之秘诀也。不独居心为然，即铸体炼形，亦当如是。譬如夏月苦炎，明知为室庐卑小所致，偏向骄阳之下来往片时，然后步入室中，则觉暑气渐消，不似从前酷烈；若畏其湫隘而投宽处纳凉，及至归来，炎蒸又加十倍矣。冬月苦冷，明知为墙垣单薄所致，故向风雪之中行走一次，然后归庐返舍，则觉寒威顿减，不复凜冽如初；若避此荒凉而向深居就燠，及其再入，战栗又作何状矣。由此类推，则所谓退步者，无地不有，无人不有，想至退步，乐境自生。予为两间第一困人，其能免死于忧，不枯槁于迍邐蹭蹬者，皆用此法。又得管城一物，相伴终身，以扫千军则不足，以除万虑则有余。然非善作退步，即楮墨亦能困人。想虞卿著书，亦用此法，我能公世，彼特秘而未传耳。

由亭长之说推之，则凡行乐者，不必远引他人为退步，即此一身，谁无过来之逆境？大则灾凶祸患，小则疾病忧伤。“执柯伐柯，其则不远。”取而较之，更为亲切。凡人一生，奇祸大难非特不可遗忘，还宜大书特书，高悬座右。其裨益于身者有三：孽由己作，则可知非痛改，视作前车；祸自天来，则可止怨释尤，以弭后患；至于忆苦追烦，引出无穷乐境，则又警心惕目之余事矣。如曰省躬罪己，原属隐情，难使他人共睹，若是则有包含蕴藉之法：或止书罹患之年月，而不及其事；或别书隐射之数语，而不露其详；或撰作一联一诗，悬挂起居亲密之处，微寓己意，不使人知，亦淑慎其身之妙法也。此皆湖上笠翁瞞人独做之事，笔机所到，欲讳不能，俗语所谓“不打自招”者，非乎？

家庭行乐之法

世间第一乐地，无过家庭。“父母俱存，兄弟无故，一乐也。”是圣贤行乐之方，不过如此。而后世人情之好向，往往与圣贤相左。圣贤所乐者，彼则苦之；圣贤所苦者，彼反视为至乐而沉溺其中。如弃现在之天亲而拜他人父，撇同胞之手足而与陌路结盟，避女色而就变童，舍家鸡而寻野鹜，是皆情理之至悖，而举世习而安之。其故无他，总由一念之恶旧喜新，厌常趋异所致。若是，则生而所有之形骸，亦觉陈腐可厌，胡不并易而新之，使今日魂附一体，明日又附一体，觉愈变愈新之可爱乎？其不能变而新之者，以生定故也。然欲变而新之，亦自有法。时易冠裳，迭更帟座，而照之以镜，则似换一规模矣。即以此法而施之父母兄弟、骨肉妻孥，以结交滥费之资，而鲜其衣饰，美其供奉，则居移气，养移体，一岁而数变其形，岂不犹之谓他人父，谓他人母，而与同学少年互称兄弟，各家美丽共缔姻盟者哉？有好游狭斜者，荡尽家资而不顾，其妻迫于饥寒而求去。临去之日，别换新衣而佐以美饰，居然绝世佳人。其夫抱而泣曰：“吾走尽章台，未尝遇此娇丽。由是观之，匪人之美，衣饰美之也。倘能复留，当为勤俭克家，而置汝金屋。”妻善其言而止。后改荡从善，卒如所云。又有人子不孝而为亲所逐者，鞠于他人，越数年而复返，定省承欢，大异畴昔。其父讯之，则曰：“非予不爱其亲，习久而生厌也。兹复厌所习见，而以久不睹者为可亲矣。”众人笑之，而有识者怜之。何也？习久而厌其亲者，天下皆然，而不能自明其故。此人知之，又能直言无讳，盖可以为善之人也。此等罕譬曲喻，皆为劝导愚蒙。谁无至性，谁乏良知，而俟予为木铎？但观孺子离家，即生哭泣，岂无至乐之境十倍其家者哉？性在此而不在彼也。人

能以孩提之乐境为乐境，则去圣人不远矣。

道途行乐之法

“逆旅”二字，足概远行，旅境皆逆境也。然不受行路之苦，不知居家之乐，此等况味，正须一一尝之。予游绝塞而归，乡人讯曰：“边陲之游乐乎？”予曰：“乐。”有经其地而憚焉者曰：“地则不毛，人皆异类，睹沙场而气索，闻钲鼓而魂摇，何乐之有？”予曰：“向未离家，谬谓四方一致，其饮饌服饰皆同于我，及历四方，知有大谬不然者。然止游通邑大都，未至穷边极塞，又谓远近一理，不过稍变其制而已矣。及抵边陲，始知地狱即在人间，罗刹原非异物，而今而后，方知人之异于禽兽者几希，而近地之民，其去绝塞之民者，反有霄壤幽明之大异也。不入其地，不睹其情，乌知生于东南，游于都会，衣轻席暖，饭稻羹鱼之足乐哉！”此言出路之人，视居家之乐为乐也；然未至还家，则终觉其苦。又有视家为苦，借道途行乐之法，可以暂娱目前，不为风霜车马所困者，又一方便法门也。向平欲俟婚嫁既毕，遨游五岳；李固与弟书，谓周观天下，独未见益州，似有遗憾；太史公因游名山大川，得以史笔妙千古。是游也者，男子生而欲得，不得即以为恨者也。有道之士，尚欲挟资裹粮，专行其志，而我以糊口资生之便，为益闻广见之，过一地，即览一地之人情，经一方，则睹一方之胜概，而且食所未食，尝所欲尝，蓄所余者而归遗细君，似得五侯之鯖，以果一家之腹，是人生最乐之事也，奚事哭泣阮途，而为乘槎驭骏者所窃笑哉？

春季行乐之法

人有喜怒哀乐，天有春夏秋冬。春之为令，即天地交欢之候，阴阳肆乐之时也。人心至此，不求畅而自畅，犹父母相亲相爱，则儿女嬉笑自如，睹满堂之欢欣，即欲向隅而泣，泣不出也。然当春行乐，每易过情，必留一线之余春，以度将来之酷夏。盖一岁难过之关，惟有三伏，精神之耗，疾病之生，死亡之至，皆由于此。故俗话云：“过得七月半，便是铁罗汉”，非虚语也。思患预防，当在三春行乐之时，不得纵欲过度，而先埋伏病根。花可熟观，鸟可倾听，山川云物之胜可以纵游，而独于房欲之事略存余地。盖人当此际，满体皆春。春者，泄尽无遗之谓也。草木之春，泄尽无遗而不坏者，以三时皆蓄，而止候泄于一春，过此一春，又皆蓄精养神之候矣。人之一身，能保一时尽泄而三时皆不泄乎？尽泄于春，而又不能不泄于夏，虽草木不能不枯，况人身之浮脆者乎？欲留枕席之余欢，当使游观之尽致。何也？分心花鸟，便觉体有余闲；并力闺帏，易致身无宁刻。然予所言，皆防已甚之词也。若使杜情而绝欲，是天地皆春而我独秋，焉用此不情之物，而作人中灾异乎？

夏季行乐之法

酷夏之可畏，前幅虽露其端，然未尽暑毒之什一也。使天只有三时而无夏，则人之死也必稀，巫医僧道之流皆苦饥寒而莫救矣。止因多此一时，遂觉人身叵测，常有朝人而夕鬼者。《戴记》云：“是月也，阴阳争，死生分。”危哉斯言！令人不寒而栗矣。凡

人身处此候，皆当时防病，日日忧死。防病忧死，则当刻刻偷闲以行乐。从来行乐之事，人皆选暇于三春，予独息机于九夏。以三春神旺，即使不乐，无损于身；九夏则神耗气索，力难支体，如其不乐，则劳神役形，如火益热，是与性命为仇矣。《月令》以仲冬为闭藏；予谓天地之气闭藏于冬，人身之气当令闭藏于夏。试观隆冬之月，人之精神愈寒愈健，较之暑气铄人，有不可同年而语者。凡人苟非民社系身，饥寒迫体，稍堪自逸者，则当以三时行事，一夏养生。过此危关，然后出而应酬世故，未为晚也。追忆明朝失政以后，大清革命之先，予绝意浮名，不干寸禄，山居避乱，反以无事为荣。夏不谒客，亦无客至，匪止头巾不设，并衫履而废之。或裸处乱荷之中，妻孥觅之不得；或偃卧长松之下，猿鹤过而不知。洗砚石于飞泉，试茗奴以积雪；欲食瓜而瓜生户外，思啖果而果落树头，可谓极人世之奇闻，擅有生之至乐者矣。后此则徙居城市，酬应日纷，虽无利欲熏人，亦觉浮名致累。计我一生，得享列仙之福者，仅有三年。今欲续之，求为闰余而不可得矣。伤哉！人非铁石，奚堪磨杵作针；寿岂泥沙，不禁委尘入土。予以劝人行乐，而深悔自役其形。噫，天何惜于一闲，以补富贵荣膺之不足哉！

秋季行乐之法

过夏徂秋，此身无恙，是当与妻孥庆贺重生，交相为寿者矣。又值炎蒸初退，秋爽媚人，四体得以自如，衣衫不为桎梏，此时不乐，将待何时？况有阻人行乐之二物，非久即至。二物维何？霜也，雪也。霜雪一至，则诸物变形。非特无花，亦且少叶；亦时有月，难保无风。若谓“春宵一刻值千金”，则秋价之昂，宜增十倍。有山水之胜者，乘此时蜡屐而游，不则当面错过。何也？前

此欲登而不可，后此欲眺而不能，则是又有一年之别矣。有金石之交者，及此时朝夕过从，不则交臂而失。何也？襁褓阻人于前，咫尺有同千里；风雪欺人于后，访戴何异登天，则是又负一年之约矣。至于姬妾之在家，一到此时，有如久别乍逢，为欢特异。何也？暑月汗流，求为盛妆而不得，十分娇艳，惟四五之仅存；此则全副精神，皆可用于青鬟翠黛之上。久不睹而今忽睹，有不与远归新娶同其燕好者哉？为欢即欲，视其精力短长，总留一线之余地。能行百里者，至九十而思休；善登浮屠者，至六级而即下。此房中秘术，请为少年场授之。

冬季行乐之法

冬天行乐，必须设身处地，幻为路上行人，备受风雪之苦，然后回想在家，则无论寒燠晦明，皆有胜人百倍之乐矣。尝有画雪景山水，人持破伞，或策蹇驴，独行古道之中，经过悬崖之下，石作狰狞之状，人有颠蹶之形者。此等险画，隆冬之月，正宜悬挂中堂。主人对之，即是御风障雪之屏，暖胃和衷之药。若杨国忠之肉阵，党太尉之羊羔美酒，初试或温，稍停则奇寒至矣。善行乐者，必先作如是观，而后继之以乐，则一分乐境，可抵二三分，五七分乐境，便可抵十分二十分矣。然一到乐极忘忧之际，其乐自能渐减，十分乐境，只作得五七分，二三分乐境，又只作得一分矣。须将一切苦境，又复从头想起，其乐之渐增不减，又复如初。此善讨便宜之第一法也。譬之行路之人，计程共有百里，行过七八十里，所剩无多，然无奈望到心坚，急切难待，种种畏难怨苦之心出矣。但一回头，计其行过之路数，则七八十里之远者可到，况其少而近者乎？譬如此际止行二三十里，尚余七八十里，则苦多乐少，其境又当何如？此种想念，非但可为行乐之方，凡

居官者之理繁治剧，学道者之读书穷理，农工商贾之任劳即勤，无一不可倚之为法。噫，人之行乐，何与于我，而我为之噪敝舌焦，手腕几脱。是殆有媚人之癖，而以楮墨代脂韦者乎？

随时即景就事行乐之法

行乐之事多端，未可执一而论。如睡有睡之乐，坐有坐之乐，行有行之乐，立有立之乐，饮食有饮食之乐，盥栉有盥栉之乐，即袒裼裸裎、如厕便溺，种种秽褻之事，处之得宜，亦各有其乐。苟能见景生情，逢场作戏，即可悲可涕之事，亦变欢娱。如其应事寡才，养生无术，即征歌选舞之场，亦生悲戚。兹以家常受用，起居安乐之事，因便制宜，各存其说于左。

睡

有专言法术之人，遍授养生之诀，欲予北面事之。予讯益寿之功，何物称最？颐生之地，谁处居多？如其不谋而合，则奉为师，不则友之可耳。其人曰：“益寿之方，全凭导引；安生之计，惟赖坐功。”予曰：“若是，则汝法最苦，惟修苦行者能之。予懒而好动，且事事求乐，未可以语此也。”其人曰：“然则汝意云何？试言之，不妨互为印政。”予曰：“天地生人以时，动之者半，息之者半。动则旦，而息则暮也。苟劳之以日，而不息之以夜，则旦旦而伐之，其死也，可立而待矣。吾人养生亦以时，扰之以半，静之以半，扰则行起坐立，而静则睡也。如其劳我以经营，而不逸我以寝处，则岌岌乎殆哉！其年也，不堪指屈矣。若是，则养生之诀，当以善睡居先。睡能还精，睡能养气，睡能健脾益胃，睡

能坚骨壮筋。如其不信，试以无疾之人与有疾之人，合而验之。人本无疾，而劳之以夜，使累夕不得安眠，则眼眶渐落而精气日颓，虽未即病，而病之情形出矣。患疾之人，久而不寐，则病势日增；偶一沉酣，则其醒也，必有油然勃然之势。是睡，非睡也，药也；非疗一疾之药，乃治百病，救万民，无试不验之神药也。兹欲从事导引，并力坐功，势必先遣睡魔，使无倦态而后可。予忍弃生平最效之药，而试未必果验之方哉？”其人赧然而去，以予不足教也。予诚不足教哉！但自陈所得，实为有见而然，与强辩饰非者稍别。前人睡诗云：“花竹幽窗午梦长，此中与世暂相忘。华山处士如容见，不觅仙方觅睡方。”近人睡诀云：“先睡心，后睡眼。”此皆书本唾余，请置弗道，道其未经发明者而已。睡有睡之时，睡有睡之地，睡又有可睡可不睡之人，请条晰言之。由戌至卯，睡之时也。未戌而睡，谓之先时，先时者不祥，谓与疾作思卧者无异也；过卯而睡，谓之后时，后时者犯忌，谓与长夜不醒者无异也。且人生百年，夜居其半，穷日行乐，犹苦不多，况以睡梦之有余，而损宴游之不足乎？有一名士善睡，起必过午，先时而访，未有能晤之者。予每过其居，必俟良久而后见。一日闷坐无聊，笔墨具在，乃取旧诗一首，更易数字而嘲之曰：“吾在此静睡，起来常过午；便活七十年，止当三十五。”同人见之，无不绝倒。此虽谑浪，颇关至理。是当睡之时，止有黑夜，舍此皆非其候矣。然而午睡之乐，倍于黄昏，三时皆所不宜，而独宜于长夏。非私之也，长夏之一日，可抵残冬之二日；长夏之一夜，不敌残冬之半夜，使止息于夜，而不息于昼，是以一分之逸，敌四分之劳，精力几何，其能堪此？况暑气铄金，当之未有不倦者。倦极而眠，犹饥之得食，渴之得饮，养生之计，未有善于此者。午餐之后，略逾寸晷，俟所食既消，而后徘徊近榻。又勿有心觅睡，觅睡得睡，其为睡也不甜。必先处于有事，事未毕而忽倦，睡乡之民自来招我。桃源、天台诸妙境，原非有意造之，皆莫知其然而然者。予

最爱旧诗中有“手倦抛书午梦长”一句。手书而眠，意不在睡；抛书而寝，则又意不在书，所谓莫知其然而然也。睡中三昧，惟此得之。此论睡之时也。睡又必先择地。地之善者有二：曰静，曰凉。不静之地，止能睡目，不能睡耳，耳目两岐，岂安身之善策乎？不凉之地，止能睡魂，不能睡身，身魂不附，乃养生之至忌也。至于可睡可不睡之人，则分别于“忙闲”二字。就常理而论之，则忙人宜睡，闲人可以不必睡。然使忙人假寐，止能睡眼，不能睡心，心不睡而眼睡，犹之未尝睡也。其最不受用者，在将觉未觉之一时，忽然想起某事未行，某人未见，皆万万不可已者，睡此一觉，未免失事妨时，想到此处，便觉魂趋梦绕，胆怯心惊，较之未睡之前，更加烦躁，此忙人之不宜睡也。闲则眼未阖而心先阖，心已开而眼未开；已睡较未睡为乐，已醒较未醒更乐，此闲人之宜睡也。然天地之间，能有几个闲人？必欲闲而始睡，是无可睡之时矣。有暂逸其心以妥梦魂之法：凡一日之中，急切当行之事，俱当于上半日告竣，有未竣者，则分遣家人代之，使事事皆有着落，然后寻床觅枕以赴黑甜，则与闲人无别矣。此言可睡之人也。而尤有吃紧一关未经道破者，则在莫行歹事。“半夜敲门不吃惊”，始可于日间睡觉，不则一闻剥啄，即是逻辑到门矣。

坐

从来善养生者，莫过于孔子。何以知之？知之于“寝不尸，居不容”二语。使其好饰观瞻，务修边幅，时时求肖君子，处处欲为圣人，则其寝也，居也，不求尸而自尸，不求容而自容；则五官四体，不复有舒展之刻。岂有泥塑木雕其形，而能久长于世者哉？“不尸不容”四字，绘出一幅时哉圣人，宜乎崇祀千秋，而为风雅斯文之鼻祖也。吾人燕居坐法，当以孔子为师，勿务端庄而

必正襟危坐，勿同束缚而为胶柱难移。抱膝长吟，虽坐也，而不妨同于箕踞；支颐丧我，行乐也，而何必名为坐忘？但见面与身齐，久而不动者，其人必死。此图画真容之先兆也。

行

贵人之出，必乘车马。逸则逸矣，然于造物赋形之义，略欠周全。有足而不用，与无足等耳，反不若安步当车之人，五官四体皆能适用。此贫士骄人语。乘车策马，曳履褰裳，一般同是行人，止有动静之别。使乘车策马之人，能以步趋为乐，或经山水之胜，或逢花柳之妍，或遇戴笠之贫交，或见负薪之高士，欣然止驭，徒步为欢，有时安车而待步，有时安步以当车，其能用足也，又胜贫士一筹矣。至于贫士骄人，不在有足能行，而在缓急出门之可恃。事属可缓，则以安步当车；如其急也，则以疾行当马。有人亦出，无人亦出；结伴可行，无伴亦可行。不似富贵者假足于人，人或不来，则我不能即出，此则有足若无，大悖谬于造物赋形之义耳。兴言及此，行殊可行！

立

立分久暂，暂可无依，久当思傍。亭亭独立之事，但可偶一为之，旦旦如是，则筋骨皆悬，而脚跟如砥，有血脉胶凝之患矣。或倚长松，或凭怪石，或靠危栏作弑，或扶瘦竹为筇；既作羲皇上人，又作画图中物，何乐如之！但不可以美人作柱，虑其础石太纤，而致栋梁皆仆也。

饮

宴集之事，其可贵者有五：饮量无论宽窄，贵在能好；饮伴无论多寡，贵在善谈；饮具无论丰啬，贵在可继；饮政无论宽猛，贵在可行；饮候无论短长，贵在能止。备此五贵，始可与言饮酒之乐；不则曲蘖宾朋，皆凿性斧身之具也。予生平有五好，又有五不好，事则相反，乃其势又可并行而不悖。五好、五不好维何？不好酒而好客；不好食而好谈；不好长夜之欢，而好与明月相随而不忍别；不好为苛刻之令，而好受罚者欲辩无辞；不好使酒骂坐之人，而好其于酒后尽露肝膈。坐此五好、五不好，是以饮量不胜蕉叶，而日与酒人为徒。近日又增一种癖好、癖恶：癖好音乐，每听必至忘归；而又癖恶座客多言，与竹肉之音相乱。饮酒之乐，备于五贵、五好之中，此皆为宴集宾朋而设。若夫家庭小饮与燕闲独酌，其为乐也，全在天机逗露之中，形迹消忘之内。有饮宴之实事，无酬酢之虚文。睹儿女笑啼，认作斑斓之舞；听妻孥劝诫，若闻金缕之歌。苟能作如是观，则虽谓朝朝岁旦，夜夜元宵可也。又何必座客常满，樽酒不空，日藉豪举以为乐哉？

谈

读书，最乐之事，而懒人常以为苦；清闲，最乐之事，而有人病其寂寞。就乐去苦，避寂寞而享安闲，莫若与高士盘桓，文人讲论。何也？“与君一夕话，胜读十年书。”既受一夕之乐，又省十年之苦，便宜不亦多乎？“因过竹院逢僧话，又得浮生半日闲。”既得半日之闲，又免多时之寂，快乐可胜道乎？善养生者，不可

不交有道之士；而有道之士，多有不善谈者。有道而善谈者，人生希觐，是当时就日招，以备开聋启聩之用者也。即云我能挥麈，无假于人，亦须借朋侪起发，岂能若西域之钟虞，不叩自鸣者哉？

沐 浴

盛暑之月，求乐事于黑甜之外，其惟沐浴乎！潮垢非此不除，浊污非此不净，炎蒸暑毒之气亦非此不解。此事非独宜于盛夏，自严冬避冷，不宜频浴外，凡遇春温秋爽，皆可借此为乐。而养生之家则往往忌之，谓其损耗元神也。吾谓沐浴既能损身，则雨露亦当损物，岂人与草木有二性乎？然沐浴损身之说，亦非无据而云然。予尝试之。试于初下浴盆时，以未经浇灌之身，忽遇澎湃奔腾之势，以热投冷，以湿犯燥，几类水攻。此一激也，实足以冲散元神，耗除精气。而我有法以处之：虑其太激，则势在尚缓；避其太热，则利于用温。解衣磅礴之秋，先调水性，使之略带温和，由腹及胸，由胸及背，惟其温而缓也，则有水似乎无水，已浴同于未浴，俟与水性相习之后，始以热者投之，频浴频投，频投频搅，使水乳交融而不觉，渐入佳境而莫知，然后纵横其势，反侧其身，逆灌顺浇，必至痛快其身而后已。此盆中取乐之法也。至于富室大家，扩盆为屋，注水于池者，冷则加薪，热则去火，自有以逸待劳之法，想无俟贫人置喙也。

听 琴 观 棋

弈棋尽可消闲，似难借以行乐；弹琴实堪养性，未易执此求欢。以琴必正襟危坐而弹，棋必整槊横戈以待。百骸尽放之时，何

必再期整肃？万念俱忘之际，岂宜复较输赢？常有贵禄荣名付之一掷，而与人围棋赌胜，不肯以一着相饶者，是与让千乘之国，而争簞食豆羹者何异哉？故喜弹不若喜听，善弈不如善观。人胜而我为之喜，人败而我不必为之忧，则是常居胜地也；人弹和缓之音而我为之吉，人弹噍杀之音而我不必为之凶，则是长为吉人也。或观听之余，不无技痒，何妨偶一为之，但不寝食其中而莫之或出，则为善弹善弈者耳。

看花听鸟

花鸟二物，造物生之以媚人者也。既产娇花嫩蕊以代美人，又病其不能解语，复生群鸟以佐之。此段心机，竟与购觅红妆，习成歌舞，饮之食之，教之诲之以媚人者，同一周旋之至也。而世人不知，目为蠢然一物，常有奇花过目而莫之睹，鸣禽悦耳而莫之闻者。至其捐资所购之姬妾，色不及花之万一，声仅窃鸟之绪余，然而睹貌即惊，闻歌辄喜，为其貌似花而声似鸟也。噫，贵似贱真，与叶公之好龙何异？予则不然。每值花柳争妍之日，飞鸣斗巧之时，必致谢洪钧，归功造物，无饮不奠，有食必陈，若善士信姬之佞佛者。夜则后花而眠，朝则先鸟而起，惟恐一声一色之偶遗也。及至莺老花残，辄怏怏如有所失。是我之一生，可谓不负花鸟；而花鸟得予，亦所称“一人知己，死可无恨”者乎！

蓄养禽鱼

鸟之悦人以声音，画眉、鹦鹉二种。而鹦鹉之声价，高出画眉上，人多癖之，以其能作人言耳。予则大违是论，谓鹦鹉所长

止在羽毛，其声则一无可取。鸟声之可听者，以其异于人声也。鸟声异于人声之可听者，以出于人者为人籁，出于鸟者为天籁也。使我欲听人言，则盈耳皆是，何必假口笼中？况最善说话之鹦鹉，其舌本之强，犹甚于不善说话之人，而所言者，又不过口头数语。是鹦鹉之见重于人，与人之所以重鹦鹉者，皆不可诠解之事。至于画眉之巧，以一口而代众舌，每效一种，无不酷似，而复纤婉过之，诚鸟中慧物也。予好与此物作缘，而独怪其易死。既善病而复招尤，非殁于己，即伤于物，总无三年不坏者。殆亦多技多能所致欤？

鹤、鹿二种之当蓄，以其有仙风道骨也。然所耗不貲，而所居必广，无其资与地者，皆不能蓄。且种鱼养鹤，二事不可兼行，利此则害彼也。然鹤之善唳善舞，与鹿之难扰易驯，皆品之极高贵者，麟凤龟龙而外，不得不推二物居先矣。乃世人好此二物，又分轻重于其间，二者不可得兼，必将舍鹿而求鹤矣。显贵之家，匪特深藏苑囿，近置衙斋，即倩人写真绘像，必以此物相随。予尝推原其故，皆自一人始之，赵清献公是也。琴之与鹤，声价倍增，詎非贤相提携之力欤？

家常所蓄之物，鸡犬而外，又复有猫。鸡司晨，犬守夜，猫捕鼠，皆有功于人而自食其力者也。乃猫为主人所亲昵，每食与俱，尚有所听其褰帷入室，伴寝随眠者。鸡栖于埭，犬宿于外，居处饮食皆不及焉。而从来叙禽兽之功，谈治平之象者，则止言鸡犬而并不及猫。亲之者是，则略之者非；亲之者非，则略之者是；不能不惑于二者之间矣。曰：有说焉。昵猫而贱鸡犬者，犹癖嗜臣媚子，以其不呼能来，闻叱不去；因其亲而亲之，非有可亲之道也。鸡犬二物，则以职业为心，一到司晨守夜之时，则各司其事，虽豢以美食，处以曲房，使不即彼而就此，二物亦守死弗至；人之处此，亦因其远而远之，非有可远之道也。即其司晨守夜之功，与捕鼠之功亦有间焉。鸡之司晨，犬之守夜，忍饥寒而尽瘁，

无所利而为之，纯公无私者也；猫之捕鼠，因去害而得食，有所利而为之，公私相半者也。清勤自处，不屑媚人者，远身之道；假公自为，密迹其君者，固宠之方。是三物之亲疏，皆自取之也。然以我司职业于人间，亦必效鸡犬之行，而以猫之举动为戒。噫，亲疏可言也，祸福不可言也。猫得自终其天年，而鸡犬之死，皆不免于刀锯鼎镬之罚。观于三者之得失，而悟居官守职之难。其不冠进贤，而脱然于宦海浮沉之累者，幸也。

浇灌竹木

“筑成小圃近方塘，果易生成菜易长。抱瓮太痴机太巧，从中酌取灌园方。”此予山居行乐之诗也。能以草木之生死为生死，始可与言灌园之乐，不则一灌再灌之后，无不畏途视之矣。殊不知草木欣欣向荣，非止耳目堪娱，亦可为艺草植木之家，助祥光而生瑞气。不见生财之地万物皆荣，退运之家群生不遂？气之旺与不旺，皆于动植验之。若是，则汲水浇花，与听信堪舆、修门改向者无异也。不视为苦，则乐在其中。督率家人灌溉，而以身任微勤，节其劳逸，亦颐养性情之一助也。

止忧第二

忧可忘乎？不可忘乎？曰：可忘者非忧，忧实不可忘也。然则忧之未忘，其何能乐？曰：忧不可忘而可止，止即所以忘之也。如人忧贫而劝之使忘，彼非不欲忘也，啼饥号寒者迫于内，课赋索逋者攻于外，忧能忘乎？欲使贫者忘忧，必先使饥者忘啼，寒者忘号，征且索者忘其逋赋而后，此必不得之数也。若是，则

“忘忧”二字徒虚语耳。犹慰下第者以来科必发，慰老而无嗣者以日后必生，迨其不发不生，亦止听之而已，能归咎慰我者而责之使偿乎？语云：“临渊羡鱼，不如退而结网。”慰人忧贫者，必当授以生财之法；慰人下第者，必先予以必售之方；慰人老而无嗣者，当令蓄姬买妾，止妒息争，以为多男从出之地。若是，则为有裨之言，不负一番劝谕。止忧之法，亦若是也。忧之途径虽繁，总不出可备、难防之二种，姑为汗竹，以代树萱。

止眼前可备之忧

拂意之境，无人不有，但问其易处不易处，可防不可防。如易处而可防，则于未至之先，筹一计以待之。此计一得，即委其事于度外，不必再筹，再筹则惑我者至矣。贼攻于外而民扰于中，其可防乎？俟其既至，则以前画之策，取而予之，切勿自动声色。声色动于外，则气馁于中。此以静待动之法，易知亦易行也。

止身外不测之忧

不测之忧，其未发也，必先有兆。现乎蓍龟，动乎四体者，犹未必果验。其必验之兆，不在凶信之频来，而反在吉祥之事之太过。乐极悲生，否伏于泰，此一定不移之数也。命薄之人，有奇福，便有奇祸；即厚德载福之人，极祥之内，亦必酿出小灾。盖天道好还，不敢尽私其人，微示公道于一线耳。达者处此，无不思患预防，谓此非善境，乃造化必忌之数，而鬼神必眈之秋也。萧墙之变，其在是乎？止忧之法有五：一曰谦以省过，二曰勤以砺身，三曰俭以储费，四曰恕以息争，五曰宽以弥谤。率此而行，则

忧之大者可小，小者可无；非循环之数，可以窃逃而幸免也。只因造物予夺之权，不肯为人所测识，料其如此，彼反未必如此，亦造物者颠倒英雄之惯技耳。

调饮啜第三

《食物本草》一书，养生家必需之物。然翻阅一过，即当置之。若留匕箸之旁，日备考核，宜食之物则食之，否则相戒勿用，吾恐所好非所食，所食非所好，曾皙嗜羊枣而不得咽，曹刿鄙肉食而偏与谋，则饮食之事亦太苦矣。尝有性不宜食而口偏嗜之，因惑《本草》之言，遂以疑虑致疾者。弓蛇之为祟，岂仅在形似之间哉！食色，性也，欲藉饮食养生，则以不离乎性者近是。

爱食者多食

生平爱食之物，即可养身，不必再查《本草》。春秋之时，并无《本草》，孔子性嗜姜，即不撤姜食，性嗜酱，即不得其酱不食，皆随性之所好，非有考据而然。孔子于姜、酱二物，每食不离，未闻以多致疾。可见性好之物，多食不为祟也。但亦有调剂君臣之法，不可不知。“肉虽多，不使胜食气。”此即调剂君臣之法。肉与食较，则食为君而肉为臣；姜、酱与肉较，则又肉为君而姜、酱为臣矣。虽有好不好之分，然君臣之位不可乱也。他物类是。

怕食者少食

凡食一物而凝滯胸膛，不能克化者，即是病根，急宜消導。世間只有暝眩之藥，豈有暝眩之食乎？喜食之物，必無是患，強半皆所惡也。故性惡之物即當少食，不食更宜。

太饥勿饱

欲調飲食，先勻飢飽。大約飢至七分而得食，斯為酌中之度，先時則早，過時則遲。然七分之飢，亦當予以七分之飽，如田疇之水，務與禾苗相稱，所需幾何，則灌注幾何，太多反能傷稼，此平時養生之火候也。有時迫于繁冗，飢過七分而不得食，遂至九分十分者，是謂太飢。其為食也，寧失之少，勿犯于多。多則飢飽相搏而脾氣受傷，數月之調和，不敵一朝之紊亂矣。

太饱勿饥

飢飽之度，不得過于七分是已。然又豈無饕餮太甚，其腹果然之時？是則失之太飽。其調飢之法，亦復如前，寧豐勿蓄。若謂逾時不久，積食難消，以養鷹之法處之，故使飢腸欲絕，則似大熟之后，忽遇奇荒。貧民之飢可耐也，富民之飢不可耐也，疾病之生多由于此。從來善養生者，必不以身為戲。

怒时哀时勿食

喜怒哀乐之始发，均非进食之时。然在喜乐犹可，在哀怒则必不可。怒时食物易下而难消，哀时食物难消亦难下，俱宜暂过一时，候其势之稍杀。饮食无论迟早，总以入肠消化之时为度。早食而不消，不若迟食而即消。不消即为患，消则可免一餐之忧矣。

倦时闷时勿食

倦时勿食，防瞌睡也。瞌睡则食停于中，而不得下。烦闷时勿食，避恶心也。恶心则非特不下，而呕逆随之。食一物，务得一物之用。得其用则受益，不得其用，岂止不受益而已哉！

节色欲第四

行乐之地，首数房中。而世人不善处之，往往启妒酿争，翻为祸人之具。即有善御者，又未免溺之过度，因以伤身，精耗血枯，命随之绝。是善处不善处，其为无益于人者一也。至于养生之家，又有近姘远色之二种，各持一见，水火其词。噫，天既生男，何复生女，使人远之不得，近之不得，功罪难予，竟作千古不决之疑案哉！予请为息争止谤，立一公评，则谓阴阳之不可相无，犹天地之不可使半也。天苟去地，非止无地，亦并无天。江河湖海之不存，则日月奚自而藏？雨露凭何而泄？人但知藏日月者地也，不知生日月者亦地也；人但知泄雨露者地也，不知生雨

露者亦地也。地能藏天之精，泄天之液，而不为天之害，反为天之助者，其故何居？则以天能用地，而不为地所用耳。天使地晦，则地不敢不晦；迨欲其明，则又不敢不明。水藏于地，而不假天之风，则波涛无据而起；土附于地，而不逢天之候，则草木何自而生？是天也者，用地之物也；犹男为一家之主，司出纳吐茹之权者也。地也者，听天之物也；犹女备一人之用，执饮食寝处之劳者也。果若是，则房中之乐，何可一日无之？但顾其人之能用与否，我能用彼，则利莫大焉。参苓芪术皆死药也，以死药疗生人，犹以枯木接活树，求其气脉之贯，未易得也。黄婆姹女皆活药也，以活药治活人，犹以雌鸡抱雄卵，冀其血脉之通，不更易乎？凡借女色养身而反受其害者，皆是男为女用，反地为天者耳。倒持干戈，授人以柄，是被戮之人之过，与杀人者何尤？人问：执子之见，则老氏“不见可欲，使心不乱”之说，不几谬乎？予曰：正从此说参来，但为下一转语；不见可欲，使心不乱，常见可欲，亦能使心不乱。何也？人能摒绝嗜欲，使声色货利不至于前，则诱我者不至，我自不为人诱，苟非入山逃俗，能若是乎？使终日不见可欲而遇之一旦，其心之乱也，十倍于常见可欲之人。不如日在可欲之中，与若辈习处，则是“司空见惯浑闲事”矣，心之不乱，不大异于不见可欲而忽见可欲之人哉？老子之学，避世无为之学也；笠翁之学，家居有事之学也。二说并存，则游于方之内，无适不可。

节快乐过情之欲

乐中行乐，乐莫大焉。使男子至乐，而为妇人者尚有他事萦心，则其为乐也，可无过情之虑。使男妇并处极乐之境，其为地也，又无一人一物搅挫其欢，此危道也。决尽提防之患，当刻刻

虑之。然而但能行乐之人，即非能虑患之人；但能虑患之人，即是可以不必行乐之人。此论徒虚设耳。必须此等忧虑历过一遭，亲尝其苦，然后能行此乐。噫，求为三折肱之良医，则囊中妙药存者鲜矣，不若早留余地之为善。

节忧患伤情之欲

忧愁困苦之际，无事娱情，即念房中之乐。此非自好，时势迫之使然也。然忧中行乐，较之平时，其耗精损神也加倍。何也？体虽交而心不交，精未泄而气已泄。试强愁人以欢笑，其欢笑之苦更甚于愁，则知忧中行乐之可已。虽然，我能言之，不能行之，但较平时稍节则可耳。

节饥饱方殷之欲

饥、寒、醉、饱四时，皆非取乐之候。然使情不能禁，必欲遂之，则寒可为也，饥不可为也；醉可为也，饱不可为也。以寒之为苦在外，饥之为苦在中，醉有酒力之可凭，饱无轻身之足据。总之，交媾者，战也，枵腹者不可使战；并处者，眠也，果腹者不可与眠。饥不在肠而饱不在腹，是为行乐之时矣。

节劳苦初停之欲

劳极思逸，人之情也，而非所论于耽酒嗜色之人。世有喘息未定，即赴温柔乡者，是欲使五官百骸、精神气血，以及骨中之

髓、肾内之精，无一不劳而后已。此杀身之道也。疾发之迟缓虽不可知，总无不胎病于内者。节之之法有缓急二种：能缓者，必过一夕二夕；不能缓者，则酣眠一觉以代一夕，酣眠二觉以代二夕。惟睡可以息劳，饮食居处皆不苦也。

节新婚乍御之欲

新婚燕尔，不必定在初娶，凡妇人未经御而乍御者，即是新婚。无论是妻是妾，是婢是妓，其为燕尔之情则一也。乐莫乐于新相知，但观此一夕之为欢，可抵寻常之数夕，即知此一夕之所耗，亦可抵寻常之数夕。能保此夕不受燕尔之伤，始可以道新婚之乐。不则开荒辟昧，既以身任奇劳，献媚要功，又复躬承异瘁。终身不二色者，何难作背城一战；后宫多嬖侍者，岂能为不败孤军？危哉！危哉！当筹所以善此矣。善此当用何法？曰：静之以心，虽曰燕尔新婚，只当行其故事。“说大人，则藐之”，御新人，则旧之。仍以寻常女子相视，而不致大动其心。过此一夕二夕之后，反以新人视之，则可谓驾驭有方，而张弛合道者矣。

节隆冬盛暑之欲

最宜节欲者隆冬，而最难节欲者亦是隆冬；最忌行乐者盛暑，而最便行乐者又是盛暑。何也？冬夜非人不暖，贴身惟恐不密，倚翠偎红之际，欲念所由生也。三时苦于褴褛，九夏独喜轻便，袒裼裸裎之时，春心所由荡也。当此二时，劝人节欲，似乎不情，然反此即非保身之道。节之为言，明有度也；有度则寒暑不为灾，无度则温和亦致戾。节之为言，示能守也；能守则日与周旋而神旺，

无守则略经点缀而魂摇。由有度而驯至能守，由能守而驯至自然，则无时不堪昵玉，有暇即可怜香。将鄙是集为可焚，而怪湖上笠翁之多事矣。

却病第五

病之起也有因，病之伏也有在，绝其因而破其在，只在一字之和。俗云：“家不和，被邻欺。”病有病魔，魔非善物，犹之穿窬之盗，起讼构难之人也。我之家室有备，怨谤不生，则彼无所施其狡猾，一有可乘之隙，则环肆奸欺而祟我矣。然物必先朽而后虫生之，苟能固其根本，荣其枝叶，虫虽多，其奈树何？人身所当和者，有气血、脏腑、脾胃、筋骨之种种，使必逐节调和，则头绪纷然，顾此失彼，穷终日之力，不能防一隙之疏。防病而病生，反为病魔窃笑耳。有务本之法，止在善和其心。心和则百体皆和。即有不和，心能居重驭轻，运筹帷幄，而治之以法矣。否则内之不宁，外将奚视？然而和心之法，则难言之。哀不至伤，乐不至淫，怒不至于欲触，忧不至于欲绝。“略带三分拙，兼存一线痴；微聋与暂哑，均是寿身资。”此和心诀也。三复斯言，病其可却。

病未至而防之

病未至而防之者，病虽未作，而有可病之机与必病之势，先以药物投之，使其欲发不得，犹敌欲攻我，而我兵先之，预发制人者也。如偶以衣薄而致寒，略为食多而伤饱，寒起畏风之渐，饱生悔食之心，此即病之机与势也。急饮散风之物而使之汗，随投

化积之剂而速之消。在病之自视如人事，机才动而势未成，原在可行可止之界，人或止之，则竟止矣。较之戈矛已发，而兵行在途者，其势不大相径庭哉？

病将至而止之

病将至而止之者，病形将见而未见，病态欲支而难支，与久疾乍愈之人同一意况。此时所患者切忌猜疑。猜疑者，问其是病与否也。一作两歧之念，则治之不力，转盼而疾成矣。即使非疾，我以是疾处之，寝食戒严，务作深沟高垒之计；刀圭毕备，时为出奇制胜之谋。以全副精神，料理奸谋未遂之贼，使不得揭竿而起者，岂难行不得之数哉？

病已至而退之

病已至而退之，其法维何？曰：止在一字之静。敌已至矣，恐怖何益？“剪灭此而后朝食”，谁不欲为？无如不可猝得。宽则或可渐除，急则疾上又生疾矣。此际主持之力，不在卢医、扁鹊，而全在病人。何也？召疾使来者，我也，非医也。我由寒得，则当使之并力去寒；我自欲来，则当使之一心治欲。最不解者，病人延医，不肯自述病源，而只使医人按脉。药性易识，脉理难精，善用药者时有，能悉脉理而所言必中者，今世能有几人哉？徒使按脉定方，是以性命试医，而观其中用否也。所谓主持之力不在卢医、扁鹊，而全在病人者，病人之心专一，则医人之心亦专一，病者二三其词，则医人什佰其径，径愈宽则药愈杂，药愈杂则病愈繁矣。昔许胤宗谓人曰：“古之上医，病与脉值，惟用一物攻之。

今人不谙脉理，以情度病，多其药物以幸有功，譬之猎人，不知兔之所在，广络原野以冀其获，术亦昧矣。”此言多药无功，而未及其害。以予论之，药味多者不能愈疾，而反能害之。如一方十药，治风者有之，治食者有之，治癆伤虚损者亦有之。此合则彼离，彼顺则此逆，合者顺者即使相投，而离者逆者又复于中为祟矣。利害相攻，利卒不能胜害，况其多离少合，有逆无顺者哉？故延医服药，危道也。不自为政，而听命于人，又危道中之危道也。慎而又慎，其庶几乎！

疗病第六

“病不服药，如得中医。”此八字金丹，救出世间几许危命！进此说于初得病时，未有不怪其迂者，必俟刀圭药石无所不投，人力既穷，而沉痾如故，不得已而从事斯语，是可谓天人交迫，而使就“中医”者也。乃不攻不疗，反致霍然，始信八字金丹，信乎非谬。以予论之，天地之间只有贪生怕死之人，并无起死回生之药。“药医不死病，佛度有缘人。”旨哉斯言！不得以谚语目之矣。然病之不能废医，犹旱之不能废祷。明知雨泽在天，匪求能致，然岂有晏然坐视，听禾苗稼穡之焦枯者乎？自尽其心而已矣。予善病一生，老而勿药。百草尽经尝试，几作神农后身，然于大黄解结之外，未见有呼应极灵，若此物之随试随验者也。生平著书立言，无一不由杜撰，其于疗病之法亦然。每患一症，辄自考其致此之由，得其所由，然后治之以方，疗之以药。所谓方者，非方书所载之方，乃触景生情，就事论事之方也；所谓药者，非《本草》必载之药，乃随心所喜，信手拈来之药也。明知无本之言不可训世，然不妨姑妄言之，以备世人之妄听。凡阅是编者，理有可信则存之，事有可疑则阙之，不以文害辞，不以辞害志，是

所望于读笠翁之书者。

药笼应有之物，备载方书；凡天地间一切所有，如草木金石，昆虫鱼鸟，以及人身之便溺，牛马之溲渤，无一或遗，是可谓两者至备之书，百代不刊之典。今试以《本草》一书高悬国门，谓有能增一疗病之物，及正一药性之讹者，予以千金。吾知轩、岐复出，卢、扁再生，亦惟有屏息而退，莫能覬覦者矣。然使不幸而遇笠翁，则千金必为所攫。何也？药不执方，医无定格。同一病也，同一药也，尽有治彼不效，治此忽效者；彼是则此非，彼非则此是，必居一于此矣。又有病是此病，药非此药，万无可利用之理，或被庸医误投，或为臧获谬取，食之不死，反以回生者。迹是而观，则《本草》所载诸药性，不几大谬不然乎？更有奇于此者，常见有人病入膏肓，危在旦夕，药饵攻之不效，刀圭试之不灵，忽于无心中瞥遇一事，猛见一物，其物并非药饵，其事绝异刀圭，或为喜乐而病消，或为惊慌而疾退。“救得命活，即是良医；医得病痊，便称良药。”由是观之，则此一物与此一事者，即为《本草》所遗，岂得谓之全备乎？虽然，彼所载者，物性之常；我所言者，事理之变。彼之所师者人，人言如是，彼言亦如是，求其不谬则幸矣；我之所师者心，心觉其然，口亦信其然，依傍于世何为乎？究竟予言似创，实非创也，原本于方书之一言：“医者，意也。”以意为医，十验八九，但非其人不行。吾愿以拆字射覆者改卜为医，庶几此法可行，而不为一定不移之方书所误耳。

本性酷好之药

一曰本性酷好之物，可以当药。凡人一生，必有偏嗜偏好之一物，如文王之嗜菖蒲菹，曾皙之嗜羊枣，刘伶之嗜酒，卢仝之嗜茶，权长孺之嗜瓜，皆癖嗜也。癖之所在，性命与通，剧病得

此，皆称良药。医士不明此理，必按《本草》而稽查药性，稍与症左，即鸩毒视之。此异疾之不能遽瘳也。予尝以身试之。庚午之岁，疫疠盛行，一门之内，无不呻吟，而惟予独甚。时当夏五，应荐杨梅，而予之嗜此，较前人之癖菖蒲、羊枣诸物，殆有甚焉，每食必过一斗。因讯妻孥曰：“此果曾入市否？”妻孥知其既有而未敢遽进，使人密讯于医。医者曰：“其性极热，适与症反。无论多食，即一二枚亦可丧命。”家人识其不可，而恐予固索，遂诡词以应，谓此时未得，越数日或可致之。詎料予宅邻街，卖花售果之声时时达于户内，忽有大声疾呼而过予门者，知其为杨家果也。予始穷诘家人，彼以医士之言对。予曰：“碌碌巫咸，彼乌知此？急为购之！”及其既得，才一沁齿而满胸之郁结俱开，咽入腹中，则五脏皆和，四体尽适，不知前病为何物矣。家人睹此，知医言不验，亦听其食而不禁，病遂以此得痊。由是观之，无病不可自医，无物不可当药。但须以渐尝试，由少而多，视其可进而进之，始不以身为孤注。又有因嗜此物，食之过多因而成疾者，又当别论。不得尽执以酒解醒之说，遂其势而益之。然食之既厌而成疾者，一见此物，即避之如仇。不相忌而相能，即为对症之药可知已。

其人急需之药

二曰其人急需之物，可以当药。人无贵贱穷通，皆有激切所需之物。如穷人所需者财，富人所需者官，贵人所需者升擢，老人所需者寿，皆卒急欲致之物也。惟其需之甚急，故一投辄喜，喜即病痊。如人病入膏肓，匪医可救，则当疗之以此。力能致者致之，力不能致，不妨给之以术。家贫不能致财者，或向富人称贷，伪称亲友馈遗，安置床头，予以可喜，此救贫病之第一着也。未

得官者，或急为纳粟，或谬称荐举；已得官者，或真谋铨补，或假报量移。至于老人欲得之遐年，则出在星相巫医之口，予千予百，何足吝哉！是皆“即以其人之道，反治其人之身”者也。虽然，疗诸病易，疗贫病难。世人忧贫而致疾，疾而不可救药者，几与恒河沙比数。焉能假太仓之粟，贷郭况之金，是人皆予以可喜，而使之霍然尽愈哉？

一心钟爱之药

三曰一心钟爱之人，可以当药。人心私爱，必有所钟。常有君不得之于臣，父不得之于子，而极疏极远极不足爱之人，反为精神所注，性命以之者，即是钟情之物也。或是娇妻美妾，或为狎客变童，或系至亲密友，思之弗得，与得而弗亲，皆可以致疾。即使致疾之由，非关于此，一到疾痛无聊之际，势必念及私爱之人。忽使相亲，如鱼得水，未有不耳清目明，精神陡健，若病魔之辞去者。此数类之中，惟色为甚，少年之疾，强半犯此。父母不知，谬听医士之言，以色为戒，不知色能害人，言其常也，情堪愈疾，处其变也。人为情死，而不以情药之，岂人为饥死，而仍戒令勿食，以成首阳之志乎？凡有少年子女，情窦已开，未经婚嫁而至疾，疾而不能遽瘳者，惟此一物可以药之。即使病躯羸弱，难使相亲，但令往来其前，使知业为我有，亦可慰情思之大半。犹之得药弗食，但嗅其味，亦可内通腠理，外壮筋骨，同一例也。至若闺门以外之人，致之不难，处之更易。使近卧榻，相昵相亲，非招人与共，乃赎药使尝也。仁人孝子之养亲，严父慈母之爱子，俱不可不预蓄是方，以防其疾。

一生未见之药

四曰一生未见之物，可以当药。欲得未得之物，是人皆有，如文士之于异书，武人之于宝剑，醉翁之于名酒，佳人之于美饰，是皆一往情深，不辞困顿，而欲与相俱者也。多方觅得而使之一见，又复艰难其势而后出之，此驾驭病人之术也。然必既得而后留难之，许而不能卒与，是益其疾矣。所谓异书者，不必微言秘籍，搜藏破壁而后得之。凡属新编，未经目睹者，即是异书，如陈琳之檄，枚乘之文，皆前人已试之药也。须知奇文通神，鬼魅遇之，无不辟者。而予所谓文人，亦不必定指才士，凡系识字之人，即可以书当药。传奇野史，最祛病魔，倩人读之，与诵咒辟邪无异也。他可类推，勿拘一辙。富人以珍宝为异物，贫家以罗绮为异物，猎山之民见海错而称奇，穴处之家入巢居而赞异。物无美恶，希觐为珍；妇少妍媸，乍亲必美。昔未睹而今始睹，一钱所购，足抵千金。如必俟希世之珍，是索此辈于枯鱼之肆矣。

平时契慕之药

五曰平时契慕之人，可以当药。凡人有生平向往，未经谋面者，如其惠然肯来，以此当药，其为效也更捷。昔人传韩非书至秦，秦王见之曰：“寡人得见此人与之游，死不恨矣！”汉武帝读相如《子虚赋》而善之，曰：“朕独不得与此人同时哉！”晋时宋纤有远操，沉静不与世交，隐居酒泉，不应辟命。太守杨宣慕之，画其像于阁上，出入视之。是秦王之于韩非，武帝之于相如，杨宣之于宋纤，可谓心神毕射，寤寐相求者矣。使当秦王、汉帝、杨

宣卧疾之日，忽致三人于榻前，则其霍然起舞，执手为欢，不知疾之所从去者，有不待事毕而知之矣。凡此皆言秉彝至好出自中心，故能愉快若此。其因人赞美而随声附和者不与焉。

素常乐为之药

六曰素常乐为之事，可以当药。病人忌劳，理之常也。然有“乐此不疲”一说作转语，则劳之适以逸之，亦非拘士所能知耳。予一生疗病，全用是方，无疾不试，无试不验，徙痾浣肠之奇，不是过也。予生无他癖，惟好著书，忧藉以消，怒藉以释，牢骚不平之气藉以铲除。因思诸疾之萌蘖，无不始于七情，我有治情理性之药，彼乌能祟我哉！故于伏枕呻吟之初，即作开卷第一义；能起能坐，则落毫端，不则但存腹稿。迨沉痾将起之日，即新编告竣之时。一生剗剗，孰使为之？强半出造化小儿之手。此我辈文人之药，“止堪自怡悦，不堪持赠君”者。而天下之人，莫不有乐为之一事，或耽诗癖酒，或慕乐嗜棋，听其欲为，莫加禁止，亦是调理病人之一法。总之，御疾之道，贵在能忘；切切在心，则我为疾用，而死生听之矣。知其力乏，而故授以事，非扰之使困，乃迫之使忘也。

生平痛恶之药

七曰生平痛恶之物与切齿之人，忽而去之，亦可当药。人有偏好，即有偏恶。偏好者致之，既可已疾，岂偏恶者辟之使去，逐之使远，独不可当沉痾之《七发》乎？无病之人，目中不能容屑，去一可憎之物，如拔眼内之钉。病中睹此，其为累也更甚。故凡

遇病人在床，必先计其所仇者何人，憎而欲去者何物，人之来也屏之，物之存也去之。或诈言所仇之人灾伤病故，暂快一时之心，以缓须臾之死，须臾不死，或竟不死也，亦未可知。刳股救亲，未必能活；割仇家之肉以食亲，痼疾未有不起者。仇家之肉，岂有异味可尝，而怪色奇形之可辨乎？暂欺以方，亦未尝不可。此则充类至义之尽也。愈疾之法，岂必尽然，得其意而已矣。

以上诸药，创自笠翁，当呼为《笠翁本草》。其余疗病之药及攻疾之方，效而可用者尽多。但医士能言，方书可考，载之将不胜载。悉留本等之事，以归分内之人，俎不越庖，非言其可废也。总之，此一书者，事所应有，不得不有；言所当无，不敢不无。“绝无仅有”之号，则不敢居；“虽有若无”之名，亦不任受。殆亦可存而不必尽废者也。

赋

龙 灯 赋

何物神龙，化为祝融。逃乎水族，宅于火中。忽过疑电，远眺犹虹。明月失照，晴霞敛烘。

尔乃笙歌队里，游群济济。突如其来，夭矫莫比。或蟠或伸，倏行倏止。群手批其鳞而不怒，万炬煎其心而不死。

若夫目瞋瞋兮明珠，尾曳曳兮珊瑚。肤寸寸兮冰雪，甲片片兮琉璃。行将飞而上天兮，旦宇宙而不夜；不则潜而入海兮，照水国以夺犀。

我将乘其背而周观于八荒兮，虽夜游而无须秉烛；抑将驯扰于石渠、天禄兮，纵晚较而奚事吹藜。于时鼓吹雷发，士女云随。乐事浓于万姓，欢声塞乎九逵。斯游观之最胜，称人巧之极奇。

重曰：龙为灵兮灯有明，明可照兮灵乃禎。明不察察兮，灵不矜矜。斯万物无遁形兮，四海有休征。吾愿在天在田之大人兮，胥体此以加民。

苕羹赋并序

辛卯夏，憩东安贤明山，主僧饷客者，非饭即饼，而以菜糊。

自供。予意所供必草具不中食者，然见其色甚可目，味诎不可口耶？咀之，香而匀，甘而不噍。怪谓僧曰：“咄咄，美羹！胡为私啖？”僧曰：“非有羹名，俗呼菜糊。以其为家常俭食，不敢进客。客固甘之乎？”余谛视焉：其或红或绿者为苋，黄者为萱，紫者为茄，碧者为菌、为边笋，白者为扁豆，青者为豇豆、为丝瓜。膏之以麴，剂之以酱及姜。然诸菜皆臣属，君之者苋，予名之曰“苋羹”。厨僧知予痴嗜，自是每食必苋，每苋必羹；余亦无羹不饱，无饱不吟。赋曰：

仇浊味之滞性兮，盍漱露乎餐云。依淡泊以明志兮，须茹素而吐荤。唯和羹之匪易兮，爰罕譬乎宰臣。乃缁徒之寡营兮，克自既其良能。挹朝露于未晞兮，采采群英。悟兼收为之益兮，不遗寸茎。置懿筐于飞湍兮，濯已净之微尘。泊洁鼎于涓流兮，防风垢之或侵。察刚柔于缓急兮，虽异入而同升。听火候之自至兮，俟众味之徐凝。知既熟而犹齏兮，愁一线之尚生。需及时而启鬻兮，冥气臭于无闻。登清芬于虚盎兮，满而不盈。戒炙手而飏煮兮，燂而克温。融众色为一色兮，若无色之可名。原无味于有味兮，何辛苦之纷纷。余骤啜而甚甘兮，知未离乎贪嗔。俟日啖而交忘兮，觉此味之平平。行将苋于无苋兮，羹于无羹。乌知不悔斯文兮，多事多云？

支 颐 赋

日载阳兮迟迟，独晏坐兮茅茨。罗简编兮隶古，对楮颖兮鞭思。忽中腴而外乏，觉神旺而官疲。颐无心于手假，手不觉其颐支。

尔乃渐入希夷，天钧自憩。中欲出而不扃，外欲入而不闭。无

怀、葛天之民，伏羲、神农之吏。相为于无所为，相遇于无所遇。子綦之丧偶，此其庶几；颜子之坐忘，斯为实际。

若乃身世无交，阴阳息鏖。寡爱鲜憎，孰桀孰尧？沉酣乎此间之至味，觉行起偃卧之无一而非劳。知者以为緘默而有得，不知者将谓徒倚而无聊。

归故乡赋

昔江淹作《去故乡赋》，鲍照作《游思赋》，皆浪游之针砭也。予少年作客，老大言归；深阅行迈之艰，始识归休之逸；爰作《归故乡赋》。赋曰：

逸莫逸兮故园栖，欢莫欢兮游子归；怅独怅夫岁月迈，嗟复嗟此时事非。

于时山川蜿蜒，跋涉流连；辛贫毕谙，足茧鞋穿。寒飊锥骨，阴霭翳天；马头霜辣，仆背雨酸。岁云徂兮客缘尽，资告竭兮游兴阑；归期迫兮心转亟，家山见兮到转难。

至乃鸡犬欢迎，山川相识。农辍锄以来欢，渔投竿而相揖。骚朋韵执，索佳句于奚囊；逸叟闲夫，访新闻于异国。家无主而常扉，草齐腰而没膝。燕迁旧垒之巢，鹊喜新归之客。虫网厚兮如茧，蜗迹纷兮如织。书破蠹肥，花稀棘密。妻颜减红，亲发增白。幸犹归之及今，悔长征之自昔。若之何去家族兮如仇，以秦越兮为邮。恃丁年而役役，岂长夏而不秋？

已焉哉！男子生兮，弧矢四方。世莫予宗兮，盍归父母之邦。采兰纫佩兮，观濂引觞。与鼎食而为萍为梗兮，宁啜菽而为梓为桑者也。

鸡 鸣 赋

鸟之以声事人者众矣！要皆进谀献媚之口，非振聋启聩、助勤警怠之音也；惟鸡则然。前人之于禽鸟，自凤鸾之大以及燕雀之微，莫不有赋，独鸡不及焉。惟浩虚舟有《木鸡赋》，是赋不鸣之鸡，非鸣鸡也；宋言有《鸡鸣度关赋》，亦匪赋鸡，赋人而鸡者也；皇甫湜有《鹤处鸡群赋》，是欲尊鹤而抑鸡，意不在鸡而在鹤也。予欲特书其功，以补前人之未逮，或曰：“贱物耳！焉用赋之？”予曰：“匪贱也，为多屈耳。使天能爱宝，偶然一生，则在外必贡于朝，在四译必献中国，能使神鹊失灵而凤凰不得称瑞者，必是物也。贱云乎哉！”赋曰：

鸟名近百，羽族盈千。或以瑞著，或以灵传；或贵形体，或珍羽翰；或以好音饰听，或以美色娱观。以色事人者，无足论矣；以音悦众者，试取衡焉。鸦善鸣凶，人憎饶舌；鹊能报喜，情同附热。雀非争闹以喧呼，蝉不悲伤而哽咽；莺求人识其巧，鸠徒自鸣其拙。秋深畅饮，何劳鸿雁挑愁；夜半酣眠，焉用子规啼血。画眉以一身兼众口，多能无补于民；鹦鹉以禽语作人声，如簧终难代说。鹤声嘹亮兮，亦可有而可无；燕语呢喃兮，非难少而难缺。之数虫者，空矢好音于听闻，尽是无功之啁嘶。

有功无誉，谁克当之？惟鸡为然，百无一疵。智能烛夜，信不失时。一唱百唱，义无参差。恋母维孝，哺卵维慈。克正夫纲，戒鸣伏雌。见食呼群，仁者无私。遇敌辄斗，勇始不辞。食人之食，司其所司。有餐非素，有位弗尸。守一主兮弗变，视九死兮如归。此诚羽族之冠而堪为百鸟之师者也。

至其养锐蓄精，戒之在斗。致力于宵，息机在昼。岂不爱眠，

虑难辞咎。未醒其躯，先寤乃昧。振羽待鸣兮若惊，试音将发兮如嗽。尔乃形同鹄立，貌似鹰扬。一声初起，万吻齐张。不军令以严肃，无国法而纪纲。初鸣忌促，利在悠扬；再鸣忌缓，韵短声长；三唱则无烦律吕，乱鸣而人始彷徨。维时万作齐兴，三农尽起；朝臣搢笏以趋，估客束装而徙。织素缝裳之女，先盥栉以待明；凿壁囊萤之士，复焚膏而继晷。听之起舞者，史笔特书；闻以戒旦者，风人所美。孳孳为善者舜之徒，既侧耳以待兴；孳孳为利者跖之徒，亦潜踪而避悔。

设天未明，不有此声；人将五夜，视作三更。举国皆梦，谁其独醒。君由之而度失，臣以此而祸萌。贾者失其早利，农夫薄于秋成。士慵女惰，蚕死蠹生。世何由而卜昼，治焉能以励精？是此一禽者，为羲和氏之功臣，神农氏之良吏。暗司日月之光，而人不知；明归造物之功，而身不与者也。奈何怒之如贼，叱之若奴；偕豕作队，与犬同呼；既利其生而致其死，复食其卵而断其雏也哉！

不登高赋

丁巳九日，客吴兴，人皆登高，独予不出。予倩沈因伯曰：“佳节难负，即不登山，亦觅小阜略升，以循古例。”予谓：“古例宜循，独九日登高一事，予久惑之，不循可也。”因伯询以故，予曰：“重阳登高，所以避祸也；无祸而避者不祥。此事始于桓景，景从费长房游，房曰：‘九月九日，汝家当有大灾。急令家人缝囊，盛茱萸系臂上，登山饮菊酒，此祸可免。’桓从其言。夕还，鸡犬牛羊皆暴死。房曰：‘代之矣。’后遂因之为俗。夫桓之有灾，命也；命之有灾，适逢是日，盖就景一人之命推之，而测其然也。一人有一人之命，岂天下后世之人尽以景命为命乎？设谓是日天必

降灾，则当日趋而避之者惟景一人，何以众皆无恙，鸡犬牛羊皆不死？即此可证当日之诬，亦可辟千百年后人尽登高之谬矣。且予谓景之获免，亦出偶然，长房之言幸中耳。使灾尽可避，人之死也，皆可以鸡犬牛羊代，岂造物之祸淫亦复容人漏网、凡干无赦之罚者尽可以物代乎？东坡有言：四时令节，惟清明、重阳不宜虚度。时序之变，无逾此二节者。若谓借此游宴，则可；避灾之说，难以为训。然既曰游宴，则芳郊胜地，绿水丹山，无在不可，何必泥于登高？登高可矣，又何必泥于九日？若谓九日登高为千古不易之事，我则曰：虽违众，吾从下矣。”乃作《不登高赋》。赋曰：

湖滨顽叟，才谫腹虚。好与古战，不安其愚。时当秋令，身在客居。届萸萸之令节，有坦腹者相俱。劝以登高，勉其从俗；顽叟固辞，畏群喜独。询曰何为？双眉始蹙；谓我尝讥古人，胡为蹈其荒躅？重五竞渡，重九登高；竞渡宜往，登高弗劳。竞渡吊忠臣，又复悲孝女；曹娥亦以五月五日沉江，世多忽之。于理无可非，其义有所取。登高何昉？昉自长房。桓景有灾，命制萸囊；登高饮酒，行乐避殃。入门户兮周览，觅鸡犬兮尽亡。是以无人弗信，举国皆狂；因而成俗，岁以为常。疑事信于一时，凶闻吉乎千载。本无灾以思避，知非祥而不改。怪善俗之无人，听举世之迷津。我以不登高而作赋，犹之欲徙鳄而为文。暂存是说于纸上，行灭此迹于河滨。狂士之言无足采，匹夫之令其谁遵？

蟹 赋

天下食物之美，有过于螃蟹者乎？予昔误听人言，谓江瑶柱、西施舌二种，足居其右。迨游八闽，食荔枝而甘之，窃疑造物有

私，胡独厚此一方而薄尽天下，既啖以佳果，复饘以美馔，闽人之暴殄天物，不太甚乎？及食所谓居蟹右者，悉淮阴之绛、灌，求为倂伍而不屑者也。但以皮相相之，则果觉瑰奇可爱，味实平平无奇。因而细绎其故，始知前人命名，其取义不过如此。宝中之瑶、屋中之柱，原只令人美观；并非可食之物；即舌在西施之口，亦岂供人咀嚼者哉！以是知南方之蟹，合山珍海错而较之，当居第一，不独冠乎水族、甲于介虫而已也。久欲赋之而未敢，以自古迄今，嗜之者众，则赋之者必多，空疏之臆，敢与便便其腹者较短长哉。及读杨廷秀之《糟蟹》、《生蟹》二赋，皆属游戏神通，幻其形而为人，与之辩论酬酢，以作《郭索传》则可，谓之《蟹赋》，无乃名求而失其实乎？惟吾友尤子展成一作，竭尽中藏，贤于古人远矣。予欲藏拙，其奈无肠公子作祟，以如钳似剪之二螯，日挠予腹，不酬以文而不放何。不得已而为之，赋曰：

食当秋暮，惟蟹是务；至美难名，不容不赋。才举笔以涎流，甫经思而目注；俨六跪之当前，擎双螯以待哺。不知造物于人，何旧何亲？视同爱子，款若嘉宾。千方饫其口腹，百计悦乃心神。薄诸般之海错，鄙一切之山珍。特生一甲，横扫千军。龟兮无尾，鱼兮不鳞。生于水而游于陆，食夫稻而饮夫 。身备阴阳之合德，位居燥湿之通津。

若乃无道宁藏，非时弗出。戈甲宁施于外，示有备以无虞；城府不设于中，羨无肠而有膈。朝臣嗜之而求外补，孝子拾之以供子职。思之弗得，虚左手以待持；亦既觐止，举右杯而相匹。稽往事兮实繁，纵更端兮难悉。还须加以口尝，勿仅全凭耳食。

当其甫离江海，乍脱纬萧。赴汤不屈，近火犹骄。未见乞怜之色，如闻索醉之号。死易青袍，卧披黄甲。尚有馀芒，其谁敢狎？只因无罪而多藏，致坐莫须之枉法。愈老愈辣，性类乎姜；君子喜酸，酷复相当。非投所好弗许食，以之博醉斯容尝。漫夸乃

腹，先美其匡。视黄金兮太贱，覩白璧兮如常。剖腹藏珠，宜乎满肚；持金赠客，不合盈筐。揭而易开，初若无底之囊；铲之不竭，知为有底之囊。

至其锦绣填胸，珠玑满腹；未饜人心，先饱予目。无异黄卷之初开，若有赤文之可读。油腻而甜，味甘而馥。含之如饮琼膏，嚼之似餐金粟。胸腾数叠，叠叠皆脂；旁列众仓，仓仓是肉。既尽其瓢，始及其足；一折两开，势同截竹。人但知其四双，谁能辨为十六？二螯更美，留以待终。俟肥甘之将尽，防精腴之既穷。然后盥手加餐，洗盏更酌。分为燕子，只少双翰；合作鸳鸯，惟增四脚。

佐以刘伶之杯，持以毕卓之手；赋太白之百篇，倾淳于之七斗。问奇字于扬子之亭，霏玉屑于晋人之口。庶足以慰公子于九原，不负其糜身而碎首者也。若仅食而图饱，嚼以已馋；他衷尔腹，漠不相关。若是则造物生之何意，而致委香骸于溪壑、贱物命如草菅也哉！

荔 枝 赋

予性同猿，酷于嗜果。九州历其六、七，虽云难遍，然所未到者，皆佳果不生之地，可无憾也。土著之物，无一不尝；然读“一骑红尘”之句，知玉环所嗜不苟。物肖其人，荔枝真尤物也！

同一果耳，胡以宜于此者，断断不宜于彼。虽天子之尊，国君之富，无事不可意为，独不能以四方珍果并植宫闱，随取随得，而食其鲜且美者，是何故欤？或曰：土不宜耳。然土亦非难载之物，胡不并此移之？一树所需之土，不过百簣、千簣及万簣已耳；即多至万万簣，亦岂有天下者所难致哉！然则非地不宜也，天不许耳。天地生物之初，凡于物之尤者，亦似分藩建国，锡土分茅，

若五等诸侯之各有其地，秦不可以易楚，鲁不能以兼卫，同一理也。

闻者是予此说，遂属予体天之意，以四方美核殿最低昂，爵为五等。予谓至尊无上者，莫过荔枝，虽欲不王不可得也。五等之首，则推苏、杭二地之杨梅，次则福州之橘，公杨梅而侯橘，得无舆论金同邪？其次则及燕京之葡萄及苹婆矣，葡萄伯而苹婆子也。男则为谁？其真定之梨乎。五等既定，拟各赋之，然恐不能遍及。凡物之与文字，亦各有缘；兴至而笔随之，即其缘也。否则我欲之而彼不欲，兴将奈此笔何哉！荔枝曰：“若是，则乘兴而来，请自不谷始！”

果中巨擘，谁足当之？询于众口，金曰荔枝。予始不信，惑于干者；其性虽甘，同乎蜜也。乃至东游岭表，南入闽中。采树头之嫩紫，剪叶下之鲜红。怪珠光兮射远，惊火焰兮烧空。不待尝而味先在口，无烦嚼而汁已投胸。甫动吻而辄融，似久矣忘形乎齿颊；才欲吞而已下，若未经假道于喉咙。

其貌维何？肖形于左：外若麟肝，内如凤卵。肉与壳连，其间不能容发；瓢与核离，剖去依然故我。莹同冰雪之肤，娇若芙蓉之面。吹弹得破，只因嫩至十分；光滑如油，似欲凝成一片。

其味何似？易食难名。交梨变体，火枣易形。谓其甜如蜜兮，既少蜂黄之余气；谓其脆似藕兮，又无鱼枕之微腥。较之梨而梨淡，方诸橘而橘浓。李虽甘而带涩，桃似美而欠松。至于杏浊腻喉，梅酸溅齿。枣过甜而流为愿，莲学清而失其旨。是皆琐尾之材，曷堪比数。

惟有壶柑一物，稍近幽怀；又以多香少味，到底难偕。龙眼人赠为奴，我憎草气而弗受；杨梅差堪作侣，彼惭形秽而不来。樱桃熟在予先，自知贵贱不侔，甘让后来居上；橄榄同生吾里，亦为妍媸有别，避贤各自分栽。此皆荔枝之实录，洵为果核之异才。

从前赋手虽众，第将本草差排；不见真情落句，惟惊古事成堆。致使南珍面目，翻为作者沉埋。予特开其禁锢，拂彼尘埃；仅露佳人之半面，未彰尤物之全材。倘以质之玄宗妃子，或能劳予浊酒三杯。

杨 梅 赋

人谓闽、粤无杨梅，当以荔枝代之；苏、杭无荔枝，当以杨梅代之。予谓荔枝肯代杨梅，杨梅不敢代荔枝。何则？其味可代，其香不可代也。杨梅无香，与海棠齐恨。然悦色知味者，未尝以海棠无香而辍其怜、杨梅无香而弛其爱，以其一美、一甘，俱臻至极之地也。如人有一长臻至极，即可不问其他。苏子瞻拙于饮，林和靖不能棋，亦何损二公之芳誉哉！赋曰：

南方珍果，首及杨梅。力能专致，无事旁窥。非但弗由香重，亦且不假色推。岂乏娇红，亦饶嫩紫；离朱尚未全佳，近黑才夸至美。始生也淡，淡尝若泚；继变为酸，酸难近齿。非淡何以致斯醇？惟酸始能酿其旨。

至若肤同雨粟，汁比天浆。肉有丝纹，馋夫但嚼而弗辨；味同醪醴，浅人多食而少尝。垂红缀紫之诗，皮相可称佳句；龙睛火齐之誉，名求亦自相当。脂美人之香口，绣学士之诗肠。

无奈世人，交之太密。为可久而易藏，反因爱以致溺。本不嗜酒，拉归酩酊之乡；强以参禅，浸入波罗之蜜。致困刘伶以醉埋，误类陈昉之莫逆。是犹谓逢知己，甘为死而不惜。最可憾者，吮痂之徒，窃位之贼；衰五十石以献当权，致一再迁而居要职。是则饮幽恨于千载，冀昭宣于一日者也。

福 橘 赋

荔枝出于闽、粤，杨梅产在苏、杭，是人皆知，不必系之以地。至梨、橘、葡萄、苹婆四种，则在在俱有，亦在在不佳。佳者各有其处，若不明其所在，则食他处所产而不觉其甘者，势必河汉予言，故必系之以地。橘莫佳于福州，故世称“福橘”。人谓“福”之为言近乎俗，请以“闽”字易之；予谓古有雅人韵士而故俗其名者，名以人重，人不以名重也。

天上璇精，散而为橘。古籍所登，无乃是实。摘之有若摘星，食者非同食物。是为千古所共珍，匪予一人之私癖。

往事实繁，家珍莫数；略陈其概，十才及五。伊尹合致于汤，晏婴并吞于楚。物充上贡，品列御羞。蒂少实繁，臣以之而贺瑞；树多利广，世拟之于封侯。双叟奕于瓢中，谈笑逢人而自若；二人来自树下，历陈往事以如流。事虽不经而难据，理有可信而始收。既属星精散体，岂无神物同游？食而纳质者清官，怀以貽亲者孝子。君不赐臣，若以赐臣必捧拜；誓不逾淮，强以逾淮则变枳。

不惟可口，兼能悦目；肤比良金，肌同软玉。树头累累，浑如圆璧生光；叶底垂垂，俨似黄裳衬绿。昔有解人，当其既熟：风吹落地，仍以绳系树头；竹以为藩，不使人侵鸟触。是则玩而只欲饱其睛、爱而不忍食其肉者也。

若其既辞宝树，甫入晶盘；味同芳芷，气若幽兰。兰宜鼻而不宜口，芷可药而不可餐。肉尽可以不咀，咀之更多馀味；核亦乌能不吐，吐之但觉堪怜。食而弃之者，仍是医门之良药；蜜而饯之乎，亦充珍品于华筵。睹此离柯之妙用，回思在树之奇观。是可谓珊瑚作树而浑身是宝；蓬莱为座而无客非仙者矣。

燕京葡萄赋

葡萄无他长，只以不酸为贵；酸而带涩，不值半文钱矣。燕地所产，非止不酸不涩，且肥而多肉，值得一吞，吞后余甘尚恋齿颊。产他处者悉与相反：见则喜食，食后常令人悔，觉舌本之上，若有一物搔爬者然。似痒不痒，由于是涩非涩，此其所以为贱也。

然予自燕入秦，假道平定州，食所产葡萄，较京师更美，大亦倍之。尝吸一颗而吐出其肉，几乎盈掌。予思归与人言，必无信者，因以其壳晒干，收入行笥。及归，渍以沸水，然后吹而大之，俨然一鲜葡萄矣。始知天地间有此妙物，睹外而知内，未有体胖而虚其中者。

然则此一赋也，当为平定州设，奈何复曰“燕京”？曰：此春秋尊王之义也。荔枝、杨梅与橘，京师不产，他处得以擅名；葡萄既出帝乡，则帝乡物矣。子不先父，臣敢上其君乎？平定葡萄虽美，只可甲于四方，不敢与居中御外者较短长也。

王者之都，万物所聚；即不产而自来，矧长生以不去？爰有圣果，名曰葡萄。但有不多，富而未流于侈；虽尊易购，贵亦不至于骄。原其所自，移来大宛；带土连沙，植诸上苑。近皇天则沾露维多，托后土而驰根自远。此是汉家旧事，不应谬入新篇；只为皇都数徙，种亦随至幽燕。中自戚里，下抵民间；莫不升棚而沿架，以之幕地而席天。

若乃枝密多阴，叶繁当瓦。避其间者，小雨如晴；饮其下者，凉风若洒。水晶、珠颗之号，既善形容；马乳、龙须之诗，亦工摹写。

味虽浓而不浊，性似凉而实温；多食则益气强志，久服而延年轻身。既足登筵，复堪酿酒；善醉易醒，和衷适口。孟陀持以换凉州，汉帝斟而酌王母。苟非至美存焉，斯物于人何有？

苹婆果赋

是物皆有典故可考，苹婆独无。至美难名乎？抑有其书而予未之读也？欲以空疏藏拙，虑其施以责备之词，谓我密于诸公，而独疏一婆：岂以名之近老，而遂忽其多情及容之娇且媚乎？舍苹弗赋，赋其婆焉可也。

燕有佳果，字曰苹婆；名同老嫗，实类娇娥。色先可取，无论其他：白也如黄，西子病容可拟；娇而不赤，杨妃酒面难配。物之所弃者皮，此则皮堪当肉；果之虑有者核，此则有而不多。只有液之堪吞，并无渣之可去。剖之则松难置削，如捏雪以成团；嚼之则软不胜牙，似飞花而作絮。谓有香而香不闻，觉其甜而甜不遽。备众美于一身，让其功而不与。

若是则堪称果内之佳人，而为少年所争娶者矣。奈何老其名曰“婆”，异其姓曰“苹”；降陆树而为水草，谤旭日以作斜曛者何哉？或者谓“苹”肖其洁，味亦相等；异类同呼，是犹可忍。至若“婆”之为名，迂而欠好；呼之似觉口强，听其为之兴扫。若曰始种此者为老嫗，因其婆而婆之；又曰德种此者貽佳树，爱其婆而婆之。若是，则生我者父母，知我者仇家矣。果亦何仇于老嫗，而貽以千古不美之名哉？吾请以数言慰之曰：食子者多，知子者寡。听其指鹿为獐，只当呼牛唤马。

真定梨赋

梨之佳者有五美，不则具四恶。四恶维何？曰酸，曰涩，曰有渣，曰多核；美则甜也，松也，大也，汁多而皮薄也。存五美而去四恶，其惟真定之梨乎！不可谓他处绝无，但偶然一见，不似真定之遍地皆然耳。

果之生也，亦有幸不幸焉。凡物皆以早登为幸，梨独幸于最迟，迟则可久而能致远。梨之鲜者，可达数千里外，不似荔枝、杨梅、葡萄诸果，若妇人、稚子不能去其故乡，此早熟、迟登之别，寒则可久，热则难藏故耳。使荔枝、杨梅、葡萄诸果亦熟于寒生暑退之候，则使海内千人亦见，万人亦见，奚止仅以枯形示天下，使人抱骏骨难驰之恨哉！“大器晚成”一语，移赠此君，知亦无惭而乐受矣。

梨为百果之宗，兹殿五臣之后。非依位置之失宜，怪汝荣华之太骤。秋深乃熟，既让群少以争先；暮齿方登，何遽频迁而至右？名愈屈而才愈彰，德弥谦而用弥厚。

尔乃灵关至味，玄圃奇葩。金桃媲美，火枣同夸。到处有佳梨，而入贡必需真定；世间无美种，而此本出自哀家。其大如升，其甘胜蜜。琼浆满腹而剖之不流，玉液填胸而吸之不出。才入口兮辄苏，未经嚼兮成汁。询诸喉而喉曰润，质之口而口曰可。无微不巨，孔融取小而无所用其谦；见热即消，肃宗欲烧而难以投诸火。不识字者，误认为伐脏之斧斤；稍知书者，皆识为太上之灵果。

郭璞井赋

杭为山水之乡，人文之藪，骚人逸客，欲得而家焉。但居雉堞以内者，城外之山可观，城外之水不可得而饮也。井水咸而浊，饭不得已用之，茗必取给于外。即不能泉，西湖亦茶料也。然路远而围隔，旦旦汲之，以肩作绠者，不胜其劳矣。其不咸不浊、虽井实泉者有二：一曰大井，居鼓楼之西偏；一曰郭璞井，在吴山东北，介螺蛳山、铁冶岭之中，即予新居之右臂。井较大井尤大，水更清，味亦稍别。盖大井居平地，而此在山。地有浊流沁入，山无浊流，且四面多石，石不受沁，亦无可沁也。为眼十，水给千餘家。淫雨不稍增，旱可经年不涸。其始由郭景纯至此，谓地有美泉，人始穿之，故题其上曰“郭璞圣井”。予前后居杭十餘年，皆苦于水，兹得此为邻，饮水知源，奚可不明所自？因假赋井，以颂其人。

人居杭土，如家玄圃。花善笑而柳善颦，石解歌而泉解舞。其目则甘，其口独苦。井浊兮如淤，水咸兮若卤。越城围以出汲，路更仆而难数。

赖有异人兮郭公，独开神井兮弗同。耻平穿于地上，喜高浚乎山中。不井则已，井则必求其至大；无水宁竭，水则惟恐其不洪。开十目以观天，上帝亦严于视听；敕五丁以凿地，后稷亦避其铍锋。百人齐汲而无竞，万家共饮之不穷。素绠起而十泉并流，如泻山巅之瀑；银瓶下而众声齐激，若考地下之钟。成汤七载之旱罕有，有亦不能致涸；神尧九年之水鲜遇，遇亦未见加深。

若乃深可藏蛟，明堪烛影。冬觉其温，夏利其冷。众井皆咸而此能淡，淡而不厌斯奇；诸水尽浊而彼独清，清而不要乃幸。味

不异于甘泉，气亦同乎香井。

爰稽往事，愈觉通神。饮绿珠之水，代出娇容，斯地亦饶美女；啜丹砂之泉，能增寿考，此邦岂乏遐龄？有时淘出金钱，疑其下亦通君平之宅；浣者不烦灰濯，岂此水亦藉田叔之灵？无风自波，间亦偶同于浪井；饮人可醉，疑其上应乎酒星。是皆书之不倦而述之可听者也。居其地而不赋其事，予岂寒蝉作舌而槁木为形者乎！

序

《智囊》序

人生二十一朝以后，又非三代以降之民矣。智巧幻出，机变横生，其聪明高出古人上。括天下童叟及妇人女子而试之，求一不识不知、顺帝之则者，杳不可得。有心当世者，方愚之之不暇，奚事辑《智囊》一书，开其无可复开之窍？辑之可矣，又奚事分梨别枣，益广其传，俾天下之为童、为叟、为妇人女子者，益神明其智巧，而不可方物其机变乎？笠翁曰：不然。今世所尚者诈也，非智也。智由性出，诈以习成。诈能庇身，而亦能杀身；智能善世，而其利又不止于善世。智不可无，诈不可有。苟非熟读圣经贤传，暨三代以下二十一朝之载籍，乌知后世之聪明，皆前人所谓杀身之具哉？所恶于智者，为其凿也，凿则机械变诈所由生也。

冯子犹龙之辑是编，事求其备，义取乎该，惟恐失一哲人，漏一慧语，遂不觉网罗太密、组织太工而流于凿。得朱子起而删之，理收其至当，义律以自然，凡有以察察为明、赚赚为知者，即为古人藏拙。宁使智溢于囊，毋使囊宽于智，庶几留馀地以厚古人，不使尽露囊底馀智，而反为后人所窃笑，计诚得矣！

《古今笑史》序

予友石钟朱子，卓犖魁奇，性无杂嗜，惟嗜饮酒、读书。饮中狂兴，可继七贤而八、八仙而九，书则其下酒物也。仲姜玉、季宫声，亦具饮癖而量稍杀，皆雅好读书。读之不已，又从而笔削之；笔削之不已，又从而剗削之。虑其间或有读而不快、快而不甚快者。是何异于旨酒既设，肴核杂陈，而忽有俗客冲筵、腐儒骂座，使饮兴为之中阻，不可谓非酒厄；势必扶而去之，以俟洗盏更酌。此《古今笑》之不得不删，删而不得不重谋剗削也。人谓石钟昆季于此为读书计，乌知其为饮酒计乎？

是编之辑，出于冯子犹龙。其初名为《谭概》，后人谓其网罗之事，尽属诙谐，求为正色而谈者，百不得一，名为《谭概》，而实则“笑府”，亦何浑朴其貌而艳冶其中乎！遂以《古今笑》易名，从时好也。噫，谈笑两端，固若是其异乎？吾谓谈锋一辍，笑柄不生，是谈为笑之母也。无如世之善谈者寡，喜笑者众，咸谓以我之谈，博人之笑，是我为人役，苦在我而乐在人也。试问：伶人演剧，座客观场，观场者乐乎？抑演剧者乐乎？同一书也，始名《谭概》而问者寥寥，易名《古今笑》，而雅俗并嗜，购之惟恨不早，是人情畏谈而喜笑也明矣。不投以所喜，悬之国门奚裨乎？

石钟昆季笔削既竣而问序于予，予请所以命名者，仍旧贯乎？从时尚乎？石钟曰：“予酒人也，左手持蟹螯，右手持酒杯，无暇为晋人清谈，知有笑而已矣。但冯子犹龙之辑是编，述也，非作也；予虽稍有樽节，然不敢旁赘一词，又述其所述者也。述而不作，仍古史也。试增一词，为《古今笑史》，能免蛇足之讥否乎？”予曰：“善。古不云乎：‘嘻笑怒骂，皆成文章。’是集非他，皆古今绝妙文章，但去其怒骂者而已。命曰：‘笑史’，谁曰不宜？”

《求生录》序

人有言：天不幸而为霜雪，时不幸而为秋冬，金不幸而为斧钺，官不幸而为士师。以其有杀无赦，而与好生之道左也。

今之节推，即古士师之流亚，秩虽稍平，而实为杀人之权之所自始。节推曰可杀，然后提刑者杀之；提刑曰可杀，然后督抚按杀之；督抚按曰可杀，然后司寇杀之；司寇曰可杀，然后天子杀之；是节推一官，专以杀人为事者也。而仁人为之则不然。仁人之为是官也，以杀为生者十之一，以生为杀者十之九。非故疏其网以漏吞舟，只以棘听之下，必杀之罪原少，而介在可否之间者实多也。官之自视者重，则其视人之性命不得不轻。拔一毛而利天下，为我者弗为，矧去其官乎？矧今日之为功令又不止于去官而已乎？此人命之悉为草菅耳！仁人反是，以能不有其官也；非止不有其官，且能不有其身也。苟能拚此一官、一身，凡可活民而寿国者，何事不可为？而究竟此官、此身未必果失。于是乎天下之人非止颂其仁，又且服其智矣。故天下节推一席，非岂弟君子居之不可，而文安纪子湘先生，实其选也。

先生理杭十载，因其断狱明敏，为诸上台所器重，凡十一郡难决之案悉归之。其间类多死狱，入先生之手即生。十一郡士民咸称先生有活人癖，先生曰：“予非能活人，但能不杀可以不杀之人耳。其道在求。曷言乎求？每见一大狱，辄为反覆求生。非求之上台，亦非求之上帝，求之于招详案牍之外，及两造供吐之间也。从来官审重狱，必据初招。若存一初招可据之见于中，则我为彼役，而人之性命危矣。略去初招，自为裁决。若此案之对簿自今日始者，讯得其情，始取原招相印，同者同之，异者异之。其同者，非我同人，人同我也。人我金同，杀之非失入矣。而犹复

为求之，恐我谬而人亦谬也。其异者非我有心异人，人亦无心异我，不求异而自异，殆有天焉。生之非失出矣。而犹复为求之，恐人是而我非也。大约非少是多，即为力仔。官乎，身乎，非所计矣。”

此先生未去杭时告予之言，予犹佩而未教。兹擢官淮上，余适假馆白门，因蒯《资治新书》之二集，走力索稿于先生，先生惠予数十幅，悉属平反大案。予曰：“此活人书也，不可不令孤行于世。”梓成是集，颜曰“求生”，以二字系先生得力处，故为揭出，以志苦心。至先生宦浙十年，起死人而肉白骨者，殆以千纪，此等谏语多至汗牛，蒯之将不胜蒯，是区区数十幅，不过全豹一斑，乌足以当什一之数哉！

朱梅溪先生小像题咏序 崇禎末年作

士之获交于王公，殆有天焉；李生于梅溪先生是也。先生为帝室苗裔，生于楚，仕于豫章，与婺州风马牛。使先生以显宦临吾地，冠盖森肃，李生有望尘而走耳。幸其来也以谪，李生以裨线短才，炫弄于先生之前，先生遂谬赏焉。然李生之重先生也，不以官故，以才故；先生之怜李生也，不以才故，以落拓故。两人忘形之交，自今日始。今日何日？癸未之阳九也。阳九为数之奇，先生数奇于仕，李生数奇于儒，两奇相遇，而适值斯节，诂非天乎？

是日也，先生复出小像示予。像出曾波臣手，意思闲适，有天随古处之致，而一种豪宕之气，跃动薄蹄间。昔宗少文、孙茂深两人名籍甚，时人欲与之游不得，乃命陆探微绘像，挂之壁间。然则得遇先生于尺幅者已幸，况于笑言吟和，相忘于布衣、进贤之外哉！故曰天也。

杜于皇曰：以“天”字为起结，以“奇”字为间架；措辞命意，古朴纵横。置之昌黎集中，世亦应莫能辨。

《名词选胜》序

文章者，心之花也；溯其根荄，则始于天地。天地英华之气，无时不泄。泄于物者，则为山川草木；泄于人者，则为诗赋词章。故曰：文章者，心之花也。

花之种类不一，而其盛也亦各以时，时即运也。桃李之运在春，芙蕖之运在夏，梅菊之运在秋冬。文之为运也亦然：经莫盛于上古，是上古为六经之运；史莫盛于汉，是汉为史之运；诗莫盛于唐，是唐为诗之运；曲莫盛于元，是元为曲之运。运行至斯，而斯文遂盛；为君相者特起而乘之，有若或使之者在，非能强不当盛者而使之盛也。

不知者曰：“唐以诗抡才而诗工，宋以文衡士而文胜，元以曲制举而曲精。”夫元实未尝以曲制举，是皆妄言妄听者耳。夫果如是，则三代以上未闻以作经举士，两汉之朝不见以编史制科，胡亦油然、勃然，自为兴起而莫之禁也？文运之气数验于此矣。

予为是论，盖以言乎今日之词云。自有词之体制以来，未有盛于今日者。虽曰词始于唐而盛于宋，然唐、宋之工此者，自屯田、眉山、淮海、清照、稼轩而外，指不数屈。继起而建标立极者虽不乏人，然考其姓名，总不越《花间》、《草堂》、《尊前》、《兰畹》之四集，较之历代诗人之数，不及百一，此何故哉？盖以词名“诗馀”，似必诗有馀力，而后为之；夫既诗矣，焉得复有馀力哉？不意传至于今，啸歌之外，靡事可为，才彦精灵，悉无所寄。即使未有填词一道，犹将创而为之，若屈原之于骚，相如之于赋，

东篱、实甫诸人之于杂剧，皆前此未有而自我作之；矧成法具在，作者寥寥，有不起而修废举坠、扬徽振响，以鼓一代之休明者哉！虽然，此非有科名诱之于前，夏楚督之于后，莫知其然而尽然，非运为之，谁为之乎！执此证吾言，谬乎？非谬乎？

十年以来，名稿山积，缮本川流，坊贾之捷于居奇者，欲以陶朱、猗顿之合谋，举而属诸湖上翁一人之手，噫，谬矣哉！文之盛衰，犹视乎运，岂书之传否，我得自为政乎？况当世名贤之司月旦者，莫不秉运而起，选有定本，悬之国门。予高才捷足，一无可恃，鹿死于前，而犹驰逐于后，不为先入关者笑乎？坊人固请不已，爰有是刻。名曰“选胜”，盖以诸选皆胜，而我拔其尤，是犹胜人之胜，非敢胜人之不胜也。

《诗韵》序

《笠翁诗韵》者，非取古人已定之四声，稍稍更易之而攘为己有，盖云一人自用之书，非天下公行之物也。既为一入自用之书，则手录一通，括之囊中可矣，安用灾梨祸枣，听其驰逐天下为？曰：私之一人者初心，而公诸天下，则人实使之。若水之既决，火之骤然，而有莫可如何之势也。

予初辨四声时，发尚未燥，取古今不易、天下共由之诗韵，逐字相衡，而辨其同异，觉有未尽翕然于口者。心窃疑之，而未敢致询于人；知天下古今之不谬，而予一人疑之之谬也。及取毛诗、屈骚以及秦、汉以前谐声协律诸文词，句栴字比而验之，始知非尽我一人疑之之谬，而普天之下之人之口，皆读字从今不从古之谬也。虽然，以古韵读古诗，稍有不协，即叶而就之者，以其诗之既成，不能起古人而请易，不得不求肖古人之吻以读之，非得已也。使古人至今而在，则其为声也，亦必同于今人之口。吾知

所为之诗，必尽如“关关雎鸠，在河之洲；窈窕淑女，君子好逑”数韵合一之诗，必不复作“缙兮俗兮，凄其以风；我思古人，实获我心”之诗，使人叶“风”为“乎金反”之音以就“心”矣，必不复作“鶉之奔奔，鵲之疆疆；人之无良，我以为兄”之诗，使人叶“兄”为“虚王反”之音以就“疆”矣。我既生于今时而为今人，何不学为《关雎》悦耳之诗，而必欲强效《绿衣》、《鶉奔》之为韵，以聱天下之牙而并逆其耳乎！

执此为见，《笠翁诗韵》一书，遂胎其核焉。又虑获罪于古人、贻讥于见者，取古韵之字而经纬、颠末之，但有分别，绝无去取。又取诗韵中一切便宜可行之事，应有未之见者，一创百创，悉载其中。题曰《笠翁诗韵》，所谓我行我法，不必求肖于人，而亦不求他人之肖我；即如诗文诸稿之不以集名，而标其目曰《一家言》，此物此志也。

坊人固请行世者匡朝伊夕，予莫之许，非虑获罪于古，惟恐见诤于今耳。诂意癸丑夏，予入都门，儿辈不肖，为坊人所饵，可否勿询，取而畀之；及予倦游而返，版已垂成，莫能追毁。然既经问世，不得不剖析其由，序之不已，而复有例言，皆迫于莫可如何，而求天下之亮我也。至“笠翁诗韵”四字，即谓仍其名以独书己过，不使古今人分谤可也。

《观音大士持验录》序

佛中之有观世音，犹神中之有关夫子，皆百千万亿其身，散满于天地之间，而与斯民习处者也。胡以知之？知之于乡设里举之情、家尸户祝之口。试问普天之下，自京师以及州郡，等而下之，即十室之邑、三家之村，有不设关夫子庙与观世音菩萨之庵堂寺院者乎？曰：无有。有一庶民之家，不肖其像而供奉于中堂

者乎？曰：无有。然则同一神与佛也，何所见而分别其间，独疏众而密此，尊之如父，亲之如母，朝夕事奉，若定省其亲之不辍乎？曰：此无他，以其能悯人疾苦，救人危难，又不自以为烦，而人所求辄验耳。

夫神灵、佛法之验与弗验，不必求诸事迹，但观人情向往与否。古云：医门多疾。多疾之门，即良医所居之地也。一剂弗效，人皆避之，尚肯丛集其门乎？以林林总总之病夫，丛集一人之门，则其无药弗效可知已。同一神与佛也，而关夫子及观音大士独为人所向往若此，非有所验而然乎？

有现宰官身说法者，集古往今来观音应验之事迹，剞劂告世，而索序于予。予谓征之以往，不若征之现在；考其事功，不若考其所处之境界。俗情喜附热，热则争趋，大士非古佛，乃一当今得气之时人也。持诵其咒，有如遵时王之制，读新贵之文，朝用力而暮收功，不蔡可知已。至与关夫子同日而语者，以人无征不信，止征一节而不及其他，犹曰偶然而莫终之信也，故与比衡。有诘予者曰：“果如子言，神莫验于关夫子，佛莫验于观世音，然则舍此而外，皆弗验乎？”予曰：“不然。神、佛虽众，各有任事之一人，如宰相之柄国，大将之治军。将相功高而利归于国，颂将相者，非颂将相，颂国家信用之得其人也；大士灵而佛法盛，关圣验而神道尊，皆不特有功于世，而且有功于天地神明者也。”谨述管见，而为之序。

《今又园诗集》序

丁巳春，予自白门移家家湖上。碧波千顷，环映几席，两峰、六桥，不必启户始见，日在卧榻之前伺予动定。因题一联于斋壁云：“繁冗驱人，旧业尽抛尘市里；湖山招我，全家移入画图中。”

又叹家慈在日，泛湖而乐，指岸上居民曰：“此辈何修，而获家于此！”今全家入画；而吾母不与，正切风木之悲，适天台叶先生以予告养亲，偶来湖上，投我以今又园诗刻。卒业而叹曰：“嗟乎！先生有母，翳我独无。且人皆有母而无母，先生独能始终以有其母，何其幸欤！”

夫人宦游四方，咸叹不遑将母，即或偶归，归而复出，至辜倚闾之望者，往往而是。先生令潜，满考，擢刺彬阳，皆得迎养其母。无何而请假归台，寻去台，徙镜湖之上，又获依依膝下。以视予全家入画而独少一人者，其幸不幸何似？然先生则更有不可及者：自去彬之明年，即闻滇、黔之警，凡仕于湖南而不得归者几何人？去台之旬日，闽叛复作，依草附木者揭竿而起，凡家室之免于涂毒者又几何族也？而先生皆得脱然于颠危之外，以常有其母，是岂人可易及者欤？如其恋恋一官，则此时此日，不知身在何许，家在何许，其视全家入画而独少一人者，又有幸不幸之分矣，尚能骄我以天伦之乐，而朝暮肆力于诗乎？

夫以始终奉母一节，已当附于王阳孝子之列，可传于后，而况其诗之清真高迈，掩映今古，又自有其可传者欤？因不移晷而为之序，盖借先生之幸序予之不幸耳。

《覆瓿草》序

《覆瓿草》维何？家仲石庵之诗文也。诗文而以“覆瓿”名，虽曰作者之谦词，以予视之，似奋天下人之见书弗读，辄以覆瓿，若秦一世之尽付祝融，绝无去取之可恨耳。

书之可使覆瓿者众矣。予谓未读其书，先视其人，其人碌碌无所短长，则其书可以读，可以弗读。然而不以人废言，夫子又尝言之，至其人为君子，则君子之言矣，听君子之言而“裒如充

耳”，可乎？

予家石庵，君子人也。事亲孝，事兄悌，其为吏也廉，其为友也信；至居家庭，待妻若子雍雍穆穆，又无俟言矣。其宰建德，宏猷丕著，惜以细故谪官。予作一联赠之曰：“才奇而肝胆俱奇，惯以热肠加冷士；官左而襟怀未左，偏于忙处理闲情。”识者谓此一联，可作石庵一幅小像。其人如此，其言可知。大率清真超逸，自抒情灵，不屑依傍门户；但恨其少耳。然石庵之诗文，勇于作而懈于收，往往散漫于鄞架之外，臧获辈不知，悉以委去。是他人不以覆瓿而自甘覆瓿，故病其少。若是，则“覆瓿”二字，即谓石庵自道其实也亦可。

《琴楼合稿》序

才非天下之善物也。窃怪古今人多昧此，有者矜之，无者嫉之，稍有而非绝无者，苟遇其人，又欣欣然愿慕之。是皆未考才人之遇及所享之年，嘉其一得而忘其众失，故逐逐于此，而乌知其非善物也哉。

盖才者非他，穷人、天人之具也。男子而才，求为富贵利达也难矣；妇人而才，求为得良配、居正室，免于摧残困厄，得遂其中怀也难矣。如其偶得，则不数年而夭。大率夭者其常，即偶得，亦其变也。彼摧残困厄、不获遂其所怀来者，亦乌能损彼益此？究竟同归于尽而已。予故曰才非善物，为天下古今之矜者、慕者、妒而欲杀者下一转语。使知天之予此于人也，爱憎相半；而人之受此于天也，利害适均；嫉之者无烦欲杀，造物自能杀之。为千古词场靖戈矛而弭怨谤，未必不阶于此论。

昔之才而穷、穷而且夭者，代不乏人。予为舍古援今，则观胡子文漪之细君槎云，及槎云之尊人步青，益知予言之非谬。步

青，余友也。其才若怒流之澎湃，怪石之嵌崎，又能降作古之才，攻制举敢，以取一第、縻百禄何有哉？乃才举于乡而赍志以没；其为寿几何？仅强仕之年而已。此男子有才之征也。槎云之在谢庭，素工咏絮，为诸昆季所夸许。及归文漪，才相准而貌相犹，以名士之女，复得韵士以为夫，且居正室，少媵似，己不为人嫉，而又无可嫉之人，是为妇人而百禄是道者，莫槎云若矣。乃结缡甫七载，而遽作修文女士，从尊人于白玉楼中。使其才稍劣，貌稍嫌，琴瑟之遇稍乖，则造物之相夺，恐未必若是之遽也。由是观之，才岂善物也哉！

文漪不能久并其身，而思永偕以集，因哀是书以传，珠联璧合，洵雅事哉。予情士也，向者连丧二姬，前后作《断肠诗》三十首，怒造化之不仁，嗟好物之易坏，而特为此不平之鸣。然才之可贵，自若也。惟其可贵，是以可嫉；造物且忌之，况于人乎？此平情之本论也。前言过激，寻复悔之。

制师尚书李邕园先生靖逆凯歌序

八闽之叛，始于滇、黔，是人而知之矣。抚闽之功，由于奉命督师之康亲王，亦是人而知之矣。但闽藩初叛，王师未出之先，三衢扼两浙之咽喉，两浙又为沿江诸省会之门户，三衢失守，则两浙成墟，两浙成墟，则姑苏、建康之安危，非我辈愚民之所敢知者矣，矧浙东数郡之奸民，依草附木而为不逞者，每寨动以万计？是时，江、浙二省数百万生灵，惟于先生一人是赖。使先生于闻警之日，稍迟片刻之行，则三衢、八婺非我有矣。

然先生文臣也，始行之日，人尽忧之：谓韬铃非所素习，帷幄并无一人；轻敌固足招尤，徒忠亦难济事；不加熟筹而奋然以往，无乃得失相半乎？乃先生则大不然，固文臣而深于武、忠臣

而熟于谋者也。一至西安，即披坚执锐，为士卒先；士卒虽从，犹未敢遽信为实也，谓不过张虚声以威贼，且坚麾下御侮之心耳，誓师争先，临敌不能不后矣。乃先生则又不然，贼恃火攻，炮声绵昼夜不绝，守疆诸将士从无敢近贼营十舍者，先生以单骑迹之，炮中副车数四而不及身，忠诚之所格也。自是而将士幡然改目虚声为实事矣。文臣且然，矧武士乎？制文武者且然，矧为所制者乎？原有灭贼之心者，既乐为不令之行，素无捐躯之勇者，亦摄于不怒之威。靖逆奇功，实基于此。所辖将士，无不躬冒石矢，以一当百。大小数十战，斩贼首以万计。贼自是掘濠自守，无东向之心矣。先生原欲渡河长驱，直入闽界，因闻圣天子赫怒临轩，亲誓禁旅，而受命专征者，又出多智善谋之康亲王，知一出而燎原可灭，贼者不足竿矣，遂励兵秣马以待。及王师至而贼胆愈寒，始则窥浙未能而图守，继则图守不得而请降。两浙苍生之得有今日者，上则圣天子之威灵，中则康亲王之谋略，等而下之，则邨园先生之忠而且毅，谅亦史笔之所乐书，而天下口碑之所不能泯灭者也。

杭城父老子弟闻八闽底定，谓先生指日班师，凯歌虽奏于军中，而原其所自，则出黔黎讴颂之口，以予操觚一生，稍嫔声律，而今且老矣，黄童骑竹，白叟编蒲，俟节旄旋省之日，万口同声而唱于道路之间，亦燕贺升平之乐事也。予不敢谢不敏，因序而歌之。

古云君明则臣良，虽曰美大臣之功，实为圣天子颂知人之哲耳。古之能守者二人，皆由君上之能任：萧何之于关中，寇恂之于河内是也。今之能守者亦有二臣：李邨园先生之于浙，蔡仁庵先生之于楚。非古今四大金汤，而千百年后配享无辞之名宦乎？虽野史不足流芬，亦董狐药笼中物也。

送别驾许公汉昭擢郡司马序

康熙戊午之三月，杭别驾许公汉昭擢汉阳司马。闻其地就近题补有人，将诣阙改授。濒行，杭之缙绅士庶，遮道请留不得，乃跻公堂，执兕觥而涕泣致饯。

饯毕散去，有二三父老，操口碑自始之权者，坐长林丰草间，私相谓曰：“一官有一官之品行，要必定于秩满既迁之日；盖一日未去，其改行变节与否，尚未可知也。今许公秩满而迁矣，品行已著，请就行事，而定公评，殆何如人乎？”一人曰：“公具盘根错节之才，排难解纷之力，临政有先几，入手无难事，盖能臣也。”一人曰：“公矢冰蘖之操，却苞苴之献，束装就道，行李萧然，盖廉吏也。”一人曰：“公视民如伤，字之若子，政务从宽，多劝少惩，盖仁人也。”一人曰：“公倜傥好义，宾至如归，虽宦况如水，而丝竹之声未尝去耳，盖豪士也。”如是者纷纷不一。

李子从旁窃听，皆是之，而不能不赞一词。乃侧身入座曰：“诸君之言，当则当矣，然犹有未尽者在。以予观之，乃守分安命之达者。”父老曰：“胡以见之？”李子曰：“公之莅浙也，凡十有二年，其间劳绩显庸，难更仆数。苟能自陈功伐，求注上考于各台，则一迁再迁，奚俟今日？他且勿论，即以军功纪之，自粤、闽有事以来，数百万军糈之转输，皆出公一人之手，以此云功，功莫大矣。公匪但不自满假，即各台齿及，亦止曰：分所当然。介子推不言禄，而禄亦弗及，此公之不得异擢，必待秩满而迁，迁亦止于郡司马。夫此一官者，乃其分内应有之物，非智取力图而后得之者也。非守分安命之达者，能若是乎？予谓当今之世，求才人易，求达者难。才不足为、力不能为而守分安命者，愚也，非达也。以公之才，而稍加之力，何高爵厚禄之不可得，而乃得一

分内应有之物于一十二年之后乎？且予所谓力者，非当今仕宦之难事，方今兵革未偃，需饷方殷，朝廷广开事例，在位诸臣，以捐俸助军，拾级而上者，不知凡几，是谓力也。公非不能为，不欲为也；非不欲为，知分不可越、人不可以与命争也。如其命合大贵，焉知此番诣阙，当路诸公，不体輿情入告，而膺不次之擢乎？迹是而观，公之品行为何如也？”

诸父老然予言，群然呼之曰：“达者！”予退而笔其事，即以代“渭城朝雨”之诗云。

《香草亭传奇》序

岁丁巳，自春徂冬，湖上翁善病不起，刀圭罔效，入冥疆而复出者三。因索验方于古人，取枚乘《七发》暨陈琳愈头风檄，辗转读之，疾且愈甚。古语真欺人哉！

迨戊午春，朱子修龄持镜曲化农双鲤，并所撰《香草亭》填词，索予言弁首以问世。予病中得故人书，甚喜，然操觚染翰，岂病者事乎？剖缄读之，则非书非词，乃方与药也，合《本草》一大部，锻炼成书。欲起死人而活之，先活草木金石之腐且朽者，如刘寄奴、桑寄生之属，尽使着优孟衣冠，歌舞笑啼于纸上。以活药药死人，未有不霍然起者。读未竟而病退十舍。因叹镜曲化农为异人，岂知湖上翁有填词癖，故特以酒解醒，抑无意为之，而我适逢其会耶？若是，则折股知医，操觚染翰，诚予病者事也。

从来游戏神通，尽出文人之手，或寄情草木，或托兴昆虫，无口而使之言，无知识、情欲而使之悲欢离合，总以极文情之变，而使我胸中磊块唾出殆尽而后已。然卜其可传与否，则在三事：曰情，曰文，曰有裨风教。情事不奇不传；文词不警拔不传；情文俱备，而不轨乎正道，无益于劝惩，使观者、听者哑然一笑而遂

已者，亦终不传。是词幻无情为有情，既出寻常视听之外，又在人情物理之中，奇莫奇于此矣。而词华之美，音节之谐，与予昔著《闲情偶寄》一书所论填词意义，鲜不合辙，有非“警拔”二字足以概其长者。三美俱擅，词家之能事毕矣。《香草亭》一出，《拜月》、《牡丹》二亭不忧鼎之缺一足矣。

序成而寄语化农：予病则赖子以瘳，然病根尚未拔也。病根由贫，子能再以钟离一指善其后乎？吾知镜曲化农之术，不能仁乎此矣。

《和鸣集》序

才为造物所吝，不与姿貌、禄位同其滥予，夫人而知之矣。然合天下古今计之，不特才士如林，即才媛亦复辈出，是知人有雌雄，才无牝牡，造物欲予即予之，非巾幗所能辞、须眉所能独擅也。

夫既若是，则天下古今之为夫与妇者，皆当并受于天，而无巧拙不齐之叹矣；何才其夫者，必不才其妇，才其妇者，即或偶才其夫，亦复散多聚少，不数年而兰摧玉折，不则凤寡鸾孤，求其白首和鸣者，百不得一，何造物不均若是哉！造物曰：此正所以均之也。物之多而贱者可以普施，天之雨露、地之水火菽粟是也，其艰而少者则难遍及。家授一人，户施点泽，犹虑不足，焉得人人而济之？见有夜光之珠，室悬数颗，公孤之爵，家畀二人者哉？不肯私予一家，正欲公诸天下耳，此男妇之巧拙，数所不能齐也。

吾独于钱子照五、冯媛又令之为夫妇，窃有异焉。照五才于外，又令才于内，有咏必和，无唱不随，且以两人之诗合为一帙，题曰《和鸣集》，而问序于予，不几夜光合照，公孤媿荣，而与予

所持之前说大相背谬乎哉？曰：是又有说焉：照五、又令之为夫妇，德偶也，非仅才偶也。才者难并之称，德者有邻之物。“德不孤”之鲁论，岂特为朋友言之哉？老莱之妻，梁鸿之妇，皆德邻也。武林同人之称照五，与名媛闺秀之美又令，皆先其德而后其才，以才其绪餘耳。然则造物者即刻于千古而欲孤其才，又安得不恕于一朝而忍孤其德乎？此钱、冯二人之可保无虞，而《和鸣》一集之堪垂不朽也。是为序。

《笠翁别集》弁言

子與氏曰：“尽信《书》，则不如无《书》。”旨哉斯言！是书之不可信也，三代已然，矧秦汉以后者乎？窃怪今人读书与听言者，人与之言极可信者亦疑之；读古人书，听人论古事，有迹涉荒唐、情背谬于义理、不能取信于五尺之童者，而老生宿儒，皆推心置腹，信之不已。予独谓二十一史，大半皆传疑之书也。

子與氏又曰：“吾于《武成》，取二三策而已矣。”《武成》犹然，则吾党读书，欲求二三策可信者于《武成》之后，其可得乎？奈何世人尽为汗竹所欺，令子與氏窃笑地下。

信史犹可言也，其信论史之人，犹过于信作史者。论史者谁？宋儒是矣。彼以为是，群然许之；彼以为非，设有稍加恕词者，则群起而攻其谬矣。是何以故？盖宋儒非他，皆工于信史者也。彼信而我信之，犹矮人笑长人之笑，长人又笑场上之笑耳，乌知信以传信者之为讹以传讹乎？凡此皆读书太繁，书为祟于腹中，而聪明反为所障；犹人伤食而反恶食，甘苦咸淡，自莫能辨，反不若枵腹者之善尝五味也。

腹内无一卷书，而能料古人之成败、识已事之是非者，石勒之论《汉书》是已。予少也贫，无书可读，即借人书读。读过辄

忘，不能强记一字。然当其读时，偏喜予夺前人，曲直往事；其所论议，大约合于宋人者少，而相为犄角者众。向为坊人固请行世，已刊《笠翁论古》一书，簸糠秕于世者久矣。兹择其可充米屑者，约略数卷，载入集中。观者至此，亦如听石勒论《汉书》，壮其胆，佳其知识，则可也。若谓腹中有书，洞彻千古，而后能为是论，则冤哉古人，实未尝在此子腹中宿一夜而留半刻也。

时康熙戊午立秋日，湖上李渔自序。

《一家言》释义 即自序

《一家言》维何？余生平所为诗文及杂著也。近代名人著述皆以集名，乃余独异其辞者维何？曰：凡余所为诗文杂著，未经绳墨，不中体裁，上不取法于古，中不求肖于今，下不覬传于后，不过自为一家，云所欲云而止。如候虫宵犬，有触即鸣，非有摹仿、希冀于其中也。摹仿则必求工，希冀之念一生，势必千妍万态，以求免于拙；窃虑工多拙少之后，尽丧其为我矣。虫之惊秋，犬之遇警，斯何时也，而能择声以发乎？如能择声以发，则可不吠不鸣矣。

然是说也，止可释余《一家言》，不可以之概天下。凡诗文之不能求肖于人者，必其天之不足，而气力、学识均有以限之也。天人既足，我欲仁，斯仁至矣。有力能鞭策古今，而古今不为我用者乎？我肖古今，古今亦尽谓肖我，是同文之书，家弦户诵之文，传于后也必矣，“一家”云乎哉！

时康熙壬子年仲秋之七日，湖上笠翁李渔自述。

《千古奇闻》序

“千古来忠孝节义，奇奇怪怪之事，尽从须眉男子做出。”世人但知千古来忠孝节义，奇奇怪怪之事，尽从须眉男子做出，遂将巾幗中淑人懿行略而勿讲，诎非天壤间一大缺陷事哉！不知天之生人，男女虽殊，识力才猷，秉彝好德，实无殊也。幸而为男子，多读诗书，克饶经济，文章勋业，朗如日星；不幸而为妇人，律以阃范，限以女箴，无由展其才智，声震寰区，亦已苦矣。然遇盘根错节，其愚忠愚孝间，有男子所不能者，妇人往往能之，宁可以巾幗者流，略而勿讲耶？予课儿之暇，即以课女。偶得陈百峰所辑《女史》，删其繁冗，补其缺略，命小女辈日夕记诵，俾知古今名媛，为圣为贤，为慷慨节烈，从容中道者如此其多，以广其识。小女淑昭、淑慧不欲自秘，促予一言为序，梓以行世，以为香闺仪范，是亦闺阁中不私枕秘之遗意也。

时康熙己未仲冬朔湖上笠翁李渔题于吴山之层园

《古今史略》序

史体尚详乎？曰：弗尚也。详则寡精义，丰溢辞，说铃书肆而已矣。故班详于马而逊于马，陈、范详于班而远逊于班。厥后浮夸繁冗，一事数百其言，读者茫然，得失端委莫之镜，不终篇而厌倦欠伸从焉。顾安得良史才鉏冗浮而毋匿其采，衷详略以归至当乎？夫略亦难言矣，有宜焉，有称焉。识不足衡重轻、准是非、别端绪者，不知略；学未始窥三仓、历“四部”者，不敢略；力未能辨体割爱工剪裁者，不善略。余匪其人而有其志，尝日进

古今纪载数十种陈于前，澄其神而读之，汰繁芟冗，取其精而有当者，笔为书，命曰“史略”。然略于古不敢略于今，而尤不敢略于熹、怀二庙。盖以历代有史而明无史，怀帝以前，尚有《通纪》可考，而熹庙以后，遂无书可读故也。略所有而详所无，倘亦于见闻有裨邪。凡今之人，有欲考古鉴今而苦厌倦者，请以此药之。矧行笥出入，簪屐与俱，莫此为便，眠徒汗牛马、果鼠蠹者，不殆径庭乎？此所以公之同好也。

顺治己亥立冬日 湖上笠翁自题

《资治新书》自题词

首遵功令，专辑理学政治之书。是集也，以学术为治术，使理学、政治合为一编，又皆名宦新稿，不收一字陈言。至于区别论次之间，亦尝稍献刍蕘，略资采掇，未审有裨官常之万一否？请质之当事诸公，幸垂明教。

后学李渔谨识

《香草吟传奇》序

岁丁巳，自春徂冬，湖上翁善病不起，刀圭罔效，入冥界而复出者三，因索验方于古人，取枚乘《七发》暨陈琳檄辄转读之，疾且愈甚，古语真欺人哉！

迨戊午春，朱子修龄持若耶野老双鲤并所撰《香草吟》填词，索予言弁首以问世。予病中得故人书甚喜，然操觚染翰，岂病者事乎！剖缄读之，则非书非词，乃方与药也。合《本草》一部，熔炼成书，欲起死人而活之，先以金石草木之腐且朽者，幻之使活，

尽着优孟衣冠，歌舞笑啼于纸上。以活药药垂死之人，未有不霍然起者。读未竟而病退十舍，因叹若耶野老为异人，岂知湖上翁有填词癖，故用以酒解醒之法，仍以填词药之乎？抑无意为之，而我适逢其会，若世俗所谓病退遇良医者乎？若是则折肱知医，操觚染翰，诚予病者事也。

从来游戏神通，尽出文人之手，或寄情于草木，或托兴于昆虫，无口而使之言，无知识情谊而使之悲欢离合，总以极文情之变，而使我胸中磊块唾出殆尽而后已。然卜其可传与否，则在三事：曰情，曰文，曰有裨风教。情事不奇不传；文词不警拔不传；情文俱备而不轨于正道、无益于劝惩，使观者听者哑然一笑而遂已者，亦终不传。是词幻无情为有情，既出寻常视听之外，又在人情物理之中，奇莫奇于此矣。而词章之尽善，音节之和谐，与予昔著《闲情偶寄》一书，所论填词意义，鲜不合辙，有非“警拔”二字足以概其能者。至于自颠至末，无一语一字不以棒喝为心，即其由医起见，借药命名，大旨若斯，其余皆可不言而喻。三美克擅，词家之能事毕矣。继元明诸大剧而传，奚俟被管弦授梨枣以后而知之哉！

湖上笠翁题于也宜楼

词韵例言

诗韵严，曲韵宽，词韵介乎宽严之间，此一定之理也。窃怪宋人作词，竟有全用“十灰”一韵，以梅、回、陪、催等字，与开、来、栽、才等字同押者，此失于遇严而不可取法者也。夫一词既有一词之名，如《小桃红》《千秋岁》、《好事近》、《风入松》之类，明明是一曲体，作之原使人歌，非使人读也。曾见从来歌者，有以“梅”字唱作“埋”音，“回”字唱作“槐”音者乎？若

无词韵一书作准绳，则泥古之士，必为前人所误，得词之名而失其实矣。今人作词，无所取法，又有以《中原音韵》为式者，至入声字与平上去同押，是又失于太宽。因无绳墨，无可奈何而为之，非得已也。总之，诗体肇于《三百篇》，乃上古之文也。上古之文，其音务合古人之口，词则始于唐宋，乃后世之文也。后世之文，其韵务谐后世之音。二语洞然，可息纷腾之议。是集操纵得宜，宽严有度，务使严不似诗，而宽不类曲，词之面目，已全现乎声韵中矣。

诗韵之必不可通于词韵者，不止梅、回等字。如“四纸”之士、氏、仕，“七虞”之巨、炬、拒、宁、苧、伫，“十贿”之待、怠、殆，“七阳”之象、像、丈，皆作上声，诗体则然，词则万无是理，此周德清之不收入上而入去也。迩来词韵，都仍旧贯，总之移来易去，其于休文诗韵，只能动其皮毛，不敢伤其筋骨。此因才胜于胆，胆为才制而然。予则才细如丝，胆大于斗，故敢纵意为之。知我罪我，悉听于人，有延颈待诛而已。

迩来词韵，虽使一东、二冬、三江、七阳、四支、五微、八齐、十灰之半之类，合而通用，然终不敢移其位次，仍照诗韵一东居前，二冬居后，即其间有同是一音，而原分数处者，亦复仍之。是欲令诗词二韵，虽合仍分，以作词韵可，以作诗韵亦可，一书备二事之用，可称极使。予谓词则词，而诗则诗，即名词韵，胡复云诗？且作词之法，务求声韵铿锵，宫商迭奏，始见其妙。所以周德清之作《中原音韵》，凡声同韵合之字，各以类从，使作者首句用此字，次句必另换一音，不至于首用东而次用冬，前用江而后用姜，上下合辙，使读者粘牙腻齿。故是编纯用类从之法，然此法不始于德清，自唐礼部颁韵，即有以声为类，以类为序之格，古之人先已行之矣。

词韵非止向无成书，且未有言及此者。自沈子去矜，殚心斯道，与予友毛子稚黄，朝夕辩论，穷幽极渺。沈子撰有《韵略》一

篇，毛子著有《词韵括略》及《韵学通指》诸书，词学始得昌明于世。然皆附于诗文诸刻之中，并无专刻，是以见者寥寥。迨赵子千门，始刻《词韵便遵》一书，合两家论议而成之，但其编辑之法，仍不离休文诗韵，未能变通作者之意，是可惜耳。

支思一韵，《中原》病其太严，平声不满百字；去矜《词韵》病其太宽，平声几至千馀字，盖合微、齐、灰通用故也。予谓即“四支”一韵之中，具有三音，似同而异，支、垂、奇是也。向编辑诗韵，已建分而不分之末议，虽分经界，区别为三，仍还其名为四支上、四支中、四支下。今亦仍用斯法，分支字韵为支、纸、寘，围、委、未、奇、起、气三韵，仍注其下曰此与某某原属一韵，分合由人。鱼字韵亦然。欲其纯而又纯者，则效愚人之一得，不则旧章俱在，予未尝毁而灭之也。

声韵之杂，未有过于入声者，如“六月”之中，有伐、秣、没、骨等字，“七曷”之中有拈、辣等字之类，在诗韵内已觉聱牙，矧词之专以齿颊为利者乎？去矜只分五韵，予则浮出其三，他韵可以变通，此则似难更易也。

韵书之设，所以便查。泛舟登山，携此作佩，莫妙于简便，莫不妙于繁冗无归而混人耳目。予向怪诗韵中字数之繁，各韵所收之字，可用者不过十之四五，而断断不用，既为前人所收，后人兢兢守之，不敢去者，几及半焉。使人觅句时少，选韵时多，故辑《诗韵》，仿朱夫子集注之法，以圈隔之，海内名贤，无不称快。今辑词韵，其法又进于此。书画二格，分为上下两层，下为正格，上为副格。凡一切冷僻怪诞及庸俗粗鄙之字，断断不可入词者，尽入副格。即有字极平易，亦复典雅，但可见于词中，不可用之句尾者，如逡巡之逡，徘徊之徘，崆峒之崆，蝴蝶之蝴，琵琶之琵诸常字，无刻不见于词中，千万年未施于韵脚，载之何为，亦入副格。为作者扫空烟雾，唯见太虚，词家乐事，恐未有遇于此者。

湖上笠翁自述

《宋稗》序

金沙潘子大生前年有《读史津逮》之刻，余既僭为之序矣。一日者，其弟长吉手一编示予，曰：“此予所辑有宋一代人物掌故，名为《宋稗》者也。”予受而读之，大约探未见之书，聚可喜之事，事以类分，类复年次；大者干城名教，精者裨益身心，微者、浅者亦可以增扩见闻，资助喁喁，诚有令人爱玩而忘倦者。《宋史》庸秽芜冗，极为不堪，有明巨公如归震川、汤临川诸先生皆有志更定，而未见成书，学者憾焉。今得长吉此编，如饥年嘉谷，属厌饱满，学者亦何幸乎！予因语长吉：“礼义悦心，刍豢悦口，生人之所同然。而君秘之枕中，犹香积、天厨之富而一人独饫之也。仁者固如是耶？”长吉曰：“公之同好，吾志也。子其为我一言识之。”

抑予闻大生更有《明稗》一书，诚得好事者并行之，如车之两轮，人之联璧，不更快人意哉。后之有事于宋、明两代之史者，必将取材于二编也。故书以俟之。

康熙己酉清和月上浣，湖上李渔笠翁撰。

《芥子园画传》序

今人爱真山水，与画山水无异也。当其屏幛列前，帧册盈几，面彼峥嵘遐旷，峰翠欲流，泉声若答，时而烟云掩霭，时而景物清和，宛然置身于一丘一壑之间，不必蜡屐扶筇，而已有登临之乐。独是观人画，犹不若其自能画。人画之妙从外入，自画之妙由心出，其所契于山水之浅深，必有间矣。

余生平爱山水，但能观人画而不能自为画。间尝舟车所至，不乏摩诘、长康之流，降心问道，多蹙额曰：“此道可以意会，难以形传。”予甚为不解。今一病经年，不能出游，坐卧斗室，屏绝人事。犹幸湖山在我几席，寝食披对，颇得卧游之乐。自署一联云：“尽收城郭为檐下，全贮湖山在目中。”独恨不能为之写照，以当枚乘《七发》。因语家倩因伯曰：“绘图一事，相传久矣。奈何人物、翎毛、花卉诸品皆有写生佳谱，至山水一途，独泯泯无传？岂画山水之法，洵可意会，不可形传耶？抑画家自秘其传，不以公世耶？”因伯遂出一册，谓予曰：“是先世所遗，相传已久。”予见而奇之，细为玩赏，委曲详尽，无体不备，如出数十人之手。其行间标释书法，多似吾家长蘅手笔。及览末幅，得“李氏家藏”及“流芳”印记，益信为长蘅旧物云。但此系家藏秘本，随意点染，未有伦次，难以启示后学耳。因伯又出一帙，笑谓曰：“向居金陵芥子园时，已嘱王安节增辑编次久矣，迄今三易寒暑，始获竣事。”予急把玩，不禁击节，有观止之叹。计此图原帙凡四十三页，若为分枝，若为点叶，若为峦头，若为水口，与夫坡石、桥道、宫室、舟车，琐细要法，无不毕具。安节于读书之暇，分类仿摹，补其不逮，广为百三十三页。更为上穷历代，近辑名流，汇诸家所长，得全图四十页，为初学宗式。其间用墨先后、渲染浓淡、配合远近之法，莫不较若列眉。依其法以成画，则向之贮目中者，今可出之腕下矣。有是不可磨灭之奇书，而不以公世，岂非天地间一大缺憾事哉！急命付梓，俾世之爱真山水者皆有画山水之乐，不必居画师之名，而已得虎头之实，所谓“咫尺应须论万里”者，其为卧游，不亦远乎！

时康熙十有八年岁次己未长夏后三日，湖上笠翁李渔题于吴山之层园。

《三国志演义》序

尝闻吴郡冯子犹赏称宇内四大奇书，曰《三国》、《水浒》、《西游》及《金瓶梅》四种。余亦喜其赏称为近是。然《水浒》文藻虽佳，于世道无所关系，且庸陋之夫读之，不知作者密隐鉴诫深意，多以是为果有其事，借口效尤，兴起邪思，致坏心术，是奇而有害于人者也。《西游》辞句虽达，第凿空捏造，人皆知其诞而不经，诡怪幻妄，是奇而灭没圣贤为治之心者也。若夫《金瓶梅》，不过讥刺豪华淫侈，兴败无常，差足澹人情欲，资人谈柄已耳，何足多读。至于《三国》一书，因陈寿一《志》，扩而为传，仿佛左氏之传麒麟，其白汉灵辄宠中涓，十常侍党同专政擅权，蒙蔽主聪，苛敛恣横，流毒缙绅，其时老成忠直之士，委伏畎亩；继之献帝为董卓废立，以致群雄并起，四海鼎沸，刘先主胸怀大志，崛起涿鹿，与关、张结义，遍历图功，百折不回，思伸其志；卒之元直走荐伏龙，南阳获偕鱼水，隆中决策，鼎立西川，以成王业。传中所载孙策父子之豪，二袁父子之暗，刘表父子之愚，曹瞒父子之诈，先主之艰窘，孔明之忠贞，关、张之信义，子龙之胆略，以及蜀、吴、魏人材之盛，智勇之多。司马昭篡禅大位，与曹丕之篡禅，如出一辙，可知天理之循环。诸葛瞻绵竹死节，与孔明大营殒星，父子殉身，具见忠贤之遗裔。汉末以宦竖而始祸，蜀末亦以宦竖而终祸。首尾映带，叙述精详。贯穿联络，缕析条分。事有吻合而不雷同，指归据实而非臆造。盖先主起而王蜀，为气数闰运之奇局；而群雄附而争乱，又为闰运中变幻之奇局。较前此三代及秦之末，及后此唐、宋之末，扰攘移鼎之局，迥乎不同。而演此传者，又与前后演列国、七国、十六国、南北朝、东西魏、前后梁各传之手笔，亦大相径庭。传中模写人物情事，神

彩陆离，了若指掌。且行文如九曲黄河，一泻直下。起结虽有不齐，而章法居然井秩。凡若《史记》之列本纪、世家、列传，各成段落者不侔。是所谓奇才奇文也。

余于声山所评传首，已僭为之序矣。复忆曩者圣叹拟欲评定史迁《史记》为第一才子书，既而不果。余兹阅评是传之文，华而不凿，直而不俚，溢而不匱，章而不繁，诚哉第一才子书也。因再梓以公诸好古者。是为序。

湖上笠翁李渔题于吴山之层园

《三国演义》序

昔弇州先生有宇宙四大奇书之目，曰《史记》也，《南华》也，《水浒》与《西厢》也。冯犹龙亦有四大奇书之目，曰《三国》也，《水浒》也，《西游》与《金瓶梅》也。两人之论各异。愚谓书之奇当从其类，《水浒》在小说家，与经史不类，《西厢》系词曲，与小说又不类。今将从其类以配其奇，则冯说为近是。然野史类多凿空，易于逞长，若《三国演义》则据实指陈，非属臆造，堪与经史相表里。由是观之，奇又莫奇于《三国》矣。

或曰：凡自周秦而上，汉唐而下，依史以演义者，无不于《三国》相仿，何独奇乎《三国》？曰：三国者乃古今争天下之一大奇局，而演三国者，又古今为小说之一大奇手也。异代之争天下，其事较平，取其事以为传，其手又较庸，故迴不得与《三国》并也。吾尝览三国争天下之局，而叹天运之变化，真有所莫测也。当汉献失柄，董卓擅权，群雄并起，四海沸鼎，使刘皇叔早偕鱼水之欢，先得荆襄之地，长驱河北，传檄淮南，江东秦雍，以次略定，则仍一光武中兴之局，而不见天运之善变也。惟卓不遂其篡以诛死，曹操又得挟天子以令诸侯，名位虽虚，正朔未改，

皇叔宛转避难，不得蚤建大义于天下，而大江南北已为吴、魏之所攘，独留西南一隅为刘氏托足之地，然不得孔明出而东助赤壁一战，西为汉中一摧，则梁益亦几折而入于曹，而吴亦不能独立，则又成一王莽篡汉之局，而天运犹不见其善变也。逮于华容遁去，鸡肋归来，鼎足而居，权侔力敌，而三分之势遂成。寻彼曹操一生，罪恶贯盈，神人共怒，檄之，骂之，刺之，药之，烧之，劫之，割须折齿，堕马落玺，濒死者数而卒免于死，为敌者众而为辅亦众，此又天下之若有意以成三分而故留此奸雄以为汉之螫贼；且天生瑜以为亮对，又生懿以继曹后，似皆恐鼎足之中折，而叠出其人才以相持也。自古割据者有矣，分王者有矣，为十二国，为七国，为十六国，为南北朝，为东西魏，为前后梁，其间乍得乍失，或亡或存，远或不能一纪，近或不逾岁月，从未有六十年中，兴则俱兴，灭则俱灭，如三国争天下之局之奇者也。

然三国之局固奇，而非得奇手以传之，则其奇亦不著于天下后世之耳目。前此虽有陈寿一《志》，较之荀勖、裴颢魏晋诸《纪》，差为此，善于彼，而质以文掩，事以意晦，而又爱憎自私，去取失实，览者终为郁抑而不快，则又未有如《演义》一书之奇，足以使学士读之而快，委巷不学之人读之而亦快，英雄豪杰读之而快，凡夫俗子读之而亦快，拊髀扼腕有志乘时者读之而快，据梧面壁无情用世者读之而亦快也。

昔者蒯通之说韩信，已有鼎足三分之说，其时信已臣汉，义不可背。项羽粗暴无谋，有一范增而不能用，势不得不一统于群策群力之汉。三分之几，虚兆于汉室方兴之时，而卒成于汉室衰微之际。且高祖以王汉兴，而先主以王汉亡，一能还定三秦，一不能取中原尺寸。若彼苍之造汉，以如是起，以如是止，蚤有其成局于冥冥之中，遂致当世之人之事，才谋各别，境界殊殊，以迥异于千古，此非天事之最奇者欤！

作演义者，以文章之奇而传其事之奇，而且无所事于穿凿，第

贯穿其事实，错综其始末，而已无不奇，此又人事之未经见者也。

独是事奇矣，书奇矣，而无有人焉起而评之，即或有之，而使心非锦心，口非绣口，不能一代古人传其胸臆，则是书亦终与周秦而上汉唐而下诸演义等，人亦乌乎知其奇而信其奇哉！《水浒》之奇，圣叹尝批之矣，而《三国》之评，独未之及。予尝欲探索其奇以正诸世，乃酬应日烦，又多出游少暇，年来欲践其志，会病未果。适予婿沈因伯归自金陵，出声山所评书示予。观其笔墨之快，心思之灵，堪与圣叹《水浒》相颉颃，极铄心抉髓之谈，而更无靡漫沓拖之病，则又似过之，因称快者再。因伯索序，声山既已先我而评矣，而予又为之序，不亦赘乎？

虽然，予历观三国之局，见天之始之终之，所以造其奇者如此；读《三国演义》又能贯穿其事实，错综其始末，而已匠心独运，无之不奇如此；今声山又布其锦心，出其绣口，条分句析，揭造物之秘藏，宣古人之义蕴，开卷井井，实获我心，且使读是书者知第一奇书之目，果在《三国》也。因以证予说之不谬，则又何以无言！是为序。

康熙岁次己未十有二月，李渔笠翁氏题于吴山之层园。

《耐歌词》自序

今日之世界，非十年前之世界；十年前之世界，又非二十年前之世界。如三月之花，九秋之蟹，今美于昨，明日复胜于今矣。于何见之？曰：见于文人之好尚。三十年以前，读书力学之士，皆殚心制举业，作诗赋古文词者，每州郡不过一二家，多则数人而止矣；馀尽埋头八股，为干禄计。是当日之世界，帖括时文之世界也。此后则诗教大行，家诵三唐，人工四始，凡士有不能诗者，辄为通才所鄙。是帖括时文之世界，变而为诗赋古文之世界矣。然

究竟登高作赋者少，即按谱填词者亦未数见，大率皆诗人耳。乃今十年以来，因诗人太繁，不觉其贵，好胜之家，又不重诗而重诗之余矣。一唱百和，未几成风。无论一切诗人皆变词客，即闺人稚子、估客村农，凡能读数卷书、识里巷歌谣之体者，尽解作长短句。更有不识词为何物，信口成腔，若牛背儿童之笛，乃自词家听之，尽为格调所有，岂非文字中一咄咄事哉？人谓诗变为词，愈趋愈下，反以春花秋蟹为喻，无乃失其伦乎？予曰不然，此古学将兴之兆也。歌言之？词必假道于诗，作诗不填词者有之，未有词不先诗者也。是诗之一道，不求盛而自盛者矣。且焉知十年以后之词人，不更多于十年以前之诗人乎？往事可观，必有以少为贵者矣。四声八韵，视为已陈之刍狗，必不专尚；所未专尚者，惟古文词一道耳，何虑汉之班、马，唐之韩、柳，宋之欧、苏，不复见于来日乎？予故曰古学将兴之兆也。

今天下词人树帜，选本实繁，予既应坊人之求，有《名词选胜》一书梓以问世，不日成之矣。乃坊人又谓：近日词家，各有专集，莫不纸贵鸡林。子为当今柳七，曲弊歌儿之口，书饱文人之腹，所未公天下者，惟《花间》、《草堂》一派耳。盍倾囊授我，使得悬诸国门？予谓从前浪播，特瓦缶雷鸣耳。洪钟既出，焉用上鼓为哉？坊人坚索不已，遂不获终藏予拙。既受而询其名，予谓是书无他能事，惟一长可取，因填词一道，童而习之，不求悦目，止期便口，以“耐歌”二字目之可乎？所耐惟歌，馀皆不耐可知矣。昔郭功父自诵其诗，声震左右，既罢，问东坡曰：“有几分来地？”东坡曰：“七分来是读，三分来是诗。”予词之耐歌，犹功父之诗之便读，然恐质诸东坡，权其分两，犹谓七分则有馀，三分尚未足，又将奈何！

时康熙戊午中秋前十日。湖上笠翁李渔漫题。

寿序

两浙抚军陈司贞先生寿序刘粮宪属草，用冢宰次辰黄公銜。公生于五月十三，与关夫子同日。

大中丞建牙于外，与宰相端揆于内，其操国家枢轴均也。令下而山岳动，政行而世俗移，致君泽民之得自行其志，使吾肘不掣于他人者，莫两臣若矣。然使寰宇承平，相天下者居重驭轻，事事扼其要领，开府于外者威令虽严，终不得媲尊于内。一当烽腾燧举，疆场有事之秋，庙堂隔于千里，悬揣无由，机务决于一时，瞻顾不得，虽有尧舜汤武之君，伊周房杜之相，不得不以外事付之外臣，听其操纵予夺，则此际之大中丞，其任其权，较平时之宰相为尤重。得其人，则危者安，难者易，变苦境为乐郊，使凡民之鸟兽散者，复若蜂屯蚁集而来聚，斯何人哉？若吾浙新奉简命抚绥此邦之陈公是已。

公非遽抚吾浙者也。朝廷重视此任，而未肯骤予，先试之以岳牧。其屏藩之力，保障之猷，难更仆数。是时滇、黔倡逆，闽叛效尤，东南诸省会在在戒严，而吾浙尚为无事之地，然无奈池鱼林木之受殃，无事之甚于有事也。戎马于是乎经，刍粮于是乎出，舟车之假，力役之征，无不于是乎取给。当斯时也，即以数十年前家给人足之两浙，犹难胜此重困，矧在三空四匮、民脂告竭之际乎？

公未入浙之先，在位诸下僚，有束手攒眉、免冠求去而不得者，自公至止，政无大小，事无难易，勿论是藩务、非藩务，一

切引为己任，凡有告者，即曰：“有我在，无忧也。”于是弗缓弗遽，或行或止，劳其心而不必尽劳其身，有时忘寝废饫，而人莫知其苦，翻若有悠然自得之容者，总归于政行事举，军饱民安，万无一失而止。维时亲王暨诸大臣提禁旅而出者，皆驻师于浙，耳而目之，无不敏其才而懋其功，遂交章累词以上之。先是，輦下诸大僚得之道路之口者，靡不入告，以宽圣天子南顾之忧；至是内外同声，遂不觉大霁天颜而谓臣下曰：“是诚可以抚浙者矣；是诚可以抚浙，而使反侧未安之子闻所闻而来，不但抚浙而兼可抚浙之外矣。其亟以斯任畀之！”此公抚浙之由，而吾浙人民得其所天之所自也。

公藩浙时，原未尝稍设藩篱，画政自守，先奋全力以图治，矧在大任既归之后乎？向所欲行而未行者，今悉行之，与向虽行之而未畅，若草木始萌，待雨露于天而后华且实者，今则自为雨露而无所俟于天矣。由困极而小康，由小康而大治，公其始终造浙者哉！有以“神明”颂公者曰：“明生于公，无幽弗烛。自公居高，始无冤狱。”有以“岂弟”颂公者曰：“尊而忘尊，以抚为字。乳而育之，视民若稚。”有以“果断”颂公者曰：“利器居先，霹雳在手。盘根错节，于公何有？”有以“缜密”颂公者曰：“智深勇沉，心细于发。其外可师，其中难法。”如是者不一辞，皆载道之碑，未镌之石而先铭之口者。

乙卯天中后八日，值公览揆之辰。予自请告家居，与诸父老扶杖而观盛治者，最欢且洽。正拟前致一词，效华封人之祝，适三事大夫之欲觴公者征言于予，予遂不辞谫劣而述其梗概若此。

是日也，跻彼公堂、酌彼兕觥者虽不乏人，然皆佩玉鸣鸾之有爵者，不则辅世长民之有德者，不则黄耇台背之有年者，其馀黄童赤子，耕农织妇，齿幼分卑，不得与达尊之列者，皆具斗酒豚肩，诣汉寿亭侯之庙而致祝焉。以公与汉寿亭侯并日生，有千载上下同庚之义，汉寿亭侯之为神，扶正抑邪，不遗余力，鉴公

若此，未有不冈陵其筭而松柏其身者，故以祝彼者祝此。噫，迹公所生之辰，先与凡民异矣，安得不撑天拄地而为当代伟人者哉！

代寿凤关樞使譚慎伯序 时公按部在途。

祝士大夫之寿，与祝林居家食者异；祝奉使按部诸士大夫之寿，又与祝居所不迁、坐受百僚之燕贺者异。何也？林居家食之人，以清静为福者也，故祝其有年，必先祝其无事；祝士大夫者反此，祝其多寿，必先祝其有为，有为而后可以致君，可以泽民，致君泽民，而福仍归己，可致遐年，故祝寿必先祝其所以致此者。若夫居所不迁之士大夫，虽曰有为，犹是劳其心而逸其身，未必栉霜沐露，东西其轍。每及览揆之辰，端居堂庑，百执事罗拜于下，进万年之觴，奏九成之舞，衍然乐也。其为颂祷之词，可以有，可以弗有，为其安也；安自致福，祝之何为？至于奉使按部之士大夫，非迫于王事之靡盬，即凜于简书之可畏，且课程无餘日，奏绩有定期，常有称觴之日，驰驱道路，不及受斯民羔酒之献者。凡与同事一方之大吏，及文武属僚，及缙绅父老，当时也，既不获跻彼公堂，效华封人之面祝，惟有以口代兕觥，遥相称献，祝其所至承禧，身在冈陵，则与冈陵比峻，身临川阜，则与川阜竞长而已矣。故凡颂祷之词之不容已者，惟奉使按部之士大夫，又必于其称觴之日，驰驱道路，不及受斯民羔酒之献者。若我慎翁譚公今日之初度，可谓适当其会矣。

公曩以治新蔡奏最，擢西台主政，平反冤狱甚多；兹奉新简，来视凤樞，他樞惟课商税，钱谷非其所掌，此则总理仓储，军民尽辖。公有兼人之才，适仔兼人之任，人地相宜，莫宜于此。乃下车未几，即脂白门、皖上之车，勤王事也。时去公诞日不满二旬，有卧公轍下，请缓其期，以俟觴毕而后去者，公莫之许，谓

不见夏禹之治水乎？三过门而不入，岁时伏腊且不有，何有于生辰？迨公行后，诸缙绅士民谓公虽出而祝颂之期自在，不妨遥瞻紫气，先致愿祷之私，再俟旌节既临，补申三祝，未为晚也。因走使乞言于予，以予叨附年谊，公牧新蔡时，既与予治接壤，今予家食，又与化境相邻，取其近而易致，亦复知而善详也。

公为文安鼎族，先世叠有闻人，尊公九还先生以名孝廉分符，为浦江邑宰，遂以治行世其家。昭代取士之文，莫盛于壬辰一闾，而公以是年举进士，名较同榜诸人尤噪焉。及仕中州，才宽于地，游刃之下，恢乎有馀，凡其所为诸善政，一秉于尊公之治浦阳者，而清白之风，尤足继之。及内擢立朝，复铮铮有声，秩经两迁而不离其地，秋曹治绩无有出公右者。今出理是樞，适当军兴旁午，戎马需粮、司农望赋俱甚渴，公才非此不展。试观莅事之初，条理井井，既不困军，又不病民，而国赋刍粮自足；由此飞挽军前，捆轴内帑，纾我皇上南顾之忧者，舍公其谁属哉？一日九迁，跼足可待，非寻常卿贰之位所能限其功名者也。请以区区祝嘏之词，悬为左券。

寿张俊升臬宪序 代

有访延年之术于佛、老二氏者，老氏之徒曰：“清净无为，寿之本也。”佛氏之徒曰：“慈悲好善，寿之源也。”二说互异，其人取决于儒者，儒者曰：“皆是也。不闻孔子之言乎：‘知者动，仁者静；知者乐，仁者寿。’清净无为，非静而何？慈悲好善，非仁而何？殊途同归，三教宁有异致哉。”若是，则“仁者寿”一语，已尽千古养生之秘，愚者不察，动舍中庸而趋隐怪，于是导引、丹汞之说，充塞凡民之耳矣，乌知仁者获寿，理所必然？但人生于世而求为仁者，亦难矣哉。至为人而作仕宦，作仕宦而复为刑名

讼狱之专司，于此而求为仁者，其难较之常人，奚啻百倍。当此之世，求一处极难之地而殚力行仁，人能知其必寿者，则莫若予同谱而秉宪吾乡之俊升张公。真可预书左券，俟百年后取而验之者矣。

张氏为关东望族，公之先世，系本朝汗马勋臣。公少而神颖，无书弗览，览辄成诵，即不攻举子业，亦可以世胄入官，而公弗屑也。与难弟秀升同入乡校，共膺乡荐，而又共举进士，观花上苑时，联驄并轡，又皆弱冠之年，都人士观者，拟之一对神仙，而犹不尽知其为兄若弟也。予获随骥尾，分荣殊甚。公由县令而主政、由主政而员外郎，由员外郎而两居谏垣、一乘骢马，声名赫赫于輦下；即出而建节淮、扬，其整肃吏治，与台省风裁无异；今来按浙，扼一省政刑之要，其声华矩度，又不讯可知。

计公历官九任，凡二十有二年，异政美绩，难更仆数，吾不具论；既言仁寿，则专举慈祥岂弟之一节，以为仁寿之征而已矣。其宰上杭，民顽梗而易犯法，公寓诚于劝，格之以诚，未几而顽者化矣，蒲鞭虽设，民以不辱为荣。其仁于为令者若此。迨入西曹，始至即司督捕；督捕者，捕人司命之官也。时国法初严，罹者罔赦，官偶失出，即罚不旋踵，匿此之家及比邻十馀户，均难免池鱼林木之殃。公一味行慈，罔恤利害，止罪逮人，而宽治一切，入汤网而复出者，不知几千万人。其仁于为郎者若此。及居青琐，入乌台，有弗言，言必期于有关生命，即活一人而无补于千万人者，犹弗活也。纠弹酷吏而民遂其生，削除秕政而国延其脉，谏行言听，膏泽下于民者，凡七年所。其仁于建言者若此。至于淮、扬饥馑，殍实沟渠，国赋难偿，吏民交困，非公以回天大力，请蠲告赈，以致圣天子惻然垂悯，数番大赉，则两郡苍生，宁有孑遗也哉。此其仁于江之南北者也。公之未擢臬宪也，滇黔倡逆，八闽效尤，两浙愚民不无揭竿而起、依草附木以待之者；然逆案一起，罗织纷然，凡属仇家，无不藉口，闻秉宪诘戎者新至，

皆图泄忿于马首之前。公视狱词，凡有欺之以方者，悉弃道旁，治以不治，隐然造福，而民莫之觉也；至理积案，有犯重辟者，为之百计求生，求之不得而绳以三尺，犹引咎自归曰：“弼教、明刑，原非二事；教之未弼，刑所由来。”此其仁于浙之东西者也。凡此皆公今日之仁，则皆公他日之寿也。

丙辰清和月之八日，值公诞辰，同事诸公以予昔附榜末，知公最深，先一月而走书京邸，索予言为寿；予故不辞谫劣，述其梗概若此。其化有讼为无讼，是老氏之清净无为也；其使民无生而得生，是佛氏之慈悲好善也；其声色不动而能使危者安、乱者治，则孔子所谓“仁者静”而“仁者寿”也；合三教而论之，皆无所逃于寿域之中矣。以此觴公，或不同于祝嘏浮词，冀得公莞然一笑曰：“是可谓善颂善祷者！”

寿吴兴别驾余公序 代

治天下之具有二：政与刑而已矣：此见诸事者也；用政、刑之具亦有二：德与才而已矣：此本诸身者也。本诸身者既足，而后随取随得，施于政、刑，以治天下，其如视诸掌乎？吾今日之为是论，非袭老生常谈，蹈称功颂德之故智，以觴我郡司农余公祖也；以公富于德而优于才，故以四者并列而归重于才，使人知居官莅物者，非才不能用其德耳。

政、刑之重轻，诸经及鲁论载之详矣；惟是德与才之相需为用，言者虽多，而未殚其蕴，吾请为天下畅言之。夫人德之未修，其才不足论矣；德至而才不及焉，犹菽粟备而艰于火水，布帛具而绌于缝纫，其寒不得衣、饥不得食，与无布帛、菽粟等耳。天下岂少有德之人哉？尾生、孝己，皆其伦也；有德而无裨于人，究亦不能成己，将焉用之？

我朝自太祖高皇帝、太宗文皇帝创业于初，世祖章皇帝继志述事而奄有四海。其间辅翼名臣，内如伊周房杜，外若韩范龚黄其人者，姓字之繁，难更仆数，人谓皆天下之贤臣，而不知即天下之才人也。古云“高阳氏有才子八人”，“高辛氏有才子八人”，夫其所谓才者，岂若今时之操柔毫、耕砚石，以浮词丽句得名者哉？谓其有纬武经文之略，与仁民泽物之功耳。本期诸臣之才，皆根于心而发于性，非由诵诗读书、摩经效古而然，是即本朝之元恺也。

乃今继起诸君子，则又加进焉。家服诗书，人敦礼乐，以准今酌古之才，运其根心发性之才，事业文章，合而为一。猗欤盛哉！盛虞之际，不是过矣。然犹有能知而不能言，善述而不善作者。独有人焉。了然于衷而复畅然于口，能阐微泄秘而有功于既往，又能制铭作诰以垂训于将来，为继起群贤之冠者，则莫如吾郡司农之霁岩余公者矣。

公之太公以汗马勋臣而扬历中外，后为四岳名臣，而子若孙即不事铅槧，亦可以勋胄得官，而太公弗屑也。谓以马上得天下，不能以马上治之，君臣皆然，而臣为尤甚。其择师不之严，课子之笃，不避古人责善之忌，而性命以之。故公昆季四人，无一不淹通前古，次第入官，为圣天子敷文明之化，而公又白眉于其间。公赋性仁厚，为公子时，西江父老即歌《麟趾》之首章，至居官之仁恕慈祥，又不待言矣。吾荅素称泽国，十年九潦，民苦流离，非一日矣。公所掌者盐、赋二政，盐则司商贾之命，赋则操出纳转运之权。奸民之病商贾者，动以私讎控，百无一实。公晰其情，多不受理，得一二有据者，坐以严法，不稍假，由是弊赖以绝，民赖以苏。至董各属催科，则又宽严有法：秋成司纳，旧苦胥吏作奸，动有需于属邑，邑取之民；公端本澄源，搜剔诸弊殆尽，收纳既易，则转运无难，飞挽之捷，悉阶于此，司漕及制、抚、藩、臬诸台，莫不嘉其能而懋其绩。至于折狱之明，肩事之毅，行己

之恭，事上之敬，处寮案、待属吏之真诚恺切，无一不合于前人。其任天而行，不假思议，则根心发性之才也；至于政行事举之后，以其所为而方于至道，无不依轨合辙，则准今酌古之才也。非诵读之深而神明于学术，能若是乎？矧公犹不自足，仕优之学，正未艾也，是公之才与公之官，吾皆不能穷其所至。昔张柬之、姚元之、赵清猷、富文忠诸公，皆以判郡起家，公以少年筮仕，即蜚英声，焉知不继前人芳轨？

丁巳季冬之某日，值公览揆之辰，予方治装诣阙，不获与于称觞之列，正拟先期致词，效华封人之祝，适公所辖之一州六邑为大夫者七人，合词连牒而征言于予，是得我心之同然。诸大夫借予言以觞公，予又借诸大夫之觞以进予言，是诚两善之策也，故倚马捉笔而述其景慕公者若此。

祝陈大中丞太夫人寿序

窃闻曾子之言曰：孝体有三，“大孝尊亲，其次弗辱，其次能养。”孟子之言曰：“为天子父，尊之至也；以天下养，养之至也。”由斯以谈，则尊亲、养亲之事，非至富极贵之人，不能畅其报本之怀，而使为之父母者，立于无欲弗遂之地。彼菽水承欢、负米尽养者，虽曰贫富难齐，各尽其职，然而清夜扪心，其于为子之所生，则终不能无忝耳。以予观之，天子诸侯无论矣，就常人而论：人子之于父母，不能以命服章其身、鼎烹实其腹、极天下快耳悦目之事娱其心，十二时中，即使强半为欢而须臾愁叹，其为子也，呼之为顺则可矣，名之为孝、且甚其辞而为至孝，吾终莫之敢许。一事或缺，“至”云乎哉？求其无事不备而足当至孝之名者，其唯奉命抚浙之大中丞陈公乎。

公事太母李老夫人，承欢继志，解慍涤烦，竭尽己力，无片

刻不快其心，无一事不满其志。莱子以斑斓博笑，亲心悦矣；公以朝廷所锡之华袞为斑斓，其为悦也不更甚乎？潘岳以板輿承欢，亲身荣矣；公以大中丞躬御之八座为板輿，其为荣也不有加乎？曾子养曾皙，必有酒肉，将彻，必请所与，如是即可谓养志矣。公之酒肉为何如之酒肉？太夫人所与之人为何如之人？其丰约、贵贱，吾不知相去几何，悬揣其情，必有什佰于曾子者矣。以此而名为至孝，尚有遗议乎哉？

戊午上元日，为太夫人设悦之辰，公之属僚及数千里内外之公卿士庶，莫不牵羔荷酒，诣公堂而致祝。予贫且贱，贫则不能为礼，贱则不敢为礼，然思昔日之华封人，亦非有财而有位者也，三多之颂，未尝不入神尧之耳，以言致祝，庸何伤乎？因走札四方，征名流诗词书画，计三十有六幅，合成一图而名为八卦，献于公而转献太夫人，以益弄雏之欢笑。

是日何日？张灯踏歌之元夕也。元夕为一岁令节之首，太夫人适于是日诞生，奇矣；公之生辰又在五月之十三日，与汉忠臣关夫子同日而生，不更奇乎？由是观之，知圣母、哲人，总与庸民有别，生辰且然，况其他乎？唯有以神仙目之、圣贤事之而已矣。

何省斋曰：寿文以孝养立论，脱去寻常窠臼，笠翁可谓善祝善祷矣。序中贤其子，则其母愈见其贤，笠翁可谓味水知源矣。至太夫人得笠翁之文并垂不朽，方之中丞之孝养，又觉易一世而千秋矣。

祭 文

季太翁万太夫人双祭文 沧苇侍御，闾山、仁山二使君，□□孝廉之太翁、太母也。

呜呼！人世浮沤，古今旦夕，吾人在电光石火中，谁能无死？但问其人之可死与否耳。若我延令季太翁暨太夫人今日之仙游，其真生有馀荣、死无遗憾者哉。

太翁占籍延令，其先世貽德累泽，难更仆数。及太翁应运而生，早岁掇科第，历仕至天官，守二疏知足之义，退居林下，犹在他人强仕之年也。厥后继起多人，愈恋东山，不肯复出。得令子侍御公首振家声，充满其志而光大其业，继此而联翩鹊起，翱翔云路者，又不一其人，海内数家世之盛者，遂首推延令，乌知其子若孙之弹冠而起，正未有艾耶？太翁自颐养天真外，唯以窥名园、聆仙乐为事，囊中富贵之乐，世外逍遥之游，无一不擅其极。总以太夫人之优于治内，不烦夫子经营，虽家务纷纭，可以无为而治也。猗欤休哉！

乃今厌绝世氛，双双遐举。拔家宅而唱随天上；骑鸾鹤而笑傲云中。顾劳人税驾之年，远客归休之日也。世俗不明斯义，概而名之曰死，因其家门甫盛，正当行乐之时，遽尔遐升，若有遗憾焉者。试问人当生死之关，所不能忘情于世者何事？不过家、国两端而已。太翁、太母视举家食禄于朝，自以忧国忧民为念，使九州以内，尚有一隅未平，一政未举，是其为国之心未死也；今则四海荡平，康衢鼓腹，其于国事，亦何所挂碍于中，而不忍释

之以去乎？太翁为貽谋之主，太母为内助之君，日以昌大厥后为志，使子孙辈尚有一官未显，一人未立，是其为家之心未死也；今则簪笏盈床，兰桂森立，不能呼名而但能点额者，悉是绳武之良才、兴宗之美裔，其于家事，又何所系恋于中，而不忍释之以去乎？可以去而不去，与不可以去而去，同一赘瘤，吾知哲人之心，必不以此易彼耳。

即今讣音一出，哀动中原，白马素车，充塞道路，延令一城，竟为衣冠丛集之藪。但见雷霆轰轰，儿孙哭也；冠裳跼跼，吊客临也；琮璜熠熠，明器设也；珍错离离，俎豆陈也。人生得此，夫复何憾。太翁、太母驾仙驭而临之，方抵掌欢笑之不暇，尚隔幽冥而与儿孙对泣乎哉？

予小子非敢临丧不哀，故作矫情之论，恐诸令子宦游四方，未及亲视含殓，闻音奔赴，哀毁过情，致生疾痛，以负苍生之望，故仿达人遗世之意，创为是言，使歌《薤露》者日诵于苦块之侧，冀稍解大孝之忧云尔。

祭福建靖难巡海道陈大来先生文

先生讳启泰，奉天之盖州人，福建巡海道也。甲寅之变，靖藩胁之使叛，先生毅然拒之。妻妾子女，共二十四人，呼聚一堂，谕之曰：“吾世受国恩，今以死报。我忠于国，而辈当忠于我。有不自死者，我即死之。”言訖，各授以绶，复挺利刃以待。其夫人复谕诸妾及二女曰：“此时不决，主人靖难后，求死不能矣。我请先之。”言未毕而自投梁上。诸妾及二女皆迫于忠义，不敢辞。有一二因循者，先膏利刃以示劝。是以二十四人之中，止留二子为宗桃计，余皆缢首于一时。先生命属吏各治棺衾，浮其一以自待，目击众尸含殓毕，遂北面叩头，流血被面，始饮鸩而卒。此三藩

叛后，靖难诸臣之第一人也。

渔受先生特达之知，闻凶耗于乙卯夏，惊怛久之，然不敢设位而哭，虑此信之或讹耳。丙辰冬，八闽大定，询得实耗，始而悲，继而悲喜相半，喜先生之得死所，而且未尝授首于人也。予家人俗俟灵輶经过，设奠未晚，予曰：“士哭知己，等于君亲，人能待，泪不能待也。矧闽越相距数千里而遥，遗子孱弱，知其扶柩于何年？望空一祭，不可少也。”乃设鸡鱼豚首各一，蔬簋四，但不设位，以其生前赠物之尚存者，奉一二以代主，为文以哭之曰：

呜呼先生！底事堪惊？吾不料事叛事仇之浊世，忽来一死忠死孝之芳声。渔之初闻是耗也，既虑其果死，又虑其或生。生则有补于知己，死则无愧于朝廷。窃谓吉凶皆可，虚实听凭。乃今果全其大节，妻子尚不恤，何恤乎朋友故旧之细情。

公之为人也，倜傥好义，雅重嚶鸣。不交则已，交必心倾。贱黄金于粪土，失巨万而不争。公之为官也，不随不诡，独断独行。宁失调于众口，不自变其居恒。霹雳绕其身而不惧，谄笑媚其侧而越憎。是以同心者愿为公死而不惜，衔怨者拟食公肉而未能。公之一生，诙谐其口，放浪其形。人但许之以豪杰，未必尽料其忠贞。既有声乐之嗜，即多珠翠之萦。人皆虑其死裙带，孰能谅其杀娉婷？访颐生之药于华、董，学延年之术于篋、彭。向尽疑其求生之过笃，今反讶其视死之太轻。是公今日之死也，三出时人之意外，尽完古节于生平。不难于死节，而难于不死他人之手；不难于一身独毙，而难于满屋尸横。

乃今亲戚故旧，朋友弟兄，一闻此耗，毁誉交并。非怪居心之太忍，即讶毒手之能擎。予独嘉其忍心而未尝害理，非此如狼之毒手，乌能保完节于钗荆？诚哉千古之俊杰，允矣一代之忠诚。吾乃草野之人，未识圣天子之报之也，奚赏奚赉？何谥何旌？幸

留二子，荫庇可承。慰忠魂于既绝，瞑死目于尚瞠，其在旅梓旋京之日乎？

渔也向承鱼水之合，曾为车笠之盟。未能杀身以酬国士之遇，只能杀青以播知己之名。不俟抚棺以痛哭，先为得讣之哀鸣。尔节既全于输赤，尔衷又白于汗青。九原可慰，享此杯醺。呜呼哀哉！

余霁岩曰：笠翁树帜文坛三十馀载，人但以风流才子目之，不读此文，乌知其为大贤人、真义士哉！人许大来以豪杰，不能尽料其忠贞，亦犹是也。无怪二公有水乳之合。

祭福建靖难总督范覲公先生文

先生讳承谟，奉天之沈阳人，太傅现斗公之次子。以壬辰科进士入词林，累官至学士，出而抚浙，政声优异，寻擢闽督，莅任不数月，即有撤藩之举。闽藩一叛，文武大吏皆从之，先生孤掌难鸣，遂为所执。始则竟日怒骂，求为颜杲卿之断舌而死既不可得，继则经旬不食，求为伯夷、叔齐之枵腹而亡又不可得。盖闽藩以其为关东世族，太傅公为定鼎元勋，先生之为官也，又铁面冰心，风裁赫赫，为遐迩人心所属，是时中外当路者，强半皆属汉军，故百计千谋，必欲胁之使叛。谓军中有一范，则得其要领，以招致关东诸大族、四方诸大吏无难矣，而乌知其为百折不回之文丞相也哉？先生忍死以待天兵之至者，凡七百餘日，其间茹荼履险，濒死复生之情状，非髡数管不能书，有听其缺略而已。迨王师压境，石卵难支，闽藩请降，而欲掩从前罪状，势必灭此一人以去其口，先生之命遂于是乎终焉。於戏伤哉！

渔蒙太傅公及先生两世下交，皆为怜才二字，于其歿也，可

无只字报之乎？原欲俟灵輶北返，假道并州，渔随两浙吏民之后，与如丧考妣者合致其哀。兹闻道路之口，谓八闽诸公遍觅其丧而不得，又谓闽有异人武夷子者，虑忠臣被害，尸骨难全，若唐高重捷蒲首蒲身之往事，故窥人不见，窃负而逃，间关数千里，送入其家者。渔惑于道听途说之口，无由得其实讯，唯有若报巡海道陈公故事，设奠为文，望空一祭而已。

是日并设二位，一为先生，一为宋丞相文公天祥。盖先生之臣节，求之千古上下，唯天祥一人足以媲美，其生死大义，若合符节。譬之先生未死，驾过西陵，渔设一樽为东道主，可少一道同志合者作陪宾乎？先生有灵，必不以增杯益箸为不恭耳。其文曰：

呜呼哀哉！臣子报君，与士报知己，无所逃于天地之间，其理一也。公以身陷逆氛，百折不回而死，既能报其君矣；岂公一生好士，于其歿也，无一二抱道怀才之辈，为之杀青污竹，报吐握之诚者哉？

渔窃以人臣之事君也，为良臣易，为忠臣难，为遘死之忠臣易，为忠臣而不得遘死，天若留之以有待，及至势穷力竭，究竟无益于国、徒苦其身而后死者，尤难！此忠臣所服之上刑，较龙逢、比干而什佰其惨者也。古之罹此者一人，文文山先生是也；今得我公而两，殆元方而季方者哉。

然此二难也者，皆欲自为其难，非造物故难之也。文山往事，载在方策，烂如日星，不待言矣。公为元勋之胄，辅臣之子，即不治举子业，亦可以世胄入官，曾有宰辅之子而作凡民者哉？然公不肯为也，毕竟与白屋寒生同其进取。由诸生而孝廉，由孝廉而进士，以致名魁两榜，入为馆阁名臣，是其进身之始，已先自为其难矣。迨奉命抚浙，浙较他省似乎易治，而公独难之：不难于小康，而难于久安长治；不难以刑罚示威而使民归于善，不难

以纠弹示法而使吏戒其贪，难在明生于公而威生于廉。然为今日之官，事事皆易，而求其廉且明也实难。果廉且明，必至自去其官而后止。以廉明之故而自去其官，则天下仕绅皆视廉明作畏途，是我不能造福于民，而且贻之害矣。廉明之不易若此，公明知其难而为之甚力，故抚浙三年，无不以一日为百年之计，咫尺作千里之图。未尝轻杀一人，而民之畏刑也不寒而栗；未尝多劾一官，而吏之奉法也不肃而严。奉使诸大臣入疆问俗，皆谓浙民之易治若此，而乌知极易之事，由于极难，有此一人任之于上乎？公之入闽也，闽事之坏，已臻至极。无论其他，即兵饷之缺，有欠至半年而未给者，库帑缺额至百馀万，协饷又苦不至，司三军之命者，刻刻防庚癸之呼，不料复有撤藩之命。然非常之变，蓄谋已久，即兵饷不缺，亦难保无虞矣。当闽藩未叛之先，公知其必有是举，若肯以防邻设备为辞，预脱虎口以观变，此易事也，而公不肯为，谓异谋虽蓄而未形，我动则彼亦动，是首祸也。当其既叛之后，料渠事必无成，不妨阳合而阴图之，乃心王室者计尝出此，亦易事也，而公不肯为，谓名节所关者大，失之易而湔洗甚难，且非臣子所忍为也。舍易而就难，公之一身，遂为万古纲常所缚，而自甘授首于人矣。是今日之死，非天死之、人死之，公自死之也。自死云何？死于一字之难也。为其极难，而究竟无补于国。其为忠也，似近乎愚，然智可及而愚不可及，吾夫子尝言之矣。且文文山先生不得我心之同然乎？文山今日在天之灵，岂不以得一快友为幸乎？故渔此时设祭，大破常格而拉之使陪，公即不鉴主人之诚，亦必以同座得人为庆也。呜呼哀哉！

朱修龄曰：设祭而拉一陪宾，是千古创事。笠翁一生作事、行文，无一不创，此创更奇。然古人原有配饗之例，又非臆见，所谓奇而法者非欤！

记

严陵西湖记

武陵有西湖，严陵亦有西湖；武林西湖有南北二峰，严陵亦有二峰。予未至时，意其效颦于杭，莫之神往。岁辛丑，偶经斯地，周将军以西征奏凯归，大会宾客，一时世公贤豪、才人墨客星聚。酒酣耳热，严子首建泛湖之议，诸客乐从，遂移酒核往。呼船未至，先循岸而眺。时日已昃，樵担下云，万峰变态，深浅隐现非一状。枫始丹而未匀，有如桃杏初裂；群鹭归栖林莽，又若梨李之烂开。景物移人，几认白帝为青帝。客之工诗与画者，皆喜得异料云。昔人比西湖于西子，言其媚也。予谓在杭者绰约而绮丽，是既入吴宫者也；此则露倩冶于浑朴，其在苕萝村乎？

舟至而登，不施篙楫，将军以黄盖蔽日，即以代帆，信风所颺而之焉。鼓吹一作，鱼鸟惊悸，盖前此未之有也。银瓶泻酒，声与瀑音相乱。绕宝华三匝而后登。严之宝华，亦犹杭之湖心，但少亭耳，然芜秽诗联无从着迹，亦正以无亭故，是湖以不幸而得幸也。童子折红蓼入舟，击鼓催递，以助觴政，舟中哗笑，与城头击柝声相答。环岸观者如堵，谓自有湖来，不睹此游，舟中何许人，乃能为此辟荒盛事。噫，果如此言，则今日非他，乃苕萝女子于归日也，因发一笑。

暝色催人，游者去而观者亦散。时八月二十有八日，同泛者

严子元复、姚子居石、胡子伊人、宋子彦兮、施子必忠、陶使君康叔、周将军云山，暨余而八焉。

黑 山 记

环东安而献状者，贤明、百丈、鸡鸣、天柱诸峰。黑山独退处于后，似不屑入城市观，然以峻而多峰，亦卒不克自掩。中有一窍，窍中土墨色，因以得名。山形如削，虽有济胜具，莫能以屐登。自潘氏之先有某公者，欲授家政于子而弗遂，乃翦芟藤莽，取道筑室于巔，居三年而后归，累始脱。其四世孙牧之、士桢，攻制举业而避家务，亦以顷簦往。余辛卯游东安，二潘下山顾余于贤明，余与贤明僧法上偕往。

时方中伏，臂衣而行。至麓，无级可拾，惟于草木间处，猿步而升。既至，喘如吴牛，席地啜苦茗无算而始定。然志在登览，虽劳弗倦也。

二子乃导余纵观。石之奇者，千态万状，草木亦自有异，以所见之异异之也。俯观下界，绿野如枰，千家棋列，烟火郁然，不可涯际。余登眺之目，自乙酉陟仙华而后，至此复大畅。牧之谓余曰：“此山之景，盛于春秋而衰于冬夏。春则锦日烘花，秋则绣风舞叶。最宜者，晓雾半收，万峰露顶，下方若海，此身疑坐岛中。其在冬夏，则蓊郁莽苍之外，无他可喜。此正山容惨淡时，得免讥弹足矣，胡反誉之乎？”余曰：“登山如品画，春秋设色，反不如冬夏水墨为佳。”二子喜予有别见，于是摘鲜蔬，开藏甃，饮予至醉。

日熹微，法上促归，二子送余于石门。石门者，两石夹道，中可人行，盖天设此险，以锁钥斯峰者也。二子以此为送客之限，遂别去。约二、三里，忽有人策其后曰：“日入矣，可疾行，暝则有

虎。”余意二子潜蹶予后，回顾杳然，疑为山鬼。法上指穹窿处谓余曰：“人声不在天上乎！”仰视，则二子同倚危石，以目送余，自下徂巔，相距万仞，而声之下也如咫尺，则是山之巉险壁立可概见，是用记之。

东安赛神记

新城县有土谷祠，其神曰：“刘十三相公”者，以六月某日为诞辰，邑人争设祭。其为祭也，非止穷山极海，亦且变错幻珍，人工镂琢之巧，无复剩技。一城十五乡，男妇耆稚毕集；其集也，名为谒神而实则观祭。设祭之家，闻人赞奢颂巧，则喜有骄色，因其贫而致俭朴者，不以神之见叱为忧，而忧貽嗤观者。日旰时彻祭演剧，观者虽不稍减，亦只如初。迨昏暮，为银花火树之娱，则哄然、骚然，近祠四、五里，桑麻豆蔬，躏为赤地。夫赛神以祈土谷，今谷先以赛神侵，吾不知刘十三相公者此时安乎？芒背乎？

乃至爆竹雷轰，火光电作，有炽然上升者，有燎然飞舞如龙蛇状者，然此皆零星小技，一泄而尽，其耐观夺目，莫如烟火。烟火取象浮屠，为七级，级为一故实，自下而上，不疾不徐，楼台器玩，人物花鸟，既宛然逼真，亦纷然旁见侧出而不可方物。洋洋乎大观哉！乃土人犹有少之者，谓其中尚缺数事，不若今岁元宵邑使者看灯时所设，乃为大备。又一人曰：“往在留都，见某内监所放烟火，绝不类此。此仅有其名耳！”噫，一游戏琐事，众见之广隘不同乃如是，矧越此者乎？余其河东豕矣！因讯为此一种所费几何、工几何？土人曰：“此时硝磺涌贵，须费钱三十贯，制月馀可就。”噫，损中人一家之产，辍三旬耕作之工，娱大众一瞬之耳目，乃犹群施责备，无乃伤作者心！独借此时烽烟未靖，盍储此料以助火攻，而固区区娱耳目为？父老曰：“往时神京未陷，

硝黄充栋，逆闯一入，悉为盗资，吾恨娱耳目不早耳！”余为之浩叹。

嗟乎，细民拮据终岁，被食而外，能馀几钱？今赛神一昼夜，自设祭、演剧以至种种火焰之费，亦甚不貲，吾又不知刘十三相公者当如何土谷斯民，而始不芒背也。

范文白曰：世人专于事鬼，略于事人，得笠翁先生此记，巫风自此寝矣。

登燕子矶观旧刻诗词记

采石、燕子二矶，皆金陵雄胜地也。江左名山多矣，鸡鸣、牛首、雁行钟、摄诸山，环立于郡之三面，登之极高，而为眺甚远，然天下之人，知其名而莫之至者众矣，即土著之民之至者，亦仅十之一二。至于采石、燕子，较之诸山，一卷石耳；乃四方之人不至则已，至则未有不登者，以其滨江，与行人就也。诸山皆去城远，游者必专治舟楫，惟士大夫有逸兴者能之，俭而慵者，虽近莫登，况远者乎？然则同一山也，其得地与否，亦有命焉：得地则小者亦荣，否则万丈之高，百里之广，慕此区区者而不能学，有自甘寂寞而已。然即此小者之中，又有幸不幸焉。采石虽滨江，犹去居民数里，客舫过而不留，晚亦弗泊，虑萑苻也；燕子则密迩民舍，行舟往来，过此即无住处，即日之方中，时之未暝，客欲兼程而进者，又有天作之合，使不得遽行，则石尤风是也，帆之上下，必有一阻，故此矶登眺之人，从无虚日，山之得地，莫是过矣。

嗟予命最不辰，事事与此山相左，乃复与之有缘，十至此而九避风，避则必登，从未有扬帆竟渡者。辛亥秋，予阻风泊此，曾

留一联、一诗于亭上，好事者以木代石，镌而为碑。后二年，与小朋友王安节月夜泊舟，坐饮其上，复题诗二律、词一阙，居民复梓之，悬于路口。是两志阻风，足征予言之不诬矣。一人若是，其他可知。

丁巳首春，移家过此，余婿沈因伯强予登山，欲观手迹之存否。至则宛然无恙，因伯举手贺曰：“久而不灭，山川之灵也。可以数年，即可以千载，诗词与联，偕名山而不朽矣。”予曰：“汝见四方诸名胜，前人碑刻，百有一存者乎？石且易朽，何有于木？且亭非千年物也，异日亭之不存，诗将安传？且吾更虑陵谷变迁，焉知千百年后，此山此石，不并入巨浸中邪？欲计久长，则有古人之三不朽在，无须问诸水滨。”

梦饮黄鹤楼记

“仙家自昔好楼居，吾料乘黄鹤者，去而必返；诗客生前多羽化，焉知赋白云者，非即其人？”此予题黄鹤楼之联也；“十年心醉此楼名，今日登临体较轻。目眺神仙追去鹤，酒浇鹦鹉吊狂生。莫嗟老大无休息，还喜中原少战争。试倚危栏听逝水，至今犹作鼓鼙声。”此予登黄鹤楼诗也；“往返于斯一载周，客游不壮壮仙游。凭虚也当骑黄鹤，貰醉无惭典黑裘。壁上新诗终漫灭，石头锦字易沉浮。临行莫惜重登览，知复何年上此楼？”此予别黄鹤楼诗也。一楼耳，既联之，复诗之，又复诗之，亦可谓眷恋之深而周旋无不至矣；乃既去而梦，觉而复为之记，无乃钟情过笃，物而不化，犯吾家老子之忌乎？曰：不然。物不足以泥人，其所以泥之者，必有物外之物，是以系人思后之思。

予客武昌一载，多贤主人，如蔡大中丞仁庵、董大中丞会徵、张方伯九如、高臬宪钦如、王副宪鸣石、王少参茂衍、姜观察君

蕃、纪太守子湘、李太守雨商、张司马秀升、唐邑侯松交、伯祯诸公，皆一代贤豪，三楚名宦。予往来其间，尽叨国士之知，饮酒赋诗无旷日，又多在黄鹤楼上，醉即枕藉乎其中。古诗云：“丈人屋上乌，人好乌亦好。”有如许临邛妙主，即以当时乘黄鹤者处此，亦必去而复来、来而未肯复去，矧我辈为情之所钟者乎？是以既去而梦，梦而不得不为之记也。自壬子至今，更六年所，梦返是楼者，奚止数四？然皆模棱仿佛，梦中所言，醒莫能记，是恍兮惚兮之梦，非俨然宛然凿凿然，是梦非梦之梦也。曩时梦中所遇，无非旧好，然所厚诸公，或在或不在，惟臬宪高公则无往非遇，盖高公友予更密，故念念及之。语云：“日之所思，夜之所梦。”即此可见梦非梦也，思也，思物非思物，思物外之物也。其理既明，请述梦境。

是岁七夕前一夜，梦予仍客汉阳，诸公折柬来招；问宴集之所，则以黄鹤楼对。时予在子湘太守署中，闻呼而往，至则诸公皆在座矣。高执予手询曰：“乔美人无恙乎？”乔即予之雪儿，能歌善病，歿于汉阳，予作《断肠诗》二十首悼之之人也。予对曰：“死矣！”言讫痛哭，诸公皆叹息，高独厉声曰：“汝诗有云：‘丈夫亦有泪，但不洒儿女。’胡为自谬其言？先罚一巨觥！”予不能辨，高亦不果罚。剧饮逾时，忽飘风大作，继以雷电。凭槛而视，估客有覆舟于江者，疾声厉呼，闻者心恻。少迟，见一物自怒涛中腾跃而起，色赤有光，犯楼直入，几抵乎座。诸公目之为龙，予曰：“龙有角，而此独无，殆蛟也。”座有一客，似经识面而不记姓名，欲乘此以去，予急止之，客曰：“有极不平事，欲诣上界叩阍，位高难达，非乘此不可。”言毕遽去。予错愕久之，谓诸公曰：“昔人乘黄鹤而升天，此公御赤蛟而诣阍，岂赤蛟即黄鹤之幻形乎？”复饮逾时，未见移席，忽更其所，变高楼为平地矣。藉草而坐，面江而饮。予询诸公曰：“此何地邪？”诸公不答，一客笑而言曰：“子负诗名已久，来楚又非一日，坐鹦鹉洲而不识其处，不

几为祢正平笑乎？彼土累累，即其墓也。”予惭谢不已，谛视其人，即乘蛟以去者。夫此一客也，先何为遽去，今胡以忽来，予与诸公皆莫之诘，且若未尝有其事者，此则梦境之常，无足怪矣。至此遂觉。

觉后忆梦中人，自高公而外，则有鸣石副宪、茂衍少参、子湘太守、秀升司马，暨熊子元献、李子仁熟，其余诸公则在仿佛之间，不能知其果在与否。熊、李汉阳人，予诗友也。

两宴吴兴郡斋记

予二十年来担簦负笈，周历四方，所至辄随士大夫游。海内郡治共百五十有六，而予所未到者仅十之二三，从未有记；而今独记吴兴者，重其人，因以重其地。重之，斯记之，犹未有文字之先，结绳以示不忘耳。

浙为天下之名区，吴兴又为浙之名郡，是人皆知；独未知此一郡者，乃古今名宦之渊藪，而经济、勋猷、文章、道义之所从出也。古以宦名当世者，随地有人，然择其功业最著而草木知名者，每郡不过一二人、四五人而止矣；吴兴则不然，合守令计之，虽更十仆难数，就郡言郡，其为良二千石者，亦非屈数指所能尽也。在晋则有王右军父子，谢安石父子、兄弟、叔侄；在唐则有颜鲁公、杜牧之，在宋则有苏东坡、孙莘老、王龟龄、文与可。之数公者，得一可以光郡治，矧接踵其间？似地必择人而后与居，又似人必择官而后拜，非此不足宦游者，此予重古之人而因重其地也。

今之太守，则为子怀胡公。公出世胄，而雅好读书，尝以天下为己任。岁甲寅，朝廷欲诛叛逆、靖四方，求忠臣于勋旧之门，拔四十人从征，而公最其选。甫入浙，适吴兴缺守，遂补是郡，时

年二十有奇，精敏练达，老于吏者莫能过之。戢僚属以严，抚黔黎若子，不期年而化成，较王、谢、颜、苏诸公，时有后先，政无轩輊。是余之重今人，无异于重古人，矧今人所居之地，即古人嘯歌登览之地乎？记之遂不容已。

署内旧有墨妙亭、爱山台、六客堂三杰构。“墨妙”始于孙莘老，藏前人赋咏诗文及碑刻于此，故名，东坡为之作记；“爱山”昉自宋郡丞汪公，磊石于外，实土于中，高地丈馀，以备眺览，东坡咏道场山，有“尚爱此山看不足”之句，故以命名；“六客”为宋太守李公建，因与苏子瞻、张子野、杨元素、陈令举、刘季叔五人会饮于此，与己共为六客，因名焉：皆郡治中胜概也。年深物旧，日渐圯颓，迨公至止，爱山而山不见，客徂而堂亦徂。碑刻无存，似有雷轰荐福；遗书何在，如经火燎咸阳。惟荒亭尚存，然风雨飘飏，人迹罕至，鲁灵光亦难久立矣。公怆然叹曰：“风雅沦亡，遂至此乎！”莅任后二载，百废俱兴，工有馀暇，捐禄米若干斛食之，更出俸金庀材，不废公帑一钱、民间一力，刻日成之。工甫竣而予适至，公喜曰：“未来六客，先至一人，不妨自少而多，请自今日觴客始。”维时彝鼎杂陈，琴瑟在御。风挹明道之座，月登庾亮之楼。又复集佳伶、奏雅乐。予以一人，获观全盛，且居诸客之先，幸矣哉！

越二日而群贤集矣。登高台而瞩远，则道场、车盖、岷、鲍诸山，无分近远，悉献媚焉；临虚亭而揽胜，则明月、韵海、镇雪诸楼，与碧澜堂、浮晖阁，俱瞭然在目。诸客各试技能，而重于观德，故先以角射行酒，相率为君子之争，人见为忿然而呼，不知其为毅然以劝也。射毕序坐，诸客皆右予，予引成言为券，先入者为主，始免于僭。予意觴政严饬，不减于初，盖予虽不饮，视诸公行罚，动以金谷酒数，未免忧人之忧；诤意不然，竞于前者让于后，以时皆半酣，虑有失德，故稍戢轰饮以善其后。予于此观酒德焉。诸公谓胜事不可不传，属予为记，故述其崖略如此。在

座之客，为饯使李万资、别驾赵又韩、游击将军成耀先、署别驾参军林象鼎、乌程令君高凤翥、归安令君何紫雯，与公及予而八，较当时六客浮其二云。公讳瑾，三韩人也。

闰月称觞记

康熙戊午春三月之七日，乃郡司农孚六佟公览揆之辰。时督军糈入闽，身在周行。及其归也，已越生辰旬日矣，僚采属员以及黄童白叟，咸以不获称觞为恨。李子曰：“无忧也，有闰在。不闰他月而闰三月，似羲和氏有灵，故设此局以待劳臣，觞于后，犹之乎觞于前，未尝失其所生之日与月也。且闰为岁之馀，馀者，寿之征也。公之为人，倜傥好义，公之为官，廉明岂弟，尸而祝之者，无不欲其延龄益算，而天忽闰之，是明示有馀，为仁明食报之一端耳。又古人于所生之日，为父母者，悬桑弧、蓬矢于户以志四方，公于是日勤王事而事远征，正合弧矢四方之义。同一生辰也，昭无逸于前，示有馀于后，皆造物笃厚其躬而有意为之者也，岂偶然之事乎？抑更有说焉，公之莅浙也，甫四阅月，片席未暖，即擢而之内，为圣天子股肱臣。于年则闰之，惟恐其不迟；于官则不闰，又惟恐其不速。吾于此益见天之待公也厚，而信仁明食报之不诬也。”因于是日称觞而记其事。

佛日称觞记

哲人之生，必与凡民有异：非得佳兆于未生之前，即现奇瑞于降生之日。帝王圣贤无论矣，豪杰才俊之流，如孙坚之母梦肠绕吴门；孙策之母梦月裂入怀；尹喜之产也，陆地生莲；崔信明

之诞也，庭集异雀；李显忠之母生七日不克，胡僧以剑矢置旁乃生：种种异迹，岂尽荒唐？予非信史、信传，乃信圣贤口之一言。子思不云乎：“国家将兴，必有祲祥。”家产贤豪，为昌大门户之始，造物于此，安得不微露其几乎？乃星家则以所生之年月日時，定其人之寿夭、贵贱。鲁论记“子罕言利与命与仁”，予孔子之徒也，命之有无，不敢定论，但亦置之罕言而已。然尝就其浅者测之，亦时时有验。浅者云何？即时事以占吉凶，如美景良辰、赏心乐事，皆佳兆也；设于此际诞生，就现在以测将来，思过半矣。诗有“蔼蔼吉人”之号，既曰吉人，天未有不择吉而生之者也；吾今于观察张壶阳先生之生，益征此理之非谬。

先生生于四月之八日，是日维何？世传中天竺国净饭王妃摩耶氏生太子悉达八之日也。是日，大慧禅师上座，号令众曰：“今日正是四月八，净饭王宫生悉达；吐水九龙天上来，捧足莲花随地发。”夫佛之有无，吾儒亦不当深论。但据普天之下皆于是日浴佛，浴佛之义犹之洗儿，好善之家皆于是日礼僧伽、设斋供，金铙法鼓，响彻人天，合九州四海计之，是日所费洗儿钱，几与恒河沙比数。乃有人焉，适于是日降生，是一家诞子，百千万亿之家齐举汤饼盛会。就事论事，奇乎？不奇乎？如其果奇，则天之生斯人也不苟，而予以浅测深之法，亦不甚悖谬而可从矣。

壶阳先生龀齿登第，初噪芳誉于词林，继蜚英声于郎署，出秉风宪，凡五莅名区，所沛甘霖，几遍寰宇。乃今齿才五十，为孟郊登第之初年，朱买臣被荐入朝之第一日。即使先生于今年之此日诞生，犹能必其将来之富贵，矧已验者半，而勋猷德业之未尽竖立者，尚留无限余地，以待日后之证吾言乎？由是观之，四月八日之生，洵非偶然，焉知非天竺太子悉达八再来之身乎？

或曰：“佛性慈悲而近弱，公性果敢而类刚，似风马牛之不相及。”予曰：“人生三代以后，非勇不能行其仁；有雨露而无雷霆，其为泽也不溥。先生之性不类佛，乃其所以为佛也！”

汉寿亭侯玉印记

杭之孤山有关帝君殿，又名照胆台，始于故明万历年间。告成之日，有客携汉寿亭侯印至，事与时会，人皆异之。因佩于帝像之臆间，明其心乎汉也。

殿久而颓，鞠为茂草，地亦稍为编户所侵，守土者命羽士护持此印，匣而藏之。至大清康熙之十七年，大中丞陈公过而叹息，谓荅臣庙貌，听其沦毁，非所以教天下之忠也，欲起而新之。迨索所藏玉印，则启匣茫然，莫知所往。谓其失于盗乎。则玉不盈握，所值无几，且有汉寿亭侯及帝君姓名，非可售可藏之物，盗虽愚，应不至此。神明其事者举而属诸天，谓此神物也，庙兴则来，废则去，犹仕宦之铜符墨绶，与进退之日相终始；庙既倾圯，帝君之精爽必舍此而去，宜乎其不存也。予初闻是说，颇迂诞之。迨庙成，而此印复至，若有神物资来者，即欲终迂前说，不可得矣。其至也，不于庙，不于民间，而于大中丞指使之人之门外。黎明启户，有物当前，举而视之，即此印也，乃献于公，而知为天授。然公则目为偶然，不欲深言其故，恐神道设教之惑民耳。但令送入庙中，还其故有而已。

印方，四面皆宽二寸许，惟二面有文：一曰“汉寿亭侯印”，一曰“关羽之印”，洞其中以受组，盖帝君当日所佩之私印，非颁自朝廷者也。玉则逼真汉物，篆文镌法皆近古，非摹秦仿汉者所能为。斯印失而复得，固奇；然不得于他人，而得于大中丞陈公之手，更奇。陈公诞于五月十三日，举世皆于是日祀帝君，谓是日为帝君生辰。又有言其非是者。然吾儒所信者正史，正史不载生辰，即他书或有，亦未敢从；举世云然，则亦吾从众矣。先圣

后贤，生于一日，无怪乎道同志合，勋业炳然；且焉知非楚人之弓仍为楚人得乎？是为记。

传

秦淮健儿传

嘉靖中，秦淮民间有一儿，貌魁梧，色黝异。生数月便不乳，与大人同饮啜，周岁怙恃交失，鞠于外氏。长，有膂力，善拳击，尝以一掌毙一犬，人遂呼为“健儿”。与群儿斗，莫不辟易，群儿结数十辈攻之，健儿纵拳四挥，或啼或号，各抱头归诉其父兄，父兄来叱曰：“谁家狔犬，敢与老子相触耶！”健儿曰：“焉敢相触？为长者服步武之劳则可耳。”乃至父兄前，以两手擎父兄两胫去地二尺许，且行且止，或昂之使高，或抑之使下，父兄恐颠仆，莫敢如何，但咕咕笑，乡人哄焉。

健儿性善动，不喜读书，外氏命就外傅。不率教，师夏楚之，则夺朴裂眦曰：“功名应赤手致，焉用琐琐章句为！”师出，即与同塾诸儿斗，诸儿无完肤。又时盗其外氏簪珥衣物，向酒家饮，醉即猖狂生事。外氏苦之，逐于外。为人牧羊，每窃羊换饮，诈言多岐亡。主人怒，复见擒。

时已弱冠矣，闻倭入寇，乃大快曰：“是我得意时也！”即去海上从军，从小校擢功至裨将。与僚友饮，酒酣斗力，毙之，罪当死，遂弃官逃之泗，易姓名，隐于庖丁。民家有犊，丙夜往盗之，牵出，必剧呼曰：“君家牛我骑去矣！”呼竟，倒骑牛背，以斧砍牛臀，牛畏痛，迅奔若风，追之莫及。次日，亡牛者适市物

色之，健儿曰：“昨过君家取牛者我也。告而后取，道也，奚其盗？”索之，则牛已脯矣，无可凭。市中恶少推为盟主，昼纵六博，夜游狭邪，自恃日甚。尝叹曰：“世人皆不足敌，但恨生千载后，不得与拔山举鼎之雄一较胜负耳！”

邑使者禁屠牛，健儿无所事事，取向所积牛皮及骨角，往瓜、扬间售之，得三十金。将归，饮旅馆中，解金置案头，酒家翁见之，谓曰：“前途多豪客，此物宜善藏之。”健儿掷杯砍案曰：“吾纵横天下三十年，未逢敌手，有能取我腰间物者，当叩首降之。”时有少年数人酺于左席，闻之错愕，起问姓名、里居，健儿曰：“某姓名不传，向尝竖功于边陲，今挂冠微服，牛耳于泗上诸英雄。”少年问能敌几何辈，健儿曰：“遇万万敌，遇千千敌，计人而敌斯下矣。”诸少年益错愕。

健儿饮毕，束装上马。不二三里，一骑追之甚迅，健儿自度曰：“殆所云豪客耶？”比至，则一后生，健儿遂不介意。后生问何之，健儿曰：“归泗。”后生曰：“予小子亦泗人，归途迷失，望长者指南之。”于是健儿前驱，马上谈笑颇相得。健儿谓后生曰：“子服弓矢，善决拾乎？”后生曰：“习矣，而未闲。”健儿授试之，力尽而弓不及彀，弃之曰：“此物无用，佩之奚为？”后生曰：“物自有用，用物者无用耳。”乃引自试，时有鹞唳空，后生一发饮羽，鹞坠马前，健儿异之。后生曰：“君腰短刀，必善击刺？”健儿曰：“然。我所长不在彼，在此！”脱以相示，后生视而剧曰：“此割鸡屠狗物，将焉用之！”以两手一折，刀曲如钩，复以两手伸之，刀直如故。健儿失色，自筹腰间物非复我有矣。虽与偕行，而股栗之状，渐不自持，后生转以温言慰之。复前数里，四顾无人，后生纵声一喝，健儿坠马，后生先斩其马曰：“今日之事，有不唯吾命者，如此马！”健儿匍伏请所欲，后生曰：“无用物，盍解腰缠来献！”健儿倾囊输之，顿首乞命，后生曰：“吾得此一囊金，差可十日醉；子犹草莱，何足诛锄。”拔马寻故道去。健儿神气沮丧，

足循循不前，自思三十金非长物，但半世英雄，败于乳臭儿之手，何颜复见诸弟兄？遂不归酒，向一村墅结庐，卖酒聊生。每思往事，辄恶恶欲死。

一日，春风淡荡，有数少年索饮。裘马甚都，似五陵公子，而意气豪纵，又似长安游侠儿。击案狂歌，旁若无人，且曰：“涤器翁似不俗，当偕之。”遂拉健儿入坐。健儿视九人皆弱冠，唯一总角者，貌白皙若处子，等闲不发一言，一言则九人倾听，坐则古之，饮则先之，健儿不解其故。而末坐一冠者，似尝谋面，睥视之，则向斩马劫财之人也。谓健儿曰：“东君，尚识故人耶？”健儿不敢应，后生曰：“畴昔途中解腰缠赠我者？非子而谁！我侪岂攘攫者流？特于邮旁肆中，闻子大言恐世，故来与子雌雄，不意竟输我一筹。今来归赵璧耳。”遂出左袖三十金置案头曰：“此母也；于今一年，子当肖之。”又探右袖出三十金共予之。健儿不敢受，旁一后生拔剑努目曰：“物为人攫而不能复，还之又不敢取，安用此懦夫为！”健儿惧，急内袖中。乃治鸡黍为欢，诸后生不肯留，归金者曰：“翁亦可怜矣，峻拒之则难堪。”众乃止。时爨下薪穷，健儿欲乞诸邻，后生指屋旁枯株谓之曰：“盍载斧斤？”健儿曰：“正苦无斧斤耳。”后生踌躇久之，曰：“此事须让十弟，我九人无能为也。”总角者以两手抱株，左右数挠，株已卧矣，遂拔剑砍旁柯燃之。酒至无筭，乃辞去，竟不知其何许人。

健儿自是绝不与人较力，人殴之，则袖手不报。或曰：“子曩日英雄安在？”健儿则以衰朽谢之。后得天年终，不可谓非后生力也。

义士李伦表传

义士李鉴，字伦表，杭州郡学诸生，福建巡海道陈公大来之

幕客也。为人厚重醇朴，外不足而内有馀。陈公喜诙谐，善挥霍，多声乐之嗜；伦表则力崇俭素，终年不近色，与人言，呐呐然如不出诸口。事事与公相左，虽由性然，亦欲以身谏耳。若是，则公宜惮弗与居，即居亦不久。孰意其亲之爱之，信而任之，历十馀年如一日，虽骨肉周亲不啻也。

甲寅之变，耿藩遣使持檄至，约与同叛。时公方视事，见檄发指，对使手裂于公堂。入谓伦表曰：“纲常坏矣！吾辈处此当若何？”伦表曰：“公意何居？”盖先叩两端而后决其是也。大来曰：“海道不辖兵，难以议战，惟集同城文武合谋，奋死力图守，以俟天兵之至。济则君之灵也，不济则以死继。”伦表曰：“善。但守则必需积贮，乃今库帑罄悬，仓无斗粟，奈何？且虑同城文武，未必皆心此心，姑尝试之可耳。”言毕，促公早出。诇意集众之令未下，而所属文武已先易服以示右袒，且虑当堂毁檄明示不从，耿藩问罪之师旦暮即至，池鱼林木之殃在所不免，肘腋之内，即有伏戈反向、冀邀功于首事之一人者。公甫出即退，谓伦表曰：“事不谐矣！有死无二。但少一程婴、杵臼为宗祀耳，虽忠不孝，为可虑耳。”伦表曰：“先生岂疑我哉？设有不讳，我当仔之。此头可断，此言不可食也。”公笑曰：“知君必尔，姑以前言戏之。”言讫拜托，伦表亦拜而受之。公自是勇于殉难，无纤毫内顾于衷矣。遂偕妻、妾、爱女共二十有一人，同时缢首。

时公四子，惟居长一人名汝器者年十五六，馀皆黄口。殒殒死者，调护生者，皆以一身任之。然任之非易事也，此时地覆天翻，人心叵测，既以叛者为是，即指不叛者为非，同城文武，保无欲绝龙、比之后，以快操、莽之心者乎？此同时僚案之可虑也；且前此海禁甚严，公亦奉命惟谨，有愚民嗜利忘害，违禁出洋，以冀非常之获者，公必杀无赦。是以漳、泉二郡之民，奉公者戴之如母，藐法者疾之若仇。乘此纪纲灭绝之时，保无迁怒于噍类，以快其私忿者乎？此遐迩人心之可虑也。是此四孤也者，实为众射

之的。此即当日程婴、杵臼合谋，谓立孤难而死易，杵臼匿假孤于山中，婴出谬举，取假孤与杵臼而杀之，真孤始得苟延之势也。当日为屠岸贾者一，此刻则遍地皆其人矣。伦表以一身抚四孤，既三倍于程婴受托之数，又以一身充二役，安所得伪匿假孤之杵臼而杀之？其难之又难可知已。伦表则施妙用于其间：欲为忠臣抚孤，先结不忠者之心，以消其忌。此际之奸民，不惮死者而惮生者，不畏忠臣而畏逆臣，权在故也。伦表往来其间，饮酒剧谈无虚日，诸孤赖以安枕。

未几而藩使复至，移诸孤及伦表入省城安置。时海上有事，伦表虑生者行后，诸棺毁于兵火，且俱在海道署中，此时摄篆者系伦表同乡，故不令他徙，将来代之者至，岂复能容？故力请缓期，俟择土瘞棺而后去。使者不能待，欲先挟诸孤以行，伦表以明哲保身之术授之，使先行而已后至。孰意诸孤行后，郑锦率海兵登岸，耿割漳、泉二郡与之，使画疆而守，居其地者，无兵符不得出境，是以诸孤在省，伦表在漳，风马牛不相及矣。伦表安厝诸棺，各得其所，又皆覆以浅土，为将来移葬之地。时有总兵赵得胜者，驻兵海澄，料陈公必有厚积，计欲发其所藏。生前寄心腹者，惟伦表一人，未有不知其处者，执赴海澄讯之，与纪纲孔立同日被逮。立则陈氏之义仆也，挺身而出，谓司锁钥、计出纳者，惟我一人，李乃西宾，焉与内事？赵曰：“果如是，当直言无隐。”立曰：“主人素轻财，俸钱入手，随时散去，况负积逋以数万计，有亦偿债，岂获存留？”赵不信，拷之，所招如故，榜掠至数百而不死。次日复讯如前，始毙杖下。立妻有殊色，赵将内之。叹曰：“主为忠臣，夫为义仆，岂可以一人事仇而玷全家名节乎？”自经而死。赵志未遂，复将有事于伦表。时耿、郑不睦，郑疆告警，檄赵出师，赵系伦表于狱，俟归日处分。伦表幽囚困苦，备尝惨酷。后赵以抗耿被杀，伦表得脱返漳。不数月而王师至矣，耿乞降，郑亦复归于海。伦表遣人逆诸孤，为扶榇还乡计。詎料郑兵伏于草

莽，夺陈氏诸孤而去。伦表抢地呼天，谓我勤劳数年，冀抚诸孤成立，扶丧北返，然后冒死叩阍，乞圣天子奖誉忠臣而恤其后，乃今若是，是我负托九原，为善不终，何以见知己于地下！触顶流血，怨艾不已。时在新海道毓贤王公署中，王公劝慰再四，虽强为眠食，而五中摧裂，膏肓之疾，遂胎于此矣。

自是日渐尪羸，医卜皆云不吉。王公谓其子曰：“汝不劝父生还，必作异乡之鬼，汝能免于不孝乎？”其子泣谏不从，必欲以身殉知己。王公曰：“汝殉知己固宜，但闻两尊人在堂，望汝甚切。古之侠士，有亲在不敢以身许人者，汝独厚友而薄亲，权其轻重，无乃不可乎！”伦表闻之，幡然失色，乃诣诸棺所，哭别而行。夫以病躯历远道，兼之所欲弗遂，愤而继之以劳，求其弗死，不可得矣。然犹幸不死于道而死于家，天报善人，惟此一着，其余皆不可问也。

其尊人告予曰：“吾儿易箴之前，命家人设五神位于中堂，祀东西南北及中央土之五帝，家人询其故，谓五帝奉玉皇诏而来，将有以命我也。家人曰：‘若是，非特免灾，且多后福矣。’对曰：‘不然，其所以命我者，乃使治鬼，非治民也。’言讫，从容谈笑而逝。”予谓果如斯言，始足以服为善者之心，否则福善祸淫之说，几乎谬矣。夺颜回以年，斩伯道以嗣，皆若前车之既覆者也；仁义道德之事，孰肯复为之哉！

乔复生、王再来二姬合传

乔、王二姬，先前无名，皆呼曰：“姊”。乔晋人，即名“晋姊”；王兰州人，即名“兰姊”。既曰无名，则何以有“复生”、“再来”之号？曰：死后追忆，不忍叱其小字，故为是称，一则冀其复生，一则喜其再来，皆不忍死之之词，犹宋玉之作《招魂》，

明知魂不可招，招以自鸣其哀耳。

岁丙午，予自都门入秦，赴贾大中丞胶侯、刘大中丞耀薇、张大将军飞熊三君子之招，道经平阳，为观察范公字正者少留以舒喘息。时止挟姬一人，姬患无侣，有二妣闻风而至，谓有乔姓女子，年甫十三，父母求售者素矣，盍往观之？予曰：“旅囊羞涩，焉得三斛圆珠？”辞之弗往。适太守程公质夫过予，见二妣在旁，讯曰：“纳如君乎？”予曰：“否。”具以实告。太守曰：“无难，当为致之。”旋出金如干授二妣。少迟，则其人至矣，虽非殊色，亦觉稍异凡姿，盖纯任本质而未事丹铅者。

此女出自贫家，不解声律为何事，以北方鲜音乐，优孟衣冠，即富室大家犹不数见，矧细民乎？是日有二三知己携樽相过，命伶工奏予所撰新词，名《凰求凤》。此词脱稿未数月，不知何以浪传，遂至三千里外也。二姬垂帘窃视，予以聋瞽目之，非谓曲词莫解，亦且宾白难辨。以吴越男子之言，投秦晋妇人之耳，何异越裳之入中国？焉得译者在旁，逐字为之翻译乎！次日诘之曰：“昨夜之观乐乎？”对曰：“乐。”予谓：“能解，斯可乐，解乎？”对曰：“解。”予莫之信，谓果能解，试以剧中情事一一为我道之。渠即自颠至末，详述一过，纤毫弗遗，且若有味乎言之，词终而无倦色，予始异焉。再询词义则能明矣，曲中之味，亦能咀嚼否邪？对曰：“有是音，有是容，二者不可偏废；容过目即逝矣，曲之馀响至今犹在耳中，是何以故，莫能自解。”予更奇之。然信其初言，而终疑其后说，谓声音道微，岂浅人能辨？必饰词耳！乃彼自观场以后，歌兴勃然，每至无人之地，辄作天籁自鸣，见人即止，恐貽笑也。未几，则情不自禁，人前亦难扞舌矣。谓予曰：“歌非难事，但苦不得其传；使得一人指南，则场上之音，不足效也。”予笑曰：“难矣哉！未习词曲，先正语言，汝方音不改，其何能曲？”对曰：“是不难，请以半月为期，尽改前音而合主人之口，如其不然，请计字行罚。”予大悦。随行婢仆皆南人，众音嘈嘈，我方病

若楚咻，彼则恃为齐人之傅，果如期而尽改，俨然一吴侬矣。

事之不期然而然者，往往不一而足。此时身已入秦，秦俗质朴，焉得授歌之人？适有一金阊老优，年七十许，旧肃王府供奉人也。先主无归，流落此地，因招致焉。始授一曲，名《一江风》。师先自度使听，复生低徊之久，谓予曰：“此曲似经过耳，听之如遇故人，可怪也。”予曰：“汝未尝多听曲，焉得故人而遇之？”复生追忆良久，悟曰：“是已，是已！前所观《凤求凰》剧中，吕哉生初访许姬，且行且唱者，即是曲也。”予不觉目瞪口呆，奇奇不已，谓师曰：“此异人也，当善导之。”于是师歌亦歌，师阕亦阕，如是者三，复生曰：“此后不烦师导矣。”竟自歌之。师大骇，谓予曰：“此天上人也！予授曲三十年，阅徒多矣。数十遍而微知大意者，慧人也；中人以下之资，数百遍尚难释口，不待痛惩切责，未能合拍。乃今若此，果天授，非人力也。”斯言近实而未验，乃不三日，而愚智判然矣。因当日随来旧姬与之同学，均一曲也，人一能之，己百之，犹不免于痛惩切责，以是知师言不谬，而此女洵非人间物也。由是日就月将，无生不熟，数旬以后，师谓青出于蓝，我当师汝矣。客有求听者，以笨愚隔之，无不食肉忘味。复生曰：“乐必埙篪互奏，鸟必鸳鸯齐鸣，始能悦耳；兹以一人度曲，无倚洞箫和之者，无乃岑寂太甚乎！”予知此言为绛、灌而发，以同堂共学者之非其伦也。

未至兰州，地主知予有登徒之好，有先购其人以待者，到即受之，不止再来一人，而再来其翹楚也。始至之日，即授以歌，向以师为师，而今则以复生师之矣。复生之奇再来，犹师之奇复生，赞不去口，而且乐形于色。谓而今而后，我始得为偕凤之凤、合埙之篪矣，请以若为生而我充旦，其余脚色，则有诸姊妹在。此后主人撰曲，勿使诸优浪传，秘之门内可也。时诸姬数人，亦皆勇于从事，予有不能自主之势，听其欲为而已。岁时伏腊，月夕花晨，与予夫妇及儿女诞日，即一樽二簋，亦必奏乐于前；宾之

嘉者，友之韵者，亲戚乡邻之不甚迂者，亦未尝秘不使观。如金陵之方邵村侍御、何省斋太史、周栎园宪副，武林之顾且庵直指、沈乔瞻文学，皆熟谙宫商，殚心词学，所称当代周郎也，莫不以小蛮、樊素目之，他可知已。予于自撰新词之外，复取当时旧曲，化陈为新，俾场上规模，瞿然一变。初改之时，微授以意，不数言而辄了；朝脱稿，暮登场，其舞态歌容，能使当日神情，活现氍毹之上。如《明珠·煎茶》、《琵琶·剪发》诸剧，人皆谓旷代奇观。

复生未读书而解歌咏，尝作五、七言绝句，不能终篇，必情予续，是即夭折之征；性柔而善下，未尝以聪慧骄人。再来之柔更甚，尝以嘻笑答怒骂，殴之亦不报，有娄师德之风焉。声容较之复生，虽避一舍，然不宜妇而宜男，立女伴中似无足取，易妆换服，即令人改观，与美少年无异。予爱其风致，即不登场，亦使角巾相对，执麈尾而伴清谈。不知者目为歌姬，实予之韵友也。

予数年以来，游燕、适楚，之秦、之晋、之闽，泛江之左右、浙之东西，诸姬悉为从者，未尝一日去身；而能候予之饥饱寒燥，不使须臾失调者，则二人之力居多。壬子冬，复生诞一女，以不善摄生致病，然素善讳疾，不使人知。其意无他，以予终岁浪游于外，知其疾必阻之，恐作失群之鸟，不获偕行故耳。癸丑适楚，客于汉阳，病渐加而容不减，非惟不治药饵，仍望以丝竹养生，因所耽在是，非此不足陶性情也。越夏徂秋，稍有倦色，予始知而药之。奈楚无良医，一二至者，皆同射覆，非曰寒，即曰疟，即曰中暑，总无辨其为瘵者。病剧半载，从未恋榻，惟临终数日始僵卧不起，前此皆力疾而行，仍施膏沐。同侪讯以故，答曰：“非不欲卧，恐以不起愁主人，徒扰文思，无益于病者。”时予方辑《一家言》之初集未竟故也。言毕，即令焚香祝天，谓予得侍才人，死可无憾，但惜未能偕老，愿以来生续之；又以此语囑同辈，令勿使予知。诸姬中，惟与再来最密，临歿，以女授之，属其抚育。

凡人之死，未有不改形易貌，或出谗语；渠自抱病至终，无一诞妄之词，诀语亦无微不悉，死时面目，较生前觉好。含敛之物，悉经手捡目视，倩人盥栉毕，乃终。予方恻悼不已，诸姬复以前言告，予益抚棺恸哭，不忍独生。

甲寅入都中，诸姬不与，惟再来及黄姓者二人与俱。再来居常安好，从予七年，不识参、蓍、芝、术为何味。忽于舟中得疾，天癸不至，腹渐膨然，谬以为娠。盖素望诞儿，凡客赠缠头，人皆随得随用，彼独藏之，欲待生儿制襁褓，至是误以可忧为可喜。如是者屡月，病不稍减而经忽至焉，始知从前见食而呕者，病也，非孕也。始则认忧为喜，今则转喜成忧矣。又以向受复生托孤之命，诂意母亡未几，女亦旋歿，未免负托九原，时时抱痛，皆致疾之由也。予未出门时，诸姬中有一善妒者，好与人角，予怒而遣之。再来不解予意，谬谓一遣百遣，乃向内子及诸妾曰：“生卧字家床，死葬李家土；此头可断，此身不可去也。”内子故设疑辞难之曰：“主人老矣，不若乘此芳年，早求得所之为愈。”再来曰：“主人老，而主母之中，尽有艾者；诸艾可守，予独不能安于室乎？”诸妾又曰：“我辈皆有子，汝或不生，后将奚恃？”对曰：“主母恃诸郎君，予请恃其所恃。”内子及诸妾闻之，无不沾沾泣下。有一人而三男者，嘉其贤淑，欲以幼子子之，再来曰：“姑缓数年，如果不育，请践斯语。”其性之贞烈若此。临逝，执予手曰：“良缘遂止此乎！”时欲泣无声，且无泪矣。二姬之年皆终于十九，再来少复生一岁，亦后死一年。

噫，予何人哉？尝试扪心自揣：我无司马相如、白乐天、苏东坡之才，石季伦之富，李密、张建封之威权，而此二姬者，则去文君、樊素、朝云、绿珠、雪儿、关盼盼不远，是为何故？且造物既予之矣，胡复夺之？予是则夺非，夺是则予非，必居一于此矣。且予又有惑焉：妇人所尚者二，貌与年也。予貌若何？无论安仁、叔宝，不敢与之比衡，即偕王粲、左思并立，犹自觉形

秘；至与古人序齿，即赴耆英、真率二会，犹居上座，矧诸少年场乎？若是，则此二人者，宜求为覆水之不暇，奈何反作坚冰不解，自甘碎裂于盆盎中邪？或曰：推其本念，究竟出于怜才。夫才之有无、多寡，姑置弗论，即曰有之，亦惟有才者斯能怜才，彼非多识字、善读书之人，知才为何物而怜之乎！此千古难明之事，兹惟传其行略，以示不忘而已矣。若谓二姬应为我得，则人皆有目，吾将谁欺？

张壶阳曰：情缘奇合，古今不少概见。笠翁以肉帛之年，得尤物于秦、晋之隙，以之充后陈，容或有之；使之谐声律，不惟地非其产，亦且用违其才，何期夙根凑合，如此之奇也。得此娱老是乡，且虑有丁谏之忧，乃竟双双遐举。其爱良人也甚宜，不然，世岂无孙秀、韩熙载其人侧目以待？但愧我无贾至、杨公南之福，不及见元载瑶英耳。

佟碧枚曰：昔人谓相如传殆其自作，太史公爱其文词，不忍去，因为删拾成篇，入之《史记》。笠翁之文词及一种深情逸致，真不减相如，异日有太史公出，必将采而著之。二姬可以不朽，视世之艳冶自命而仅享瞬息之荣者，其所得大小、厚薄为何如也？

毛稚黄曰：孙仲谋语周郎：乔公二女虽流离，得吾二人为婿，亦足为欢。今乔王二姬得笠翁之文以传，虽夭亦快。且使其后笠翁而死，则何从得此？然则其不寿也，乃其所以为大寿也欤！

朱静子传

朱静子者，杭人，名弦，予友毛子稚黄之素臣也。曷言乎“素臣”？曰：静子之归毛子，阅十有五年，以处子始，以处子终；犹人以左丘明臣素王，臣之以心，臣之以传《春秋》之功，未尝实以身事而縻其爵与禄也。毛子非故欲妾之以名，静子亦非不欲臣之以实，奈何静子来，毛子病，毛子愈，静子死，似造物厄之

以素，俾作妇中丘明者然。此所以为奇，此予所以为作传也。

静子之入门也，年甫十三，毛子惜其幼，使待年于阃。阅二载，可御矣，微狎近之，辄面赧避去。毛子仍养其幽贞，弗遽使当夕。再逾年而毛子之尊公卒，寝苦次逾年，病遂始矣。一日剧，属后事于家人，谓此女年少，宜嫁作良家妇，勿多受财，足备奩，遣之可矣。时静子在侧，一闻斯言，且怒且哭，谓吾身岂传舍乎哉？有之死靡他而已！毛子自是益重之。病十载不愈，妇与他姬皆没，抚诸子，理中馈，皆任以一身，尤善调摄病者，以均寒燠、防饥节饱代医，择饮食之有补于人者代药。毛子濒危十馀载，终能免于不讳者，谁之力欤？

乃病者稍有起色，而不病者反病，且入膏肓。毛子救之甚力，未尝不以医我、药我者医之、药之，而不如造物故欲示奇，使作古今来未有之妾，俾闻者悲之、吊之、纪之、传之，不忍其与草木昆虫同腐朽也，年二十七而溘焉以歿。呜呼！岂事病者过劳而致此欤？抑天生此女，原为毛子已病而设，病愈则药屏，犹古所云“飞鸟尽，良弓藏”者欤？先是，星家推静子属虎，生时以亥，谓虎阴兽而厉，亥阴时而终，此女性必毅，法当克夫。及毛子病甚，静子谓诸女伴曰：“主人疾岂由我，星者之言果验乎？若是，则我求先死，损其筭以益主人。”由此语测之，或者静子默祷于天，愿以身代，而天果昭其诚焉，是亦未可知也。

性素贞慤，不苟言笑，虽久司家政，未尝自名一钱、自食一味，主人或有贻予，辄藏以待乏，他德皆称是。毛子哀之，以其所抚诸子豹臣奉为慈母，执丧三年，而主附庙，报之亦云至矣。诸子虎男为作传，词简而意尽，乃毛子思之弥笃，又以属予。时予方自悼乔、王二姬，为作合传，传毕，遂为述此。静子有灵，必覩我二姬于泉台，烦以一言慰之曰：“汝侍衽席六、七年乃亡，其非素臣也明矣；我目犹可瞑，汝复何歉于中哉？”吾知其必相视而昵，莫逆于心也。若是，则汝三人之留连地下，不犹我偕毛子之

容与人间乎？

毛稚黄曰：人虽微，事虽小，却奇。此文凌虚摭实，俱能写照传神，柳子厚《雷五志》不足道矣。董文敏云：田夫村女，有至性至行，便是奇人。文能洗发入妙，亦便是奇文。

张壶阳曰：虚花悦目，贞女归空，稚黄可与张咏、沈特并驾房帷。得笠翁一诔，立使粉骨生香。文中崛奇敷运，大似《淮南》、《尉繚》等作。

赞

许青浮像赞 有小序

青浮何人？檄彩许公之贤嗣也。公以吾郡别驾，即擢吾郡司马，怜才好士，客我于署中者凡二年。自鼎革以后，音问不通，闻已溘焉朝露矣。今得见青浮而复睹其小像，神情旷逸，俨然夫子之在当年。闻之有若似圣人，不闻伯鱼似孔子。予谓子之于父，不求肖而肖存焉，神在故耳。吾恐有若之似，终不能比于伯鱼之不似也。是为赞。

松间之人，吾熟识汝。昔冠进贤，莅吾桑梓。蔽芾甘棠，父母孔迺。思之不得，胡来乎此？卒然遇之，神情宛尔。谛而视之，非吾君也，吾君之子。

范晴斋像赞 有召仙异术

人与人爲徒，汝与天爲徒。神仙寄喉舌，妙理不虚无。苟非正直无私之上格，何以不倩他人执笔而独眷眷于直书不讳之董狐？睹君之貌，识君之初。原是五城十二楼中之座客，降为能书不语之讷夫。天机似泄而非泄，上帝虽疏而不疏。焉知今日不自属草

而仅为仙人运笔者，他日不自吐灵秘而复假手凡人以作书？

梁冶湄明府西湖垂钓图赞

李子遨游天下几四十年，海内名山大川十经六七，始知造物非他，乃古今第一才人也。于何见之？曰：见于所历之山水。洪濛未辟之初，蠢然一巨物耳。何处宜山，何处宜江、宜海，何处当安细流，何处当成巨壑，求其高不干枯，卑不泛滥，亦已难矣，矧能随意成诗、而且为诗之祖，信手入画、而更为画之师，使古今来一切文人墨客歌之、咏之、绘之、肖之，而终不能穷其所蕴乎哉！故知才情者，人心之山水；山水者，天地之才情。使山水与才情判然无涉，则司马子长何所取于名山大川，而能扩其文思、雄其史笔也哉？

平章天下之山水，当分“奇”与“秀”之二种。奇莫奇于华岳及东西二粤诸名山，是魁奇灏瀚之才也；秀莫秀于吾浙之西湖，是清新俊逸之才也。西湖者，山水之尤物。前人方之西子，后人即以名之。盖深知其窈窕难名，而借人以名之者耳。是造物之才，畅乎彼而尽乎此矣。

然才情所萃之地，必得一才人主之，斯为得所。主西湖者，向得苏、白二公，相与盘桓者，不过数载，而千百年后咏西湖之胜者必及之，未尝一日去口实。后乎此者，虽不乏人，而政事、文章足与湖山媲美，堪蹑二公芳轨者，则莫如今日之梁冶湄先生者矣。先生之典西湖，较二公之时与势，其难奚啻十倍。二公当治平之日，莅民有暇，得以啸咏湖山，宜也。是造物之于人，非止不窘其才，而且纵之使出，以天、地、人之三才合而为一，点缀升平，其为诗文，何难之有？冶湄先生到未期年，即值邻封有事，师旅往来，以此为牧马屯兵之地，遂致淡妆浓抹之西湖，沦为蓬

首垢面之西湖。他人处此，必坐视凋残而莫能救，当斯时也，虽有苏、白之才，向何地施其啸咏乎？先生之处盘错，如摧枯拉朽，游刃之下，恢乎有馀。安危定乱之功，与峰峦比峙；歌功颂德之口，与禽鸟争喧。不转睫而蓬首垢面之西湖现出本来面目，其为淡妆浓抹如初矣。是不窘造物之才而且能纵之使出者，冶湄先生是也。迹此观之，贤于古人远矣。

谢子文侯，章子素臣，绘事中两名手也，一为肖像，一为布景，不止绘西湖一隅，竭先生所辖之地诸名胜而合为一图，洋洋乎大观哉！图成而索赞于余，余谓寥寥数言，不足以书先生保障西湖之梗概，因先述其才之充裕若此，而后为之赞曰：

咄哉西湖，寰中怪事。胡以神奇，遂能若是。竭后土之精灵，萃造物之才智。高仅取其插汉而无事干天；深不期于学海而还其为地。少虎狼之害，多离兽之娱；无波涛之险，有舟楫之利。近城郭而便嬉游，远市廛而绝腾沸。诚哉山水之菁华，允矣清幽之极至。主其地者为何人？称斯土者为良吏。

前有苏、白，后有梁公。政能驱鳄，才善雕龙。清若鉴眉之碧水，明如照胆之青铜。烽火未宁而尚勤吐握，诗书不辍而仍理丘兵。保三竺于灰烬之末，出两湖于粪壤之丛。西子之面容未改，赵公之琴鹤犹从。时乘一叶，任水西东。不冠不履，如叟如童。其所钓者，不在鱼而在满船明月；其所利者，不在物而在两袖清风。披斯图也，尽宦游之胜概，识吏隐之高踪。千百年后，欲访甘棠遗迹者，不在松涛柳浪之下，即在青溪碧涧之中。

余霁岩使君像赞

儿时读《晋书》，至“手挥五弦，目送飞鸿”二语，心窃疑之。

疑其手在此而目在彼，心有二用，视听皆不专也。及读欧阳永叔《醉翁亭记》，始大悟，知其挥弦之意之不在弦，犹醉翁之意之不在酒耳。既不在弦，则并其目送飞鸿，亦是偶然之事。我目在彼，而飞鸿过之，是飞鸿就目，非目之有意觅飞鸿也，有意觅飞鸿，飞鸿岂能至哉？则是此二语者，惟大解人悟禅理者能之，嵇康而外，不多见也。孰意千载后，忽见于霁岩使君之《听琴图》中。既听琴矣，胡复垂钓？盖所钓非鱼，犹之送飞鸿而以手代目耳。

乃余谛观是图，又匪特追宗叔夜，兼有伯牙、子期之风焉。借听琴雅事，坐知己于一堂，而所谓知己者，非鼓琴之人，相与听琴之人也。先生与沛甄周子有水乳针芥之合，周子之才固足重，而重才如使君，岂今时数见者哉？先生绘周子之容，周子宜绣平原之像，一施一报，均不可少也。为之赞曰：

当今之世，斯文扫地。士贱如佣，宦尊于帝。即或偶偕，非久即弃。因好龙之少真，识买骏之非易。

乃有人焉，忘势忽利。贵贱皆同，初终不异。非特形影相俱，即在画图弗离。此交道之休征，亦世风之奇瑞。览斯图者，岂可略此古心，徒夸遗义？

至其手执纶竿，耳亲乐器。奔趋服役者，童中之婉娈；缱绻相亲者，女中之佳丽。是不过绘图写照之馀文，乐境闲情之碎事而已矣，何足为使君赞颂乎哉！

吴念庵采芝像赞

造物之产灵芝，与生人中之异才等。草木之有根者，人人得而植之，芝则无根之物，其生也，莫知其然而然，犹凤凰之无卵可哺，麒麟之无胎可娠，盖以天地为卵而造化为胎者也。芝草无

根，以山川之秀气、造化之灵气为根，故得之者可以致瑞，食之者可以长年。

异才之生也亦然，卿相之贵，素封之富，虽曰无根，而实有基之者，或为祖宗坟墓之荫，或由勤苦造就而成，才则特然而生，一无所假。人谓才之生也，由于诵读，是诗书即其根也。予曰不然，才犹禾苗，诗书犹粪壤，粪其田而使熟者，诗书也，才之种子不与焉。无才而诵读，读之既成，亦不过章句儒生而已矣。古今岂少读书之人哉？边孝先经笥其腹，齐陆澄书厨其胸，究不得与屈宋班马、韩柳欧苏诸人并有千古者，才不足耳。以是知异才者，人中之灵芝；灵芝者，草中之异才也。因为吴子念庵题采芝图像而畅论及此。

念庵之为，人潇洒绝尘，其才亦瑰玮而卓异。诗曰：“惟其有之，是以似之。”有类芝之才、而又慕四皓之高风，斯有采芝之逸兴，否则画牡丹而树槐棘矣。为之赞曰：

岷山之阳，地僻如商。无土不沃，无草不芳。瑞气韞结，芝出高冈。既饶神采，复多异香。卿云冒乎其顶，灵草厕乎其旁。若有所为而始出，诂无所待而相望？

爰有畸人，葛巾野服。高致若松，澹味如菊。三尺之童，随以作仆。若有意乎寻芝，适相逢于幽谷。乃命奚奴，洁身而采。未折祥芬，先批瑞靄。名为一色之紫芝，实备文中之五彩。

披斯图者，皆谓此老才如宋玉，貌类子房。正宜用世，胡遽思藏？采芝者隐人之事，餐芝者益寿之方。胡为乎弃功名于有道之世，防衰老于少年之场？予独曰不然，贵贱无常，惟天是贲。青云白云，并行无碍。欲识采芝之念何居，但问醉翁之意安在。

王茂孳像赞

此老何人？长眉阔额；七尺其躯，更饶精爽。宜着锦衣，胡披鹤氅？采药何为？劳吾悬想。似识其容，沉思半晌；始知为十六年不见之茂孳，其意气、风裁，久矣见称于吾党。

斯人也，向为高儒，木鸡自养。七字吟成，万人争赏。才堪一第而故作班超；力能封侯而愿为李广。时不可为兮，即退耕南亩之云；学仙有得兮，故自刷芝田之壤。本是蓬莱顶上人，宜脱嗜欲尘中网。吾所虑者，世事纷然，英雄绝响。不无劝驾之公卿，三顾其庐而相强。料子安贫乐道之心坚，必不见猎羨鱼而技痒。

张诗宜像赞

诗宜孝行著于乡党，又笃友于之好，沈绎堂太史颜其居曰：“孝友堂”。因其行居二，适合“张仲孝友”之句云。

此君之貌，似柔而刚，此君之气，不飞而扬，外多风致，内饶肝肠。斯人为谁？请射其藏。金华殿前之禹，北平侯后之苍。勇则不难为翼德，智亦何逊乎子房？不得志而娱情闺阁，固有似乎画眉之敝；使得志而殚心功业，焉知不作埋轮之纲？人但知其工于临池，而为书法最精之颠旭；乌知其聪明绝世，使能潜心词翰，焉知不为声誉籍盛之孟阳？斯人也，孝友既合于前人，复奇其行之居仲；才行悉侔乎先世，不愧其姓之为张。

张敬止网鱼图赞

鱼我所欲也，因自名笠翁。以其才薄劣，于世无所庸。人地务相宜，所以泯其踪。张子命世才，倜傥而英雄。结驷拟千乘，食禄期万钟。胡为亦萧散，托足于飘蓬。覆雨笠于虎头燕颌之上，被烟蓑于鸣珂佩玉之躬。不特渔其身，而复渔其妇，使之结网以相从。世莫知其寓意，予请测以私衷。太公居北海，钓隐安贫穷；苟不遇西伯，将以渔父终。时至而命随，变化如鱼龙。张子自期以吕望，故不惜卑贱其身容。不知者将谓追踪于志和，而法张氏之华宗。噫，亦何小视斯图而强绝异者以相同也耶！

八十四翁张文吾像赞

此像肖谁？吾家老子。发则皤然，心犹孩始。不驾青牛，行而善止。日拥图籍，遂忘寒暑。非此古人，孰堪与处？种德维桥，收功有梓。孙枝愈茂，蔗境弥旨。睹其貌而识其心，观其德而量其齿。福可邀天，寿难屈指。再过百年，形犹若此。俗眼视之，以为将近八百岁之篴簪；而自天上仙班视之，则以为甫出左腋之李耳。

又题小册

睹君之像，徘徊不已。既赞轴头，复题册子。虽曰有其德者，必有其年；然而尽有贤人，寿难若此。犹记二十年前杖于乡，后

十年兮杖于国，而今复杖于朝矣。继此而耄、而耄、而期颐，且焉知不再益其年而倍蓰？问操何术以至于斯？愿君授我馀丹，而使得附刘安之骥尾。

刘了庵先生像赞 双山给谏之封翁也。为古学名儒，举乡荐不仕，诲子及孙，皆登上第。

坐者何人？是僧非僧；如其果是，指我迷津。人曰不然，老子后身；道非常道，名非常名。言著五千，舌则常扞。起家儒氏，足蹶青云。致君有术，用之则行；惜遇沧桑，抱志弗伸。虽曰未伸，貽厥后昆；簪纓屡世，皆属名臣。斯人也，合儒、释、道之三教于一己，萃富、寿、多男之四代于一庭。其号了庵，其姓卯金。阿谁不知，尔目犹瞠。欲向此公而问道，须再读十年，而后可游于西川夫子之门。

汤圣昭使君小像赞

仕品有二，曰人曰仙。人吏志高，仙吏气恬。人吏疏泉石，仙吏薄轺轩。人吏赫然而可畏，仙吏翛然自适，而绝不挂科名禄位于长眉广额之间。吾未睹圣昭汤子之为吏，而识其人于席苦枕块之年。其形卓尔，其意悠然。其胸冰雪，其致云烟。与之纵谈竟日，宛然未释褐之吾辈；而不知其身都显贵者，已经一迁而再迁。出其绘像，索我刍言。披襟扞膝，脱巾露颠。一拳之外，不留芥纤；宜乎清操，与石比坚。吾闻轻富贵者，富贵偏集其身而不去；慕丘壑者，丘壑虽乐与为缘而不即与为缘。披斯图也，知汤子之为官也正未艾，而神仙飘举之事，非其身后，即其生前。

抡仙、抡汝、抡毓三侄孙小像赞

长枕大被，吾宗有例。帝王家风，匹夫能继。数逾二难，独昆双季。鼎足而撑，一家天地。定省之暇，熙然忘寐。树下风生，铛中泉沸。共把臂而入林，各选石兮成位。或哦新诗，或晰疑义。倡此雅俗，以风有位。此风萃于门内兮，则为家桢；散满域中兮，即为国瑞。吾愿胥天下之为兄弟者，悉仿此图以为心，庶敦友于之风于莫坠。

罗上极像赞

少为宁馨儿，蔚乎谢庭芝。及其既壮而强仕，犹然绰约乎风姿。中肖其外，明而善知。亿则屡中，才不费思。吾于此识皮相者不尽为失，而安仁、叔宝之胸臆，无不现乎其须眉。

朱骏文像赞

旬日之间，题像六七；皆令我忙，于此独适。长安道上皆劳人，何处飞来仙子逸？独坐匡床，好游懒出。罗山水于膝前，闭松风于一室。索书书来，呼琴琴得。有解事之奚奴，无到门之俗客。伊何人斯？骏文词伯。惜登名于天府，将鼎餐而肉食。负此溪山，多离少即。愿假丘壑于笠翁，代守仙源于弗失。俟汝功名立归来兮，仍向此中避劳迹。

沈亮臣像赞

居杭十年，仅得一友。沈子亮臣，淡而能久。才堪廊庙，惜乎未偶。婆世以心，活人于手。近居京洛，其名益吼。十年不遇之故人，一旦相逢皆白首。出其像以示予，问斯形之肖否。予也初见斯形，不知为某。覩颊上之三毛，悟伊人兮八九。其貌如愚，其容似酒。其神在目，其心在口。睹斯形也，鄙曹交之食粟而长，怪休文之腰细如柳。与其美而愚，毋宁智而丑。吾闻具古貌者必有古心，予犹及见三代之遗风于是叟。

曹细君方氏像赞 有序

石臣曹子，以美少年而工词翰，其阉君方氏，亦闺秀而备德容者。造物于人之伉俪，往往颠倒其形与情而后合之，妍于内者媿于外，或丰其表者啬其中，此予《奈何天》传奇之所由作也。石臣夫若妇何修而得免于此？有作《双美传》以奇之者，非人言过实可知。奈何琴瑟之欢未及十载，而曹子遽有鼓盆之戚，虽云好物不坚，红颜命脆，亦造物者之终于吝此，不肯反常而趋异也。

甲寅夏，予以访戴过坞兹，石臣怀细君像示予，为之涕泣索赞。谓此意出自内人，濒危有遗言，冀得李子片语，死当瞑目。因在生时，非湖上笠翁之书不读，知此老惯操三寸不律，起亡者而存之，只今梨枣之上，俾泉下人凛凛有生气者，谁之力欤？噫，予何人斯，能使妇孺知名若此？但见石臣悼亡甚戚，而予亦在连丧二姬之后，馀涕未收，导之即出，故不能已于言，而且言之不禁其娓娓也。

妇人之美有三，曰德、曰才、曰色。兼其美者，百中无几；得其配者，千中鲜一。图中之人汇其全，人咸以此尤造物：于汝何私？待人何刻？造物曰：我实不然，请观其卒。人之云亡，天兮少慝。如其不然，何以示至公于人，而使知人事不齐之画一？仅存死像，以偶生匹。琴不弹兮有声，口无言兮欲泣。身不死于色衰之年，名始芳于咏絮之日。君不见桃花历乱李花残，欲睹芳姿安可得！曷若借此图以驻娇容，庶几百世千秋饶粉泽。湖上笠翁之为是言也，虽曰徐君之剑，未尝索我于生前；而欲景延陵季子之高风，不妨追赠其人于既歿。

杨子亦禅像赞

佛将持世，无发弗髡。迺来绘像，十人九僧。貌虽近似，神则径庭。亦禅杨子，神朗气清。未具佛面，先具佛心。心兮弗假，面遂逼真。我睹斯像，如见世尊。其为人也，恶杀好生。两居幕府，皆拥万军。助筹帷幄，志在立勋。苟可勿杀，即与图存。所活众多，是谓善因。宜其眉际，若覆慈云。字曰亦禅，实孚其名。兀坐匡床，心无所营。殆学庄周之坐忘，而所谓嗒焉似丧其偶者非欤。人谓杨子固有用之材也，胡为乎使之终年不出而盘礴山林？予曰：非其时也，是不妨暂为陇中诸葛，而且作《梁父》高吟。

佟寿民方伯拥书图赞

先生之神安以舒，先生之形丰以泽。图阁之容，封侯之骨。其外若仙，其心则佛。即其所拥而视其所求，已非寻常士大夫之所

能及。其为官也，前拥干旌，后拥棨戟。群僚百执，拥拜于前；妙舞清歌，拥侍乎侧。而先生之所好不与焉。谓虎头将军曰：吾所好者，不在大贝天球，而在牙签锦帙。子当坐我其间，而裨作南面百城之佳客。噫，世事纷然，苍生岌岌；拨乱需人，先生其出！

郑乘文像赞

此像为谁？吾能识之；非惟识之，亦且密之。一生好学，旦而夕之；家惟硯田，耕而力之。有才弗售，天虽厄之；腹中经纶，人难匿之。莛莠有口，仕绅诘之；无语不当，施而訖之；利兴弊除，凡民德之。所学能行，何须职之？力能丰财，好施嗇之。以友为命，饮之食之。将伯之功，亦尝得之。家住吴山，烟云集之。时登其巔，杖藜翼之。手不善谈，而喜人奕之；性不喜饮，而不怪他人之溺之。其为人也如此，与之交者，安得不见而昵之、不见而忆之？有心当世者，安得不未见而物色之、既见而矜式之？

家石庵棠棣芝兰并茂图赞

人生百年，贵能行乐。忌舍目前，求之寥廓。喜为汗漫之游，耻受妻孥之缚。予尝怪之，目为行脚。今览斯图，如闻木铎。真乐无过于天伦，美景不由于穿凿。父子雍雍，则睹庭花槛草，尽为谢安石之芝兰；兄弟怡怡，虽住圭窦华门，亦是唐玄宗之花萼。矧君家父子兄弟所居为绿野之高堂，所登乃石渠之邃阁也哉！

朱次公四时行乐图赞

咄哉斯图，谁人所作？状我次公，肖其卓荦。度若渊潭，气如山岳。才为百炼之金，心则未雕之璞。人但知其外富龙文，内多豹略；而乌知其凌云倒峡之才华，苟施之于礼乐文章，无不可以黼黻皇猷而绰绰。集众美于一身，享四时之百乐。看花围炉，聊适兴于家庭；洗马射雕，用寄情于寥廓。虽然，此皆次公未得志于时之所为也。时事孔艰，英雄出幕。行将为尚父之鹰扬，奚暇为鲁人之猎较？烽靖烟消，疆开土扩。斯时也，觅其人于金马之门，睹斯像于麒麟之阁。

辯

回 煞 辯

回煞之说，不知昉于何时？大抵殷俗尚鬼，其时士大夫欲神生死之事，故设为是说，愚民信以为实，遂蔓延至今，未可知也。

人死，未卜殡殓之期，先筮回煞之日。至其日，举家徙宅避焉，虽僮仆、鸡犬，靡有留者。未避之先，埒羹糗牲醴于堂，以俟其来享；又筛蔑灰于几席之上，及巷弄门闾之间，以验其来之迹。夫煞之果回与否不可知，而猫犬乌鹊之属，见室无人，来啄牲糗，爪痕印地，家人见之，遂以为神果来也。夫迹形之所出，形之不有，迹于何来？甚矣，小民之愚，而传说者之过也！

余生平恶闻影响之谈，于妖邪惑众之事，必辟之是力。己巳，丁失怙忧，日者告余曰：“某日回煞，请徙宅避之。”予曰：“予惑是久矣，请与子辨之。煞果有乎？”曰：“有。有雌煞，有雄煞。人死则二煞与魂相依，若罔两与影之不相脱也。”“有则果回乎？”曰：“焉有人死而煞不回者！”“回则果当避乎？”曰：“趋吉避凶，古有明训，奈何不避？”予曰：“此予所以惑也。夫无煞则不必避，使诚有煞，则又不当避。孝子于亲之歿，有刻木以肖其形者，有于诗书、杯棬征其手口之遗泽者，皆以亲之不可再见也；今既惠然肯来，将逆之不暇，何避之有？”日者曰：“煞神枭恶，触之则祸作；非避亲也，避煞神也。”予曰：“然则予惑滋甚！吾闻光明正

直之谓神，慈善岂弟之谓神，未闻不以德著而臬恶是闻之得为神者也。若啜牲糗于无人之地，遇人则降之殃，此殃厉之为，而神为之乎？”日者曰：“然则杭人作乐以迓煞，子又以为何如？”予曰：“迓则近情，而丧中陈乐，又叛乎礼，特彼善于此耳。”曰：“以子言之，必如何而可？”予曰：“筮其期可也，絮酒击牲以待之可也。若举家徙宅而避之，是塞人子念亲之心，开天下倍本之渐，此先王之教所不容也。”日者“唯唯”、“否否”而去。

予于是夕，张炬设席于中堂，诵《蓼莪》之篇，读大小戴之记，涕泗达曙，而不闻影响。作《回煞辩》。

乌鹄吉凶辩

乌、鹄之取憎爱于人，以其声系吉凶也。人之吉凶何与彼事，乃以口舌献媚，亦复招尤。使其声于人之吉凶，果万不爽一，则乌、鹄一蓍龟也。蓍龟告吉于人而人喜，告凶于人而人不敢怒。乌则不然，薄言往愬，而怒是逢，亦何自渎其灵欤？或彼自言所言，无关休咎，人心之爱憎，自以疑忌而生。若是，则得爱者幸，而蒙憎者冤矣。夫鹄不果吉，乌不果凶，世人亦屡验之，无如喜怒之怀，有触即发，若有恩怨积于中者。此何以故？曰：以毁誉之入人深也。誉鹄者众，故有闻即喜；毁乌者繁，斯无遭不怒。

孔子曰：“众恶之，必察焉；众好之，必察焉。”乌、鹄非人，其蒙毁誉类乎人，故得以察人之察察之。夫言辞视乎其人：其人也君子，其辞必藹而吉；其人也小人，其辞必厉而凶。今鹄果君子而乌果小人乎？是未可知。然尝稽之载籍矣：卦验云：“鹄者阳鸟，先物而动，先事而应。”《淮南》云：“乾鹄知来而不知往。”则鹄鸣之吉，洵有由来。至于乌之兆凶，则不知何据？闻之，乌孝鸟也，能返哺。虞帝至孝，则集其庭；曾参大孝，则萃其冠；武

王能卒父业，故火流为乌；萧放庐墓而来驯；颜乌居村而衔鼓。夫羽族至众，乌独以孝闻，是亦慈而祥者矣。闻其声者，如闻孝子之慨叹，我有其德，则喜为相感之符，不则当萌“人而不如”之愧，奈何不祥其音而叱之？以是为不祥，则《蓼莪》亦不祥之诗，而《孝经》亦不祥之书乎？若乌中有枭，则诚为不祥之物矣，齐景公恶闻其声，置白茅禳之。夫枭性食母，语曰：“乌反哺，枭反噬”。顺逆相背。然则非恶枭也，恶其不孝也；不孝者恶，则反其行者，岂仅不当恶乎？考乌之往迹，其兆祥且甚于鹊：衔珪于周而代殷，夹飞于越而反国，头白于燕丹而太子归，群噪于何准而女为后。其余巢门、止柏、鸣舆、引路、集戟诸祥，难更仆数。虽偶尔巢殿为灾，随车致败，然鹊亦尝以巢帆、巢车致变，何独恕彼咎此？

吾闻休咎不在物在人，善者得灾异鲜凶，不善遇麟凤非瑞。若是，则乌、鹊二物，吉则偕吉，凶则并凶，而人之爱憎终不能齐，岂非惑于所听乎？故曰“毁誉之入人深”，非臆说也。抑又闻之，乌之形好声丑者，鸛鸟是也。然则仁而不佞，其乌致憎之由欤！

露 布

獬豸讨中山狼露布

盖闻毒莫如蛇，犹效珠衔之报；暴宁似虎，曾酬蓑掩之仁。是类俱带人心，伊谁独仍兽行？

今闻中山狼食恩人一事。当其出山逢敌，已知九死之该；负箭投林，犹幸一生之或。踉跄遇客，安知非收利渔翁；悠忽行人，强使为放生居士。俯首酷邻狐媚，依人绝类猫柔。有某者，断不胜慈，翻怪杀蛇太忍；仁能昏智，自云养虎何妨。拔矢镞于肋边，心伤奇痛；吮疮痕于血底，口带馀腥。营兔穴以埋藏，解鹑衣而掩覆。迨至斃军大索，儿为从井之两伤；犹赖谰语弥缝，始脱重围而再造。此诚起死而肉骨，所当矢报于糜身。奈何创血未干，饱德之盟已背；酬私未效，饥肠之饵先充。剿忠信之穷奇，闻而未睹；触德行之混沌，怪也难经。食人间断不可食之人，自贻伊戚；犯罪中万无可赦之罪，国有常刑。

豸赋性触邪，备员治狱。悯善士蹈仁以死，仇孽虫负义而生。檄辞上告于狮王，当令铜头发竖；罪状风闻于虎耳，悬知雷吼山崩。象应奋鼻卷之威，麟亦破食生之戒。无劳虎卜，前车载朱雀之祥；焉用狐疑，尚方请白猿之剑。纵使粪烟可举，能来助虐之群；当用倒卜失灵，兼殄辅行之猘。刳心竿首，负恩之戎首伏辜；

食肉寝皮，戴义之與情始洽。悯入怀而活穷急，还须引手于人；不识字而触忠良，无许冒名为我！

说

名诸子说

予生七子而夭其二。长曰将舒，次曰将开，三曰将荣，四曰将华，五曰将芬，六曰将芳，七曰将蟠。荣、芬夭矣，今存五人。俗以多男祝人者，动曰“五男二女”，岂造物者亦未能免俗，因其溢出数外，故芟而去之邪？诸子命名皆从“将”，将者，将然未然之词也。天下事莫妙于“将”，而莫不妙于“既”。既，则令人观止矣，曷若将然未然之多馀地乎？吾欲诸子顾名思义，人各用将。凡事皆然，不独功名富贵。富而不将，则以满致溢；贵而不将，则由高得险。戒之哉！

疏

大士宫募田疏 宫有乔木、甘泉。

夫有寺无僧，终归无寺；有僧无食，究至无僧。欲为寺而招僧，先为僧而谋食。食由田出，田必人施。本境有大士宫，灵感为一方庇。古木如盖，甘泉如飴。近山而猿鹤参禅，傍水而鱼龙听法。游人随喜而不忍去，高僧至止而愿为栖。但富于烟霞，贫于供养。汲甘泉而伐乔木，难为无米之炊；低菩萨而怒金刚，空作沿门之乞。盖因檀越不膏腴之割，使缁侣无卓锥；以致山僧寡香火之情，弃白云如敝屣。寺千年如故，僧一岁几更。琉璃常灭而不明，钟磬才续而复断。

于是有荐绅某、文学某，欲为悠远之图，大展慈悲之力。慨施数亩，领袖一方。普愿一境檀那，十方士女：多论亩、少论分，但求慨慷之施；近在身、远在子，必有善信之报。伫看连阡连陌，只在一年半。今而后，因恒产而有恒心，不致僧无坐性；得世臣以副乔木，庶几佛有常依。

汉阳府重建鼓楼创立马头募缘引 代郡守作

三楚名郡，首推汉阳。前贤接踵而治者，除故明勿论，自皇

清定鼎以及于今，已二十馀年矣，宜乎百废俱兴，无政不举。乃予承乏其间，觉当举未行者，正自不少；岂政事之缺略，犹书文之亥豕，与愈扫愈有之落叶同其狼籍而不可问乎？

兹且遗细而谈巨。若鼓楼，居一郡之中，以肢体喻之，则犹心君之在腹，以声息言之，则如喉舌之在口。腹可一日无心，而口以内之呼吸呻吟，可一息不出于喉舌者乎？处司更于要地，可戢鸡鸣狗盗之雄；竖奎璧于中央，必致凤起蛟腾之瑞。是鼓楼之重建，不可须臾缓也。若夫汉口之去郡城，路不二、三里，而有邈若江河之势，以有一水界乎其中耳。一往一来，必须两番问渡；计人计费，岂止日去万钱？何不架以浮梁，系以铁缆，可开可合，利于车往而又不碍于舟行？经之营之，虽有暂劳，而实可图其永逸。然欲建浮梁，必须先立石柱，排山倒海之水势，非一木所能支也；计图利涉，又必先砌马头，临深履薄之危途，非一蹴所能至也。

兹计马头、铁缆、浮桥之费，将及若干，鼓楼木石、人工之费，将及若干，总估二费而合计之，不下若干。夫以贫太守而思作无米之炊，奚啻三更说梦；然以众力士而共擎有足之鼎，何难一举成功？兹特捐俸若干，置买木石，先为一簣之基，然后遍告同心，力襄此举。凡我缙绅先生，胶庠人士，以及商贾之好义者，耆老之急公者，量其力之所能，竭此心之难已。福及诸公之桑梓，我何与焉；义全太守之面颜，情斯厚矣。

券

卖 山 券

山可买乎，不可买乎？云不可买，胡无券者不得业焉？如云可买，胡有券者不得常业焉？二说究何居乎？曰：可买，第非青铜白镵所能居而有焉。青铜白镵能购其木石，不能易其精灵；能贸其肢体，不能易其姓名。然则恃何以居之？曰：恃绝德畸行，与瑰玮之诗文。其价值足与相当，则此山遂改易姓字、竭精毕能以归之，虽历古今、变沧桑，不二其主。故海内名山，皆有所属，如严陵受氏于子陵，龙冈贻称于诸葛，兰亭噪名于羲之，赤壁蜚声于子瞻，诸难枚述。自商贾仕宦以及樵牧竖经其地则绎其名，不俟问津而后识。其富且贵者，虽积金与山齐，力能负之而走，终不能削前人之姓氏，而代以己名。即或业主递更，亦仅同守薪之吏、灌园之丁，为护往迹而已。若号于人曰：“此山为我有也。”谁其然之？

伊山在灊之西鄙，舆志不载，邑乘不登，高才三十馀丈，广不溢百亩，无寿松美箭、诡石飞湍足娱悦耳目，不过以在吾族即离之间，遂买而家焉。吾侪小人，既无德行可传，而诗文又不能好，第山鲜奇胜，投以鄙固之辞，亦未甚亏其价值，谬计可常有之矣。诨意兵燹之后，继以凶荒，八口啼饥，悉书所有而归诸他氏。噫，山弃人耶？人弃山耶？何相去之疾而相别之惨也！

然既卖，无事流连，乃于四至常契之外，别书一纸以遗受者曰：买是山木石肢体之铜镬，则既受之于子矣；若夫贸精灵、易姓名之价值，尚有俟焉。今人备一小物，必书其隙曰：“某年月日某置”，斯他人不得攘而有之，矧百亩之山乎？且余向尝为伊山别业诗，载入集中，稍布遐迹矣，他日过此者曰：“是即李子之山也。”子宁不怒？夫阳受其值而阴踞其名，是市黠也，然非旧主所能禁。子欲鼎革无难，其急登高而作赋，绕匝而寻诗，务使离奇瑰玮出余上，寿诸梨枣，胫翼人间，俾见者曰：“伊山不属李子矣，售得其人矣。”若是，余即欲阴踞其名，谁复信之？不则幸记斯言，勿咎予不白之初，而貽后言于子。

誓 词

曲 部 誓 词

余生平所著传奇，皆属寓言，其事绝无所指。恐观者不谅，谬谓寓讥刺其中，故作此词以自誓。

窃闻诸子皆属寓言，稗官好为曲喻。《齐谐》志怪，有其事，岂必尽有其人；博望凿空，诡其名，焉得不诡其实？矧不肖砚田糊口，原非发愤而著书；笔蕊生心，匪托微言以讽世。不过借三寸枯管，为圣天子粉饰太平；揭一片婆心，效老道人木铎里巷。既有悲欢离合，难辞谑浪诙谐。加生、旦以美名，既非市恩于有托；抹净、丑以花面，亦属调笑于无心。凡以点缀剧场，使不岑寂而已。但虑七情以内，无境不生；六合之中，何所不有？幻设一事，即有一事之偶同；乔命一名，即有一名之巧合。焉知不以无基之楼阁，认为有样之葫芦？是用沥血鸣神，剖心告世。稍有一毫所指，甘为三世之暗。即漏显诛，难逭阴罚。作者自干于有赫，观者幸谅其无他！

铭

乌有先生集铭

余新制一笥，外作缥緙简册之形，启而视之，则空空如也。凡案头需用之物，如笺筒、笔墨、图章之属，悉贮其中。因以“乌有先生”命名，道其实也。

先生乌有，集于何来？以彼旧字，字我新裁。古人象形以制物，不必名实之果谐。虚其中以作笥，随所欲以取材。案头需用之物，不出侍儿之手，不出奚奴之背，而随取随得于乌有先生之怀。天下古今之妙义，惟至无者能生至有；予之创是物而命是名也，盖本天地自然之理，而匪同于穿且凿者之市乖。

没字碑铭

即前乌有集，同物而异其名，形亦小异，彼肖书本，此类法帖。

有碑之形，无碑之实。取法先天，何文可勒？既没字而云碑，示其中之有积。藏翰墨于西园，贮图书于东壁。宅佳句以代奚囊，

蕴奇文而称秘笈。是没字为有字之祖，而其所谓碑也者，亦天下古今语言文字之至极。

诗 筒 铭

离娄引绳，公输截竹。制为邮筒，利轻以速。法君子之虚中，不充盈以自足。庶虚往而实归，假唱酬为颂读。此荒疏李子之自云其云，非所论于便便自主、无藉于人之笥腹。

引

梁夫人寿册引

戊午闰前二日，为摄篆司马梁公夫人设帨之辰。部民之颂父者，必颂其母，予谓外言不入于阃，祝祠虽工，夫人何由见乎？欲求其见，非得妇人、女子之言不可。因走书同学，索闺秀诗词、书画以献之。诸女士无不贾勇，谓乾坤合德，始能覆载斯民，文王之化行南国，后妃与有力焉。各谓其夫及昆弟曰：“汝颂汝父，吾祝吾母，各尽其道，勿似昔日华封人，仅以‘多男’二字寓祝尧后之义于其中也。”予美斯言，述而载之，以弁其首。

助葬册引

昔范希文先生赠麦舟一事，千古义之，非义其轻财，义其施于有用之地，而能成人之孝也。

人能自孝其亲，始能成人之孝。吴子某，文士也，家贫不能葬亲，求助于所交之尚义者。吾欲借此以观人，他时事克有成，能助吴子葬亲者，其为孝子可知也。虽然，求忠臣必于孝子之门，其为人也，又岂止孝云乎哉！

哀 词 引

哀词易作而难工，以文生乎情，情不真则文不至耳。至以男子哀妇人，自夫妇而外，尽难措辞，以闺中情事，非外人所知，莫知其情，文胡由作？至以久别之弟而哀既嫁之姊，则难之又难。佟子碧枚，则巧于行文，出其事于太夫人之口，以姑哀媳，庸有不真者乎？情真则文至矣。至书法之工，又能与文媲美。以是册置董公案头，时时翻阅，则董公夫妇之谊，碧枚手足之情，均于是乎弗替矣。

跋

《春及堂诗》跋

诗文之有跋，犹人冠裳之下之有履。读至终篇而莫忍释手，不能赞一词，而又不能不赞一词，佛头既不敢粪，绡帙又未可污，不得已而作蝇头附骥尾，于是乎有跋。盖爱之至，敬之深，犹见人至美之躯，而不忍跣其足也。予小子之跋《春及堂诗》，非第爱其书，敬其人，且触寻源报本之思，切泰山梁木之感，不知涕泪之何从矣！盖春及堂主人非他，乃予一生受德最始之一人也。

侯官夫子为先朝名宦，向主两浙文衡，予出赴童子试，人有专经，且间有止作书艺而不及经题者，予独以五经见拔。吾夫子奖誉过情，取试卷灾梨，另为一帙，每按一部，辄以示人曰：“吾于婺州得一五经童子，诎非仅事！”予之得播虚名，由昔徂今，为王公大人所拂拭者，人谓自嘲风啸月之曲艺始，不知实自采芹入泮之初，受知于登高一人之说项始。乃今桑田成海，海复为田，虽闽、浙相距非遥，而前阻烽燧，后罹播迁，非止鳞羽久疏，即吾夫子捐馆于何年？卜牛眠何地？皆莫之知。迨今甲寅岁，其象贤公于王先生乘骢按浙，予适过之，先生出此帙示予，予设位而哭，哭竟而后读之。其诗高古沉郁，不俟追琢而工，不假脂韦而丽，且语语出自至性，他时采入国风，垂之后季，大有砺世磨钝之功。予低徊久之，敬缀数语于篇末。

跋之为言履也，别吾夫子几四十年，而犹及为之纳履，宁非快事！作者有灵，当必谓孺子可教，不惜开聋启聩于寤寐间乎！

《寿世奇方》跋

药石之有造于生命，由来尚矣。然同一方书，施于古人辄效，而今人服之，验不验常相半者，其故何欤？以古人信而今人疑也。信则历久不变，疑则功效不速，辄弃而之他。夫病者之于药，不曰饮，不曰食，而曰服者，是欲人中心诚服，犹七十子之于孔子也。今则不然，常使医为我用，则是药服我，而非我服药矣。强项如此，药将奈之何哉！又鲁论云：“人而无恒，不可以作巫医。”医者且然，矧为其所医者乎？为其所医者朝饮暮辍，彼医之者即欲有恒，其可得乎？

然吾谓今人之善疑，盖亦为庸医之积习所使，而有不得不疑之势也。何则？彼不肯委疾于他人，而肩之甚毅者，利吾报耳。使有一人焉，不受一钱，不饮杯水，而且自赔楮墨，剗剗其方以公于世曰：“服此可以却病，久服不置，可以延年。”彼疑而不信与朝饮暮辍者，夫亦可以废然返矣。是为何人？陈子逊斋是也。逊斋为卧子先生之季方，而卧子又为董玄宰宗伯之高足，虽未同执弟子礼，然躬受书法而得其精微，亦与受业者等。宗伯授以是方，以其身具夙根，而能不尽效钟离先生之自秘其旨也。览是方者，因其自陈功效，有“髭发转黑”、“筋力疲而复壮”诸语，微涉荒唐，十信其九，而终伏一线疑根，予诘之曰：“彼刊方告世者，将索朱提赎命乎？抑冀分他日安期之枣、麻姑之脯、蓬池之脍，而为放饭流歠计乎？”曰：“不然，欲与斯民同臻寿域耳。”若是，则斯方诚可信，而今日之逊斋与前日宗伯之所言，均非欺世惑人之语也。

文

瘞犬文

山居有犬，黝而硕，驯而骁，主人爱焉，字以神獒，司夜于山居有年矣。穿窬辈将有事于室中之藏，虑其咆哮以相败也，食以毒而毙诸途。主人如失左右手，乃衣以茅，棺以席，瘞于山居之侧，且为文以告之。

有客过之曰：“物蠢人灵，贵贱攸分。生靡我豢，死应我羹。今犬之死，子既宽以鼎镬之罚，予以窀穸之宁，而复载杀青从事，无乃贵庶类而自贱其文乎？”主人曰：“殆不然。凡物之不以天年终者，有德斯德之，有功斯功之，所以妥其魂魄，使不为厉也。兹犬有七德而死于忠，我哀以文，奚过焉？”客曰：“七德云何？”主人曰：“之犬也，食人之食，贼人之贼；耻埽素餐，不偶于职。德一；心专志粹，一人是媚；不问尧、夷，非主则吠。德二；前戟后矛，矢石交投；咆哮相犯，不生是求。德三；忧勤尽瘁，不遑假寐；一家即安，只身相卫。德四；时晦则知，时明则愚；行藏合古，迥别时趣。德五；呼则来之，叱斯去之；聆音辨色，谄时识机。德六；若夫家丧业凋，粒绝烟销；亲朋见绝，邻里相嘲。尾摇摇而眷主，腹噙噙而耐枵；不捐凉而就热，类君子之石交。德七。具此七德，哀之以文奚过焉？”客曰：“详哉，子之体物也！予习而不察，焉往而不相失哉！”主人曰：“是既厥德，而未既厥功，

吾尚为子毕奏焉。其于世也寡求，其于人也多益。播声于远，为国增繁庶之风，息响于宵，为世增太平之色。是其声系治乱也；时眠黄叶，时吠白云；破我痴梦，触我诗情。是其益效砭砭也；看云觅句，尾我登山；沽酪买书随予入市。是其劳代臧获也；床头之剑，架上之书，未竿之竹，新种之鱼，非其绕夜相守，岂得长为我娱？是其司勤典守也。之数功者，诎不肤哉！以德若彼，以功若此，谦谦之文，予何吝焉！”

客三肯其首而去。

逐 猫 文

物之畜于人者，同功则并叙。牛司耕，马服御，同功也，称者则曰“牛马”；鸡司晨，犬守暮，猫辟鼠，亦同功也，称者则止曰“鸡犬”而不及猫。昔人丹成上升，鸡犬俱仙，而猫不与。情有难周乎？抑三者之有幸不幸也？余尝以之诘人，人无应者；因自穷诘而得其故。盖鸡犬之鸣吠，无所利而为之者也；猫得鼠以自啖，有所利而为之者也。自利者贪，自利而获利人之名者僭，贪与僭，仙家所谓祸车也。然则猫虽朝捕夕辟，功利兼收，犹不得与徇义忘利者等，矧利于身而不利于家、且将不利于利于家者，可无法以处此？

余畜一猫，缁衣素裳，俗有“乌云覆雪”之号，遂以皮相见收于主人。抚之摩之，减食食之，甚至寝处与俱以示爱。当其率性之始，视鼠如仇，有弗捕，捕则必获。未几而厌常趣异，升险如猱，走旷类犬，觅食于飞鸣宿食间，耻与榘栖牢食者伍。昼猎于外，夜则酣宿于家。向视为仇者，今则同眠而不之怪也。遂至群鼠公行，家无完筭。主人问罪于猫，而猫方孕，姑俟诸。无何，举二子，旦夕乳之，无暇野食，见鸡之雏者、犬之稚者，辄垂涎

而攘臂焉。鸡犬交哗而诉于主人，主人怒曰：“此患不戢，二族能噍类乎！且前之有待者，以失之母而或收之于子也。今子无知，视母以为知，苟效其所为，将以食鸡犬为常而捕鼠为异，是母犹情之，子且性之矣！吾乌测其所抵乎？”家人请售之，主人曰：“售者幸矣，受者奚罪？”“然则歼之乎？”主人曰：“罪则当诛，前功难泯；且有二子在，讵不克庇一母？殛父庸子之法，可一不可再也。”乃为爱书曰：“司捕弗捕，是失职也，失职有斥逐之条；凌铄有功，是妨贤也，妨贤正放流之典。数里之外，九达之逵，其‘有北’乎！”乃命童子举而投之。濒行，谓曰：“无念尔子，于兹永诀。其悔尔戚之自贻，毋曰我躬之不阅。”既去，戒其二子曰：“率尔良能，无循胎教；爰盖母愆，是为尔孝。”复呼鸡与犬而饬之曰：“无无人吠，无非时鸣；殷鉴不远，视尔同群！”童子归而主人问状，童子曰：“投之中原，原木蓊翳，栖鸟在林，若有所俟，一跃而升，逞其故智。”主人太息曰：“鼠能唾肠，猿则噬脐；逐而不悔，猫其终欤！”

放 鹿 文

有跂跂之高足，异岳岳之汉臣。衔命用里，来寿主君。已而渐狎，与人不惊。历阶升堂，排闥穿楹。啮纸餐花，抵角横身。驱之复来，如虻如蝇。主人乃怒，桡而置之于墙之阴。虽跬步之莫展，唯两目之荧荧。主人顾而叹曰：“是尔之不遇，非尔之罪也。昔者秦宫汉苑，宜春华林。画天汉以通池，尽南山而作屏。尔游其中，或友或群。长得君王之顾，兼分大官之珍。卧瑶阶以自如，随辇路而无瞋。或立殿中，车令不敢妄指；或息蕉下，宋人不敢误寻。或齐列雁行，寇来无烦往触；或比肩麀侧，太子不责通名。

于斯时也，贵拟龙夔，瑞侔麟凤。时箴鹭序之庭，亦徼豹尾

之宠。文堪列帑，偕虎观之名儒；武则藩军，监龙骧之骁勇。岂与夫立仗之马，料食三品；弄臣之孙，官号供奉已哉？

今尔见罗虞人，徒充闲馆。苍苔白石，已非曲涧之滨；棐几明窗，岂是幽岩之畔？忘寄人之篱下，竟昂首而傲岸。脱粟不饱，望侧理而流涎；苹草难甘，眄庭花而目眩。盪勺饮作汗池，文史残为蠹简。出而随车，鲜致郑公之霖；入而临轩，无当穆满之玩。宜取厌于主人，同白茅之继绊。将命悬于庖人，不免脯以充膳。谅远害之无从，安能铤而走险？若为丐之馀生，惟有开其一面。敢效中山之相，出尔苍龙之门。兼命愿使，护送深林。尔其骋兹捷足，奔轶绝尘。远违狼虎之穴，谨避置罟之婴。度汉楚之莫逐，共王裴而结邻。偕尔旧侣，永兹仙龄。上可骖安期之乘，次不失处士之名。

乃崩厥角，鸣谢而去；望山景灭，不知其处。

纪 略

朱子修龄倡义鸠资赎难民妻女纪略

甲寅、乙卯之间，八闽既叛，江浙骚然，稍迹贼氛之子女，尽为所掠。迨官兵一出，捣穴焚巢，贼众非死即逃，所掠子女，又为官兵所获。斯时玉石混淆，其为叛贼之妻、良民之妇，不可得而辨也。罹难之民，欲诣行间识认者，皆慑于兵威，莫敢向迹。且良民之妻既与贼妻无辨，赎良民之妻者，与贼来自赎其妻又何以辨乎？求其出而不能，又复以身殉之，是从井之救，至愚者所不为也。是以夫觅其妻而弗得，子赎其母而未能者，日号咷踰于道路之间，闻者仅能助涕，真莫可如何之事也。

予友朱子修龄，为世称“朱神仙”二眉先生之高足，睹此流离，婆心顿发，竟以莫可如何之事毅然自任，而筹所以如何之。遍告于缙绅先生之当路者，谓倒悬之厄，莫甚于此，请代诸公拯溺救焚，而不避汤火之烈。但求所以致之者，士卒豢养民妇，衣之食之，病而药之，是皆不能无费，不偿所费而漫然求赎，是欲其出而外扃其门也。启门之资，非财不可，难民被掠，口且勿糊，其能自为计乎？登高之呼，势必望于当权之有力者。且诣营伍赎难妇，非执兵符、握令矢者不能，是始终皆须大力也。当事诸公可其议，莫不先之以身，出俸钱以倡。斯民之好义者，爰是一呼万应，富者出金钱，贫者典衣饰，千里内外闻风而至者，皆争先恐

后。谚云：“良医之门，众疾所归；仁人之耳，啼号毕集。”此风一倡，昔者号咷于路者，今皆蹀躞于朱子一人之门矣。朱子不以为苦，而且甘之，随到随赎，使镜之破者重完，剑之失者复得，悲伤涕泣而来者，欢欣舞蹈而去。计前后所完离散之夫妇、迷失之子母、分群拆队之兄弟姊妹，殆万有馀家，猗欤盛哉！

子與氏之言曰：“穷则独善其身，达则兼善天下。”朱子有才而尚未见用，是穷也，非达也。乃能不辞艰险，见义即为，以独善其身之时而为兼善天下之事，岂非士林之豪杰、当世之仁人也哉！且当此民穷财尽之时，诸事可为，所难者，惟阿堵一物。劝人摩顶放踵以利天下，人能从之，求拔一毛，不可得也。朱子操何术，而能使巨万金钱悉归掌握，畅我一人之所欲为，而俾流离失所之民，各遂怀来而去，诎非咄咄怪事乎？鲁论曰：“我欲仁，斯仁至矣。”儒者诠释其义，颇难着解；吾惟述朱子赎难民妻女一事以告，而以不解解之。

笠翁曰：修龄与其弟仙期同出朱二眉先生之门，二眉先生，乃现身说法、不羽化而神仙者也。吾未获见其人，闻其道，验其所谓先知先觉者维何，然即修龄倡义鸠资，赎难民妻女一事，知其为圣人之徒也。颜、曾若此，仲尼可知，信乎其非凡民矣。盖愚民无知，不遇神仙则已，如或遇之，必试以幻妄不经之事，及休咎祸福之征，能则真，而不则诤为伪矣，其利民济物之实际不与焉。乌知所贵乎神仙者，以其能度世耳。度世云何？救人于患难之中也。仁者救人，非出金钱不可，钟离点铁，止为此耳，岂欲自谋金穴哉？今修龄能以赤手而致巨万金钱，即是点金神术，能以一手而拯巨万生灵，即为度世奇功，非二眉先生指授之力，能若是哉？

予读先生与修龄书，勉为此事，其略曰：“吾师弟子生逢此日，宜乎在在现身，人人汲引，免其沉沦苦海，庶不愧乎生于此日。贵地诸公，现身活佛，浙中受益良多。虽居位者本心救世，尤须多

方鼓舞，其造就生灵，奚啻三千八百已邪？”由此观之，则赎难民妻女一事，盖先生心之而朱子身之者也。若是，则今日当事诸公之不惜俸钱，遐迩士绅之乐输恐后，焉知不有若或使之者在？其若或使之者，即二眉先生点铁成金之一指。不欲以幻术示人，而归功于当道诸公及遐迩士绅之好义者，殆神仙而儒术者哉！吾恨不获旦暮遇之，纪其视听、言动以传于世，则知鲁论与楚论，必有相得益彰者。

龙丘邑宰卢公异政纪略

称功颂德，鄙夫之事也，予向耻而勿为；兹述卢公政略，无乃变其常乎？曰：不然。颂其人于安居无恙之秋则涉于谄，言虽极谀而人终莫之信。其人以他故解任，而万姓遮留不得，能于此时称之颂之，则功乃真功，德为实德，言者无惭，而听者庶几能信矣。因记卢公之三事于左。

卢公讳灿，字孟辉，辽左之海州人，以邑佐起家。因叛氛四起，江东告急，龙丘为闽、浙要津，饷道必经于此，粟米、力役之征，倍于他邑，且四面皆贼，伺军需而计攘夺者，不遗余力，非盘根错节之才，莫能处此，故当事诸公交章力请而授居此职。公至即练民为兵，以身将之，虽防城原有士卒，公止令防城，出师戡乱，皆自为之。

邑之东郭有桥曰“文昌”，宽数丈，长十倍之。岁乙卯，五月既望，公试武童于演武场，忽报此桥失火，须臾烧梁木殆尽。火不起于民间，而起于贼。盖此桥系金、衢孔道，贼虑王师一至，必由近及远，倚山恃泽之巢穴，难保无虞，去此一桥，则往来不易，可缓须臾之征，亦无聊之极思也。故伏间者于道，乘公有试事，卒

急难救，因风纵火而焚之。兵民甚以为恐，以桥断则路绝，无论师旅之行，不获人人问渡，即四乡贼起，趋避为难，得失非细故也。公谕僚佐及士庶曰：“无忧，顷当复之！”众曰：“造桥须木，今山林产木之地，尽为贼踞，求尺寸为刀斧之柄而不可得，矧盈千累万之巨木乎？”公曰：“难不在木而在匠，当先致其难者。”盖是时黔黎尽窜，百无一存，民不易得，矧工匠乎？因委丞、倅二员，分地觅之，不数日而得百余人。丞、倅反命曰：“难者至矣，请问易者安在？”公笑而不言，但取历书择吉，限日启工。众皆茫然莫知所措，尽拭目以观无米之炊。公忽发令矢，传各营乡兵，随本县入山剿贼。是日鸣金伐鼓，哗噪而前，众又拭目以观擒获之俘。乃俘不见至，而盈千累万之巨木蔽江而下，不知何所从来。公归而询其故，始知为贼在山中就近砍伐，日积月累而聚于一处，拟造木栅而拒王师者；公侦探得实，故于是日声言剿贼，意不在贼而在木也。贼素索畏乡兵，闻风鼠窜，但虑其追，乌知我兵反利于窜乎？于是如期架造，不三日而告成，桥成而民尚未之知也。此其异政之一。

龙丘有地曰涧口，去城六里许，水自南山来，环绕郭郭而后西注。后因春水泛滥，沙土渐崩，所恃为砥柱者，尽归巨壑，南来之水，直泻入河。堪舆家言，谓有关风水不小。阖邑士绅数议修筑而不果，因其工费浩繁，军兴以后，民不堪命，岂能复兴大役乎？丁巳之季夏，民间赛社，适当斯地。建高台而演剧，观者万余人，以军兴数载，始奏升平，无不欲观太平盛事。公先期备草履一辆，大小如己足，土龛木桩各数千，至期率僚佐、胥役而往。不知者皆谓与民乐，乌知其欲兴大工、动大众于游观嬉笑之地乎？至其地，即大声疾呼以谕众曰：“此地之崩，关乎一邑之风水，久拟修筑而未能，虑妨尔民农事也。兹幸无心而聚，又适当斯土，是天假以缘。本县先之以身，望尔民各助一臂！”言讫，即自跣其足，着前所备之草履，跃入急流下木桩。丞、倅继之，胥

隶又继之，赛社聚观之万民，见素所爱戴之神君若此，谁不乐从？举龔运土者，咸以争先为荣，稍后为辱。不半日而功成，与囊沙断流之往事神速无异。自是水遵故道，仍绕郛郭而后西。此又异政之一。

邑有武衿叶茂桂者，聘余氏女为妇，虽六礼未行，而冰言相订，已数载矣。迨叶父云亡，而女之父母兄弟，皆欲寒盟别嫁。讼于官者三年，官判合而私议离，终莫能决。至是复讯于庭，公谓女父曰：“汝女诚不欲字叶，予乌能强？但使汝女一至，观其意之所属，然后判离，未尝不可。”女父初许而终不使至，公怒，迅役召之。至则女无愠色，谕以从一而终之大义，女俯首无言，知为不答之答也。然公已为预治花烛，并庭讯之期，亦是联姻吉日，皆有意而为古押衙也。出冠珥、吉服，俾于公堂合卺，鼓吹而归。此其异政之三。

公之所为，大率类此。若欲为之枚举缕述，非止书者力疲，观者亦愁目眩。即三事以概其餘，古之龚、黄、召、杜，胡能加此？公挂吏议者非他，以漕项钱粮之未征也。其未征者非他，以田土尽为贼踞，欲征而无其民也。噫，抚字心劳，催科计拙，其注“下考”者，不亦宜乎！

附：卢公复任纪略

从来复任之官，有未经解任而即复者，有去任数月而复者，亦有既去经年而始复者。然皆于旧缺未开、新官未补之日，或为当道题留，或因缘事昭雪而然，从未有新官莅任一载、旧令谢事经年，忽遂民间借寇之怀，夺彼予此，而使欢声动山岳者。有之，自卢公始。

公之见格于朝也，以漕粮未征故。彼时八闽既叛，依草附木

之輩无地无之，县治以内为民，其余则皆贼矣。公竭力抚绥，但能化贼为民，不能尽民而赋也。且良民失业已久，田地山场，尽为贼踞，将执贼而使输粮乎？抑遍招失业之民，使先赔国课，而后使复故土也？漕台司漕，惟漕是问，此项既缺，焉得不操白简从事？然浙省之制、抚二公，则知之深而筹之熟矣，遂交章题留，遂蒙俞允。此所以新者去而旧者复来，铜符墨绶，若于梦中失去，醒复得之，原未尝暂离我者。

予向纪公异政，谬谓公果去官，公道未彰于上。以草野之笔舌先之，而不意其复有今日也，故补述数言于后。

西湖盗鱼人自塞盗源纪略

西湖非他，宋之放生池也。今日所谓放生池，较之当年，仅一勺水耳。天禧中，王钦若奏以西湖为放生池，祝延圣寿，禁民捕采。迨元，废而不治，任民规窃。明初亦莫之禁，且设额税，渔人佃之。万历中，缙绅、士庶合请于当道诸公，始就湖心寺前后左右，绕潭筑埂，环插水柳，为湖中之湖，即今日之放生池也。游泳其中者，昔喜寿域之宽，今悲生命之促矣。然犹赖邑宰禁饬之严，寺僧防守之密，始可无虞。而扼要之策，则在勤修堤埂；一有渗漏，即为盗者所乘。是以陈定庵封君、顾且庵直指、严柱峰侍御，及朱胆生、郑乘文文学，皆预储工费，有缺即补。乃今数年以来，朝塞暮穿，难以越宿，女娲不能见其长，公输无所施其巧。开士东也，控于明府梁公，求察所以不坚之故，公听而不断，姑以高阁置之。

一日，渔户以浮网事控。浮网者，罾之至小而浮于水面者也，跨以细竹，一手可提。往时不禁，以其所取者，不过虾、蚌、螺蛳之属，不及巨鳞，是以听其罗取；然旦设夕收，耳目昭然，无

所施其诡秘。今则绵昼夜不辍，湖中鲫、鲤，日渐消磨，疑其有绝流而渔之术，故讼以诘之。被控者数十人，罗伏于前，公执首事者严讯，始知其术无他，但能取鱼中孕妇耳。春夏之交，鱼将散子，遇蘊草即投，以子散于其上，犹孕妇将产，预投寝蓐之间也。置蘊草于浮网之上，鱼见即归，是以不劳而获，子母偕亡，于是乎无噍类矣。公治以严法，永杜将来，浮网病鱼之患，赖以绝。

然公之厘弊，又不止此也。斯狱既终，民将散去，公止之曰：“别有一案，虽与若辈无涉，而若辈必知其情。掘放生之堤埂使穿者，必有其人，或同一盗鱼而各分其类，未可知也。其直言无隐！”众皆畏法不敢讳，指一人曰：“彼实倡之，别有和者，我辈皆不与谋。”公执其人讯曰：“埂穿鱼出，散入大湖，湖水洋洋，岂能尽为汝得？”其人曰：“有火攻法在。虽有吞舟，莫能漏网。”公听而忘倦，使畅言之。盖鱼性避暗投光，犹蟹之望灯而赴。穴穿此埂，每夕以灯火诱之，设网于所穿之洞口，有弗出，出则未有不获者。公大笑而后痛惩之，且令供出同事之人，俟案定而并绳以法。

令下而诸盗胆丧，向开士东也乞怜。因其向以穿堤事控，始事者不坚质，当事亦或不深求，谅东也慈悲，必不欲因鱼而视人之死，故往求之。东也果然，不愿终讼，商之于予及郑子乘文。我两人共为东也画一策曰：“当事既烛其奸，岂肯轻纵？诸盗果能悔祸，盍使修堤筑埂？自彼坏之，自彼完之，工竣而后求宽，或可姑开一面。”东也转述此语，诸盗乐从，不三日而告成，转前加固。予偕郑子诣公，公曰：“正欲如是，君得我心之同然。但善后之策，全赖是举，此后堤穿，仍彼之罪，即用若辈作韦驮护持佛法可耳。”因判牍尾以立案。

公讳允植，字承笃，别号冶湄，真定人也。令浙七载，政不胜书，即此一事，亦具三异：僧们之以穿堤控也，有其事而无其人，公置而不问，忽于他案得之，异一；治末俗者，捕盗为难，塞

盗源更不易，公能以盗捕盗，又以盗塞盗源，合《中庸》执柯伐柯之良法，异二；盗鱼，恶事也；修堤，善行也。公不专恃严法而恃德威，驱天下至恶之人而归于善，异三。视此一端，其余善政皆可不言而喻，当今循吏，有出其右者哉！无怪乎在上位者，交章累牍而荐于朝也！

解

耐 病 解

予自春王正月，由秣陵移家家武林，经理维艰，遂以忧劳成疾。药攻不克，几登夜台。至春杪夏初，微有起色，旋以下楼失足，猛然一蹶，筋骨皆伤，濒于死者复两阅月。夏仲小愈，送豚子就试婺州，又以冒暑受伤，與疾而返。始而痢，继而疟，继而疟、痢并作，加以嗽、喘、怔忡诸馀症。斯时也，即使家坐十医，口尝百药，尚虑攻此失彼，犹万弩当前，非重铠倍甲所能御矣。

维时家厄陈、蔡，贯米贷薪之不暇，尚能召巫咸、觅芝术哉！惟有坐待罗刹之至，静观踳踊之形而已。诂料不然。春初之疾，药用金石贵者，攻之不愈；夏初之疾，药用草木贱者，攻之亦不愈。迨后贵贱皆无，药以勿药，不期月而霍然起矣。且善饭健步，过于畴昔。始知病犹虎也，虎逢人即食，惟见不畏己者即舍之；病犹鬼也，鬼遇物即祟，惟见不信左道者即去之。病无所不奈何，惟不能奈何穷人，穷人之为力大矣哉！古云“病不服药，常得中医”，予曰非特中医，直医国手耳！

是岁之九月，偶适吴兴，归安何紫雯使君作《耐病述》一篇示予。谓夏秋之交，以忧旱禱雨，积痼成疟，五内如焚，非多饮清泉弗解。又复抱痾理簿书、清狱讼，日无宁晷。医者危之，劝以忌饮水，节劳静摄，多服参、苓，始克有济。时参值数倍于今，

使君贫莫能致，匪特不从医谏，且若有意愎之。如是者弥月，而疟忽愈。因作是篇志喜，内多疑词；不药自愈，其理莫能解也。予三复而美其文，因其不解，述所解解之。

然予之疾与使君之疾，不可同年语也。予之疾起于忧一家、劳一身，使君则忧庶民之忧，劳军国之劳。孟氏云：“忧民之忧者，民亦忧其忧。”毛诗云：“保佑命之，自天申之。”是使君之疾，自弗药而天药之，已弗祷而民祷之。疟即能奈一人何，其能奈万民何？即能奈万民何，其能奈天何哉！此所以药不瞑眩而疾自瘳，灾未被除而祥已至也。使君又何疑焉！

书

与王汤谷直指

昨方伯公口传德意，谓明公好贤之切，不减《缁衣》；只以乌府森严，未便揖客。即日按临东越，订渔拜晤于舟中。此礼贤异格也，渔何人斯，亦获蒙此？方伯公又虑随从诸员役，不知渔为应召而来也，或接斥不传，有妨德意，乃为预饬司阍，使识贱面，以便将命。此非仰体明公吐握之诚，何以周恤乃尔，荣籍又当何似！

渔于是日即怀短刺，候节钺于山阴道中，乃前旌初发之际，日方亭午，及至驾抵西兴，则薄暮矣。窃见两郡士民，蜂屯蚁集，皆拭目以瞻风采；即道府县令诸官，亦且屏息道旁，不敢擅投一揭。渔倘于此时刻意求荣，罔顾忌讳，卤莽谒见于官吏士民之前，不几大骇观瞻，而为直指威严之累乎？若欲迟迟以待，俟官吏散去而始拜觐，必须星明月上之时。昏暮谒乌台，其骇观瞻尤甚，均非所以爱知己也。是以怀刺而返，不复求见，宁受方命之罪，不干越礼之嫌。明公或有以谅之。

总之，明公之欲委曲赐见者，乃怜才好士之高风；而鰲生之不敢孟浪求见者，乃逾垣凿坏之遗意。两说不妨并存，俟明公旋旌之日，修此缺典，未为迟也。

兹恐明公待渔不至，不罪渔而罪将命之吏，故特布此以闻。

与卫澹足直指

武林、白下，两获追随，非系夙缘，即由天幸，不然，何相遇之频也！客岁浪游不返，未及候送台旌，反拜种种什物之赐。凭几据床，即怀明德，何日能忘！蒙授某某二函，至今犹存敝簏，只以俗冗牵制，心欲去而足不前。然明公荐贤之念，则已尽矣，岂必身受隆惠，始德曹丘哉？谨什袭藏之，俟他日面缴。

渔别后复游湖上，得受知于王汤谷先生。非有半面之缘，一函之绍，只以雕虫末刻，流渎见闻，谬厕神交之列，遂蒙特达之知。每见当途贵游，辄道李生不去口。然渔亦颇知自爱，执经问字而外，未尝以一字仰干。故年来知遇虽多，食贫尚如故也。此等遇合，得非爱我者所乐闻乎？

近阅邸抄，知明公特膺简命，来按并州，喜而不寐者数夕。然以他人处此，未免以德星返照，辄蒙邀福之心，而渔则未敢有此。何也？向辱明公式闻数四，推食再三，江宁之人，无不窃见；今闻授绋袍而去者，复乘驄马而来，同社诸君，谁不为渔作《送穷文》者？虽渔谨饬有素，最恶招摇，杜门扫轨，不与外事，其如他人入之不信何！稍涉瓜李之嫌，即妨神明之誉，非所以报知己也。是以于闻报之日，即萌回避之思；乘绣斧未入之先，携妻挈女，远别金陵，仍作西湖之寓客。行行且止，避驄马御史，此知几守分之事也，请以故人先之。

兹以汤谷先生还朝之便，敬附一函，稍申燕贺，他无所恳。临莅方新，政繁事剧，愿为苍生爱护，以副颂祷。不宣。

与张华平太史

明公屈太史之尊，访布衣之贱；且在初出棘闱，一客未揖之时，使道路惊传。渔以他事入城，未及倒屣；晚归晤张蓼匪先生，传述明公怜恤至意，真不啻口。渔闻之，唏吁叹息，几于泣下数行。才获登龙，即蒙殊眷，使得常侍左右，其为嘘植匡扶，又当何似？必不使迂拙书生，落魄遂至此耳！所恨识韩最晚，判袂甚速。满口衷言，无由一吐，惟有神驰心告而已。

嗟乎李子数奇，遇知己于临别之际；犹之王嫱命薄，识明君于遣嫁之时。白面红颜，千古一辙，兴言及此，感慨何如！

与龚芝麓大宗伯

上腊走使燕京，借新刻以候新祉，人归展读报章，兼拜琼瑶之赐。虚往实归，不独文字之受益为然矣；更可喜者，闻购市隐园，预为太傅麀棋之所，与予小子衡门咫尺，使得曳杖追随，甚盛事也。而渔之所幸，不独在庑下佣春，可时受皋伯通照拂；且以生平痼疾，注在烟霞竹石间。尝语人曰：庙堂智虑，百无一能；泉石经纶，则绰有馀裕。惜乎不得自展，而人又不能用之。他年赍志以没，俾造物虚生此人，亦古今一大恨事！故不得已而著为《闲情偶寄》一书，托之空言，稍舒蓄积。兹闻裴公将辟绿野，去隐人藹轴不数武而遥。公输在旁，徒使袖手而观匠作，大非人情，矧出知人善任之主人翁乎！是向托空言者，今可见之实事。天生一人，必备一人之用，讵知六十馀年，到处不遇之老叟，竟为龚芝麓先生一人而设乎？是可幸也。

绝句四首，情见乎词，寄上我公，未有不发千里一笑者。更有近体二律，赋志远怀，词虽不工，然“真切”二子，或蒙见许。

渔终年托钵，所遇皆穷，惟西秦一游，差强人意。八闽次之；外此则皆往吸清风、归餐明月而已。乃今食指如蚕，耗孔类鼠；来声涓滴，去势汪洋。向因少不宜男，致使齐人有妾；孰意老偏多嗣，翻令伯道憎儿。儿牧犊而无妻，自愧其为父矣；女卖犬而始嫁，腆颜独在亲乎？日来东奔西驰，绝无善状，不得已而思及天上故人。然所望于故人者，绝不在“绨袍”二字。以朝野共推第一、文行合擅无双之合肥先生，欲手援一士，俾免饥寒，不过吐鸡舌香数口向人说项，便足了其生平。况此手援之一士，又为人所欲见，不甚弃之如遗者哉！昨岁人归，发都门诸回札，自老先生而外，不下数十函，均有怨水尤山，阻入来辙之意。是知笠翁也者：习久则生厌，而不见即可思之人也，今拟由楚入晋，自晋徂燕，一觐芝眉，并谒金台诸夙好，所恃为登高之呼者，则在老先生一人。渔于都门，必不久留，多则三月，习久复生厌矣。项斯未至，先说其来；吕安既临，即筹其去。皆所望于北道主人者也。

与陈学山少宰

客腊怍归，拜聆翰教。再捧阳春白雪之篇，把金盞瑶觥之赐，且饮且读，顿使深仁厚泽，沁入肝脾。唐人诗云：“及至登枢要，何曾问布衣。”由此观之，是世情反浇于昔，古道独厚于今，此国运世风之大庆，非独一人私幸而已也。改岁后，未询鸿禧，然而丕绩愈著，台望日隆，则悉于南来诸缙绅之口。不次好音，当接踵而至，黑头宰相之号，但恐捉鼻不免耳！

前驰小力入都，凡属素交，悉投以札，归时亦各有报章。词

采绚烂者有之，情意恳切者亦有之，求其一字不肤，言言沁骨，誉虽过情，而仍存本来面目于一线，使受之者愧而不以为欺，则惟有台札一函而已。前幅云：“计迩来当别开词峡，驱使五丁，必不以旧凿山川供人陟览。”此为未睹新刻而言。末幅云：“境辟而愈奇，事纤而悉雅，较之镂空绘影，更进一筹；但惜宝不自珍，鸡林广布，不得使某私为论衡。”此为既睹《闲情偶寄》而言。噫！李子一生著书千卷，苟非妒妇之口，无不嗜以为痴。有能以数语括其生平，使前后灾梨之书，不能遁形于数十字之外，如陈学山先生者乎！一人知己，死可无憾。渔朝闻是言，夕死可矣！昔人有言，士屈于不知己而伸于知己。渔今获遇知己，请以胸中块垒，稍倾百一。不敢以他事求伸，但望于人前说项时，谓天生笠翁，不应使其困厄至此，各为叹息数声，即我扬眉吐气之日也。他何敢望于一人哉！

渔自解觅梨枣以来，谬以作者自许。鸿文大篇，非吾敢道；若诗歌词曲以及稗官野史，则实有微长。不效美妇一颦，不拾名流一唾，当世耳目，为我一新。使数十年来，无一湖上笠翁，不知为世人减几许谈锋，增多少瞌睡？以谈笑功臣、编摩志士，而使饥不得食，寒无可衣，是笠翁之才可悯也！

一艺即可成名，农圃负贩之流，皆能食力。古人以技能自显，见重于当世贤豪，遂致免于贫贱者，实繁有徒，未遑仆数；即今耳目之前，有以博弈声歌、蹴踘说书等技，邀游缙绅之门，而王公大臣无不接见恐后者。渔之识字知书，操觚染翰，且不具论，即以雕虫小技目之，《闲情偶寄》一书，略征其概，不特工巧犹人，且能自我作古。乃今百技百穷，家无担石，犹向一技自鸣者贷米而炊、质钱以使，是笠翁之技可悯也！

夫有才有技而不能见知于人，反为当世所揜者，古今来间亦有之，以其为人叵测，胸伏甲兵，不则见事风生，工于影射；不则据陇望蜀，诛求无已。是皆自绝绝人之道，虽有可用，谁其即

之？渔则未尝有此，自乳发未燥，即游大人之门，今且老矣，满朝朱紫，半是垂青顾盼之人，其中亦有仕吴仕越，往来一二十年，知其颇能自爱者。试问下交笠翁之人，曾受三者之累否？以可亲可近而无可厌倦之人，饥死牖下；我不乞怜于人，而人亦卒无怜之者。是笠翁之可悯，又不止才技两端而已也！

嗟乎！笠翁但不死耳，如其既死，必有怜才叹息之人，以生不同时为恨者。此等知己，吾能必之于他年，求之此日正不易得。昨见惠我之书，有“努力加餐”、“为才自爱”二语，不觉感恩流涕，故不避疏狂，放言至此。

此书作于汉阳，近蒙太原郡守周计百折柬来邀，拟即自楚之晋。晋距燕都不远，复拟扬鞭北上，一候近祉，兼与一切旧交再谋一面。然所恃为北道主人者，则于老先生首屈一指，幸预筹善策以待之。

与纪伯紫

客冬小伴自燕归，拜领翰教，温言满纸，寒威为之大戢，挟纊不足喻也。再读芝翁大札，词意缱绻，忘分之私，跃出纸背。非缪公之侧有人，片刺且不望答，何有于此？感颂感颂！

书来后，又经改岁，阁门福履，知倍寻常。弟迩来食指愈繁，生计愈促。俗以“三月卖新丝，五月粜新谷”为剜肉医疮之喻，自我视之，殊觉不伦。丝虽未成，有蚕在手；谷虽未熟，有禾在亩。移彼救此，止争早晏，何穷之有？若我辈朝朝卖丝，时时粜谷，而讯其蚕禾所出，则均在无何有之乡，此诚心头肉也。偶一饷来，则此肉为之稍补；如其不至，则糜烂之地，日宽一日，心与俱腐，何肉血之足问哉！伯紫近居辇毂下，授餐者多，又为近水楼台，邻朱必赤，然前此数年，亦尝备历此苦。今发是函，未有不领李生

之言，以为得贫中三昧者。

今岁托钵于楚，凡数阅月，为饥驱而来者，复为饥驱而去。行将有事于太原，以太原主人周计百，系弟实实文章知己，非寄耳目于人者。其寄弟一书，文与情俱堪不朽，附录一通寄览。以文章征遇合，或不致困顿如前也。

芝翁乔梓，各有俚句奉怀，录于拙制洒墨笺上，乞分致之。笺柬之制，日来愈繁，以敝友携带为艰，不敢多附，每种一幅，乞传示诸公，以博轰然一笑。弟入都门，则将载此为贽，凡我素交，皆不妨预制佳篇，以俟挥洒。

前恳《一家言》序，芝翁欲得全本一观，然后属草。以弟种种著作，皆经寓目，惟诗文未经多睹耳。兹因他作前后付梓，惟近体诗及绝句尚未灾木，先录二册寄上。乞宾主二人细细校阅，可删者删之，不则赐以佳评，藉光不朽。文亦录数纸呈上。笠翁丑态，尽于此矣！塞玄晏之门，而使不果践诺者，其是物乎？慨然与否，尽在作者，弟则不敢再措一词矣！

与赵声伯文学

弟之移家秣陵也，只因拙刻作祟，翻板者多，故违安土重迁之戒，以作移民就食之图。不意新刻甫出，吴门贪贾，即萌覬觎之心。幸弟风闻最早，力恳苏松道孙公，出示禁止，始寝其谋。乃吴门之议才熄，而家报倏至，谓杭人翻刻已竣，指日有新书出贸矣。弟以他事滞金阊，不获亲往问罪，只命小婿谒当事，求正厥辜。虽蒙稍惩贪恶，现在追板，尚未知后局何如？噫！蝇头之利几何，而此辈趋之若鹜。似此东荡西除，南征北讨，何年是寝玄晏甲时？弟方噬脐无及，而台翁尚作临渊之羨邪？闻入秋以来，举家善病，回生之力，全藉刀圭。先此鸣谢，尚容归时泥首。

复沈泽民太亲翁

锦翰下颁，适有他客在座，未遑裁复。客去之后，又值豚儿病剧，医卜纷来，应酬不宁，及今始能握管，负罪负罪！

台谕谆谆，总以令孙学业为念。祖孙之关痛痒，较父子更切，而今而后，不复以无父失教为忧矣。晤三亲翁时，曾以择师会文为嘱。亲翁所云，亦如尊旨，某某之外，皆不蒙许可，严慎可知。一有定期，当不惜以麈尾策其后。

豚犬病魔，近虽稍却；然为邓伯道之子，恐难必其无后虞耳！

佳莲种种，适符所好，悉如台教植之。所虑君子之花，不屑娱小人之目，但得青钱贴水，翠盖摇风，点缀坳堂足矣，不敢望其尽花也。

寄谢贾胶侯大中丞

晚渔一介庸儒，寡才鲜识，自分老死牖下，不望见知于当代名公卿矣。詎意明公谬耳虚声，不缘介绍，特授弓旌于数千里之外，使得应聘入秦，馆诸别宫，谬称上客。又复遍谕属僚，交相拂拭，饥则齐推，寒则并解，食五侯之鯖而衣千狐之腋者，凡四阅月。渔何人，而获蒙此异数哉？亦大幸矣！拜别逾时，未陈谢悃，总以朝东夕西，身无定在。兹幸税驾甘泉，始克寻鸿觅鲤，一致感私。近遇西来之口，备言近履亨嘉，与时并懋；新公相得甚欢，督抚同心。此地方之福，三秦黎庶，可比户而封矣。

渔止皋兰弥月，随走甘山。地主情殷，不忍遽尔言别，非夏杪秋初，不能旋轡。归时直走泾阳，不复迂道奉谢，以混起居，只

遣奴子叩首而已。先此告罪。不尽。

寄谢刘耀薇大中丞

拜别西驰，沿途揽胜，觉十五国员幅之大，未有过于三秦；而三秦畛域之宽，又未有过于明公所辖之境者。仁风布燠，塞草回青，弦诵扬徽，胡笳止奏。不意边境之宁贴，遂至此也。而今而后，始知明公恩威之所暨矣。

渔自抵甘泉，为大将军揖客，肆扞虱之迂谈，耸嗜痂之偏听。主人不以为狂，客亦自忘其谬。投辖情殷，未忍遽而言别。鞭梢东指，再诣化疆，知在金风告劲以前，赤帝敛威之候。兹托邮筒之便，一候起居。

家报邮入都门，再倩都人转寄，诚极便事，但非重以尊严之命，恐致浮沉。他书可失，家信不可失也。

与太仓州守陈麓屏

判袂以来，倏尔七更寒燠；金玉之爱，无顷不挂肺肝。阳城虽远，亦在六合以内，其不萌访戴之思者，以老道翁气谊如云，贫交远至，岂能愬然？安邑猪肝，非爱人以德者所宜食也。近得乔迁之耗，虽庆德星伊迓，亦不敢遽造化封。何也？三吴孔道，游辙颇多，无数旧交，悉以弟为瞻视。弟不能仰体故人，且为作俑，于心安乎？

昨遇张无竞掌科于吴门，谓老道翁每一把晤，必讯弟起居，且述交情不去口。以迹求之，是老道翁念弟不忘，而弟反置故人于度外矣。是用敬走一悻，仰贺新吉，附以拙刻种种，希赐郢斤。

老道翁立德、立功，为吾乡第一流人；弟虽不敏，亦窃附立言之义。虽云三不朽之相去初不甚远，然以世俗之见论之，则一在九天，一在重渊，不可同年而语矣。

与魏贞庵相国

劖劖氏刘某，江南名手也。从事敝斋有年，拙刻如林，多出其手。兹来燕都售技，公卿大夫鲜有识之者，敢恃爱进之阁下，乞检大集一二种试之。如果异寻常，则望收之左右，以听指使，亦药笼必需之洩渤也。大约都门生理，尽为捷足者所踞，而技之工拙不与焉。此工手有微长，而足不甚捷，故事事落人后耳。

复陈大司成

征诗文启，勉遵来命，敬增数语，兼易六七字。然皆索瘢西子之面，着粪如来之顶，无益本来，徒自增其罪过，惟听材择可耳。以渔视之，即使补缀有当，终不若仍旧贯之为一气呵成。

昨饱精凿，归时复骋骅骝，并此云谢。

与张仲选

蒙索家报，转倩贵友，以贵友先足下而行也。深荷分忧至谊，但见此兄作事，常有有始无卒者。殷洪乔何人，而敢以万金托乎？宁迟之以俟荣发。“担迟不担错”一语，虽是里俗常谈，然非折肱之医，不能道也。

之一 与林安国三札

敝寓屋小面西，别后即逢虐暑，日坐火山汤海中。自主人以及臧获，总无一人不善病者，以是未及过从，且疏音候。兹喜立秋届期，自此以往，或可日焉数过，以补从前未逮。

贵东翁七夕之约不敢辞，亦不敢许以必赴。乞以暑退之疾徐，卜人来之果否；不似天河对岸之人，至期必渡，不以风雨晦明为间也。预托西宾，代陈此意。

之二 谢赐席

若非肴核见遗，几不知今夕何夕。山中无历，我辈之常，不意来都门烦燥之地，亦复如是。

贵东翁议招，老东翁议馈，均是曲体人情。然邀之为惠，止及一身，寓中多人，未免枵腹以俟，不若馈之为利溥也。请博一笑。

之三

前者避暑之招，极欲趋赴。但因中暑抱疴，方幸小愈，若更往返骄阳之下，是避暑而得暑也。微与身命有关，故方长者之命，未审贵东翁能见谅否？

日来稍刈愁烦，以得家报，知生一子。非以得子为幸，以不生女为至幸也。多男多累，古尝言之，若生女于垂髫之年，身后

之累，当有什百于此者。

与张其山

盛暑灼人，易致河鱼之疾，非刻刻慎餐不可。然伏天稍泄，秋后无虞，仁兄此恙，可谓损益相半者也。人参偶乏，俟乞诸邻；川黄连尽多，不妨取之如寄。大率苦人能藏苦物，稍近甘甜者，则过而不留，想亦物从其类故耳。

与某公

此剧上半已完，可先付之优孟。自今日始，又为下场头矣，月杪必竣，竣后即行。观场盛举，恐不能与。演《西厢》、《琵琶》，不必实甫、则诚在座；譬之杜康造酒，未必自谙酒味，孰清孰浊，某圣某贤，反不若刘伶、阮籍辈之能咀而善辨也。且虑周郎满座，十目相顾，咎有所归，不若匿形藏拙之为愈耳。

与倪涵谷孝廉 借澡盆

日来西客罕至，骡贵如麟，昨晚始到数骑，增价雇就，廿三日果于行矣。

弟入都半载，尘垢满身，未经一浴，无其具也。北人都不办此，且谓多浴耗神。不审此地诸公得此养生妙诀，果能与彭、篯比算否？老年翁以南人居北，必能辟此迂风，如有其具，幸为一假。瓷盆寓中尽有，但恐浴至好处，忽然瓦解，吃惊致病，则耗

神之说验矣！将为北地诸公所笑，故必求其本者。

复曹顾庵太史

客中赆客，前此未闻，老先生破例行之，亦是一篇开创文字。却之非止不恭，且失作者命意所在，拜之可也。

尺牋新稿，立候见颁，稍缓则不及候。若俟邮筒缄寄，必落洪乔之手，司选者不得借光，反为波臣所有，则奈何？

与杜于皇

来牋九首，拙选已登其八。惟复何元方一札，过于抹倒时人，未免犯忌，故逸之。弟不录他人所作，或有厌倦之心，独于于皇不然，盖为藏巧，非藏拙也。新刻《巧团圆》一册附政。为人藏巧而巧不自藏，于皇得此，又将发难端矣。先为道破，或能免此。

与杜子濂公祖

一词二律，妙绝古今。明知夷光之颦，必不可效；而故作捧心之举者，恐虚倡始之心也。先次《满江红》一阕呈政，余俟与席诸贤同声相和，亦附骥尾。万一诸公尽为《阳春》搁笔，渔亦借口藏拙，不敢复作东家施矣。

答陈蕊仙

楮尾一言，用志秉彝之好，于高贤何补？辱谢，殊增颜甲。当今津要荐函犹不足恃，况出披蓑戴笠者乎？

《风筝误》行笥偶乏，无以应命。此曲浪播人间几二十载，其刻本无地无之，台翁索此为贄，岂欲售白豕于河东耶？

复俞贞庵

集以序传者，《三都》而后不再见；近世弁语，悉借书籍以传。拙笔之序名稿，尚恐书留千载，序仅一时。譬之如来金身，千古不坏；佛头尘秽，风过即消。求附不朽而不可得，敢如来谕所称？不虞之誉，徒滋厚愧。

与梁石渠

茶味极佳，而台翰黜之以为最劣，或止观色相，而未咀尝其味邪？岂不闻“以貌取人，失之子羽”？今令仍送少许，可觅佳泉试之，有不两腋风生者，请罚曹丘生以金谷酒数。

又

未试而见其劣，已试亦不觉其佳，是此物与足下始终无缘，其

不幸若此！虽然，足下酒人也，第知酒味而已矣，想陆羽《茶经》未尝寓目，何怪乎苍素不分？弟非左袒贾人，而敢于唐突知己，因见茗奴抱屈，不得不为白之。设有谓兰陵美酒，其价不值半文者，足下能三缄其口，不为一作不平鸣乎？

柬 同 学

吾兄自苕川归，以管城遗芝老，而以其馀及弟，可谓能均其惠矣！但我两人合而试之，不无精粗美恶之别。仰揣尊意，非有厚薄于者间，不过为芝老工书，故择其尤者以赠，弟仅涂鸦而已，即有好者，将安用之？独不思古语云：“能书不择笔”。芝老能书，尽可不择；如弟者，正当择笔而授之人也。谨作相如，奉归赵璧。

与 沈 亮 臣

自来说贫者盈篇累牍，总不出“饥寒”二字。余谓贫士之苦，有十倍饥寒者，逋累是也。忍十日之饥寒，不足缓追呼于片刻；倘以缓十日追呼者，而自疗饥寒，非但弗死，即以之鼓腹击壤而有馀矣。尧天舜日之下，安得复有贫士哉？闻足下日来亦苦于此，故以同病之呻吟告，总不知药我辈者为何人也！

复 王 左 车

营债之不宜借，犹乌喙之不可救饥，针毡之不可御寒。弟尝以此戒人，不谓今日自蹈其辙。始知身未极贫，而劝人以忍饥耐

寒勿称贷者，皆隔靴之搔、隔膜之视，徒足益人痛痒。然不借营债，究竟不知借债之苦，正须略尝其味。客岁以播迁之故，贷武人一二百金，追呼之虐，过罗刹百倍。日来已偿其半，可谓一半是人，一半是鬼。此番出游，只求偿尽孽逋，免登鬼策，无他愿也。来翰云彼以我为避债去，孰知正为偿债去乎！

与顾硕甫

砚无美恶，发墨者佳，所贵乎端溪者，以其能发墨也。若徒有端溪之名，而无发墨之实，是西子而石女、潘安而寺人矣。名号虽美，将安用之？弟笔耕为业，拟购佳砚代南亩，顷得石田而不可耕，是真石田矣！烦兄缓颊，令此君易以佳者；果能发墨，即不端溪亦可。价之低昂，自可弗论，弟虽无白镪，犹有青编，持书易砚，犹之抱布贸丝。即令发来，当出藏烟以试。

答 友

此公之重足下，十倍于弟，奈何足下往谒，而索鄙言为介乎？即云往系神交，未经谋面，盍以尊刻先之，开卷自能倒屣；从来真正知己，皆从特达中来，未闻子期之遇伯牙、管仲之交鲍叔，而有人介绍乎其间也。弟非吝此八行，虑其以轻弟者轻足下，是欲其入而闭之门也。

答 周 子

弟虽贫甚贱甚，然枉尺直寻之事，断不敢为。与其晓曳长裾于今日，何必逾垣凿坏于当年！且使居者先谒行者，是渊明令彭泽时事，非开三径、种五柳时事也。且此公之欲见贫士，岂以其能折节事贵人乎？有缘无缘，听之而已。

复 朱 建 三

闵茶佳绝，自用、赠人，无所不可。弟欲贯彼数斤，俟归来偿值，但恐主人筹事大熟，不肯以两腋清风，易我满船明月，则奈何？求缓颊之。

复 胡 彦 远

近子云之亭而不一问字，鹿鹿阮途，俗可知已。二拙刻如命送上，但须有以教我，且直示之。勿仅作皮里春秋，令弟子囊中索贬可也。

柬沧园主人

夜来耳热，得非二三恶少，又与丽人交讪我乎？弟之见怒于恶少，以前所撰拙剧，其间刻画花面情形，酷肖此辈，后来尽遭

惨戮，故生狐兔之悲是已。丽人于弟，则无德无怨，奈何不察本末，亦复从而和之。岂怪弟种种杂剧，不一借重芳名，故预发娇嗔，为将来刻画地乎？果尔，当俟复有所撰，不惜铅华二笔，举以赠之。既以宝剑授烈士，即当以红粉赠佳人。是弟自留缺陷，无怪女娲氏之切切求补也。

但有可商者，李亚仙既填花面，则今日之为郑元和者，亦不得不屈在净丑之间。是当预告足下，勿罪弟之唐突可耳！戏作打油数篇，乞代呈妆次，以博倾城一笑。

与吴梅村太史

揽胜名园，身去魂留者累日。老先生以方壶、蓬岛缩置几案前，日与仙眷遨游，与拔宅飞升者何异！无怪乎系恋东山，置海内苍生于不顾也。

过扰芳鲜，迄今犹芬齿颊。归装已束，刻日解维。所求玄晏，知己脱稿，拜惠正在此时，至于尺牍新篇，尤望倾度倒篋。老先生诗文大刻，业已充塞宇内，人所欲读未能者，仅有此耳。渔不敏，敢乞灵娲皇，为世人补此缺陷。

与密友

昨尊俦至舍，借考硯、果囊诸物，为公即应试吉需，荆妇辈希冀分荣，故乐得而与。然弟独吝之，何也？童子观场，如驹之试蹄、雏之演翻，必俟趾坚毛足，始可令其出厩离巢，保无坠蹶之患。盖幼稚不同于大人，全要养其锐气。干将、镆铢一试辄利，斯无往不利矣；驹雏试力，稍有坠蹶，则自此以往，反以坠蹶为

常，凌空致远为幸矣。弟观公郎，英敏不凡，的是凌空致远之器；然而察毛辩趾，犹恐未坚未足，需之一二年，则未可量矣。不飞不鸣，正在此时。请以弟今日之言，为冲天惊人之券。

复王阮亭司李

渔之希冀名篇，始于乍耳雷名之日。向以南辕北辙，订好无期久矣虚此良愿，不谓今日识荆州，果封万户侯也。尊稿四册俱领到，容以薇露盥手而读之。然开缄才览数行，便益人神智几许矣。

与方坦庵宫詹

传食诸侯，大贤长者之事，渔何人斯，而窃附从者，亦分鼎肉之惠邪？却则不恭，惟有饱德而已。今日乘当事丈量公出，趋归一视病儿；不出数日，复怀奇字叩阮亭矣。

所悬法书，幸先时倚马，勿俟笼鹅者至。

柬丛木虚

旅人孤寂，乐得知己过谈。诸兄既肯惠临，何却之有？谚云“添客不杀鸡”，况又无鸡可杀，不过益箸增杯而已。但乞于午刻偕来，愈早愈便，高谈挥麈，且为片刻晋人。弟昏黄即赴显者之招，恐不知麈尾为何物矣。

与赵介山

太守已经面别，廿四日果于行矣。姑绒幸为急售，今日之价可谓极贬，自此以往，不复有此贱物。幸语诸公，得尺王之尺，得寸王之寸也。

复唐君宗

日来困于酒食，闻腥即呕；至饮量不胜蕉叶，久为西园竹林诸贤所鄙，又海内所共闻者。先生官类广文，户堪罗雀，万勿以有数俸钱，付之虚掷。园蔬二簋，醇醪一升，足资半日清谈，为乐夥矣！茗则不妨多设，卢仝之数不足限也。

复高彦侣观察

名既不足重，诗又不能佳，所恃以免咎者，或借笔墨之工，稍掩文字之拙；乃涂鸦又复如是，一举而三恶备焉。此亦绫箠太佳，稍犯冥忌，故有此厄，非尽珥笔者之罪也。一噱！

复王左车

往时乘舆，较徒步为逸，昨独反之，以有快友谈心，故举足即至，且不觉其寒。归来独坐肩舆，更冒疾风，天之寒也、地之

远也，皆较去时加倍。始信“安步当车”与“对良友，如坐春风中”，均非欺人语也。

小艇今晨始至。初怪舟子爽约，及见苦雨忽晴，半肩行李，可免拖泥带水之厄，功过似可相准，无劳使者过督。

弟一生酸状，与醋相宜，故有乞邻之举。乃蒙慨赐，而又伴之以蜜，是欲变醠鸡为花下之蜂，殆炉锤我耶！至引首雪图之赠，又使人坐多宝船矣。不胜其谢！

粤游家报

之 一

离家后记起一事。靠东一带墙垣，单薄之甚，此穿窬捷径也；又兼奴辈善睡，欲其为司夜之犬难矣。为今之计，欲尽立木栅，则数间之屋，非十馀金之费不能。米盐莫支，何从办此？不若以生平所著之书之印板，连架移入其地，使之贴墙，可抵一层夹壁，贼遇此物，无不远之若浼。以书籍梨枣等物，皆致贫之具，出门求财者，以不见为祥；且蓄此之家，其无厚积可知，与藏布帛菽粟者反之。见信即移，勿俟来日。

之 二

正拟开帆，而石尤即至，阻江千者两昼一夜，想闻之矣。儿女子辈极善怨尤，又每以事前所遇为得失之兆。汝等得无致憾彼

苍，谓阻舟之风，去击荐福之雷不远乎？予亦以此卜之，反云最吉。顺始者逆终，进锐者退速，此理与数之断断不易者。一事有一事之始终，一行有一行之进退。此番出门之日，至他日返棹进门之日，即是一本传奇之首尾：开场淹蹇者，收场自然利达。尔等怨天尤人，直是作零出戏看，未尝计及全本耳。试问上场欢笑，而能不愁苦收场者，戏中有几人哉？两昼一夜之逆风，盖欲先难我也。汝辈试留此，为他日还家之左验。

之 三

虔州之米，贱于吾浙之糠。即今移居白门，米价稍廉于浙，而此间吃饭，犹俭于金陵之吃粥也。即鸡鹅鱼豕，无一不贱。况地主争迎，自爨之日甚少。因念客子饱欲死，家人饥欲死，何甘与苦之太不均乎？

之 四

客中买婢，是吾之常。汝等虑我岑寂，业已嘱之于初，必不嗔之于后。已得备员者一人矣，姿貌技能，一无足录，独取其舌本易掉，进门不数日，即解作吴音。未置庄岳之间，先去楚咻之习，逆知他日进门，与众齐人习处，南蛮鹄舌之患，吾知免夫！更有异者，粤多瘴患，土人以食槟榔辟之。四方客至，皆因其俗，予独未尝沾吻。过岭之初，先有诗一联云：“踏碎岭云身未倦，冲开烟瘴病翻除。”已置槟榔于不问矣。到此逾时，未生疾痛，始知瘴不我侵，亦犹鬼避不信邪人，虎不食不畏己者。人生在世，何可以一事自馁其气哉？此婢入门，即戒槟榔不使食。初以为苦，后

即安之，未几则见食者而笑，今则自食而呕，直畏途视之矣。可见移风变俗，大是易事，只在所见之确与所任之勇。吾家凡有妇人不能断葱韭，男子不可斯须去烟者，皆食槟榔之流亚也。当以此说正告之。

之 五

江行迅速，又连遇郑公风，已于朔日到鸠兹。因输榷钱，稍停一二宿，不出日之四五，决抵家矣。明知归期不远，而前信中迂其说者，虑尔辈望人急切，殊难为情。“朝朝江上望，错认几人船。”此等闺情，皆为早订归期误之也。即今不出四五之说，亦是我自为政，未尝虑及于天。不见出门之两昼一夜乎？勿盼来人，但占风信可耳。

四字帖辞武林诸亲友之招

去杭日久，形远迹疏，此来正为遍候新禧，重温旧好。但可于登堂晋谒之际，一觐芝颜；命驾式庐之时，再聆塵海。至于折柬相招，开筵赐款，则无论尊辈、同侪，一概不能趋命。其故有四，请历陈之。此地名贤多居城内之西北，而荒邸则在极南，欲赴宠招，其患在远，一也；此来适值仲冬，昼促夜长，除去栉沐饮膳，为时无几，往返一度，计妨半日之工，欲赴宠招，其患在短，二也；此来为谒当事，而诸公刑清政简，无惠可叨，旅橐萧然，不能日备肩舆之费，欲赴宠招，其患又在鲜，三也；生平与曲蘖无缘，贱量不胜蕉叶，此亲友所共知者。为饮一杯半杯之酒，而行十里二十里之遥，归来复有夜禁，非止得不胜失，亦且忧不

偿欢。则是欲赴宠招，其患又在于险，四也。坐此远、短、鲜、险之四患，恐来简懒板散之多讥，是用预布拙忱，统辞荣召。惟先生长者鉴而宥之，幸甚！

复尤展成先后五札

水哉亭诗，如命和上。东村捧心，自矜为美，但不可令西家见耳。使乎猝至而坐待焉，弟无子建之才之美，而有其捷。方之七步，未甚晚也。

之 二

曲不成曲，席不成席，而使佳客一夜无眠，欠伸万状，是不得杯酒之娱，反受声音之厄矣。兹辱佳篇，谀词满纸，然细细体认，又非皮里春秋，岂周郎顾曲亦有误耶？不则以巾幗恕之耳。曷敢当，曷敢当。对使效颦，即假手呈政。疾行无善步，幸以恕歌者恕之。

之 三

惠教《钧天》妙剧，读之气索小巫，真词林杰出之作。弟阅时贤剧稿不下百餘部，未尝见一元人，今始遇之。马东篱、高则诚诸君，居然尚在人间世也。君才十倍曹丕，奈何问道于盲？然既委校讎，不敢以“不敏”二字塞责，即当句栴字比，瑜中索瑕，以报台命。但愿先生之校拙稿，亦犹弟之不避斧钺，庶为相与有

成耳。望之，嘱之。

之 四

若辈声容，原无足取。昨又以炎威灼人，神气消沮，遂使无盐劣状和盘托出，不似前番之有拙可藏。先生聆惯仙乐，今忽睹此，不知如何作恶？其含饭不喷者，特以主人在座耳；乃反锡以瑶篇，作过情之誉，岂见诸公尔尔，亦复未能免俗耶？读之使听，无不泚颜，较夜来之挥汗如雨，似觉更甚。

之 五

历观大作，皆趋最上一乘。弟则巴人下里，是其本色，非止调不能高，即使能高，亦忧寡和，所谓“多买胭脂绘牡丹”也。昨止奉新刻而不及陈言者，以填词之道，近始窥见一斑，从前皆属梦呓，近作犹恐貽嘲，况为吴下阿蒙手笔乎！既蒙力索，势不容已，只得和盘托出，然知读未终篇，即当自悔其为冯妇耳！

与余澹心五札

偶过即出鸡黍，不俟咄嗟而办，何丈人饭客之易耶？谢谢！昨所语贱恙，既为过来人，复有验过之药，何不急以疗我？或引医者至寓，或弟往就之，悉望指南。未示姓名，不识壶悬何地耳。

之 二

炎威愈酷，襦襦为难，良晤似不可频矣。拙稿已赐斧斤者，乞发来授梓。声伯诗至今未作。大约勇于拈毫者，惟澹心、展成及第三人而已，馀皆行乎其所当行者也。

之 三

新刻又成一册，已送案头，恐亥豕较前更繁，再为痛校一过。落叶虽多，果遇飓风一阵，必使树地皆空，不致愈扫愈有也。新歌润笔，敬闻命矣。止具折简而不定时日者，欲俟评序到手，借此为有挟之求耳。

之 四

昨饮赵署，夜分始归。读后诗更为叫绝。饮药后，襦被蒙头，诗从汗出，得无从此霍然乎！乞讯医王，嗅其中有寒湿气否？

之 五

此序之难作，百倍他书，以极新之服，非奇绝之冠，不足称也。诂意大序之奇，更出新书上，犹恐立论过高，此书不能副耳。一度清歌，未足云报，惟一弹再鼓，庶足慰良工苦心，容卜日以

订。

新书又成一小册，再赐佳评。但此册专言女妆，恐非莽男儿所能评鹭，当以嫂夫人为大总裁，道翁如椽之笔，仅署纸尾可耳。捧腹捧腹！

与王鼎中

旅中无物不乏，甚至数人共卧一床，凉犹可耐，暑实难堪。不得不假于陈蕃之宅，或竹或木，幸假其一，无谓非徐孺不下也。如尊斋偶乏，则望转告于三昆仲。二王我将有遇，况数之倍焉者乎！

复沈贲园

扇头诗甚佳，脱去称觴腐习，又复天籁自鸣，此寒家太白之才，非贵族休文之笔也。离垢园诗，暇即报命。

某待诏手艺绝工，匪特尊吻游扬，同人多有誉之者。但贱臂有疾，初贴姜膏，有如甲冑在身，难施按摩绝技。容缓数日试之，何如？

答杨鄂州枢部

老先生行节久淹，正为束装所苦，我辈不能分忧，乃反重其累耶？却不恭而受有愧，宁从孟氏之训，谨拜赐矣！

复熊元献

前作未和，后韵复来，令人应接不暇。以埋头制举之人，复能办此，非天纵而何？异日馆阁中，当复推熊汉阳第一。次侯先生不死，请以弟言券之。勉尔效颦，自觉郊寒岛瘦。“文如其人”，非虚语也。

与郑房季

糠粃之导，弟不敢辞，已为积薪之第一束矣。如此佳题，人生苦不多得，凡我同人，俱当贾勇为之。金谷之罚，较军令尤严，勿以旗鼓非人，遂弁髦视之。速命使者遍传诸公，早求赐和，“慢令致期”四字，弟不任受也。

与徐东来

借来诸书，除某某二集外，皆属可焚。每见此等诗刻，即为梨枣称冤。秦始皇真英雄，惜乎不生于今日。嬴秦以前可焚之书尚少，此时再出一始皇，其功当百倍秦一世耳。不审邺架之上置此何为？岂君家富于酱瓿，留此以待不时之需耶？谨一一归上。

与李仁熟

身受盘飧，饱地主之德者，已数月矣，奈何复以亲友累人？明日之招，万万可已，乃台命严切，既不容辞，则请以四簋为约。暑天多费，徒为蝇蚋作主人耳。座客何辜，代任宰割之罪。此札幸致元老，同悉此情。

复程端伯司空

不独评语搔着痒处，使人身变紫薇花，不觉满树俱动；即论《闲情偶寄》数语，亦似按摩家作陈抟大睡，能令人死去，又能使之活来，真快手也！

简汪我生

锡山人来，遗我泉醪一甓，云是惠山寺高僧手酿。弟性不饮，敬送刘伯伦，必能辨其真贋。者亦他友所馈，寒家久持不杀之戒，并致司庖，非云献芹，亦匪报琼；与置无用之地，日损糠粃数升，不若转奉郇厨，两有所裨。且宰割时，未必不呼李生共啖，其得计又不止此也。一笑一笑！

与陈瓠翁

吴门返棹，急欲过从，苦为泥泞缩步，雨霁即叩东山也。

河豚之命，向志心版，甫到即向罟师觅之。其不能必得者，以吴侬读鲁论太熟，坚守不时不食之戒，稍稍过期，即望而却走。故无有持众忌之物，而求售于人者。然于此时卖新丝、巢新谷者，则竟有之，岂鲁论止戒后时、不戒先时耶？附及以博一笑。

答同席诸子

昨与二三同调，联袂朱门，飞觞绮席，聆清歌、观妙舞，固闲中一适也。乃弟非周郎，强之顾曲，便尔品题优劣，凿然言之，弟亦伤于不恕。然胸中所见，自谓帘内之丝，胜于堂上之竹；堂上之竹，又胜于阶下之肉。非好为昔人下转语也，大约即不如离、近不如远；和盘托出，不若使人想像于无穷耳。我辈生平著述，不宜倾篋示人，使海内因国门而思名山，亦是此意。但愧能言而不能行，奈何？

柬孙豫公

闻兄即日如楚，不一赐别，岂避渭城之钱耶！彼土产鹿，其角值颇贱，归时肯携百斤为赠乎？客子未行，先索方物，可笑也！然恐足下返棹时，或携他美物啖我。啖我，疚我也。美疚不如恶石，幸识斯音。

订友同赴广陵

八口驱人，将有广陵之役。昨晤介弟，知足下自新安返棹，腰缠不解，即拟为跨鹤之行。踽踽兴嗟，两情得无相共；倘解维之期不甚相远，谨相订偕行。不敢希效李郭之同舟，即以苍蝇舴舻尾于舳舻之后，亦叨附骥之荣矣。

向邻翁索菊

向人索花，于己为韵事，于人则不韵甚矣。然不向吾翁索花，于己为不韵，于吾翁亦非韵事也。闻今岁艺菊独繁，主人旦夕饱看，颇有倦色；且乞者不自我始，敢循例奉丐数本，点缀荒篱。知白衣送酒时，必不能忘旧主人也。

与陆诞生先

客有工琴者，偶过荒斋，请试其技。弟素不善此，未尝蓄之；然索之不得，未免彰吾俗态，遂诡词以应，而密令童子求假于兄。倘兄吝而不发，或姑迟之，皆有意窘弟也。谅兄不忍为，故疾书以告。

柬赵声伯

日暮途穷，料无首丘之日，欲得数椽小屋，老于此邦。顾不欲近市，市太喧；不欲居乡，乡有暴客之警。非喧非寂间，幸叱尊俎，为羁人留意。

与王绥亭大司马

节前二日，东阁延宾，衰朽庸儒，得厕诸名贤之末，荣亦甚矣！窃见老先生低回顾盼，似于少年英俊之外，别有赏心。老骥伏枥，某非其人，而收骏骨于既朽之年，识焦桐于灰烬之下，则老先生实当其任矣。

拙辑《诗韵》一书。偶于座间谈及，遂承面谕索观。因在他友处，索之连朝，始归敝簏，兹与拙廬一同献上。此廬仿墨刻碑文之制，于所创诸式中，颇称淡雅，可悬于方亭之最下一层。悬法与他廬稍异，须进小僮面讯之。《诗韵》无副本，一览即归为幸。

复陈学山少宰

某为中堂所留，是都门之缘未了。蒙手示，云缙绅先生之勇于下交者，尚不一其人。幸列名见示，以便遄谒。不知则已，知而不往，是有意遁迹，以待其先施。某何德何能，而敢骄倨若是哉？今早业有式庐者，谓曾托少宰公先容。某愧不敢当，故急于请命。

复袁六完太常

咫尺龙光，无日不思展覲，第恐荣擢以后，官愈尊而事愈冗，无暇作晋人清谈，故缩步不敢前耳。雪未至而虑及严寒，先以炭资见授，较送雪中者，更进一筹矣。谨效释子家风，念梵语数声，而后拜命之辱。

与曹峨眉中翰

无意为联，而适得口头二语颂扬明德，所谓天籁自鸣，榜之清署，以代国门之悬。有能易一字者，愿北面事之。一笑！

与金长真太守

初入长安，碌碌尘坌者逾月，昨暮始理砚田。首次台臺原韵，暨仙老长安松下一诗。无论《阳春》、《白雪》，和者原难；即《下里》、《巴人》之曲，亦久置不道。无怪乎笔重千钧，而荆棘丛生于纸上也。不书扇头而书拙幅者，欲假笈式之新，以掩词章之陋，存而不论可也。

与孙雪崖使君

别后又增新冗，昨暮始亲砚田。诗逋已了，此刻拜读新词矣。

开卷即觉芬芳袭人，欲加拙批，愧无薇露盥手。扇上新篇，久疏奉和，兹亦勉尔效颦。《白雪》、《阳春》，和原不易；矧皆枯寂之韵，似觉有心困人者。因其难之更难，遂致窘而又窘。急付祝融，为我藏拙。

与某郡伯

贵治之繁剧，甲于海内诸名邦。分符得此，庶足以展骥足矣。闻莲花幕中，尚乏良友。迺来文士面夷心惠者颇多，求为可寄心腹者颇难其人。是择交不可不慎，而择此等之交，尤不可不慎之又慎也。某生原籍嘉禾，侨居白下，其腹珠玑，其品金玉，敢以进之东阁，未审可充一席否？

与施匪莪司城

一诗一联，敬践前诺。虽诸冗纷集，笔冻指僵，不敢为知己惜余力也。先生旗鼓词坛四十馀载，名人赠名多至汗牛，何有于琐尾之夫，戈戈之语，而见索如是之力，非谬许之甚，能若是乎？

词荒意质，殊不足存，但取其一字不肤，移赠他人不得，或可免于覆瓿耳。贫极不能办缣素，是为可愧；然以此等之人、此等之诗，不书锦轴而题薄蹄，亦正可谓人地相宜耳！

复柯岸初掌科

前惠尊函，累累数百言，悯世婆心，跃出纸背。方叹服未已，

昨又得嗣音，垂念行客之艰，再四慰留。投辖高风，紫驹雅谊，不是过也。感戴之怀，莫能名状。

皇都胜概，谁不欲观？穷者苦不能到，到则低回留之不能去者，比比然也。渔幸以草莽贱夫，混迹公卿大夫间，日食五侯之鲭，夜宴三公之府。长者车辙，充溢衡门；馆阁诗筒，捷于邮置。侥幸若此而不欲久留，是为薄福人矣。况有钟情垂注，若岸初先生者，复何顾虑而必欲嘤嘤言去耶？

但其不得不去者，实有苦衷，敢为知己道之。渔无半亩之田，而有数十口之家，砚田笔耒，止靠一人。一人徂东则东向以待，一人徂西则西向以待，今来自北，则皆北面待哺矣。矧又贱性兢兢，耻为干谒，浪游天下几二十年，未尝敢尽一人之欢。每至一方，必先量其地之所入，足供旅人之所出，又可分馀惠以及妻孥，斯无内顾而可久。不则入少出多，势必沿门告贷，务尽主人之欢；一尽主人之欢，则有口则留之，心则速之使去者矣。渔抵都门数阅月，窃见缙绅先生之债而食者，十居八九。是地主之贫，犹甚于客。闻渔至止，谁不适其馆而授之餐？在故人则尽有绶袍之义，在新交亦各治鸡黍之欢。昨有馈书仪十二金，渔往谢而值其不在，见有贻券一纸，伏于砚石之下。取而阅之，则所典之镗数，适与所馈相符，始知贫士上交，累人不浅。睹此情形而犹恋恋不舍，则喜者半，而畏者亦半；喜则喜其晨夕相随，畏则畏其缓急相告。士至为人所畏而始去，则其为交也不绝自绝，此后尚有馀地乎？

渔二十年间游秦、游楚、游闽、游豫，游江之东西，游山之左右，游西秦而抵绝塞，游岭南而至天表，皆未取厌倦于人者，遵此道耳。即今庙堂之上，悉多旧交，皆当日建牙分符于外，而为渔之地主者，请遍讯其人，李子之言不尽诬否？生平若是，奚肯变节于一朝？故南归之志已决。

羣下诸公与台臺同心慰留者，尚不一其人，渔未能遍告。烦以此札代传，即作辞行之公牋可耳。

又附片札

此书乃复函，不烦裁答。前赐两札，俱费细绎深心，某浣读之余，不胜为长者叹惜。设以草札之工移入封事，则于国计民生，不知裨益几许？奈何与草野闲夫，驰骋笔墨，妨致君泽民之大计乎！渔再读。

来书附录 柯 竿 岸初

前读佳咏，婉切多姿，自是元白古风。更荷桐笺长幅，珍之座右，不特荒斋生色，兼令齏盐风味，倍添佳话矣。札示遽欲作别，殊不可解。老年翁奇才丽笔，结驷所至，便应字重国门之金，纸倍洛阳之价。乃客游未几，忽动归思，岂胡琴未碎，知音尚稀；抑京尘十丈，素衣易缁？老年翁扬扈风雅，终在烟霏林霭之间，金马门不以易蓬莱山耶？然时入严冬，风饕雪虐，何堪驴背驰驱？或俟春和景明，荷陶舆而携谢屐，蹑足泰岱之巅，寻胜莲花之渚，岂非快事！弟虽贫，犹可罄床头斗酒，任十日主人也。

又与岸初掌科

归装束就者三四日矣，止以驴价腾涌，未获遽行。乃索中堂忽下留客之令，代传德意者，则学山少宰、菽箴中翰二公也，且有预筹薪水，勿使久困阮途之温谕。由此观之，渔于都门卒岁，十有八九，正与慰留之台翰相符。

欲其止而即止，此中殆有天焉！可见为仁仁者婆心一发，即现慈航，与鲁论“我欲仁，斯二至矣”之圣训，无不立验而可信者。台臺推此一念，以为天下苍生，何难尽归衽席乎！

知聆此耗必大喜，故急述所闻以告。

与李雨商荆州太守

“不愿生封万户侯，但愿一识韩荆州。”荆州太守识之不易，自昔为然，矧以太史公而出乘五马，位列诸侯之上者乎！

渔虽浙籍，生于雒皋，是同姓而兼桑梓者也。闻名虽久，仰止甚殷，然前此未谋半面，必俟其为荆州太守始获订交，岂彼苍故欲迟之以实前人此语，使获缔交者自知愉快乎？得著姓名于客籍，喜可知已。

向在荆南，蒙加拂拭，拟于别后附一谢函，兼呈俚句，因麟鸿少便，遂阔略至今。兹值纪公祖谏狱之便，敬附一函八句，以志言念之私。贵同寅有不及遍候者，希叱犬马道意。

与张秀升郡司马

客荆南者兼旬，饮之食之、教之诲之无虚日者，惟台臺一人，外此则一见再也，以至数见而已。不知者皆谓秀升先生官闲署冷，故有揖客之暇；使居要地，亦不过一见再见，以至数见而已。某曰不然，苟无好士之诚，则一见欢然，再也寂然，求为悄然皤然之数见，不可得已。官闲而礼下士，无补于其闲；署冷而亲褐衣，是自益其冷：总非今日缙绅所乐为也。使秀升先生治烦理剧，处得为之地，其亲昵笠翁，仍当有倍于此者。观其临别握手，大有

愕然之色，似乎笠翁之去，不应如此萧然者。口虽不语，面实呈之，可概见矣！

别后拟践寄诗之约，因纪公祖之行日缓一日，是以淹滞及今。兹附一律于札尾，但抒实情，不计其词之工拙也。

与徐东来

诗筒之惠甚雅，但一试即便摧残，脱落者纷纷，大有瓦解之势。作者欠工，用者太莽，当中分其咎矣。昨烦鸣老暂归，乞即命原工修好，人能待，诗不能待也。

吴修老适以诗赠，弟即倚马和之。一江阻隔，邮递颇艰，乃和篇送到之刻，去作者停笔时，日犹未逾寸晷，不可谓非掩袭之师也。吾兄即一往观，定其工拙。笠翁劲敌，兹得两人，不复有寝戈晏甲时矣。

与陈端伯侍郎

先辈典型，杳不可即。别先生十年，犹获于此间一闻唾咳，何异再封万户侯乎！新刻呈政，乞从声容、颐养二部阅起，因台臺向于此中得道，乃过来人也。谅指示迷津，不遗余力，必不误小子而兼误天下后世之人耳。

复徐东来

昨鸣老渡江，报贵署葡萄已熟，且欲摘以见贻，家姬辈涎流

至地者一昼夜矣！今果见颁，食之更觉有味。以望之既久而后得，与卒然相遇者不同， 標梅始嫁，白发登科，同一致也。谢谢！

答 顾 赤 方

弟客楚江半载，得金甚少，得句颇多，但苦和者寥寥，自鸣孤掌之为恨耳！兹得高轩至止，才近阳春，即聆《白雪》，快何如之。正吟闰七夕诗而使者适至，先以呈政。新剧较之他刻，虽曰竿头稍进，然岂遂如台翰所云乎？敬谢不敏！

与许于王直指

某受先夫子特拔之知，四十年来报恩无地。都门获遇老祖台，重加拂拭，可谓幸矣！彼时又以未详家世，蒙昧上交，对伯鱼而不知为圣人之子，竟作通家孔李之称谓；若非以《春及堂诗》索序，惊识姓名，则至今犹在梦中。先夫子有灵，必曰“非吾徒也”，鸣鼓而攻于九天之上，则雷诛电掣其能免乎？虽蒙老祖台汪洋大度，宥以不知，其如清夜扪心，终难自恕何！

夫子诗文，从无门人作序之例，以序必弁首，是加履于冠之上也。不得已而应命，其惟跋乎。敬草一通呈上，乞严改而痛削之。

复徐静庵学宪

此君之谒当事，虽由我两人作合，乃当事先讯其名而后及之、

而后进之，与昏暮夜光有别也。奈何求水乳不得，而且为冰炭？顷接前后二翰，三复之而不得其解。岂在穆公之侧者，非但无子思其人，而反有臧仓其人乎？他词可以弗辨，但谓此君表里如一，此寓怒骂于嬉笑，以褒作贬者也。此君貌殊可骇，其中未必尽然；即使中无所有，岂一见再见所能决乎？以鄙衷测之，当事非他，乃今日之孔子；此君面非他，亦今日之澹台灭明也。

躯貌为祟，偶尔失之，是固无损于当事知入之明，亦不足累此君平昔之誉。但为曹丘生者，当先置一言于当事耳中，谓此君难以貌取，则先破疑团，而谗言不得入矣！晤当事及此君，不妨述以解嘲，或能变怒为喜。

与方绍村侍御

阅诗评文，良非易事。看得出、批得当，即是棒喝作者处，不特涂铅抹黛，饰混沌以蛾眉，代掩世人耳目已也。拙著中评语颇多，某最服膺老父台之千金一字。盖以点铁手点睛，不必尽是真龙，亦或侥幸飞去，未可知也。况复古雅遒劲，真不愧当代词宗。兹又进《窥词管见》一册，此册列于词刻之首，开卷即睹雷名，与作玄晏无异也。

与王允大驿宪

某自燕京归后，止能一觐龙光，后此则台驾远巡，追随无地。近复纶音早下，荣擢上江，某亦束装归里，是飞者愈高，潜者愈下，九天九渊，判乎此矣！前出都时，蒙北山先生面谕云：“别后致书，皆附入家孟吉报中汇寄。”兹以一函奉托，此出令弟先生之

命，非敢以置书邮唐突长者，石头城故事，其能免乎！

与丁飞涛仪部

以片刻聚谈，偿十年契阔，欲语私衷，挂一漏万，徒增别后之怊怊耳！犹幸各有新篇，交相印可，以笔代舌，无异同堂，较之坐以竟日，止勾寒暄者，犹觉彼逊于此也。

蒙贶诗词二刻，未行之先，应酬纷纷，无暇寓目。才入舴艋，即以二物代干饔，觉比麟脯熊蹯，尤耐咀嚼。诗无近人习气，更无唐人习气，真可独有千古，奚止凌轹一时；词则隶使苏、秦，奴鞭辛、柳，自成一家，而又能合众美以成一家。弟自选词以来，未有庆得其人如今日者。诗馀为填词宾白之先声，将来必有院本，词场突出一飞将，湖上翁之片帆，将为大力者攫之而走矣！一词一诗，均道此意。乞批削示教，以便灾梨。

与何省斋太史

此等世界，闭户无粮，出门多阻，惟有日叩子云之居，问字谈玄，可以永日。又无奈炎威逼人，襦襦不得，止可与楮国公、中书君作缘而已。咏史诗拟作百首，今先得什一，乞为删削。前《忧乱》四首，针砭极当，已经改窜，并易其题。此后凡遇拙稿，悉如前药石之。幸甚，幸甚！

与徐电发

以十年欲见之一人，一旦入神仙署中，风动帐开，忽睹其面。在他人视之，则为入幕之宾；在弟视之，则但觉其英武逼人，似有捉刀之名，而非其实者。片刻晤谈，遂成千古不散之良会，幸哉幸哉！

归舟日把新篇，与柳村、棠村二帙，更翻快读，竟不知为路几何，为日几何，而已忽抵金陵矣。弟词选不久告成。闻龚宗伯全稿托吾兄授梓，何不惠弟一册以备选？见人织锦而以丝秘篋中，恐非所以报知己也。

吾乡寇警渐疏，此地妖氛转炽。弟欲归依刘表，未审贵东翁及在上诸当路，肯复授一廛而为氓否？

与刘使君

天涯知己，得邂逅于无心；又一睹即蒙拂拭，生平幸事，未有过于此者。昨宵快谈，可补前日宠招未赴之不逮。原约今早来叩，已经出户，而凄风苦雨迎面吹来，有莫可遮拦之势，只得暂时退，以俟稍晴。坐肩舆访友，而亦见阻于石尤风，亦诗题之绝奇者，容稍闲赋之。

弟从前拙刻，车载斗量。近以购纸无钱，多束诸高阁而未印，然经老年台阅过者，想亦半之。惟《闲情偶寄》一种，其新人耳目，较他刻为尤甚。昨经面讯，答云未见，今特自他友处索来，请自第六卷声容部阅起，可破旅次中十日岑寂。其一卷至五卷，则单论填词一道，犹为可缓，俟终篇后，补阅何如？

复周东轩

贤士之处世，如锥之处囊，其锋颖立见。老社台隐于莲花幕中，足迹不出户外，姓名莫使人知，可谓善韬其踪者矣。然前读扇头一作，便知捉刀人真英雄，非寻常代斫者比。兹捧来翰，兼读和章，自信从前射覆之不谬。然迟之今日，始露姓名，虚五十馀日把臂之缘。同调相逢，百岁中宁有几日？蹉跎若是，其何以堪！弟又不能不为老社翁咎也。先此谢教，雨止之刻，即趋谒之期。率复，不尽。

与余澹心

驾装巷之扰鸡黍，百花巷之饱脱粟，事在目前，情同隔世。以岁月不多，而世事人情之变，不能更仆数也。别来道履亨嘉，未能悉聆其况；然以高卧一室之幽闲，较之托钵四方之劳瘁，则相去何啻仙凡，有不俟起居而知其无咎者矣！弟自乔、王二姬先后化为异物，顾影凄凉，老泪盈把，生趣日削一日。近又四方多故，蹙蹙靡骋；啼饥之口半百，仰屋之嗟一人，不知作何究竟？惟有援国事以喻家事，付之无可奈何而已。

与孙宇台

弟向在湖上时，益友二三，于吾宇台首屈一指。自弟播迁以后，宇台亦为东西南北之人，不通闻问者，遂至十有馀载。重生

计而薄交情，密经营而疏问难，究竟送穷不去，徒使鄙吝日增，良可悔也！迩因各归故乡，萍踪复聚，头颅虽白，兴致尚豪，两人互相称庆。然倾盖即别，若七月七日之牛女，虽有相见之名，卒少欢娱之实，反不若终年契阔，不生他想之为愈也。

弟十年之内，著述颇繁。四海同人，非序即评，皆有华袞之锡；独生平最密之宇台，茫无只字。缺陷世界，未有过于此者。兹作一诗奉寄，兼以新刻附览，择其可评者评之。书虽刻成，梓人惯作女娲氏，文字之天犹可补也。

复朱其恭

屡褻如椽，为拙稿文其固陋，辱此荣彼，情何以堪！谢谢！拙刻之携来者，送尽无遗，未来者，印而未至，故无以报命。惟以新剧二种，奉太夫人展阅，以助承欢，可代足下数十次斑斓之舞。至索联不与，非敢吝也，知放榜后必来，补赠未晚。此时下笔，恐落措大家风，与新贵人不侔耳。

与诸暨明府刘梦锡

台旌荣发之后，弟即鼓棹吴门。谬谓时事多艰，莅任之期尚缓，正可由虎阜盘桓，追随入浙，聆玉屑而和阳春，乐事正未艾也。詎料弟止金阊之日，即驾过平望之时，后尘非远，追之莫及，惟对张诗老叹悔来迟而已。

恭闻入境之初，大乱虽平，四野馀氛，犹未尽熄。老父台以文臣而亲武事，削平反侧，招抚流亡，变危疆而成乐土。错节盘根，利器因之而见，诚盛事也！

弟滞三吴不久，即诣杭城为抚军祝寿。晤许无功、何昆孚两公祖，相视莫逆，遂作山阴道上之游，今止越城旬日矣。拟过诸暨一耳琴声，但恐安邑有猪肝之累，心欲去而足不前。然知老父台厚待故人，不必定为不费之惠，倘蒙念其凄凉，而复悯其劳顿，则绋袍之赐，不妨遣盛使颁来。如蘧伯玉之念仲尼，无烦自枉其驾；而季任储子之加惠孟轲，亦不必定使来前也。弟何人斯，敢以圣贤自谕？只以老父台之怜才好士，当不出古人下耳。

与陈次升封翁

华诞伊迩，渔即日返金陵，不获与于称觴之日，谨先一月奉祝。今科一榜三贤，皆谢庭玉树，真佳事之仅见者。渔彼时抱疴在床，未及趋墀道喜，今总以一联括之。人情纸半张，酸儒常态也；至以半张纸了无限人情，则亦酸态之仅见者。以仅贺仅，无乃相当？奉博一笑。

与韩子蘧

顾梁老题像一词，题难而韵更难，非骅才不敢下笔。大作三首，幅幅擅场，具仞兼人大力。弟篝灯勉和一阙，殊觉难工。少且不胜，何况于多，益服韩准阴用兵之善也。

昨顾梁老以人赠蔬果见贻，弟以一诗代柬，并录博笑。大约弟之诗文杂著，皆属笑资。以后向坊人购书，但有展阅数行而顾不疾解者，即属贖本。

昨梁老向弟云，迩来多恶抱，昨得快书一种，才读数卷，不觉沉郁顿开。弟问何书？答曰：即尊著《闲情偶寄》也。弟问何

处购来？答曰：穷途焉得买书钱，不过向书船借读耳。即此可证弟言不谬。书船若未去，何不援梁老之例，借来一观，作三日夜布袋和尚乎？

今日往晤归安否？处子欲言而不便出口者，幸以冰人之舌代之。

与梁冶湄明府

前函已达左右，今日始得报音，知念弟甚切。弟未接到，诸儿女窃启私窥，先已歌功颂德，弟其后焉者也。

蒙谕，弟不在家，舍间有事奉恳，不妨以子代父。此俯恤贫交之至意也。但童牙稚子，从未见人，矧在长者之前，尚能吐一字乎？已作家报示之，如有所云，当倩敝友某率之而来。以父执之口，代告犹父，或与面谈无异耳。

弟日来诗文愈繁，知老父台机务鞅掌，不敢以无益之书，溷有用之目，只以赋四篇求政。或谓求冗宦阅诗文，犹对醒人说梦，说者自说，其如听者之不听何。弟谓此语诚然，但非所论于冶湄先生耳。先生以文字为性命，饥渴以之。湖上诸文人，凡挟诗词就教者，未闻高阁一字。厚所薄而薄所厚，有是理乎？故不远数百里邮致焉。古文词之最易倦人者，莫过于赋，惟拙稿不然，以其意浅而词近耳。试翻一二叶，即知其余矣。

与于胜斯郡司马

不知驾旋，失于趋候。明日之招，义不敢辞，但求假以清谈，勿呼梨园奏曲，使麈尾不得上手。富贵人见招，大都不免此厄，老

祖台有晋人风味，爱客当不出此。若另有别客，则不敢擅主其议，未必他心似我心也。

又

前诗去后，昨因坐雨无聊，又作二首，仍用前韵。《巴人》、《下里》之曲，不止人和者多，自和亦不少矣。并祈笑政。

与顾梁汾典籍

蔬果分甘，大饫枵腹，随赋一诗鸣谢，曾为喷饭否？题像词不以原韵赐观，而遽尔索和，想虑见《阳春》则搁笔，不若听下里巴人向暗中摸索乎？此亦体贴庸才之至意也。兹妄揣一阕呈政。东施之颦效矣，愿借西子一观。不识心在腹中，当从何处捧起？必有异乎人者，谨拭目以待。

又

狗尾不足，仍以狗续。宴集诗又作二首，仍用前韵。此坐肩輿中所作，拟即誉送，因一友坐寓中久谈不去，故至今始脱腹稿。诗经越宿而后出，未免有馊饭气，观者作恶，不止喷饭已也。

与孙宇台、毛稚黄二好友

弟自春孟移家至杭，即染沉痾，三愈三反，死而复活者数四。再不料看菊持螯之日，尚有一笠翁在人间世也。

兹幸小愈，饥驱至苕川。幸地主稍贤，能以佳茗醇醪药我，不至遄死。然此不过药中佐使耳，非恃以为君之药王也。药王维何？管城子，楮先生、即墨侯，三人而已。日来所著诗文杂著，竟盈数大帙。坊人苦索，谓弟《一家言》之初集大噪海内，（真是“瓦缶雷鸣”！）四方人士询二集曾出否者，日有数辈。盍急梓之，以已众渴。故弟欲以病中病后之言，合前已刻而未竟者，共成一书。丑不自藏而数现于外，实狂且辈挑之使然，非尽倚门献笑者之罪矣！

但不经公输之手，难入离娄之目。弟所恃为郢人者，宇兄及稚黄两人而已。兹特专力送上，乞为痛铲严削，勿顾木之能堪与否。弟非齐宣，即斫而小之，必不怒也。前赐佳评，俱已登之版上，非久即以纸墨从事矣

复佟梅岑

老年台惊才绝艳，迥别时流。杰作数篇，真是一词莫赞。然蒙面谕严切、又复手谕谆谆，是以国士遇我，焉敢不以国士报之？只得向西子面上强索瘢痕。究竟捧心之疾，较无疾之容更美，僭易数字，得无反类东家颦乎？奉扰看花，原订赋诗以谢，今补上。闻昔《巴人》、《下里》之曲，和者盈千，吾知珠玉琳琅，皆不求自至矣。

上都门故人述旧状书

问天下人之贫，有贫于湖上笠翁者乎？人皆曰：“有。天下贫士之多，浮于恒河沙数，皆苦于乏恒产、鲜营业；且四方无知识，有亦不多，寒乏终袍之赠，饥无索米之家，此其所以贫也。子有笔胜磁基、砚同负郭，卖文已足糊口，矧所至辄有逢迎，何贫之有？”予谓子知其一，莫知其他。士之贫者，多苦于食指之繁。然少不过三五人、七八人，多则十人、二十人而止矣，有至三四十口者乎？即曰有之，十口之中坐食者七八，必有一二生财者。虽曰不多，日进分文，亦可稍资盐米，是开门七件之中，已去某一二事矣。仆无八口应有之田，而张口受餐者五倍其数；即有可卖之文，然今日买文之家，有能奉金百斤，以买《长门》一赋，如陈皇后之于司马相如者乎？子必曰无之。然则卖文之钱，亦可指屈而数计矣！以四十口而仰食于一身，是以一桑之叶，饲百筐之蚕，日生夜长，其何能给？牛山之伐，不若是其酷矣！至于海内知交，虽不敢谓何人不识，然亦不可以“知我者希”四字，冤天下誉我之人。二十年来负笈四方，三分天下，几遍其二。所到之处，适馆授餐者原有其人，无如多入之家，亦复多出。水之有纳无泄，惟海为然，江河皆不能及。仆无沟洫之纳，而有江河之泄，无怪乎今日之富，无补于明日之贫矣！亲戚朋友怜之者固多，鄙而笑之者亦复不少，皆怪予不识艰难，肆意挥霍，有昔日之豪举，宜乎有今日之落魄。而不知昔日之豪举，非自为之。人为之也。食皆友推之食，衣亦人解之衣；即歌姬数人，并非钱买，皆出知己所赠。良友之赠姬妾，与解衣推食等耳。譬之须贾以袍赠范雎，五侯以鲭赐楼护。睢、护不自衣食，而以之售财作家，有是理乎？乃今则皆死矣，死可也，卖则不可。凡此皆仆致贫之由，从前安之

若素，而今条举缕述以告人者，以昔处贫贱，今则贫贱而加之患难矣！仆少艰嗣续，老忽宜男。只据现在计之，子五女三，合而为八，后此之添累与否，尚未可知。古云“盗不入多女之家”，知其费多而财竭耳。

仆本浙人，虽家于金陵，非土著也。首丘之念，蓄之已久，矧祖宗墟墓在焉？自乙卯岁两儿泮游于浙，遂决策移家。客岁蒙浙中当道协力维持，获遂买山之愿。乃自夏至冬，不及一载，卜居之后，继以土木；土木未竟，继以婚娶；婚娶甫毕，即事迁移。迁非数里之遥而止也，由白门至武林，千有馀里，四十口之家，非一舟一车可载；况住金陵二十载，逋累满身，在则可缓，去则不容不偿。故临行所费金钱，什百于舟车之数。无论金陵别业属之他人，即生平著述之梨枣与所服之衣，妻妾儿女头上之簪、耳边之珥，凡值数钱一镒者，无不以之代子钱，始能挈家而出。可怜彼一时也只顾医疮，使尽难剜之肉；以致此一时也听其露肘，并无可捉之襟。

然俗谚有云，留得山在，不患无薪。使身到武陵之日，犹能日操寸管，游于大人之门，虽不获仍前醉饱，尚能苟免无饥。孰意抵抗数日，即卧病不起。一人不起，众命皆悬。仲春至季秋，凡八阅月，死而生、生而复死者不知凡几；口授儿辈，使作书与辇下故人为永诀之词者，几数十百函，及今犹在。必不料至此时此日，犹在人间作三上相书之韩愈也。乃今躯壳尚存，血肉何在？虽有数椽之屋，修葺未终，遽尔释手。日在风雨之下，夜居盗贼之间；寐无堪宿之床，坐乏可凭之几。甚至税釜以炊，借碗而食。嗟乎伤哉！李子之穷，遂至此乎！

切思鞶鞶之下，尽有贵交。当今之世，若望一人一手，拯此艰危，此必不得之数也。众擎易举，但求一二有心人，顺风一呼，各助以力，则湖上笠翁尚不即死。俾从前已著之书，赎出梨枣，仍为己有。其已脱稿而梓之未竟，与未成书而腹稿尚存者，乘其有

手，急使编摩，则尚有一二种可阅之书，新人耳目。否则此书一函，竟为笠翁之绝笔矣！

昔太史公以宫刑可免，欲赎无资，因作货殖一传以寄慨。仆思宫刑不赎，犹能活在世间；十指如锤，不与寸肉同腐。使仆当此际而无人肯援，则罪同大辟，岂止宫刑而已哉！虽曰子长何人，予非其比，然才无大小，可怜则一。使毫无足惜，则诸公以前之拂拭谓何？

嗟乎！死后怜才，常有生不同时之恨；生前抱璞，反有见哭不救之人。非去之后，惟日向长安饮泣而已。

与陈陶庵、邹可达

天涯知己，偶聚一方，幸矣！乃长房缩之以地，而雨师风伯，不肯假之以天，则奈何？弟向有一联云：“穷愁易忘须臾事，风雨能遥咫尺人。”晴明读此诗，不觉其好，乃今则自赞为佳矣。二兄锡我多篇，勾许时快读，即再雨三日无妨也。

与于胜斯公祖

匹妇云亡，何异草木之腐，凡民犹不屑吊，况辱长者车乎？又在使节初旋，俸钱使尽之后，称贷助丧，以益廉吏之苦。无论生者欠宁，即九原之下，能安心享此隆奠乎？便羽称谢，未尽我私。

贵役之横，向吹台分，不敢投鼠。乃今事过愤消，亦可置之罔问矣。“不念旧恶”一语，愿与老祖台共之。

与顾且庵侍御

两年以来，高轩式庐者奚止数四，昭烈之顾南阳，不逮是矣！无奈促膝缘慳，十来九左。向勒数行道歉，业蒙长者垂谅，恕以无辜矣。乃今匹妇云亡，又辱车骑赐唁。凡丧家闭灵以后，即齐民来吊，亦无受拜之礼，矧衣绣乘骢之上客乎！接见于停棺之所，似乎有意屈尊；别有茅舍数椽，略堪倒屣，又为路曲而迁，苦雨兼旬，污泥盈尺，客之至者常有履限泥中，拔之不起，大悔失容而去者。老先生何人，而敢以此辱辱之乎？辞以不在，俟旌旋往谢，敬也，非慢也。岂敢蹈逾坦凿坏之故辙，故避显者以鸣高；亦非效林和靖之故态，以“好客临门鳌缩头”之句贻讥当世也。昨趋候不值，又类瞰亡，故勒此以代面告。

与丁泰岩方伯

老先生荣莅名藩，身膺重寄，非惟保障江南，亦且屏翰四国。抚军一席，旦暮俟之，慕鹤鸣先生业有成式于前矣！渔也向在都门，谬承刮目。今居武林，去姑苏一衣带水，只于今岁新正，携家而过，敬投一刺，此后不敢再溷起居。即舟过吴门，亦扬帆径度，若不知中途有一故人者，以老先生门清似水，令肃于霜，布衣谒显者，虽曰我无干渎，其谁信之？此种愚忱，或蒙见谅，然竟漠然于度外，又似过于矫情。谨效蘧伯玉之于孔子，使人代己，略致愚诚。若问夫子何为，则近状可忧，缕词难述，非“寡过未能”四字，能概其行藏者也！

再寄丁泰岩方伯

士重知己，甚于感恩，以恩出乎外，而知由于中也。客冬遣力驰候，人旋启牍，拜赐之外，复蒙惠诗。拜赐即是感恩，当无衣无褐之时，得故人赐金以卒岁，惠诚渥矣！迨三复瑶篇之后，益深知己之感；又觉赠言为重，而金帛之赐为稍轻矣！

人谓千里贻诗，乃故人赠答之常事，何以遂名知己，又何以重于感恩？渔谓此诗不同诸咏，一举而三可感者备焉！财赋莫重于江南，政繁事剧亦莫甚于江南之方伯。地为何地？官是何官？又当岁暮冗极之时，而能作诗染翰，以锡贫交乎！此其可感者一。我若先以诗往，则有唱必和，为赠答之常，而我实未之先也；且当今寒贱之士，羔雁其诗，以谒贵人者，不知凡几，曾有片言下答，为唱予和汝之事乎？此其可感者二。荐绅先生赠客之诗，强半出于捉刀人手。乃先生寄我之诗，则自首及尾，皆叙十年以来下交实事。无论诗难代作，即其中情事，亦非人所能知。当日识荆之始，在李书云掌科席中，及今十馀年矣。贵人多忘事，其谁复能记忆之？而先生之起句云：“曾忆京华对绮筵，韶光荏苒几经年？”记此不忘，情之真切，已见一斑矣。先生之游宦江左，不自方伯始也。为臬宪时，一抵金陵，即讯笠翁何在？时予托钵四方，终此一任，未尝谋面；及迁方伯，渔过吴门投刺，而先生适有按部之行，各求一晤，不可得也。直至岁杪，始通尺一，其颌联云：“春来游屐偏相失，岁暮音书岂浪传。”此岂八寸三分之帽乎？至后半幅云：“谈笑近应推白社，才名遥可继青莲。好书堆案樽盈酒，何事忧贫意惘然？”爱之慰之，不遗余力。迨观临池妙墨，益信为真本兰亭。此其可感者三。岂非当今仕宦，绝无仅有之事哉？无才者不能为，有才者不暇为；即有才而暇，亦不肯为。唐人诗云：

“贵人昔未贵，咸愿顾寒微；及至登枢要，何曾问布衣！”问且不屑，何有于诗？先生诚古人哉！士重知己，甚于感恩，此之谓也。不敢虚负台心，故再附一函以谢。

与张壶阳观察

昨游畅甚，老祖台返客为主，天亦返阴为晴，有此人事，即应有此天公，皆似巧于命题而工于索诗者。“不有佳作，何伸雅怀？”家太白尝言之矣。仆诗不能佳，但能以磁吸铁，引其佳者。乞以江郎梦中笔和之。

与徐冶公二札

当世才人，有如星密；文字之富，家拟石崇。若止论传奇一道，则冶公与第二人之外，不能再屈第三指矣。同调之难若此，则我两人之相爱相怜，当有什百于恒情者。奈何室迩人遐，弟为饥驱而走四方，吾兄又为智远才高，每为达人显者秘之帙幄。金陵把臂以后，只于前岁之夏，一晤于大人先生之席中；次年复至，则求风动帐开，再晤捉刀人而不得矣！人生几何，堪此辽隔；千秋大业，得共商于何日哉？迺闻驾旋锦里，鳞羽至便，岂得以一江隔之？是以敬附八行，写我契阔。

其 二

十年不得故人书，一旦飞来天上，雨金雨粟之奇，不是过矣。

再读《香草吟》妙剧，钧天之音，又复随风而下，愉快之极，不免大费叵罗。

弁言之委，不敢方命，已大秽佛头矣。但此剧命名之第三字，犹未尽善。盖“吟”“草”、“集”三字，皆迹来诗刻之通称。他日悬之国门，人皆谬认为诗草。今人喜读闲书，购新剧者十人而九；名人诗集，问者寥寥。此段姻缘始于香草亭止，不若竟易“亭”字，与《拜月》、《牡丹》鼎足而峙，谁曰不宜？

尊函未到之先，曾勒数行寄候。未见齿及，岂听沉者自沉耶？

与古灯和尚

冗驱出户，竟日方归。闻法驾远临，面壁良久而后去。主人之罪，浮于地狱中人矣！及读佳诗，不胜叹服。有韵士家风，无禅和子气习。颂其诗而知其人，盖逃乎墨而仍不失为儒者也。奉答四首，因不能佳，故以多为贵耳。急欲趋叩，因與人卧病，往返二十里之遥，又苦泥泞，非鸡皮老翁能以安步当车者也。容稍晴之日，负荆而往。

启 贺

《资治新书》征文小启

名贤竞选诗文，不肖偏征案牍。贵簿书而薄风雅，虽见晒于时髦；收图籍而弃金缙，窃效顰于往哲。自有明以至皇清，其间蜚声仕路、澍德人寰者，难更仆数，不得铭彝勒卣之先声存诸汗竹，使循良治迹湮灭不传，亦我辈操觚者之过也。慈特广搜遗牍，博采新篇，著为有益之书，用作可传之具。但恨海宇辽阔，闻见空疏，兼之壑处林居，贵游绝少，前代名公巨卿、当世贤豪长者，闻其名而未见其人，见其人而未读其书者，不知凡几。走书径索，既耻未同而言；浼友代征，又虑乞怜见鄙。是用借初编为驿使，征嗣刻于邮筒。伏望海内明公，各搜宦笈，自公移文告，以及条议献词，凡有泽民利国之嘉猷、易俗移风之雅训，倾囊远赐，只字可抵百朋；忘分下交，千里何殊一室！行见《二集》之出，纸价倍腾，何也？集千腋以成裘，将与金章比贵；和五鲭而作饌，宁偕市脯同甘？詎若斯编之挂一漏万，貽管窥蠡测之讥于当世哉！

后学李渔载拜启

名稿远赐，乞邮致金陵翼圣堂书坊。稿送荒斋，必不沉搁。但须封固钤印，庶免漏遗，并索图章贱刺报命，以验收否。前蒙四方君子远贻尺牍，尊稿本坊未收，或为他人误领，或为驿使浮沉，以致开罪名流，无从辩白，误之于前，不得不慎之于后耳。

候吏科给谏启

伏以风生青琐，正容承湛露之恩；日映皂囊，论事抗回天之力。簪缨动色，廊庙增辉。

恭惟某玉尺端凝，朱弦疏越。试屠龙之妙计，横画九州；藏绣虎之雄才，独赢八斗。安刘必勃，家传重厚之风；相赵惟昌，代接贵强之气。杏园春色遍，锡燕笑于琼林；枫陛晓光分，肃趋跄于玉珮。拾遗禁闼，汲长孺之直重闻；补阙纶扉，促山甫之微未远。在山而卫藜藿，居然生虎豹之威；陟阿而盛梧桐，展矣翔凤皇之彩。得言者言矣，允称今日谏官；可行则行之，会拜异时宰相。

某滥叨百里，竟同與隸之奔；翹企五云，顿若仙凡之隔。邮驿劳瘁，诚愧鰥穷；山海高深，惟知鳌戴。敬因风至，窃有美于食芹；幸赐电存，庶无忘于采菲。统祈丙暘，不既寅忱。

贺太守纳双姬

台疑云梦，宅是汾阳。翡翠一双，交栖玉树；鸳鸯七十，并列银塘。小蛮、樊素递妆成，徐听帘栊珮响；释氏、老君亲抱送，豫征莞簟球光。竹马乐春秣，知福履广细侯之胤；兰帟欢夜永，请清平赓太白之章。

——见《四六初征》卷七嘉姻部

贺友人早岁举子

秋生银井，方咏睢鸠；岁逾金商，便歌麟趾。长卿晚翠，秀伴香孩；筒子轻红，奇抽玉树。果是月中丹桂，香风吹子下人间；抑为天上石麟，薄雾浸衣来下里。空中名字，月魄争光；掌上英姿，璋文埒闰。征赤脚之再见，入抱不啼；悟锦档于三生，相对而笑。譬之海榴卢橘，不盈尺而颖实多英，是为阶庭之贵；傲彼江枫山槭，纵干霄而支离寡和，空贻岩壑之讥。参军新妇贤相敌，方能如此；阿大中郎喜有馀，无以异焉。急倾九媪之仙醪，同酣照社；好作三山之汤饼，早贺充闾。

——见《四六初征》卷八诞儿部

五 帝 纪

论华封人三祝

华封人祝帝尧曰：“使圣人富、寿、多男子。”帝曰：“辞。多男则多惧；富则多事；寿则多辱。”封人曰：“天生万民，必授之职，多男而授之职，何惧之有？富而使人分之，何事之有？天下有道，与物皆昌，天下无道，修德就简，千岁厌世，去而上仙，乘彼白云，至于帝乡，何辱之有？”

笠翁曰：古之善颂善祷者，皆于祝颂之中寓规讽之意，如张老“歌于斯，哭于斯，聚国族于斯”之类是也。独华封人以富、寿、多男为祝，无乃近谀而类今人齿颊乎？曰：不然。彼盖先具规讽之意于中，而故设谀词以发其问端者也。故因帝尧谦让致辞，旋以授职、分财、与物皆昌之论进，殆所称谏者非邪？然匪帝尧善察，则将直受而弗辞矣，虽有药石之论，亦将何自而入哉？此所以为上古之君臣也。

商 纪

论尧让天下于许由，汤让天下于卞随、务光

尧欲传位许由，由曰：“污吾耳！”亟往颍水洗之。会巢父饮牛其下，亟牵去，曰：“毋污吾牛口！”卞随、务光，成汤时人名。

笠翁曰：天下，重器也；让天下，大事也。从古及今几千万年，求其能让天下者，唯尧、舜二人而已；求其可受天下者，惟舜、禹二人而已。倘如《外纪》所载，则当日之天下竟不值一文钱，逢人即让，较小儿之视饼馅犹不若焉；则其让天下于舜、禹者，亦偶然馈赠之常事耳，何果断公明之足羨哉！甚矣，载籍之不足凭，而秦始皇之焚书，亦不为无见也。此皆岩栖穴处者流欲自矜其高尚，故构此空中楼阁以耸听闻耳。后世稗官野史皆效此立言，以为让天下之大事犹可幻设，则凡小于此者，何一不可幻设乎，人谓世风日下，以此观之，则当日之世风正未必上于今日也。无论让天下之事必不可信，即所谓许由、卞随、务光者，恐尧、舜、商汤之世，亦未必果有其人耳。

沈因伯评：古事之不可信也十倍于今，如头触不周山而折天柱、缺地维，与炼五色石以补天、十日并出而射落其九，种种怪诞不经之事，皆俗语所谓“瞒天谎”也。如此奇谎，古人说得出，今人说不出。今人所说者，皆琐尾流

离之事，古人所不屑道者也。由此推之，则吾岳父所谓当日之世风未必上于今日者，盖至当不易之论也。

论尧之试舜、高宗之任傅说， 同一命相而有详略之不同

尧以子丹朱之不肖，求可代己者，四岳皆举舜。尧乃历试以艰：使之慎徽五典，五典克从；纳于百揆，百揆时叙；宾于四门，四门穆穆；纳于大麓，烈风雷雨弗迷。于是立为相。尧崩，诸侯推舜即帝位。

武丁既免丧，梦上帝赉以良弼，乃肖形求之，得说于傅岩，命为相。

先儒断曰：以尧观之，高宗似失之过略；以高宗观之，尧似失之过详。盖舜，四岳所举；说，高宗自得之：其理不可不深思。又曰：有高宗，有傅说，则可；君非高宗，臣非傅说，则必有以私意用人而不合于公议者。后世用人，当如尧之试舜可矣。

笠翁曰：若仅以举相论之，则尧与高宗，诚有过略、过详之异。然高宗之举说，止于命相，尧之举舜，则不止于命相，而以天下畀之矣。岂有以天下与人，而不试其胜任与否，竟与枚卜相臣之事同日而较其重轻哉？拟人必于其伦，吾谓尧与高宗之事，同中有别，不当以举相并求之也。

论微子先抱祭器归周

微子名启，纣之庶兄也。微子数谏不听，乃与箕子、比干谋，遂去。

先儒论曰：或言微子先抱祭器归周，非也。《书》所谓“我不顾行遁，我罔为臣仆，去而避纣，曷尝有去商即周之事哉？又曰：武王悼纣之自焚，以武庚奉殷祀，一时释箕子囚，封比干墓，而不及微子，以微子避于荒野，未之获也。迨武庚叛戮，始求微子以代殷后。奔周之说，何太谬乎。

笠翁曰：抱祭器归周，未必遂无其事，但恐不在夷、齐叩马以前，而在武庚叛戮之后耳。若果在武庚叛戮之后，周求微子以祀殷，当此之时，犹抱商家祭器而来，则其不忍忘国之心，又在箕子、比干之上矣。何必强讳其事，而复以胶柱之见论古人哉？

汪北海评：祭器者，所以奉宗枋，盛黍稷，而裨皇祖血食于勿替者也。微子当归周时，仍抱商之祭器，则是所归者周也，所存者商也。在商不能保此器，在周乃可以守此器，犹之军中可以避兵，金马门可以避世，非有私于周也。是故武庚叛周，似欲兴商矣，而实所以灭商；微子归周，似欲废商矣，而实所以存商。周公知之，故《大诰》既作，而遂有微子之命。戮武庚而封微子，夫亦各成其志焉耳。厥后张良仕汉，乃始终为韩者，亦犹行微子之心；汉高既入汉中，而犹令张良出从韩王者，亦犹行周公之志。圣贤举动，超出拘儒亿万，非我笠翁，孰与阐其微哉。

周 纪

论晋文公赏从亡者而不及介子推

文公名重耳，献公次子也。献公嬖于骊姬，杀太子申生而伐重耳蒲于薄。重耳出奔，十九年而后反国。尝馁于曹，介子推割股以食之。及归，赏诸从亡者，而不及子推。子推之从者悬书宫门曰：“有龙矫矫，顷失其所。五蛇从之，周流天下。龙饥乏食，一蛇刳股。龙还于渊，安其壤土。四蛇入穴，皆有处所。一蛇无穴，号于中野。”公曰：“噫，寡人之过也！”使人求之不得，隐绵竹山中。焚其山，子推死焉。后人之为寒食，文公环绵上田封之，号曰“介山”。

笠翁曰：晋文公赏从亡者，而不及介子推，人皆责其寡恩，予独嘉其有识。何也？以子推望报之心，不在施恩以后，而在行惠之先也。当其割股救馁之时，已先伏一求多之念于胸中矣。夫割股救亲，人子之事也，然必于亲疾垂危之日，万不得已而为之，求以自尽其心耳；而古人犹有病其过情，不以列之纯孝者，以其非中庸之道也。至于从亡之主，谊虽关切，然亦稍杀于亲矣。况其受困之时，馁也，非疾也。割股以疗病，吾闻其语矣，吾见其人矣；若曰割股以救饥则吾不特未见其人，亦且未闻其语也。子推为此，亦何心哉？盖以从亡者五人，解衣推食之事，谁独无之，非

有奇能异行，不足以结嗣主之心，而来他日非常之报耳。由是观之，则与易牙之烹子何异哉？文公之不赏，非忘之也，盖稍迟之，以观其责报不责报耳。迨“有龙”之歌一作，而当年之心事昭然矣，此时不求之使出，复何待哉？而无如其有求不得，遂以恩变为仇也。焚山不出，抱树而死，亦何前恭而后倨哉。凡施恩而有责报之心，迨望之过奢、酬之稍薄者，未有不莫逆其始，而冰炭其终者也。吾不怪晋文赏功之太迟，而怪其求人过急。或榜示其功，招之使出，否则使人以物色求之，世未有终日望报之人，与之以报而不受者也。奈何烈山泽而焚之，是以驱鸟兽者驱人矣，报功之典，曾若是乎？此譎而不正之故智也。虽然，子推于此，亦惟有死而已矣，岂能复以鸟兽之道自全其身哉！

笠翁又曰：“有龙”之歌，文义最劣。以龙喻主，以五蛇喻从亡之五人，以还渊喻反国，以得所喻受赏，又以“一蛇无穴，号于中野”喻己之独不蒙赐，无语不病其过庸，无意不嫌其太露，全不得隐讽之法、寓言之体，竟像今世蒙童小子学步之文，不料出于三子代世。可见古人载籍中，原有最不妥贴处，但未经人摘出耳。人谓秦、汉以后之书不宜多读，吾又谓秦汉以前可读之书，亦正少耳！

论卫懿公使鹤乘轩

卫懿公好鹤，鹤有乘轩者。狄人伐卫，卫将战，受甲者皆曰：“使鹤，鹤实有禄，予何能战？”战于荧泽，卫师败绩，杀懿公。

先儒申瑶泉曰：卫君徇于一禽之好而纵以失民；卫人嗾于一眚之微而怙以亡君，俱无善以相接，而君臣骈死，以为天下笑，可悲也！

笠翁曰：卫之亡国，其失在君。尚论者不独罪君，而令国人与之分过，使后世为臣者，不得以愆君之故坐视邦国之灭亡，诚至论也。但谓国人以一眚之微而愆以亡君，则似严于责民，而责君者未免太恕。卫君之亡国，非止以一眚之微也。史载鹤乘轩者，乃举一事以概其余耳。即以此一事论，亦何尝不足以亡其国哉。公明仪曰：庖有肥肉，厩有肥马，民有饥色，野有饿莩，是率兽而食人也。”夫肉、马自肥，与民何涉？而以食人之罪加之兽，以率兽食人之罪加之君乎？亦曰厚其所薄，未有不薄其所厚者耳。宠鹤而至乘轩，则凡有类于鹤者，无不加以异数可知矣。以异数加之禽兽，则以奴隶待其臣、仇敌视其民者，又可知矣。受甲者皆曰“使鹤，鹤实有禄”，但言鹤有禄，则受甲者之无禄，不待辨而自明。夺受甲者之禄以养鹤，是即率兽杀人之道也。君能率兽以杀人，臣独不能借人以杀兽乎？是懿公之国，鹤亡之也；懿公之身，鹤杀之也。但其臣之在当日，止当令懿公先斩其鹤，而后出师，为之戮力御敌，使知朝廷之轩，非有功者不得乘，朝廷之禄，非死事者不得食，则为身、为君之道，两得之矣。奈何不仇鹤而仇君，使之身亡国破。后世为君者则知鉴矣，其为臣而不明大义者，则将何以为训哉？

汪北海评：尝惜张汤磔鼠，其词失传；今见斩鹤之论，如见磔鼠词矣。先斩鹤而后出师，妙绝！此等区处，似从马嵬驿缢杀杨玉环得来。

论魏绛规晋侯以安乐思终

晋侯与诸侯伐郑，会于萧鱼。及郑平，郑人赂晋以歌钟、铸磬、女乐，悼公以其半赐魏绛，曰：“子教寡人八年之中，九合诸侯，如乐之和，无所不谐。请与子乐之。”绛辞曰：“诸侯无匿，君

之灵也，二三子之劳也，臣何力之有焉？抑臣愿君安乐而思其终也。

笠翁曰：论此事者，当从“赂”字生情。“郑人赂晋以歌钟、鬲磬、女乐”，凡书“赂”者，皆心不欲与而勉强予之，且将有所利焉，即所谓“将欲取之，必姑与之”之意也。吴将伐齐，越子率众以朝，王及列士，皆有馈赂。吴人喜，惟子胥惧，曰：“是豢吴也。”由此观之，凡书“赂”者，皆“豢”之别名也。犹畜鸡犬牛豕而以食豢之，豢之，正所以自利也。苟明此义，将战栗委弃之不暇，何乐之有？魏绛不拜君赐，而规以安乐思终，其即子胥“豢吴”之意，而以和婉出之者乎？

沈因伯评：予岳父尝谓予曰：汝辈善弈者颇多，善读书者绝少。能以弈棋之法移而读书，则无不可相见之古人，亦无不可见长之文字矣。”予请其故，岳父曰：“棋中有眼，稍解拈得子者无不知之；古人文字中亦有眼，毕世拈毫者竟未识也？”予复请竟其说，岳父曰：“汝但取古书一卷作棋枰，以弈棋之法读之，久当自得。”予性呆笨，以书代弈者数月，而究竟不得其解。他日，取岳父论史者读之，偶及是篇及《论子产宽猛之政》，因废卷狂枉笑曰：“道在是矣！书歌钟、鬲磬、女乐而曰‘赂’，论火猛人畏之说而终之曰‘遗爱’，非眼而何？”他如智宣子、赵简子立后、项羽不渡乌江诸妙论，无一不从书眼中得来。弈法可通于书，诚哉是言也。余小子不敢自秘，愿公诸海内同人之善弈者。

论吴季札让国

吴子寿梦有四子：长诸樊，次馀祭，次馀昧，次季札。寿梦见札贤，欲立之，札辞，乃立诸樊，樊复让札，札谢曰：“曹人欲立子臧，子臧去之，以成曹君；札虽不才，愿附子臧之义。”诸樊

卒，餘祭立，及餘昧，欲传以次，必致国于季札，札卒不受，曰：“有国，非吾节也。”固立之，弃其室而耕。乃舍之，封之延陵，故号延陵季子。

先儒论曰：废先君之命，非孝；附子臧之义，非公；执礼全节，使国篡君弑，非仁；出能观变，又不讨乱，非智。彼诸樊无季历之贤，王僚无武王之圣，而季子为太伯之让，是徇名也，岂曰至德？

笠翁曰：吴季札让国一事，是之者非，非之者是，以让之不得其人，致日后有篡国弑君之事也。其义本之《春秋》，原有责备贤者之法。尊之为贤者，故肯施以责备之辞；则凡施责备之辞者，皆欲尊之为贤者也。愚谓英雄不可以成败论，独于贤人君子正不妨以成败论之。何也？英雄恃一往之气，不必尽顾将来；贤人君子计出万全，不可不详及始末。泰伯以让国而兴周，孔子称为至德，论其成也；季札以让国而亡吴，论者责以非义，论其败也。但责之曰可以让，可以无让，让之未免伤廉，况知其不可而固让焉，则是一味忌贪，而意忘乎其为矫矣。如是议之，始为允当。若以不孝、不公、不仁、不智责之，无乃过刻而伤贤人君子之心乎？世有不孝、不公、不仁、不智之人，而肯始终以国让者乎！

方尔止评：泰伯让而周兴，季子让而吴乱，此自后人据成败而褒贬之耳，二公当日何知有此。其志同，其道合，正未可分优劣也。况季子与孔子同时，设令其让稍稍可议，孔子必为微词，不应心服如此。以孔子所心服之人，而后人恣臆妄谈，有是理乎？读此论，知前人不孝、不公之说，乃大谬也。

论子产宽猛之政

子产有疾，谓子大叔曰：“我死，子必为政。唯有德者能以宽服民，其次莫如猛。夫火烈，民望而畏之，故鲜死焉；水懦弱，民狎而玩之，故多死焉。故宽难。”疾数月而卒，仲尼闻之出涕，曰：“古之遗爱也。”

笠翁曰：子产诲人以猛，而孔子不以刚忍目之，于其死也，反挥涕而赞曰“古之遗爱”。以猛为爱，不几以宽为不爱乎？曰：非然也，虑天下后世之人，不效子产之存心，而但效其行事，故揭其心以示人曰：子产非天下之忍人，乃存心慈爱之人也；惟存心慈爱之人，始可以行威猛之事，若稍涉残忍而行烈政，则民无噍类矣。圣贤口中无不关世道人心之语，要须后人善绎之。子产曰：“唯有德者能以宽服民。”吾请赞一词曰：“唯存仁者能以猛服众。”

论程婴立孤而死

晋屠岸贾将作难，杀赵朔于下宫。朔妻有遗腹，走公宫匿。既免身，生男。贾闻之，索于宫中，夫人置儿袴中，得脱。朔客程婴、公孙杵臼相与谋曰：“立孤与死孰难？”婴曰：“死易，立孤难。”杵臼曰：“子强为其难者，吾为其易者。”乃取他儿匿山中，婴出，谬曰：“与我千金，我告赵氏孤处。”贾喜，乃使人随婴，杀杵臼及儿。婴与其真孤匿山中，名曰武。后晋侯悯宣孟之忠而求其后，乃立武，反其田邑如故。及武冠成人，程婴辞诸大夫，谓武曰：“昔下宫之难，我非不能死，思立赵氏之后；今武既立，我将下报

宣孟与公孙杵臼。”遂自杀。

笠翁曰：程婴、杵臼二人之死，皆以下报宣孟。然杵臼之死，死于赵孤未保之时，以一身之存亡，系赵祀之绝续。死有重于泰山者，杵臼是也。程婴之死，死于赵武成立之后，欲全匹夫之谅，遂为沟渎之经。死有轻于鸿毛者，程婴是也。然为此论者，皆世俗之恒情，非英雄之远见。以予观之，程婴之死于后，犹杵臼之死于前，死则功成，否则事败，皆万无可生之理也。盖赵孤之真伪，惟婴与杵臼二人知之，杵臼既死，无可证者。晋侯虽从韩厥之言，悯宣孟之忠而立其后，盖触于一言之义，而感于一念之仁耳，能保事定之后，不有起而议之者乎？我于敌势方张之日，既可谬执假孤为真，则人于赵宗既覆之馀，何难共指真孤为假？若谓取他人之血胤，冒贵族之宗祧，冤则冤矣，其罪犹可言也；倘以仗义之高踪，认为居奇之鄙行，则今日之程婴，不几为他日之吕不韦乎？万一晋侯惑于人言而下问罪之诏，则婴欲不死，其可得乎？婴死，而赵氏既立之孤，其能晏然无恙乎？与其死于群疑既集之后，无宁死于流言未播之初，且使晋国君臣交相谓曰：“婴冒万死以延如线之脉，而始终不有其身，宣孟之德足以感人也。”若此，有不共保其子孙，而使之相延于勿替乎？此婴当日之苦心，从未经人剖出者也。观其对赵武之言曰：“彼以我为能成事，故先我死，今我不报，是以我事为不成。”遂自杀。夫武既成人矣，复故位矣，乃复曰“是以我事为不成”，抑何自为刺谬欤？盖明告之曰“我不死，汝之成败尚未可知”耳。后人不明斯意，而动谓舍生取义者为矫，是不特未识古人之心，亦且未辨古人之语矣。

汪北海评：晋赵穿弑灵公，赵盾亡不越境，太史书盾“弑君”，仲尼美其书法不隐，则赵宗之当灭，已定于董史、宣圣两言矣。及屠岸贾治灵公之贼，杀赵朔，晋之诸卿大夫，未闻有以妄杀罪贾者。杵臼为朔客，婴为朔友，谋

匿赵孤，不过感赵氏私恩耳，岂能与兴讨贼之师、问弑君之逆者同日语哉。景公疾，之逆者同日语哉。景公疾，卜人称大业之后不遂者为祟，乌知非受婴请嘱，如曹竖、侯孺故事？况公因韩厥之众胁诸将，诸将不得已，归狱于贾，则贾之无罪明矣。婴与武攻贾灭之，能保事定之后，无如董太史其人者，权是非，酌功过，而复诛婴与武耶？程婴知之，故以一死系晋之人心，使人敬婴、爱婴，自不忍深求于婴，因以不忍深求于武。夫召公行，南人不忍伐其甘棠，况重然诺、轻生死、扶危定倾之义士，其所鞠育之孤，而忍覆灭之乎？以是言立孤之难，诚哉其难也。笠翁从“今我不报，是以我事为不成”二语勘入，真有显微阐幽之识。

陈植三评：予儿时读史，尝以程婴比之侯嬴。婴不死，无以谢杵臼；嬴不死，无以谢晋鄙。古人不重其生也如此。今读笠翁此论，遂觉嬴尚可生，婴必不可不死。又悟婴死非特谢杵臼，正所以立孤于不败，嬴死非特谢晋鄙，亦所以救赵于必成。古人不轻其死者又如此。

论伍员覆楚、申包胥复楚

伍员与申包胥为友，皆楚人也。员父奢兄尚被楚平王杀，员奔吴，与包胥别。员曰：“我必覆楚。”包胥曰：“我复之。”伍员既奔吴，道吴伐楚。既入郢，遂鞭平王尸。包胥乃如秦乞师。秦伯使就馆，包胥依庭墙而哭，日夜不绝，饮食不入口者七日。秦乃为之出师，遂败吴师，遂败吴师，楚昭王复国。

先儒论略曰：覆楚、复楚之事，盖伍、申二人递成其志者也。子胥之亡也，过而别包胥曰：“我必覆楚。”包胥曰：“我必复楚。”则楚之将覆，包胥与闻其谋者也。与闻其谋而莫之禁，所以成子胥之志也。及包胥复楚，而子胥亦莫之禁，所以成包胥之志也。此两人者，真天下奇男子哉！

笠翁曰：一国也，覆之、复之，如反掌然，两人之能事则见

矣，其如君父之播迁、生民之涂炭何！究竟伍子胥、申包胥所行之事，均非报君为国之良图、处友全交之正道。

张祖能评：楚国安危，全系子胥、包胥二人。然则包胥苟欲存楚，何犹豫杀子胥，则楚人不必存而自存；子胥果欲覆楚，盍于入楚时先追包胥杀之，则楚不覆而自覆。二子善全友道，愿为其难，笠翁“处友全交”之说，可为千古定案。然报君处友，吾必以申包胥为正。

论智宣子、赵简子之立后

智宣子将以瑶为后，智果曰：“不如宵。瑶之贤于人者五，其不逮者一。美须长大则贤，射御足力则贤，技艺毕给则贤，巧文辩慧则贤，强毅果敢则贤；如是而甚不仁。夫以其五贤陵人，而以不仁行之，其能谁待之？若果立瑶也，智宗必灭。”弗听，智果别族于太史，为辅氏。

赵简子之子，长曰伯鲁，幼曰无恤。将置后，不知所立。乃书训诫之辞于二简，授二子曰：“谨诫之。”三年而问之，伯鲁不能举其词，求其简，已失之矣；问无恤，诵其词甚习，求其简，出诸袖中。简子于是立为后。

论者以二事并列，较其低昂。予谓论此事者，不必远搜奇奥，别探幽微，只以二事之本文细玩一过，便起无数峰峦，令人应接不暇矣。“训诫”二字，是赵氏保家之本；“五贤”二字，是智氏灭宗之源。两家之功罪，不在子而在父，两家之得失，不在立后之日，而在正嗣未立之先，以平日有教不教之分耳。书训词于简，其能以义方勸子，不待辩论而知之矣。若智伯之纵而不教，今于瑶之不仁处验之，反在其贤于人处知之，何也？智果口中多微词，

其所谓贤者，皆愚不肖之别名也。首以“美须长大”为词，是内无可取而求诸外，其寓贬于褒也可知；至于“射御足力”、“技艺毕给”、“巧文辩慧”、“强毅果敢”诸能事，盖孔子所谓“好行小慧”，滕世子所谓“驰马试剑”，后生辈有一于此，未有不丧其家者也。但智果于为父之前，不便深言其子之恶，故先予以可喜，为后来纳谏地耳，其如宣子之溺爱何！故曰：两家之功罪，不在子而在父；两家之得失，不在立后之日，而在正嗣未立之先也。若无恤之于伯鲁，但有智愚之分，而无贤不肖之别。人谓无恤受简之后，历三年而诵之甚习，又能出诸袖中，真令子也。以予观之，是必有人教之使然，非天性也。训诫之词无几，固不难于诵习，但出入必置怀袖，而无片刻之遗，此则有意必为之事，而非无心偶合之情。万一怀之平日，而失于承问之一朝，则奈何？殆简子有意乡之，而无废长立幼之名，故授其意于母氏或师傅，以为躡进之阶耳。不然，何于父死之后，纒经未除，遂以铜斗击杀伯鲁之子而并其地？岂训诫之词，止宜佩服于生前，而不当遵行于死后乎？予故曰：无恤之于伯鲁，但有智愚之分，而无贤不肖之别，盖迹其事而原其心也。

论吴起杀妻求将

吴起以卫人仕于鲁。齐人伐鲁，鲁人欲以为将，起妻齐女，鲁人疑之，起杀妻以求将，大破齐师。或谮之于鲁侯，起恐得罪，闻魏文侯贤，往归之。文侯问诸李克，克曰：“起贪而好色，然用兵，司马穰苴弗能过也。”于是文侯以为将。

笠翁曰：千古不近人情之事，未有如吴起杀妻与易牙烹子、乐羊食子之三事者也。其所以忍心害理而为之者，不过欲取信于人

耳，而人反疑之者，何也？曰：诈也。又有同其事而异其情，能使天下万世相信而不疑者，张巡之杀妾是也，诚也。疑与信之分，在诚与诈之间而已矣。胡以籍口知其诈？曰：起之去鲁而归魏也，文侯问诸李克，克曰：“起贪财而好色。”夫既已好色，则其在鲁之杀妻，未必专为求将。非憎妇貌之不扬，即惑于侍妾这言，借此以除妒妇耳。吾未见颁财好色之人，肯为建功立名而杀一美妇、弃一贤妻者也。

论商鞅徙木立信、诱执公子卬

予尝谓商鞅为千古罪人，以其开天下残刻之端，而凿后世奸雄以狙诈不情之窍也。操、莽辈所行之事，无一不取法于此。独怪当时秦国乏人，不能破其狡狴。岂有无故令人徙木，而予以五十金之重赏，其意不有在者乎？岂有如此多术之人，不能规正太子于先，必欲使之犯法，而刑其师傅，以售吾恐吓斯民之计者乎？至公子卬以同国之人，习闻其狡，而以身试不测，又无术之尤者也。

噫，以一国之愚，而成一人之智，俾其流毒至今，诚为恨事。有心天下者，不能不为世道人心诛祸首也。

论蔺相如屈于廉颇

蔺相如能完璧归赵，又能使秦王击缶，独闻廉颇欲辱之，辄引车避匿。勇于万乘之君，而屈于一人之敌，英雄之不可测也如此。然为此不可测之事者，间亦有人，如韩信纵横于劲敌，而挫辱于少年是也。然相如之受屈与韩信之受屈，不可同年而语。以

韩信为盖世英雄，少年为市井亡赖，胜之不足为荣，故屈之亦不足为辱耳。若令绛、灌诸人以此加信，信有拔剑死斗而已。若廉颇之与相如，则当世二丈夫也，此辱则彼荣，此荣则辱，孰肯引车避匿而为辱己荣人之事哉？于此而能自屈，可谓屈人之不能屈者矣。然又不止于能屈，观其“先国难，后私仇”一语，自占何地步！不待颇之肉袒谢罪，始觉其荣，此语出口，已令善饭将军置身无地矣。

千古上下皆美相如之能自屈，予独曰：相如非能自屈，乃深于屈人者也。

论王孙贾、赵括、陈婴、王陵四母之贤

王孙贾、赵括、陈婴、王陵四母皆贤，然其所以为贤者，则分二种：括母、婴母善保其子之身；贾母、陵母善成其子之名。然保其身者，妇人之恒情，成其名者，男子之壮志。括母、婴母虽贤，终成为妇人；若贾母、陵母者，则巾帼也而须眉，慈母也而严父矣。

秦 纪

论缩高及安陵君、信陵君之事

安陵人缩高之子，仕秦守管。信陵君攻之不下，使人召高攻管。高辞，信陵君怒，使谓安陵君：生束高而致之，不然，帅十万之师以造城下。安陵君曰：“吾先君成侯，受诏襄王以守此城也，手受太府之宪曰：‘子弑父，臣弑君，有常不赦。’今缩高辞大位以全父子之义，而君曰：必生致之，是使我负襄王之诏，而废太府之宪也。”缩高闻之曰：“此辞反，必为国祸，吾已全己，无违人臣之义矣，岂可使吾君有魏患乎？”乃之使者舍，刎颈而死。信陵君闻之，缟素避舍而遣使谢安陵君。

丁南湖曰：缩高明于父子之义，安陵君明于君臣之义，信陵君亦可谓知过能改者矣。

予谓缩高全父子之伦，安陵守君臣之义，二事实堪媲美；若信陵之缟素避舍，则有间焉，未堪鼎足于君臣、父子、朋友之间也。召人之父以攻其子，灭君之宪以利其城，是置伦理纲常于不问矣，安得复有悔过之心乎？夫攻管不下，而至欲召其父以为饵，其出于无可奈何也可知。今闻父死于义，则守者愈坚，欲以不义之师而克守义之城，虽至愚者亦知其不能也。故借重义哀死为名，缟素避舍，以为旋师计耳。其意盖曰：吾非攻之不下，乃挫于仁而

屈于义也。噫，有挫于仁而屈于义者，肯为挈父攻子之事乎？后世不察，予以“知过能改”，使配食于安陵、缩高之间，亦可谓苍素莫辨而齐方寸之木于岑楼矣，吾将谓之何哉！

论《纲目》书张良博浪之击与荆轲、聂政之事一褒一贬

子房之于荆、聂，其报仇之迹虽同，而所报之仇与所以报仇之故，则相去千里，虽欲强比而同之，不可得也。夫子房所报之仇，乃君父之仇也。五世相韩，则其受韩之恩，可谓渊深而岳峙矣。一旦为秦所灭，即稍知礼义者，皆有切齿之心，况良为间出之英雄，实实有报仇之具者乎？其击秦也，既非激于人言，又非迫于时势，乃自性灵所发，如渊鱼之奋跃、草木之怒生。以他人视之，则为不得不然，由子房视之，实为莫知其然而然也。至于荆轲、聂政所报者，不但非君父之仇，亦且非己之仇，盖见役于人而仇其所仇者也。仇其所仇，而又不问其可仇与否，漫然一试，而使身亡事僨，是何异于盗人而不得其术，卒为所获者乎？书之曰“盗”，犹曰幸焉。盖二人非智盗，乃愚盗也。且子房之击秦，非自击之，以力士击之也。大索十日而不得，是何如之力士乎？使力士而遇荆轲、聂政，必不屑与之较短长矣。然则力士之所不屑较者，而以子房较之，不几辱子房而羞天下之士乎？宜《纲目》之大判其词，使仇人之仇而徒僨其事者，不得与报君父之仇而终能成其大志者比也。

西 汉 纪

论项王东乡坐王陵之母、置太公于高俎之上

项王东乡坐陵母以招陵而陵卒不至，又尝置太公高俎之上以胁汉而汉终不下者，皆以所藏乎身不恕，而不能喻诸人也。

危其亲以胁其子，是欲天下之人为孝子矣。欲天下之人为孝子，必先自为义士以激之。获太公、陵母于军中，当丰其供膳，盛其仪从，厚款数日而还之，是以义示天下也。我以义待其友，则人不敢不以孝事其亲，或者感我之不杀而稍缓其犄角之势，亦未可知。乃欲烹其父、挟其母以恐喝之，是明以不义加人、而塞天下以孝事其亲之路矣。欲人之归而且下，其可得乎？

况汉王与王陵，又未必皆孝子也。汉王报父以分羹，王陵致母于伏剑，虽其天性使然，亦由项王以不义倡之耳。安陵君以挟缩高以攻管，缩高刎颈而管卒不下，即此事之前车也。千古上下，有躬为非礼而欲人以道义报之者，吾未之前闻。

论汉高帝拜季布、斩丁公

季布为项籍将，数窘辱帝。籍灭，帝购布千金，匿者罪三族。布乃髡钳为奴，自卖于鲁朱家。朱家为见滕公曰：“季布何罪？臣

各为其主耳。今上始得天下，而以私怨求一人，何示不广也？且以布之贤，汉求之急，此不北走胡、南走越耳。夫忌壮士以资敌国，此子胥所以鞭荆平之墓也。”滕公待间言于上，乃赦布，召拜郎中。布母弟丁公，亦为羽将。逐窘帝彭城西，短兵接，帝急顾曰：“两贤岂相厄哉？”丁公引还。及羽灭谒见，帝以丁公徇军中，曰：“丁公为项氏臣，不忠，使项王失天下。”遂斩之，曰：“使后为人臣者无效丁公也。”

笠翁曰：“高帝生平之怨，无所不报，所幸而免者，惟季布、雍齿二人而已。然皆借力于人言，又皆得之于恐喝。留侯为雍齿游说，则曰“诸将相聚谋反”，滕公为季布游说，则曰“北走胡、南走越”。可二人之不死而且得封侯拜官者，非出于高祖之诚然，有所畏而予之也。谓之知几达务则可，谓之宽明仁恕则不可。惟斩丁公一事，乃英雄血性使然，非有所迫而诛之也。如此快事，千古无几。即使季布不拜而专斩丁公，亦不失为英雄之主，况二事可以并称者哉？略短而取长，即谓季布之拜官，出于高帝之诚然也亦可。

王望如评：布之窘辱汉高，非窘汉高也，为其主也。丁公放汉高而不逐，非放汉高也，不为其主也。不为其主，犹得谓之为入臣乎？一拜一斩，久已定于或窘或放之时矣。

论韩信赐漂母、官少年

韩信封楚王，至楚，召漂母赐千金，召辱己少年为中尉。告诸将相曰：“此壮士也。方辱我时，宁不能杀之耶？杀之无名，故忍而就此。”

笠翁曰：二事中亦有优劣，赐漂母易，官少年难。韩信封楚王，富贵已极，其视千金，犹吾辈之视斗粟尺布，以赐路人，犹不足怪，况报微时活命之恩乎？吾犹怪其过轻且不早耳。前此为齐王及拜大将军，何一非报恩时，乃为出纳之吝，而必待王楚以后，何也？漂母之不受，未必不由于此耳。若官少年一事，诚不可及。但其告诸将之言，又非本心，乃英雄欺人语也。彼曰：“方辱我时，宁不能杀之乎？杀之无名，故忍而就此。”夫无故出人于胯下，是辱士也，辱士而杀之，何谓无名？其所以不杀者，不过虑三尺法耳。杀人抵命，盛世且然，况秦有苛法者乎？留其身以有为，不肯死于杀人之法，故忍而就之，此恒人之情也；信耻为恒人，故讳而不道，乃饰以他辞。至于王楚之时，杀此辈一人，如灭虬虱耳；待以不死，已见深仁大德，况从而官之？岂非圣贤所行之事哉。然而韩信英雄，非圣贤也，吾不敢以论圣贤者论之。大约英雄成事与立功名，皆由于小人之激挫：妻不下机，嫂不为炊，此苏季子之少年也；叱而辱之，使出胯下，此楚王信之妻与嫂也。信之得有今日，少年与有力焉。由是观之，则少年之功，岂出漂母下？不杀而官之，诚英雄之高见耳。

抑又有说焉：丈夫得志，要使有恩有怨之人目击而叹服之，始可自明其得意。富贵而归故乡，使仇家已死，亲交零落，则与衣绣夜行何异？使信杀少年于当日，则此际之高牙大纛，叱咤风云，欲起九原而使之见，其可得乎？留至今日而使之见，以动其羞愧怨艾之心，是不杀之甚于杀也；又从而官之，使刻刻瞻拜下风，求一藏羞之地而不可得，是又以冠裳为斧钺而揖让代征诛者矣。英雄之刻毒，遂至是哉！此报仇雪耻之良法，不可不揭以示人。凡人以韩信自期，而不屑与少年为伍者，皆当视怨为恩，留其人以自待可也。

余澹心评：观笠翁此论，则李广杀灞陵醉尉非与？余生曰：韩信官少年，见信之巧，广杀醉尉，见广之真，总之皆英雄也。英雄举动，最忌雷同。

论项羽不渡乌江

汉兵追项羽至乌江，有亭长舣船以待曰：“江东虽小，亦足以王，愿急渡！”羽叹曰：“籍与江东子弟八千而西，今无一还，纵江东父老怜而王我，我何面目见父老乎？”遂自刎。

笠翁曰：羽之不渡乌江，疑为亭长所执，夫人而知之矣。但其疑心之所自始，与所以不得不疑之故，尚未经人道破，予请以管见测之。其疑心之所自始，则始于舣船有人；其所以不得不疑之故，则全在“亭长”二字。汉兵追羽至乌江，则乌江片土，必非鸡犬不惊之地。亭长何人，能不随众避兵，而尚舣船以待，且为甘言以诱之乎？虽曰非奸，吾不信矣。至于“亭长”二字，更属千古疑团。何也？汉王非他，其未起兵时，亦泗上一亭长也。安在舣船之人，非其当日同事者乎？为得志之亭长所迫，复有一亭长舣船以待，此而不疑为奸，必其无心肠知识者而后可，后汉白衣摇橹之事，非其左券乎？此时自亭长而外，必不另有一舣船之人。欲渡不可，不渡不能，与其死于亭长之手而为天下笑，无宁死于自刎之为烈乎？此重瞳不王江东之故也。至其对亭长之言，则欲与江东父老为永诀之词，借亭长之口以代传之耳。

孙宇台评：说及“亭长”二字，羽未有不丧魄者。独怪千人万人读史，从未有一人拈出，而独留此妙论，待我笠翁发之，此亦理之不可解者。岂古今人尽皆瞶瞶，视“亭长”二字不见，抑笠翁二目之中有四瞳子，以一半射泗上亭长，一半射乌江亭长，故能并见而互得之邪？甚矣，造物生才之迟，而

不使唐、宋诸贤，亦获闻此妙论也！

论汉定元功位次而张良、陈平不与

诏定元功位次，皆曰：“曹参功多，宜第一。”鄂千秋独以萧何转饷、独全关中为万世之功。上乃以何为第一，参次之，鄂千秋亦以进贤受赏，封安平侯，而良、平不与。

先儒论曰：汉封功臣，其盟誓之辞曰：“非军功不侯。”于军中又立最重三事：一曰从起丰沛，二曰从入关中破秦，三曰从定三秦。十八侯位次，全分于此。良、平皆后附，故不得与。又，良、平皆帷幄谋议，不履行阵，所以让军伐居先。

笠翁曰：陈氏之论是矣，但后云“良、平皆帷幄谋议，不履行阵，所以让军伐居先”，此语殊觉悖谬。夫运筹帷幄，此军功所自始也，不见“功狗”、“功人”之议乎？或先设盟誓之时，草草定义，未尝计念及此，殆成功之后，又不便更易前言，故良、平有功而不得与。然以公道论之，究竟是一恨事，两君没齿无怨言，此其所以不可及也。

汪北海评：无功位次，每有不惬人意者，不独汉高也。云台不列伏波，明初不王诚意，其事颇与良、平类，倘亦英雄欺人，故颠倒以示不测耶？然而没齿无言，宜笠翁之深服两君矣。

论汉高之兴，《纲目》特笔有四

《纲目》于高帝有四特笔：其未即位也，如秦书“伐”，如项

籍书“讨”，其用边兵也，书“致助”；其即位也，书“即皇帝位”。大纲正矣。

笠翁曰：班彪作《王命论》，于汉高多溢美之词，犹曰本朝之臣子，不得不然也。朱子去汉千馀年，中历数代，何所畏于汉朝、何所私于高帝，而亦为此极口之赞扬、不留馀地之书法哉？总为得天下以正耳。得天下以正，遂占却如许便宜。甚矣，汉高有幸，而得生于嬴秦暴虐之时也！

论汉高祖为义帝发丧、曹操挟天子以令诸侯之同异

项羽密使英布杀义帝于江中，沛公从新城三老之议，为义帝发丧，合诸侯兵伐楚。

荀彧谓曹操曰：“昔晋文纳周襄而诸侯从，汉高发义帝丧而天下归。”因劝迎献帝。操遣曹洪西迎天子，自将兵诣洛阳。

笠翁曰：继晋文而欺天下者，汉高是也；继汉高而欺天下者，曹操是也。思旧德而怀故主，天下之民有同心焉。纳襄王，哭义帝，迎献帝，所谓欺之以其方，故当世之心皆为所欺，而莫之觉也。然以后世之人观之，则似傀儡登场，不过演习故套而已，何同异、得失之足论哉。

汪北海评：世每多汉高之发丧，而不直魏武之挟天子。笠翁大声并喝，等之曰“欺”，诚哉是欺也。何也？汉高之发丧，从三老、董公之言也。岂有不共戴天之仇，俟人怂恿而后报者乎？且董公之言曰：“明其为贼，敌乃可服。”则发丧非为义帝也，欲屈服西楚也；其欲屈服西楚也，欲取天下也。欲取天下之心，是即魏武之心也。故笠翁大声并喝，等之曰“欺”。诚哉是欺也。

笠翁曰：忠臣义士，做得到头便是忠臣义士，做不到头便是乱臣贼子。犹看传奇者，只看临了一二折，未有生、旦其始而净、丑其终者也。汉高与魏武皆是两截人，故不敢叛其泾渭，以其他事有别，而此一事实无别也。

论韩信登坛之对、诸葛亮草庐之谈、 王朴平边之策

汉王从萧何言，设坛拜信为将，信曰：“项王喑哑叱咤，可废千人，然不任贤，匹夫之勇耳；接人多响响，每吝赐赏，妇人之仁耳。王诚反其道，三秦可传檄定也。”

刘备三顾草庐，始得见亮，亮曰：“曹操拥百万之众，挟天子令诸侯，难与争锋；孙权据江东，国险民附，可为援而不可图。荆州地形四塞，用武之国，益州沃野千里，天府之地，而其主皆不能守，此天所以资将军也。若跨有荆、益，修政观变，霸可图矣。”

周世宗有削平天下之志，王朴献策，言中国之失吴蜀幽并，皆由失道，今欲取之，莫若反其所为。唐与吾接境，其势易扰也。避实击虚，避强击弱，则江北诸州，将悉为我有。既得江北，则用彼之民，行我之法，江南亦易取，巴蜀可传檄而定，燕地望风内附。惟河东必死之寇，不可以恩信诱，且为后图。俟天下既平，伺间一举可擒也。

真西山曰：古今论兵者甚众，然卒之无言不酬者，惟韩信登坛之对，诸葛亮草庐之谈，王朴平边之策。

笠翁曰：贤人君子之道，与英雄豪杰之事判然不同，其归于名实相副，则一也。先行其言，而后从之，贤人君子之道也；先言其所能行，而后以实践之，英雄豪杰之事也。韩信、诸葛亮、王朴三人，是能以英雄豪杰之事，而合贤人君子之道者也。天下大

事，一毫未入其手，而能言之凿凿，说成说败，若数家珍，旁观者不笑为夸，即鄙为诞矣。及至大事入手，逐件做去，无一不与所言凑合，若还此话不说在先，焉知今日之成功，非以偶然侥幸而得之者乎？“偶然侥幸”四字，英雄豪杰之所耻也，故必欲断之于初。其必欲断之于初，似与贤人君子相反；及其功成名立，使天下后世皆信其非夸非诞，则与贤人君子无异矣。后世论人者，何必定执贤人君子之道，而为侥幸成功者留一藏拙之地哉。

论韩信兵法

信出背水阵胜赵，诸将问曰：“兵法右倍山陵，前左水泽，将军令臣等反背水阵以胜，何也？”信曰：“此在《兵法》，诸君不察耳。《兵法》不曰‘陷之死地而后生、置之亡地而后存’乎？且信未得素拊循士大夫也，此所谓驱市人而战，置之生地皆走，宁得而用之乎？”诸将皆服。

笠翁曰：兵无常形，全在因时制宜，而不为人所测。若执定古法行军，谓其断难移易，则孙臆减灶之后，人人只该减灶，虞诩增灶之后，人人又只该增灶矣。岂谈兵之书只我国有之，而敌人竟未之见邪？韩信用兵之妙，全在善读《阴符》而不为《阴符》所缚，故能出奇取胜。以予观之，其对诸将之言，还是论其浅而未及深也。

又曰：“未得拊循士大夫”一语，是韩信之谦词，以对诸将而言也，观“士大夫”三字可见。若泥定此语为实，则凡未经拊循之人，皆可驱而之死地矣。误天下后世之苍生者，必此言也。

王望如评：淮阴用兵与汾阳相反：汾阳正胜奇，淮阴奇胜正。神而明之、

存乎其人，原不等于弈之谱、射之的、字画之蓝本也。“未尝拊循士大夫”一语，不独善将兵，即谓之善将将亦可。

论班彪称高帝宽明仁恕、知人善任

班彪《王命论》曰：“盖在高祖，其兴也有五：一曰帝尧之苗裔；二曰体貌多奇异；三曰神武有征应；四曰宽明而仁恕；五曰知人善任使。”

先儒论曰：帝以其嫂媿羹，不封伯氏之字，太上皇以为言，乃封其侄为媿羹侯，明著昔日吝羹之咎，宽厚者乃如是乎？及居晋阳，闻冒顿居代谷，发兵击之，不虞其诈，被困于白登，其明安在乎？韩、彭开国元勋，轻信诬言，伪游掩袭而禽杀之，夷其三族，醢越以赐诸侯，仁者乃如是乎？其于经理边事，以韩王信居太原，而信反；宠幸陈豨，使监赵，而豨反；以卢绾为故旧，俾王燕，而绾反：其知人善任使，俱安在乎？彪汉臣，时妆饰此言，后人不究其实，谬为褒美，所谓矮人观场也欤？

笠翁曰：以予论，高知人善任则有之，宽明仁恕则未也。自起兵以来，所用皆当世豪杰，又任之各当其才。至于信、豨、绾三人之反，出之意外。周公圣人，不能料管、蔡之将叛而使之，况其他乎？独是以天子而仇匹夫，屑屑以报怨为事，反出韩信官少年之下，其容人之量可知矣。彭、信、越皆元勋也，虽各有罪，亦可皆原，未必尽在不宥之列；且杀之可矣，族可弗夷乎？醢可弗赐乎？曾宽明仁恕者诛戮有功之臣、而且不留馀地乎？班彪多溢美之词，总为高祖得天下以正，故取大美而略小疵，不觉其言之过甚耳。此历代史臣皆然，不独彪为汉臣，始有阿私之论也。

汪北海评：得天下以正，故不觉美之过甚，犹在子为汉臣，安得不云尔者之上。盖美其正则公，而为臣汉则私也。然君子论人贵乎允当，笠翁以此论断班论，吾知笠翁固有允当之论汉高矣。

论周勃左袒之问

吕后崩，诸吕欲为乱。时太尉周勃不得主兵，郾寄与禄善，说禄以兵属太尉。勃入军门，令曰：“为吕氏右袒，为刘氏左袒。”军门皆左袒。勃遂将北军，悉捕诸吕斩之。

先儒论周勃左袒之问为非，谓有如军士不应，或皆右袒，或参半焉，则如之何？

程子谓当是时，直当论以大义，率而用之，况太尉已得北军，士卒惟旧将是听，非惟不当问，亦不必问也。

笠翁曰：以予观之，此必太尉与诸将定计于先，约以左袒为号，故于临时发令，以齐士卒之心耳。岂有为此惊天动地之事，胸中一无所主，而漫然以此语尝试者乎？古人已死，随后人贬驳而不能辩，要当有以服其心，凡吾所言，皆求所以服其心也。其所以必为此语，而不肯率而用之者，欲使满朝之人知其出于一念之忠，非有阴谋秘计，而军中之不约而同者，亦是为忠愤所激，见义即为，不俟再计而决者也。

王望如评：大为周将军吐气，翻尽从来成案。予谓诸吕无能为，自陆生为孺子交欢时已定，独惜子瞻论樊哙曰：使其生存，必党吕氏。岂豪杰如哙，而智出绛侯下哉？

论陈平不对决狱、钱谷之问

文帝问左丞相周勃曰：“天下一岁决狱几何？”勃谢不知。又问“一岁钱谷出入几何？”勃又谢不知，惶愧，汗出浹背。上问左丞相陈平，平曰：“有主者。陛下问决狱，责廷尉；问钱谷，责治粟内史。”上曰：“君所主者何事？”平曰：“宰相上佐天子，理阴阳，顺四时，下遂万物之宜；外镇抚四夷、诸侯，内亲百姓，使卿大夫各得任其职焉。”帝称善。绛侯自知其能不如平，乃谢病请归相印。上许之，平专为丞相。

笠翁曰：陈平不对决狱、钱谷之问，其事与周勃同情，总由平日未尝经理，卒然问及，不能即举其数。但平有饰非之智，勃无口给之能，故觉彼善于此，掩过一时之耳目，非勃才果出平下，当以相任独归之也。

夫庶吏董天下之事，宰相总庶吏之成。文帝问曰：一岁决狱几何？钱谷出入几何？不问节目而问大纲，正所谓总其成也。知而举之，不过两言而尽，有何难对与不屑对之有哉？若问某郡决狱几何、钱谷出入几何，欲其条分而缕析之，则如此冗屑之事，诚非宰相所宜知。今以总目叩大臣，犹之觅锁钥于家督，访绳墨于工师，未有不随取随应，随问随答者，岂得曰“大匠耻亲绳墨之事，纪纲不任锁钥之繁，君其问诸若辈”乎？惜萧何已死，备顾问者无人，设此时犹居相位而躬承是问，吾知其必能应对如流，不爽毫发。何以知之？因其西入咸阳时，早已收藏图籍，留心经世之务，不似诸君争取财物，置天下大计于不问，至此时一诘而茫然也。

高帝终谓吕后曰：“陈平智有馀，然难独任；周勃厚重少文，

然安刘氏者，必勃也。”吾于不对决狱、钱谷一事，验高帝有知人之明。平之巧辩饰非，若出至理，此其“智有馀”也；勃两谢不知，汗流浹背，此外不复强措一词，又复旋归相印，此其“厚重少文”处也。智有馀而难独任者，虑人主不辨真伪，堕其术中，正须一厚重少文者佐之，为犬牙相错之势耳。文帝不察，卒为所欺，不可谓非至明之一累也。

噫，后世论此者，皆谓陈平能识大体，可谓相臣之法，是千古读书之人尽堕术中而不之觉。受其欺者，岂独一汉文帝而已哉！

笠翁又曰：陈平不对决狱、钱谷之问，论者皆谓能持大体。所谓能持大体者，以大臣不当亲细务也。若是，则文帝之问为失言，后世之人皆当群起而议之矣。何也？宰相尊于百僚，天子又复尊于宰相，以宰相不屑对之事，而为天子者屑屑焉问之，不几降帝王之尊而下同百执事乎？开千万世堂高帘远之门，而使下情不能上达者，必此言也。予谓文帝此问，为汉家数百年气运所关，国祚之久长，生民之乐育，海内之殷富，无一不基于此，人但未之察耳。问决狱者，重民命也；问钱谷出入者，惜民力也。文帝赋性慈祥，立心恭俭，当冲龄嗣位之日，即有此问，盖虑有司用刑之滥，以致失入者多，国家费用之繁，以致聚敛者众，故欲悉知其数，以戒不祥之刑、省无益之费耳。他日之除肉刑、除收孥连坐之法，惜百金之费而罢作露台，两赐田租之半，又遂除之，皆由此一念推之也。为宰相者，正当因其势而利导之，由决狱之问而劝之省刑罚，由钱谷出入之问而劝之薄税敛，岂非致君泽民者一大机会哉？而乃以夸诞之词，掩其疏略之过。幸文帝天资充实，若草木之怒生，不为外物所阻，始终得遂其仁心。万一惑于陈平之言，谓此等碎务，宰相不屑道，而我道之乎？从此好大喜功，驰高骛远，则今日之文帝，且为他日之武帝矣，三代、成康之化，何由复见于文景之世哉？甚矣，盗嫂受金之人，止可与之平祸乱，不可与之定太平也。

吉顺也评：陈不对决狱、钱谷之数，丙吉不问斗死而问牛喘，人皆以为得体。吉尝因召问能具对寇所入郡吏，见谓忧边思职，而御史大夫遽不能详知，以得谴让。窃谓吉此事可与平、勃反照，吉当道遇群斗，自不应侵官；平承人主之清问，岂可御人口给。笠翁此论，足令曲逆俯首。且原拙诚而诛巧伪，大有裨于臣箴。然吉不问群斗，则是其问牛喘，终类迂阔，吾辈不可为古人瞒过。

汪北海评：曲逆生平所为，殊不快人意。居家盗嫂；始事高帝，即受诸将金；至于六出奇谋，非平之殊勋，适足以张其丑耳。蹶足附耳，能令汉王封信，亦能令汉王杀信，又能令汉王疑诸将，皆信而杀诸将，一如杀信。至恶草、间、金、遗闾氏，更鄙秽不足道矣。史又称六计俱在马邑下，其事秘不传。夫以天子亲总六师，诛叛讨乱，其区画之计，何事不可对人言？乃为从臣所不敢述，而国乘所不敢载，此其伤威损重，又何如哉。今不对决狱、钱谷，又为笠翁觑破，则孺子为人，止善分肉而已矣。

论袁盎却坐

文帝所幸慎夫人，常与皇后同席坐。及幸上林，布席，盎引却慎夫人坐。夫人怒，上亦怒，盎因前说曰：“臣闻尊卑有序，则上下和。今已立后，夫人乃妾，妾主岂可与同坐哉？且陛下独不见人彘乎？”上说，语夫人，赐盎金五十斤。

笠翁曰：袁盎却席一事，千古人臣快举。后世读史者至此，俨若闻其叱咤之声，睹其正色之状。其所恃以无恐者，全在末后一语。人彘之祸，近在目前，有不闻而骨竦者乎？惟其理直，故气壮耳。由此观之，人臣谏君而有嗷嗷之状、齟齬之形者，毕竟所持之义理，尚有几分信不过处。有袁盎却席之义理，不怕没有袁盎却席之神情、之词色；有袁盎却席之神情、之词色，不怕君上

不改容谢之。人以谏君之事比之批龙鳞、蹈虎尾，言其险也。予谓批鳞、蹈尾，亦自有法，非批着其极痒处，即蹈着其极痛处。批着极痒处，则喜而不怒；蹈着极痛处，则畏而不敢怒也。

笠翁又曰：人谓文帝之谏臣，当以盎为第一。予曰：盎非文帝之谏臣，乃文帝之功臣也。人彘一语，寒文帝溺爱之心，夺慎夫人恃宠之魄，亦可以消皇后宿怨之萌。终其世无闺门之患者，袁盎一言之力也。使高帝宠戚夫人时，平、勃诸人稍能正以义理，怵以利害，则高帝知吕后之难制，必不擅萌易嗣之心，而启他日无穷之祸矣。以此相形，则知袁盎之功，尚在乎、勃诸人之上。以平、勃诸人乃焦头烂额之客，而盎为曲突徙薪之人也。

张秋绍评：樊哙谏高祖曰：陛下独不见赵高乎！袁盎谏文帝曰：陛下独不见人彘乎？正同一机轴。二事为二帝所亲见，故其言皆入。若泛陈前古世主，闻之有白昼欲寐者矣。笠翁论谏法，以所持之理义为主，原就目前之利害说，勿认作宋儒道学语。

论贾山至言

贾山上书言治乱之道，借秦为喻，名曰至言，上嘉纳。自是凡遇上书，即止辇受之。

先儒谓孝文恭俭慈仁，而贾山乃借秦为喻，盛言其侈靡贪狼暴虐，宜若过矣。然君臣警戒，正在无虞之时，故舜之臣犹以丹朱戒其君，则山之借秦，不为过也。但其末复开宴游一路，则非所谓陈善闲邪矣。此所以不得为醇儒。

笠翁曰：因上求直言极谏，当时上书者，故言必求其太直，谏必务其至极；贾山借秦为喻，非果有警戒无虞之心，乃认题太真，

“直”与“极”二字误之也。未闻复开宴游一路，亦非无意。盖恐前幅语过于戇，意近于怗，文帝弃而不录，故于末幅极力挽回，令人转怒为喜。此后世取功名之秘诀，不意汉文之时已先有行之者矣。虽然，此非正论也。以小人之心，度君子之腹，所谓前言戏之耳。

论文帝劳军细柳

匈奴入寇，帝自劳军。时刘礼将兵次霸上，徐厉将兵次棘门，周亚夫将兵次细柳。帝至霸上、棘门，直驰入，将以下骑迎送。已而之细柳，军士吏被甲，锐兵刃，彀弩持满。天子先驱不得入。先驱曰：“天子且至！”军门都尉曰：“将军令曰：军中闻将军令，不闻天子诏。”上至，又不得入。上使使持节诏将军：“吾欲入营劳军。”亚夫乃传言开壁门。壁门士请车骑曰：“将军约：军中不得驰驱。”天子乃按辔徐行。至营，亚夫持兵揖曰：“介胄之士不拜，请以军礼见。”天子改容式车，使人称谢：“皇帝敬劳将军。”成礼而去。群臣皆惊。上曰：“此真将军矣！曩者霸上、棘门军，若儿戏尔，其将固可袭而虏也。至于亚夫，可得而犯邪！”

笠翁曰：史载细柳劳军一事，非美亚夫威令之严，盖嘉文帝量宏识别，能容他人之所不能容，取凡主之所必不取也。后世不察，以赞君之事而归美于臣，引为后世行兵之法，动谓将在军中，君命亦可不受，古之人有行之者，亚夫是也。噫，谬矣！予谓亚夫所行，实取死之道，其幸而不死者，以所事得其人也。使易孝文为前之高祖、后之景帝，未有不以形迹相疑，非缚而载之后车，即早以他事召诣廷尉，必不留此鞅鞅者为少主臣矣。夫所谓军中闻将军令，不闻天子诏者，以天子远在京师，真伪一时莫辨，未

必其诏之果出于天子否也。岂有乘輿既至，咫尺天颜，而不受其诏令者乎？军中多设间谍，所以侦远近之事而闻于将帅，以便预为计也。岂有天子自出劳军，已过霸上、棘门，而绝无一骑往探，既至壁门，犹不知为天子，而令军士被甲锐刃、彀弩持满以待之者乎？幸而骤抵壁门者为天子之车驾，万一敌骑猝至，侦谍无人，其能以被甲锐刃、彀弩持满之军士谕以将令，使不得擅入壁门乎？所谓军中不得驰驱者，为武士言之也；天子劳军，不同豕猪，自能按辔徐行，又何必申言其令乎？介胄之士不拜，礼也，然既见天子，执兵欲何为乎？事事乖张，无一非杀身之道，其不见收于文帝者，幸也。然而文帝之在当日，宜赏其军令之肃，而责其侦谍之疏，则功过不掩，而使后世武臣知所取法，奈何徇一时之喜悦，而失千百世君臣殿陛之防，岂礼也哉！昔高祖至修武，自称汉使者，入张耳、韩信壁而夺之军；至定陶，又驰入韩信壁而夺之军。使信、耳尽如亚夫，为身计者则得矣，其如高帝之失算何哉！恐不能如文帝之无他也。

吾谓将帅之于天子，须天子有令，欲自观军容，不拘常格，始可以亚夫待文帝之法待之；如其不然，则当以霸上、棘门为正，而不当取法于细柳。细柳之事，古今不可无一，不可有二。踵其辙者，未有不自祸其身，而悔为前人所误者也。

笠翁又曰：此必亚夫有意为之，或因帝入刘、徐二壁，见其阃政不肃，防御多疏，微有诃责之意，故于此特示威严，欲矫霸上、棘门之失耳。果出于此，犹不失为奠君畏法。世故有有心之罪，而反胜于无心者，此类是也。文帝赏之格外，固称得体，然不知尊之适以骄之，骄之适以害之耳！亚夫不达时变，谬谓后人君，尽如文帝，可以细柳劳军之法待之，见景帝礼遇稍疏，辄有鞅鞅之色，此下狱殒身之祸所由来也。使文帝在当日，稍示驾驭之方，使知人君之喜怒不可尽测，则他日察言观色，必知所以自处矣，岂至赐食不设箸，犹未能见机而作，不至杀身亡宗而不

已邪？由是观之，凡为人君而欲厚待其臣者，亦当计其后来，为之稍留余地可耳。

陈植三评：孙武杀吴王宠姬，穰苴斩景公贵臣，皆借主上以行其威令，术也，非法也。亚夫斯举，亦是效颦于此。笠翁方破其术，而教天下以诚，为千百世武臣说法，功德非浅。知此，必无鸟尽弓藏之叹。

论李广、程不识将兵

汉武帝时，李广行军无部伍行陈，人人自便，不击刁斗自卫，未尝遇害。程不识整部曲行伍营陈，击刁斗，军不得休息，亦未尝遇害。然士卒多乐从广而苦于不识。

笠翁曰：唐郭子仪以宽治军，李光弼以严，士卒亦乐子仪而惮光弼，可见军无常法，士有恒情。然待士卒固宜尚宽，而行兵发令，则非严不可。能以李广、郭子仪之法行于偃旗息鼓之日，以程不识、李光弼之法行于裹粮秣马之时，则宽、严两得之矣！然言之易而行之甚难，不若取法于严之为得也。

论汲黯不拜大将军

卫青既拜大将军，公卿以下皆卑奉之，独汲黯与亢礼。或说黯曰：“大将军尊重，君不可不拜。”黯曰：“使大将军有揖客，反不重邪？”大将军闻，愈贤黯，数请问国家、朝廷所疑，遇黯加于平日。

笠翁曰：汲黯不拜卫青，为千古儒臣培养气节，诚快举也。然此事之难，不在黯不拜青，而在青不定责其拜，且愈贤之。此武人仅见之事，其贤加黯一等，不特可以媲美西京也。青之为此，非止于礼贤下士，以示识量之宏，盖欲隐讽朝廷，使知群臣之可敬者，无出黯下。大将军无所用之，尚能加以异数，况天子躬受其益，而视为股肱心膂者乎？观其数请问国家、朝廷所疑，则此段忠君爱国之心，不剖而自明矣。再观他日武帝踞厕见卫青，不冠见公孙弘，而独于汲黯一人不冠不见，则其以身先之之效，又不表而自见矣。

予尝谓武帝非真能重黯，盖因人之重而重之者也。庄助言其招之不来，麾之不去，遂闻声附和，而以社稷臣相许。淮南王反，谓汉廷大臣，独汲黯好直谏，守节死义，难惑以非。未几即曰：“吾久不闻汲黯之言，又复妄发矣。”迹是观之，其不冠不见，由于大将军也明矣。能因人之重而重之者，亦能因人之轻而轻之，此淮阳之遣，公孙弘不劳余力，而能使帝出诸千里之外也。

张秋绍评：以身重士，而使人主重之，是荐贤苦心，亦是荐贤妙法，且所以尊主权、避党患也。卫仲卿而后，惟郭汾阳得此意，乃为笠翁觑破，快绝千古！史谓青不能有所荐达者，浅之乎视青矣。大臣作用，妙在荐人而使人终身不自知。其人既不自知，史官又乌得而知之？无怪乎有不能荐达之目也。

汪北海评：膝有以不屈为善者，叔向之不谢乐王鲋，王太尉之长揖司马昭，陶靖节之不折腰向乡里小儿是也。膝有以能屈为善者，张子房之进履圯桥，广平王之顿首叶护，田节度之遥瞻郭令公是也。膝又有以善屈为丑者，孔光之道谒董贤，范质、王溥之降阶宋艺祖，许及之之泣诉韩侂胄是也。因笠翁论长孺而并及之，以俟用膝者之自择云。

论武帝以汲黯为淮阳太守、宣帝以萧望之为平原太守

初，汲黯之出守也，谓李息曰：“黯弃逐居郡，不得与朝廷议矣。张汤怀诈以御主心，挟贼吏以为威重，公不早言，与之俱受戮矣！”息不敢言，及汤败，上抵息罪，使黯以诸侯相秩居淮阳，十岁而卒。

宣帝以萧望之为平原太守，望之上疏曰：“陛下哀愍百姓，恐德化之不究，悉出谏官以补郡吏。朝无诤臣，则不知过。所谓忧其末而忘其本也。”上乃征入守少府。

笠翁曰：以谏臣外补，两君之失相同。至于宣帝能召而武帝不能召，则似彼善于此矣；然召之不能大用，使守少府，少府，掌税之官也，此岂谏官宜居之位哉！且原其召还之意，以览望之之疏，有“忧其末而忘其本”一语，故悔悟而召之也。然则望之之所谓“本”者，仅区区钱谷之谓欤？与其收山泽陂池之税，而不能言其所欲为，又不若为人民社稷之主而得行其所欲言矣。故直断之曰：召之而不能用，不如不召之为愈也！

论东方朔谏内董偃置酒宣室

上尝置酒窦太主家，馆陶公主，帝之姑也。见所幸卖珠儿董偃，上使侍饮。常从游戏驰逐，观鸡鞠，角狗马，上大欢乐之，因为主置酒宣室，使谒者引内偃。中郎东方朔辟戟而前曰：“偃有斩罪三，安得入乎？”上曰：“何也？”朔曰：“以人臣私侍公主，一

也；败男女之化，乱婚姻之礼，伤王制，二也；陛下富于春秋，方积思于六经，而偃以靡丽奢侈，极耳目之欲，乃国家之大贼，人主之大域，三也。”上默然良久，曰：“吾业已设饮，后而自改。”朔曰：“不可！夫宣室者，先帝之正处也，非法度之正，不得入焉。淫乱之渐，其变为篡。”上曰：“善。”诏更置酒北宫，引偃从东司马门入。赐朔黄金三十斤。偃宠由是日衰。

笠翁曰：人谓武帝名臣，当首推董仲舒、汲黯，予谓东方朔立朝风采，不在二臣下。史氏不察，乃以滑稽轻之，与优孟诸人并齿，冤哉！其数董偃之罪，不令入宣室者，非爱景帝之正处，爱武帝之后宫也；怪其因私侍公主，怪其因公主而出入禁帏，将有臣不忍谏、史不胜书之事也。偃之私于公主，武帝岂不知之？知之而故令侍饮，使奸夫淫妇并坐于前而莫之耻，其视点筹、洗儿之秽习，相去宁有几乎？使于此时不加极谏，则由宣室而内宫，由内宫而卧榻，何一非其所至之处，能保汉之武帝，不为唐之中宗、玄宗乎？此朝廷荣辱之大关，宗社安危之至计也。盈庭结舌，而朔以一人争之，争之而卒能使其不入，偃宠遂由是日衰，比之一正君而国定者，何多让焉！诸如谏起上林苑，及述孝文恭俭以讽淫侈，至死，犹规上无信谗言，由是观之，朔乃一代之诤臣，其品行不在汲黯下可知矣。至其上书之始，用三千奏牍，两人共持举，始胜其任，武帝读之二月始尽，乃拜为郎；建章宫中出异兽，帝问群臣习事通经术者，皆莫能知，召朔问之，始知为驺牙，当有远方归义之验，其后浑邪王果将十万众来降。由是观之，朔又一代之通儒，其学术不在董仲舒下可知矣。乃上之不得高拟于董、汲，即等而下之，亦不获与终军、枚皋、司马相如辈并肩齐驱，徒辱其名曰“滑稽”，传于游侠、佞幸之后，吾不知朔与腐史何仇，而遂遭其凌贱若此也！岂非千古不决之疑案哉？虽然，有强项不屈之酷吏，即当有正色不挠之滑稽，比例而推之，则又确乎其不

可易矣。且以太史公论定之人，孰敢移易其位次？扬雄、班固犹且因之，而李子何人，欲矫其失，亦多见其不知量耳！

陈植三评：温陵以曼倩列讽谏名臣，可谓有识，犹不若笠翁此论，竟以直谏予之，又进讽谏一等矣。予谓笠翁诸论，温陵有其快而无其韵，竟陵有其隼而无其确。或当以予为知言。

论周勃、霍光优劣

汉高帝病笃，语吕后曰：“相国死，曹参可代；王陵少戆，陈平可佐之；平虽智有餘，然难独任；周勃厚重少文，安刘氏者，必勃也。”帝崩，吕后听政，朝政、兵权，率归诸吕。及后崩，诸吕欲为乱，酈寄说吕禄以兵属勃，勃下左袒之令，率北军尽斩诸吕，迎代王即皇帝位。

武帝欲立皇子弗陵，弗陵幼，帝思霍光可任大事，乃画周公负成王图赐光。及病笃，谕以赐图之意，使佐幼主。帝崩，光辅幼主，小心谨慎，天下想闻其风采。及昭帝崩，无嗣，光奉太后诏，迎昌邑王嗣位。王纵淫无度，光忧之，以问田延年，延年劝光建白太后，更选贤者立之。光问古尝有此事否，延年引伊尹废太甲事以证。光乃白后，后召王，脱其玺组，送至昌邑，迎皇曾孙即皇帝位。后光夫人谋立其女为后，会许后病娠，使女医投毒死。光知大惊，终不忍举发，女果立后。及光死，上闻霍氏毒杀许后，乃收诸霍印。诸霍有逆谋，上族之。

先儒谓霍光不学无术，谓不能审昌邑之为，人卒然立之，致后有废立之事，责其无知人之明也。

笠翁曰：周勃、霍光二人，皆汉之功臣，亦皆汉之罪人也。观

高帝“安刘必勃”一语，即武帝画周公负成王图赐光，皆是以国士遇其臣矣，而勃、光二人不能以国士报其君。勃惩信、越韩信、彭越之死，一味阿意取容，使王陵之谏不行，汉室几迁于诸吕。左袒一举，虽能晚盖其愆，然皆属之天意，非人力也。何则？汉祚存亡之关，系于吕禄之兵权解与不解。禄从酈寄之说，辄以兵权属勃，此千古以来最不可解之事也。诸吕之存亡，亦系于兵权之去与不去，妇人稚子皆能知之，而一旦解以授人，岂非高帝之灵乎？使酈寄之说，亦如王陵之谏不行，吾恐数万北军，无一人不右其袒矣。周勃虽有安刘之功，乌足以赎危刘之罪哉？

先儒之论霍光，皆惜其不学无术。予谓光虽不学，犹能用人之学，如听田延年论伊尹事，辄废贺立宣是也。独是纵妻毒后，欲贵其女而不发其奸，此所谓大关节，出于良知良能，不待学而知其为非者也。奈何舍其不待学之大端，而责以未尝学之小过哉？《春秋》不讨贼即谓之弑，所谓不讨者，犹为他人而言也；岂有乱臣贼子伏于床第衽席之间，出于属毛离里之辈，听其肆逆而莫之禁，犹得耻于人臣之列哉！虽有拥昭立宣之功，不足以盖弑后欺君之罪。吾故曰：二人皆汉之功臣，亦皆汉之罪人也。

广霞君评：余尝谓霍光之心，与曹操无异。废立之事，自光作俑，高欢、刘裕之辈，皆以光为口实。若霍显使淳于衍毒弑许后，光知之，佯为大惊，欲自发举，不忍、犹豫，此与操之杖杀伏后，有何分别？人臣无将，光岂所称社稷臣耶？光真莽、操之流，非绛、灌之比也。读笠翁此论，实获我心，狂叫欲绝！

论李广数奇

帝令大将军卫青、骠骑将军霍去病，各将五万骑击匈奴。李

广、公孙贺、赵食其、曹襄皆属于青。既出塞，青欲令广军并于食其，广自请曰：“臣结发与匈奴战，今乃一得当单于，愿居前先死！”青阴受上诫，以为广老、数奇，毋令当单于，不听。广不谢起行。青发轻骑夜追单于，捕斩万九千级。广军失道后期，青使长史急责广之幕府对簿。广曰：“广年六十矣，终不能复对刀笔之吏！”遂自刭。

笠翁曰：武帝阴诫卫青，谓广老数奇，毋令当单于。而广果以失道后期，不屑对簿而自刭，岂非成败有命，而武帝“数奇”之言为不谬乎？曰：不然。广之死，非死于数，乃死于武帝诫青之一言。盖君相有造命之权，“数奇”二字，不当出于帝王之口也。即使广数果奇，而为天子者能以优诏奖之、威权授之，不虑造化之权不为我夺；奈何以兵凶战危之事，未经发轫，先以“数奇”二字，夺英雄之气而惑将士之心乎！且既知数奇，即不当使之远从征伐，使之远从征伐，又诫曰“毋令当单于”，将欲其束手待毙于锋镝之下乎？抑冀其侥幸成功于谈笑之间乎？使果束手以待毙，则帝谋甚拙；如其侥幸成功也，则广之数为不奇矣。青欲其军并于食其，又不从得当单于之请，及其失道后期，急责之幕府对簿者，盖始终为“数奇”二字横亘于中，既恐其不验，又虑其果验，止恨军中多此一人，必欲死之而后快也，广之命其能旦夕延乎？然犹幸其不死于单于，不死于刀笔吏，而死于自刭，犹不失英雄本色，是广之数犹未尽奇，即谓武帝之言为不验也亦可。

笠翁又曰：前人皆以不侯故，占李广之数奇。以予观之，盖武帝谬执数奇之见，谓此薄命汉不足当吾封赏耳。不然，岂广威行塞外，能得“飞将军”之号于匈奴，不能得封侯之赏于本国乎？若是，则天子爵人于朝，皆当令术士推其五行，可则予之，否则夺之，而才德勋猷，皆可置之不论矣。后世之帝王，亦有谓薄福之人不可与其功名，必相其魁梧奇伟而后用之者，然择而后用，非

用而后择。择将用此法，吾犹虑其“以貌取人，失之子羽”，矧下于此者乎？甚矣，武帝之言，不可为训于后世也！

论宣帝置廷尉平而郑昌劝定律令

皇帝诏曰：“间者吏用法，巧文寢深，使不辜蒙戮，朕甚伤之。其为置廷尉平，秩六百石，员四人。其务平之，以称朕意。”太守郑昌上疏，言不若删定律令，律令一定，愚民知所避，奸吏无所弄矣。今不正其本，而置廷平以理其末，政衰听怠，则将招权而为乱首矣。

笠翁曰：立一法，即生一弊；法者，弊之所从始也。宣帝置廷尉平，意在慎狱。郑昌曰：“政衰听怠，则将招权而为乱首”，此格言也。不特明于理而达于务，亦且有源有委，切中病根。何也？高祖入关之始，已经约法三章，是汉法已定于此矣。法定之后，非有大害，无事纷更，但宜慎其出入，使无枉无纵而已。乃至天下既定，又令萧何作律九章，变三为九，是绳民之法，已三倍于前矣，小民尚堪其命乎？此无端变法之过也。文帝英明之主，不事更张，止除收孥连坐之法，此即郑昌删定律令之由也。使廷尉平可设，则文帝已设之矣。其不设廷尉平而止除收孥连坐之法，则此时此际，止宜扩充其意，取当除未除者而删定之，不合创法立官可知矣。鉴萧何立法之弊，而祖文帝省罚之利，故为是折衷之言。读《汉书》者不得仅美其才，而不求其精意之所在也。

论龚遂治渤海

上以渤海多盗，命遂镇之。遂曰：“民困饥寒”，故弄兵于潢池耳。治乱民如治乱绳，不可急也。”乃单车至府，悉罢捕盗令，但以执田器为良民，令民卖剑买牛、卖刀买犊，而盗悉解。

笠翁曰：治乱民犹治乱绳，不可急而可缓，此千古来第一句话，非龚渤海不能言之！予谓此法不止于治乱民，凡遇仓皇急遽之事，皆当以此法镇之。非不欲急，急之，适足以坏之耳。裴晋公失印亦用此法。天下之事，孰有急于失印者乎？然急则投诸水火，缓则复还故处，凡急事之当缓，可概见矣。然遇天下缓事，又当急治，此即兵家虚实之法，惟善悟者，始能以例推之。

余澹心评：“急事当缓，缓事当急。”八字妙诀，守而勿失。谢安石围棋赌墅以破苻坚，此急事当缓也；杨威公反旗息鼓以除魏延，此缓事当急也。

论汲长孺矫制开仓粟、冯奉世矫制破莎车

汉武帝时，河东失火，上使汲黯视之。黯复命曰：“家人失火，不足忧也。臣过河南，见贫人伤水旱万馀家，臣谨持节发仓以赈，请伏矫制之罪。”上益贤之。

冯奉世以卫候，使持节送诸国客。会莎车王弟自立为王叛汉，奉世遂以节发诸国兵击斩之。上甚悦，议封奉世。萧望之曰：“奉世矫制发兵，要功万里之外，为国家生事，渐不可长！”上善之。

先儒曰：“汲长孺矫制开仓，而《纲目》恕之，重民命也；冯

奉世矫制破莎车，而《纲目》罪之，抑边功也。

笠翁曰：岳武穆遗恨千古，又在不肯矫制，未必非鉴冯奉世之失也。予谓奉世之失，失在持节送客，原无兵权，而忽以修文者变为讲武，与盗弄潢池之兵者何异？故《纲目》罪之。若曰止抑边功，则开后世见义不为之渐矣！

笠翁又曰：奉世之边功原有可抑处，以其在封域之外，而又未尝谋动干戈以入寇也。大凡矫制之事，须出于万不得已。即不破莎车，亦何损于中国，而故为此勉强出头之事哉！若夫门庭之寇，其势迫于水火，以我之作辍系天下之安危、宗社之得失者，又当别论，自不得以经而灭权、引常而例变矣。使岳武穆之在当年，但知汲长孺之可师，不知冯奉世之可鉴，以其破莎车者移而破金，吾知《纲目》断不罪之。何也？朱子学孔、孟者也。闭户于乡邻之斗，而纓冠于同室之争，孟氏尝言之矣；未闻嫂溺不救，必待告于父母、谋之师傅，而后以手援之也。然武穆之不肯矫制，亦非鉴奉世之失，知其功之必不成耳。秦桧能矫班师之诏，独不能矫问罪之诏乎？设又以金牌十二，调他镇之劲兵，以问我矫制不臣之罪，则将何以应之？吾知金人未灭，而灭金人者，终有不能不灭之势矣。与其为不必有之忠臣，反不若为莫须有之奸臣，犹可以见谅于后世耳。善哉叩马书生之言，反为千古不易之定论也！

黄石公评：《春秋》之义，大夫无遂事，然出境则便宜可行。黠之先赈后告，本无可罪，乃谓《纲目》恕之，为重民命，诚至论也。若汉之用兵，动发良家子，朝廷重武事，则必轻用其民。不然，莎车遮杀汉使，罪有甚于郅支、康居，冯奉世破莎车，功有加于陈汤、延寿，考亭岂不读刘向、谷永及杜钦之讼言也？则抑边功，亦所以重民命也。至从不矫制处，借岳武穆以立千万世人臣之极，余于笠翁，犹将金石其言！

论汉宣在位十二年始赏保护之功、 孝文即位历三时始修代来之功

初，文帝为代王。诸吕既诛，大臣迎之即位，上疑，宋昌劝之，乃行。后历三时，乃修代来功，封昌壮武侯。

霍光既白太后，废昌邑王，乃奉诏迎皇曾孙病已立之，是为宣帝。初，病已生数月，坐巫蛊事在狱，丙吉哀其无辜，乳养之。或告狱中有天子气，诏尽杀之，病已赖吉以全。上既立，丙吉绝口不及前事。会宫婢自陈阿保之功，因及吉，上乃问吉，吉终不言。上大贤之，始赏保护功，封吉等为列侯。

笠翁曰：孝文之立，太尉诸人实始其谋。宋昌从旁劝驾，不过一决疑辨惑之人耳。历三时而受封，人以为迟，吾尚以为早也。至于孝宣之系狱，丙吉令择谨厚女徒乳养，则其幼稚无识可知。吉虽有闭门拒使、不肯尽杀之功，彼乌得而知之？及其长也，霍氏一门专功于外，光女争宠于内，方毒后、谋立之不暇，尚有人以保护之功，舍霍而议丙者哉？迨霍氏既族之后，始有宫婢代陈其劳，孝宣知之，封赏旋及，虽十二年，犹一日矣。读史者岂得以时日久远之故，遂施责备之论哉！虽然，历十二年之久，封赏未及，而能绝口不道前恩，可谓纯臣也已。即谓孝宣有心试之，亦未尝不可。

汪北海评：宋昌之劝驾，文帝之所知也。知之而迟其赏，是不以得位为幸，而以祖宗之名器为足惜也。丙吉之保护，宣帝之所不知也。一知而封赏旋及，是不肯避酬恩之小嫌而昧长者之大德也。历三时尚以为早；虽十二年犹一日。二帝有心，笠翁若将见之。

论张安世辞禄

宣帝时，张安世以父子封侯，权位太盛，乃辞禄。安世谨慎周密，每定大政，已决，辄移病出；闻有诏令，乃惊，使吏之丞相府问焉。朝廷大臣莫知其与议也。尝有所荐，其人来谢，安世大恨，以为举贤达能，岂有私谢耶！绝弗与通。

先儒曰：张安世匿名迹，远权势，定大政而不敢专，荐人才而不敢擅，可谓汉之贤臣矣！

笠翁曰：安世所行者，皆人臣分内事，而史之所载、人之所述，皆若以奇能异行目之，可怪也！岂非以过则归君、善则归己者众，而遂觉反此者为异邪？甚矣，忠臣孝子之名得以传于天下者，皆由世道之衰也！

王望如评：安世与光，皆谨饬大臣，而安世独以功名终者，不恋恋于权位耳。彼霍将军者，当孝宣莅政初，奉身以退，又安有毒后一事，罹夷族之惨哉？《易》曰：“知几其神。”然则光与安世，成败在学与不学明矣！

论二疏请老

宣帝时，太子太傅疏广谓少傅疏受曰：“吾闻‘知足不辱，知止不殆’，今仕至二千石，宦成名立，如此不去，惧有后悔！”即日俱移病，上疏乞骸骨，皆许之。”

笠翁曰：二疏请老，亦是居官分内事。从古以来，原无老死

于官、不准乞骸之法，人自不肯行耳。二疏偶然行之，后世辄以为异，非以急流勇退羨其高，即以瞰君无能奖其智。果如是，是必待有罪之日，始可休官；无故而去，即为超群轶伦之事乎？此皆衰世不情之论也。其可怪者，“林下何曾见一人”？而此际同时请老者忽然有二！此则近代创闻之事也。论者藉藉，其为是欤？

汪北海评：终南山为仕宦捷径，余犹爱卢藏用之易知。至云金马门可以避世，余直欲唾近日曼倩之面矣。笠翁一肚皮不合时宜，偶为二疏漏泄！

王望如评：汉家第一位智士是张子房，第一个呆人是韩信。托言辟谷，何等识解！所以流水圯桥，动千百载诗人之叹。彼身死妇手，卒为蒯生所笑，良弓高鸟，究何益哉！之二子者孰得孰失？则二疏之请，正未可遽非也！

论二疏不以财累子孙

疏广、疏受既归乡里，日置酒请族人。故旧有劝广为子孙立产者，广曰：“贤而多财则损其智，愚而多财则益其过。且富者，众之怨也；吾既无以教化子孙，不欲益其过而生怨。”

笠翁曰：二疏之所难，不在请老，而在不以财累子孙。盖既曰请老，必非年富力强之时，人当日暮途穷，尽有投栖望宿之念。若自己功名告止，正欲以富贵望其子孙。贵则有待于天，其富与不富，则为祖、为父者可以操其权也。孔子曰：“及其老也，戒之在得。”正虑其为子孙谋耳。二疏不为后代作马牛，且欲为之去累，此则千古一人，以其看得透而又做得出耳。然而纨绔之子，多有不能振拔者，皆以骄奢淫欲故。虑其骄奢而予以寒俭，则人人自奋而为致身立名之事矣。吾谓二疏之散财，非果欲去累，乃真能以富贵望子孙者也。

汪北海评：不以财累子孙，仁也。笠翁许之曰：看得透；做得出。夫看得透，智也；做得出，勇也。二疏一举而三德备焉。笠翁其知之矣！

论京房考功课吏法

京房学《易》于焦延寿，用之尤精，上疏屡言灾异有验，元帝说之。房言：“古帝王以功举贤，则万化成，瑞应著；末世以毁誉取人，故功业废而致灾异。宜令百官各试其功，灾异可息。”诏使房作其事，房奏考功课吏法。公卿、朝臣皆以房言烦碎，令上下相司，不可许。上意乡之。时石显专权，房劝上去显。显嫉房，欲远之，建言以房为魏郡太守，得以考功法治郡。房去月馀，竟征下狱。

论者曰：京房事元帝，才得为郎，即陈考功法，又欲去上所亲信，而不量元帝之庸懦，可谓交浅而言深，难乎免于汉元之世矣！又曰：房学《易》不明其道，徒以灾变占候为事，此《易》之末耳！惟明乎消息盈虚之理、语默进退之义，以不失乎时中，则《易》之道也。

笠翁曰：考功与灾异何涉，而京房曰：末世以毁誉取人，故致灾异，因进考功课吏法。此语似涉荒唐，然非无说以处此。房盖先著考功之法，欲进无由，且虑上不见信，因言灾异有验，故乘机而上之，不得不借灾异发端，此进言家入门法也。予谓京房课吏之法，其意不在课吏，而在屏斥宦官。何也？是时石显用事，必以私意进退人；考功之法一行，则其所喜者无由而进，所忌者亦无由而退矣。君子升而小人降，则显势渐孤。且吏治一课，则无所不课，宦官尽有执掌，亦尽在所课之中，举其不职而按以法。正人在位，必群起而攻之，则与显辈为难者，决不止一萧望之而

已矣。此实匡时之良法。但房既有此意，当隐然不露，令彼堕我术中，迨事成政举之后，即欲相左而无从矣。奈何于建言之始，即以“毁誉取人”四字，触其所忌而夺其所恃，以开阻塞之门乎？此考课不行之由也。后人不察，仅以寻常考课之法论之，是止论其事，而不论其人，且不论其所处之时与世矣。若此法止于烦碎难行，而无害于当时之权贵，则上意既乡之，何妨暂令一试，乃盈廷共阻，如出一口者，何哉？至不得已而令行之于郡，则其不便于京师可知矣。

论汉诏刘秀典领五经所奏《七略》、九流之议

成帝时，王莽荐刘歆为侍中，更名秀。上复令典领五经，卒父前业。秀于是总群书而奏其《七略》，有《辑略》、《六艺略》、《诸子略》、《诗赋略》、《兵书略》、《太术数略》、《方技略》。其叙诸子，分为九流，曰儒、曰道、曰阴阳、曰法、曰名、曰墨、曰纵横、曰杂、曰农。以为王道既微，是以九家蜂出，各引一端，合其要归，亦六经之支流馀裔，使遭明王圣主，得所折中，皆股肱之材也。若能修六艺之术，而观此九家之言，舍短取长，则可以通万方之略矣。

笠翁曰：三教之中，儒与释、道并称，已失其伦矣。然犹曰释、道原可比肩，而道则始于老子，仲尼曾有犹龙之叹，故因道而及释，由所爱及所不爱，其屈儒之意，犹可原也。乃三教之不足，而又益其数为九，等其名曰流！流义从水，盖愈趋愈下之称也。君子上达，小人下达。以为圣为贤之君子，而加以小人之称，且与刑名、法术、阴阳、纵横之辈并齿，则斯文不亦扫地乎！无论其所谓六艺之术、九家之言，果足以通万方之略与否，即观九

流之号，其名先不正矣。有名不正而言顺、言不顺而事成者乎？噫，甚矣，吾谓刘秀必非儒者，乃刑名、法术之流，欲借儒名冠于八事之首，以重其术业者乎！方之乃父，可谓不肖子矣！

余澹心评：刘歆阿附王莽，改名以应图谶，其子棻虽从扬雄问奇字，而以谶被戮，名教之罪人也。七略、九流，何足与之较短长乎？笠翁言论，凡以救世，览者不可不另着冷眼。

东 汉 纪

论汉图列二十八将何独以邓禹居首

先儒谓二十八将，以邓禹居首，当时无异议，后世无贬辞者，以禹初见帝，劝其延揽英雄，务悦民心，立高祖之业，救万民之命。此数语者，李通、耿弇、贾复诸人，皆未之尝言。且任使诸将，各当其才，此固高出诸将之上。一日，帝披舆地图曰：“天郡国如是，今始得其一，如何？”禹曰：“古之兴者，在德厚薄，不以大小。”是又非诸臣所能及。此光武所以深知，而禹之所以自许者与？

笠翁曰：禹功在诸将之下，而位居其首者，以开导光武之言，甚得大体，颇有儒者气象、文臣规模，不仅以勇力相高故也。然究其所以能若是者，岂非以诸将未尝读书，而禹能读书之故欤？可见为武臣者，定该读书穷理，涉猎往事，始知建功立业，当以何者为先、何者为后，不仅在斩将搴旗、攻城掠地而已也。能读书者，当如关云长之喜看《春秋》，杜当阳之手不释卷；即不能读者，亦当如石勒之讲究《汉书》，令儒生朗诵，倾耳听之，论其得失而决其兴亡，亦不识字人读书之良法也。以此等语尚论古人，或不为无补于世。

王望如评：方杖策谒世祖，天下成败未可知，而禹独能识真主、定大略。淮阴登坛，隆中抱膝，其为元功何疑。仲华以善读书，故冠二十八将之首；颜渊称好学，亦为圣门三千之冠。然则欲作第一人，读书穷理，盖可忽乎哉！昔杨椒山先生诗有云：“须眉引镜频相照，不作囊中第二人。”先生盖读书穷是者也！

汪北海评：邓高密之冠云台也，由于能读书，可谓探本之论矣。古亦有不读书而为良将者。予谓不读孙、吴而能暗合孙、吴，斯可以不读孙、吴；犹之不读孔、孟而能暗合孔、孟，斯可以不读孔、孟。然求其能若是者，有几人哉？故不若笠翁之论之无弊也。

论汉图二十八将于云台，马援 以椒房之戚不与

明帝思中兴功，画诸将于云台，首邓禹，次马成、吴汉等，二十八人；后又益以王常、李通等四人，合三十二人；马援以椒房之戚，独不与焉。

宋儒嘉其内不私亲，谓有教化之意寓其间。明儒又谓明帝避亲亲之小嫌，废论功之大义，恶乎其为教化？时贤又谓王莽以外戚篡汉，前车不远；云台诸将皆诛外戚以成功者也，明帝方欲垂鉴将来，宜援之终不得与。

笠翁曰：马援不入云台之图，诸儒各执一见，皆名论也。独予浅人，无深思远见，请为汉室君臣画一依样葫芦而已。夫世祖之有马援，犹宣帝之有苏武也，虽有出使、征伐之不同，其著名异域则等尔。麟阁之勋，可屈苏武于末席，岂云台之座，独不可屈马援于不与乎？异其事而同其情，皆为远人计也。邓禹以下诸将皆以讨贼立功，独马援为伏波将军，前征交趾，后征武陵蛮，皆大破之。是塞外之人，但知伏波将军之可畏，而不知邓禹以下二

十八将为何如人也。向以守忠不屈之苏武居麟阁诸臣之末，已见中国之多人矣；今复以马革裹尸者为卑卑不足数之人，则华夏之忠臣义士，尚可限量乎哉！汉家衣钵，全以威服远人为事，即无宣庙之成法，明帝犹当见及之，况有旧章可率者乎？其曰“马援以椒房之戚不与”者，史臣欲隐其意，而彰明帝内不私亲之贤也。

汪北海评：宣帝不肯纯任德政，欲以霸、王道杂之，其图功臣于麟阁，使一艺一能之士，皆得以先十九年不屈之苏武，此其杂用霸道外也。明帝神明其法而用之，使马援不与云台，后人思其意而不得，皆以为为椒房之故，孰知孝明之于孝宣，固青出于蓝而特胜于蓝者哉！向非笠翁慧眼觑破，几被孝明霸道瞒过千古！

论高帝入咸阳除秦苛法、 光武入河北除莽苛政

笠翁曰：高祖除秦苛法，光武除莽苛政，此皆无甚奇特，即文章家翻案法耳。此法是人皆知，是人能行；但行之不得其法，非失之矫强，即失之支离。惟高祖、光武善作翻案文字，去此二病，故能见赏于人耳。然则翻案之法谓何？曰：其言不繁，止得二字，谓之“入情”而已。文字入情，即翻尽古来成案，天下不以为非，而且以为是。取天下者亦用此法，即革尽从前旧制，天下不见其可惊，而但见其可喜。

秦取天下于六国，莽取天下于孺子婴，皆值政衰法弛之际，故皆以苛取之，此亦翻案法也。高祖、光武又从而翻之，同一轍耳。但秦、莽之翻案，反正为奇者也；高祖、光武之翻案，反奇为正者也。反正为奇者，但能取新于一时，久之则觉其可厌；反奇为正者，传之愈久而愈觉其新。观于文章家可传不可传之别，则知

取天下之道可久不可久之分矣。

张仲谋评：笠翁此书虽曰“论古”，然实为开发天下之心，欲人尽戛戛乎陈言之务去也。又虑天下人不知，犹谓其止于论古，故每于论政谈兵处，即以行文之妙诀参之，其度世之心亦良苦矣！然此等议论，又非过耳之言，乃其生平最得力处。海内文人读其书者多矣，试问有一字一句，不毁灭前人之篱壁，而另辟一堂奥者乎？以其所信者告人，而不恃其所能者骄人，则笠翁之肝肠、意气，皆于是乎见矣，又何必饮其醇醪，而始知能令人自醉哉！

论高帝已平天下犹未正尊位、光武未能削平海内遽正尊位之故

项羽既灭，天下混一。诸侯王皆上疏，请汉王为皇帝，王始即位于汜水之阳。

刘秀还至中山，诸将请上尊号，不许。行至南平棘，诸将固请之，仍不许。会儒生强华自关中奉《赤伏符》来，群臣因复奏请，王乃从之，即位于鄴南。

先儒断曰：汉王已平天下而不正尊位，光武未平海内而遽正尊位者，何哉？创业之与中兴，固自不同。更始既已败亡，四方窃名号者非一，中外皇皇，莫知所向，苟不早正位号以系人心，则天下之望孤矣。故书萧王即皇帝位，改元大赦者，深幸之也。

笠翁曰：汉高之天下取之于他人，其正尊位也，不得不迟。何也？以其起兵之始，曾为义帝发丧，此段因缘，不便遽为抹煞。况项羽一日未死，犹欲借君臣大义，激发天下一日之人心。故必俟其死，而又待诸侯力请，然后从之，此断断不易之理也。宋太祖为众心久属，犹必待黄袍加身，况与中原逐鹿者乎？光武之天下

取其所固有，其正尊位也，不得不速。何也？更始既败，中原无主，凡窃天潢之义者，皆得起而争之。卜者王郎尚能盗取名号，况介于真伪之间乎？名位一正，而天下之人心死矣，宁可一日缓乎哉？此即先儒所谓“创业、中兴，固自不同”之旨。因其词意未尽，故从而畅言之。

论贾、寇拟廉、蔺

贾复部将杀人，颍川太守寇恂捕戮之。复以为耻，过颍川，谓左右曰：“今见恂，必手剑之！”恂知之曰：“蔺相如不畏秦王，而屈于廉颇者，为国也！”乃敕属县盛供具，一人兼两人之饌。恂出迎于道，称疾而还，复勒兵欲追之，而吏士皆醉，遂去。恂以状闻，帝乃征恂至。时复先在坐，欲起相避，帝曰：“天下未定，两虎安得私斗？朕为分之！”于是并坐极欢，遂共车而出。

笠翁曰：寇恂所处之境，较相如更难。以相如可避，而寇恂不可避也。出迎于道，称疾而还，于此大见其作用！

汪北海评：寇之所处固难于蔺，然幸有蔺作于前，则亦学蔺焉足矣。厥后来公以蒸羊一只迎丁谓于境上，纵家人饮博，不令出户，是又善学颍川处。寇氏家法，固工于学步前人哉！

论董宣执法，史氏列之酷吏

宣为洛阳令，湖阳公主苍头杀人，宣格杀之。主诉帝，帝怒欲箠杀之，宣请自死，遂触楹流血。使宣叩头谢主，宣不从；强

使顿，宣两手据地，终不肯俯。主曰：“文叔为白衣时，藏亡匿死，吏不敢至门；今为天下，威不能行一令乎！”帝笑曰：“天子不与白衣同。”因敕“强项令出”，赐钱三十万。

范史酷吏传，以宣为首。

笠翁曰：执法强项之人，而可名为酷吏，则凡枉法徇情而为绕指柔者，皆可名为循吏矣。执法强项之人，不能取誉于当世，犹望盖棺之后，或有定评，不意文人之笔，亦多舛谬，人亦何所望而为执法强项之事哉！丁、袁二子辨之，可谓能持公道者矣！

余澹心评：范曄作史，颠倒是非。以董宣忠鲠之臣，而传之于酷吏；以蔡琰失身之妇，而传之于列女。宜其失心恍惚，从叛以死也。去白日之昭昭，从长夜之悠悠，嗟何及哉！

论马援遗书诫兄子

马援在交趾，遗书诫兄子严敦曰：“吾欲汝曹闻人过失，如闻父母之名，耳可得闻，口不得言也。龙伯高敦厚周慎，口无择言，谦约节俭，廉公有威。吾爱之，重之，愿汝曹效之。杜季良豪侠好义，忧人之忧，乐人之乐，父丧致客，数郡毕至。吾爱之，重之，不愿汝曹效也。效伯高不得，犹为谨敕之士，所谓‘刻鹄不成尚类鹜’；效季良不得，陷为轻薄子，所谓‘画虎不成反类狗’也！”

郭氏论略曰：马援遗书诫兄子，善矣。夫龙伯高何如人，欲其子效之？至于杜季良，则非其为轻薄子，而又比之畜类，是已先讥议人矣。所藏乎身不恕，而能喻诸人者，有是理哉？致松怨恨而不保令终，皆自取之也。

笠翁曰：“刻鹄不成尚类鹜”、“画虎不成反类狗”，成语也；凡引成语，不能字字切贴，取其意而已矣。伏波诫子之意，所虑在刻鹄、画虎之不成，不在类鹜、类狗之必肖，其意盖曰“季良非不可学，但恐学之不得，则陷为轻薄”云尔，岂有意以畜类方之哉？未见以畜类方人，而肯以豪侠尚义、忧人之忧、乐人之乐诸善行誉之于前者。郭氏之论太拘，所谓以词害志，然“藏身不恕”一语，则为马援定评。读此书及此论者，皆宜舍短取长，于马援则取“闻人过失，如闻父母之名”，于郭氏则取“藏身不恕，安能喻人”四语而已矣。

余澹心评：郭氏之论，徒供喷饭，比之畜类，抑何陋迂。古云圣贤以龙、以马、以凤、以麟，皆比之畜类者耶？然则孟子之比孔子，亦为“藏身不恕，不能喻人”者耶？伏波英雄跌宕，万里贻书，致使世祖见之，重伯高而屈季良，其为声价何等！而腐儒刻画，良可悲夫！

论丁鸿、刘恺、邓彪三人之让

明帝时，陵阳侯丁綝卒，子鸿当袭封，上书称病，让其国于弟盛。上不报，乃逃去。友人鲍骏遇鸿于东海，以义责之，鸿悟，乃还。以鸿为侍中。

和帝时，居巢侯刘般薨，子恺当嗣，称父遗意，让其弟宪。逃十馀年，有司奏请绝其国。后贾逵上书，乃征恺为郎，以弟袭爵。

邓彪亦当嗣父爵，乃让弟逃去，不返。

笠翁曰：三子之让，乃风教使然，所谓矫枉而过正者也。一代有一代之风教，风教所在，民无贤智、愚不肖皆趋焉。贤智趋

而过之，与愚不肖之趋而不及，等也。东汉尚节义，故有三子者出而让国，犹之列国尚侠，则有荆轲、聂政诸人出而杀身；晋尚风流，则有刘伶、阮籍诸人出而废礼。皆为风教所渐，不知其然而然者也。虽然，礼与其争也宁让；俗与其靡也宁矫。论者于此皆施责备之词，余独曰：东汉政教之衰，犹足以敌后世民风之盛耳。

范文白评：“东汉政教之衰，犹足以敌后世民风之盛”，此虽笠翁有激之言，然亦砺世磨钝之妙语也。若人人以固让为矫，则篡夺者反居胜地，操、莽诸人，皆得侈口以非伯夷、叔齐矣。使有位者尽如丁鸿、刘恺、邓彪其人，则后世岂复有篡位弑君之事哉！

论黄宪比颜子

宪世贫贱，父为牛医。汝南太守王龚辟之，不屈。荀淑遇之于逆旅，竦然异之，与语，移日不能去。既而至袁闾所，问曰：“子国有颜子，知之乎？”闾曰：“见吾叔度耶？”是时同郡戴良，才高倨傲，见宪未尝不正容，及归，罔然若有失，其母问曰：“汝复从牛医儿来耶？”陈蕃及周举尝相谓曰：“时月之间不见黄生，则鄙吝之心复萌矣。”郭泰曰：“叔度汪汪若千顷陂，澄之不清，淆之不浊。宪初举孝廉，又辟公府，友从劝其仕，暂到京师，即还。

朱晦庵曰：宪之言论风旨虽不尽见，然其气象温厚，圭角浑然，见者有感于心，亦其最高者乎。使得圣人作成之，当居颜氏之科矣。

笠翁曰：黄宪比颜子之言，吾终不敢深信。盖誉人必过其实，乃东汉之气习也。出口皆然，不独有私于黄宪。“关西孔子杨伯

起”，伯起可方孔子，则宪比颜回，又何足怪乎？若谓千古上下有两颜回，吾或信之；谓千古上下有两孔子，吾必不之信也。然则所谓比颜子者，亦得其似而已矣。

余澹心评：余于古人中，最不服者黄叔度，最不取者阮嗣宗，最可恨者王茂弘，最可耻者张德远。噫，此可为知者道，难与俗人言也！

澹心又云：《天禄阁外史》，乃崑山人伪作，无识者刻入《秘书九种》，可笑也。若叔度有如此著述，不更辱颜子乎！

王望如评：顾、厨、俊、及，实繁有才，而独倾心于叔度。止此“汪汪千顷”四字，便俨然有陋巷规模。虽曰过情之誉，然正未免习俗移人耳。

论左雄限年之法

顺帝时，左雄上言：孔子曰“四十不惑”，《礼》称“四十强仕”，请自今孝廉年不满四十不得察举，若有茂才异行如颜渊、子奇，自可不拘年齿。帝从之。广陵所举孝廉徐淑，年未四十，台郎诘之，对曰：“诏书云：有如颜渊、子奇，不拘年齿。故本郡以臣应选。”郎不能屈。左雄诘之曰：“昔颜回闻一知十，孝廉闻一知几耶？”淑无以对。乃罢却之。郡守坐免。

笠翁曰：东汉诸臣上书言事者众矣，其所指陈者，虽未必尽当，然皆合于理而顺于情，未有若左雄限年之说，为叛理拂情之甚者也。其引孔子“四十不惑”为言，夫“四十而不惑”，盖指造詣而言，未尝曰不惑之年，始可出而为仕也。如曰不惑之年始可出而为仕，则何不更老其才，俟至知命、耳顺及从心所欲之时，然后举而用之，更为练达而无弊乎？至引戴记之言曰“四十而强仕”，是矣！夫四十而强仕，亦言其大概，未尝曰四十以前不许服

官，直待是年大庆之后，始可应乡国之荐而赴弓旌之招也。若是，则左雄所言之事，又当不止此矣。《礼》曰：二十而弱冠，三十曰壮，有室。何不并限其年，令天下冠者必以二十，娶者必以三十；有十九而冠、二十九而娶者，皆坐以法，一概齐之以《礼》之为愈乎？舍冠、娶之年不限，而独限以仕，果何谓乎？其诘徐淑之言曰：“颜回闻一知十，孝廉闻一知几？”此问更属不经。惜孝廉无术，不能折之；使我为孝廉，则将应之曰：“未审颜回所闻之一，何者为一？所知之十，何者为十？请公一一举之，即当以闻一知几者对！”若是，则雄将何辞以应？而惜其不出此也！以如此荒谬之谈而见之封事，已足奇矣；顺帝不加斥逐而复可其奏，使天下奉为章程，岂非古今一怪事哉！噫，东汉之政令，自章、和而后，吾不欲观之矣！

余澹心评：此千古痛快之论，忽被笠翁拈出，真如“石破天惊逗秋雨”也。左雄“限年”与崔亮“资格”，均误杀天下英雄耳！

王邻哉评：执簿呼名，一吏事耳。莱公却而不用，所以识高千古。笠翁“何者为一，何者为十”一诘，快绝千古！余熟筹半晌，欲代雄作一转语，终不可得。使笠翁铨序百寮堂吏簿，当亦麾去不复顾矣。杂引鲁论、戴经佐其辩驳，尤堪与昌黎《讳辩》等文比肩。

论汉立五经于太学门外

灵帝时，诏诸儒正五经文字，命议郎蔡邕为古文、篆、隶三体书之，刻石立于太学门外。

笠翁曰：灵帝诏立五经，将以重儒术也；而太学门外，岂立五经之地乎？位置圣贤而使之不得其所，是尊之适以卑之耳！宣

帝讲五经于石渠阁，章帝讲五经于白虎观。夫歌于斯，读于斯，则必聚国典于斯，未闻麾而出之大门之外也。灵帝此举，其有意为之耶？抑儒术之将衰，斯文之欲丧，莫之为而为之者耶？未几钩党之令遍行，使经明行修之士，皆高飞远举以避祸，太学门内几无一人，岂非麾而出之之后验欤？甚矣，汉庭无人，而不能争之于始也！

王望如评：表章六经，出于雄才大略之孝武。江都天人，不可不谓之原本六经也。石渠之议，孝宣未免偏好。望之刚直，学不及仲舒，然亦不得谓之不尊经也。若灵帝之立石，经之者为蔡邕，邕读经而不能卫经，自当有褻道侮常之报，王司徒杀之座上、诚不为过。纵使刻之堂上，亦为圣经罪人，况麾之门以外乎！

论管宁、华歆优劣

管宁少时，与华歆为友。尝共锄菜，见地有金，宁挥锄不顾，歆捉而掷之。人以是知其优劣。邴原与宁俱以操尚称，公孙度虚馆侯之。宁既见度，乃庐于山谷，避难者渐来从之，旬月而成邑。宁每见度，语惟经典，不及世事。还山专讲诗书、习俎豆，非学者无见。由是度安其贤，民化其德。

笠翁曰：东汉诸子，动以圣贤许人。其所许者，未必皆当；其所未尝许者，反有圣贤之流亚厕于其间。如管宁生平，无一可讥之事：其抱道安贫，庐于山谷，有簞瓢陋巷之风，可方颜子；其锄地见金，挥锄不顾，与系马千驷弗视者何异？可方伊尹；其避地山居，从者成邑，及讲诗书、习俎豆，非学者不见，大有继往开来之意，虽未可追踪孔子，然亦能继武孟轲；至其避曹操居辽，

归田之后，不食魏朝一粟，则居然一伯夷、叔齐矣。而考之当时，从未有一希圣希贤之美号，抑何贵似而贱真欤？总由东汉之陋习，全在互相标榜，彼誉此为贤，则此誉彼为圣，不过以圣贤之美号，为赠答之虚词，原无真实许可之心也。管宁之不得美号，想以生平未尝誉人，已无木李之投，故人亦无琼玖之报耶？予请从千载后定其月旦曰：管宁虽未可遽拟圣贤，然其人实在“关西孔子”之前，“汝南颜子”之右。

笠翁又曰：管宁挥锄不顾，华歆捉而掷之，两人之优劣已见，无烦赘一词矣。但歆之一捉、一掷，二事中亦有优劣，不可不为辨之。人皆喜其掷而恶其捉，谓捉有覬觐之心，而掷无贪得之实也。予独曰不然，捉者天真之自露，掷者伪念之强生。夫以锄地而得金，虽曰取非其有，然犹愈于人御人而得之；使歆捉而不掷，贪则贪矣，犹不失为鸢飞鱼跃之人。既捉而复掷之，是贪而继之以诈矣。使无管宁相对，则既捉矣，宁肯复掷之哉？其掷之者，因管宁之不顾而然也。既以捉昧其心，复以掷欺其友，较之于贪夫，更加一等矣，岂可与挥锄不顾者同年而较其优劣哉！

王望如评：李斯与韩非同学，而非竟死于斯；孙臆与庞涓同学，而臆先刖于涓；苏秦与张仪同学，而仪则堕于秦。先后异，多遭毒手。管先生看透华歆举动，避之惟恐不远。辽东一帽，风净雪明，不独避操也。

论茅容、孟敏优劣

茅容耕于野，与等辈避雨树下，众皆夷踞相对，容独危坐愈恭。郭林宗见而异之，遂与共言。容留林宗宿。旦日，杀鸡为饌，林宗以为为己设，既而以供其母，自以草蔬与客同饭。林宗起拜之，曰：“林宗犹减三牲之具以供宾客，而卿如此，乃我友也！”因

劝令学，卒以成德。

孟敏荷甑堕地，不顾去。林宗见而问其意，对曰：“甑已破矣，视之何益！”林宗以此异之。劝令游学，十年知名，三公俱辟，并不屈。

笠翁曰：人谓二事皆贤，莫能举其优劣，如必欲轩輊之，其惟后孟敏而先茅容乎？以孟敏所能者小节，而茅容所重者大伦也。予曰不然，茅容杀鸡供母，而以草蔬待客，孝则孝矣，未免妨母之贤。彼章挫荐之名而以母德高千古者，独非人子乎？曾参养曾皙，必有酒肉，将彻，必请所与，未闻以酒肉养父，而以草蔬待所与之人也。此必有意为之，以起林宗之惊羨耳。若孟敏之不顾堕甑，则全出天机。以此观人，始不失为人伦之鉴。

笠翁又曰：凡天下过情之事，皆有意为之者也；凡不及于情之事，皆率意为之者也。持此法以论人，虽未必尽当，然亦思过半矣。

沈因伯评：即曰为母杀鸡，亦不妨减半待客，何至予以草蔬？陶母挫荐秣马，茅母以草蔬待客，是既以秣马者食人，又以食人者自奉矣。其事原太不情，如何怪得后人讥刺。

论曹操自陈功伐及让还三县

操下令曰：“孤始于谯东筑精舍，欲待天下清乃出仕耳。然不得如意，征为典军校尉，遂欲为国家讨贼立功，使题墓道曰：‘汉故征西将军曹侯之墓’，此其志也。后领兖州，破黄巾，沮袁术，摧袁绍，定刘表，遂平天下。身为宰相，人臣之中贵已极。设使国家无孤，不知几人称帝、几人称王。或者人见孤强盛，恐妄相

忖度，言有不逊之志，每用耿耿，故为诸君陈道此言，皆肝膈之要见。然封兼四县，何德堪之，今让还三县，且以损谤，少减孤之责也。”

故致堂谓曹公此令，有是有非。墓道之题，乃其本意；厥后功名显著，旁无轧己者，遂萌篡夺之心，亦势固然也。

钟伯敬谓此令娓娓千数百言，字字不情，却妙在详至恳款，若出至诚，使听者心虽不以为然，而无以夺之。

笠翁曰：曹瞒下此令，既非邀功，亦非示让，乃导引群下劝进之词也。后世不察，交相称许，胡致堂谓其“有是有非”，钟伯敬誉以“详至恳款，若出至诚”，噫，谬矣！岂曹瞒之巧，既已瞒过当世，又能瞒过后世耶？夫既自陈功伐矣，又曰“封兼四县”，何德堪之”，是明言功高赏薄，非四县可酬，而当酬之以天下也；既题墓道曰“征西将军曹侯之墓”矣，则现为汉臣，又何必系之以“汉”？系以“汉”者，是明言本欲为汉，而今势有不能也；且言“天下非孤，不知几人称帝、几人称王”，又是明言帝王之号，我若不称，他人必有称之者，与其让他人，不若自称之为得也。句句说出本心，又句句留着下段，此即唐人所谓歇后语也。夫何“有是有非”、“详至恳款”之有哉！未几董昭即言于操曰：“自古人臣匡世，未有今日之功；有今日之功，未有久处人臣之势者也。”因建议进爵国公，加九锡，为禅位之阶，皆斯言启之也。噫，瞒至今日而始为人觉，即欲不谓之善瞒不可得矣！

杜于皇评：昔人论曹操临死分香卖履，恋恋儿女子，为死见真性，不知其大奸正在此。临终遗命，虽妓妾、香履之细，亦娓娓言之，而略不及化家为国之一字，欲使其子自为之，而犹谓其死见真性，古今人又被他瞒过矣！

论刘备取刘璋得失

苏东坡论略曰：刘表之丧，昭烈在荆州，孔明欲袭杀其孤，昭烈不忍。其后刘璋以好逆之，至蜀不数月，扼其吭而夺其国。此其与曹操异者几希。曹、刘之不敌，天下之所共知，言兵不若操之多，言地不若操之广，言战不若操之能，所恃以胜之者，独以区区之忠义，有以激天下之心耳。孔明迁刘璋，已失忠臣义士之望，乃治兵振旅，东向长驱，而欲天下响应，盖亦难矣！

笠翁曰：刘备之取刘璋，虽非圣贤之心，然实英雄之事也。英雄作事，最忌务忠厚之虚名，而受因循之实祸。刘璋以暗弱之资，处豪强之界，其不灭于魏即灭于吴，夫人而知之也。备不急取，是以卧榻之地，虚左待人；吴得之而蜀危，魏得之而蜀灭矣。故决计取之，是弃小忍而成大谋，三分之势，未必不成于此。而东坡责以不仁，是欲遂曹操混一之心，而成孙权兼并之志也。使刘备不取而蜀以亡，则后世尚论之人，又必群起而罪以不智，然则为古人者，亦甚难矣！吾宁得罪于东坡，不得不为昭烈左袒，盖欲略小过而全大体耳。且非无据而云然。昭烈病笃，谓孔明曰：“君才十倍曹丕，若嗣子可辅辅之，如不才，君可自取。”此昭烈肝膈之言，非诈也。至亲莫如子，至卑莫如臣，犹以不得于子者属于其臣，则取刘璋之出于不得已，不待辩而知之矣。奈何不详始末，而遽定其是非哉！噫，以东坡之才与识，犹有偏见若此，则我辈观人之疏略，又岂止一言一事而已哉！

西 晋 纪

论晋武帝之得天下

武帝炎，司马昭之长子，懿之孙也。魏文帝病笃，懿受顾命。初，武帝察懿有狼顾相，又梦三马同食一槽，因谓太子丕曰：“司马懿非人臣也，必预汝家事。”太子素与懿善，故得免。及懿卒，昭自为晋公，加九锡，后弑帝髦而立璜为帝。及灭蜀后，又进爵为王。昭卒，炎继父爵，遂篡魏，国号晋。

李卓吾曰：懿于曹丕至善也，曹叡之爱懿亦至。懿盖两朝顾命臣，非孟德父子之于汉比也。既受其托，杀而夺之，岂其主有刘禅之庸、孙皓之虐者乎？夫庸如刘禅，而蜀之君臣如故也；虐如孙皓，而吴之君臣如故也。必如司马氏父子，则君之视臣如股肱心膂者，反引而纳之萧墙之内也。一介之士，必有密友；令有国者将奚托？不容不以篡弑论矣！

笠翁曰：司马昭父子之篡魏，其悖逆不道，三尺黄口皆知之矣。代者皆谓昭、炎之罪，过于操、丕，予窃以为不然。夫晋之篡魏，非创举也。殷受夏，周受殷，夫有所受之耳。魏得天下于汉，既以臣而弑君矣，能保后代之臣，无一效先王之懿范而躐其芳轨者乎？是昭之弑君，魏武教之；炎之篡位，曹丕教之。然则昭与炎者，非魏之逆臣，乃魏之肖子也。晋、魏之相去，不过四

十餘年，而考其所行之事，无一不合符节。噫，天道虽好还，然不料其神速至此也！吾谓从来得天下者，皆以人得，独司马氏之天下，乃天愤曹氏之悖逆，夺而予之者也。如其不信，请以历数计之：两家之天下，皆以篡弑得，魏仅享国四十餘载，而晋之历数几四倍之。观于国祚修短之不同，即知天心予夺之非谬矣。虽然，国虽未失于他人，而祸患屡生于骨肉，伦杀后而罔杀伦，罔杀伦而颖杀罔，以致中外之人，交乘其弊，篡夺相仍，靡有暇日，又詎非以乱易乱之报欤？

笠翁又曰：有诘予者云：司马氏之历数，较之曹氏，亦不为久。以世祖至孝愍仅五十餘年，而晋祀斩矣。若中宗者，实为小吏牛金之私胤，当时有“牛继马后”之谣，与司马氏何涉？予曰：然，此语见诸载籍，予知之久矣。但不敢以莫须有之情事尚论古人，亦信其可信而阙其可疑者而已矣。中宗之母通于小吏牛金也，当时未必无其事，但中宗之属牛属马，即为之母者，恐亦未能自决，况他人乎？又况后世之人乎？“牛继马后”，谣也，非传国之实事也。若吕不韦以怀娠之妾献秦太子异人，其事之在当年，必有献妾、生子之日月可考，岂若唐尧、汉昭之母以十有四月而生之者哉！以如此可据之事，后人亦仅传疑，称秦氏者，必曰“嬴秦”而不曰“吕秦”，则中葺暧昧之情，不可信以为实也明矣。我辈于庶民之家，尚不敢齿其阴事，况以茫无考据之事，而谤历代帝王乎？虽然，谓秦始皇之姓吕，吾口虽不言，心实信之；谓晋中宗之姓牛，则心口相商，皆不敢信以为是也。古人已死，呼牛呼马，彼不能应，第当予以可据耳！

论羊祜欲伐吴，山涛欲释吴

羊祜进伐吴之计，山涛退而言曰：“自非圣人，外宁必有内忧；

今释吴以为外惧，岂非算乎！”

笠翁曰：古人之言，有后人明知其是，而断断不可从者。如范文子“外宁必有内忧，释楚以为外惧”之类是也。彼曰“自非圣人，外宁必有内忧”，然则尧、舜、禹、汤、文、武以后，宁有几圣人乎？苟执此语，谓敌国断不可灭，则三代以后，不当复有混一之时矣。且无事远引，即以晋之敌国论之。蜀之未灭于晋也，刘禅之为君，亦中人以之资耳，倘幸而混一中原，未必不至于骄奢淫欲；而孔明两表出师，其为灭吴取魏计者，可谓不遗余力，岂孔明未尝读书，不知外宁以后、将有内忧之足虑乎？其必欲为此者，亦曰缓则顾其后，急则顾其先；与其虑后而失之于先，无宁取之于先，而再为善后计耳。羊祜请伐吴，此千古不易之论；山涛之言，未免胶柱鼓瑟，虽有荒淫之后验，亦不幸而偶中耳！

王邻哉评：羊祜亦言平吴之后，当劳圣虑，则山涛未言，祜已先言之矣，涛言岂足信哉！宋太祖云：“卧榻之侧，岂容他人酣睡。”大一统之君也！

论苏颖滨谓羊祜巧于策吴、拙于谋晋

羊祜守襄阳，知吴不能久，陈可取之计，武帝纳之。祜又进王濬、杜预，以成灭吴之功，后世皆称其美。

苏颖滨谓羊祜巧于策吴，拙于谋晋。以吴亡之后，武帝荒于女色，蔽于庸子，疏贤臣，近小人，去武备，崇藩国，所以兆亡国之祸；不若释吴以为外惧，则武帝犹得为贤君也。

笠翁曰：“外宁必有内忧”一语，自范文子说过之后，无人不能道之，故山巨源一闻伐吴，即引此语为证。是此题、此论，晋

人已发之于前矣，何烦颖滨再道乎？所贵乎作论者，以前人未发而我发之也。巨源此论，已是效颦于文子，奈何复有颖滨者，起而效颦于巨源乎！况“巧于取齐、拙于取楚”又属前人之馀唾乎？若在老苏、大苏，断不出此。吾以是知三苏文字，不无强弱、优劣之分也。

陆梯霞评：言人所尝言，不肯言人所未言，是文章把稳处。恐后世司选政者，未必皆如笠翁其人也。试观坊刻，一集中有几纸奇文，能发前人所未发者哉？不若寄人篱下，得则归美于己，失则有人代任其咎。如欲言苏颖滨非是者，必先咎山巨源，欲言山巨源非是者，又必先咎范文子。然范文子之坐位已定，孰敢黜之使下哉？此近代文人之秘诀，而笠翁必欲反之，难乎免于雌黄之口矣！

论薛莹、吾彦论吴亡

孙皓降，帝问薛莹曰：“皓何以亡？”对曰：“皓昵近小人，刑罚放滥，大臣诸将，人不自保。此其所以亡也。”他日又问吾彦，对曰：“吴王英俊，宰辅贤明。”帝笑曰：“若是，何故亡？”彦曰：“天禄永终，历数有属，故为陛下禽耳。”帝善之。

笠翁曰：二臣之言，判若苍素，皆有深意存焉，非故相抵牾也。薛莹意在规讽。因武帝有自满之意，故以昵小人、滥刑罚、危群臣之言对，谓孙皓以骄肆而亡，不可不鉴其失也。吾彦意在贬损。因武帝有夸功之意，故以“天禄永终，历终有属”之言对，谓吴乃天亡之，非我国得而亡之也。二者皆药石之言，而薛莹之药较吾彦之药，尤为对症。惟怪其少荒淫一语，为羊车作前辙耳！

论刘毅言中正之弊

初，陈群以吏部不能审核天下士，故令郡国各置中正，州置大中正，皆取本土之人任。朝廷官，德充才盛者为之，使铨次等级以为九品，吏部凭之以补授百官。行之浸久，中正或非其人，奸蔽日滋。刘毅上疏，言其损政之道有八，宜革去之，更立一代之美制。帝虽善其言，而不能改。

笠翁曰：九品官人之志，足以奖砺贤才，区别任使。酌而行之，不为无补于世。但令分设于郡国，则政出多门，无所统摄，是铨部之权轻，而中正之权反重矣，岂天官一职，遂为赘瘤乎哉？至用本地之人任本地之事，则又为众弊所丛，万无是理。夫天下有几祁奚，而能为内不避亲、外不避怨之事乎？无论此法当罢于终，且并不当行之于始。晋、魏之疵政多端，而陈群中正之法，又其最著者也。

论顾荣、卫玠优劣

《少微编》顾荣、卫玠并书“卒”，史纲但书前太子洗马卫玠卒，而不书顾荣，何耶？以荣之反覆不臣也。始事吴，继事晋，复事赵王伦，又事齐王冏，又事长沙王乂，又事成都王颖，改更君父。有如传驿。后虽辅元帝有功，然不补罪矣。玠少年远识，劝兄致身，扶母避乱，早绝王敦之交，况所谓“不及可以情恕，非意可以理遣”，粹乎圣贤之遗矣。史纲一笔一削，岂无为哉？

卫风神秀异，韶髫时，乘白羊车行市上，人争羡曰：“谁家璧

人!”后从豫章至白下，观者如堵，玠有羸疾，遂死。时谓“看杀卫玠”。

钟伯敬曰：人有不及，可以情恕；非意相干，可以理遣。此玠之养也。知王敦之不忠，此玠之识也。玠之得为名士以此。若本传前后所载，不过一美少年作态者耳！

笠翁曰：观钟伯敬之论卫玠，可谓善读《晋书》者矣！然予复有边见，谓叔宝之可敬处，不在《晋书》字句之中，而在《晋书》字句之外。何也？男子而有德，固足传矣，美男子而有德，其贤于人者，又加一等，以其有海淫之具也。陈平美如冠玉，而盗嫂、受金之事，终为时论所鄙。潘岳虽无淫行，而本传载之曰：“道遇妇人，皆连手萦绕，投之以果，遂满载而归。”夫男女授受不亲，礼也。萦之以手而不辞，投之以果而辄受，则其德行可知矣。叔宝风神秀异，世呼为“璧人”，甚至为人看杀，则当年姿貌，无出其右可知，而本传及别传所载，无一可非、可议之事。噫，以崇尚风流之晋代，而生此温然如玉之佳人，绝无他事可纪，岂非末俗一圣贤哉！况能情恕不及，理遣非意，善绝匪交，是美其外而复美其中矣，安得不见重于士类，而以特笔予之哉？史纲书“卒”，正是“看杀卫玠”之年也。或者前此之年，犹难保其必无失德，而直待盖棺之后，予以定论，未可知耳。

论殷浩拟管、葛

殷浩累辞征辟，时人拟之管、葛。谢尚、王濛常伺其出处，以卜江左兴亡，相与省之，知浩有确然之志，相谓曰：“深源不起，如苍生何！”简文辅政，征为刺史，久之乃出。命平中原，兵败，桓温疏其罪，废为庶人。徙东阳，但终日书空，作“咄咄怪事”四

字。后温将以为尚书令，遗书告之，欣然许焉。将答书，虚有谬误，开闭者数十，竟达空函，大忤温意，遂绝。

笠翁曰：予读《晋书》，见殷浩终日书空作“咄咄怪事”四字，殊为不解。迨观其答桓温书，开闭数十，竟达空函，因扑案狂笑曰：“此即书空之奇验也！”开闭数十，竟达空函，所谓求全得毁，诎非“咄咄怪事”乎？凡人举动异常而令人不解为何故者，皆将来休咎之兆也。噫，以斯人也，而拟之管、葛，誉殷浩者至矣，其如管、葛何哉！

笠翁又曰：殷浩之达空函，非止为咄咄书空之验，亦为其父洪乔为人致书而不达、浮沉于江之显报也。洪乔名羨，为豫章太守，都下人士因其致书者百馀函，行次石头，皆投之水中曰：“沉者自沉，浮者自浮，洪乔不为致书邮。”后人论此事，尽以孤高介立许之，李子独曰：若是，则受人寄托而有不终其事者，皆可谓孤高介立之士矣。使洪乔而果为孤高介立之士，则当其授书之日，何不正色拒之，乃既受其托，而复浮沉于江，是不信、不忠、不义而且兼之以不情矣。奈何不加贬斥，而反以“孤高介立”许之哉？为之后者，不须假手他人而自解浮沉其书牍，则天之报施此辈，亦何其巧而且畅哉！予往时游戏笔墨，尝代晋人作书以让之，附载于左，以资观者一噱。

李仁熟曰：洪乔投函，报乃在浩，不于其身，于其子孙，可畏哉！往时读书，作小事看过，笠翁点出，快绝千古。代让一书令人汗下，细行不可苟，真足为戒。

戏为晋人让殷羨书

某、某、某同顿首洪乔足下：遥谗洪乔恩威所被，吏民交格。古今以宦名豫章者，仲举、子鱼，得殷公而三。夙承缟带，与有荣问。独忆洪乔拜命出都时，仆等曾以赫蹄若干幅仰附行李，展问故人。盖交深形忘，不觉鄙事为褻。窃计洪乔信友，有勿受，受则分致久矣。今迟之岁月，嗣音杳然，深讶故人简倨，尽默然不应。始而怪，既而疑，疑而更讯，始知洪乔耻作致书邮，曩次石头，悉浮沉于江矣。仆辈始喟然曰：“贤者之不可测，遂如此乎！”仆辈自省亦甚暗于物情矣，洪乔何人，二千石何官，而鱼雁使之耶？虽然，古之君子然诺自慎，与其负人于末，无宁拒人于初。使洪乔当授书之日，严辞以谢曰：“某奉天子命，往厘是方，动止举措咸系观瞻，而猥与人关通笔札、代致寒暄，非所以肃官箴、示民听也。不敢奉教！”则仆等方顿首行旌，谢过不暇，敢复强乎？乃蒙大雅并赐鉴录，是徐生之剑已许之于心，何於陵之肉乃哇之门外，毋乃衡之本末，自刺谬乎？幸而所以为托者，只尺一书耳，使仆等不幸一日以妻子累洪乔，岂亦曰“泣者自泣，呼者自呼，洪乔岂汝厮养奴”乎？且洪乔公辅之器，不应外补，然既拜州命，即当俯视州事，又岂得曰“民者自民，士者自士，洪乔岂为州从事”乎？吾知洪乔必不出此，特借细事明不屑耳。然君子一言一动，民胥则效，兹洪乔投诸江，知非诡词也，仆虞后世为人致书而失之、或且有隐匿、假借一切鄙细之行，皆托石头城故事以自解，洪乔不几作千古叵信之俑乎？匿怨而友，左丘所耻，敢不辞慙直，以白下执事。然君子所为，众人不识，在洪乔必自有说，其明教解惑，幸甚！

东 晋 纪

论祁奚举午、谢安举玄、狄仁杰举光嗣

春秋时，晋中军尉祁奚请老，晋侯问嗣焉。祁奚举其子午以自代。

晋武帝时，诏求良将，谢安举兄子玄以应。郗超曰：“安能违众举亲，玄实不负所举。”

唐中宗时，太后命宰相各举尚书一人，仁杰举其子光嗣。已而称职，太后喜曰：“卿足继祁奚矣！”

笠翁曰：祁奚之举午、谢安之举玄、狄仁杰之举光嗣，其公明果断，不待辩论而知之矣。后世论人者，非美奚、安、仁杰之能违众举亲，即赞午、玄、光嗣之能不负所举，总不出郗超二语之范围。独鄙见不然，以为三事之所难，不在臣而在君，不在能举与不负所举，而在其君之信任不疑，卒能成其所举。夫千古上下，为父兄而知奚、安、仁杰之明，为子侄而如午、玄、光嗣之贤者，岂少其人哉？为父兄者，孰不欲成子侄之功名？为子侄者，孰不欲成父兄之心志？所虑世不我与，而有君父疑之于前，同列议之于后，言出口而谤随之，徒足以僨国家之事耳。三君子举亲之日，岂遂盈廷诺诺，绝无非议之词哉？乃人主信而任之，不为众口所惑，此人情之最难，较不避亲与不负荐者，奚啻十倍！故

凡臣子尽忠而能成其功业者，其美不当尽归于臣，而君父信任之力居多也。

论温峤绝裾

晋室倾覆，琅琊王初镇江左，刘琨遣温峤奉表诣建康劝进，其母崔氏固止之，峤绝裾而去。既至，屡求返命，朝廷不许。会琨死，除散骑侍郎。峤闻母亡，阻乱不得奔丧，固让不拜，苦请北归。诏曰：“今桀逆未梟，诸军奉迎梓宫，犹未得进，峤可以私难而不从王命耶？”峤不得已，受拜。

笠翁曰：晋室复兴，江左诸臣之力也。然王导值王敦之乱，陶侃颇萌异心，思折翼之梦而止，是皆不得为纯臣；求其乃心王室，无一毫疑贰之见，又能力竖鸿猷，使国祚危而复安者，唯温峤一人而已，郗鉴次之，桓彝又次之。温峤之遇主，始于奉表劝进。使当母氏固止之时，拘守常人之节，不能绝裾而往，孝则孝矣，其如宗社之覆亡、生民之涂炭何！不辞背母之名，较致匡君之实，其明可及，其断不可及也。显亲扬名，较之承欢膝下，岂无间乎？然予窃有疑议，不能释然于中者，以峤诣阙之后，即不能复见其母，是绝裾之日，即永诀之时，人子之情，孰有抱疚于此者哉！既不能终养于生前，又不获奔丧于死后，则当于干戈稍靖之日，庐墓经时，哭泣致哀，以塞终天之恨，何予读史终篇，绝不见有一语及此？岂有其事而史官未之载欤？抑峤为国忘家，实未尝计念及此也？吾谓凡人于他事可忽，独于君亲大伦，无论至性所在，情不容已，即属故事虚文，亦不可缺，虑后世读史者因其忽而忽之，则忠孝渐沦于非是矣！《春秋》责备贤者，吾不敢以太真功业之盛，辄有恕词。

余澹心评：温太真晋代第一流人物，余每观其待钱凤一段，辄下酒一斗，独绝裾之事，未免启千古之议端。李温陵列于杀母逆贼之条，伤于过刻，得笠翁推见至隐，即太真复生，亦无辞以对。此真关系纲常名教之文，不可作寻常论断观也。

论陶侃综理微密

陶侃都督荆、襄，尝造船，其竹头、木屑，皆令籍而掌之，人咸不解所以。后正会，积雪初晴，厅事前余雪犹湿，乃以木屑布地。及桓温伐蜀，又以侃所贮竹头作钉装船。其综理微密，皆此类也。

笠翁曰：陶侃综理微密，使竹头木屑皆适于用，先儒莫不嘉之，谓凡观人者，恒即小以观其大，睹忽而料其成也。李子独曰：此田舍翁作家之恒情，卖菜佣聚黄叶作蠹之故智，何补于英雄大计，而古今藉藉目为嘉事而艳称之哉！经大费者不惜斗筲，建鸿猷者诿亲箴豆？昔平原露朽财帛，千古不以为非；孟敏不顾堕甑，而郭林宗重其品识。若以侃视之，无论平原之财帛在所必惜，即孟敏之堕甑，破则破矣，焉知不可补缀而用之？何遽暴殄天物之若是哉！噫，士行之器于是乎小矣！他日于苏峻之乱，闻京师失守而无意勤王，虽为温峤所强，乃兵既发而复追还，食有馀而不肯贷，此即由综理微密之意而推之者也。非得峤之恐喝，怵于义旗回指之言，诿能终其伟烈哉？史称其瑰瑶珍异，富于天府，未必不由竹头、木屑积累而成，后世作家翁，皆取法于此。由此观之，侃乃一代之吝人，非千古之杰士也。

李仁熟曰：木屑竹头，自有司事，非将相才也。尽有能干有司，不堪大用。王介甫新法，行之一郡则效，行之天下辄弊，何者？小大之势异也。庞士元非百里才，汲黯淮阳高卧，非矫也，才固然也。笠翁惜士行斗筭，推见后来首鼠于苏峻，快哉，不易之论！

汪北海评：士行藏竹头、木屑，与惜阴、运甕同意，皆刻刻留心世务者。但经世之略，贵持大体，陶士行失之太细，与孔北海失之太疏，其弊一也。有心世务者，当取东坡文举序赞与笠翁此论，兼录一通置座右，亦可当韦弦之佩耳。

论王导不救周顗之难

王敦反，议者劝帝尽诛王氏。司空导帅其从弟及诸宗族二十余人，每旦诣台待罪。周顗将入，导呼之曰：“伯仁，以百口累卿！”顗直入，不顾。既见帝，言导忠诚，申救甚至。帝纳其言，顗喜，饮酒至醉而出。导又呼之，顗不与言，顾左右曰：“今年杀诸贼奴，取金印如斗大，系肘后！”既出，又上表明导无罪，言甚切至。导不之知，甚恨之。帝还导朝服，执手慰谕，命为尚书右仆射。后敦欲诛周顗，问导，导不答，敦遂诛之。他日，导料检中书故事，见顗救己之表，执之，流涕曰：“吾虽不杀伯仁，伯仁由我而死。幽冥之中，负此良友！”

笠翁曰：周顗予王导以生，王导陷周顗以死，以怨报德，千古尽为不平。然尚论者但知罪导之不仁，而不知罪顗之不智，皆一偏之论也。予独谓此事之可恨者，不在导不救顗，而在顗之救导，导与敦，从兄弟也。敦之必反，帝及朝臣皆知之，岂为导者反未之觉，从无一语入告，直至称兵犯顺，朝臣有尽诛王氏之议，始帅族人诣台待罪？既待罪矣，又无甘心骈首之念，乃欲以百口累顗，而作摇尾乞怜之状，是其人一无可取，其罪一无可原，顗

之申救甚至，果何谓耶？若谓其从龙最早，勋业可嘉，吾或信之，乃始则言其忠诚，继则称其无罪；夫兄为叛逆，而不能隐消其患，可谓忠乎？知而不告，可谓诚乎？逆臣之族，法在必诛，又乌得为无罪乎？且中外诸臣，如刘隗、刁协、温峤、陶侃辈，皆力能灭贼，其不欲图之于早者，以导在政府，未免有投鼠之嫌耳。使于此时杀之，则中外人心，一无所忌，奋力杀贼，何逆首之不可竿乎？若虑杀导之后，敦势愈横，则免死可矣，复相之命，可暂停乎？救其死而不阻其相，是明张豎贼之势，暗隳灭贼之心，而以忠良之要领遗贼矣，不颡之杀，将谁杀乎？当时朝议，谓晋室危而后安，系导以大义灭亲之力。试问敦之死也，天亡之乎？人亡之乎？使敦不以疾死，则虽有如导者十辈在朝，亦惟有拱手听命而已，王与马岂特共天下而已哉？故晋祚之复延，幸也，非人力有以致之也。

笠翁又曰：史载周颡杀身一事，可谓千古酒人之诫。盖颡之死，非人杀之，酒杀之也。使于见帝申解之后，出宫遇导，止于呼而不答，亦不失大臣之体，安知非以不救为救、不答为答耶？奇何酒入舌出，以杀贼取印之狂言，致延颈受戮之奇祸，此居官嗜饮之明鉴。然未必不有以致之。予尝谓居官嗜饮，非苍生之福也：酒后折狱，不无失入之虞；酒后行兵，必多误之惨。颡一生使酒，尝于醉后忤旨，帝手诏付廷尉，累日方赦之。自是屡犯酒过，为有司所绳。初在中朝，能饮一石，及过江，虽日醉，每称无对。偶有旧对从北来，颡出酒二石对饮，各大醉，及颡醒，视客，已腐胁而死。迹是观之，则其酒后失检，以人命为戏，当不止此一二事矣。前此为刺史、为将军时，安知不以使酒杀人，而于此时自食其报耶？吾欲天下后世之名公卿，皆以周 杀身之事为戒，而有兵戎、民社之责者，不致以海内苍生为下酒物，则作史之人与论史之人，皆不为无补于世耳。

论桓玄伪旌隐士

桓玄受禅，以前世皆有隐士，耻独无之，求得皇甫希之，使居山林，征为著作郎，又使固辞，然后下诏旌礼，号曰高士。时人谓之“充隐”。

笠翁曰：桓玄此举，虽属千古笑柄，然能于热闹场中，忽然布此冷局，不可谓非砺世磨钝之心也。从来篡位之臣，皆恐人心不属。其于山林隐逸之士，强之使出者则有之，闭之使入者，予实未之见也。盖以晋风偷薄，凡为士类者，只知得禄之为荣，不念失身之可耻。当玄受禅之日，蛇行鼠伏于其庭者，不知凡几。簪笏多而耒耨少，使田野荒而不治，亦盗窃神器者之忧也。于是不得不强设一人以风砺之，玄之心亦良苦矣。彼皇甫希之者，使当时只有著作郎之征，而无山林资用之给，则必为轻舟诣阙之谢朓矣，欲求一长年充隐之士，其可得乎？噫，吾不料晋士之贱，遂至于此！

陈植三评：每读晋人“充隐”之号及吴中高士直是求死不得之语，未尝不喷饭鼓掌而叹昔人讥刺之太刻。及观此论，且不肯予以“充隐”之名，不更刻耶？然实是诛心之论。

南北朝纪

论扬雄、陶潜出处

扬雄历战、平、哀三世不徙官，坐刘棻事下捕，时雄校书天禄阁，闻捕至，从阁投下，几死，后莽见雄《太玄》、《法言》盛称莽功德，又有《剧秦美新》之文，乃免。《纲目》于其没也，书“莽大夫扬雄死。”

陶潜为彭泽令，吏请束带见督邮，潜曰：“吾岂以五斗米折腰！”即解绶归，赋《归去来辞》，著《五柳先生传》。至刘宋移国，累征不起。《纲目》特以“晋处士”书之。

焦弱侯作论，为雄详考出处履历，谓其并无投阁、美新之事。

笠翁曰：“莽大夫”、“晋处士”六字，是二人已有定评，无烦再为蛇足矣。焦弱侯为雄力辩，谓雄未尝仕莽，并无投阁、美新之事。若是，则《纲目》亦非信史，天下竟无可读之书矣。欲使天下之人不信《纲目》而信文人之论断，则恐含冤抱屈者，又不止一莽大夫而已也。不若终屈扬雄，以从《纲目》之误。然君子不以人废言，即有投阁、美新之事，而雄之可取者自在，不能使《太玄》、《法言》二书，与投阁之躯并朽也，取其才而已矣。

笠翁又曰：五柳先生之贤，古今如出一口。从而赞之者，皆是益土壤于泰山，无所增于其高也。但其解绶归田一事，说者皆

云有激而然，予独曰出其素志，五斗折腰之说，不过一时寄托之言耳。若曰果由于此，则其初授彭泽时，即当坚辞不出矣。世岂有不折腰之县令乎？肯折其腰者，不必五斗，即升合亦且甘之，否则悬二千石于前，其傲然不屑如故也。公赋《归去来辞》有云：“云无心而出岫，鸟倦飞而知还。”其初令彭泽也，即为出岫之云；其解绶言归也，即为知还之鸟。鸟之思还，不必为人所驱，人之思归，岂尽因事所激？盖以督邮至县之时，适值归兴方浓之际，其意盖曰：吾早晚言归，不若省此一番磬折！故解绶而去。亦犹张翰思归念切，偶值莼鲈正美之时，假此闲情，遂予初服，非果有莼鲈之癖，而故舍其官以就之也。若使为县令者，尽以五斗折腰为耻，则朝廷之礼法可弃，而从来折节以事上官者，皆为辱人贱行矣。凡读古人之书，论前人之事者，盖当略其迹而原其心，以简编所载，皆古人之糟粕，其心事不可言传，只当以意会耳。

吴梅村评：不特为五柳传神，又为五斗生色。从来颂隐士之高者，必贱衣冠为粪壤，是非善颂隐士者也。欲颂隐士之高，必须艳称冠冕，预为山林隐逸耸起一层地步，使人知作宦之荣如此，而彼不以为荣，则其所尚可知已。笠翁不肯抹煞五斗，正是表扬靖节处，此称功颂德之良法也，操觚家不可不知。

李仁熟曰：笠翁思路如良马见鞭影，又能珠贯九曲，香透一线，起古人而与之语，有此明彻痛快！

论檀道济量沙、孙臆减灶之同异

檀道济伐魏，多捷，以食尽引还。魏人追之，道济夜令唱筹量沙，魏人知其粮给，不敢追。

齐以孙臆伐魏，臆至魏，令军日减灶诱之，庞涓喜曰：“知齐

兵素怯，入吾地三日，亡者过半！”并日追之。蒯伏兵马陵，万弩俱发，涓自刎，太子被执。

笠翁曰：道济之量沙与孙蒯之减灶，虽是一幅衣钵，然中间却有一段过文，不可不知其来历。盖道济之量沙，乃从虞诩增灶得来，虞诩之增灶，则从孙蒯减灶得来，所谓愈出而愈奇者也。行兵之法，与作文同。善作文者，读古文一篇，可化出时文数十篇，而又无摹仿古文之迹；善行兵者，得古人一术，可变出后人千万术，而绝无求肖古人之形。其妙处无他，总在善悟而已。不善悟者，想来想去，只在灶上推求，减之则与孙蒯合掌，增之又与虞诩雷同，欲合其意而并用之，又无半增半减之法，惟有舍古从今，别行其道而已矣。孰知推广其意，灶可变而为沙；神明其用，增减之法又可变而为唱。灶与沙、增减与唱，相去不啻霄壤，而原其发念之初，则皆出于一法，岂非善悟之所致哉！噫，举一隅而不以三隅反者，其人皆不可行兵，而并不可作文者也！

论谢朓、何点、何胤孰优

梁高祖时，征谢朓暨何点、何胤，俱不至。朓逃窜馀年，一旦，轻舟自出诣阙，以为司徒尚书令。梁主幸其宅，宴语尽欢，朓因陈本志，不许。朓素惮烦，不省职事，众颇失望。

笠翁曰：谢朓一出，断不可少。惟其出而失望，始知处士善盗虚声，试之以政，则能事见矣。倘如何点、何胤之终于不出，则所藏之拙，尽变为巧，孰能穷其所蕴哉？虽然，朓之颇失民望，不待不省职事时见之，即其轻舟诣阙，已尽见底里矣！世有伊尹、孔明之徒，肯逃窜馀年而复轻舟诣阙者哉？其始也尽可不逃，其后

也尽可不诣。然则逃之、诣之者为何？曰：逃之者患得也，诣之者患失也。以此观之，不过一患得患失之鄙夫而已矣，乌可以处士目之哉！

余澹心评：处士纯盗虚声，自古而然，樊英、种放、吴与弼之流，皆拙类也。拈出快绝！拙已为齐臣，又诣梁阙，何得以处士目之？其为郡时，以鸡卵赋人，收鸡数千，此又鄙夫所羞为也。

王望如评：古今处士，止有陶潜一人。盖有大志不得大用，故饮酒寄傲，彭泽归田，若幸逢圣明，必著鸿猷照耀天地间。读其《咏史》、《拟古》诸篇，忧时用世，情见乎词，非若长往者流槁木死灰比也。齐、梁间宁复有此！

论梁武帝好生

先儒谓梁武帝不以生类为乐，不以牺牲为祀，不以仙人鸟兽之形为衣，其设心岂诚仁恕？不过信佛氏之说，求将来报福而已。然一有取国之心，至弑二君、杀六贵而不之恤；一有守国之心，作浮山堰以灌寿阳，缘百里内老少皆役，死者相枕，一日溃决，致数十万生灵尽葬鱼腹。是之谓以其所不爱，及其所爱也。

笠翁曰：此古今通病，不独一梁武为然。凡信佛氏之言而戒食牛羊犬豕者，强半残忍为心，刻刻以嚼民为事。是戒食牛羊犬豕者，乃虚其腹以为食人地也。且无论佛氏之言当信与不当信，即使当信，佛氏有宰杀之戒，亦有贪嗔之戒，世人仅守其一，而不守其二，何哉？

施愚山评：若以释氏报应论，梁武一生，事事皆可入无间地狱，“荷荷”

饿死，已是现报，至子孙屠戮，骨肉之祸，千古无两，皆衍一人作孽。佛之待衍如此，是真佛之灵也。后世躬为淫恶，藉佞佛为护身符者，可不鉴诸！笠翁此论，可以抹煞屠纬真矣。

王望如评：佛，西方尧舜也；梁武则尧言而桀行者。爱牺牲而不知驱民为鱼鳖，能舍身而不能断寿阳之一城，受降为利，卖景求和，竭民膏以为浮屠，碎民命以为精卫，贪、嗔、痴毕备，殆畔佛、窃佛而谤佛者，乃为千古斥佛之口实，佛何罪焉？

论夏禹泣罪、梁武泣囚

禹出，见罪人，下车泣曰：“尧舜之人，以尧舜之心为心，今寡人为君，各自为其心，寡人痛之！”

梁武疏简刑法，自公卿大臣，咸不以鞠狱为意，奸吏招权弄法，王侯骄盈不轨。帝又专精佛戒，每断重罪，则终日不怪，或谋逆事觉，亦泣而宥之。

笠翁曰：梁武帝泣囚，非止邀福，盖刻意摹仿古人；又谓古人不足取法，必欲跨而上之，故泣囚不已，遂至于蔑法。不知泣罪之事，仪可偶行于夏禹，沿至商、周之世，则人主虽有泣罪之心，亦含其泪而不敢洒矣。何也？民情日趋于薄，则法度日趋于严，此不得不然之势也。上古画地之风，不可行于中古，岂中古泣罪之事，独可行于末世哉？且禹之泣，非泣罪人也，泣世道人心之日变也。观其言曰“尧舜之人，以尧舜之心为心，寡人为君，各自为其心”，则非泣罪人可知，奈何不解其意而误用之，遂使无罪之人亦恃其姑息而限于不义，是以泣误苍生也。此梁武帝好名之过，后世论人者岂得归罪于佛氏，而令与之分谤乎哉？

周栎园评：梁武行事，只是一谰，徒资后人笑柄。犹可笑者，

嫁女夺女一事，区区急泪，惭愧千古。

汪北海评：夏禹泣罪，所以引其咎于己，若曰：“吾惟不及尧舜，故至此”；梁武泣囚，盖欲邀其福于天，若曰“吾于有罪之人概置不问，则我生平所犯，或彼苍亦可以从末减乎”。近来佞佛者强半出此，偶因笠翁之论而拈出之。

论高欢遗慕容绍宗于其子、

太宗委李世勣 于高宗

渤海王高欢病笃，谓世子澄曰：“侯景飞扬跋扈，非汝所能驾驭也。堪敌侯景者，唯有慕容绍宗，我固不贵之，留以遗汝。”

唐太宗谓太子曰“汝与世勣无恩，恐不能怀服，我故斥之归田，我死，汝亲仕之。”

笠翁曰：树人如树木，欲为子孙植梁栋，必须为祖为父者浇培灌溉于先，使之日繁月盛，渐有根深蒂固之意，而后遗之子孙，子孙始得其用。未闻剪其枝叶而拔其根本，置之雨露不到之地，候子孙收而植之，而可以为梁为栋者也。魏高欢不贵绍宗，以属其子，唐太宗故黜世勣，以貽其后，是与拔木遗子孙者何异？若曰：父薄之而子厚之，彼必尽忠于子，以报知遇之隆。若是，则魏文帝之虑司马懿，谓其有狼顾相，将来必预家事，亦可谓薄之至矣，太子丕素与懿善，不以父训为然，而亲信如故，亦可谓厚之至矣，然则司马懿之尽忠于魏，果何如乎？不特无忠可尽，而且弑之、夺之，其报知遇之隆者又安在乎？幸而绍宗、世勣皆能不宿旧怨，尽力以事后主，倘以不得于父者致憾于其子，几何不为司马懿之续

乎？吾谓两君所行者，皆驾馭英雄之方，非貽厥孙谋之道也。英雄于鞅望之后骤得显荣，必将有以自见，其不至功成名立而不已者，非止为尽忠报国，亦欲自显示其能事耳。故凡待英雄者，将欲进之，必先退之，将欲荣之，必故辱之，此皆以一身行之之事，非曰父退之而子进之、父辱之而子荣之也。高欢之不贵绍宗，太宗之偶黜世勣，此二事者，皆行于垂暮之年，不及再进而用之，故俱以属子，犹之行于一人之身也。如此，则不失为明君。若曰故贱之而故黜之，则其为子孙谋者，不惟太拙，亦太险矣。

李仁熟曰：苏轼闻太后“奇才”一语，伏而哭失声，岂亦有心驾馭，不过暮年不及进用耳。大凡驾馭一术，英主亦多失，而贤君所不言。绍宗不禽侯景，世勣劝立武曌，其为驾馭之术明矣。北山之说，可与笠翁发明。

胡彦远评：若非笠翁发明此意，则后世人君之爱其子者，皆效唐太宗及高欢所为，苟非其人，则爱之适以害之矣。笠翁所言，无一字不从世道人心起见。昔人谓穷愁著书，由是观之，笠翁之穷愁，乃天下后世之福也。

论王通献太平十二策

隋文帝时，王通献太平十二策，弗纳。通归，教授河汾间，累征不起，键户著书，自号文中子。

笠翁曰：王通献策不用，遂以教授终其身，亦可谓隐君子矣。而独以献策一事不理于文人之口，谓其枉己而不能直人，于道可谓两失。噫，苛矣！达则兼善天下，士君子之志也；知其不可而为之，亦古之圣贤不忍薄待天下之心也。春秋列国之君，孰能行孔孟之道？而孔、孟不忍弃之者，以生平所学之道，非君相不能行之也，亦观其抱负何如耳。读其书而想见其人，亦非致君无术

而仅以文词干禄者也。惜隋文之不能用耳！

余澹心评：王通之失，不在献策隋文，而在僭拟孔子。若不隐居教授，则亦仕莽之扬雄耳。以《文中子》、《元经》诸书，即《太玄》、《法言》之类也，皆吾所不取也。若房、杜、李、魏皆门人，则又未可尽信。

李仁熟曰：《文中子》一书文义浅薄，不惟房、杜、李、魏非门人，且年月先后不合，宋儒辨之详矣。予疑此书是唐末无学者赝作，如近代黄宪外史耳。不可执此罪王通也。

唐 纪

论唐太宗周、秦修短之议

唐太宗论周、秦修短，萧瑀对曰：“纣为不道，武王征之；周及六国无罪，始皇灭之。得天下虽同，失人心则异。”上曰：“公知其一，未知其二。周得天下，增修仁义，秦得天下，益尚诈力，此修短之所以殊也；盖取之或可以逆，而守之不可不以顺也。

笠翁曰：太宗之言，较萧瑀之论更进，不特词明义畅，亦可垂训将来。何也？若据萧瑀之言，谓得天下以正者，其祀必长，则后世子孙皆可仗祖宗之庇，善亦久，不善亦久，而修德保邦之事，皆可不必为矣；谓得天下以逆者，其祀必不长，则后世子孙皆咎祖宗之失，善亦难久，不善亦难久，而修德保邦之事，亦尽可不必为矣。乌可以训后世哉？故以“增修仁义”、“益尚诈力”二语，补其言之不逮。亦因太宗有自知之明，知其所以得天下者，未必远过于秦，未可窃比于周，欲以干蛊盖愆之事属之后世子孙，故为此论，然实英主之言也。乃犹有好辨之家责其非是者，谓武王应天顺人，以仁义取之，亦以仁义守之，而太宗谓其取之以逆，岂非失言？噫，谬矣！太宗原谓“周得天下，增修仁义”，“增”之为言，盖加其所固有，非益其所本无；谓取之原以仁义，而复增修之也。何尝谓取其不以仁义？又曰“取之或可以逆”，“或”之

为言，不尽如是之称也；谓取者不尽以逆。而“或以逆”，盖指嬴秦而言，何尝道及周武？认褒为贬而诬直为曲，以哆其雌黄之口，快则快矣，其如古人之抱屈何哉！

顾梁汾曰：伊川数受气于眉山，若正论出以快谈，何至纷纷蜀洛？笠翁直为两家弄宜僚之丸。

论唐太宗以弓矢、建屋喻治道

太宗谓萧瑀曰：“朕少好弓矢，得良弓十数，自谓无以加。近以示弓工，乃曰：‘皆非良材。’朕问其故，工曰：‘木心不直则脉理皆邪，弓虽劲，而发矢不直。’朕始悟向者辨之未精。朕以弓矢定四方，识之犹未能尽，况天下之务，其能遍知乎？”乃命京官五品以上更宿中书内省，数延见，问以民间疾苦及政事得失。又尝指殿屋谓侍臣曰：“治天下如建此屋，营构既成，勿数改移。苟易一椽一瓦，践履摇动，必有所损。若慕奇功，变法度，不恒其德，劳扰实多。”

笠翁曰：三代以后之人君，舍德勿论而专论其才与识，则未有出唐太宗之右者矣。观其论乐，论周、秦修短，论弓矢、建屋，无一不本人情、不合至理、不可垂训将来。盖人主能言治道者，无代不有，然皆本于《诗》、《书》，得之闻见，皆言人所既言者也；若太宗之言，皆《诗》、《书》所不载，闻见所未经，字字从性灵中发出，不但不与世俗雷同，亦且耻与《诗》、《书》附合，真帝王中间出之才也！宋儒因其大节有疵，遂谓所言尽诡于道，无一语一字不非议之。噫，孔子圣人，尚谓言之可听者，不当以人废，而我辈庸儒，未尝具圣人之一体，而观人、论人之手眼，反欲高

出圣人数倍，亦何其太不知量乎！即千人万人道其不是，予终有慕乎是君，而有生不同时之恨也！

又曰：有是君，有是臣。唐太宗之才与识固不可及矣，而魏徵之才识，又足以辅翼之。观其“愿为良臣，勿为忠臣”、“乱民易化，治民难化”、“天下未定，专取其才；天下既定，兼取其德”诸论，皆是开荒辟昧语，无一字经人道过，然俱有至理存焉。后人明知其是而强欲非之，不过依傍圣贤，袭取现成字句，到处攻人之短，凡有意同于圣贤而词别于经史者，即呼为叛道离经，不可取法。殊不知天下之名理无穷，圣贤之论述有限，若定要从小圣贤口中说过，方是名理，须得生几千百个圣贤，将天下万事万物尽皆评论一过，使后世说话者如蒙童背书、梨园演剧，一字不差，始无可议之人矣。然有是理乎哉？吾独曰：魏郑公之言，无一字仿圣贤传，无一语非训诂典谟，与唐太宗所言，皆所谓作而不述者也。君臣道合，相得益彰，真千古一时哉！吾正不能不神往耳！

论魏徵才行之对

太宗谓魏徵曰：“为官择人，不可造次。用一君子，则君子皆至；用一小人，则小人竞进矣。”对曰：“然。天下未定，则专取其才，不考其行；丧乱既平，则非才行兼备不可用也。”范华阳曰：有才无行之小人，无时而可用，退之犹惧其或进，岂可先用而后废，乃取才行兼备之人乎？征之学驳而不纯，故所以辅导其君者，卒不至于三王之治也。

笠翁曰：吴起贪财好色，而文侯用之，卒以破秦；陈平盗嫂受金，而高祖用之，终以兴汉。魏郑公“天下未定，专取其才”之

说，未为失也，而华阳范氏力断其非。然则天下未定，将来尾生、考己其人而用之乎？如欲得尾生、教己其人而用之，则见吴起、陈平其人，必当斥而逐之矣。吾恐我国之不用者，敌国且虚左以俟之人；我国之必用者，敌国且闭关以拒之。以虚左而俟之，敌其闭关以拒之人，胜负之数，可不战而决矣。吾谓范氏之论，或如苏秦之说齐、张仪之说魏，为敌国之君行反间则可，若曰为本国计得失、较兴丧，则吾未见其可也。

王望如评：魏郑公不能从太宗于始，不获事建成以终，虽相业有光，究竟是有才而用不足者，其对世民，确是真话。若信范华阳之论，不惟苏、张其舌者不用，并董、贾其才者亦黜。

论唐太宗殿庭教射

太宗谕将卒曰：“朕使汝曹习弓矢，居闲无事，则为汝师，有事，则为汝将”。因日引数百人射于殿庭，群臣谏，不听。

笠翁曰：吾观唐太宗殿庭习射一事，不怪其失人君之体，疏殿陛之防，而怪其悔过之不严、居心之太忍。何也？高祖之天下，以智勇谋略得之，而太宗之天下，则以一箭得之者也。不记伏兵玄武门，射杀太子建成之事乎？夫兄弟比之手足，语云：“蝮虫螫手，壮士断腕。”腕为自己之骨肉，宁肯无故而断之乎？只以毒流不已，势必伤及全躯，故不得已而断之。然未断之先，未尝不惜；既断之后，未尝不痛；痛定而见断腕之器，未尝不欲掷而去之，恐睹物而自伤其心也。建成惑于人言，数有图秦之志，太宗处此，是“蝮虫螫手”之时也，欲不断腕不可得矣。乃于断腕之后而不去断腕之器，且佩之服之，不肯斯须去身，是何残忍其性而刻薄其心

欤！观人必于其微，吾以是知太宗之杀建成，非但不可比周公，亦且不可拟管、蔡，明乎其为利天下之心也。吾于帝王之中，取其才与识而已矣。

张蓼匪评：予尝谓笠翁有三别：观人有别眼，论事有别见，行文有别肠。人或不信，谓予誉之太过。兹请以是论质之。史载其文曰“殿庭教射”，则古今千万人之目力皆注于射的之上，而笠翁所见，独在建成受伤之肢体，非别眼而何？他人就事论事，不曰“殿庭非习射之地”，即曰“天子非教射之人”，是舍殿庭无可言之地，舍教射、习射无可议之人矣。而笠翁独以“玄武门”三字定其案，“射杀建成”四字正其辜，非别见而何？他人即具是眼，即持此见，而不能援引一事以证之，则其言虽具至理，而不能取信于天下，且无以服古人之心。而笠翁又有“蝮虫螫手”一喻，足以破情理之常，而证手足之变，非具别肠者，而能若是哉？今而后，誉笠翁者必多，而信予言之不谬者亦不少矣！

李仁熟曰：忽从太宗身边拈出凶器立案，从来断狱，无此神明。猿母断肠，射者亦投弓矢；闻笠翁言者，岂止唐廷投弓，直令千秋肠断！

论魏徵“十思”、“十渐”

“十思”，谓人主见可欲则思知足，将兴缮则思知止，处高危则思谦降，临满盈则思抑损，思逸乐则思撙节，在宴安则思后患，防壅蔽则思延纳，嫉馋邪则思正己，行爵赏则思因喜而僭，施刑罚则思因怒而滥。兼“十思”而选贤任能，可以无为而治矣。

又见上志渐不克终，上疏谏曰：“陛下贞观初清静寡欲，今索骏马、访珍怪，一渐也；初爱民如子，不轻营为，顷既奢侈，肆用人力，二渐也；初役己以利物，今纵欲以劳人，三渐也；初亲君子、斥小人，今褒小人、远君子，是四渐也；初不贵异物，不作无益，今难得之货杂进，玩好之作不息，五渐也；初求士如渴，

今由心好恶，六渐也；初无田猎之好，今驰骋为乐，七渐也；初遇下有礼，今颜色不接，或诘细过，八渐也；初孜孜求治，今长傲黩武，九渐也；初频年霜旱，户口如故，今疲于徭役，关中劳弊怨离，十渐也。”疏奏，上深加奖叹，报曰：“朕今闻过矣，愿改之，以终善道！”乃以所上疏列为屏障，庶朝夕见之；兼录付史官，使万世知君臣之义。乃赐黄金十斤、厩马十匹。

笠翁曰：“十思”一疏，语稍平常，颇不似魏郑公手笔；至“十渐”一疏，命题立意皆迥异常人，才不失魏郑公本色。毕竟太宗有眼，付史官而书屏障者，在“十渐”而不在“十思”，以“十思”有所依傍，而“十渐”无所效尤也。至于敢言不讳，从谏如流，皆庙堂中仅见之事。何物唐朝，竟有如是之君臣，安得不令人神往也！

论魏徵、王珪事太宗

魏徵尝劝太子建成早除秦王，及建成败，世民召徵问曰：“汝何为间我兄弟？”对曰：“先太子早从徵言，必无今日之祸。”世民重其才，引为詹事主簿。亦召王珪为谏议大夫。

笠翁曰：魏徵受命为东宫之臣，及建成败，复事太宗，议者讥其北面事仇，失人臣之义。予曰：是则是矣，然魏徵之事仇，与他人之事仇有间，其罪犹可原也。盖魏徵所受之命，乃高祖之命，非建成之命也。建成、太宗，均是吾君之子，太子可事，庶子未尝不可事。其事建成与事太宗，皆从高祖起见，非从建成、太宗起见也。使建成已嗣帝位，太宗从而弑之，则徵必无可事之礼。建成未立而见杀，为之君者，尚俨然有高祖临之；背其主而事其仇，

于义固为不合，然事其君而仇其子，于理亦未甚安。故曰：魏徵之事仇，与他人之事仇有间。然则为徵计者，当如何而可？曰：徵之出也，当俟高祖召之，不当自太宗召之；即太宗有召，亦当俟高祖强而后出，斯为允当。奈何以一代之名臣，而苟且于去就之间，使后世爱我之人，不能终掩其非而予以是也！

王望如评：魏徵始为李密记室，当太原招徕这次杰之日，不知往从真主，一失也；密败归唐，事建成，不告以太伯之贤、宋襄之事，但说其击敌立功，结豪杰以自固，二失也。具此二失，而望其以身徇主，申大义于天下，难矣！然而终不以其出处之小，而没其相业之大。

论唐太宗图功臣于凌烟阁

图功臣于凌烟阁：长孙无忌、元王孝恭、杜如晦、魏徵、房玄龄、高士廉、尉迟敬德、李靖、萧瑀、段志玄、刘弘基、屈突通、殷开山、柴绍、长孙顺德、张亮、侯君集、张公瑾、程知节、虞世南、刘政会、唐俭、李世勣、秦叔宝等，共二十四人。

先儒谓：“凌烟阁诸臣，盖象二十四气，所以辅天而弘化也。长、孙、房、杜诸公，用兵以开国，谋谟以保邦，功虽大小不侔，亦可当兹选矣。独恨李世勣赞立武后几覆唐宗，侯君集辈躬为反贼，死有馀罪，何太宗知人之不哲耶？”此宋儒讥其务名而无实也。

笠翁曰：图画功臣于杰阁，令后代君臣见之，犹凛凛然若有生气，亦盛举也。然以愚见论之，只当立于死后，不当立之于生前；只当立之于后王，不当立之于前主。何也？凡人必于盖棺之后，始可定论；一息尚存，其忠佞、邪正，尚未可知也。如汉之霍光，为麒麟阁诸臣之首，且姓而不名，可谓尊之至矣！其后忽

有纵妻毒后之事，至于灭族。若唐之李勣暨侯君集诸人，皆凌烟阁诸臣之表表者也，孰知赞立武后、躬为反贼者，即其人耶？夫至恶迹昭彰之后，将毁之乎？抑存之乎？将欲毁之，则启作辍无常之消，可见当年之论列，杳不足凭；将欲存之，则有薰莸并器之嫌，徒来后世之讥弹，一无可贵。使皆立之于身后，则是非允协，万代不磨，宁有此弊乎？

又有诘予者曰：“所谓图画功臣者，欲肖其貌而祀之也。其人既死矣，又何从肖其貌乎？”余曰：“非然，自有圆通之法在。凡属汗马诸臣，当在元勋之列者，皆当预肖其貌而藏之，俟盖棺论定之后，始登杰阁，否则委而弃之。如是，则为功臣者，尽欲保其令名，以图不朽，孰肯为霍光、李勣诸人之事哉？此砥砺勋臣之良法也。”但未审书生之言，果有当于庙谟否耳！

论唐太宗自观实录

太宗谓监修国史房玄龄曰：“朕欲自观国史，知前日之恶，为后来之戒。公可撰次以闻。”朱子奢上言，谓以此法传示子孙，或有饰非护短，史官不免刑诛，则莫不顺旨全身，千载何所信乎？上不从。玄龄乃与许敬忠等删为高祖、今上实录上之。上见书六月四日事，语多微隐，谓玄龄曰：“昔周公诛管、蔡以安周，季友鸩叔牙以存鲁，朕之所为，亦类是矣，史官何讳焉？”即命直书其事。

笠翁曰：太宗欲观实录，冀得自闻其过也。及见六月四日事语多微隐，而令史臣无讳，又似欲自彰其过者。乃引周公诛管蔡、季友鸩叔牙为经，是明示史臣以意，令照此法书之，则知闻过、彰过之言皆伪，而实欲自文其过也。夫太宗之事，与周公、季友之事，果同乎？异乎？如其同也，则史臣尽欲彰君之美，将大书特

书之不暇，又何讳焉？如其异也，则讳之犹为党恶，况援引善事以饰其非乎！吾谓太宗欲观实录，其意无他，不过因有六月四日一事抱愧于中，惟恐史官以直笔书之，不加粉藻，故欲自览一过，授意于人，以便代文其过耳。此光明较著之事，奈何后人不觉，舍此大过勿论，而以不当观史之小节论之，以受古人之欺乎？此论一出，是太宗欲盖而弥彰矣！

论唐太宗论将

太宗谓侍臣曰：“于今名将，惟世勣、道宗、万彻三人而已。世勣、道宗不能大胜，亦不大败；万彻非大胜，则大败矣。

笠翁曰：太宗既以名将许三臣，而复示以褒贬。其褒世勣、道宗也，则曰“不能大胜，亦不大败”；其贬万彻也，则曰“非大胜，即大败”。予曰：太宗诸论皆是，独此数语为非。夫胜败兵家之常，古之善行兵者，但能保其多胜，不能保其不败。沛公百战而百不胜，一胜遂至于王；重瞳百战而百胜，一不胜遂至于亡。由太宗之言而论之，则是重瞳可称名将，而沛公不得称名将矣。世有一战不败之名将乎？如其有人，吾必不敢与共晨夕。何也？知其不败则已，败则未有不为重瞳者也。有医士谒余，余询之曰：“汝自挟刀圭以来，曾伤人乎？”医士曰：“未也。”予曰：“然则子非华佗，特庸医者流，初试其业者耳。三折肱为良医，子一肱未折，而欲求试于人，吾敢以身为砺石乎？”此论医之言也，亦可引而论兵。人皆曰“败兵之将，不可以言勇”，予独曰：“欲求勇士，必于败将之门！”

论苏章之按事、张镇周之治百姓，论者以为善处情法之间，而东莱之论独异

汉蓟州刺史苏章，有故人守清河，犯赃。章置酒与饮，故人曰：“人皆一天，我独二天。”章曰：“今夕饮酒者私情，明日按事者公法。”遂正其罪。州郡肃然。

唐张镇周为舒州都督，以舒州本乡里，因置酒召诸亲酣饮，散发箕踞。既别，泣曰：“今日犹得与故人欢饮，明日则舒州都督治百姓矣！”自是他人犯法，一无所纵，境内肃然。

笠翁曰：二事之优劣判然，而东莱吕氏概责之曰“始则过和，终则过刻”，是泾、渭皆浊，而陵、谷皆平矣。苏章饮故人以酒，而卒正其罪，真所谓公私莫辨而情法混淆，是出于理法人情之外者也。盖我受之官，乃朝廷之官，彼犯之法，亦朝廷之法。既已“犯赃”，则非故人，乃罪人矣；以朝廷之命官，与朝廷之罪人饮酒，有是理乎？既与之饮酒，是互相酬酢之宾主矣；以称觴献爵之主人，而按嘉宾以严法，又有是理乎？即苏章犹在，责以矫情玩法，知亦无从置喙耳。若张镇周所召之人，乃都督之懿亲，非朝廷之罪犯也。世有以本地之人，做本地之官，拜命之后，与亲知不谋一面，而遽然以官法临之者乎？先召之饮，而后示以威，此一定不易之理也。况与之酣饮，非酣饮也，勉其奉公守法，以杜后日梗化之端，是以一杯酒当三令五申，与一纸书贤于十万师者等也。奈何不加赞叹，而反施责备之词哉？噫，“至人千虑，必有一失”，东莱先生之谓也！

论高宗之立武氏，褚遂良叩头极谏， 论者议其有未尽焉

高宗为太子，见才人武氏，悦之。太宗崩，武氏出为尼，上幸寺见之，纳为昭仪。欲立为后，褚遂良曰：“先帝托臣曰：‘佳儿佳妇，今以付卿，非大故，勿废也。’武氏经事先帝，众所共知，万世而下，谓陛下何如主！”因掷笏解巾，叩头流血，不听。问李勣，勣曰：“此陛下家事，何必更询外人？”许敬宗亦云：“田舍翁多收十斗麦，尚欲易妻，况天子乎？”上乃贬遂良，废后，立之。

胡致堂曰：遂良忠矣，然昧于消息盈虚之理、姤壮勿取之义。若当武氏长发之时，率协群公，上书皇后，沮止其事，深谏高宗，割制邪欲，其势必可遏也。当其时而不治，及事既成，虽叩首出血，无益矣。

笠翁曰：遂良之谏，恺切极矣！妙在“万世而下，谓陛下何如主。”“何如主”三字，是不特谏而诤之，几于唾而骂之矣；不特唾而骂之，亦且羞而辱之矣。使非良心尽丧、廉耻尽亡之高宗，稍有血气者，未有不竦然自悔，而寝立后之议者也。总因武氏之祸，实由于天，非人力所能中阻。而我辈不肯言天，必欲究当日之人臣不能以口舌求之者，欲声大义于天下耳。乃见当日有一肯声大义之人，又责其言之不早、谏之不当，则当日之遂良，反不若李勣、许敬宗辈怂勇立后之为愈矣。据胡氏之论，谓当谏于武氏长发之日，不当谏于武氏将立之时。予谓由此推之，又当谏于太宗止杀之日，不当谏于高宗议立之时矣。何也？太宗览《太史秘记》，云唐三代后，女主武氏当立，因问李淳风，淳风曰：“其人已在宫中。”上欲取疑似者尽杀之，淳风曰：“王者不死，杀之无

益。”若据胡氏所言，必其有前知之术者而后可。苟能前知，则何不于此时极谏，取武后于宫中而杀之，则祸源灭矣，又安得有长发入宫之事，令人臣以口舌争之哉？吾不怪遂良极谏之太迟，止恨胡氏诞生之不早。使其生于当日，必能以责人者责己，其消武氏之祸于未萌，直弹指间事耳，焉得有浊乱朝堂、貽讥后世之事哉？

赵星垣评：以叩头流血之谏臣，不得后人一字之褒，而反加以重贬，此志士之所以灰心，而谓“使我有身后名，不若生前一杯酒。”非恶名也，恶其名之不可必得，而反遭拘儒之贬斥也。请以杯酒奠遂良，补其生前之不足。

论卢承庆考功

承庆尝考内外官，有一官督运，遭风失米，承庆考之曰：“监运损粮，考中下。”其人容色自若，无言而退。承庆重其雅量，改注曰：“非力所及，考中中。”既无喜容，亦无愧词。又改曰：“宠辱不惊，考中上。”

笠翁曰：卢承庆之屡易判语，乃出怜才热肠，然心可佳，而事不可法，虑开后世展转之门也。凡有自通贿赂而易下考为中、中考为上者，皆曰：“我欲为卢承庆耳。”是知公者即私之门，利者即弊之窠也。无论私弊不可为，即示公兴利之事，亦不得擅创于成法之外耳。

论汉武帝之惮汲黯、唐玄宗之惮张九龄

汲黯忠直敢谏，上不冠不敢见。黯卒出为淮阳太守。唐玄宗时，九龄事无大小，皆力争之。林甫日夜短之于上，上遂罢之。

笠翁曰：人臣而为君所惮，其忠直无他可知，此有得无失之事也；为人君而惮其臣，其能勉强从善也可知，其不能中心诚服也亦可知，此得失相半之事也。然而人臣见惮于君，危道也；君惮臣而远之，亦危道也。吾欲天下之为臣者反处于得失相半之地，求为可敬而不可惮，为君者反处于有得无失之地，但知其可敬，而不知其可惮，则上下俱安，而明良喜起之风见矣。

论开元贤相

玄宗即位以来所用之相，姚崇尚通，宋璟尚法，张嘉贞尚吏，张说尚文，李元纁、杜暹尚俭、韩休、张九龄尚直，各有所长也。

笠翁曰：为君者得贤臣不易，得贤相更不易。舜有臣五人，武王有乱臣十人，虽曰英贤辈出，然皆臣也，未必其皆相也。以宰相之贤，而相继者至有数十辈，则造物之精华之所蓄，已一泄而无馀矣，此非国家之福也。唐开元诸相，如姚崇、宋璟、张说、韩休、张九龄辈，虽不可以五人、十人相比，然而贤相之名，皆能不愧。噫，秦、汉以来，于斯为盛，殆不可继矣，岂非世道之忧乎？未几九龄罢，而李林甫即出，以数君子谋之不足者，一小人坏之而有馀，天宝之乱，祸不旋踵，岂非盛极必衰之所致欤？故

从来论开元贤相者，莫不加以赞叹之词，独予阅史至此，大有愀然之色，知唐家德薄，不能载此厚福而使之相继于不衰也。

论唐因鹊巢狱树，赐牛、李为国公

玄宗时，徐峤奏云：“狱院由来杀气太甚，乌鹊不栖，今有鹊巢树。今岁天下断死刑五十八人，几致刑措矣。”百官表贺，上归功宰辅，赐李林甫爵晋国公，牛仙客鹵国公。

笠翁曰：鹊巢狱树，未必即是休征；即是休征，恐亦非宽刑所致；即是宽刑所致，亦未必皆宰辅之功。乃听谀臣献媚附势于权奸，封牛、李晋爵国公，朝政之失，未有甚于此者。且无论此际之死刑，果能不越五十八人之外否，即曰罪止于此，则唐家此等异政，不自玄宗始也。太宗时，岁断死刑者才二十九人，是此数已倍之矣。减其半者进爵为公，则倍之者又当进爵为王矣。彼时之宰辅为谁？何不闻有半秩之加也？倘由此而进焉，果至刑措，则为君者又不将禅位于其臣乎？此等恶政，出之他人犹不足怪，乃以开元盛治之君，一旦蒙昧若是，此读古者不可不为痛惜耳！

黄石公评：贞观四年，断死刑才二十九人，盖由魏徵为相，劝太宗以仁恩天下，故贞观刑措，《唐书》编入《魏徵传》中。若开元二十七年之鹊巢大理，盖亦由姚崇、宋璟、张九龄、韩休为相，玄宗自选守令之所致。乃以此爵林甫，岂非以杀太子及鄂、光两王之功，谓国罕乱民，实根于家无乱子乎？

论唐兵三变、唐文三变

唐兵三变者，府兵变为彍骑，彍骑变为藩镇也。初制诸卫府兵，有为兵之利，无养兵之害，田不并而兵藏于民，后世最近古而便于国者也。开元之时，其法寝隳，非法之不善，人失之也。张说不究其故而募兵补之，谓之彍骑，又其坏也。李林甫停上下鱼书，但有兵额存耳。于是外兵强盛，其反者以镇兵，讨平之者亦以镇兵，而居重驭轻之意不复存矣。

唐文三变者，先儒谓高祖、太宗，大难始平，沿江左馥风，绋章绘句，揣合低昂，故王、杨为之伯；玄宗好经术，群臣稍厌雕琢，索理致，崇雅黜浮，气益雄浑，则燕、许擅其宗；大历、贞元间，美才辈出，嚆咷道真，涵泳圣涯，于是韩愈唱之，柳宗元、皇甫湜、李翱等和之，排逐百家，法度森严，抵牾晋、魏，上轧汉、周，唐之文宛然为一王法，此其极也。

笠翁曰：唐兵愈变而愈弱，唐文愈变而愈雄。由此观之，则文运关乎世运之言，几不验矣，其故何哉？曰：尚武之世，文运必衰，以士君子耻弄毛锥，尽以建功立业为志，故文风之不竞，兵气有以胜之也；贱武之朝，文运必盛，以士大夫厌谈兵事，各以著书立言为心，故文名之丕著，兵气有以成之也。有唐建国之初，诸路皆置节度使，其威权等于诸侯，非精通豹略者，不足以充其选。是时在位诸臣莫不停文讲武，恐一旦升迁此职，将有以用之也。虽诸路节度亦尝延揽儒流，以备顾问，然而所谈者皆兵，非文章翰墨之事也。世之所尚在此，人之所趋即在此，文运安得不寝弱乎？迨至一变再变之后，其折冲果毅，历年不迁，士大夫皆耻为之，而彍骑应募者，又皆市井无赖，是运筹操戈之事，皆为正

人所鄙，三餐之暇，一枕之馀，将何所事事？不得不以英雄壮志，消磨于砚田笔冢之间。习此者多，则能此者出矣，文运又安得不骤振乎？此唐兵与唐文盛衰不合之故。由是观之，则文章太盛，亦世道之忧也。为君相者，当使文人无暇著书，而将士不徒讲武，则天下可以久安而长治矣。

王望如评：文衰则武盛，文盛则武衰，快论实至论。予以唐文之雄，无过韩子。以彼佐晋公，平淮、蔡，及宣谕王庭湊数语，岂得以文人目之？若夫《平颂》，上与《谟》、《诰》争光，慑服天下奸邪，谁谓文人无补于武事？

论唐之再失河朔不能复取

再失河朔，实由于顺宗销兵，从萧俛、段文昌之议也。每岁百人之中，限八人逃死。

笠翁曰：古来销兵之法，未有善于萧俛、段文昌之议者也。古人纵马华山，放牛桃林，卖剑买牛，卖刀买犊，法虽善矣，而于“销兵”二字，终无实际。何也？以有放之、纵之、卖之之人，即有收之、获之、买之之人，一旦有事，则取之如寄，是但有销兵之名，而未有销兵之实也。不若萧、段所立之法限以逃死，逃则去而不返，死则绝而弗生，是以破釜焚舟之计而倒用之者也。以此销兵，始为刈草除根之法。但须再立二法以佐之：一曰军士有病，不许服药；二曰盗贼有警，不得捕剿。如是，则兵有所归而逃者众，病无所救而死者繁矣。不然，死生有数，焉能限以必死？归栖无地，焉能责其必逃乎？噫，吾不料人臣之丧心病狂，遂至于此也！此法一立，则唐之灭亡，当不旋踵，奈何止失河北而已哉。由此观之，古来可以失国之君，尽有侥幸而存者，但不过百

中之一耳。

方坦庵评：笠翁尝谓予曰：“每读古人书，辄动膀胱气，不知古人作事之谬何损于我，而若有利害切肤之痛也。”予曰：“此正吾侪得力处。凡读书而不受其益者，皆膜视古人之过也。苟能合千百世之人作为一家而忧其所忧、乐其所乐，则死人可活，而活人可仙矣，何得失之不明而休咎之不验哉！”笠翁曰：“诚哉是言！但可为知者道耳。”今读是论，始于嘻笑而终于怒骂，是真能家视古今，而为当局之愤，又不止动膀胱气矣，其竿头更进之验哉！

论郭子仪不却鱼朝恩之邀

郭子仪入朝，鱼朝恩邀之游章敬寺。元载虑其结密，使告子仪曰：“朝恩谋不利于公。”子仪不听。将士请裹甲以从，子仪曰：“我国之大臣，彼无天子之命。安敢害我？若受命而来，汝曹欲何为？”乃从家僮数人而往。朝恩惊问其故，子仪以所闻告，且曰：“恐烦公经营耳。”朝恩抚膺流涕曰：“非公长者，能无疑乎！”

笠翁曰：郭子仪不却鱼朝恩之邀，人皆壮其胆，予独嘉其识。盖自恃为国之大臣，彼无君命，不敢害我耳。然何以知其必无君命？曰：非能必之于君，能必之于己也。往时兵威稍挫即诣阙请贬，兵柄一夺而闻命即行，未尝有纤芥之隙致疑于君，即有小人之谮，我能以诚感之，君何怒于我，而必欲杀之耶？其得力处全在无事之日，不在有事之日，以此自信，故敢冒险而行耳。若他日之单骑见卤，则全以胆胜。此千古来第一险事，只可子仪一试，不可他人再试也。

笠翁又曰：鱼朝恩之初意，未必不欲害汾阳；见其无备而至，又曰“恐烦公经营”，未免为盛德所阻，反动手不得，亦未可知。

如犬欲啗人，见人持棒击之，则咆哮愈甚；若袖手而前，反若与之相狎者，彼必渐噤其声，而且作摇尾乞怜之状矣。物理人情，大半相类，汾阳此举，虽是感人以诚，亦深得袖手待犬之法。

论唐相杨绾而郭令公减乐、 黎幹省驺、崔宽毁第

代宗相杨绾，制下之日，郭子仪方宴客，闻之，减座中声乐五分之四。黎幹省驺从，崔宽毁第舍，皆以绾性清俭故也。

胡致堂谓郭公、黎幹、崔宽事类而情殊，子仪成人之美者也，幹与宽则畏之者也。谓幹、宽有仰德服化之心者非，谓子仪有惕威蹴踏之态者，亦非也。

笠翁曰：人谓令公此举，非有所慑，盖欲成人之美也。予曰：不然，令公一生最怕宰相，不独杨绾，卢杞亦然。他日卢杞问疾，子仪悉屏侍者。或侦其故，子仪曰：“杞貌丑而心险，妇人见之必笑，杞柄权，吾族无遗类矣。”以此观之，子仪非虑杞也，虑其为宰相也。小人且然，况君子乎？其所以为此者，盖欲修好于宰相也；其欲修好于宰相而不敢稍忤其意者，惟恐将相不和而为强寇所伺也。吾闻子仪当日以身系天下之安危者三十年，则此三十年间之子仪，固不可一日无权，而亦不可一日与相臣有隙者也。彼时之天下是何如之天下乎？以势论之，犹不止于秦、赵相图，而有相如为相、廉颇为将之时也。此时为将之子仪，即当时为相之相如耳；当时为相者可以见屈于将，则此时为将者独不可见屈于相乎？千古上下，实有同心，但未遇明眼人一拈出耳。若仅曰成人之美，故减声乐而使人效之，则亦浅之乎视令公矣！

论常袞、崔祐甫为相用人得失

唐至德以来，天下用兵，官爵冗滥。及常袞为相，思革其弊，四方奏请，一切不与而无所甄别，贤愚同滞。崔祐甫代之，欲收时望，推荐引拔，常无虚日，作相未二百日，除官八百人。前后相矫。上常谓祐甫曰：“人或谤卿所用多涉亲故，何也？”对曰：“臣为陛下选择百官，不敢不详慎，苟生平未之识，何以谕其才行而用之？”上以为然。

笠翁曰：崔、常二公用人之矫，皆处于不得不矫之势，非无故而为异同者比也。袞处官爵滥冗之后，则天下官多而民少矣；少势，非无故而为异同者比也。袞处官爵滥冗之后，则天下官多而民少矣；若不暂停甄别，则日多一日，焉得有如许之官爵乎？祐甫当人才淹抑之后，则职旷而才壅矣；若不汇征而进，则年旷一年，不几成草昧之世界乎？作相未二百日，除官八百人，人病其多，吾犹怪其少也。以在久不甄别、贤愚共滞之后耳。故知二公之矫，亦得时使然，非尽通滞不均之过也。不独崔、常之世为然，凡处变乱之后及鼎革之馀，天下人才定有一番疏通，疏通之后定有一番淹抑，此非躬逢其事者不知也。欲去此弊，须在疏通之际预为淹抑之防，淹抑之时即作疏通之计，则无过滥、过吝之虞矣。至于用人之法，不行荐举则已，如行荐举，则避嫌、避谤之说，断断无所用之，以举必于其所知，不知则不敢妄举故也。祐甫之言曰：“苟生平未之识，何以谕其才行而用之？”此至论也。但未考其所荐之人，果无负其所荐否耳。吾谓欲行荐举之法，当使功罪共之：受荐者有功，即以其功始荐之人；受荐者有罪，亦以其罪始荐之人。若是，则欲为人计者，必先自为之计，未有不察

其人之贤否则肯漫然以身试者也。欲收荐举之效者，独有此法可行耳。

论唐李璣告父之反

德宗时，李怀光解奉天围，上以其子璣为监察御史。及怀光屯咸阳不进，璣密言于上曰：“臣父必负陛下，愿早为之备。”上惊曰：“卿当为朕弥缝之。”对曰：“臣父非不爱臣，臣非不爱其父与宗族也，顾臣力竭，不能回耳。”上曰：“然则卿何以自处？”对曰：“臣父败，则臣与之俱死。使臣卖父求生，陛下亦安用之？”及怀光死，璣亦自杀。

笠翁曰：人言李璣证父之事，忠则忠矣，如不孝何？据此观之，则古云“求忠臣必于孝子之门”，此语为不验矣。予曰不然，璣能以身殉父，亦可盖证父之愆，未为不孝；但其处君臣、父子之间者，皆未尽善，非但不能为至孝，亦且不得为纯忠。何也？等一死耳，何不自杀于父死之前，效史鱼之以尸谏，则国事与家事，未必不两有所补，而竟以有用之躯，死于无用之日乎？设以智者处此，当于告父必反之后，即向其君乞一手诏，自往抚之。谓男不孝，已将大人密谋直告于君矣，京师早为之备，万不可图。而皇上悯男之忠，足以掩父之过，及此时归正，可保不虞，否则悔无及矣。大人从男之谏，国之幸，即家之幸也；不然，男请先死，以赎不孝之罪，亦可为事君则而不能谏父者立一榜样，使后人有所适从耳。如是，则光知逆谋已泄，事必无成，且父子不一其心，已为他人所料，与其遂过而死，无宁悔罪而生，或能于国事有裨，亦未可知。如其不然，即于父前自刭，未必不动其哀悔怨艾之心，或以不得于生前者得之于死后，亦未可知。纵使二者俱不得，亦

能剖心而告父，示无他，卖父之名，庶几免矣。奈何刎颈于事败之后，令世之藉口者，皆谓忠孝不能两全，而有顺此逆彼之患哉！

汪北海评：李璡之事，与楚弃疾相类。然子南之讨，出于王之口，入于弃疾之耳者也。故未讨之先，弃疾不可以泄，既讨之后，弃疾不可以生。“臣父必负陛下”，出于李璡之口，入于德宗之耳者也。允宜乞诏谏父，谏而不听，以死断之，斯外可对君，内可对亲，且庶几父之一悟，或可两全而无憾矣。古云：“非死之难，处死为难。”璡之死，固不得与弃疾媲美也，宜为笠翁之所深惜。

论陆贄请令台省长官各举属吏

陆贄请令台省长官各举其属，或言于上曰：“诸司所举，皆有情故，或受货赂，不得实才。”上密谕贄：“自今除改，卿宜自择，勿任诸司。”贄上奏，其略曰：宰相不过数人，岂能遍谙多士？今之宰相，即往日台省长官；今日台省长官，乃将来之宰相。岂有为长官之时，不能举一二属吏，居宰相之位，即可择千百具僚？是以人主择辅臣，辅臣择庶长，庶长择佐僚，将务得人，无易于此。上竟追前诏不行。

笠翁曰：陆贄以举贤之任，分责诸司，德宗既已行之，乃复阻于人言，追停前诏，人皆病其善疑，予独美其能信。何也？观其谕贄之言曰：“自今除改，卿宜自择，勿任诸司。”然则德宗所信者，惟宰相一人而已矣。与其信百官而疑宰相，又不如信宰相而疑百官，但观宰相何如耳。如贄之为相，即举天下之事而畀之，不问成败利钝，亦未尝不可，又何必定以举贤之事分责台省长官，而分其责任乎？予谓此法可行于他相，而不必行于陆贄柄国之时，

以贲能举其所知，即所不知，亦能遍采舆论，而收其人于夹袋之中也。但恐德宗为此，所谓暗合道妙，未必果有所见而然耳。

论韩愈、欧阳修之论阳城

阳城征为谏议大夫，未至，人皆想望风采。及至，诸谏官纷纷言事，城与二弟及客日夜痛饮，人莫能窥其际，韩愈作《诤臣论》讥之。及陆贄等贬，上怒未解，中外惴恐，无敢救者，城率王仲舒等守延英门，上疏论延龄奸佞，贄等无罪。上怒，欲罪之，幸太子营救得解。时朝夕相延龄，阳城曰：“脱以延龄为相，城当取白麻坏之，恸哭于廷”乃改城为国子司业。

欧阳公论曰：韩退之作《诤臣论》，讥阳城不能极谏，卒以谏显。人皆谓城之不谏盖有待而然，非也。予谓退之作论时，城为谏议已五年，复二年，始廷辨陆贄及沮延龄，才两事尔。当德宗时，可谓多事，付受失宜，叛将强臣，罗列天下，又多猜忌，信任小人。于此之时，岂无一事可言，而需之七年之久耶？且当时之事，岂无急于裴陆两事者？为谏官七年，适遇两事，一谏而罢，以塞其责。向使止五、六年而遂迁司业，是终无一言而去也，何所取哉！

笠翁曰：陆免于死，裴不果相，阳城之谏，不为无功。但论者曰：向止五、六年而遂迁，是终无一言而去也。此二语折得人倒，予欲代为致辨，终不能措一辞矣；但可为之解嘲曰：与其言之无当，徒渎听闻，又不如作寒蝉御史之为得耳！

笠翁又曰：以七年不谏之言官，一旦起而论事，遂能免正于死，阻奸人之相。真可谓不鸣则已，鸣则惊人者矣！然未必非昌黎一激之力。古人讥讽之文，其有裨于人也若此。后世之人，多

由讥讽成隙，以故逆耳之言，形于楮墨者绝少，于此见有唐风气之醇也。夫使阳城之不谏，果为有待而然，则其为人也犹可及；若为昌黎所讽，不加仇恨，而又能奋发至此，则是休休有容，又能谦谦受益，有古相臣之风，此盛德君子之所为也，其人其品，于是乎不可学矣！欧阳公作论非之，犹是只知其一，不知其二。

笠翁注：前数语者，系予幼时读韩文，偶批《诤臣论》后，自以为有得矣。今沉心读史，复有是论，虽非古人之定评，然以今较昔，则觉稍进一筹矣。甚矣，吴下阿蒙之可笑也！因并列之。以为今是昨非之验。

论杜黄裳请对刘辟专任高崇文，勿置监军

宪宗欲讨刘辟而重于用兵，公卿议者，亦以为蜀险固难取，杜黄裳独曰：“辟狂戇书生，取之如拾芥尔！臣知神策军使高崇文勇略可用，愿陛下专以军事委之，勿置监军，辟必可擒。”上从之，于是始用兵讨蜀，以至威行两河。

笠翁曰：知高崇文可委而委之，可谓明矣！而又能勿置监军，是明而继之以断，则亦何事不可为哉？故知天下明易而断难，善善而不能举，恶恶而不能退，郭公之所以亡也，以其多明而少断耳。

余澹心评：不置监军，此千古用兵之善策也，岂惟高崇文哉？后世不察，以文制武，鲜有不败。以黄吻小儿，侥幸一第，遂欲奔走孙、吴，呵叱李、孰，有是理乎！更有以刑馀监制，夺阃外之权，窃天王之宪者，此英雄所以灰心，志士因之扼腕也！

论帝王劳逸得失

宪宗问：“自古帝王，或勤劳庶政，或端拱无为，互有得失，何为而可？”杜黄裳曰：“王者夙夜忧勤，故不可自暇自逸。然上下有分，纪纲有序，苟慎选贤才而委任之，则亦何求不获哉？明主劳于求贤而逸于任人，此虞舜所以无为而治也。至簿书狱市，烦细之事，各有司存，非人主所宜亲也。昔秦始皇衡石程书，魏明帝自按行尚书事，隋文卫士传餐，皆无补当时，取讥后世，其耳目形神非不勤且劳也，所务非其道矣！”

笠翁曰：帝王未尝不劳，其劳亦不在始皇诸人之下，但帝王所劳者心，而始皇诸人所劳者力耳。劳心则天下易治，治则不见其劳；劳力则政事愈繁，繁故不见其逸：此劳逸得失之所由分也。“劳于求贤而逸于任人”，此所谓善于劳心，而一毫不用其力者矣！

论李绛之策魏博

田季安卒，诸将立其子，李吉甫请讨，绛曰：“魏博不必用兵，当自归朝廷。今怀谏乳臭子，不能自听断，不为屠戮，则悉为俘囚矣。”既而怀谏幼弱，军政决于家僮，众皆愤怒，拥田兴为留后。兴度不免，乃迁怀谏于外，遣监军以状闻。上谓绛曰：“卿揣魏博若符契！”吉甫请遣中使宣慰以观变，绛曰：“兴奉土地兵众，坐待诏命，不乘此际推心抚纳，结以大恩，必待敕使至彼，持将士表来，为请节钺，然后与之，则是恩出于下，非出于上。将士为重，朝廷为轻，机会一失，悔之无及。”上从之。

笠翁曰：李绛之揣魏博，人皆奇之，予独曰：此中人之智耳！乳臭子不能听断，何必上智之人始知之哉？予独奇其力阻遣使之议，竟以节钺授之，使恩出于上，权夺于下，此则上智者之所为也。若稍延数日制命不下，则请节钺者至矣，将从之乎？抑拒之乎？拒之则前几尽失，从之则跋扈如常，恐代之者未必皆乳臭子矣。治乱之关，全在此举，此绛之不可及也！

论李吉甫、李绛之论刑法

李吉甫言于宪宗曰：“赏罚，人主之二柄，不可偏废。陛下践祚以来，惠泽深矣，而威刑未震，中外懈惰，愿加严以振。上顾李绛曰：“何如？”对曰：“王者之政，尚德不尚刑。岂可舍成、康、文、景，而效始皇父子乎？”上曰：“然。”

笠翁曰：以二说相衡，凡论古者，未有不是绛而非吉甫者矣。然则子产亦贤人也，又何故曰“唯有德者能以宽服民，其次莫如猛”？若是，则郑之子产，亦犹唐之李吉甫矣。同是一言，出之子产则为是，而孔子嘉之，出之吉甫则为非，而千古罪之，岂前人若是其幸，而后人若是其不幸欤！曰：有故焉，人但未之思耳。人臣对君之言，与对同列之言，大有分别，非可一词而互用之也。子产于子大叔，同列之人耳，察其为人非能以宽服民者，故以猛告之。然其猛之为用，及身焉而止矣，后之为政者，未必不以宽济之。若移此语以告君，则将著为令矣，百官奉之，子孙守之，则天下后世之民，焉有不受其猛之害者哉？秦政之虐，非始皇父子能为之，李斯请立严法之过也。设李斯不为是言，焉知成、康之风不再见于后，文、景之化不预见于前哉？凡读古人之书者，皆

当以两事并衡，而素其所以不同之故，则古人之心思立见，而我之聪明亦与之俱长矣。

论柳宗元以柳易播

宪宗恶王叔文之党，皆以为远州刺史，宗元得柳州，刘禹锡得播州。宗元曰：“播非人所居，而梦得亲在堂，万无母子俱往理。”欲请于朝，以柳易播。中丞裴度亦以禹锡母老为言，得改连州。

笠翁曰：宗元以柳易播，千古称为义举，然考之当年，实未有其事，不过曰欲之而已矣。既曰欲之，则仅有其心耳，何以遂传其事，而曰“以柳易播”乎？曰：我有其心，而人成其事，则成其事者之功，未必在有其心者之上，以事不能自举，而必待心以举之耳。刘禹锡之得改连州，裴晋公之力也，而千古以后，不闻人曰晋公以播易连，而但曰宗元以柳易播，则以晋公未成其事，而宗元先有其心也。然则天下之为善者，何必定在强有力之人哉！果有是心，则天地鬼神皆将起而遂之矣。

论裴度上蔡、郾用兵忧勤机略

裴度纂述蔡、郾用兵事，上之忧勤机略献之，请付史官，宪宗曰：“如此似出朕志，非所欲也。”弗许。先儒论纂述主德，请付史官，谄谀者所为也；裴度亦尔，何也？曰：蔡、郾用兵，度实任之，功名之际，人臣所难处，归美于上，推而弗居，度之虑远矣！又载用兵以来，上心忧勤，则宪宗忆取之之难，必思守之之不易，是乃文类将顺，实有匡救。君子之所为，众人固不识也。

笠翁曰：究竟裴晋公此举，殊属多事。人非圣贤，不能无过，果其有过，即当存而勿论，不必定为分解，而令后世藉口之徒，引古人之过失，以为作奸作恶之资也。

杨静山评：人非尧舜，岂能事事尽善？此千古快论也，不意复于笠翁见之。予向谓笠翁阐幽括微，为古人之功臣；以此观之，又为古人之畏友矣！

论柳公绰不诛赃吏而诛舞文者

柳公绰治二吏，一犯赃，一舞文。判曰：“赃吏犯法法在，奸吏犯法法亡。”竟诛舞文者。

笠翁曰：柳公之处二吏，当则当矣，但恐其尚未深思。赃吏不舞文，其为赃也有几；奸吏不贪赃，其为奸也何益？奸吏犯法法亡，则有之矣；赃吏犯法法在，吾则未敢信也。

笠翁又曰：立法不可不严，行法不可不恕，予非不知之；但当恕之于心，不当恕之于口，虑后世之人引为成例故也。如柳公绰之断狱，诛舞文而不诛赃吏，权其轻重，以全好生之心，未尝不可；但“赃吏犯法法在”一语，殊难为训。斯何言也，而出诸名宦之口乎！《诗》曰：“赫赫师尹，民具尔瞻。”盖欲其人之慎之也。

论司马公论处郭谊

武宗时，刑、洛、磁三州降，上曰：“郭谊，桢谋主也，必衆

刘禎以自赎。”李德裕曰：“诚如圣料。”未几，谊果斩禎宗族，函禎首降。德裕曰：“刘禎驍孺子耳，阻兵拒命，皆谊为之谋主。及势孤力屈，又卖禎以求赏。此而不诛，何以惩恶？宜及诸军在境，并谊等诛之。”上曰：“朕意亦以为然”。郭谊等至，皆斩之。

笠翁曰：唐武宗之诛郭谊，犹汉高帝之斩丁公，而郭谊可诛之罪，犹在丁公之上。以丁公之罪止于临阵纵逃，而郭谊之罪，竟至于杀主求赏，几十倍之。此而不诛，是以叛逆教天下矣！乃后世之人，犹有以杀降罪之者，吾真不解其故。要知武帝所诛，诛叛也，非诛降也，但较之不受其降，而举兵声罪以诛之者，差有别耳。

论王式谈兵

浙东乱，夏侯孜举式讨平之，诸将请曰：“某等生长军中，久更行阵，今幸得从公破贼。然私有所不谕者：公之始至，军食方急，而遽散之，何也？”式曰：“贼聚谷以诱饥人，吾给之食，则彼不为盗矣。且诸县无守兵，贼至，则仓库适足资之耳。”“不置烽燧，何也？”式曰：“烽燧所以趣救兵也，今兵尽行，无以继之，徒惊士民，使自溃乱耳！”“使懦卒为候骑而少给兵，何也？”曰：“彼勇卒操利兵，遇敌且不量力而斗；斗死，则贼至不知矣。”皆拜曰：“非所及也！”

笠翁曰：王式所行之事，皆兵家险着，而末后一事，又险着中之险着也，止可一试，不可再试。后世行兵者，断断不可有此事，然又断断不可无此心。心与此合，即行事或异，亦皆有神明不测之几矣。

汪北海评：兵犹弈也，兵之有书，犹弈之有谱也。弈之妙，固寓于谱之中，然执谱以弈，鲜有不缺者。笠翁谈兵，每参活着，当是此中第一手，若与王式对局，未审谁先半子！噫，吾不能不避之矣！

论郑縻进退之际

郑縻好诙谐，常为歇后诗讥时事。上征为相，縻笑曰：“歇后郑五作宰相，时事可知矣！”累辞不获，乃视事，未几，即致政去。

笠翁曰：人之长短，不可以一事论，要观其大段何如耳。如唐之郑縻，其未用也，好为歇后诗讥讪时事，以此观之，则亦轻佻狂逞之徒耳。一旦起而为相，去就之义井然，全不似歇后郑五所为，始知磊落诙谐之士，不可以小节拘，而可以大任试也。为国择人者，尝存一歇后郑五于胸中，则决无鄙薄人才之事矣。

余澹心评：郑蕴武有知几之哲、远害之明，其诙谐混迹，有所托而然也。始为州守，能以一州之力，传檄敛黄巢兵，使毋犯境。任满去州，虽他盗至，不敢取所藏库钱，曰：“郑使君钱，何敢犯？”其威重如此，岂碌碌无材者哉！使其贪居相位，则白马清流之祸，必身试之矣。宋人诗云：“不是朱三能跋扈，只缘郑五欠经纶。”冤哉！

五代纪

论郭崇韬之料梁

唐庄宗闻梁欲大举入寇，召诸将会议，崇韬曰：“段凝本非将材，不能临机决策，无可畏。降者皆言大梁无兵，陛下若留兵守魏，固保杨刘，自以精兵与郢州合势，长驱入汴，彼城中空虚，必望风自溃。苟伪主授首，则诸将自降矣。帝王应运，必有天命，在陛下勿疑耳。”

笠翁曰：郭崇韬料梁，以康延孝降唐，言梁兵聚则不少，分则不多故也。然安知此语非譎？脱为诈降而行间，则奈何？末又云帝王之兴，必有天命，是全无一语及本国，言其制胜者安在，而徒然上恃于天，下信于人，而以其君为孤注也。唐主亦曰：“丈夫得则王，失则为卤。”此匹夫亡命之言，不料出于帝王之口。古云：“知己知彼，百战百胜。”唐之君臣，但能知彼而不能知己，其能灭梁者，幸也，非必胜之道也。后世行兵，不当以此为法。

论康澄论事

明宗时，澄上疏曰：“国家有不足惧者五，有深可畏者六。阴

阳不调不足惧，三辰失行不足惧，小人讹言不足惧，山崩川涸不足惧，螫贼伤稼不足惧；贤人匿藏深可畏，四民迁业深可畏，上下相徇深可畏，廉耻道消深可畏，毁誉乱真深可畏，直言蔑闻深可畏。不足惧者，愿陛下存而勿论；深可畏者，愿陛下修而勿失。”唐王优诏奖之。

笠翁曰：康澄所谓不足惧者，皆深足惧者也；因欲甚言后六事之可畏，姑缓其词耳。若曰以如此可惧之事较之后六事，尚为不足惧，则其可畏者为何如之可畏哉！若曰竟不足惧，则是以骄肆导其君矣。然苟能修其可畏，则阴阳自调、三辰自若、讹言自止、山川自安、螫贼自灭，我不惧彼而彼且惧我矣：即谓之真不足惧，亦未尝不可。

论桑维翰辅晋

晋新得天下，藩镇多未服从，或虽服从，反侧不安；兵火之余，府库殫竭，民间困穷，而契丹征求无厌。维翰劝晋推诚弃怨以抚藩镇；卑辞厚礼以奉契丹；训卒缮兵以修武备；务农桑以实仓廩；通商贾以丰货财。数年之间，中国稍安。

笠翁曰：桑维翰辅晋之功，不及古人之什一，而道足与相抗者，以所徙之时势不同耳。以五十年之天下而五易其姓，则四海苍生欲求瞬息之安，其可得乎？契丹骄横于外，藩镇跳梁于内，维翰欲安其国则不能安其民，欲安其民则不能安其国，而能劝主推诚以待藩镇、卑辞厚礼以奉契丹，又能务农桑、通商贾，使万民乐业，亦一时之周召也！使得汤武之君而相之，乌见其非王者之佐哉？

笠翁又曰：推诚弃怨以抚藩镇，卑辞厚礼以奉契，皆非久安长治之道，总因真主未出，苟且其局以待之，所谓过得一日是一日、过得一年是一年也。

沈因伯评：五代之时，屈杀几许英雄，如冯道、桑维翰之类是也。世无真主，使霸王之佐皆不得展其鸿猷，徒为旦夕偷安之计。由此观之，“遭时遇主”四字，非有希世之才而又有希世之福者，岂得易言之哉！

论晋以冯道守司徒

晋高祖以冯道守司徒，事无巨细，悉委于道。尝访以军谋，对曰：“征伐大事，在圣心独断，臣书生，惟知谨守历代成规而已。”晋主以为然。

笠翁曰：谨守历代成规，是居官最稳着数，而行之五代更宜。何也？不十馀年而有一番鼎革，若欲代代更张，则朝廷不胜其繁，而小民不胜其困矣。惟守成规以待真主，即是致君泽民之法。唐明宗每夜焚香祝天，愿早生圣人，为中国主。此哲人高见，冯道之谨守成规，将无暗合其意乎？

梅杓司评：论人必先论世，此一定之法也。每见拘儒立说，执一见以概千百世之人，则冯道之谨守成规，与曹参一遵萧何旧政，同一辙矣。试问五代之成规，与萧何之旧政有以异乎，无以异乎？诸人论史，常怪雷同；笠翁论史，求一自合其掌者而不得。以诸人皆论人，笠翁独论世也。

论刘知远先正位后兴师

知远在河东，富强冠诸镇。晋主与契丹结怨，知远知其必危，而未尝论谏。契丹屡深入，知远初无入援之志，及闻契丹入汴，知远分兵守四境，以防侵軼。将佐劝知远称尊号，知远不许。军士皆曰：“今契丹陷京城、执天子，天下无主，主天下者，非我王而谁？宜先正位，后出师。”知远从之。

笠翁曰：晋室既灭，中原无主。知远先正位而后出师，诚为万不得已。但其先据富强之资，闻京师有变而不入援，且知其将危而未尝论谏，皆非人臣所宜有也。《纲目》予之“出于万不得已”，以不得已之笔而书不得已之事，盖两相凑合而然耳，岂为应得之书法哉？《纲目》之文，亦有可以为法而实不可以为法者，要当识其苦心而已矣。

张蓼匪评：笠翁之于古人，可谓铁面而铜肝者矣。不肯放过一人，不肯假借一字，然皆欲为万世立纲常，非可与才识骄人者比也。其于朱子《纲目》，尚多诤谏之词，况其他乎？惜乎仅有论史之力，而无作史之权也！

论刘仁瞻守节

唐寿州城中食尽，唐遣兵救之，周主大破唐兵。清淮节度使刘仁瞻病甚，不知人，监军使周廷构昇仁瞻出降。周主慰劳赐赆，复令入城养病，又制曰：“刘仁瞻尽忠所事，抗节无亏，前代名臣，几人堪比？其以为天平节度使兼中书令。”是日卒，周主复以清淮

军为忠正军，以旌仁瞻之节。

先儒断曰：仁瞻终身唐臣，愤悒至死，《纲目》书“唐”，明其心之为唐也。故虽以疾死，而书曰“死之”。此特笔也，一人而已矣。

笠翁曰：以此观之，知世间原有公道，即冒忠臣之名而为奸臣之事者，苟非出之于己，天下皆能谅之，其为忠臣者自在，未尝竟以奸臣目之也。刘仁瞻于病不知人之际为人舁之出降，周主且以为天平节度使，则仁瞻是一降城之将矣，焉得为忠，而《纲目》书以特笔，且讳其自死，而曰“死之”哉？曰：以生前所行之事知之也。当李景兵败，奉表称臣，而仁瞻独坚守不下。子崇谏幸其父病，谋与诸将出降，仁瞻知而斩之。及病甚，不知人，监军使周廷构始舁之出降，则其未尝降也明矣。世有后献其城而先斩其子者哉？且《纲目》之特书，亦非无据而然也。以周世宗既有天平节度之命、而又以清淮军为忠正军一事知之也。此何以故？曰：当廷构舁之出降，世宗亦知其病不解事，虽一息尚存，而心已死矣。知其已死而复官之者，以仁瞻素矢忠义，为民望所归，欲使天下闻之，谓忠如仁瞻，亦为周臣，则周师之不可敌也明矣。授之以职，所以收天下之人心也。及其死也，又不忍没其忠义之心，故改清淮军为忠正军，章明其义，所以安死者之魂与魄也。吾于周主二事，均有取焉。《纲目》之特书，盖本斯意而为之者也。不然，朱子去周二百年，安见舁之出降者，非出于仁瞻之心，而以将无同之特笔，书莫须有之善事哉？

笠翁又曰：疾死而书曰“死之”，所以抗周世宗之命，使天平节度之名号不能传于后世也。彼欲矫其迹，而我偏欲正其名，此后世作史之权，较当日之爵赏犹重耳。若无天平节度使之虚衔，吾知《纲目》之书法定曰“疾死”而不曰“死之”矣。

宋 纪

论取天下上世以德，中世以力，末世以谋

刘定之论取天下者，上世以德，中世以力，末世以谋。德取者，仁渐义渍而人不忍释，商周是矣；力取者，诛暴锄乱而人莫能敌，汉高帝、唐太宗是也；谋取者，逢机遘会，阳施阴设，而人莫能觉，宋太祖是也。周世宗以郭祖妻侄为养子而有周之基业，固已处非其据，而来奸雄窥觊之心矣。中道殒殒，符后入宫才十日，恭帝承统甫七岁，寡妇孤儿之易欺，未有甚于此时者也。是以群帅合谋，托言有辽汉之师，而空国授之太祖。及陈桥事定，何尝见辽汉有匹马只轮寇边哉？且太祖之入也，遣亲吏楚昭辅入报其母，杜太后曰：“吾儿素有大志，今果然矣。”由此言之，谓太祖先不与谋，殆未可也。

笠翁曰：刘氏之论取天下，谓上世以德，则信然矣；至曰中世以力，末世以谋，以不可分别之二事而强为分别之，吾则未敢遽信其是也。夫以汉高帝之力而敌项羽，是何异于以卵斗石而以蚊负山乎？其能尽夺所恃而令鹿死吾手者，则全以谋也。他且勿论，即陈平之六出奇计，韩信之拔帜囊沙，何一非谋？何者是力？而竟置谋勿道，仅以力归之乎？唐太宗之谋较汉高帝虽为稍减，而能以一计胜人千百计者，如推奖李密一事是已。若不骄其志而使

之自弊，则患在肘腋，将左支右吾之不暇，能悉其全力以图天下乎？即曰以力，亦未尝尽弃其谋于不讲也。其言宋太祖之取天下，则曰“寡妇孤儿之易欺，未有甚于此时者矣”，夫既曰“易欺”，则其所谓谋者，又安所用之哉？托言有辽汉之师而攘其兵柄，即使谋出太祖，亦探囊取物之小技耳，较之汉唐二代之奇略，不几有小巫大巫之别欤？其所谓以力者，皆可谓之谋；而其所谓以谋者，又不可不谓之力。吾今欲尽反其说，而谓汉唐以谋，宋独以力，是仅以口给御人，而不问其理之安与否矣。请熔铸其词以断之曰：能以德取天下者，惟商周之君，若汉唐与宋，则惟有谋与力而已矣。

论宋太祖之得天下

郑伯乾论宋太祖之得天下：果天命耶？抑人谋耶？予曰：天命固有在，人谋不尽无也。观其赤光异香之奇，实应明宗之祝；紫云黑龙之祥，已兆汉东之灵。此天命之始也。面方耳大，不见疑于世宗；掌军报政，尝见推于士卒。此天命之著也。遭孤儿寡妇之运，而日光摩荡于天文；当朝君暮仇之时，而人心易属于将帅。此天命之授受也。然而禁兵无无故之行，陈桥无无谋之变。顾乃虚声辽汉之师，而禁兵入其手；密诱陈桥之变，而诸将饵其心。实匡义之定谋，赵普之协力。不然，身上之黄袍，岂临时可得？袖中之禅诏，非仓卒可成。

况太后有“大志”、“果然”一语，又可验其必有成说于先，而不觉其情之发露者乎？

笠翁曰：以匹夫得天下、人臣受禅代，而曰我无是意，不得已而为天命所归者，此皆孔子所谓舍曰欲之，而必为之辞者也。即汤、武二圣人得天下于穷暴极虐之桀、纣，后之君子口虽代为之

辨，言其无利天下之心，而设身处地以筹之，犹若有未必尽然者，况三代以后之天下，失之者未必皆桀、纣，而得之者又未必皆汤、武乎？达人读史，每于此等去处，只该存而不论。若定曰天命为是，人力为非，则所谓符讖休征，如宋太祖之赤光异香、紫云黑龙诸奇瑞，不过当世偶传，欲神其事者遂笔之书史，而后人实未之见，不敢执影响之说尚论古人。若曰人力为有，天命为无，则天下有智谋勇力者多矣，挟其所能尽足以取天下，何若是乎天子之少，而谋臣勇士之多也？由此观之，无论汉高祖、唐太宗、宋太祖之得天下属之天命，即始皇之代秦、王莽之代汉，亦以冥冥赫赫之间亦有若或使之者，非可尽言人力也。欲存其实，但置之弗论而已矣。凡读书而及天地鬼神之事，皆当以梦境视之。梦可做，不可说。知说梦者为何如人，则知言天地鬼神者为何如人矣。

论赵普之计太原

上与普计下太原，普曰：“太原当西北二面，太原若下，则边患我独当之。不如俟削平诸国，则弹丸黑子将安逃乎？”上曰：“吾意正如此，姑试卿耳。”

笠翁曰：秦灭五国而后取齐，赵普削平诸国而后取太原，同是一法。但秦之存齐，用以蔽内；赵普之留太原，用以蔽外。由是观之，天下之兵法无一不可变用之者，寻常智略，稍一转移，便成奇策。奈何借箸于人者，无一不舍灯觅火而为迂远不经之事哉？

何省斋评：笠翁每说兵事，无不神而明之，不特旗鼓文场，又可诗书干橹矣。何不另著兵书一册，以为甲士津梁？吾知笠翁不言，言必有中！

论赵普之谏太祖

赵普荐人至再四，上怒裂其牍，普拾以归。他日，补缀复奏，得允乃止。有群臣当迁官，帝恶其人，不与，普坚请曰：“刑以惩恶，赏以酬功，古今通道也。且刑赏，天下之刑赏，陛下岂得以喜怒专之？”帝怒起，普亦随之，帝入宫，普立宫门不去，竟得俞允。其刚毅果断类如此。

笠翁曰：赵普荐人，裂牍补缀复进，又谓刑赏为天下之刑赏，人主不得以喜怒专之，此古今第一宰相、第一谏臣。予自论古以来，谓人臣谏君之痛快，莫若唐之魏徵，不意赵普之痛快又足以胜之。此等谏法，无论明君圣主不得不从，即遇昏暗之君，亦能变怒为喜。何则？以其耐性故也。他人启事而不得俞允，非畏而不前，即怒而求去矣，孰肯今日不听而复奏之明日、明日不听而复奏之后日乎？甚至以补衮之心变而为补牍之事，君自怒而我不怒，亦且不惊。其跪而拾之与立宫门不去者，是以贤妻顺子之道事其君矣；为之君者，有不霁威严而为慈爱者乎？此人臣谏君第一法，乃豫章罗氏犹以诤直强劲责之，谓古之善谏者不然。吾不知是何肺肠？总因赵普所行之事，皆古人未尝行者。大凡拘儒论人，须是印板刊定之事，方为所取，苟无成样，未有不为所弃者也。可笑哉！

冯秋水评：他人目以刚毅果断，责以诤直强劲，凡读史者，至此俨若有一条铁汉，立于吾前。迨笠翁以一语点破，断曰“贤妻顺子之道”，又俨然有一佳儿好女，立于吾前，觉曩时认为铁汉者，非真铁汉，乃妇人而貌作须眉，弱质而勉为强项者也。甚矣，文人之笔，实有鬼神造化厕于其间，非徒然三寸管也！

论宋太祖之待李汉超

汉超在关南，民有讼其强娶己女为妾及贷民钱不偿者，帝召讼者曰：“汝女可适何人？”曰：“农家。”又问：“汉超未至关南时，契丹何如？”对曰：“岁苦侵暴”。曰：“今复尔耶？”对曰：“无也。”帝曰：“汉超，朕之贵臣。汝女为之妾，不犹愈为农妇乎？汉超不在关南，汝家尚能保其货财耶？”责其人而遣之。密使谕汉超曰：“亟还其女并所贷，朕姑贯汝，勿复为也。不足于用，何不以告朕耶？”汉超感泣，由是益修政理，吏民爱之。

笠翁曰：予观宋太祖之为君，盖三代以后之一人也。不独汉超感泣，凡为人臣者，读史至此，未有不泣下沾襟者。此家庭父子之情，非复殿陛君臣之道矣。观其登极之后待臣如此，则从前之气谊可知。始识黄袍之加，出于人情之不能自己，岂寻常劝进者比哉！

论陶邴登第，宋主命中书覆试

王祐知贡举，陶穀子邴名在第六，上命覆试，邴复登第。上曰：“文衡公器，毋树私恩。自今凡关食禄之家，悉宜覆试。”

笠翁曰：读史至此，又能使孤寒泣下。世禄子弟不能幸进，则九州四海尚有淹抑不伸之寒士乎？盖朝廷欲赏功，自有赏功之物，不必夺寒士口中之食以予之耳。吾不知宋太祖之心肠有几千百个孔窍，而能有病皆知、无私不晰若此也。

周栎园评：严于食禄之家，而使登第者覆试，此太祖之善惜名器也。然既经覆试而仍复登第，则王祐之不树私恩、陶穀之不苟荐托、陶邴之不愧科名，皆于是乎见矣。一举而彰众美，为人臣者，亦何惮于功令之严，而不自揭其心，以示天下乎？有宋人文之盛，实基于此，以开国之君臣，皆能逆虑其终，而慎之于始也。

论曹彬、曹翰之后荣盛衰弱之不同

唐之州郡皆降，独江州指挥使胡则杀刺史谢彦实，集众固守。曹翰攻江州，城陷，翰执胡则杀之，因纵兵悉取资财而尽屠其民。后曹彬子孙贵盛累世，翰歿未久而子孙有为乞丐者。

笠翁曰：曹翰嗜杀而止于子孙式微，则其为将也，虽无善政，亦必有补过盖愆之事矣。从来嗜杀之人，未有能全要领，使身后之人犹得安然无恙而为乞丐者。试于干戈大定之后洗眼一观，其为大将而酷嗜杀人者，宁有几个人在乎？宁有几个儿孙能为乞丐者乎？吾谓天道好还，恐不若是其缓而且恕也。

论王旦不谏天书

王钦若伪作天书，请帝封禅。帝曰：“王旦得无不可乎？”乃以酒赐旦，因语曰：“此酒极佳，可归与妻孥共之。”及发，皆美珠。旦由是不敢异议，而封禅遂成。独孙奭曰：“天何言哉，况有书也？”上默然。

笠翁曰：天下自有货利以来，人臣之受赂者多矣，然非得之

于庶民，即得之于僚属，未有以君而赂其臣者。有之，自宋真宗与王旦始。封禅之议未成，止以王旦一人之不可为虑，然则此时之王旦亦何强项乎哉！及美珠一赐，而不可者变为无不可矣。美珠之力大矣哉！以美珠之赐而遂导其君以封禅，设以美女赐之，则其君欲为酒池肉林、裂缙举燧之事，亦将无不从之矣。岂非千古一变事哉！此下愚不肖者之所为，不料以贤者为之。虽曰人非圣贤，孰能无过，然其所谓过者，特徵眚耳，未有如是之大而且甚者也。他日临死谓子曰：“我别无过，独不谏天书一事。”予曰：不谏天书之过犹小，受美珠而不谏天书，其过始无外耳。

余澹心评：晋之王导、宋之王旦，皆以奸邪之人，滥冒名臣之目。古今人皆受其欺，笠翁拈出受珠，以为大过，真是照妖镜也。余有《古今精义抉录》一书，专以阐幽摘邪为事，将古今人物披剥肺肝，毫无隐遁。当表而出之，为海内读书人下酒物也。

论魏野、林逋之品行

魏野不求闻达，居陕之东郊。真宗次陕州，遣陕令王希召之，不起，命工图其所居观之。

林逋力学，性恬淡好古，结庐西湖之孤山，三年足不及城市。帝闻其名，赐以粟帛。逋将死赋诗，有“茂陵他日求遗稿，犹喜曾无封禅书”之句。赐谥“和靖先生”。

笠翁曰：魏野、林逋之不出，鄙当世之君臣也。非鄙其他，鄙天书、封禅之一事也。观野之辞征，有“陛下告成天地，延聘岩薮”之句，逋之临绝，有“茂陵当日求遗稿，犹喜曾无封禅书”之句，则其不出之意燎然矣。吾不解当日之君臣何所取义，而为此貽笑大方之事也。宋朝之话柄，莫丑于此！

笠翁又曰：“鸟之将死，其鸣也哀；人之将死，其言也善。”观王旦临死谓子曰：“我别无过，独不谏天书一事。”林逋临死赋诗曰：“茂陵他日求遗稿，犹喜曾无封禅书。”此皆临死之言，其为善言可知矣。临死者不约而同，皆以封禅为可耻，则封禅之是与不是不待辨矣。后世之君臣，凡有事于此者，皆当以二人之语为蓍龟。

笠翁又曰：人君之征贤士，重其抱负而将有以用之也。魏野之贤否姑置弗论，即使果贤，真宗召之不起，则当遣使问道，否则索其书而读之，奈何二者无闻，而仅图其所居以备观览。岂伊尹之可贵者在莘野，而孔明之足羨者在草庐乎？以是知真宗之求贤，务外也，非务内也。

论王旦不与张师德知制诰

旦凡荐人，人未尝知。张师德两诣旦门不得见，旦曰：“可惜张师德。吾向称其有士行，不意两及吾门也。”他日议张师德知制诰，旦以两及门故，不许。

笠翁曰：两及相门，固有妨于士行，然较之受美珠而不谏天书，又为小过矣。旦何刻于绳人而恕于待己耶？有为旦解者曰：长者赐少者，幼者不敢辞，况出于君乎？子贬之至再至三，无乃过甚？予曰：是矣。投以木桃，尚思报以琼瑶，况美珠乎？受美珠而罔报，则惟有死谏而已，奈何不止于不谏，复五上表以请之？岂受长者不义之赐，亦当以不义报之邪？张师德两及旦门，未必非有所规诤。吾谓旦之不与知制诰，其公私之间，尚未可知。故不得不为三致意耳。

论宋理宗训廉谨刑二铭

理宗御制《训廉铭》曰：“周典六计，吏治僚陈。以廉为本，乃良而循。彼肆贪虐，与豺虎均。肥于其家，多瘠吾民。纵逴于法，愧其冠绅。货悖而入，灾及后人。我朝忠厚，黜贪为仁。资尔群辟，是训是遵。”《谨刑铭》曰：“民吾同胞，疾痛犹己。报虐以威，刑非得已。仰惟祖宗，若保赤子。明谨庶狱，惻怛温旨。金科玉条，毫析铢累。夫何大吏，蔑弃法理。逮于郡邑，滥用箠笞。典听朕言，式克钦止。”

笠翁曰：《训廉》、《谨刑》二铭虽详至淳恳，然犹病其意少词多，费人记诵。不若“尔俸尔禄，民膏民脂。下民易虐，上天难欺”十六字，话在口头，又能包括殆尽。此千古不朽之规箴也。

元 纪

论文天祥之全节

张弘范等既灭宋，遣使送天祥赴燕。天祥八日不食，犹生，乃复食。至京，馆人供帐甚盛，天祥不寝处，坐达旦。丞相孛罗召见，天祥长揖不屈。孛罗诘以古今兴废，天祥曰：“一部十七史，从何处说起？吾非应博学宏词，何暇泛论？”孛罗曰：“汝立二王何益？”对曰：“事君如事亲，虽亲疾不可救，岂有不进药之理？”乃下之狱。天祥于狱中作《正气歌》，留燕三年，坐卧一小楼，足不履地。元主欲用之，对曰：“倘缘宽假，得以黄冠归故乡，备方外顾问可也。”王积翁欲令谢昌言等请释为道士，留梦炎不可，事遂寝。帝知其不可屈，将释之。未几，中山狂人自称宋主，有数千人，欲取文丞相。帝召天祥，问以何愿，天祥终不屈，请赐死。帝犹未忍，麾之使退，左右力请，乃杀于燕京之柴市。

笠翁曰：历代死节之臣，未有若季宋之繁者。他且勿论，即陆秀夫负帝昀同溺，越七日，尸浮海上者十万余人。予读史至此，扑心狂赞曰：失天下者得此，亦荣矣哉！以七岁之幼主，而能系天下亿万之人心，则其祖若宗之深仁厚德可概见矣。汉、魏、晋、唐之失国，能若是哉？至于文丞相之死，不死于八日不食之余，而死于三载尚存之后，真所谓千锤之铁、百炼之钢，较尸浮海上之

十万余人，犹觉忠纯而义至，何也？以其身死之难，由于心死之不易也。观其临刑谓吏卒曰：“吾事毕矣。”死后得其衣带中自赞，又有“而今而后，庶几无愧”一语，则知前此一日，犹是吾事未毕之年，前此一日而死，犹不能无愧于其心也。知苏子卿十九年不屈之心，即知文丞相三年不死之故矣。不然，其坐卧一小楼，足不履地者，甚是无谓。地为元地，不肯践之；岂小楼为蜃气所结，绝无基址落人间，而楼上所食者，非绕栋之云、即沾裳之露乎？

论元世祖之待文天祥

笠翁又曰：吾观元世祖之待文天祥，可谓豁达大度之君，深仁厚泽之主矣。天祥执而逃，逃而复执，为张弘范等遣人护送至京，此可杀之时也，而弗杀；馆人供帐甚盛，待之可谓厚矣，天祥不欲寝处，坐以达旦，且抗词倨礼以待相臣，此又可杀之时也，而弗杀；他日召之于狱而欲用之，天祥固辞不屈，此又可杀之时也，世祖不惟不杀，又复赦之。后求南人有才者甚急，遣王积翁谕之，天祥义不受诏，且有黄冠归故乡之请，是欲免脱其身而效从前之故智矣，世祖仍复不杀，更议释之。迨中山狂人浪播起兵之谣，此时立取弃市，犹恐其迟，尚谕之曰：“汝何愿？”见天祥不屈请死，又麾之使出，是始终无杀天祥之心。虽左右力赞而勉从其请，其杀之也，乃天祥自杀，左右杀之，并非世祖之心也。噫，以赫赫之元朝，堂堂之新主，何求于亡国之臣，而委曲优容之若是？不过欲以“忠义”二字风示天下之人臣耳！从来创业之主，必有大过于人者在。予读史终篇，因赞元世祖之为君，乃历代帝王之后劲也。

窥词管见 计二十二则

第 一 则

作词之难，难于上不似诗，下不类曲，不淄不磷，立于二者之中。大约空疏者作词，无意肖曲而不觉仿佛乎曲；有学问人作词，尽力避诗而究竟不离于诗。一则苦于习久难变，一则迫于舍此实无也。欲为天下词人去此二弊，当令浅者深之，高者下之，一俯一仰，而处于才不才之间，词之三昧得矣。

第 二 则

词之关键，首在有别于诗固已，但有名则为词，而考其体段，按其声律，则又俨然一诗，欲觅相去之垠而不得者。如《生查子》前后二段，与两首五言绝句何异；《竹枝》第二体、《柳枝》第一体、《小秦王》、《清平调》、《八拍蛮》、《阿那曲》与一首七言绝句何异；《玉楼春》、《采莲子》与两首七言绝句何异；《字字双》亦与七言绝同，只有每句叠一字之别《瑞鹧鸪》即七言律，《鹧鸪天》亦即七言律，惟减第五句之一字。凡作此等词，更难下笔，肖诗既不可，欲不肖诗又不能，则将何自而可？曰：不难，有摹腔炼吻之法在。诗有诗之腔调，曲有曲之腔调，诗之腔调宜古雅，曲

之腔调宜近俗，词之腔调则在雅俗相和之间。如畏摹腔炼吻之法难，请从字句入手。取曲中常用之字，习见之句，去其甚俗，而存其稍雅又不数见于诗者，入于诸调之中，则是俨然一词，而非诗矣。是词皆然，不独以上诸调。人问：以上诸调明明是诗，必欲强命为词者何故？予曰：此中根据未尝深考，然以意逆之，当有不出范围者。昔日诗变为词，定由此数调始。取诗之协律便歌者，被诸管弦，得此数首，因其可词而词之，则今日之词名仍是昔日之诗题耳，

第 三 则

词既求别于诗，又务肖曲中腔调，是曲不招我而我自往就，求为不类，其可得乎？曰：不然，当其摹腔炼吻之时，原未尝撇却词字，求其相似，又防其太似，所谓存稍雅而去其俗，正为此也。有同一字义而可词可曲者，有止宜在曲，断断不可混用于词者。试举一二言之：如闺人口中之自呼为妾，呼婿为郎，此可词可曲之称也；若稍异其文，而自呼为奴家，呼婿为夫君，则止宜在曲，断断不可混用于词矣。如称彼此二处为这厢、那厢，此可词可曲之文也；若略换一字，为这里、那里，亦止宜在曲，断断不可混用于词矣。大率如尔我之称者，奴字、你字不宜多用；呼物之名者，猫儿、狗儿诸“儿”字不宜多用；用作尾句者，罢了、来了诸“了”字不宜多用。诸如此类，实难枚举，仅可举一概百。近见名人词刻中，犯此等微疵者不少，皆以未经提破耳。一字一句之微，即是词曲分歧之界，此就浅者而言；至论神情气度，则纸上之忧乐笑啼，与场上之悲欢离合，亦有似同而实别，可意会而不可言诠者。慧业文人，自能默探其秘。

第 四 则

词当取法于古是已，然古人佳处宜法，常有瑕瑜并见处，则当取瑜掷瑕。若谓古人在在堪师，语语足法，吾不信也。试举一二言之：唐人《菩萨蛮》云：“牡丹滴露真珠颗，佳人折向筵前过。含笑问檀郎：花强妾貌强？檀郎故相恼，只道花枝好。一面发娇嗔，碎挼花打人。”此词脍炙人口者素矣，予谓此戏场花面之态，非绣阁丽人之容。从来尤物，美不自知，知亦不肯自形于口，未有直夸其美而谓我胜于花者，况揉碎花枝，是何等不韵之事，挼花打人是何等暴戾之形，幽闲之义何居？温柔二字安在？陈后主《一斛珠》之结句云：“绣床斜倚娇无那，烂嚼红绒，笑向檀郎唾。”此词亦为人所竞赏，予曰此娼妇倚门腔，梨园献丑态也。嚼红绒以唾郎，与倚市门而大嚼、唾枣核瓜子以调路人者，其间不能以寸。优人演剧，每作此状以发笑端，是深知其丑而故意为之者也。不料填词之家竟以此事谤美人，而后之读词者又止重情趣，不问妍媸，复相传为韵事，谬乎？不谬乎？无论情节难堪，即就字句之浅者论之，“烂嚼”、“打人”诸腔口，几于俗杀，岂雅人词内所宜？后人作《春绣》绝句云：“闲情正在停针处，笑嚼红绒唾碧窗。”改烂嚼为笑嚼，易唾郎为唾窗，同一事也，辨在有意无意之间，不啻苏合、蜣螂之别矣。古词不尽可读，后人亦能胜前，迹此可概见矣。

第 五 则

文字莫不贵新，而词为尤甚。不新可以不作，意新为上，语

新次之，字句之新又次之。所谓意新者，非于寻常闻见之外，别有所闻所见而后谓之新也。即在饮食居处之内，布帛菽粟之间，尽有事之极奇，情之极艳，询诸耳目，则为习见习闻；考诸诗词，实为罕听罕睹；以此为新，方是词内之新，非《齐谐》志怪、《南华》志诞之所谓新也。人皆谓眼前事、口头语都被前人说尽，焉能复有遗漏者？予独谓遗漏者多，说过者少。唐宋及明初诸贤既是前人，吾不复道；只据眼前词客论之，如董文友、王西樵、王阮亭、曹顾庵、丁药园、尤悔庵、吴次、何醒斋、毛稚黄、陈其年、宋荔裳、彭羡门诸君集中，言人所未言，而又不出寻常见闻之外者，不知凡几！由斯以谭，则前人常漏吞舟，造物尽留馀地，奈何泥于前人说尽四字，自设藩篱，而委道旁金玉于路人哉！词语字句之新亦复如是，同是一语，人人如此说，我之说法独异；或人正我反，人直我曲；或隐跃其词以出之，或颠倒字句而出之，为法不一。昔人点铁成金之说，我能悟之，不必铁果成金，但有惟铁是用之时，人以金试而不效，我投以铁，铁即金矣。彼持不龟手之药而往觅封侯者，岂非神于点铁者哉？所最忌者，不能于浅近处求新，而于一切古家秘笈之中搜其隐事僻句，及人所不经见之冷字，入于词中，以示新艳，高则高，贵则贵矣，其如人之不欲见何！

第 六 则

意新、语新，而又字句皆新，是谓诸美皆备，由《武》而进于《韶》矣。然具八斗才者，亦不能任在如是。以鄙见论之，意之极新者，反不妨词语稍旧。尤物衣敝衣，愈觉美好；且新奇未睹之语，务使一目了然，不烦思绎，若复追琢字句而后出这，恐稍稍不近自然，反使玉宇琼楼堕入云雾，非胜算也。如其意不能

新，仍是本等情事，则全以琢句炼字为工，然又须琢得句成，炼得字就。虽然极新极奇，却似词中原有之句，读来不觉生涩，有如数十年后重遇故人，此词中化境，即诗赋古文之化境也。当吾世而幸有其人，那得不执鞭恐后！

第七则

琢句炼字，虽贵新奇，亦须新而妥，奇而确。妥与确，总不越一理字。欲望句之惊人，先求理之服众。时贤勿论，吾论古人。古人多工于此技，有最服予心者，“云破月来花弄影郎中”是也；有蜚声千载上下，而不能服强项之笠翁者，“红杏枝头春意闹尚书”是也。“云破月来”句，词极尖新，而实为理之所有：若红杏之在枝头，忽然加一“闹”字，此语殊难着解。争斗有声之谓闹，桃李争春则有之，红杏闹春，予实未之见也。“闹”字可用，则“妙”字、“斗”字、“打”字皆可用矣。宋子京当日以此噪名，人不呼其姓氏，竟以此作尚书美号，岂由尚书二字起见邪？予谓“闹”字极粗极俗，且听不入耳，非但不可加于此句，并不当见之诗词。近日词中争尚此字，皆子京一人之流毒也。

第八则

词之最忌者，有道学气，有书本气，有禅和子气。吾观近日之词，禅和子气绝无，道学气亦少，所不能尽除者，惟书本气耳。每见有一首长调中，用古事以百纪，填古人姓名以十纪者，即中调小令亦未尝肯放过古事，饶过古人。岂算博士、点鬼簿之二说独非古人古事乎？何记诸书最熟，而独忘此二事、忽此二人也？若

谓读书人作词，自然不离本色，然则唐宋明初诸才人亦尝无书不读，而求其所读之书于词内，则又一字全无也。文贵高洁，诗尚清真，免于词乎？作词之料，不过情景二字，非对眼前写景，即据心上说情，说得情出，写得景明，即是好词。情景都是现在事，舍现在不求，而求诸千里之外，百世之上，是舍易求难，路头先左，安得复有好词！

第九 则

词虽不出情景二字，然二字亦分主客：情为主，景是客。说景即是说情，非借物遣怀，即将人喻物，有全篇不露秋毫情意，而实句句是情，字字关情者。切勿泥定即景咏物之说，为题字所误，认真做向外面去。

第十 则

诗词未论美恶，先要使人可解。白香山一言，破尽千古词人魔障。曩姬尚使能解，况稍稍知书识字者乎？尝有意极精深，词涉隐晦，翻译数过，而不得其意之所在。此等诗词，询之作者，自有妙论，然不能日叩玄亭，问此累帙盈篇之奇字也。有束诸高阁，俟再读数年，然后窥其涯涘而已。

第十一 则

意之曲者，词贵直；事之顺者，语宜逆。此词家一定之理，不

折不回。表里如一之法，以之为人不可无，以之作诗作词，则断断不可有也。

第十二则

“一气如话”四字，前辈以之赞诗，予谓各种文词，无一不当如是。如是即为好文词，不则好到绝顶处，亦是散金碎玉。此为“一气”而言也。“如话”之说，即谓使人易解，是以白香山之妙论，约为二字而出之者。千古好文章总是说话，只多“者、也、之、乎”数字耳。作词之家，当以“一气如话”一语，认为四字金丹。“一气”则少隔绝之痕，“如话”则无隐晦之弊。大约言情易得贯穿，说景难逃琐碎，小令易于条达，长调难免凑补。予自总角时学填词，于今老矣，颇得一二简便之方，请以公诸当世：总是认定开首一句为主，第二句之材料不用别寻，即在开首一句中想出。如此相因而下，直至结尾，则不求一气而自成一气，且省却几许淘摸工夫。此求“一气”之方也。“如话”则勿作文字做，并勿作填词做，竟作与人面谈，又勿作与文人面谈，而与妻孥臧获辈面谈，有一字难解者即为易去，恐因此一字模糊，使说话之本意全失。此求“如话”之方也。前著《闲情偶寄》一书，曾以生平底里和盘托出，颇于此道有功，但恐海内词人，有未尽寓目者。如谓斯言有当，请自坊间索而读之。

第十三则

诗词之内，好句原难，如不能字字皆工，语语尽善，须择其菁华所萃处，留备后半幅之用。宁为处女于前，勿作强弩之末。大

约选词之家，遇前工后拙者，欲收不能；有前不甚佳，而能善其后者。即释手不得。闺中阅卷亦然，盖主司之取舍，全定于终篇之一刻。“临去秋波那一转”，未有不令人消魂欲绝者也。

第十四则

词要住得恰好。小令不能续之使长，长调不能缩之使短，调之单者，欲增之使双而不得，调之双者，欲去半调而使单亦不能。如此方是好词。其不可断续增减处，全在善于煞尾。无论说尽之话。使人不能再赘一词，即有有意蕴藉不吐，而吞若为歇后语者，亦不能为蛇添足，才是善于煞尾。盖词之段落与诗不同，诗之结句有定体，如五七言律诗，中四句对，末二句收，读到此处，谁不知其是尾？词则长短无定格，单双无定体，有望其歇而不歇，不知其歇而竟歇者，故较诗体为难。

第十五则

有以淡语收浓词者，别是一法。内有一片深心，若草草看过，必视为强弩之末。又恐人不得其解，谬谓前人煞尾，原不必尽用全力，亦不必尽顾上文，尽可随拈随得，任我张弛，效而为之，必犯锐始懈终之病。亦为饶舌数语：大约此种结法，用之忧怨处居多。如怀人送客，写忧寄慨之词，自首至终，皆诉凄怨，其结句独不言情，而反述眼前所见者，皆自状无可奈何之情，谓思之无益，留之不得，不若且顾目前，而目前无人，止有此物，如“心事竟谁知，月明花满枝”、“曲中人不見，江山數峰青”之类是也。此等结法最难，非负雄才具大力者不能。即前人亦偶一为之，学

填词者慎勿轻效。

第十六则

双调虽分二股，前后意思必须联属，若判然两截，则是两首单调，非一首双调矣。大约前段布景，后半说情者居多，即《毛诗》之兴比二体，若首尾皆述情事，则赋体也。即使判然两事，亦必于头尾相续处用一二语，或一二字作过文，与作贴括中搭题文字同是一法。

第十七则

词内人我之分，切宜界得清楚。首尾一气之调易作，或全述己意，或全代人言，此犹戏场上一人独唱之曲，无烦顾此虑彼。常有前半幅言人，后半幅言我，或上数句皆述己意，而收煞一二语忽作人言，甚至有数句之中互相问答，彼此较筹亦至数番者，此犹戏场上生旦净丑数人迭唱之曲，抹去生旦净丑字面，止以曲文示人，谁能辨其孰张孰李？词有难于曲者，此类是也。必使眉清目楚，部位井然，大都每句以开手一二字作过文，过到彼人身上，然后说情说事，此其浅而可言者也。至有不作过文，直讲情事，自然分出是人是我是，此则所谓神而明之，存乎其人者矣。因见词中常有人我难分之弊，故亦饶舌至此。

第十八则

句用“也”字歇脚，在叶韵处则可，若泛作助语辞，用在不叶韵之上数句，亦非所宜。盖曲中原有数调，一定用“也”字歇脚之体，既有此体，即宜避之，不避则犯其调矣。如词曲内有用“也罗”二字歇脚者，制曲之人即奉为金科玉律，有敢于此曲之外再用“也罗”二字者乎？词与曲接壤，不得不严其畛域。

第十九则

填词之难，难于拗句。拗句之难，只为一句之中，或仄多平少，平多仄少，或当平反仄，当仄反平，利于口者叛乎格，虽有警句，无所用之，此词人之厄也。予向有一法，以济其穷，已悉之《闲情偶寄》，恐有未尽阅者，不妨再见于此书。四声之内，平止得一，而仄居其三，人但知上去入三声皆丽乎仄，而不知上之为声，虽与去入无异，而实可介乎平仄之间，以其另有一种声音，杂之去入之中，大有泾渭，且若去平声未远者。古人造字审音，使居平仄之介，明明是一过文，由平至仄，从此始也。臂之四方乡音，随地各别，吴有吴音，越有越语，相去不啻河汉。而一到接壤之处，则吴越之音相半，吴人听之觉其同，越人听之亦不觉其异，九州八极，无一不然。此即声音之过文，犹上声介乎平去入之间也。词家当明是理，凡遇一句之中，当连用数仄者，须以上声字间之，则似可以代平，拗而不觉其拗矣。若连用数平者，虽不可以之代平，亦于此句仄声字内用一上声字间之，即与纯用去入者有别，亦似可以代平。最忌连用数去声或入声，并去入亦不

相间，则是期期艾艾之文，读其词者，与听口吃之人说话无异矣。

第二十则

不用韵之句，还其不用韵，切勿过于骋才，反得求全之毁。盖不用韵为放，用韵为收，譬之养鹰纵犬，全于放处逞能。常有数句不用韵，却似散漫无归，而忽以一韵收住者，此当日造词人显手段处。彼则以为奇险莫测，在我视之，亦常技耳。不过以不用韵之数句，联其意为一句，一直赶下，赶到用韵处而止。其为气也贵乎长，其为势也利于捷；若不知其意之所在，东奔西驰，直待临崖勒马，韵虽收而意不收，难乎其为调矣。

第二十一则

二句合音，词家所忌。何谓合音？如上句之韵为“东”，下句之韵为“冬”之类是也。东冬二字意义虽别，音韵则同，读之既不发调，且有带齿粘喉之病，近人多有犯此者。作诗之法，上二句合音犹曰不可，况下二句之叶韵者乎！何谓上二句合音？如律诗中之第三句与第五句，或第五句与第七句煞尾二字，皆用仄韵，若前后同出一者，如意义、气契、斧抚、直质之类，诗中犯此，是犹无名之指，屈而不伸，谓之病夫不可，谓之无恙全人亦不可也。此为相连相并之二句而言，中有隔句者，不在此列。

第二十二则

曲宜耐唱，词宜耐读。耐唱与耐读，有相同处，有绝不相同处。盖同一字也，读是此音，而唱入曲中，全与此音不合者，故不得不为歌儿体贴，宁使读时碍口，以图歌时利吻。词则全为吟诵而设，止求便读而已。便读之法，首忌韵杂，次忌音连，三忌字涩。用韵贵纯，如东、江、真、庚、天、萧、歌、麻、尤、侵等韵，本来原纯，不虑其杂；惟支、鱼二韵之字，庞杂不伦，词家定宜选择。支、微、齐、灰之四韵，合而为一是已，以予观之，齐、微、灰可合，而支与齐、微、灰究竟难合。鱼、虞二韵合之诚是，但一韵中先有二韵，鱼中有诸，虞中有夫是也。盖以二韵之中，各分一半，使互相配合，与鱼、虞二字同音者为一韵，与诸、夫二字同音者为一韵，如是则纯之又纯，无众音嘈杂之患矣。予业有《笠翁诗韵》一书刊以问世，当再续《词韵》一种，了此一段公案。音连者何？一句之中，连用音同之数字，如先烟、人文、呼胡、高豪之属，使读者粘牙带齿，读不分明，此二忌也。字涩之说，已见前后诸则中，无庸太絮。审韵之后，再能去此二患，则读者如鼓瑟琴，铿然有余韵矣。

千古奇闻

简狄启商

契母简狄者，有娥氏之长女也，生契。简狄性贤敏，上知天文，下知人事，及契长而教之。契性聪明仁孝，不违其教，卒致有位。

湖上笠翁曰：史称简狄吞黿而生契，以为瑞征。余谓史亦好异矣。夫有简狄之贤，自能启契之功，开商之绪。虽微瑞征，何害为圣母？

姜嫄兴稷

弃母姜嫄者，郤侯之女也。姜嫄之性，清静专一，好种稼穡。及弃长而教之，种树桑麻。弃之性明而仁，能遵其教，卒致其功。尧封弃于郤，号曰后稷。

湖上笠翁曰：姜嫄教弃稼穡，实开万世民生之天，宜后裔卒有天下，肇基八百年，母有以创始也。故周公训成王，曰“先知稼穡之艰难”，盖得姜嫄之遗意。

太妊胎教

太妊，王季后，文王母也。性端庄诚一，及娠，目不视恶色，耳不听恶声；口不出恶言，食不尝恶味。生文王而明圣，太妊教之一而识百，卒兴姬业。

湖上笠翁曰：胎教尚矣。张茂先志之《博物》，程明道垂之《语录》，大都谓子之成于母，以气相感，而淑慝由之。若《思齐》太妊，真文王之母，以故太姒嗣徽音，则百斯男，其姬业之所由以肇兴者乎！

辞不视朝

唐穆宗大渐，内臣议请郭太后临朝。太后曰：“向者武后妖蠹，幻惑高宗，擅亲庶政。及中宗践位，蒙揜圣德，遽行迁逮，几于革命。赖宗社威祐，神器再复。每闻其说，未尝不疾首痛心。奈何今日吾儿厌世，卿等骤兴此议？我家九个，与武氏同流。先祖汾阳，有社稷大勋。我外氏，门阅赫奕。我礼宾帝室，非复嫔嫗之比，岂可污彤管、继悖逆者？即今皇太子聪睿，卿等各宜慎择耆旧，亲侍左右。远屏奸佞，勿令亲密内官，干预时政，吾所愿也。”遂取制裂之。太后兄钊，任太常卿，闻之亦密疏白后，曰：“果徇此请，当率子弟纳官爵归田。”太后览疏，泣曰：“我祖尽忠于国，馀庆钟于我兄。”

湖上笠翁曰：《书》云：“牝鸡之晨，为家之索。”太后临朝，

无乃非权也乎？郭后鉴武氏之失，裂制书，命简耆旧辅弼储君，可谓得母后之体，能守经者也。若宋诸母后，视朝有誉，岂其有得于权变之宜欤？吁！使郭后处于宋李，固不难于从权；而宋诸后处于唐时，犹不难于守经。是以圣人贵居正达变。

不乐子帝

宋太祖母杜氏，治家严而有法。陈桥之变，后闻之，曰：“吾儿素有大志，今果然矣！”乃尊为皇太后。太祖拜于殿上，后愀然不乐。左右进曰：“臣闻母以子贵，今子为天子，胡为不乐？”后曰：“吾闻为君难。天子置身兆庶之上，若治得其道，则此位可尊；苟或失驭，求为匹夫不可得，是吾所以忧也。”太祖拜曰：“谨受教。”

湖上笠翁曰：天下至大器也，帝王至重位也，宋祖奄有天下，而杜后愀然不乐，岂故为是矫饰哉？盖念君犹舟，庶民犹水，水能载舟，也能覆舟，故曰“为君难”。难于操舟，此杜后有忧之心乎？

辞释子瞻

宋慈圣曹太后，真定人，枢密使曹武惠王彬之孙也，颇涉经史。仁宗崩，子英宗即位，太后垂帘听政，多援经义以决事，左右臣仆毫分不以假借，宫省肃然。及神宗即位，苏轼以诗得罪，不御史狱，人以为必死。后违豫，中闻之，谓帝曰：“尝忆仁宗以制科得轼兄弟，喜曰：‘吾为子孙得两宰相！’”今闻轼以作诗系狱，得

非仇人中伤之乎？据至于诗，其过微矣。吾疾势已笃，不可以冤滥致伤中和，宜熟察之。”帝涕泣，轼由此得免。

湖上笠翁曰：余观子瞻以诗被祸者屡矣。顾其才足以凭陵千古，卓绝一时，真有宋作者。惜其才高忌深，几不能免。赖曹后从容以先帝制科得人为解，可谓婉而救之，宜其辞之未毕而已释累矣。孔子叹才难，慈圣亦云。

手诏传王

宋徽宗崩，皇太后孟氏降手诏布告中外，俾康王嗣统。其略曰：“历年二百，人不知兵。传序九君，世无失德。虽举族有北辕之衅，而敷天同左袒之心。乃眷贤王，越居旧服。汉家之厄十世，宜光武之中兴；献公之子九人，惟重耳之尚在。兹乃天意，夫岂人谋！”康王受命，即皇帝位于应天。

湖上笠翁曰：文辞岂可少哉！子产有辞，郑国赖之。尝慨宋徽宗之季，嗣统衰微，幸孟后手诏一颁，而中外始知宋有君矣。且其词缛情恳，足称有用文章。摇摇国脉，续于笔端。君子谓孟后于是乎能文辞也。

染竹成斑

有虞二妃者，帝尧之二女也。长曰娥皇，次曰女英。尧以舜有玄德，乃妻二女以观厥内。二女承事舜于畎亩之中，不以天子之女故，而谦恭俭，思尽妇道。舜陟方死于苍梧之野，二女泣血，

染竹成斑，遂沉湘江而死，世传为湘君之神。

湖上笠翁曰：余尝疾世之言怪者，至谓二女泣血，染竹成斑，以为湘君之神，心切怪之。及游湘江，间谘其事。苍梧人为余详言，乃指祠前斑竹，簌簌然宛如泪渍；顷焉风生，又如玉声璆然，令人不觉悲慕交作。因幡然寤曰：《易》称阴阳合德，以通神明；《传》称用物弘，取精多，则魂魄强，是以有精爽以至于神明。窃谓二妃配舜之圣，其为德合阴阳矣。其用物弘，取精多矣。而疆死于正为神，理或然乎？

许殉不爽

唐武宗贤妃王氏，邯郸人，失其世。年十三，善歌舞，得入宫中侍武宗。妃性机悟，多助画。初帝稍惑方士说，欲饵药长年，后寝不豫。妃每谓近侍曰：“陛下日服丹饵，意取不死，肤泽稍槁，吾独忧之。”俄而疾寝，妃侍左右，帝熟视“吾气奄奄，精虑耗尽，顾与汝辞！”答曰：“陛下大福未艾，安语不祥？”帝曰：“脱如我言，奈何？”对曰：“陛下万岁后，妾得以殉帝。”不复言。及大渐，妃悉取所常贮，散遗宫中。帝崩，即自经幄下，一时嫔媛皆为感动。宣宗即位，嘉其节，陪葬于端陵之柏城。

湖上笠翁曰：殉葬非古也，君子所不道焉。独取王贤妃，始而能辨丹饵之失，继而能践殉葬之言，可不谓贤哉？语云：“死有重于泰山，或轻于鸿毛。”贤妃盖能识其轻重者。

委婉存节

梅妃姓江氏，莆田人。父仲逊，世为医。妃年九岁，能诵二《南》。语父曰：“我虽女子，期以此为志。”父奇之，字曰采蘋。开元中，高力士使闽越，见妃少丽，选归侍明皇，大见宠异。妃善属文，自比谢女，淡装雅服，而姿态明秀。性喜梅，所居栏槛，悉植数株。上以其所好，名曰梅妃。是时海内无事，于兄弟间极友爱，日从燕间必妃侍侧，上命破橙，往赐诸王。至汉邸，潜以足蹶妃履，登时退阁。上命连趣，报言：“适履珠脱缀，缀竟当来。”久之，上亲往趣，妃拽衣迓上，言：“胸腹疾作，不果前也。”卒不至。后会杨太真入侍，宠幸日夺。上虽无疏意，然为杨多方谗忌，竟迁于上阳宫。妃乃自作《楼东赋》献上。上览之惻然，封珍珠一斛，密赐妃。妃不受，以诗付使者曰：“为我进御前也。”诗曰：“柳叶双眉久不描，残妆和泪污红绡。长门自是无梳洗，何必珍珠慰寂寥。”上读之，愈邑邑不乐。令乐府以新声度之，号《一斛珠》曲名。后禄山犯阙，上西幸，太真死。及东归，寻妃所在不可得。上惨然流涕，忽悟温泉汤池侧，有梅十馀株，上命驾令发视之，卒得妃尸。裹以锦袖，盛以酒糟，视其胁下有刀痕，盖执节而死乱兵之手。上自制文谕之，以妃礼葬焉。

湖上笠翁曰：人不患不能死，唯患死之不得其所。梅妃当赐橙蹶履时，非不能死，死伤勇。及以谗而迁上阳，楼东有赋，却珠有诗，可想见其风致。禄山之乱，执节而死兵燹，得死所矣。

引杖逐击

周恭帝幼冲，军政多决于韩通。通愚愎，宋太祖英武有度量，多智略，屡立战功，由是将士皆归心焉。及将北征，京师喧言出军之日，当立点检为天子。太祖惧，密以告家人曰：“外间汹汹如此，将若之何？”太祖姊长公主方在厨，引面杖逐太祖击之，曰：“大丈夫临大事，可否当自决胸怀，乃来家间恐怖妇女何为！”

湖上笠翁曰：《易》曰：“天造草昧，宜建侯而不宁。”天厌周德，畀宋以有天下。方太祖遽闻喧言，不无疑畏。斯时也，不激则不奋，以故姊以面杖逐击，盖激之也。故曰：“苏秦之相六国，妻嫂实激之。”然则激亦人之不可少者。

请免伐卫

卫姬者，卫侯之女，齐桓公之夫人也。桓公好淫乐，卫姬为之一不听郑佞之音。桓公用管仲、宁戚行霸道，诸侯皆朝，而卫独不至。桓公与管仲谋伐卫，罢朝还闺，卫姬望见桓公，脱簪珥，解环珮，下堂再拜曰：“愿请卫之罪。”桓公曰：“吾与卫无故，姬何请耶？”对曰：“妾闻之，君有三色：显然喜乐，容貌淫乐者，钟鼓酒食之色；寂然清静，意气沉抑者，丧祸之色；忿然充满，手足矜动者，攻伐之色。今妾望君举趾高，色厉音扬，意在卫也，是以请之。”桓公许诺。明日临朝，管仲趋进曰：“君之莅朝也，恭而气下，言则徐，无伐国之志，是释卫也。”桓公曰：“善！”乃立卫姬为夫人，号管仲为仲父。曰：“夫人治内，仲父治外，寡人虽愚，足以立于世矣。”

湖上笠翁曰：桓公霸主也，管仲贤佐也，不有卫姬治内，鲜克以臻一匡之业，然则内政岂可少哉？故文王治外，文母治内，而姬绩用光。于以见卫姬之明智，殆有康叔之遗风。不然，何见未形之谋，而存不振之国耶？后世不察其故，见妇小有材识，则以牝晨为嫌；或有骄妇材识，则辄以狮吼自处之。二者皆非处内之道，所由则异于周文、齐桓远矣。

趣子成名

齐庄公且伐莒，为车五乘之宾，而杞梁、华舟独不与焉。归而不食，其母曰：“汝生而无义，死而无名，则虽非五乘，孰不汝笑也？汝生而有义，死而有名，则五乘之宾尽汝下也。”趣食乃行。杞梁、华舟同车，侍于庄公而行。至莒，莒人逆之。杞梁、华舟下斗，获甲首三百。庄公止之，曰：“子止，与子同齐国。”杞梁、华舟曰：“君为五乘之宾，而舟、梁不与焉，是少吾勇也。临敌涉难，止我以利，是污君行也。深入多杀者，臣之事也。齐国之利，非吾所知也。”遂复进斗，杀二十七人而死。

湖上笠翁曰：杞梁、华舟之勇，名著于《春秋》备矣，余不详及。独贤母氏能重义全名，少五乘之宾，趣之而行，死而无怵，何其烈也！揆其心，盖不欲以私爱而忘公义，以身计而损国威。后世有目子为恶而溺爱以成之，至杀身而恬不知悔者，闻杞母之风亦可以少愧。

得金命瘞

夏竦为丹阳主簿时，侍母燕坐，见庭雀双舞，俱汲于地，发之得金鸞二。母命瘞之。竦因筑亭其上，后人掘地求之不得，遂为池。

湖上笠翁曰：余闻无故而得金者不祥，夏母命瘞金鸞，岂土黄金哉，意以无故当不祥，孰与居常为安乎，善哉！陈省华之妻曰：“不求金玉贵，但愿子孙贤。”二母可谓易地同心者矣。

居贫抚教

朱文公母祝氏，歙人朱确女，年十八归文公父。讳松，校中秘书。祝性仁厚端淑，事舅姑孝谨笃至，有人所难能者。及中书卒，文公年十有四，祝辛勤抚教，俾知所尚。既长，贫病困蹙，人所不堪，而祝处之怡然。卒年七十有三。

湖上笠翁曰：余读《新安志》及朱夫子书，往往称母之教，乃知大贤之成，必有所自。稽之孔孟，盖有尼丘之祷，学宫之迁，而后为圣为贤。是则子资母成，初无生知学知之异，以予观于朱母而益信。

笞子臧否

吴庠妻谢氏，素贤淑，生子贺。及长，尝与宾客言人长短。夫人屏间窃闻之，怒笞贺百馀。或解夫人曰：“臧否，士之常，忍笞之若是？”夫人曰：“爱其女者，必取三复白圭之士妻之。今独产一子，使知义命，而出语忘亲，岂可久之道哉！”因涕泣不食，贺由是恐惧谨默。

湖上笠翁曰：余尝读《金人三缄其口铭》，曰“戒之哉！无多言，多言多败”；又曰“口是何？伤祸之门也”。吴贺言人臧否，有祸机矣。而母笞之改行，是远祸之道也。马援戒子有云：“闻人之过，如闻父母之名。耳可得闻，口不可得而言。”盖亦此意。

躬课妾子

温州章文宝聘某氏，未成婚，纳妾而先御有娠。章得疾且死，氏闻，请往视。父母谓未成婚，尚可别议，不许。氏坚欲往。章一见即逝，氏为棺殓之，拊妾守丧。妾生子纶，氏亲教读书，后竟登进士，官至礼部侍郎。纶先欲疏请复立旧太子，恐貽母忧，未果。氏闻之，谓曰：“吾平日教尔何为？汝能谏死职，我虽为官婢，无所恨也。”纶遂以疏入，忤旨。氏怡然。纶寻复官，终养。氏尝自为诗见志，人争传诵。诗曰：“谁云妾无夫？妾犹及见夫方殂。谁云妾无子？侧室生儿与吾似。儿读书，妾辟纻，空房夜夜闻啼鸟。儿能成名妾不嫁，良人瞑目黄泉下。”

湖上笠翁曰：今有夫亡抔土未干，即有弃子别适者，所谓

“六尺之孤安在”！若章妇未婚守志，躬课妾子，卒为名臣，此则能人所不能者。吾恐宇宙虽大，亦不多见此妇。

老不逾闕

季康子尝如敬姜往候，敬姜开闕而与之言，皆不逾闕。仲尼谓敬姜别于男女之礼矣。《诗》云：“女也不爽。”此之谓也。

湖上笠翁曰：礼莫大于别嫌明微。余考敬姜实康子从祖叔母也。而敬姜以尊临卑，虽老不出于闕；康子以卑候尊，虽贵不敢入闕。于以覩古人慎远嫌疑，合于礼矣。主裨政者，当以季氏为法。

赴火死义

梁节姑姊者，梁之妇人也。因失火，兄子与其己子在內。欲取兄子，辄得其子，独不见兄子。火盛，不得复入，妇人将自趋火。其友止之曰：“子本欲取兄之子，惶恐卒得己子，中心谓何？何至自赴火。”妇人曰：“梁国岂可以告人晓也。被不义之名，何面目以见兄弟国人哉！吾欲复投吾子，为失母之恩。吾势不可以生。”遂赴火而死，宁不污其名。

湖上笠翁曰：子固子也，兄弟之子亦子也。而节姑逮火，独欲取其兄子何居？盖人莫病于自私，私己子而忘兄子，公义谓何？故宁己子之亡，而不欲其兄子之失，此节姑之本心。今己子得矣，而兄子不得，其将何以自解于天下，不得已而至于赴火。呈，亦

烈矣！节姑其知义矣。

痴姨特免

魏宦者符承祖宠于太后，封佞浊子，亲姻争附以求利，从姨母杨氏为姚家妇，独否。与之衣，不受，不得已或受而埋之。与之婢，曰：“我家无食，不能饲也。”常着敝衣自若。或遣车迎，不肯起。强抱置车上，则大哭。符氏内外，号为“痴姨”。及承祖败，执其二姨。其一姨伏法，魏王见姚姨贫敝，特赦之。

湖上笠翁曰：自符氏蒙宠时，观姚姨不附，痴哉姨乎。然以二姨论之，一曰痴，一曰不痴；痴者免，而不痴者不免。果孰痴耶？果孰不痴耶？夫人之痴，其诸异乎人之痴欤？

进食王孙

韩信家贫，钓于淮阴城下，漂母伺信饥，与之食。信喜曰：“吾必有以重报母！”母怒曰：“大丈夫不能自食，吾哀王孙而进食，岂望报乎？”及信为齐王，延漂母上坐，酬之千金。

湖上笠翁曰：漂母非妇人也，其殆秦、汉间隐君子流欤？不然，哀王孙而不望报，此岂妇人所能事耶？余尝过淮，有吊漂母祠诗曰：“进食王孙不望酬，千金报母义韩侯。可怜云梦君恩薄，未谅淮阴报女流。”

哭尸崩城

齐庄公袭莒，杞梁殖战而死。庄公妇，遇其妻，使使者吊于郊。妻辞曰：“殖之有罪，何辱命焉。若免于罪，犹有先人之敝庐在。”妻不得郊吊，齐侯吊诸其室。杞梁妻无子，内外皆无五服之亲。既无所归，乃枕其夫之尸于城下而哭，内诚动人，道路过者莫不为之挥涕。十日，而城为之崩。既葬，曰：“吾可归矣！夫人必有所倚者。父在则倚父，夫在则倚夫，子在则倚子。今吾上则无父，中则无夫，下则无子。内无所依以见吾诚，外无所倚以见吾节。吾岂能更二哉，亦死而已。”遂赴淄水而死。

湖上笠翁曰：余读他传，有谓：“秦孟姜，富人女也，赘范杞梁三日，夫赴长城之役，久而不归，为制寒衣送之。至长城寻问，知夫已故，乃号天顿足，哭声震地。城崩，寻夫骸骨多难认，啮指血滴之，入骨不可拭者，知其为夫骨，负之而归。至潼关，筋骨已竭，知不能还家，乃置骸岩下，坐于旁而死。潼关人重其节义，立像祀之。”信斯言也。则范杞梁固齐杞梁殖，而孟姜乃殖之妻无疑。第姓氏互异，岂后人相传之误耳？余尝有赞曰：“殉国杞郎，殉夫姜女。擗踊一呼，山城崩圯。桓桓齐侯，野吊非礼。匹妇能辞，卒勤玉趾。死之从天，先民所与。”

却金不顾

鲁秋胡子，娶妻邵氏五日，往仕于陈，五年乃归。未至家，见路旁妇人采桑，秋胡子悦之，下车与语，妇人采桑不顾。秋胡子

复谓曰：“力田不如遇丰年，采桑不如见贵郎。吾有金，愿以与夫人。”妇人曰：“嘻！夫采桑力作，纺绩织纫，以供衣食，奉二亲。吾不愿金，所愿子无有外意，妾亦无淫佚之志。收子之笥金！”秋胡子遂去。至家，奉金与母，使人唤妇至，乃向采桑者也，秋胡子惭。妇曰：“子束发辞亲，往仕五年乃还。所当驰骤扬尘，疾至以悦其亲。今也乃悦路旁妇人，下子之车，以金与之，是忘母也，忘母不孝；好色淫佚，是污行也，污行不义。夫事亲不孝，则事君不忠。处家不义，则治官不理。孝义并亡，必不遂矣。妾不忍见子改娶矣，妾亦不嫁。”遂去而东，投河而死。

湖上笠翁曰：甚矣，行之不可不修也。秋胡子一不修其行于桑间，其妻且耻而死焉。余有《却金妇》诗云：“多少亡躬只为金，贤哉贞妇却桑阴。当时脱或轻云诺，生死何如愧恨心。”

不愿改嫁

御史范付正访李白之后，并无一男，止得二孙女，为民间妇。范欲改嫁士族，女谢曰：“孤贫失身，纺绩可度日，不愿改嫁。”御史奖异焉。

湖上笠翁曰：盛名无后，谪仙之不祀，亦可伤也。范公之访其后，岂亦好名之流欤？不然，何令二女改嫁士族为也？幸女矢志不渝，而后乃祖之风未坠。噫，有女如此，又奚取刘景升儿子耶！

咎夫自杀

盖之偏将丘子之妻，素知大义。戎伐盖，杀其君，令于盖群臣曰：“敢有自杀者，妻子尽诛。丘子自杀，人救之，不得死。既归，其妻谓之曰：“吾闻将节，勇而不果生，故士民尽力而不畏死，是以战胜攻取，故能存国安君。夫战而忘勇非孝也，君亡不死非忠也。今军败君死，子独何生？忠孝忘于身，何忍以归？”丘子曰：“盖小戎大，吾力毕能尽，君不幸而死。吾固自杀也，以救故不得死。”其妻曰：“曩日有救，今又何也？”丘子曰：“吾非爱身也。戎令曰：自杀者诛及妻子。是以不死。死又无益于君。”其妻曰：“吾闻之：“主忧臣辱，主辱臣死。”今君死而子不死，可谓义乎？多杀士民，不能存国而自活，可谓仁乎？忧妻子而忘仁义，背故君而事暴强，可谓忠乎？人无忠臣之道，仁义之行，可谓贤乎？《周书》曰：先君而后臣，先父母而后兄弟，先兄弟而后交友，先交友而后妻子。妻子，私爱也；事君，公义也。今子以妻子之故，失人臣之节，偷生苟活，妾且耻之，况于子乎？吾不能与子蒙耻而生焉。”遂自杀。戎君贤之，祠以太牢，而以将礼葬之。赐其弟金百镒，以为卿，而使别治盖。

湖上笠翁曰：戎杀盖君而丘子为偏将，即无论有失律之惭；抑且有与死封疆之义。此而不死，焉用生为？宜妻耻之而死。语曰：“顺死贤于逆生”，其丘子之妻之谓也。

《璇玑图》诗

苏蕙字若兰，陈留令武功苏道质第三女也。年十六归窦滔，滔甚敬之。苻坚寇襄阳，以滔为安南将军，留镇襄阳。滔携宠姬赵阳台往，苏不肯与俱，而滔竟与断音问。后苏悔恨自伤，因织锦为回文，纵广八寸，计八百馀言，纵横反复，皆成文章，因以寄滔。滔览之，感其意，于是迎苏来襄，而归阳台于关中，恩好愈笃焉。其诗曰：“仁智怀德圣虞唐，真妙显华重荣章。臣贤惟圣配英皇，伦匹离飘浮湘江。津河隔塞殊山梁，民士感旷悲路长。身微闵己处幽房，人贱为女有柔刚。亲所怀想思谁望，纯清志洁齐冰霜。新故感意殊面墙，春阳熙茂凋兰芳。琴清流楚激宫商，奏曲发声悲摧藏。音和咏思惟空堂，心忧增慕怀惨伤。”

湖上笠翁曰：诗自三百篇之后，又有三言起于夏侯湛，四言起于韦孟讽谏楚王戊，五言起于苏武、李陵，六言起于谷永，七言起于汉武帝使群臣为柏梁诗，九言起于高贵乡公。而诸家变体，又各纷纷沓出。如苏伯玉妻《盘中诗》，窦滔妻《璇玑图》诗，则巧思妙意，至斯极矣。余有拟若兰寄滔回文一律云：“空闺静掩独魂消，锦织新诗寄寂寥。红日晓妆鸾吊镜，翠楼春吹风离箫。瞳瞳夜月秦吴渡，暗暗朝云楚岫遥。蓬鬓各天长极目，鸿鳞望断信迢迢。”

预识状头

李翱为尚书牧，进士卢储来访投卷。翱长女见卢文，寻绎数

四，曰：“此人必为状头！”翱乃慕为婿，明年果中状元。卢作《催妆》诗曰：“昔年将事玉京游，第一仙人许状头。今日已成秦晋会，早教鸾凤下妆楼。”

湖上笠翁曰：卢储信才矣，平居中恶能识状元？而翱女一睹其文即识之，其亦女中一状元欤？假使当年是男子，吾知状头属阿谁。

资治新书

祥刑末议

论刑具凡四则

刑具代有变更，其载在律条，一成而不可易者，厥数有六：曰笞曰杖二者皆用荆条，笞小杖大曰讯即今之竹板。有重罪不服，责以讯之曰枷项刑，用以示众曰桎手刑，俗名手拷曰镣足刑，俗名脚镣。视罪之重轻，为名之巨细。枷轻于桎、镣，讯轻于枷，笞、杖又轻于讯。非极重之罪，有死无赦者，不用镣、桎；非罪犯众怒，法当榜示以快人心者，不用枷。下此常用之具，则讯、杖、笞三者而已。杖、笞止于臀受，讯则臀、腿分受，三者皆不及腿湾，恐伤其足，当事者无不知之。此老吏常谈，无庸赘述，言其未经道破者而已矣。有同是一件刑具，始用之而重，后用之而轻；今日用之轻，明日用之而又重者。此其故，非但官长不知，即讯之老成隶卒亦茫然不解。渔以博谄群访而得之，不敢不为当事告。其倏重倏轻不可测识者，则以新旧燥湿之不同，而用刑之隶卒又漫不盖藏，听其露处故也。新设之具其性倍坚，况竹木皆产于地，未有不带湿气者。惟用久则水性渐收，锋铄亦去，且与人之皮肉相习，故受者

虽云痛楚，未必尽有性命之忧。新设者于此一一相左，其毙人最易，司法者不可不知。文太青先生作县时，因旧枷刳敝不可用，欲置新者代之，虑其伤人，即以旧枷圈外之木，穴一新孔为容项之地，外以新木环之，其不忍人之心如此。渔谓此意虽善，但觉慈祥太过，反近迂阔。语云：“物不用新，何由得旧？”惟减其数而慎用之，亦足以全好生之德。凡此皆言新旧之别，当世士大夫亦间有知之者，至于“盖藏”二字，则从来未讲。每至讼庭，见拶指、竹篦即竹板及夹棍、杠子之属，皆委之滴水檐下，才值斜风细雨，便皆湿透，况值倾盆之檐溜乎！官长不察，隶卒不知，照晴明干燥时一例用刑，一般下手，以为同此刑具耳，受者不死于往日，岂其独死于今朝，拶之夹之鞭之扑之无害也。不知轻重殊体，一既可以当三，燥湿异性，十还可以抵百。如其不信，但取一件刑具，先于干燥时秤重几斤，再于湿透时秤重几斤，则受刑者之痛楚加倍不加倍便可知已。然此犹论轻重之体，尚未阐明燥湿之性，倘仁人君子不厌繁屑，请得而畅言之。寻常无罪之人，坐卧于卑下斥卤之地，隔以床荐、椅褥，尚有湿气上蒸，浸入骨髓，染成剧病而不可医者，况以潮湿之具裂开其皮而分析其肉，深入于腠理筋骨之间，尚冀其受而不病，病而不死，有是理乎？常有杖不数巡而毙人于庑下，棍未去胫而毕命于阶前者，未必不由于此。渔今为当世贤明长者辟出一条修行之路：各于厅事左右，另置高厂庑屋一间，髹板于地，以防梅雨之月湿气上侵，安顿一切刑具，用则取出，不用则命隶卒束而藏之。此高大于门之捷径也，岂待平反大狱，祝网施仁，而后保后世簪缨之勿替哉！衙门人役有能讲究此理，互相劝谕，勤谨收藏，每至用刑之际，必量其新旧燥湿以为下手之重轻，则阴德亦自无量，不独官长蒙庥而已也。

古人设枷之意，不过辱之而已。囊头以木，榜其罪名，动本犯羞耻之心，令其悔过，亦使远近为恶者见而知警，法止此矣。原非令之负戴而行，何必过于厚重！即使过于厚重，亦于罪人无害，

徒损材料而已。何也？坐时原以他物支撑，行时亦有亲人扛助，厚重之与轻薄初无异耳。但知此刑专为亡赖者设，略有颜面身家者，宁置他法，勿用此刑，盖以痛可忍羞不可忍，血可涤耻不可涤也。官府一念之转移，系百姓终身之荣辱，可不慎哉！

杻以桡手，镣以拘足，皆所以防闲罪人，虑其免脱故也。苟非大辟，即当存镣去杻，以遂人情之便。何也？人身之用，足居其一，手居其九，非此，则五官不能自运。既不置之死地，则当遂其生机，使活泼有用之人而为行尸坐肉，不但非情，亦非法耳。至于妇人女子，虽犯死罪，例不加杻，为其饮食便溺不可假手于人，重男女之别也。

人谓后世之法宽于前古，以其无刖足之刑也。余谓多用夹棍，多敲杠子，便是刖足之刑，犹之杀人以槌与刃，初无分别。朝廷立法苛与不苛，有何定额？只在用刑者之慎不慎耳。夹棍、杠子于法为极重，万不得已而用之，非常刑也。惟强盗人命，众口咸证为实，即司谳者原情度理，亦信其真，而本犯坚不承招，不得不用此法。然以是威之，非以是杀之也，可试而不可用，可一用而不可再用。夹棍之得力处，全在将收未收之时，此时招为强盗，即是真强盗，此时招为人命，即是真人命。若待收起夹棍而加以杠子，此时供吐之言，十句只可听一句，并此一句，还须待放松之后再讯，以定其果否。常有一夹不招而至再夹，再夹不招而至三夹者，即使满口供承，总非确据，以其出于口者非复由中之言，犹病极而为谗语。据此定案，非惟阴鹭所关，有伤冥福，倘遇慈祥之上台，解网之恤部，霁威曲讯，仍吐真情，则前案可翻，亦足以妨神明之誉耳。至非人命强盗及谋叛重情，此等峻法严刑，即终身不用，亦未为不可。

论监狱凡二则

罪有重轻，则监有深浅。非死罪不入深监，非军徒不入浅监，此定法也。下此则钦犯访蠹，虑其疏虞，不得不附入监籍。自兹以往，则笞杖非其人，牢狱非其地矣。飭丁属之清监，戒佐贰之滥禁，堤防狱卒，勿使凌虐罪囚，洁净圜扉，无致酿成瘟疫，此郡邑诸公之能事，亦守巡各宪之常规，言之无益听闻，徒取厌倦而已。独提紧关二事，一为生死所系，一为名节所关，留心民瘼者请谛听之。罪人之死于牢狱，天年者少，非命者多，不可不加讯察。有狱卒诈索不遂，凌虐致死者；有仇家购买狱卒，设计致死者；有夥盗通同狱卒，致死首犯以灭口者；有狱霸放债逞凶，坑贫取利，因而拷逼致死者；有无钱通贿，断其狱食，视病不报，直待垂死而递病呈，甚至死后方补病呈者。酷弊冤情，种种不一。若系定案待决之死囚，朝廷既有国治，自当明正典刑，岂有公罪而私杀之，假手凶徒，使太阿旁落之理！若系驳审未结之重犯，死罪一日未定，终身尚有生机，岂有官府不能决断，上下交费踌躇，反听此辈毅然杀之，绝无忌惮之理！况有代僵波及之冤民，似是而非之疑狱，既无昭雪之日，反加暧昧之刑，虽因吏卒之逞凶，实由官长之不察。我虽不杀伯仁，伯仁由我而死，岂得以“瘐毙”二字草草申详，遂卸典守监仓之重任哉！与其追究于死后，不若申飭于生前，时时稽察狱中，勿令此辈鱼肉囚犯。囚犯有疾，责令早具病呈，一见病呈，即取囚亲告治结状；调治不痊者，取尸亲告领结状，一并粘连，以为申报上司之地。囚犯无亲属者，以里甲邻佑代之；盗贼无乡贯者，以刑房书吏代之。慎密若此，非但奸弊不丛，保全生命，亦可取信上司，自立于无过之地。常有要紧囚犯瘐毙是真，上司不信，疑府州县官匿取脏私，虑其攻讦，自

讨病呈以灭口者。为人即以自为，不可不慎也。

妇人非犯重辟，不得轻易收监，此情此理，夫人而知之也。然亦有知其不可而偶一为之，不能终守此戒者，以知其浅而不知其深，计其今而不计其后也。问以不可收监之故，则曰此中男妇杂处，嫌疑不别，况牢吏狱卒，半属鳏夫，老犯宿囚，多年不近女色，置烈火于干柴之上，委玉石于青蝇之丛，未有不遭焚涅者。渔曰不然。羞恶之心，是人皆有，施强暴于众人属目之地，不待贞者而后拒之，久则难保无虞。旋羁旋释者，未必尽有失节之事。所可念者：妇人幽系一宵，则终身不能自白。无论乡邻共訾，里巷交传，指为不洁之妇，即至亲如父母，恩爱若良人，亦难深信其无他，而公姑妯娌又可知已。此种不白之羞，虽有孝子慈孙，百世不能湔洗。常见有妇人犯罪，不死于拘挛桎梏之时，而死于羞惭悔恨之后者。职此之由，渔劝为民上者，皆当以此存心，一念稍宽，保全几许节操；一时偶刻，玷辱无限声名。此阴施阳报中极大关头，万勿视为细事。妇人有必不可宽之罪势必系之狱者，惟谋杀亲夫，殴杀舅姑二项，亦必审实定案而后纳之。此外即有重罪，非着稳婆看守，即发亲属保回，总令法度纲常并行不悖而已矣。

慎狱刍言

论人命凡七则

古法流传至今，今人已失其实而仅存其名者，莫若人命中保辜一事。辜者罪也，保辜者令有罪之人自保其罪以塞他日之弊端，且救此时之覆辙。一事而诸善备焉，古法莫良于此。譬如张三殴伤李四，李四病创垂危，自分必死，随令亲属鸣官求验。官府验有真伤，审得张三凶殴是实，即以李四交付张三，责令延医调治，照律限期，期满之日，或生或死，定罪发落。盖因被殴之人，自非慈亲孝子，鲜不利其速死，以为索诈凶人之地，故以调理之责，付之凶人。凶人以一朝之忿，酿成杀身之祸，未有不悔恨求生者，救人即以自救，何金钱之足惜！是以一纸保辜，活两条生命，此言不死之利也。倘其疗治不痊，如期殒命，则于限满发落之时，便可定罪结案，不致株连一人，延缓一日。何也？以其验伤之际，先得两造口供。被殴丧命者，既以亲口诉冤于生前；殴人致毙者，难以活口赖伤于死后。若说不干己事，则从前之调理为何？无证亦可以成招，完尸亦可以定罪。较审人命于既死之后，展转推详而莫究其实，凭空摸索而不得其端，尚有就审于城隍，取决于梦寐者，其劳逸难易之相去，岂啻霄壤之分而已域！无怪乎狱少冤民，而案无留牍，鸣琴之化，卧理之风，唯古人独擅其誉也。今世仅存保辜之名而不行其实，非不知人命为极大之题，保辜为最急之

事，无奈吏牍如山，不能分别料理，每与田土婚姻诸小讼一概准行，常有累月经年未遑审结，以致凶犯脱逃，无人抵命者。直待审出真情，知其毆死杀伤是实，始为追论保辜，逆数期限，及究行凶之罪，势必反覆株连，欲起死者而问之，已无及矣。岂今人之才智尽皆不及古人，而令彼居易，我任其难，彼笑我劳，我妒彼逸哉！只以保辜之法不行耳。问所以不行之故，则曰人情刁恶，非复三代遗风，十纸人命状词，究无一纸是实，若必个个验伤，人人取结，则官长无就憩之时，而讼庭少容足之地矣。渔曰不难，别有止刁弭诈之法。在先民有言：“谋于野则获，谋于邑则否。”又曰：“愚人千虑，必有一得。”渔野人也，亦愚人也，兹请献其一得，为当事者谋之。自谓此法不行则已，倘蒙采择施行，能使狱无冤民，案无留牍；再能推广此意，即驯致鸣琴卧理无难，但恐褐衣贱士之言，达人不屑听耳！其法安在？曰在未经放告之先，示以画一之规而已矣。请宰州邑诸公分别状式二纸，刊板流行。一纸照寻常状格，无事更张，除人命之外，一切奸盗诈伪诸重情，以及田土婚姻诸细务，总用此格，令告者据实填进。审得其实，固为伸冤泄愤；即其词稍有不实，亦不必概坐反诬，轻则斥逐，重则杖惩。以民间刁讼之风浸淫日久，不能遽革，且留馀地以待逐渐挽回。一纸则另出新裁，单为人命而设，并柱语亦为刊定，止以被杀被毆情节令告者自填。词后留空格六行，每行署大字于上：一曰“凶犯”，二曰“凶器”，三曰“伤痕”，四曰“处所”，五曰“时日”，六曰“干证”。如用木棍毆打，则填“木棍”二字于“凶器”之下；如无凶器，系拳脚毆伤者，即填“拳脚”等字；项门有伤，则填“项门”二字于“伤痕”之下。馀皆仿此。六项之中，如有一项不填，不遵此式，即系诬逛，必不准理；如时日稍远，即系旧事，亦不准理。六项之后，又刻大字一行云：“以上如有一字虚诬，自甘反坐。”令告者亲填花押于下，无押者不准。如是则小民知为特设，与依样葫芦者不同；又于一应词讼之内，单单提出

此事立法孤行，则其慎重人命可知。法在必行，不待听断之后，即写状时已知之矣。当事者一见此等状词，即时批发，立拘两造及词内有名人等，并唤折伤科医士当堂细验，以伤痕、凶器等项合之词内所填，观其对同与否。无论事事皆虚，诬告者必尽其法，即使五项皆同，止有一项不对，明知下笔之讹，亦必先正妄填之罪，责治告状亲属，然后审理。审得其实，即以凶器贮库，照前设保辜之法，责令凶人领回调理，候限满发落。倘被殴被杀之人去城穹远，若令扛抬到官，恐被伤之处中风致殒，即委廉明佐贰，匹马单舆，少带人从，督同医士往验，具文详覆，以俟躬审。验审之际，务极精详，盖此时耐烦一刻，即可为他日干连人等全活数命，又免上司批驳之烦，省自己推详之苦，始劳终逸，有裨于人己不浅也。其坐诬之法，于他讼稍宽，而独加严于人命者，以别状告虚，情虽可恨，其所害者，止得被告一家；人命告虚，不止陷害仇家，是来骚扰衙门，戏弄官府矣。官府政事殷繁，日不暇给，令其破有用之工夫，验无伤之斗殴，况有下乡亲验之事，告者不是害人，明是害官。害人罪小，害官罪大，即毙诸杖下，彼亦何说之辞！小民之敢于诬告者，自谓我以人命告，官府原不以人命听，不过户婚田产、口角致争之别名耳！胜则可以服人，害亦无损于己，何所惮而不为！今知利害若此，关系若此，苟非病狂丧心之人，必不敢为骚扰衙门、戏弄官府之事矣。此法一行，谓世间犹有假命害人之事，吾不信也；此法一行，谓世间犹有误填人命之事，吾不信也；此法一行，谓有司苦于钱谷兵农及他种词讼则可，谓为驳审人命，难定招详，今日检尸，明日夹犯，与凶囚冤鬼为邻者，吾不信也。但须执法不挠，初终如一，方能有济。若使徇情受托，一纸不坐反诬；罪当情真，一犯容之漏网，则此法不行而渔与古人均受其谤矣。要知当此之时，事事劝人执法，语语诫人徇情，无论势有不能，即进言者亦难启口。居官之执掌颇多，不止词讼一事，讼词之种类更杂，岂止人命一条！留此一事

以示无私，借此一条以明有法，亦时势之可行者也。况颓俗难以骤更，顽民可以渐化，焉知一事有效，不可行之第二事；二事有效，不可行之第三事乎？由人命而盗贼，由盗贼而奸情，而婚姻田土，以及鼠牙雀角诸碎事，无一不可以此法推之。果能如是，则鸣琴卧理之风，未必不阶于此也。状式附刊于左，请高明裁酌而定之。

告状人 年十岁住乡城 都坊 图铺 系籍

告为 人命事

计开

凶犯

凶器

伤痕

处所

时日

干证

以上如有一字虚诬自甘反坐 押

本 老爷施行

年月日原告

具状

以上状式既已刊定柱语，何不连“保辜”二字一并注定，以示无可游移，乃于“人命”二字之上，仍空二格以待自填者何也？曰：有不及告保辜与无从告保辜者在，故空此二格，以济保辜之穷，此立法之苦心也。何谓不及告？曰登时打死杀死，其命已绝，保辜何为？此不及告也。何谓无从告？曰死者在他乡别所被人谋害，亲属在家不知凶耗，及闻信而时日已过，保辜何为？此无从告也。有此二项，若刊定“保辜”二字，告状者既不利于涂抹，立法者又不便于更张，是自己先行不去，令人何所适从？故空此二格以待自填。若在未毙之先，无论打伤、杀伤、下毒、图谋、威逼，皆填“保辜”二字；或在既毙之后，若系打死，则填“打死”二字，若系杀死，则填“杀死”二字。毒死、谋死、逼死者亦然。是画一之法，仍可变通于画一之中。此可久之道，亦可使千人万人共由之道也。但除此二项可以不告保辜，其余可告而不告者，即系真情，亦当比于诬诬，不准贴出，则民无不遵行，而保辜之法永行而不敝矣。

人命案中疑狱最多。有黑夜被杀，见证无人者；有尸无下落，求检不得者；有众口齐证一人，而此人夹死不招者；有共见打死是实，及吊尸检验，并无致命重伤者。凡遇此等人命，只宜案候密访，慎毋自恃摘伏之明，炼成附会之狱。书曰：“罪疑惟轻。”又曰：“宁失不经。”夫以皋陶为士，安有疑罪？不经之人岂可失出！明断如古人，犹慎重若此，况其他乎！今之为官者苟能阙疑慎狱，即是窃比皋陶，其自命正复不小。彼锻炼成狱者，不及古人远矣，何聪明之足恃哉！

人命不同他狱，臧者不厌精详。上司数批检问，正谓恐有冤抑，欲与下僚商酌，为平反计耳。要知一人之聪明有限，同官之思虑无穷，从前承问者，岂事事皆能自决！亦知重狱非一审可定，未必不留余地以俟后人。即上司批讯之法，亦自不同。有词与意合者，有词在此而意在彼者，又有欲轻其罪，而故张大其词，以

示国法之重者。此虽宪体宜然，亦以试问官之决断何如耳。承委诸公，须出己见成招，慎勿雷同附和。若观望上司之批语以定从违，或摹写历来之成案以了故事，其中倘有毫发冤情，罪孽比初审者更重。何也？天下之事，一误尚可挽回，再误则永难救正，狱情不始于我，而死刑实成于我也。

尸当速相而不可轻检，骸可详检而不可轻拆。拆骸蒸骨，此人命中尽头道路，有一线余地尚不可行。若使人命是真，典偿可必，则死者受此劫磨尚能瞑目；万一典偿不果，枉遭此难，令彼何以甘心！请于“轻拆不如详检，详检不如速验”之后再下一转语曰：“速验不如细审。”果能审出真情，则不但无事检拆，并相验亦可不行矣。尝思片言折狱之人，不知存活多少性命，完全多少尸骸，故人乐有贤父母也。凡奉上司批驳，情节不明者止审情节，尸伤欠确者方检尸伤，慎勿一概烦扰，以致生死俱累。

检尸弗嫌凶秽，定宜逼近尸所，定睛相验，稍稍移目他视，作作人等便可行私作弊；而况故作憎嫌回避之状，以开增减出入之门乎！每见官府坐于棚厂之内，作作人等立于棚厂之外，相去不止数十步。而被犯锁扭跪阶，不使同看，惟凭尸亲作喝报尸伤，或多增分寸，或乱报青红，官府执笔登记，但为此辈作誊录生耳。徒有检尸之名，绝无相验之实，以重狱为儿戏，即谓之草菅人命亦可。及经上司批驳，再易检官，再更作作，或暗卖尸格，约与雷同分寸；或意欲重轻，增减疑似伤痕。驳而又驳，检而复检，是死者既以挺刃丧命于生前，又以蒸煮裂尸于身后。生死大故，人命关天，求问官凝眸一视而不可得，其冤酷遂至此哉！渔劝司献诸君子以昏昧贻讥为秽，勿以骸骨近身为秽；以冤魂叫号为凶，勿以死尸罗列为凶。救人之死者求以身代则不能，若嘘气可以使活，送煖可以回生，即与死人接唇熨体，亦所不惜，况区区二目之流盼哉！

检尸之弊多端，难更仆数，其显而易见者，备载《洗冤》等

录，人所共知。另有一种奇弊，谓之买尸造伤，不惟伤假，并尸亦假，令人莫可测识，录之以广见闻。有等奸民，惯盗新墓中骸骨，以皂髻、五椁、苏木等物，造出浅淡青红等伤，卖与诬告人命者，贿通仵作，以此陷害仇家；或竟出仵作一人之手，取获重利。检官不能觉察，曾有诬成大狱者。所以检尸一事最难，不但伤之真假宜辨，并尸之真假亦不可不辨也。

检尸所以验伤，验伤者，验尸主所告之伤，非验所不告之伤也。若取不告之伤而尽验之，则凡境内无主身尸没人告理者，尽该取而验之矣。尸主告检词内，言用某器打伤某处，即于所告之处验之，观所告与所验对与不对，故曰验伤。犹之百姓告荒，而官府踏勘，止勘所告之处，验其言之信否，至于不告之处，则虽有灾荒，亦过而不问。又如百姓被盗而递失单，至获盗之日，所开何物，止追何物给之，其余财帛，焉知非其固有，皆可置而不论，同一理也。检尸之官倘不顾名思义，舍所告之处不验而验他处，或遍验通身，则无论打伤之情确与不确，总无不抵命之人矣。何也？人生一世，自少至老，或失足致跌，或负重触坚，或顽耍被击。血不流行，聚于一处，则彼处骨节之上，未有不带伤痕者，轻则日久渐消，重则终身不散。如其不信，试将病死之人，取其骸骨蒸验之。若果全身俱是白骨，绝无一点血痕，则检验之伤，真足凭矣；如其不然，则此种物理尚须讨论。常有问官不解此意，譬如尸主所告，原说当头一下打死，及向浑身检验，寻出无数伤痕，尽入招详申报。上司以伤痕不对，驳令复审，问官不肯认错，随增遍殴情节以实之。此非有意害人，止因此种情理书籍不载，人所未闻，见有伤痕，即疑争殴所致，有所凭而定罪，不为冤杀无辜，故始终信之而不悔也。渔故不辞笔舌之劳，为当世纳言君子淋漓慷慨而道之，不敢求为太上立德之功臣，求无愧于立言之本事而已矣。

论盗案凡五则

强盗初执到官，当察其私下受拷之形狼狈与否，以为刑罚之宽严、词色之喜怒。若见其步履如常，形体不甚局促，自当示以震怒，加以严刑，非此则真情不能吐露；倘见有负伤甚重，神气索然者，则宜平心静气以鞠之，且勿遽加刑拷。何也？以其正在垂毙之时，求生之念轻，缓死之念重，非责其供吐之难，责其供吐必实之难也。地方失事，保甲负疏虞之罪，捕快畏比较之严，往往扶同乱报，见有踪迹可疑之人，即指为盗。或系乞食贫民，或往时曾为窃盗者，无论是非，辄加捆吊，逼使招承，不招则痛加箠楚。一语偶合，又令招扳伙伴，押使同拿，展转相诬，诛求无已。及至送到公堂，业已一生九死，自揣私刑若此，官法可知，况在迅雷严雹之下，尚敢以口舌害肌肤，肌肤戕性命哉！初招一错，以后则以讹传讹，所谓差之毫厘，失之千里者正在此时，不可不慎也。霁威曲讯，审视再三，彼真情不露于言词，必露于神色，俟其有瑕可攻，而后绳以三尺，未为晚也。凡此皆以保善良，非以获盗贼，惟虑其似盗而非盗，故慎重若此。倘信其果为真盗，方裂眦指发之不暇，尚肯以词色假之哉！

强盗杀人之律，止于竿首，实是千古恨事。常有一盗而手刃数人至数十人者，即除为盗弗论，而以命抵命，其罪浮于律之分数亦相倍蓰而无算矣。况有却财毁室之强形，拒捕抗官之逆状，甚有奸掠并行，俾事主之家巢卵俱空而身名交丧者，无一不堪寸磔。而其罪止于一梟，岂以此辈之肉为不足食，故于一死之外，遂不复致详欤？倘于此等重狱，而犹劝当事者予以哀矜，则不特为妇人之仁，直是以放虎纵狼为义，散鸩施毒为恩者矣。其有止于劫财，而未经杀人放火及奸淫者，始可用吾矜疑一念，推详其入伙

之由，究审其上盗之实，以赃之有无，定罪之出入。如赃真罪确，万无生理，虽属饥寒所使，亦难贷以国法，所谓如得其情，哀矜弗喜者，盖为此辈言之也。或上盗而未得赃，与得赃而无主认者，皆可开以一面。非故纵之也，盖以后世无恒产之授，不能责其必有恒心，兼以保甲之法不行，或行之不力，令此辈得以藏奸，是为上者亦有过焉，不得概罪斯民故也。但此辈原属无良，止可待以不死，万勿遽与开笼，使得脱然事外。隶入胥靡，投之有北，俾狼心有制而不遑，鹰眼虽捷而难施，庶善与恶两不相妨，而解网之仁不致流而为暴矣。

每获真盗一伙，必害良民数十家，犹之衙蠹之中，有一人被访，则亲属与仇家皆不能安枕，非虑扳赃，即防贻祸，同一轍也。故官长于盗贼之口，只宜抑之使闭，不当导之使开。即云伙盗未获，真赃未起，难以定招结案，势必责令自供，然于此时此际，亦当内存不得已之心，外示无可奈何之色。每闻供报一人，必详审数四而后落笔，但以又害一民为忧，勿以又获一盗为喜。盖于初获之首盗，尚虑其冤而多方轸恤，何况由于而生枝，由枝而生叶者哉！近日世道浇漓，人心不古，良民供吐之言尚不足信，何况天理蔑亡、良心丧尽而为盗者哉！

禁强必先禁窃，究盗不若究窝，涓涓不息，流为江河，小偷弗惩，其势必为大盗。故于穿窬之获，究之务尽其法，无论赃多证确，刺配无疑；即使偶犯赃轻，亦必痛惩幽系，令亲属具结，保其改过而后释之。倘以“饥寒所迫”四字横踞于中，草草发落，是种大盗之根，爱之适以害之矣。至于窝盗之罪，更浮于盗，宁纵十盗，勿漏一窝。无深山不聚豺狼，无巨窝不来盗贼，窝即盗之源也。

禁宰耕牛一事，是弭盗良方，不知者仅以为修福，是实政而虚谈之矣。盖大盗必始于穿窬，而穿窬之发轫，又必以盗牛为事。何也？民间细软之物尽在卧榻之旁，非久于窃盗者，鲜不为其所

觉；惟耕牛畜之廊庑，且不善鸣，牵而出之甚易，盗牛入手，即售于屠宰之家，一杀之后，即无赃可认。是天下之物最易盗者是牛，而民间被盗之物最难获者亦是牛，盗风之炽，未有不阶于此者。彼屠牛之家，明知为盗来之物，而购之惟恐不速者，贪其贱耳！从来宰牛之物，即为盗贼化赃之地，禁此以熄盗风，实是敦本澄源之法，而重农止杀，又有资于民生，有关于阴德不浅。为民上者，亦何惮而弗为哉？

论奸情凡五则

奸情有二，曰强曰和。其章明较著而易断者，莫若和奸，以捉奸必于奸所，奸夫淫妇，罪状昭然，不敢不以实告故也。然而和奸之律，一杖之外无加焉。为民上者，即欲维持风教，而除淫涤污之念，又穷于无所施；所恃以挽回恶俗，整刷乾纲者，惟强奸一律而已。又无奈强奸之真伪最难辨析，有其初原属和奸，迨事发变羞，因羞成怒，而以强奸告者；有因争宠失好，由爱生妒，由妒致争，而以强奸首者；有亲夫原属卖奸，因奸夫财尽力竭，不能饱其谿壑，又恋恋不舍，拒绝无由，故告强奸以图割绝者；又有报仇雪怨，而苦于理屈词穷，不能保其必胜，故用妻子为苦肉计硬告强奸，令彼无从置辨者。此等诈妄之情，实难枚举，即云喊救之时声闻于外，有邻佑之耳目可凭，捉奸之际，情迫于中，有夺获之衣帽可据，然邻佑止闻声音，不能以耳代目，衣帽虽云合体，奚难以窃为攘？听讼者于此，将以为真也，而坐奸夫以死，则公道日诎，而奸伪日滋；将以为伪也，而坐原告以诬，则善教愈衰，而淫风愈炽。每见慈祥当事遇此等疑狱，皆以不断断之，置奸情于不问，但讯其以他事致争之由，或责被犯之招尤，或惩原告之多事，诚以强奸重狱，审实即当论死，不若援引他情，矇眈

结局，所谓不痴不聋，难作家翁者是也。渔独于此有深虑焉。好生固是美德，而纲常伦理，亦非细故。人之异于禽兽者，仅有此牝牡之分，嫌疑之别耳。我以一念之姑息，而比斯民于禽兽可乎？苟审得其实，果无始和中变，借奸诬害等情，即欲出之，亦必治以九死一生之法，庶足以快贞妇之心而雪丈夫之耻。不然，为女子者何乐于拒奸守节而抛头露面于公庭！为之夫者，亦何乐有此守贞不屈之妇，而反以诗书所尚者，为辱身玷名之具哉！

强奸不分已成未成，有逼妇女自尽致死者，证据若真，断宜坐抵，万勿慈祥太过而引他故出之。盖据强奸之律，已当问绞，况又因奸致死人命乎！犹之强盗杀人，以一身而负两大辟，死罪之外既无可加，则死罪之中亦无可减。但审强奸之情确与不确，则致死之真伪不辩自明。苟奸情犹在疑似之间，则致死之由尚难臆断，幸勿胶柱斯言，而以“形迹”二字置人于死法也。

律法事事从重，独于奸情一节，渔窃讶其过轻。何也？淫为万恶之首，而和奸止于一杖，又必获于奸所，始以奸论，然则床以下，房以外，皆他人酣睡之地乎？捉奸必以亲夫，然则翁姑伯叔兄弟子侄之遇此，皆当袖手旁观而莫之问乎？由此论之，则亲夫远出，捉奸无人，与夫在而善为堤防，不致获于奸所者，皆得快其淫乱之心矣。要知造律虽出于萧何，而参酌必由于僚案，只以同时同事有盗嫂受金之辈，故以恕己者恕人，而为天下奸夫淫妇开此方便法门耳！后世相因，遂为成律，犹幸有“夜入人家，登时打死勿论”一语，稍寒其胆，不则王法等于弁髦，而闺阁中藁之间无墙不生茨矣。渔劝司风教者每于此等恶俗，当严禁于未发之先，痛惩于已犯之后，不得因法网不密又从而开拓之，使桑间濮上之风驯至于莫知所底，斯名教之幸也。但不宜事事详察，攻发民间之隐匿，惟择其奸状最著者，剧创一二，游遍通城，使家喻户晓。知上人所痛恶者在此，则奸淫知戒，色胆不至如天，斯纲常不至扫地耳。

有诘渔者曰：“人命重狱，汝劝当事者轻之；奸情轻狱，汝劝当事者重之，亦何悖理太甚，而重骇听闻欤？”渔曰不然。奸情为人命所自出，重奸情者非重奸情，正所以重人命也。奸夫、亲夫，势不两立，非彼杀此，即此杀彼，其未膏锋刃者，特有待耳。况两夫之间难为妇，以羞惭窘辱而自尽者，十中奚止一二哉！与其明冤于既死，何如消祸于未萌？以今日之鞭笞，代他年之杀戮；以一男一妇之鞭笞，代千人万人之杀戮，其隐然造福者正是无量，岂止移风易俗，任劝化之虚名而已哉！

凡审奸情，最宜挂重，切勿因其事涉风流，遂设风流之局以听之，语近褻嫚，亦为褻嫚之词以讯之。当思平时之举动原系观瞻，而此际之威仪尤关风教，稍涉诙谐，略假顰笑，在我原无成见，不过因其可谑而谑之，彼从旁睨视者，谬谓官长喜说风情，乐于见此，无论奸者不悔其奸，且有不奸而强饰为奸，思以阿其所好者矣。至于灑牍之间，更宜慎重，切勿用绮语代庄，嬉笑当骂，一涉于此，则非小民犯奸之罪状，反是官府海淫之供招矣。总之，下民犯此，由于上人失教，苟有反躬罪己之心，方且垂涕泣之不暇，奚忍谈笑而道之哉？

论一切词讼

小民之好讼，未有甚于今日者。往时犹在都邑纷呶，受其累者，不过守令诸公而已；近来健讼之民皆以府县法轻，不足威慑同辈，必欲置之宪网。又虑我控于县，彼必控府，我控于府，彼必控道，我控于道，彼必控司控院，不若竟走极大衙门，自处于莫可谁何之地，即曰雌雄难卜，且徼幸于未审之先，做得一日上司原告，可免一日下司拘提，况又先据胜场，隐然有虎豹在山之势，于是桀戟森严之地，变为鼠牙雀角之场矣。督抚司道诸公欲不准理，无奈满纸冤情，

令人可悲可涕，又系极大之题，非关军团钱粮，即系身家性命，有保邦治民之责者，焉有闻乱不惊，见死不救者乎！及至准批下属，所告之状与所争之事绝不相蒙，如何审理？无奈为讼师者刀笔之下别具炉锤，能以捏沙成团之手，使绝不相蒙者合而为一。因旧例必于原词之外别进一纸，名曰“投状”，巧饰一二附会之语，依傍原词，其余尽述所争之事。献者得此，翻然大悟，始知从前尽属虚文，此际才归正传。噫，谬矣！何其厚待都邑而故欺之以其方，薄待上司而必罔之以非其道哉？承问诸公若据原词审理，则终年不得其实，不得不开自便之门，亦即据其投状而为判断。是小民欺罔之情，反为官府藏拙之地，有是理乎？近见督抚司道诸公，劝民息讼者不遗余力，而此风终不能改，咄咄顽民，亦大负仁人君子抚字之心矣。渔特仰承德意，敬献刍言，窃谓好讼之民敢于张大其词以耸宪听，不虑审断之无稽者，以恃有投状一着为退步耳。原词虽虚，投状近实，以片语之真情，盖瞒天之大谎，不怕问官不为我用。彼所恃以健讼者在此，我所恃以弭讼者亦即在此。请督抚诸公急下一令，永禁投词，凡民间一切词讼，止许一告一诉，此外不得再收片纸，另增一名。上司批发此状，即照此状审理，实则竟为斧断，虚则竟坐反诬，无许代为说词，强加附会。若是则止有初着，并无后着，即欲自盖其谎，而不得矣，尚敢以身家性命为孤注，而强试于不测之渊哉！若是，则所告之词即不能字字皆真，亦必虚实相半。状词至有一半真情，则当准与不当准判如黑白，谓上司衙门犹有受诬受欺，误批误准之事，吾不信也。但须执法不移，永著为令，始有成效可观；稍示游移，则挠法梗令者至矣。盖此法最便于廉吏，更便于良民，独不利于奸胥猾吏，及承票之皂壮耳。何也？原状所告，不过寥寥数人，常例有限，所恃为蔓引株连以饱其谿壑之欲者，惟投状所添之人数耳。片纸不收，只字不准，则是可饮者尽在壶中，岂复有不醉无归之乐哉！恶其害己而令此法不行于世者，必此辈也夫！必此辈也夫！